岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (9)

門　前　池　遺　跡

（山陽住宅団地造成に伴う発掘調査）

1 9 7 5

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

岡山県では，県南の人口増加に対処するため早急に環境のよい住宅団地を造成することになり，その建設地が山陽町地内に決定いたしました。

岡山県は，古代において畿内，北九州，出雲などとならんで高い文化の繁栄した地域であります。当山陽町は本県でも埋蔵文化財の密度が高い地域で，こうした環境の中で，文化財の保護については，ことのほか意を注ぎましたが，それは容易なことではありませんでした。岡山県教育委員会としては，計画の段階から造成地内の埋蔵文化財について再度にわたる分布調査をこころみ，遺跡の保存については慎重に検討をかさね，関係機関とも十分に協議をくりかえし，保存のためにかなりの成果をあげてまいりました。しかし，やむなく造成される部分については発掘して記録措置をとることになり，3ケ年にわたって発掘調査を続けてまいりましたが，ここに，その調査結果を報告するしだいであります。

なお，発掘調査にあたっては，県土木部住宅課，山陽町及び同町教育委員会，並びに山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会各位，その他，関係機関から終始，深い理解とご協力をいただきました。末筆ながら本誌上において厚くお礼申し上げます。

昭和 50 年 3 月

岡山県教育委員会
教育長　小野啓三

例　　言

1　この報告書は，岡山県営山陽住宅団地造成に伴って，岡山県教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　発掘調査は，昭和45年６月１日～昭和47年３月31日に行われた調査を第１次調査とし，昭和48年８月１日～昭和50年３月31日までの調査を第２次調査とする。

3　調査の諮問機関として第２次調査から山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会が設定された。

山陽団地埋蔵文化財保護対策委員（アイウエオ順）

鎌木　義昌（岡山理科大学教授）
近藤　義郎（岡山大学法文学部教授）
角田　　茂（瀬戸中学校教諭）
土井　秋夫（瀬戸町文化財専門委員）
西川　　宏（山陽学園教諭）
春成　秀爾（岡山大学法文学部講師）
間壁　忠彦（倉敷考古館館長）
三杉　兼行（甲浦郵便局局長）

対策委員各位からは，常にしった激励を受けた。記して謝意を表したい。

4　この報告書作成に当っては，山陽団地埋蔵文化財保護対策委員をはじめ鉄鉱石の分析は，岡山県立工業試験場にお願いし，石材の鑑定は，岡山教育センター，上野等，住居址（25号）の構造については，岡山県文化財専門委員の渋谷泰彦の各先生方にご教示とご助言を得た。記して謝意を表したい。

5　年次ごとの構成員と協力者名を記す。

昭和45年度

教育次長（文化課長事務取扱い）　三村克一
主幹　萩原一郎
主幹　神野　力
文化係長　光嶋尚之
主事　西崎正紀
主事　杉田卓美
文化財係長　（故）森忠彦
文化財保護主事　高橋　護

昭和46年度

文化課長　神野　力
参事　萩原一郎
文化主幹　光嶋尚之
主任　渡辺武彦
主事　小泉吉弘
主事　宇野純司
文化財保護主査　高橋　護
文化財保護主事　葛原克人

昭和47年度

教育次長（文化課長事務取扱い）　大原利貞
参事　萩原一郎
文化財主幹　富岡敬之
文化主幹　原田道明
主任　渡辺武彦
主事　小泉吉弘
主事　宇野純司
文化財二係長　岡本明郎
文化財保護主事　河本清
文化財保護主事　葛原克人

昭和48年度

教育次長（文化課長事務取扱い）　岡田政敏
参事　富岡敬之
課長補佐　水川冨貴男
文化財主幹　浅原健
文化係長　守屋明
主任　渡辺武彦
主事　小泉吉弘
主事　宇野純司
文化財二係長　岡本明郎
文化財保護主事　伊藤晃
主事　下沢公明

昭和49年度

文化課長　小林孝男
参事　富岡敬之
課長補佐　西口秀俊
主幹　浅原健
文化係長　守屋明
主任　浅野間朗雄
主事　小泉吉弘
文化財二係主任　光吉勝彦
文化財保護主事　葛原克人
文化財保護主事　伊藤晃
主事　下沢公明
主事　枝川陽
主事　樋口啓子

第1次調査

調査員　枝川　陽，新東晃一，松本和男

地元協力者

岩本逸水，植田　剛，石原与六，井上三夫，阿部良作，井上忠美，藤原　稔，藤井　始
鶴海勝雄，柿沢一三，塩見祐一
岸本雪野，岩本富子，山本富美江，藤原末子，今井鈴子，釣井節子，山本　栄，小坂知江子
竹内千代子，青井泰子，藤原松子，奥山繁子，松本勝子，植田秀子，大森孝子，安井好子
安井清子，安井美恵子，安井公子，天野年子，横田秀子，（故）社玉恵，犬飼弘子，中川好恵，
森国輝子

第２次調査

調 査 員　枝川　陽，池畑耕一

地元協力者

岩本速水，植田　剛，井上律太，阿部良作，平島定男，早川邦夫，真鍋　謙，青井　清

馬場輝彦，小坂弘彦，上林　茂，河畑考文，茂崎　始，岩本真治，平井律磨，丸林治守幸

森国真言，安井　寧，名村　操，犬飼和正

岸本雪野，岩本富子，山本富美江，小坂知江子，中桐恵美子，桑原恵美子，青井泰子，今井操子

花房由紀子，岡本智子，朝原治子，久山須美恵，田村郁子，篠原存子，杉井美智江。

協　力　者

神原英朗，井上弘，柳瀬昭彦，橋本幸男，福田正継，森下大輔，岡田　博，正岡睦夫，樋口啓子，岡山理科大学学生，特に山陽町教育委員会の担当職員をはじめ，住宅課の山陽団地事務所の職員，さらに文化課の調査員各位には，大変お世話になつた，心からお礼申したい。

6　本遺跡は，昭和44年山陽町教委による分布調査の時点で門前池遺跡（略記号Ｙ２），ヤケ池遺跡（略記号Ｙ３）と呼称していた地域をも包括するものである。

7　本書に用いたレベルの数値は海抜高である。

8　本書に用いた地形図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の１地形図を複製したものである，

（承認番号）昭50中複，第35号

総　目　次

序

例　言

Ⅰ　調査経過と調査上の問題点…… 1

Ⅱ　歴史地理的な環境…… 14

Ⅲ　第 1 次 調 査…… 19

Ⅳ　第 2 次 調 査……145

Ⅰ　調査経過と調査上の問題点

第１章　調査にいたるまでの経過……1

第２章　調 査 の 経 過……1

第３章　調査上の問題点……6

1　調査体制について……6

2　機械力の導入について……6

3　遺物の保管と盗難について……6

4　整理期間及び報告書作成について……7

5　工事の進行と調査……7

6　保　存　処　置……8

第１章　調査にいたるまでの経過

岡山県下の産業の発達は，めざましく進み，特に，県南の地域開発にともなっての人口増加による住宅難と，市街地の環境悪化に対処するために，環境のよい住宅地を大量に供給することが急がれた。そこで，岡山県では，県政振興計画に基づいて住宅環境の整備された県営の大規模住宅団地の建設計画がなされた。その候補地として，一つには総社市西山地区があげられたが，西山地区には多数の文化財が存在し，用地買収も困難であることなどにより，昭和43年11月初旬に現在の山陽町について土木部より照会があった。その後，昭和43年11月12，13日に山陽町の建設予定地の第１回の分布調査を実施し，古墳37基，弥生遺跡２遺跡を確認した。その資料をもとに土木部との協議がおこなわれた。しかし，そののち多数の古墳及び，弥生の遺跡が存在することが明らかになり，また，樹木の伐採，土木工事の着手の段階でさらに増加するものと予想されるなど，文化課としては，文化財保護の立場から山陽町への建設は問題が多く，好ましくないと判断し，強く中止を申し入れつづけた。しかし，土木部としては，山陽町に土地買収工作が進行しているなど計画を変更することはできず，他に，適地を求めることはできないとの説明があり，結局，山陽町に決った。その後，遺跡の重要度を検討するため現地を再調査した。そして，土木部との現地立会を行ない，建築の計画と遺跡の保存の可能性について検討がなされ，一応の工事計画がまとめられた。

昭和44年１月には文化財担当職員が土木部と同行して，文化庁におもむき，保存個所，緊急調査の方法などの説明を行なった。そして数回にわたり，土木部と教育委員会において埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行なわれ，昭和44年５月に「**山陽団地の文化財の取り扱いに関する確認事項**」が結ばれた（別添資料）。昭和44年５月に建設予定地内の一角に所在する未買収地において，土地所有者による工事によつて多数の弥生時代の遺物が出土した。昭和45年３月には門前池周辺に発見された大遺跡について協議が行なわれ，県教育委員会では，発掘調査計画を再検討することになった。その結果遺跡数がぼう大な為に，山陽町教委だけでは，対処できないために，県教委も山陽団地の調査にくわわざるをえなかった。そこで，昭和45年５月１日付で県教委員会教育長と，土木部長との間で，「**山陽団地文化財取り扱いに関する確認事項細目協議書**」が結ばれた（別添資料）。そして原則として，集落遺跡は県教委文化課が発掘を実施し，古墳又は墳墓については山陽町に委託し，山陽町教育委員会が実施することになった。こうして県教委文化課における第１次の発掘調査が開始されることになったのである。

第２章　調　査　の　経　過

第１次の発掘調査は，昭和45年６月１日から開始された。主として，団地を通過する幹線道路敷にかかる集落跡を調査の対象とした。第１地点は門前池の背後の谷頭に位置する。この谷頭に北西方向から門前池の北側に延びる丘陵と，北西方向からほぼ南方向の門前池中央に向けて延びるこの二つの

丘陵の傾斜面から，現在の水田面下に位置する両丘陵にはさまれて，１地点の下方の用木池，続いて縄文寺池，そして門前池とがつらなっている。第３地点は縄文寺池と門前池の間に位置している。この丘陵傾斜面麓から現在の水田面下に存在する所である。丘陵の傾斜面中腹から門前池にはり出した部分を第４地点とし，第５地点は門前池の北へ延びる丘陵の南側先端に位置し，南面に傾斜している。

まず，第１地点から調査にかかった。この地点は周囲を丘陵に囲まれた狭い谷で，埋土量が想像以上に多かつた。調査の完全な終了は，昭和46年２月末日までかかったが，その間，第３地点，第５地点のボーリング調査を行ない，遺構の範囲を確認した。また第３地点の工事用道路の断面に遺構面が発見されたため，その記録をとることになった。11月の下旬には，第５地点に調査の主力を移し，昭和46年４月に終了した。その間調査計画には予定されてなかった第４地点，第２地点の一部の調査も同時に行なった。５月には第３地点の調査にはいった。この地点は，予想以上に遺構の密度が高く計画以上の時間を要した。このようなことで，他の調査員の手助けを必要とした。特に検出した建物群については，各方面から注目され，保存問題で県教委はもちろん，県議会の土木委員会，また，文教委員会などで論議がかわされた。

昭和46年12月15日には，県議会の文教委員会が第３地点の建物群を視察した。その後，建物群などを中心とした山陽団地内の埋蔵文化財の保存について，県議会の土木，文教両委員会で数回にわたり審議された。この１次調査の結果で，門前池周辺の大遺跡群の６万㎡は，いっさい手をつけずに保存する方向で団地造成が進められることになった。こうして１年８ヶ月間にわたる１次調査は，昭和46年12月下旬に調査を終了した。翌年の昭和47年１月下旬，東岡山収蔵庫に遺物を運び，３月末日まで報告書の整理作業を行なった。その後山陽新幹線等の発掘調査が急増したために，山陽団地からは，県教委は手をひかざるをえなかった。その後は，町教委による調査は続けられ，45年１月１日付での「**山陽団地の文化財取り扱いに関する確認事項細目協義書**」により結ばれていた町教委による古墳または墳墓を主とした調査はくずれ，集落遺跡も町教委によって進められることになった。

２次調査は，１次調査後，凍結状態であった６万㎡につての処置について何回となく県教委と土木部との協議が続けられた。しかし，土木部の団地造成の全体的な計画から考えると，門前池周辺の６万㎡は，そのまゝで保存することは困難であるとのことであった。また，山陽町が団地内の保存地域については，管理しやすいように処置すべきだとの要望などにより，保存部分と造成部分について県教育長と土木部長との間で，昭和48年８月１日に「**Ｙ３地域（門前池西方の遺跡群）等における文化財の具体的措置に関する協定書**」が結ばれた（別添資料）。こうして，造成部分については，５調査区に分け，調査計画がたてられた。発掘調査が再開されたので，第２次調査では，岡山県遺跡保護調査団の推薦をうけ，７名の研究者からなる対策委員会が設けられ，調査にはいる前の５月27日は第１回の対策委員会を開催し，調査計画の概略を示して検討をお願いした。対策委員会の意見としては，まず，第１次調査の建物群の未確認部分の調査をおこなうように指摘された。それは，従前からこの建物群が「郡衛跡」にみられるような巨大柱穴によって構成され，遺跡の全体像を把握して，同時に現状保存の方向で保存対策を検討するよう強く要請されていた地点であったことによる。そして，７月下旬に調査の準備をし，８月１日から発掘調査にはいった。８月には第３地点をおこなった

が排水しにくい地形であるうえ堆積土量が多いなどの条件によって調査は困難をきわめ，遺跡面までの検出にはいたらなかった。９月にはいり，工事工程のつごうで第７地点にはいった。22日には，第２回の対策委員会を開き，第３地点と第７地点を現地見学し，第３地点の調査方法についてなどこまかい指導を受けた。10月には調査担当者がかわり，再び第３地点の調査をおこなった。この時も土砂の流入に難行し，多くの時間を要した。さらに，幹線道路の完成のために翌年調査予定となった第２地点の一部に着手せざるをえなくなり，このことは，以後の調査計画に大きな影響を及ぼす結果となった。11月になりようやく第３地点にはいり，12月で調査を終えた。年が明け調査員は２人となり，第２地点の全面調査にかかった。昭和49年２月17日には，３回目の対策委員会を開き，便木山７号墳の現地見学をしていただき，古墳の調査について種々有益なご指摘をえた。昭和49年４月を迎え，人事移動にともない調査員の１人は，本庁に勤務することになり，再び発掘現場では，調査員１人という体制となった。６月１日に住宅課と「ヤケ池」周辺の保存について協議し，保存面積をより確実なものとするために，あらかじめトレンチ調査を実施することになった。すでに宅地分譲は開始され，今年度になってからは処理段階であるとの認識にたつ住宅課は，できるだけ宅造面積を広げ全体の宅地価格を下げたいという要望をもち，一方少しでも遺跡の現状保存面積を広げたいとする文化課の希望とは，一層あいいれない状況下にきたといえる。中旬にトレンチ調査を実施し，当初の予想どおり「ヤケ池」周辺にも一定の遺跡のひろがりがある事実に基づき，６月27日建設側との協議の結果，保存範囲が決まった。最初の計画では，６月末日で県教委による発掘調査分は，完全に終わる予定であったが，調査計画の不備，及び作業員の不足などによって８月まで延期することになった。期間延長については，県住宅課及び文化課との間で数次にわたり話し合いがもたれ，また発掘現場においては一定期間，橋本幸男氏，正岡睦夫文化財保護主事などの応援をえて早期完了を心がけた。その間８月９日には，第４回目の対策委員会を開き，第２地点の現地見学を開催した。その結果，同地点については，充分に調査のできる体制を作ること，ヤケ池周辺の保存については，文化課の希望する範囲に杭を打ち，保存区域については，浅く盛土し，芝張りをすることなどの要望が出された。８月下旬から９月上旬にかけては，上記の要望どおり応援体制がとられたが，遺構の密度の高さと，調査面積の拡張などによって，いぜんとして調査自体は困難な事態が続いた。調査完了への一定のみとおしのたった９月15日段階で現地見学会を開いたところ，300余名の見学者があった。９月下旬には第６地点の調査もほぼ完了したが，若干の作業量が残り，10月中旬以降調査員だけで調査を継続して11月末にやっと調査が完了した。調査途中から遺物整理を並行してすすめてきたが，12月になって本格的に始め12月末で終了した。

「資料　１」

「山陽団地の文化財取り扱いに関する確認事項」岡山県教育委員会教育長（以下「甲」という。）及び岡山県土木部長（以下「乙」という。）は，乙の計画する山陽新住宅市街地開発事業（以下「事業」という。施行にともなう埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて次のとおり取り決める。

（総則）

第１条　乙は事業施行にあたり，文化財保護の趣旨を尊重し，甲は事業施行が円滑に行なえるよう協

力するものとする。

（事業施行前の協議）

第２条　甲及び乙は事業施行前において次の各号に掲げる項目について別添図示を目安として，可及的すみやかに協議を終了するものとする。

１　事業区域から除外するもの。

２　事業区域に含めるが，公園，緑地に取り込むなどにより保存を図るもの。

３　発掘調査を行なって記録を保存するもの。

（事業施行中に埋蔵文化財包蔵地を発見した場合の協議）

第３条　乙は事業施行中に埋蔵文化財包蔵地を発見した場合その取り扱いについては，甲と協議のうえ措置するものとする。

（発掘調査）

第４条　１，前２条の協議の結果，埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は甲又は甲が指定するものに委託して実施する。

２　前項の発掘調査に要する経費については，甲，乙協議のうえ負担区分に応じて負担するものとする。

（協議の決定）

第５条　この確認事項に定めのない事項又は疑義の生じた事項については，甲，乙協議のうえ決定するものとする。

昭和44年５月24日

甲　岡山県教育委員会教育長　篠井　孝夫　〔印〕

乙　岡山県土木部長　　高橋　　光　〔印〕

「資料　２」

「山陽団地の文化財取り扱いに関する確認事項細目協議書」

岡山県教育委員会教育長（以下「甲」という。）と岡山県土木部長（以下「乙」という。）は，昭和44年５月24日付けで甲と乙との間で取り決めた山陽団地の文化財取り扱いに関する確認事項（以下「確認事項」という。）の実施細目について次のとおり決める。

第１　発掘調査の実施者（確認事項第４条第１項）

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査については，原則として古墳の発掘調査は山陽町に委託して実施することとし，門前池附近弥生遺跡の発掘調査は，甲が直接実施するものとする。

第２　発掘調査に要する経費の負担区分（確認事項第４条第２項）

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査費は，乙において負担するものとする。ただし，山陽町に委託して実施する発掘調査の一般指導旅費は，甲において負担する。

第３　発掘調査実施計画書の作成

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査を行なう場合，発掘調査実施計画書を作成し，甲，乙協議して発掘調査に必要な事項を定めるものとする。

昭和45年５月１日

甲　岡山県教育委員会教育長　篠井　孝夫　〔印〕

乙　岡山県土木部長　　佐藤　　昇　〔印〕

「資料　3」

「Ｙ３地域（門前池西方の遺跡群）等における文化財の具体的措置に関する協定書」

岡山県教育委員会教育長（以下「甲」という。）と岡山県土木部長（以下「乙」という。）とは，Ｙ３地域（門前池西方遺跡群）等における文化財の重要性にかんがみ，その具体的措置について，次のとおり協定しこれを誠実に履行するものとする。

1　Ｙ３地域について

(1)　乙は，甲の重要遺跡として指示する区域を現状保存するものとする。

(2)　乙は，前号の現状保存区域について採来甲が発掘調査を要請した場合は，これに応じ便宜を供与するものとする。

(3)　甲は，乙と協議のうえ，現状保存区域外の発掘調査を行なうものとする。

(4)　乙は，現状保存区域外の土地造成については，甲の行なう前号の調査完了後もしくは調査に支障を及ぼさない範囲において，甲と協議のうえ行なうものとする。

(5)　乙は，現状保存区域外の造成地における住宅等の建設にあたっては，甲と協議のうえ，地下遺構の保全について十分配慮するものとする。

2　巨大柱穴群地域について

(1)　甲は，当該地域における発掘調査を必要とする地点の調査を早急に行なうものとする。

(2)　乙は，甲の実施する前号の調査完了後，甲と協議のうえ，地下遺構の保全に十分配慮して，道路建設等の工事を行なうものとする。

3　用木古墳群地域について

(1)　乙は，甲と協議のうえ６号墳の保存措置に万全を期すること。

(2)　乙は，甲と協議のうえ，団地，小学校建設等の工事を行なうものとする。

4　そ　の　他

この協定に定めなき事項，又はこの協定に定める事項について疑義を生じた時は，甲，乙協議のうえ措置するものとする。

以上協定の証として，甲，乙双方記名押印のうえその１通を保育するものとする。

昭和48年８月１日

甲　岡山県教育委員会教育長　小野　啓三　〔印〕

乙　岡山県土木部長　　黒瀬　　剛　〔印〕

第3章　調査上の問題点

1　調査体制について

1次調査では，3人の調査員による調査体制を構成していた。しかし，計画以上の調査地区が出てき，そして，思わぬ遺構の広がりなどがあった。時々，他の調査員の手助けは得たもの調査途中で他の遺跡調査に出むくなど，調査に手不足が生じることがしばしばであった。また，時間不足のため夜間，電燈をともしての作業が続いたこともあった。2次調査では山陽新幹線の報告書作成と発掘調査を並行して行なわねばならなかったために，調査期間の大部分を1人の調査員でやらねばならなかった。調査面積の膨大さもさることながら発掘の方法，遺構の評価などにおいても，客観的な見方で不十分な点がある。これは，正確な記録をせねばならない緊急調査の体制としては思わしくない。さらに，同一遺跡の継続調査でありながら1次調査を担当したもののうち，2次調査の担当者となった者は1人であることなども調査に不備を生じた。こうした問題は，期限，予算に大きく左右されるのであるが，記録処置をするからには，それに見合う調査体制がつくられねばならないであろう。

2　機械力の導入について

表土排除は，すべて人力でおこなう予定であったが，調査計画，作業員の不足，遺構の埋土状況などで機械力による排土を実施した。1次調査では，第1地点においてブルドーザーを導入した。この調査区は，周囲を丘陵に囲まれた谷であるため，流入土砂の量が多く，そのうえ，池の中の土砂を掘り上げて置かれた所でもあることなどから，包含層の上部まで堆積した土砂を除去するためであった。第3地点では，ブルドーザー，ユンボを導入した。この調査区は，1次調査の最後の調査であった。遺構の面積が予想以上に広く，密度も高いなど，また，建物群の広がり，性格の確認など，そして調査終了期限などの関係で，機械力の導入による排土作業をおこなったのである。2次調査では，第3A地点，第7地点で，ブルドーザー，ユンボを導入した。第3A地点は幹線道路敷になるため，再調査するということになっていたにもかゝわらず，すでに6m以上も埋められていたのである。それに，11月には，道路の完成で，バスの乗り入れということや，作業員不足などによることもあった。第7地点については，遺構確認のトレンチ調査であり，当初，人力で始めたのであるが，谷への流入土が厚く，さらに，包含層も確認されなかったために，部分的に坪掘りをし，層序を確認したうえで，調査員が立ち会い，ユンボを導入した。このように，発掘調査にブルドーザーや，ユンボを使うことは，本来の方法ではないのであるが，人力では，どうすることもできないほどの膨大な面積であり，また土量であるため，やむなく機械力に頼らざるをえなかった。

3　遺物の保管と盗難について

発掘調査を実施する際，出土した遺物については，本来調査の方針を決めるうえで，整理しつつ発掘を進行させることが必要であるが，そうした同時並行作業は，できないことが多い。最終段階での整理期間を予測した場合，若干なりとも遺物を整理しておけば，報告書作成期間に余力が生まれるし

調査の過程で遺構を検討する時，必須条件であることはいうまでもない。又，調査中にやってくる見学者に対し親切に説明することも文化財保護の一環としてやるべき仕事である。したがって，調査中に出土遺物を他の保管場所に移動することは好ましくない。こうしたことは，現地に完全な収蔵施設を作ることによって解決できるのであるが，それができない場合は，せめて貴重遺物を十分に収めるだけのロッカーを置く必要がある。１次調査中に完全な保管施設がなかったために，正月休みに遺物小屋から貴重遺物が数点盗難にあった。それらの一部は，その後，警察の捜査により，もとにもどったが，残りは依然として所在がわからない。第１次調査終了後，遺物は，東岡山の仮収蔵庫に納められたが，その後ふたたび西古松に建てられたプレハブ収蔵庫に移された。こうした収蔵庫のたび重なる移転の問題のほか，さらに，収蔵施設の広さに比較して納める遺物が膨大なために生ずる問題点もある。たとえば，収納しても，復元整理のために部屋内で広げるスペースが狭小で，全体として報告書作成作業に大きな影響を受けた。盗難以後は，貴重品についてはできるだけ博物館にあずけるよう気をつけた。２次調査については，前回の失敗をくりかえさないよう県教委としては施錠を強固にして使用し，又，室内にはロッカー数を増加するなどの方法をとった。さらに，瀬戸警察署に協力を依頼したところ，同署防犯課によって盗難防止を目的に，昼間はもとより夜間パトロールまで特別にもうけるなど，一方ならぬお世話をいただいた。紙上をかりてお礼申したい。調査後，遺物は報告書作業をいそぐため，現場の仮収蔵庫に置き，終了と同時に西古松収蔵庫に収めた。

4　整理期間及び報告書作成について

遺物，図面，写真などの整理は調査中，又，調査の終了後にたずさわった調査員全員によって完全におこなうのが最も望ましい。しかし，調査の途中に調査員が他の調査に出むくことなどがあったり，調査面積も広く，調査の連続で整理にまでおいつかないまま終ってしまったようなことである。一応２人の調査員によって，調査終了後に３か月の整理期間を持ち，１次調査の報告書を提出する計画を立てたが，１年６か月もの調査の整理報告がわずか３か月というハードスケジュールで，公にするまでにいたらなかった。その後，新幹線の岡山以西の調査が行なわれ，２年間はそれに従事した。その調査期間中の梅雨時に，１か月間３人で整理に従事したものの完全とはならず，３人それぞれの調査地に図面などを持ちはこび，自から時間を生みだして報告書作業を続けて行なったのである。１次調査に従事した３人の調査員のうち１人は転勤し，他の１人は，久世町教委に出向とそれぞれが新たな仕事に従事することになった。しかし，県教委に残った１人の調査員が，報告書作成作業を進めるためにできるかぎり連絡を密にするようにつとめ，なんとか報告書の提出にこぎつけたのである。２次調査については，１人１現場という調査体制にもかかわらず、調査中においての整備をできるだけ進めるよう心がけた。調査の予定は，６月で終り，12月までの６か月は，１人専従で整理をするつもりが，11月まで調査が延び，予定より整理期間が短かくなった。できることなら，調査計画の段階に調査期間中にも整理の時間を持てるような体制を作り，調査終了後にも，専従調査員による報告書作成作業の時間を均等に持ちたいものである。

5　工事の進行と調査

山陽団地の中央を通る幹線道路敷の工事は，団地造成と並行して進められた。１次調査もこの幹線道路敷の部分を中心に行なっていったのである。第１地点，第５地点は，調査終了後すぐ工事が行なわれた。特に第３地点については，調査の結果で建物群などの重要遺構が検出され，考古学研究者をはじめ世論の注目を集めたことで，遺跡保存と工事進行とで論議がかわされ，幹線道路工事は一時中断状態になった。４地点，２地点丘陵の北側一部については，調査は予定してなかったが，遺構が確認されたため道路にかかる部分については調査を行なった。道路工事の中断時は，道路が雨時にはどろんこ道になり，通行が困難なことなどにより，団地居住者から陳情がでる結果となった。こうして１次調査の結果により，門前池周辺の大遺跡群は，造成工事を行なわず，現状のまゝで保存される方向で考えられたが，団地全体計画上からはむずかしく，結局は，工事で消滅されることになり２次調査が開始された。最初は幹線道路敷の建物群の再調査を行ない，遺構面には特別の配慮をし昭和48年11月の完成でバス乗り入れとなった。２次調査でも１次と同じく予定計画以外に道路の側道敷にかかるところで，第２地点の一部の調査も行なう結果になり，第３地点の調査工程にくいこみ予定が乱れた。又，便木山７号墳も保存が決っていたが，造成地域に変更され発掘されて消滅することになった。調査は工事工程を考えて計画し，機械力の導入などにたよりながら進めたが，計画通りには工程にのらず大きく変更する結果となった。

６　保　存　処　置

山陽団地建設計画の時点では造成予定地内には埋蔵文化財は，古墳６基が確認されているにすぎなかった。以後再分布調査を行い遺跡数は増し，又，造成が進むにつれても遺跡数は増大し結局は，古墳70基，弥生集落10，弥生墓地６，その他３の結果となった。こうしたことは，計画の段階で，できるだけ正確な遺跡の分布状況を確認することが保存についての大きな反省点となった。１次調査では第３地点，第２地点の一部分において建物群が確認された。その後，研究者間で注目され，さらに新聞などで取り上げられた。そのため，県では具体的保存処置について，門前池周辺の６万㎡は，現状保存すべきであるという県教育委員会と，計画通りの造成を進めようとする県土木部間で協議がくりかえされた。この問題は，事務レベルにとどまらず，県議会の本会議にとりあげられ，また，文教委員会及び土木委員会などでも議題にあがり論議がくりかえされた。しかしながら，結論がでないままに数ケ月を費やした。その後，文化財保護行政の担当課である文化課，山陽団地を建設する住宅課，ともに人事移動期を経過したが，重大事項として引き継がれ両担当課間で，協議は続けられた。しかし，結果は，６万㎡の保存は困難であった。したがって，門前池西方に広がると思われる建物群については，現状保存はできず，さらに便木山７号墳の位置する丘陵についても，現状保存はできなかった。しかし，ヤケ池の周辺，及び第５地点の丘陵は現状で保存された。こうした結論に基づいて，第２次調査は始められた。その結果１次調査での建物群は，門前池西側の谷をめぐる山すそぞいに広がっていることが実証された。こうした貴重な遺構が，十分な調査がされず，赤坂郡衛とか赤坂軍団とか推測されながら，結局は性格不明のまま埋没したことは残念である。又，はじめから保存区域であって，協議の結果，発掘して消滅することになった便木山７号墳は，後期古墳としては数少ない前方後円墳であったことも，きわめて遺憾であった。

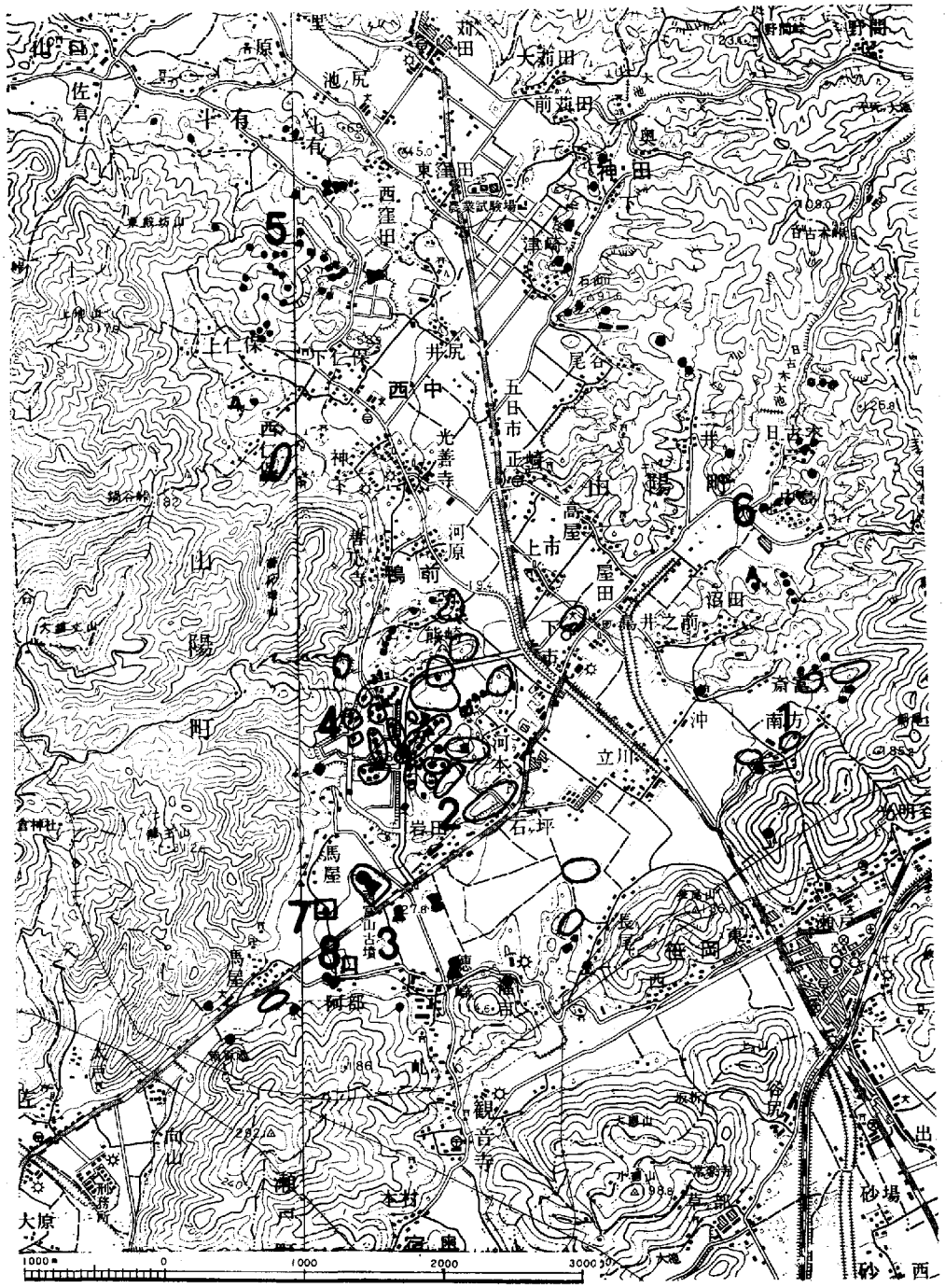
Ⅱ　歴史地理的な環境

第１章　山陽団地周辺の歴史，地理的な環境…… 14

第２章　山陽団地内の埋蔵文化財……16

1　山陽団地造成前航空写真（山陽町教委提供）

2　山陽団地造成全体航空写真（山陽町教委提供）



第1図　山　陽　町　遺　跡　分　布　図

1．南方前池遺跡
2．東高月遺跡群
3．両宮山古墳群
4．東高月古墳群
5．西山古墳群
6．高陽古墳群
7．備前国分僧寺跡
8．備前国分尼寺跡

◯……散布池(集落跡)
●……古墳
▲……窯跡
□……寺院跡
◖……前方後円墳
■……方墳

第１章　山陽団地周辺の歴史，地理的な環境

岡山県赤磐郡は岡山県の東南部に位置し，吉井川と旭川に挟まれた地域である。山陽町は岡山市の北東に隣接し，果樹栽培の盛んな町として有名である。この山陽町の中央部を流れる砂川は龍天山を源として，町の北から南へ貫流して瀬戸町に至る河川である。山陽町はこの砂川によって形成された沖積平野を中心に成立しており，農業生産力の基盤は現在もこの沖積平野によって支えられている。又，山陽町の中央部に形成されたこの沖積平野の周囲は低丘陵で囲まれており，数多くの遺跡がこの低丘陵上に分布している。

今回，岡山県教育委員会が「岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」（以下山陽団地発掘調査という）を部分的に実施しましたが，この遺跡の歴史的性格，内容を考察するうえからも当然ながら山陽団地内に埋蔵されている遺跡と山陽町内に分布する遺跡の概要について知る必要があります。この章では特に山陽町内にある縄文時代から奈良時代にかけての遺跡の概略を述べてみたいと思う。

(1) 縄　文　時　代

山陽町で発見されている縄文時代の遺跡は１ケ所のみである。瀬戸町との町界に近い南方部落は岩尾山の北側山裾に形成されている集落である。この集落のほぼ中央部に「前池」と呼称されている農業用灌漑用の池がある。この池底から縄文時代晩期，弥生時代前期，中期，後期の土器片が出土した。なかでも，縄文時代晩期の貯蔵穴が多数検出され，その貯蔵穴内にはドングリやトチの実が入れられていた事実は著名であり，縄文時代の生活を考えるうえでも重要な遺跡である。

(2) 弥　生　時　代

弥生時代前期の遺跡は南方前池遺跡と下市にある山陽小学校敷地内の２ケ所である。弥生時代に入ると山陽町でも沖積平野に集落が形成されていたことがわかる。中期になると遺跡の規模は拡大され，町内のいたる所に集落が形成されている。とりわけ，山陽団地造成地内及びその周辺の丘陵上，斜面には中期中葉から後期の集落が形成されている。しかしながら，後期の集落は本報告書で後述するように丘陵端部や谷間など平野部との接点になる地域に形成されていることが特徴的である。このことは，水田経営の規模拡大とも密接な関係があると考えられる。このような遺跡として，門前池遺跡（第１地点，第３地点），岩田大池遺跡などがあげられる。一方，墳墓の分布は山陽団地内においてみられるように四辻土壙墓群，便木山遺跡を含めて集落のある地点より離れて墓域を形成しているようであり，集落と墓域の関係も判明しつつある。

砂川を界にして東側ではまだ集落の様相が判明していないが，西側では山陽団地造成による緊急調査で明らかにされてきており，弥生時代中期，後期の集落規模や共同体の構造を究明するうえでの重要な知見がみられる。

(3) 古　墳　時　代

古墳は沖積平野の周辺にある大小の丘陵上に数多く分布している。町内に分布する古墳群は北から西山古墳群，東高月古墳群，両宮山古墳群，そして東に高陽古墳群の４つに分けることができる。

西山古墳群は前方後円墳，方墳，円墳など約40基の古墳を数える群集墳地帯である。東高月古墳群は緊急調査によって弥生時代終末期から古墳時代にかけての土壙墓及び方形台状墓を検出し，これが古墳に先行する墳墓形態であることを明らかにしたが，それに後続する前期古墳も14基確認された。（用木古墳群と称す）。この古墳群は前方後円墳，方墳，前方後方墳，円墳で構成されており，内部主体も割竹形木棺，平底組合木棺，木棺粘土槨，木棺直葬，粘土床，土壙といろいろの埋葬形態がとられている。出土品にも尚方作獸帯鏡，仿製波文帯四獸鏡，斜行櫛歯文帯方格規矩鏡，内行花文鏡など注目すべきものが出土している。この古墳群は年代的にも両宮山古墳群に先行する古墳群であり，吉備における前期古墳時代を考えるうえでも重要な古墳群である。山陽町の南西部には両宮山古墳群がある。岡山県で３番目の大きさをもち，周濠内には今なお水を満面に湛えた両宮山古墳（前方後円墳，全長192*m*）を盟主として森山古墳，小山古墳，廻り山古墳，朱千駄古墳など大形，中形の前方後円墳，帆立貝形墳が集中してみられる。内部主体は舟形石棺や長持形石棺を主体としているようである。高陽古墳群は町の東側中央丘陵一帯に分布する古墳群で約20基の小形円墳が群集している後期古墳群である。

以上みてきたように，山陽町にある４つの古墳群は各古墳群によってその内容が異なる。とりわけ，用木古墳群の成立はこの地域における古墳出現の在り方と展開の仕方を示しており注目される。また両宮山古墳群の成立は単にこの地域だけの政治的，経済的基礎のうえに成立したものとは思われず，山陽町を含め上道地域一帯の政治的，経済的基礎のうえにつくられた首長層の古墳群と考えられる。

(4) 歴 史 時 代

和名鈔によれば山陽町は備前国赤坂郡であり，その中心部にあったが，旧山陽道もまたこの地を通過している地域であった。延喜式にみえる高月駅は高月村馬屋という地名が残っていることから，この馬屋部落周辺に駅家があったものと推定される。またこの馬屋の東側，両宮山古墳の西隣りには推定２町四方の備前国分僧寺があり，県道を隔てた南の仁王堂池附近には備前国分尼寺（規模不明）があったことが奈良時代の瓦の出土などで明らかにされている。また，この沖積平野一帯には条里制が実施されており，古代よりこの平野は盛んに利用されていたことがわかる。

以上，山陽町の縄文時代から奈良時代までの概要を簡単に述べたが，一口で云えば本地方は日本史の年表に見られる諸事実の発生，展開過程を一目でみることができる，パーケージされた地域ということができる。（松　本）

参 考 文 献

1 「赤磐郡誌」 赤磐郡教育会編 1940年
2 「岡山県山陽町南方前池遺跡」 南方前池調査団 「私たちの考古学」７号 1956年
3 「岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報」〔1〕，〔2〕，〔3〕 岡山県赤磐郡山陽町教育委員会刊
4 「備前山陽町吉原古墳群の陶棺」 西川宏，則武忠直 古代吉備第１集 1958年
5 「吉備政権の性格」 西川宏 「日本考古学の諸問題」所収 1964年

第２章　山陽団地内の埋蔵文化財

砂川流域に広がった平野の両側には低い丘陵が南北方向に連なっている。山陽団地は西側の丘陵が平野部に向かって，大きく張り出した低丘陵，東西約900*m*，南北約1200*m*の範囲に計画されている。計画立案当時，古墳６基しか確認されていなかったものが，調査の終了した今日では，弥生時代集落10ケ所，弥生時代墳墓群７ケ所，古墳65基，歴史時代遺跡２ケ所を数える。これらを時代ごとに述べてゆきたい。

砂川流域の低地に住んでいた人々が，この低丘陵に移り住んだのは弥生時代中期中葉の頃であり，この時期の土器は門前池遺跡（Ｙ３），用木山遺跡（Ｙ８―１）などに少量ずつ見られる。中期後半には集落が形成されだし，人口の増大がみられる。この時期の集落がみられるのは門前池遺跡・用木山遺跡・惣図遺跡（Ｙ７）愛宕山遺跡（Ｙ―８）などであり，これらはいずれも後期初頭までで場所を移している。この時代の墳墓は，四辻土壙墓群（Ｆ８）・愛宕山土壙墓遺跡（Ｙ８―２）などにみられる。後期の初めには中期末の集落・墳墓が継続するものの，やがて，集落は岩田大池遺跡（Ｙ１）・門前池遺跡などに営まれている。墳墓も同様の経過をたどり，後期になると宮山方形台状墓（Ｇ12）・便木山方形台状墓（Ｂ４）・便木山土壙墓遺跡（Ｇ10）などにみられ，古墳がつくられる前段階の葬制を示している。

古墳時代の集落は，あまりみつかっていないが，門前池遺跡では弥生時代と違って低地に移り住んだ様相がみられる。各地で古墳が作られ始めた頃，山陽団地内にも古墳がつくられている。前期古墳群としてとらえ得るのは16基からなる用木古墳群（Ａ）である。墳形には円墳・前方後方墳・方墳があり，鏡・玉・銅製品・鉄製品など豊富な出土品をもつ。これに続くのは岩田３号墳（Ｅ３）・四辻古墳群（Ｆ）などである。後期古墳群になると，岩田古墳群・便木山古墳群がある。前方後円墳は野山古墳群（Ｃ）・便木山古墳群に１基ずつある。

奈良時代前期になると門前池遺跡には，瓦を使用した建物がつくられ，やがて平安時代まで継続する建物群が築営される。墳墓は惣図遺跡・愛宕山遺跡などに骨蔵器・土壙墓がみられ，愛宕山遺跡では土壙墓内に鏡・白磁が埋葬されていた。また，三蔵畠遺跡（Ｙ11）には，須恵質土器・土鍋などを焼く平窯風の窯がある。愛宕山遺跡などでは鍛治炉もある。

以上のように，山陽団地内には弥生時代中期から鎌倉時代まで長期にわたり，それも絶えることなく続いている。

なお，この節を書くにあたっては神原英朗氏の御教示によるところが大きかったことを記しておきたい。

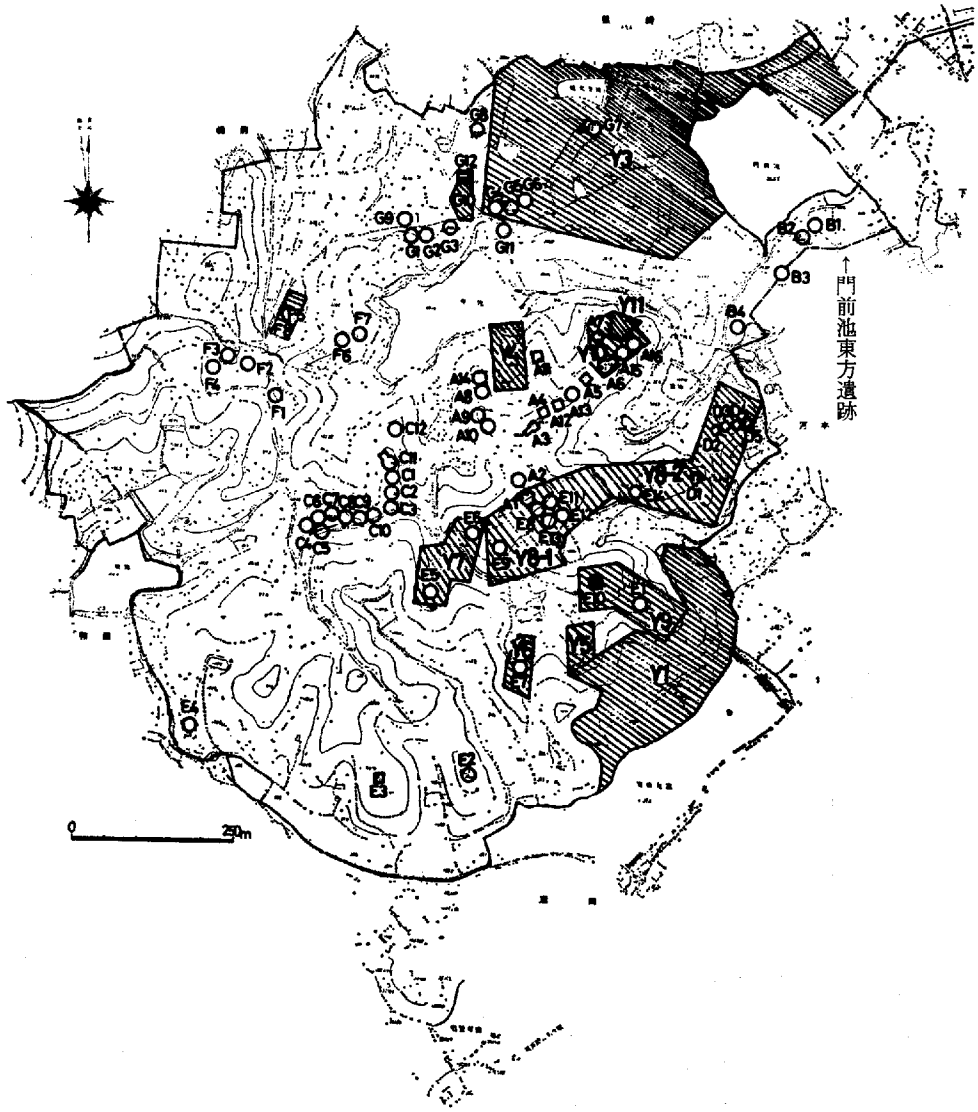
（池　畑）

参　考　文　献

山陽町教育委員会『用木古墳群発掘調査概報』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(2)　1971年

山陽町教育委員会『便木山遺跡発掘調査報告』前掲調査概報(2)　1972年

山陽町教育委員会『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』前掲調査概報(3)　1973年



第2図 山陽団地内遺跡分布図

山陽町教育委員会関係報告書一覧表

分　　冊	集　録　遺　跡　名	作成年次
第 1 分 冊	○発掘調査の経過ならびに総括 ○現状保存遺跡の概要 ○用木古墳群　15基（A群）	昭和49年度
第 2 分 冊	○便木山遺跡　（G10） ○惣図遺跡第1地点　（Y71） ○岩田古墳群第3.5号墳　（E3，E5）	既刊 昭和46年度
第 3 分 冊	○四辻土壙墓遺跡　（F5） ○四辻古墳群　7基（F1～F7） ○宮山古墳群　第4号墳，方形台状墓（B4） ○さくら山方形台状墓　（E10） ○便木山方形台状墓　（G12）	既刊 昭和47年度
第 4 分 冊	○用木山遺跡　（Y81，Y82，Y83） ○惣図遺跡　第2地点（Y72） ○中池遺跡　（Y4） ○犬久保遺跡　（Y6）	昭和50年度
第 5 分 冊	○東山遺跡　（Y5） ○さくら山遺跡　（Y91，Y92） ○愛宕山遺跡　（Y84，Y86，Y87）	昭和50年度
第 6 分 冊	○岩田古墳群　9基（E群） ○愛宕山古墳群　4基（D群） ○野山古墳群　3基（C4～G6） ○三蔵畑遺跡　（Y11） ○新宅山遺跡　（Y10） ○その他，古墳時代土壙，歴史時代土壙等	昭和50年度

Ⅱ 第 1 次 調 査

目　　次

第1章　調査区の概要……27
第2章　第　1　地　点……27
　1　立　　地……27
　2　住　居　址……30
　3　第1地点S.T.U.トレンチについて……51
　4　第1地点出土の弥生式土器……51
　5　第1地点出土の土師器……51
　6　土器溜出土遺物……55
　7　ま　と　め……55
第3章　第　2　地　点……59
　1　立　　地……59
　2　住　居　址……59
　3　土　　壙……59
　4　4本柱の特殊な建物……60
　5　ま　と　め……63
第4章　第　3　地　点……64
　1　立　　地……64
　2　住　居　址……64
　3　土　　壙……88
　4　柵　　列……91
　5　建　　物……93
　6　不明柱穴……95
　7　第3地点出土の土師器……96
　8　ま　と　め……96
第5章　第　4　地　点……103
　1　立　　地……103
　2　住　居　址……103
　3　土　　壙……105
　4　溝　　……105
第6章　第　5　地　点……113
　1　立地および調査方法……113
　2　住　居　址……113
　3　瓦溜について……113
　4　小石敷遺構……116

5　Aトレンチについて…… 118
6　A，B，C，D—2区南北セクションについて…… 118
7　B．C—2区南北セクション…… 118
8　C—O，1，2，3，4，5区東西セクション…… 118
9　瓦について…… 121
10　第5地点出土の土師器について…… 122
11　まとめ…… 125
第7章　まとめ…… 128
1　第1次調査出土の石器…… 128
2　第1次調査出土の須恵器…… 138

図　目　次

第1図　第1地点地形及び発掘調査区域（製図，松本）……28
第2図　第1地点遺構配置図（実測，枝川，新東，松本，製図，松本）……29
第3図　1号住居址（実測，製図，新東）……おりこみ
第4図　1号住居址出土遺物（実測，製図，新東）……31
第5図　2号住居址（実測，製図，新東）……32
第6図　2号，5号住居址出土遺物（実測，製図，新東）……33
第7図　3号住居址（実測，製図，新東）……34
第8図　6，7住居址（実測，製図，松本）……37
第9図　6号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……38
第10図　7号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……39
第11図　8号（9，10号）住居址（実測，製図，新東）……40
第12図　9，10号住居址出土遺物（実測，製図，新東）……41
第13図　11号（15，16号）住居址（実測，製図，枝川）……42
第14図　11号住居址出土遺物（実測，製図，枝川）……41
第15図　12号住居址（実測，製図，新東）……43
第16図　14号住居址（実測，製図，松本）……44
第17図　14号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……45
第18図　17号建物址（実測，製図，松本）……46
第19図　17号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……47
第20図　17号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……48
第21図　18号住居址（実測，製図，松本）……49
第22図　19，20号住居址（実測，製図，松本）……おりこみ
第23図　小竪穴（実測，枝川，製図，新東）……49

第24図　第１地点Ｓ．Ｔ．Ｕトレンチ断面図（実測，製図，松本）……52
第25図　第１地点出土の弥生式土器（実測，製図，松本）……53
第26図　第１地点出土の土師器（実測，製図，松本）……53
第27図　第１地点東西トレンチ断面図（実測，枝川，新東，製図，枝川）……54
第28図　土器溜出土弥生式器台（実測，製図，新東）……57
第29図　土器溜出土弥生式器台（実測，製図，新東）……58
第30図　１号住居址（実測，新東，枝川，製図，新東）……61
第31図　土　　壙　１（実測，製図，新東）……60
第32図　土壙１内出土遺物（実測，製図，新東）……62
第33図　第２地点遺構配置図（実測，新東，製図，枝川）……63
第34図　１号住居址（実測，新東，製図，枝川）……65
第35図　１号住居址出土遺物Ⅰ（実測，製図，新東）……66
第36図　１号住居址出土遺物Ⅱ（実測，製図，新東）……67
第37図　１号住居址出土遺物Ⅲ（実測，製図，新東）……68
第38図　３号住居址（実測，新東，松本，製図，新東）……69
第39図　２，４，５，６ａ，６ｂ号住居址（実測，製図，松本）……おりこみ
第40図　２号住居址内出土遺物（実測，製図，松本）……71
第41図　２号住居址内出土遺物（実測，製図，松本）……72
第42図　７号住居址（実測，製図，枝川）……73
第43図　７号住居址出土遺物（実測，製図，枝川）……74
第44図　９号住居址（実測，製図，松本）……74
第45図　９号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……75
第46図　12号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……77
第47図　13号住居址（実測，新東，製図，枝川）……78
第48図　13号住居址出土遺物（実測，製図，新東）……79
第49図　14号住居址（実測，製図，松本）……80
第50図　14号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……81
第51図　15号住居址（実測，製図，枝川）……80
第52図　15号住居址出土遺物（実測，製図，枝川）……82
第53図　18号住居址（実測，樋口，松本，製図，松本）……83
第54図　18号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……84
第55図　22号住居址（実測，樋口，松本，製図，松本）……85
第56図　22号住居址出土遺物（実測，製図，松本）……86
第57図　23号住居址（実測，製図，枝川）……87
第58図　23号住居址出土遺物（実測，製図，枝川）……88
第59図　土壙１，２，３（実測，製図，枝川）……90

第60図　土　　壙　4（実測，松本，製図，枝川）……89
第61図　土　　壙　5（実測，松本，製図，枝川）……90
第62図　土　　壙　6（実測，製図，新東）……91
第63図　土壙7，8，9（実測，製図，枝川）……92
第64図　建物〔Ⅰ〕平面図（実測，新東，製図，松本）……93
第65図　建物〔Ⅱ〕平面図（実測，泉本，松本，製図，松本）……94
第66図　建物〔Ⅲ〕平面図（実測，泉本，松本，製図，松本）……94
第67図　建物〔Ⅳ〕平面図（実測，製図，松本）……95
第68図　建物〔Ⅴ〕平面図（実測，製図，松本）……96
第69図　建物〔Ⅵ〕平面図（実測，製図，松本）……96
第70図　不明柱穴群（実測，正岡，松本，製図，松本）……98
第71図　第3地点出土土師器（実測，製図，松本）……99
第72図　第3地点地形図（製図，枝川）…… 101
第73図　第3地点横断図（実測，製図，枝川）…… 102
第74図　第3地点遺構配置図（実測，枝川，新東，松本，正岡，樋口，泉本，製図，枝川）おりこみ
第75図　5号住居址出土遺物（実測，製図，新東）…… 106
第76図　5号住居址出土遺物（実測，製図，新東）…… 107
第77図　9号住居址（実測，製図，枝川）…… 108
第78図　9号住居址出土遺物（実測，製図，枝川）…… 107
第79図　10号住居址及び土壙（実測，製図，新東）…… 109
第80図　10号住居址出土遺物（実測，製図，新東）…… 111
第81図　11号住居址出土遺物（実測，製図，新東）…… 111
第82図　溝断面図（実測，新東，製図，枝川）…… 108
第83図　第4地点遺構配置図（実測，枝川，新東，製図，枝川）…… 112
第84図　第5地点造成範囲（製図，松本）…… 114
第85図　第5地点地形およびグリッド設定図（製図，松本）…… 115
第86図　第5地点遺構配置図（実測，枝川，新東，松本，製図，松本）…… 116
第87図　1号住居址（実測，製図，新東）…… 117
第88図　1号住居址出土遺物（実測，製図，新東）…… 117
第89図　Aトレンチ断面図（実測，製図，松本）…… 119
第90図　A，B，C，D—2区南北セクション（実測，製図，松本）…… 119
第91図　B—C，2区南北セクション（実測，製図，松本）…… 120
第92図　C—O，1，2，3，4，5区東西セクション（実測，製図，松本）…… 120
第93図　軒　丸　瓦（拓影，実測，製図，松本）…… 122
第94図　平　瓦，丸　瓦（拓影，実測，製図，松本）…… 121
第95図　第5地点出土土師器（実測，製図，松本）…… 123

第96図　13区C～Q区断面図（実測，製図，枝川）…… 127
第97図　第1地点出土石器（実測，製図，松本）…… 130
第98図　第1地点出土石器（実測，製図，松本）…… 131
第99図　第1地点，第3地点出土石器（実測，製図，松本）…… 132
第100図　第3地点出土石器（実測，製図，松本）…… 133
第101図　第3地点出土石器（実測，製図，松本）…… 134
第102図　第3地点出土石器（実測，製図，松本）…… 135
第103図　第5地点出土石器（実測，製図，松本）…… 136
第104図　第5地点出土石器（実測，製図，松本）…… 137
第105図　第1次調査出土の須恵器（実測，製図，枝川）…… 139
第106図　第1次調査出土の須恵器（実測，製図，枝川）…… 140
第107図　第1次調査出土の須恵器（実測，製図，枝川）…… 141
第108図　第1次調査出土の須恵器（実測，製図，枝川）…… 142
第109図　第1次調査出土の須恵器（実測，製図，枝川）…… 143

表　目　次

第1表　第1地点出土土師器一覧表（作成，松本）……55
第2表　第3地点包含層出土土師器一覧表（作成，松本）…… 100
第3表　第5地点出土土師器一覧表（作成，松本）…… 124
第4表　第1次調査出土の石器計測表（作成，松本）…… 128

図　版　目　次

山陽団地造成前航空写真（山陽町教委提供）本文……11
山陽団地造成後全体航空写真（山陽町教委提供）本文……11
図版1―1　第1地点発掘前近景（撮影，枝川）…… 1
図版1―2　第1地点遺構全体（撮影，新東）…… 1
図版2―1　第1地点2号住居址（撮影，新東）…… 2
図版2―2　第1地点6，7号住居址（撮影，松本）…… 2
図版3―　第1地点6号住居址出土遺物，14号住居址出土遺物…… 3
図版4―1　第1地点8号住居址（撮影，新東）…… 4
図版4―2　第1地点11号（15，16号）住居址（撮影，枝川）…… 4
図版5―1　第1地点19，20号住居址（撮影，松本）…… 5
図版5―2　第1地点土器溜出土状態（撮影，枝川）…… 5
図版6―1　第1地点土器溜出土状態（撮影，枝川）…… 6
図版6―2　第1地点土器溜出土状態（撮影，枝川）…… 6
図版7―1　第1地点土器溜出土状態（撮影，枝川）…… 7

図版７―２　第１地土器溜出土状態（撮影，枝川）……7
図版８―１　第１地点発掘作業風景（撮影，新東）……8
図版８―２　第１地点発掘作業風景（撮影，枝川）……8
図版９―１　第１地点作業風景（撮影，枝川）……9
図版９―２　第１地点調査後の工事（撮影，枝川）……9
図版10―１　第２地点遺構全体（撮影，新東）……10
図版10―２　第２地点４本柱の特殊な建物（撮影，新東）……10
図版11―１　第２地点土壙断面（撮影，新東）……11
図版11―２　第２地点土壙（撮影，新東）……11
図版12―１　第２地点作業（撮影，枝川）……12
図版12―２　第２地点作業（撮影，枝川）……12
図版13―１　第３地点発掘前全体（撮影，枝川）……13
図版13―２　第３地点遺構全体（撮影，枝川）……13
図版14―１　第３地点１号住居址（撮影，新東）……14
図版14―２　第３地点２号住居址（撮影，松本）……14
図版15―１　第３地点３点３号住居址（撮影，新東）……15
図版15―２　第３地点13号住居址（撮影，新東）……15
図版16―１　第３地点13号住居址土器出土状態）……16
図版16―２　第３地点14号住居址（撮影，松本）……16
図版17―１　第３地点14号住居址遺物出土状態（撮影，松本……17
図版17―２　第３地点15号住居址（撮影，枝川）……17
図版18―１　第３地点18号住居址（撮影，松本）……18
図版18―２　第３地点22号住居址（撮影，松本）……18
図版19―１　第３地点土壙１，２，３（撮影，枝川）……19
図版19―２　第３地点土壙５（撮影，松本）……19
図版20―１　第３地点土壙６（撮影，新東）……20
図版20―２　第３地点土壙７，８，９（撮影，枝川）……20
図版21―１　第３地点建物Ⅰ（撮影，枝川）……21
図版21―２　第３地点建物Ⅱ（撮影，松本）……21
図版22―１　第３地点建物Ⅲ，Ⅳ（撮影，新東）……22
図版22―２　第３地点建物Ⅳ（撮影，枝川）……22
図版23―１　第３地点柵列（撮影，松本）……23
図版23―２　第３地点発掘作業風景（撮影，枝川）……23
図版24―１　第４地点９号住居址（撮影，枝川）……24
図版24―２　第４地点10号住居址（撮影，新東）……24
図版25―１　第４地点工事用道路断面検出住居址（撮影，新東）……25

図版25—2　第4地点歴史時代大溝（撮影，新東）……25
図版26—1　第4地点作業（撮影，枝川）……26
図版26—2　第4地点作業（撮影，枝川）……26
図版27—1　第5地点調査前景（撮影，松本）……27
図版27—2　第5地点1号住居址（撮影，新東）……27
図版28—1　第5地点小石敷遺構，瓦溜全体（撮影，松本）……28
図版28—2　第5地点小石敷遺構と瓦出土状態（撮影，松本）……28
図版29—1　第5地点瓦出土状態（撮影，松本）……29
図版29—2　第5地点瓦出土状態（撮影，松本）……29
図版30—1　第5地点6区C～E区トレンチ断面（撮影，松本）……30
図版30—2　第5地点調査風景（撮影，枝川）……30
図版31—1　第5地点13区C～Q区トレンチ（撮影，枝川）……31
図版31—2　第5地点出土軒丸瓦（撮影，松本）……31
図版32—　第1地点出土石器（撮影，井上）……32
図版33—　第1地点出土石器（撮影，井上）……33
図版34—1　第3地点出土石器（撮影，井上）……34
図版34—2　第5地点出土石器（撮影，井上）……34
図版35—　第1地点土器溜出土遺物（撮影，新東）……35
図版36—1　第1地点1号住居址出土遺物（撮影，新東）……36
図版36—2　第1地点3号住居址出土遺物（撮影，新東）……36
図版37—1　第3地点1号住居址出遺物（撮影，新東）……37
図版37—2　第3地点13号住居址出土遺物（撮影，新東）……37
図版38—1　第3地点1号住居址出土遺物（撮影，新東）……38
図版38—2　第3地点出土須恵器（撮影，枝川）……38
図版38—3　第3地点14号住居址出土遺物（撮影，新東）……38
図版39—1　第4地点10号住居址出土遺物（撮影，新東）……39
図版39—2　第4地点5号住居址出土遺物（撮影，新東）……39

第1章　調査区の概要

第１次発掘調査は岡山県教育委員会によって昭和45年６月１日より昭和46年12月末まで実施されました。第１次の調査対象地域は山陽団地内を縦断する幹線道路敷下に埋蔵される遺跡を対象とした。第１地点と呼称した地域は北北東に開口した丘陵の谷間に位置する遺跡である。この地点の調査は昭和45年６月１日から開始され，他の調査地点と平行に調査をしながら昭和49年２月24日に終了しました。この地点の発掘調査面積は，約1,500㎡である。

第２地点の一部は，当初発掘計画がなかったが，県土木部より幹線道路敷の拡幅のため，一部明け渡しの要求をうけ，急拠，昭和46年５月15日から数回にわけて調査を実施した。調査対象面積は約100㎡であった。

第３地点は縄文寺池と門前池の間に位置し，丘陵端部から谷間の平地にかけて広がる弥生時代から歴史時代にかけての遺構が検出された遺跡である。特にこの発掘調査区では８世紀代のものと考えられる掘立柱の建物址が６棟確認され，この遺構は郡衙遺構ではないかと注目された。調査期間は昭和46年５月６日から昭和46年12月末までであり，調査対象面積は約2,500㎡である。

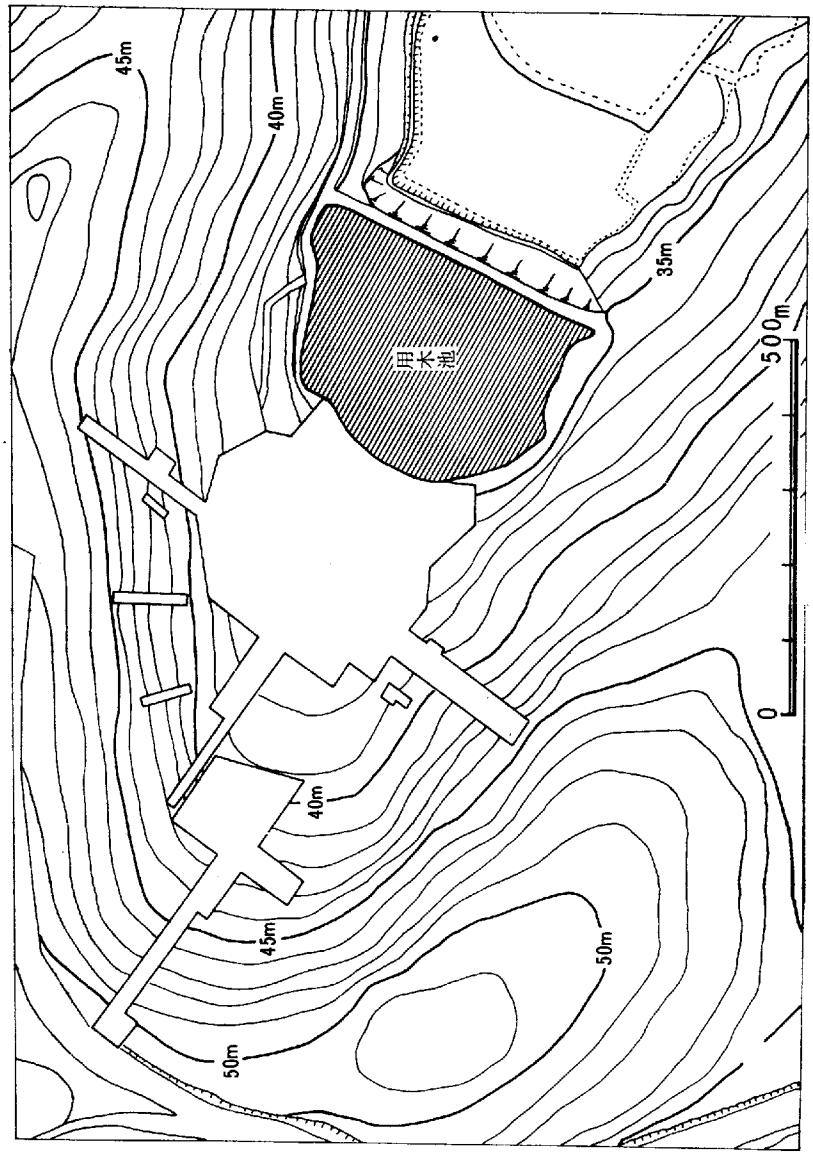
第４地点は工事用道路建設中に確認された遺跡である。この遺跡は幹線道路敷地内にあることから，昭和45年12月上旬から昭和46年２月中旬まで発掘調査を実施した。調査対象面積は約400㎡である。第５地点は門前池の東に位置し，山陽団地幹線道路の東入口附近にある。この地域も第３地点と同様に丘陵端部から谷間の平地に接する地域に広がる遺跡である。

この地域は「門前池」などという地名が残っていることから寺院址が予想される調査区であった。発掘調査は昭和45年11月21日から昭和46年４月30日まで実施され，その調査対象面積は約1,500㎡であった。　（松　本）

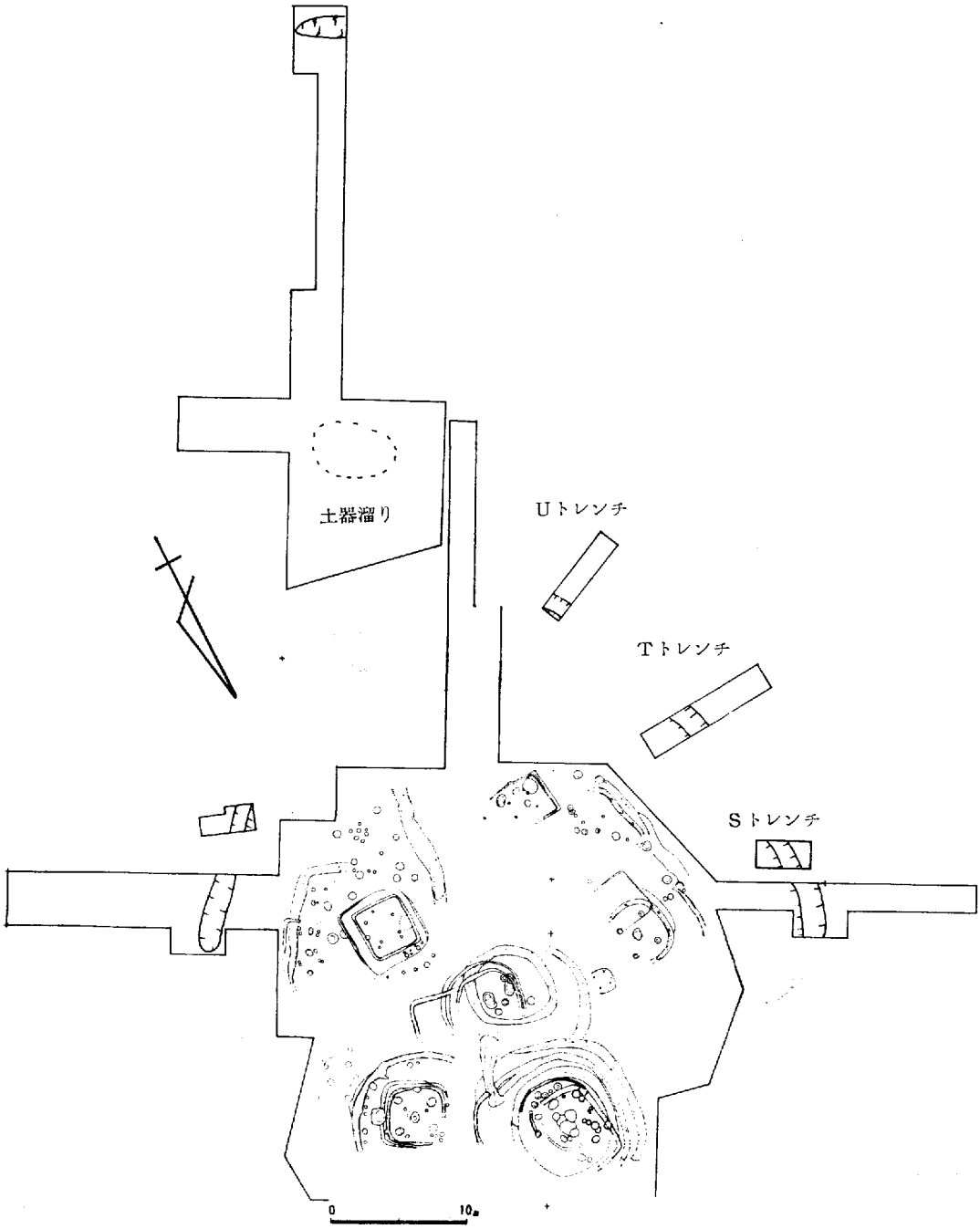
第2章　第　1　地　点

1　立　地

第１地点は，２つの丘陵によって形成される谷底部の谷頭部分に位置する。この谷は，北々東方向に開けていて，谷部平地では水田が営なまれている。この谷には３個の溜池が，下方から門前池・用木池と築かれている。第１地点は，この最上部に築かれた用木池によって一部破壊をうけている。遺跡の発見は，用木池の断渕にみられた包含層の発見であった。包含層の厚さは，50㎝から60㎝にもおよぶ。谷を形成している２つの丘陵上には，円墳３基（Ｇ４，Ｇ５，Ｇ６）（註1）と前方後円墳（Ｇ８）（註2）が存在する。また丘陵鞍部には，便木山古墳群（註3）が位置する。これらの丘陵頂部および丘陵傾斜地に存在する周辺の遺跡と，谷底平地に位置する第１地点遺跡とは，段階を踏んだ一連の遺跡と考えられる。丘陵頂部より35ｍから40ｍも下がったうえ，わずかな平地を利用しての住居地の形成は，かってみない悪条件を背負った遺跡の立地である。　（新　東）



第1図　第1地点地形および発掘調査区域



第2図 第 1 地 点 遺 構 配 置 図

2 住　居　址

1 号 住 居 址（第３図）

第１地点のほぼ中央に位置し，この調査区最大径（約7.0m）の大きさをもつ住居址である。住居址の外周には，雨落溝と推定される２本の溝を備えている（巾0.6m，深さ0.4m）。この住居址流入土最上面には，土師器（古墳期）を出土する12号住居址が存在する。この１号住居址は，数回に渡って改築されたもので，その住居址床面には，数本の周溝が検出された。住居址内には柱穴が数多みられ，中央にはピットが切り合っている。柱穴は，主柱と考えられるものと補助的なものとに区別されるが，改築と，東南部の破壊によって，各期の主柱は明確でない。しかし，最終期の主柱は，住居址の規模から６本程度の配置が考えられる。主柱の径は0.5m，深さ0.6mを測る。中央ピットは，径0.8mから1.0m，深さ0.6m程度で，いずれも木炭を含む灰土が流入している。焼土は中央ピット掘り形の周辺にみられ，ピットは炉の補助的役割りを果したものと推定される。

外周溝（雨落溝）外周溝は２本検出された。いずれも住居址に並行し，取り廻んでいる。屋根落水と傾斜上面からの流水の住居址流入を防ぎ，地形の立地に促した設置と考えられる。溝１は，住居址肩部より1.3m離れて設置され，巾0.6m，深さ0.3mを測る。溝内には土器や礫が散乱している。溝２は，改築前のものと推定されるが，現状ではほぼ住居址を全周している。東南部付近の溝が住居址より離れ広くなっているが，住居址入口の構造上生じたものではなかろうかと考えられる。

出土遺物（第４図）住居址内から，弥生式土器と鉄器が出土している。土器は住居址に放置された状態でつぎのものが出土した。その他に住居址流入土中からは細片が出土している。

高杯　高さ20cm，杯部口径27cm，脚部径15cm。脚部は，四方に３個の円孔が三角位置に施され，そのうちの二方には，上方に２個の円孔がある。口縁端部は，約2.6cmの水平な拡張がみられ，４本の沈線が施されている。色調は赤褐色を呈している。口縁端部の拡張部外側は，ハケによるヨコナデの調整がみられ，杯部から脚部にかけてはヘラ磨きによる整形が認められる。

器台　高さ17cm，口縁部径14cm，脚径23cm，口縁部は，外側下方への拡張部の一部剝落をみるが，拡張部は３条の凹線上に連続鋸歯文を施文している。脚部は，四方従列に３個の円孔がある。色調は黄灰色を呈する。

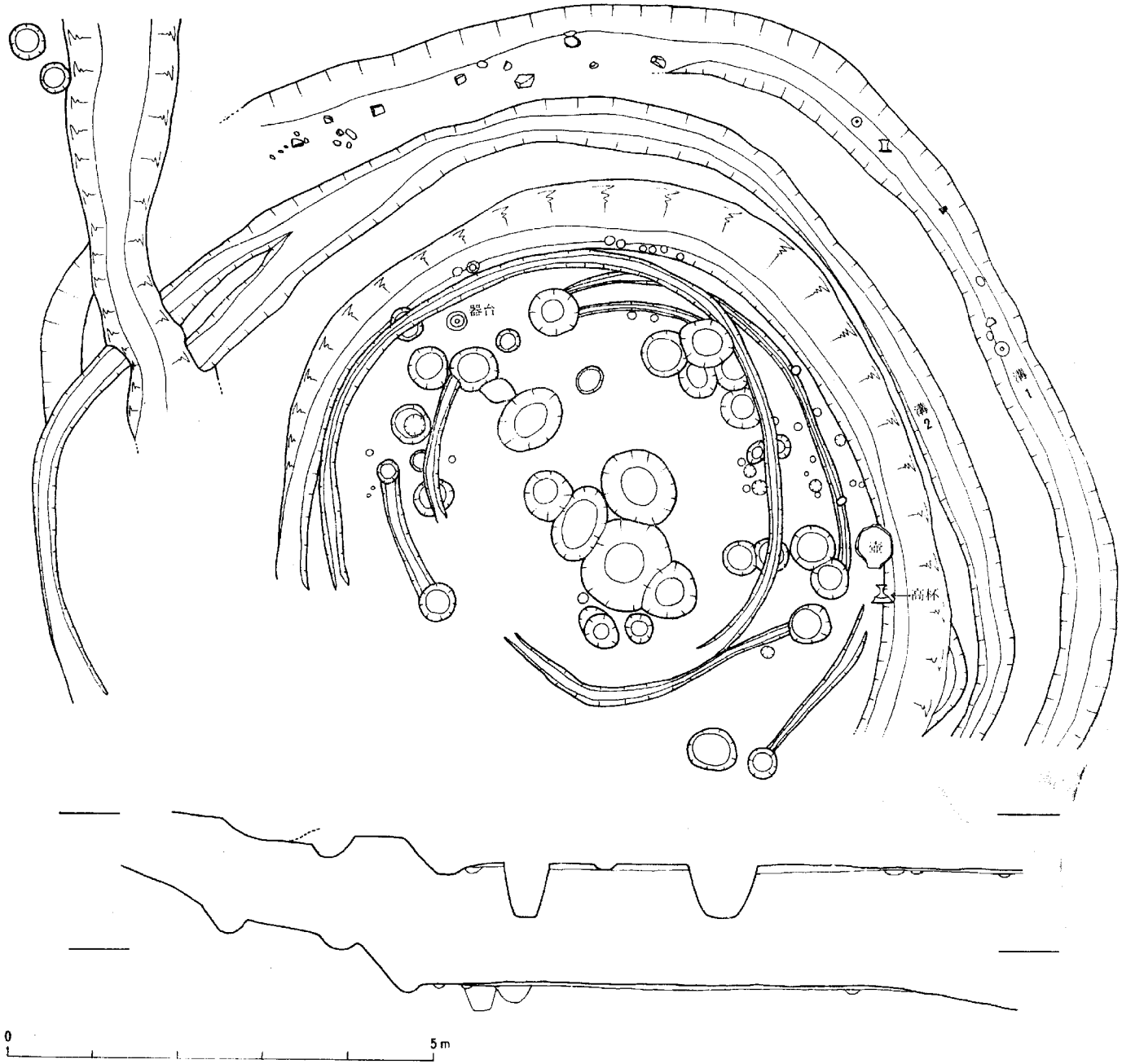
壺　横倒しの状態で出土している。現存高47cm，胴部最大径38cm，底部径14cm。底部厚み２cm，胴部厚み0.6cmでかなり部厚いものである。首部には，５条以上の凹線を施し，口縁部は破損している。色調は黄褐色を呈する。

鉄器　住居址の床面上より発見されたもので，腐蝕は激しいが，鉈状の鉄器と推定される。

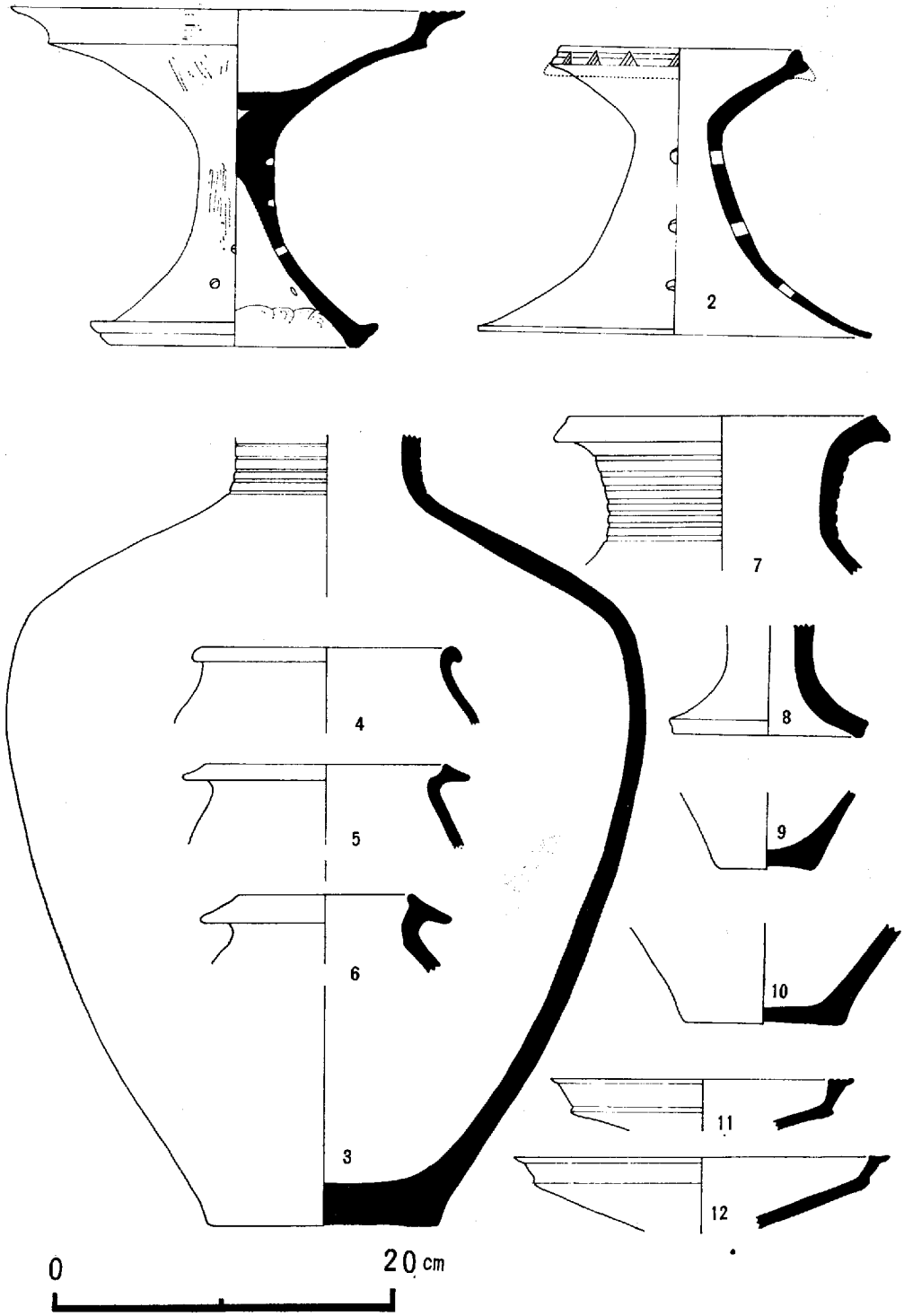
（新　東）

2 号 住 居 址（第５図）

方形の住居址で，辺の長さは，南北方向3.5m，東西方向推定4.3mの大きさである。壁の深さは，最も残りの良い西側辺で約0.4mを測る。主柱は４本柱である。柱穴の径は0.15m程度である。柱間は，南北（P_1，P_2）方向1.2m，P_3 P_4方向1.2mで，東西（P_1，P_3）1.6m，P_2 P_4 1.7mを測る。柱穴はP_1が方形を呈し，深さが0.15mと他より若干浅いものである。そのうえ，掘と形と柱の



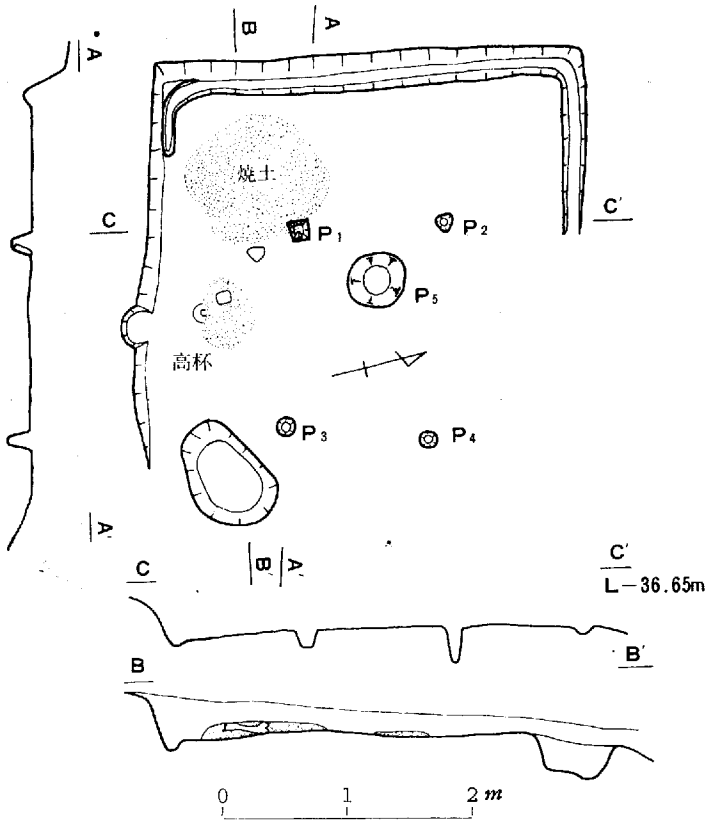
第3図　1　号　住　居　址



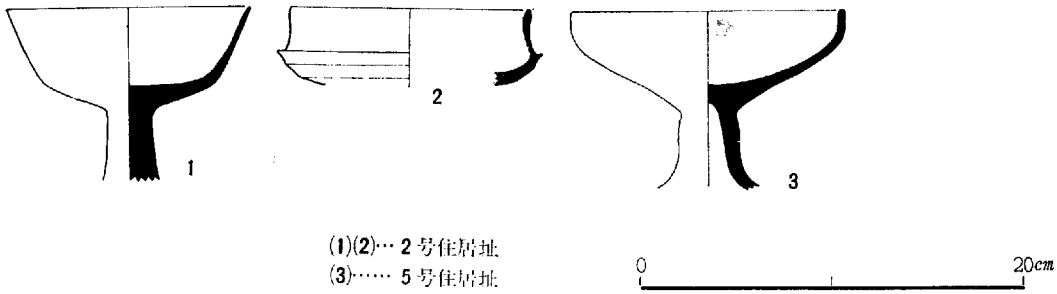
第4図　1号住居址出土遺物

間に強固材と考えられる１個の石がたてにつめられている。このＰ₁を除いて，他の３本の柱は，その柱底が円錐状を呈している事からも杭状の柱が築かれ，掘り形が存在しないとも考えられる。中央には径0.45*m*，深さ約0.6*m*のピット（Ｐ₅）が存在する。また東南隅には，0.6*m*×0.9*m*の楕円形のピットがある。深さは0.35*m*。西南隅を中心に，２ケ所の焼土の放置がみられる。西南隅に堆積する焼土は，厚さ約0.15*m*で，1.2*m*四方の円形である。またその隣には，0.5×0.4*m*のもう一塊の焼土がみられる。この焼土の中には，第５図のごとく土師器の高杯が残存していた。周溝は，南辺の西隅から始まって，西辺，北辺と続いている。北辺は地形削平によって消滅している。この住居地の流入土は黒褐色である。

出土遺物（第６図）土師器と伴って，須恵器の杯，壺の細片が出土している。２号住居址出土の土師器高杯（第６図１）は，表面の化粧土は完全に剝離し，保存状態は良好でない。杯部口径13*cm*，杯部深さ４*cm*，現存高は９*cm*である。色調は，赤褐色を呈する。出土は，図⑤の如く焼土の中である。須恵器は若干出土しているが，実測可能なものは，杯（第６図２）である。口径は12.7*cm*（推定）を測り深さ４*cm*である。杯部立ち上りは，2.3*cm*で外反している。口縁端部は楕円状に突って終る。焼成・整形は良質で，色調は暗灰色を呈する。（新　東）



第５図　２　号　住　居　址



第6図　2号，5号住居址出土遺物

3 号 住 居 址（第7図）

3号住居址は，主格の1，11，19号住居址群の存在する谷底中央部を取り囲むように一段高い傾斜中腹に位置する。西側の住居址周溝が検出され，住居址の全体の規模は完全には存在しない。周溝は，巾0.35m，深さ約0.1～0.15mを測り，一辺が約2.5m程度の隅円方形に近いプランをもっと考えられる。一辺の周溝中に，径0.2m×深さ0.1m程の杭穴が3個検出された。その杭穴は，1.2m等間隔に検出されている。住居址内の柱穴は数個存在するが，この周溝との関係は明確ではない。出土遺物は，弥生後期と考えられる土器細片がみられるが器形の図示できるものは無い。　（新　東）

4 号 住 居 址

これは，住居址として調査を進めたが，明確に住居址の資料を得る事はできなかった。今のところ，弥生後期の土器を流入するくぼみとして取りあげておく。　（松　本）

5 号 住 居 址

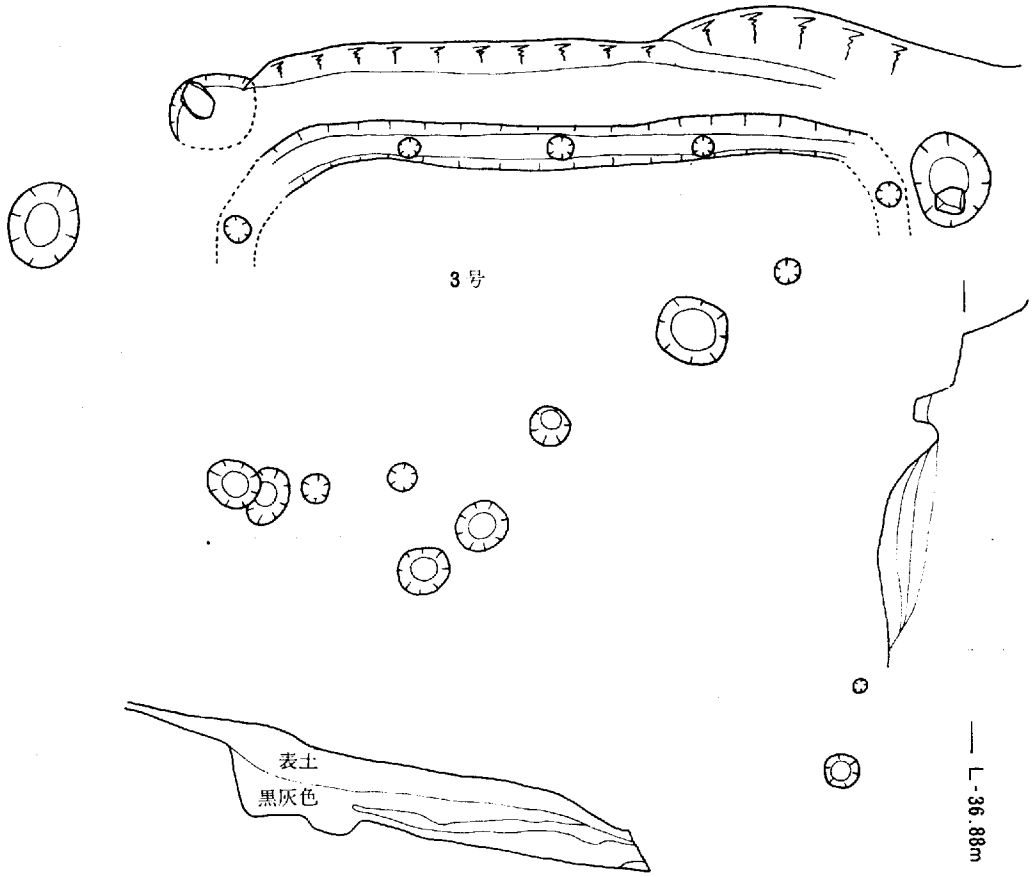
この住居址は東西トレンチの調査中に検出された住居址である。8号住居址の上層に半分かかり，遺構の保存状態はよくなかった。

遺構の規模は長径3.8mあり，短径は不明であるが，ほぼ方形のプランを呈する住居址と考えられる。柱穴，周溝は検出されなかったが，床面のほぼ中央部に焼土帯がみられた。

なお，この住居址内より土師器の高杯が1個出土している。（第6図—(3)）。この住居址の築造時期は2号，6号，7号住居址内出土の土器と類似しているところから，5世紀後葉に築造されたものと推察される。　（松　本）

6 号 住 居 址（第8図）

この住居址は第1地点の中央部よりやや東に位置する。平面形は5.50×5.35mの方形である。現存する壁高は床面から5～8cmであり，幅5～8cm，深さ6～10cmの周溝が南壁と北壁側に部分的に残っている。床面北東部には土師器の高杯，壺形土器，小形丸底土器，須恵器の蓋が残っており，西側では焼土のブロックがみられたが，まだカマドは持っていなかったようである。



第7図　3　号　住　居　址　　0　1　2 m

出　土　遺　物（第９図）

土　　師　　器

高　　杯（第９図，(1)～(9)）

高杯は口縁部が直立もしくはやや内傾するものと（１～３），ゆるやかなカーブを形成するもの（４～６）の２種類に大別され，脚部の形態にも変化がみとめられる。口縁径は14～15cm，脚部端径は9.2～13cmの間にあり，器高は10～12cmである。いずれの高杯も杯部と脚部は別々につくられたものを接合しており，脚部の内側には「しぼり」の痕跡がみとめられた。器面はヘラ状のもので整形したもの，刷毛目調整のもの，刷毛目調整の後手指で消しているものの３種類がみられる。なお，胎土，焼成とも良好である。

壺　形　土　器（第９図，(10)，(11)）

２個出土した。(10)は器高が16.5cm，口縁径は10cm，胴部最大径は中位にあり丸底である。

器面は内外面とも刷毛目調整がなされている。胎土は精製粘土を使用しており，焼成も良好である。赤褐色。(11)も(10)とほぼ同様な製作であるが，内面をヘラで整形している。

小形丸底土器（第９図・(12)）

器高10cm，口縁径10cmを測る。口縁から頸部にかけては「く」の字状を呈し，ゆるやかなカーブで底部に至る。丸底である。胎土，焼成とも不良で，灰黒色を呈す。

須　恵　器　蓋（第９図(13)）

口縁径13cmを測る。天井部と体部の境に段をもち，位置は口縁端より2.5cmの高さにあり，口縁端部はやや平らにつくられている。

本住居址出土の土器からみてこの住居址は７号住居址より年代は降るが，５世紀末に営まれており年代幅がほとんどない拡張した住居址と思われる。　　（松　本）

７号住居址（第８号）

この住居址は６号住居址の下層から検出された。平面形は4.15m×3.85mの方形であり，壁高は床面から約20cm残り，幅５～８cm，深さ５～６cmの周溝がめぐっていた。床面西側には６号住居址と同じ位置に焼土を検出した。柱穴は不規則ではあるが，柱間1.85m×2.05mで４個認められ，４本柱であったと推定される住居址である。床面には土師器の高杯，甕の口縁部，須恵器の器台（杯部）が出土した。なお６号住居址と７号住居址の前後関係は７号住居址を埋めたことが層位的にも確認されており，完全な重複関係にあったことから同一家族の継続使用による拡張と考えられる。６号住居址の柱穴は７号住居址に使用されていた柱穴がそのまま利用されたと推定される。

出　土　遺　物（第10図）

土　　師　　器

高　　杯（第10図，(2)～(4)）

３個体分出土した。(2)は完形である。口縁径12.5cm，脚部端径11cm，器高12cmを測る。口縁部はや

や外反している。杯部と脚部は別々につくられたものを接合しており，内側から粘土をつめていることがみとめられる。なお脚部には穴が３穴ある。(2)～(4)はいずれも胎土，焼成が悪い。

甕（第10図，(5)）

口縁径16㎝を測る。口縁部から頸部は「く」の字状を呈している。器面の内外は刷毛目調整がなされていた。

須　恵　器

器　　台（第10図，(1)）

杯部が出土した。口縁径42㎝あり，その他は不明である。体部は５段に分かれ，上から２段目に波状文（７本）が２つみられた。

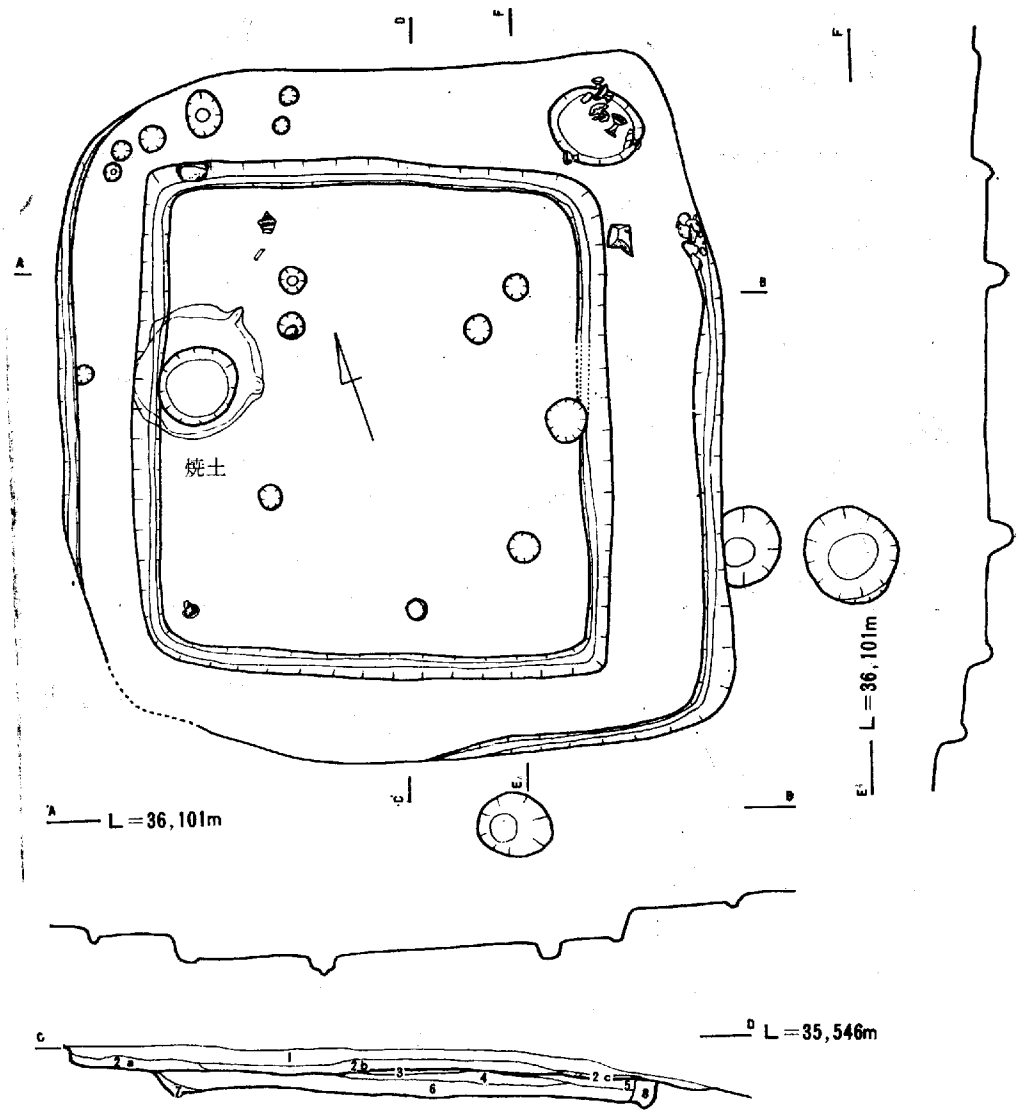
この７号住居址は６号住居址よりも古く，５世紀末頃に営まれたと推定される。　（松　本）

８（９・10）号住居址（第11図）

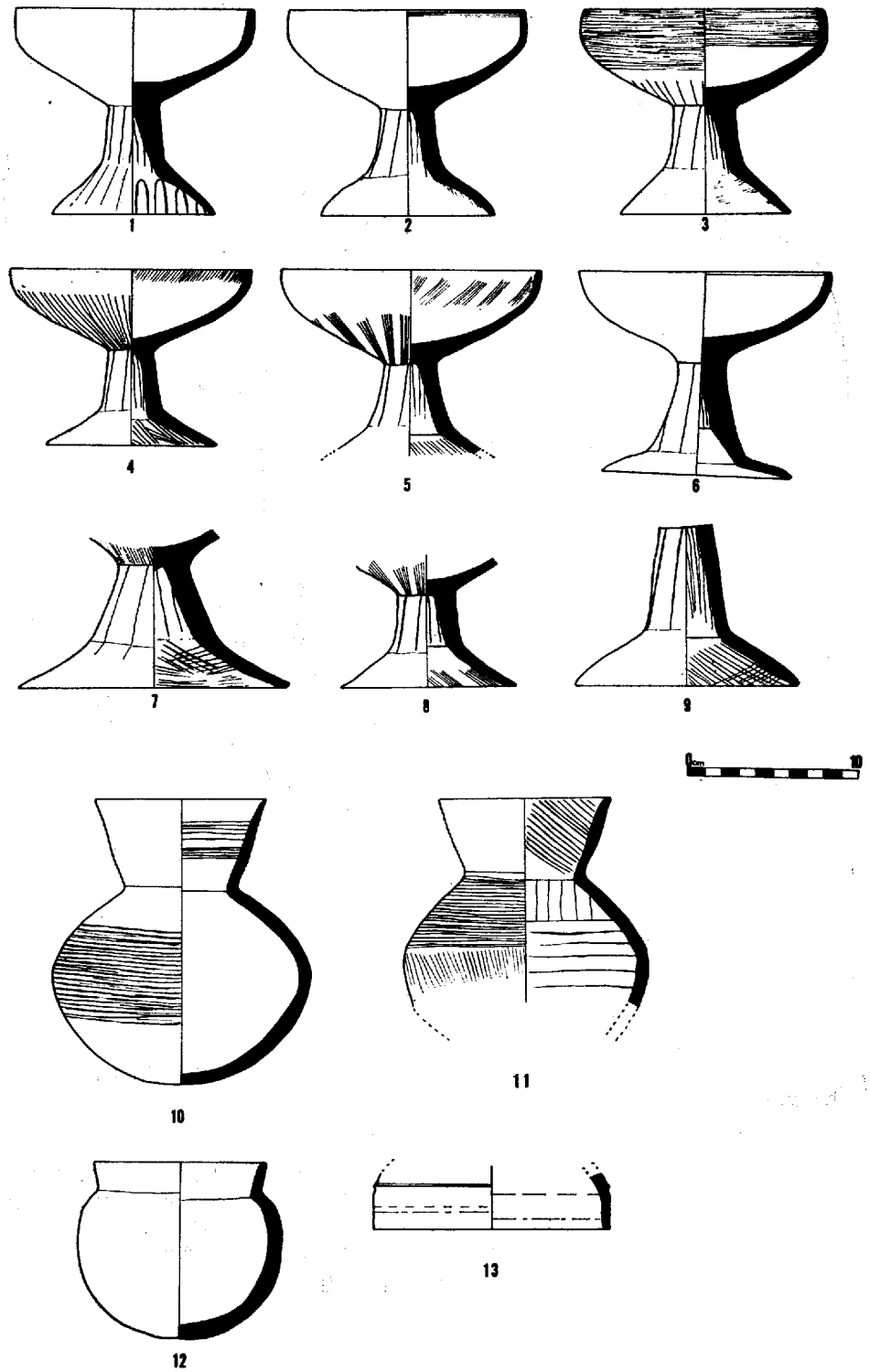
８号住居址はほぼ完全な形で残り，９号・10号住居址は周溝の痕跡だけを残す。主格の１・11・19号住居址群の存在する谷底部分の一段高い傾斜中腹に位置する住居址で，弥生期の最も代表的規模の大きさと考えられる。楕円形を呈し，南北方向に径5.0ｍ，東西方向推定4.5ｍのプランをもつ。主柱は４本柱で，中央には炭灰が流入したピットが存在する。ピットの横には，炭質のシミ込んだ炉跡と考えられる痕跡がある。４本柱は規則的に配列し，南北方向に2.3ｍ，東西方向に2.1ｍを測る。柱の深さは，床面より約0.3ｍ～0.35ｍである。中央ピットの径は0.6ｍ～0.7ｍを測り，深さは0.1～0.15ｍで，黒褐色の炭を含んだ灰土が流入している。周溝の現存値は，巾0.3～0.35ｍを測る。特記すべき事は，周溝内に径0.1～0.15ｍの杭状の柱穴が３ヶ所検出されたことである。住居址上屋構築上注目すべきものと考えられる。８号住居址の0.6ｍ傾斜上方に９号住居址が，2.2ｍ上方には10号住居址が存在し，巾0.3ｍの周溝が約２ｍ余残存している。

出　土　遺　物（第12図）

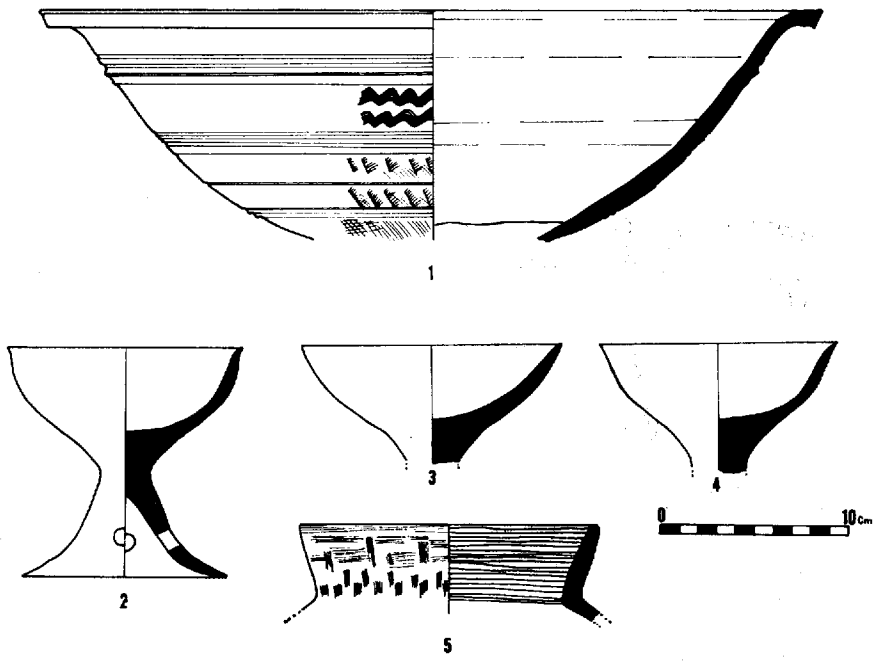
８号住居址からは，弥生後期と推定される土器細片が若干出土している。その他には，10号住居址の周溝および床面とみられる処にかなりの量の遺物が出土している。図12はその出土遺物である。器台（図12―１～３）はいずれも，焼成胎土とも良好で色調は黄褐色を呈している。凹線文もしっかりしていて，時期は中期終末期に比定されうる。石庖丁（図12―６）は，一部破損しているが，しっかりした２つの穿孔があり，全面磨製でとくに刃部と背部にはていねいな磨きが行なわれている。第１地点の住居址出土の全体の遺物をみると，この10号住居址出土遺物だけが，一時期古く，前時期の残存と推定される。　（新　東）


焼土
L=36,101m
L=36,101m
L=35,546m
1．黒色土
2a．黄黒色土
2b．〃
2c．黄色土
3．黒色土
4．黄色土
5．黄黒色土
6．黒色土
7．青黄色土
8．暗黒色土
0
1
2M

第8図　6　号，7　号　住　居　址



第9図　6　号　住　居　址　出　土　遺　物



第10図　7　号　住　居　址　出　土　遺　物

11号（15・16号）住居址（第13図）

この住居址は，第1地点の中でも比較的によく検出できた。1号住居址に接しており，1号住居址よりやや奥に位置している。長径は4*m*50*cm*あり，不整形な部分があるがほぼ円形の竪穴住居址である。精査の段階で上面に，15号，16号住居址をわずかながら確認した。

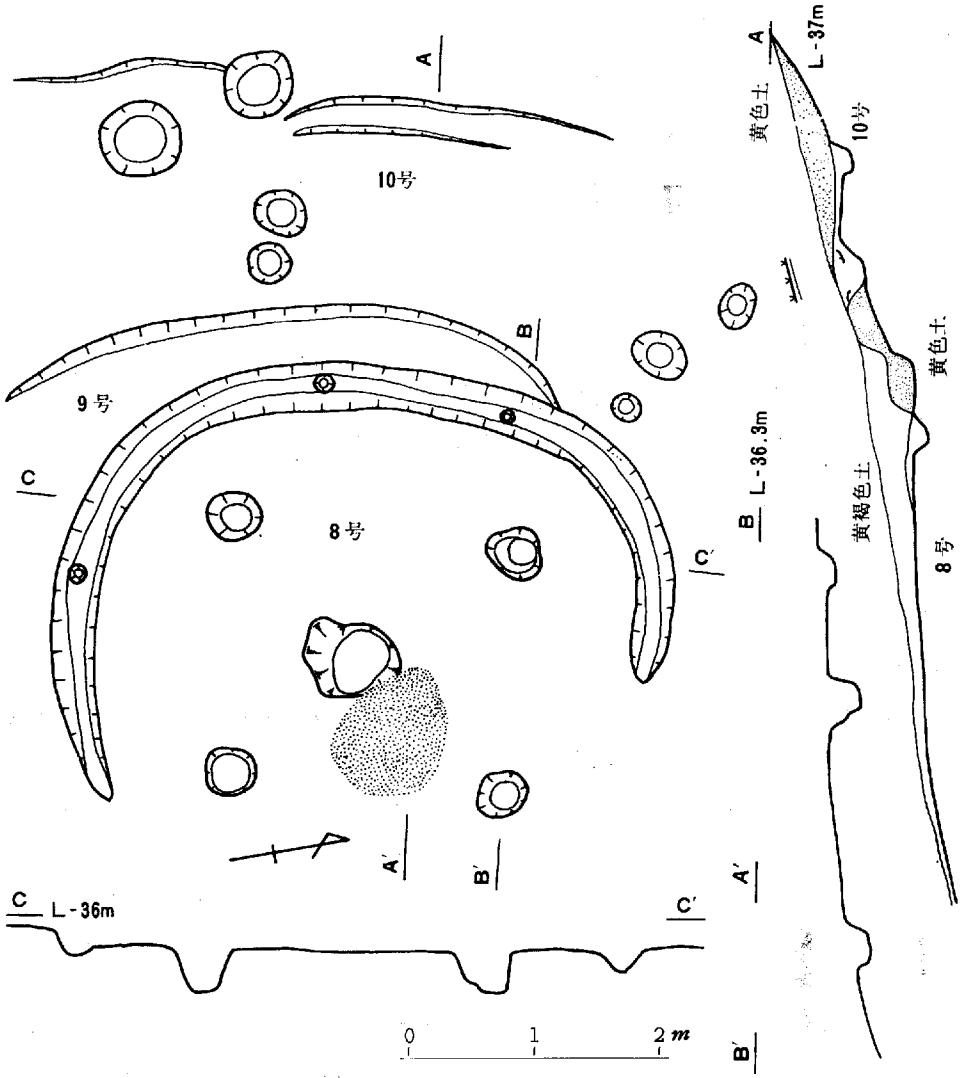
この住居址は山の傾斜面を深く掘りこんでおり，床面から掘りこみ面まで50*cm*ある。また，1号住居址にもみられるように外周溝を検出した。

幅，50*cm*，深さ，20*cm*ある。床面を検出する段階で上面での住居址の床面が炭と黄色粘土を互層にして張床状になっていた。特に中央北よりでは，炭，焼土帯が多くみられ炉跡と思われる。柱穴は，11号，15号，16号の住居址にするものが重複して検出し，計30個確認した。

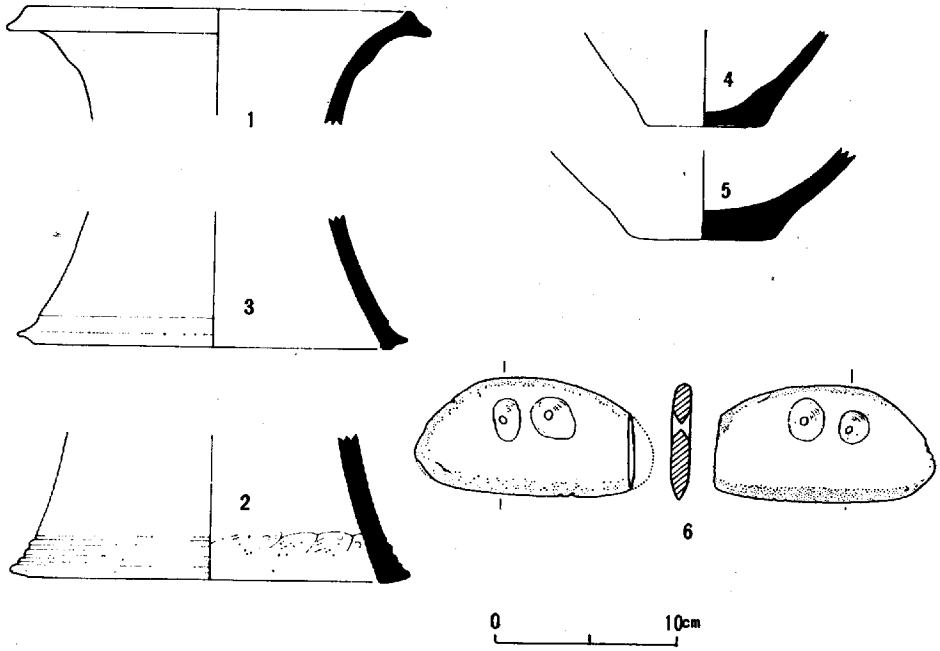
11号，15号住居址の中央では，幅約50～60*cm*，深さ60*cm*のピットがある。住居址に，ともなう柱穴は四本柱と思われ，ほぼ2*m*で配列して計測できる。出土遺物は，すくなくわずか周溝内で出土した。この住居址の時期については周溝内より出土した土器片からみると弥生後期中頃と思われる。

出　土　遺　物（第14図）

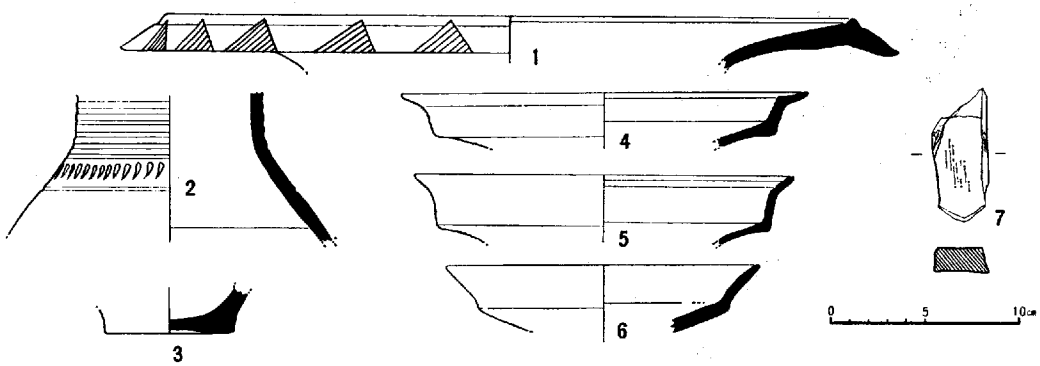
(1)は，器台の口縁である。口縁部はいちぢるしく外反し，肥厚し下方にはり出しており，その外面に鋸歯文がある。(2)は，長頸壺の頸部から胴部にかけてノの字状の模様がある。(3)は壺の底部である。高杯（4・5・6）は，杯の部分のみであり，端部はひらたくはり出すもの(4)と，斜め方向にはり出し浅い凹線がみられるもの(5)と，斜め上方にのび端部は丸くおさめられているもの(6)である。(7)は，4面に使用痕のある砥石である。　（枝　川）



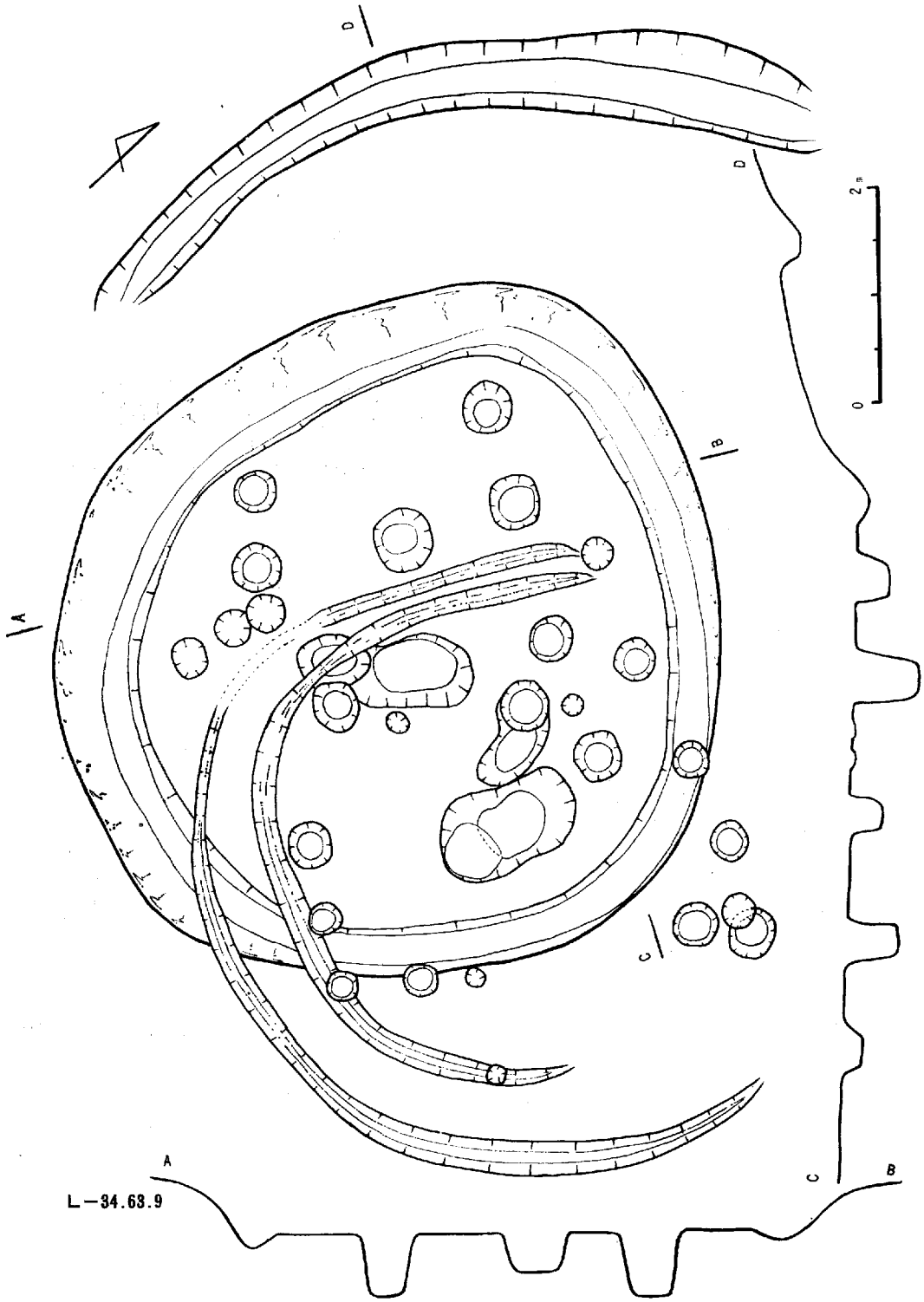
第11図　8号（9，10号）住居址



第12図　9，10 号 住 居 址 出 土 遺 物



第14図　11　号　住　居　址　出　土　遺　物

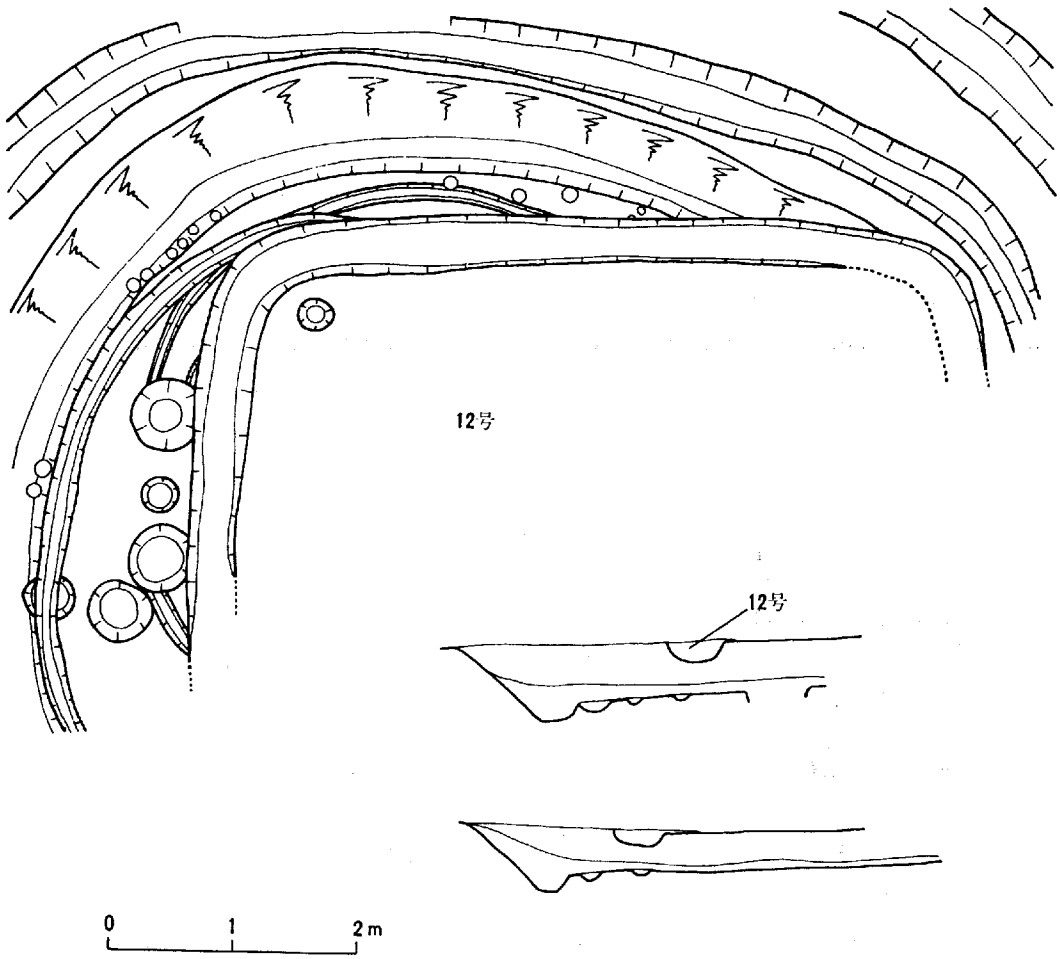


第13図　11　号　（15,　16号）　住　居　址

12 号 住 居 址（第15図）

1号住居址の流入土上面に検出されたものである。西側の周溝を残し，一辺が約6.5*m*の方形の住居址と推定される。周溝は巾0.4*m*，深さ0.15*m*を測る。この周溝の西方内側に，径0.3*m*，深さ0.15*m*の柱穴が検出されている。周溝と柱穴内の流入土は黒灰色を呈している。周溝に混入する土器は土師器と推定される細片であるが，時期の明確なものは存在しない。他の古墳時代の住居址との配置関係や，流入土質の類似点をもってここでは古墳時代の住居址と報告する。

（新　東）



第15図　12　号　住　居　址

13 号 住 居 址

1号住居址に含まれており，一号住居址床面より上面で検出した。時期は切合い関係から推定すると1号住居址より新らしいものである。　（松　本）

14 号 住 居 址（第16図）

この住居址は第１地点の中央部東側斜面にあり，わずか１／４コーナーしか残っていないため，その規模は不明であるが平面形は方形である。現存する壁高は床面から約10㎝あり，幅20～25㎝，深さ10㎝の周溝がめぐり，この中より紡錘車，杯身，甕の破片が出土した。南側の床面には30×40㎝の広がりで焼土帯がみとめられ，コーナーの周溝上より平らな礎石（15×15㎝）が置かれていた。住居の構造は柱間が210×150㎝の４本柱と推定される。なお，本住居址の床面において木炭が出土したことから火災にあった後廃絶したものであろう。

出 土 遺 物（第17図）

須　恵　器

杯　　身（第17図(1)）

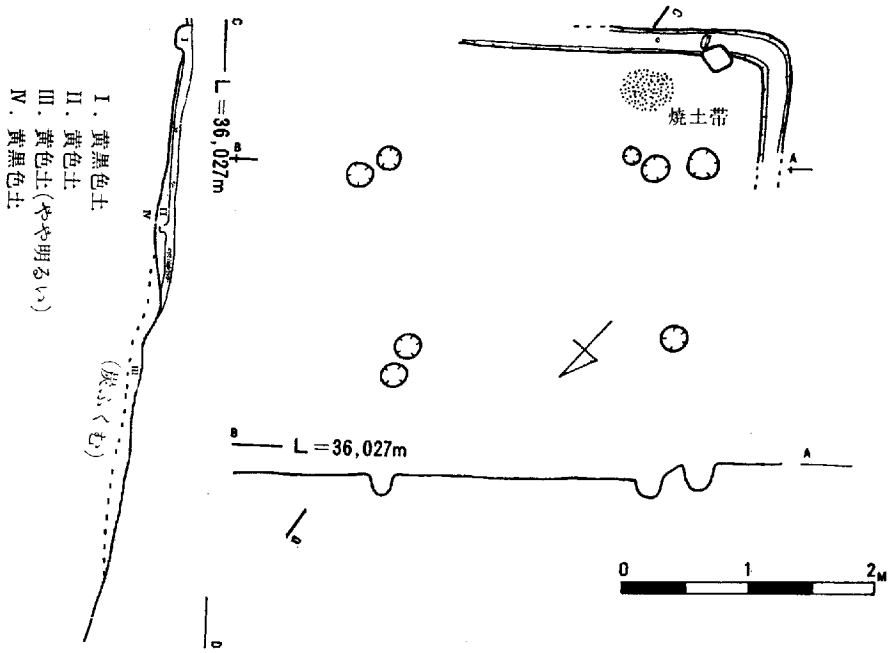
口縁径11㎝，器高5.3㎝を測る。タチアガリは，2.5㎝と高く，やや内傾している。口縁端部の内側には段を有す。底部外面の２／３はヘラ削りで仕上げている。

紡　錘　車（第17図(3)）

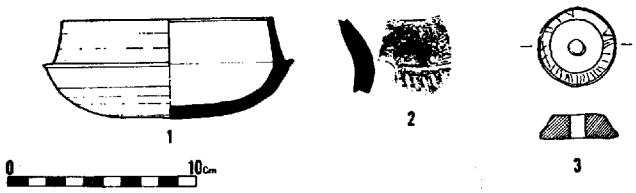
直径４㎝，高さ1.3㎝を測る。表面には単純な施文がなされている。

この住居址は２号住居址，７号住居址と同様に５世紀末に営まれたものと考えられる。

（松　本）



第16図　14　号　住　居　址



第17図　14号住居址出土遺物

17号建物址（第18図）

この建物は14号住居址の下層及び南西に広がって検出された。東側の地山をカットして築造された建物址で，その規模は1辺9.5mを確認でき，平面形が長方形をなす大形の建物と推定される。壁高は床面より約15～20cmであり，幅15～20cm，流さ5～7cmの周溝をめぐらしており，東コーナーよりに130×100cmの広がりで焼土が認められた。本住居址に確実に伴なうと考えられる柱穴は11個と考えられ，その構造は，倉庫址と推定される。床面からは壺，高杯，カメなどが出土した。また，柱穴の1つより器台が出土した。

出土遺物（第19図，第20図）

壺（第19図(1)）

壺の口縁部は1点しか出土していない。口縁径12cmを測る。口縁部をやや外反する「く」の字状を呈し，表面には櫛状工具にて浅い沈線が4本施文されている。短頸壺である。

高　　杯（第19図(2)～(5)）

各種の形態の脚部が出土している。(4)のみ若干時間的に新しいものである。

台付鉢形土器（第19図(7)～(9)，第20図(23)）

脚部と鉢の上部が出土した。第20図(23)は胴部が「く」の字状を呈し，表面は，ヘラによる「く」の施文がなされている。脚部は第19図(9)のごとく竹管文によって三列もしくは四列に施文されていた。

ボール状土器（第19図(10)）

口縁径20cm，底部は丸底になると推定される土器である。表面の剝離が著るしい。

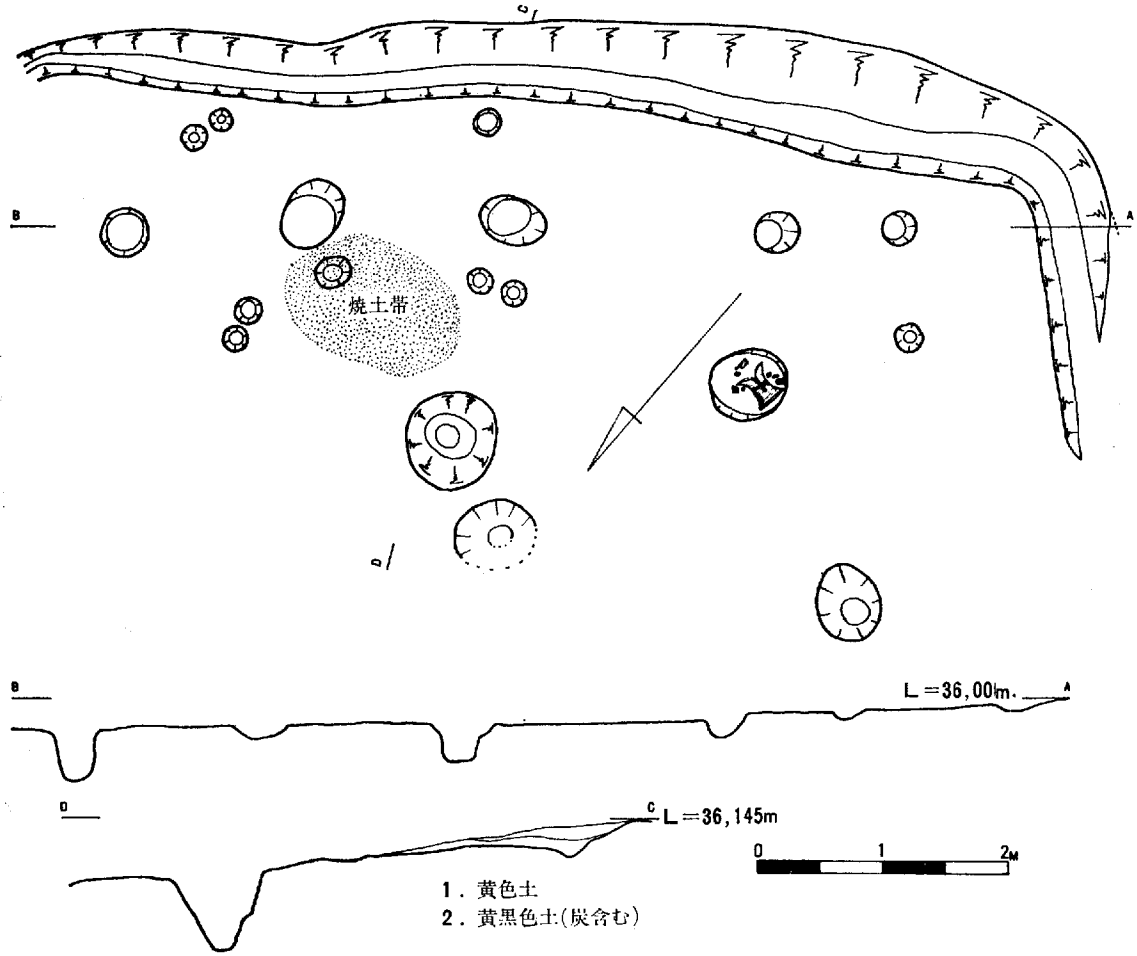
甕（第19図(12)～(18)，第19・20図(14)～(22)，(24)～(38)

口縁径は9～22cmの範囲内にあり，12～14cm前後が最も多い。全体に口縁端部は内傾した立ち上がりをもち，下部も口縁より外に垂れ下がるものが多い。表面は刷毛目調整，内面はヘラ削り調整がなされているものが多い。

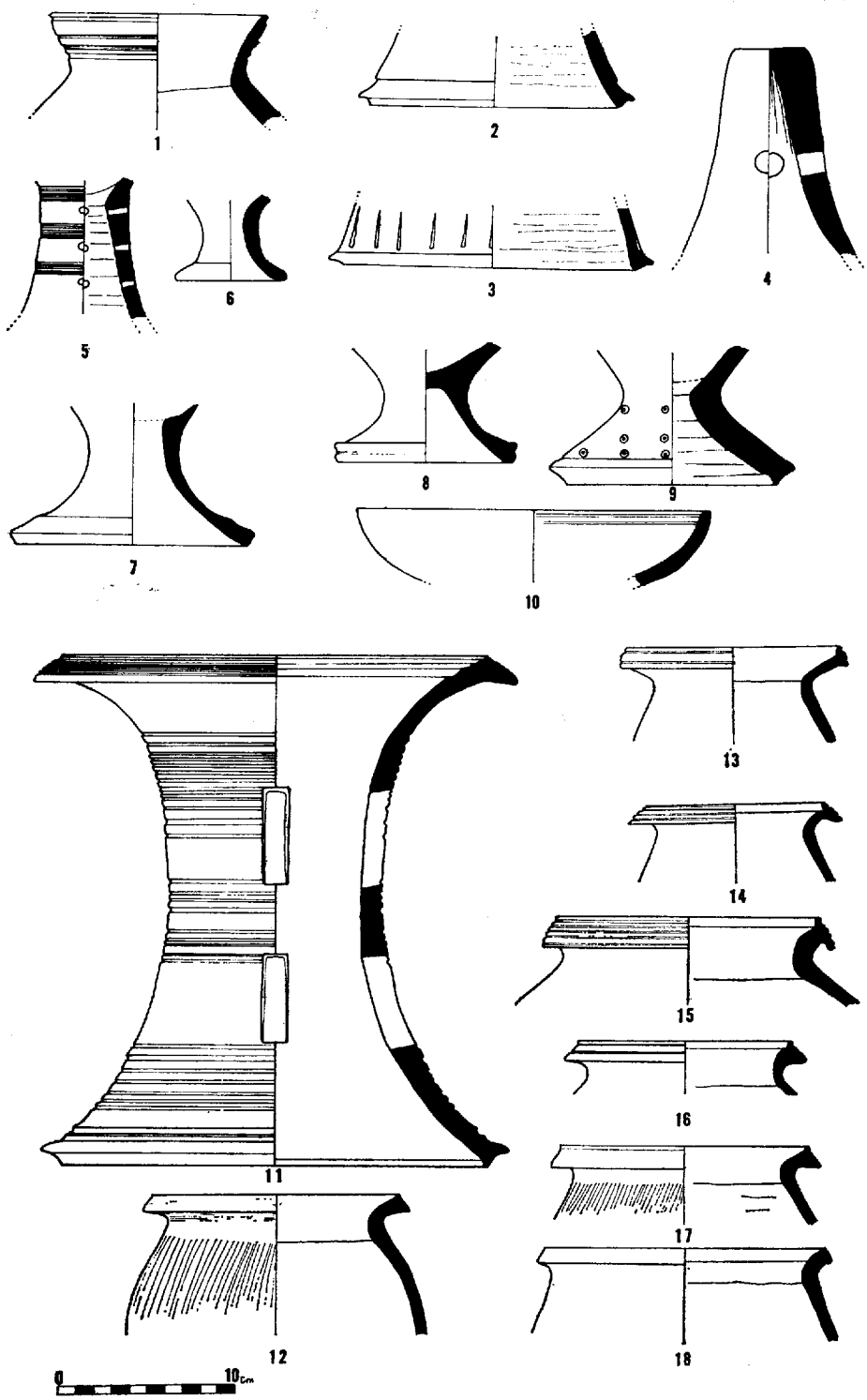
器　　台（第19図(11)）

柱穴の中に横になった状態で出土した。口縁径24cm，器高30cmの大形器台である。口縁外部には凹線文を施文し，胴部は凸線文群で3つに大別されている。そして，長方形の透し孔が上下2段に合計6個つけられている。

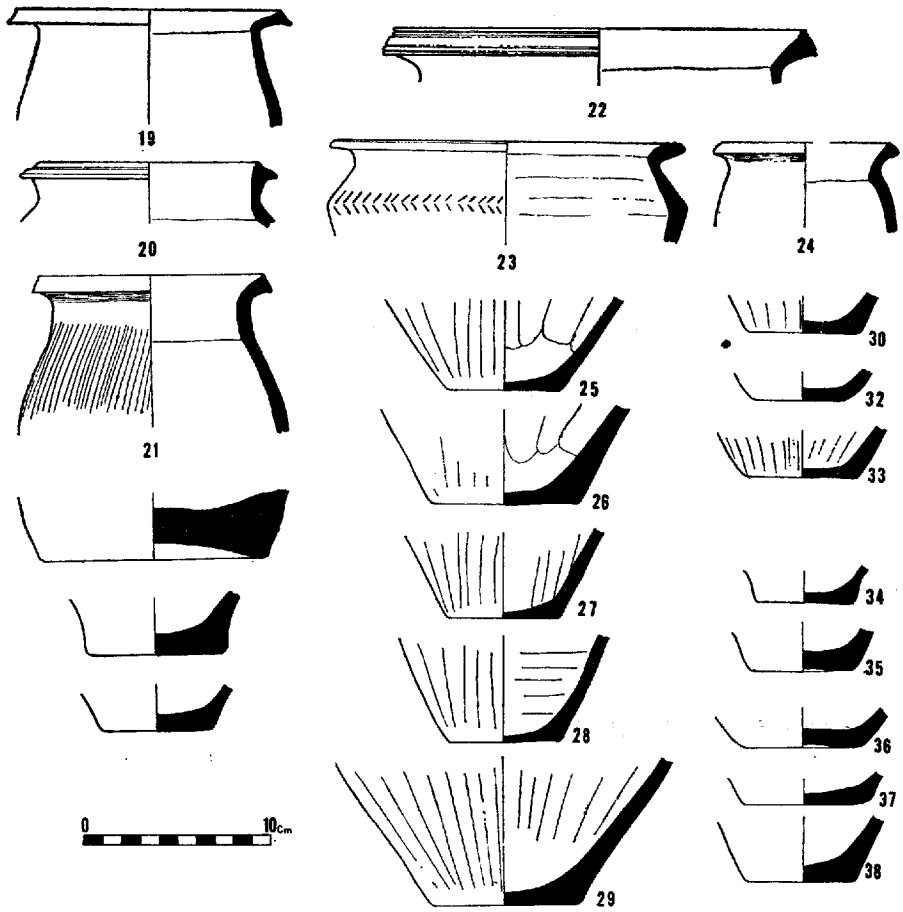
この17号建物址は弥生時代後期前葉に編年されるものである。　　（松　本）



第18図　17　号　建　物　址



第19図　17　号　建　物　址　出　土　遺　物



第20図　17 号 建 物 址 出 土 遺 物

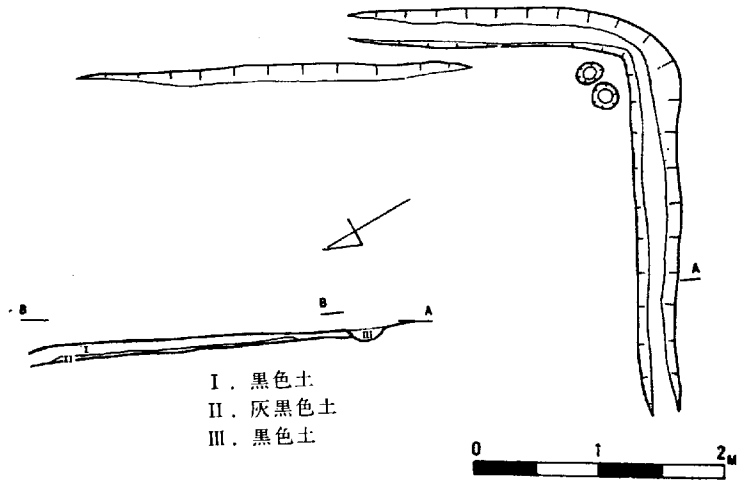
18 号 住 居 址（第21図）

この住居址は第１地点のほぼ中央部の谷間に位置するところから検出された。弥生時代の包含層上部を切り込んで作られた住居址で，その保存状態は極めて悪るく，わずかに１辺のコーナーしか検出されなかった。このコーナーからみて平面形は方形をなすものと思われる。

現存する壁高は床面より２～３㎝，幅５～８㎝，深さ５～10㎝の周溝が残っているだけであった。なお，床面には焼土，柱穴，土器等は検出できなかったが，弥生期（後期）の包含層を切り込んでつくられたものであることから，古墳期の住居址であることが推察される。　　（松　本）

19 号 住 居 址（22図）

第１地点の北東部に位置する。平面形は4.70×4.80ｍの隅円方形の住居址である。壁高は床面よりほぼ垂直に約50㎝あり，幅10～15㎝，深さ５～10㎝の周溝がめぐっており，中央に灰の入ったピット40×60㎝の焼土帯がみとめられた。南東部には1.05×1.25ｍ，深さ（床面より）60㎝の貯蔵穴が周溝をきるような状態で検出された。住居址に伴なう柱穴は３個まで検出できたが，恐らく柱間2.30×



第21図　18　号　住　居　址

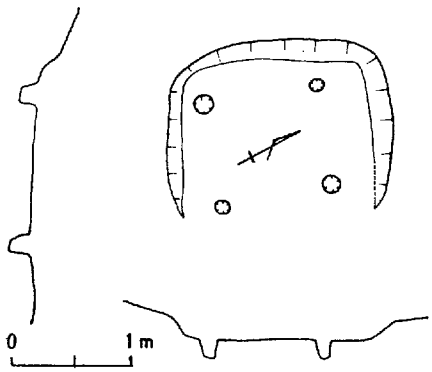
2.30mの4本柱をもつ住居址と推定される。なお住居址の外側には幅50～70cm，深さ10cmの外周溝がめぐっており，外周構の内側には住居の構造の1部分もしくは外周溝に伴なう柱穴（掘り方30～40cm，柱痕跡，10cm）が3本認められた。本住居址内からは土器の出土が少なく，とりわけ床面に土器が附着していないためその築造年代を明確にできないが，埋土内から弥生時代後期前葉の土器片が出土していることこら恐らくこの時代のものと思われる。　（松　本）

20 号 住 居 址（第22図）

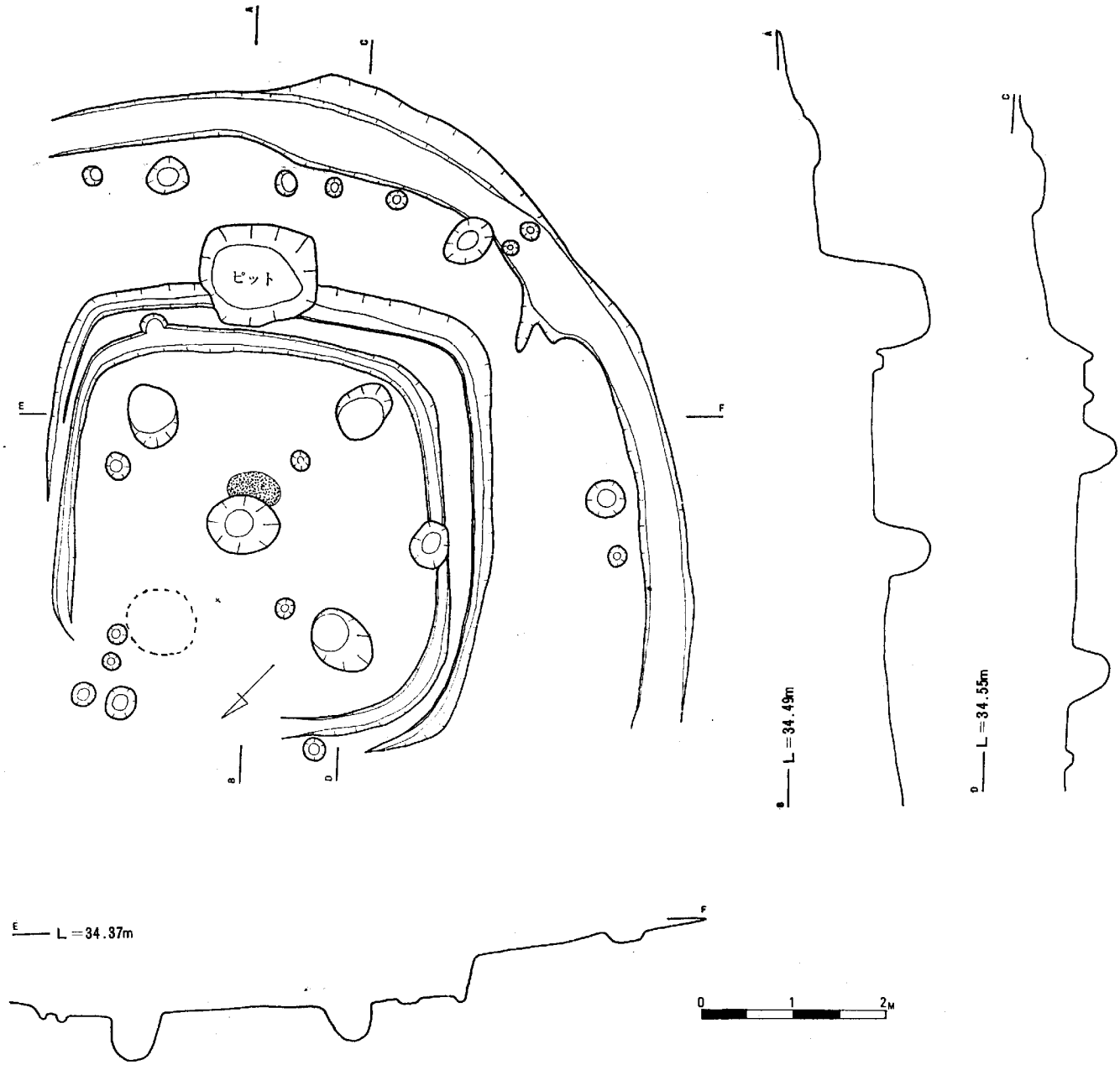
19号住居址の床面に周溝のみ検出された。平面形が4.40×4.00mの隅円方形の住居址である。この住居址は19号住居址と完全に重複しており。6号住居址と7号住居址の関係と同様に同一家族の継続使用による拡張が考えられ，第1次の生活面である。　（松　本）

小　竪　穴（第23図）

主格の谷底中央部の1，11，19号住居址群と，その上方傾斜中腹の3，8号住居址の丁度中間に位置する。ほぼ南北方向に1.8m，東西方向に約1.5mの方形のプランをもつ。竪穴の深さは，現存値で0.2mを計る。柱穴は4本存在し，その柱間は，南北方向に0.9m，東西方向に0.8mを測る。柱は，径0.1～0.15m，深さ約0.16mで，杭柱と推定される。周溝は存在しない。出土遺物には乏しく，弥生後期土器らしい細片が数個出土しているにすぎない。しかし，当時の住居址の中に，かような小規模な竪穴建物が，用途によって存在するという貴重な実例とみられる。　（新　東）



第23図　小　竪　穴



第22図　19　号，　20　号　住　居　址

3　第１地点Ｓ，Ｔ，Ｕトレンチについて（第24図）

Ｐ―５区において溝状の掘り込み遺構が検出され，さらに南側に連続することが予想されることから，標高40～44ｍの斜面にＳトレンチ（１×４ｍ），Ｔトレンチ（１×10ｍ），Ｕトレンチ（１×７ｍ）の３本を設定した。その結果，Ｓトレンチでは標高40.5ｍのところから掘り込んだ深さ20㎝，幅1.8ｍのＵ字状の溝状遺構が検出された。

Ｔトレンチでは標高42.20ｍから掘り込んだ深さ40㎝，幅3.5ｍのＵ字状の溝状遺構が検出された。

Ｕトレンチでは標高40.9ｍのところから掘り込んだ深さ40㎝，幅180㎝の掘り込みと，その下にさらに深さ60㎝，幅100㎝の掘り込みがみられ，階段状の２段に掘り込まれた遺構が検出された。

この３本のトレンチから検出された溝状遺構は深さ，幅が一定ではないが連続していると考えられ，標高40～42ｍの北西斜面にあるこの溝状遺構はこの谷間に形成された集落を囲むように存在したものと推定される。すなわち，Ｄ―５区，Ｅ―７区においても同様なＵ字状遺構が検出されていることから，第１地点の弥生時代の集落はこの溝状遺構に囲まれていたといえよう。

なお，Ｓ，Ｔ，Ｕトレンチ内において弥生時代後期の土器片が出土している。　（松　本）

4　第１地点出土の弥生式土器（第25図）

高　　杯　(1)

ピット－４より出土した。器高22.5㎝，口縁径25㎝，脚部端径14㎝を測る。口縁上端部には４本の沈線がみとめられ，脚部には櫛による横描き施文が７段みとめられた。この高杯は弥生時代後期のものである。

台付長頸壺　(2)

頸部から上が欠損しているが，現存する器高は14.4㎝，最大胴部径16.7㎝，脚部端径9.4㎝を測る。胴部中央部には直径８㎜のリボン２個で１対となり５対みとめられた。器壁外面はヘラで研磨されており，内面に指によるかき上げ調整がなされていた。第２群土器溜より出土した。弥生時代後期のものである。

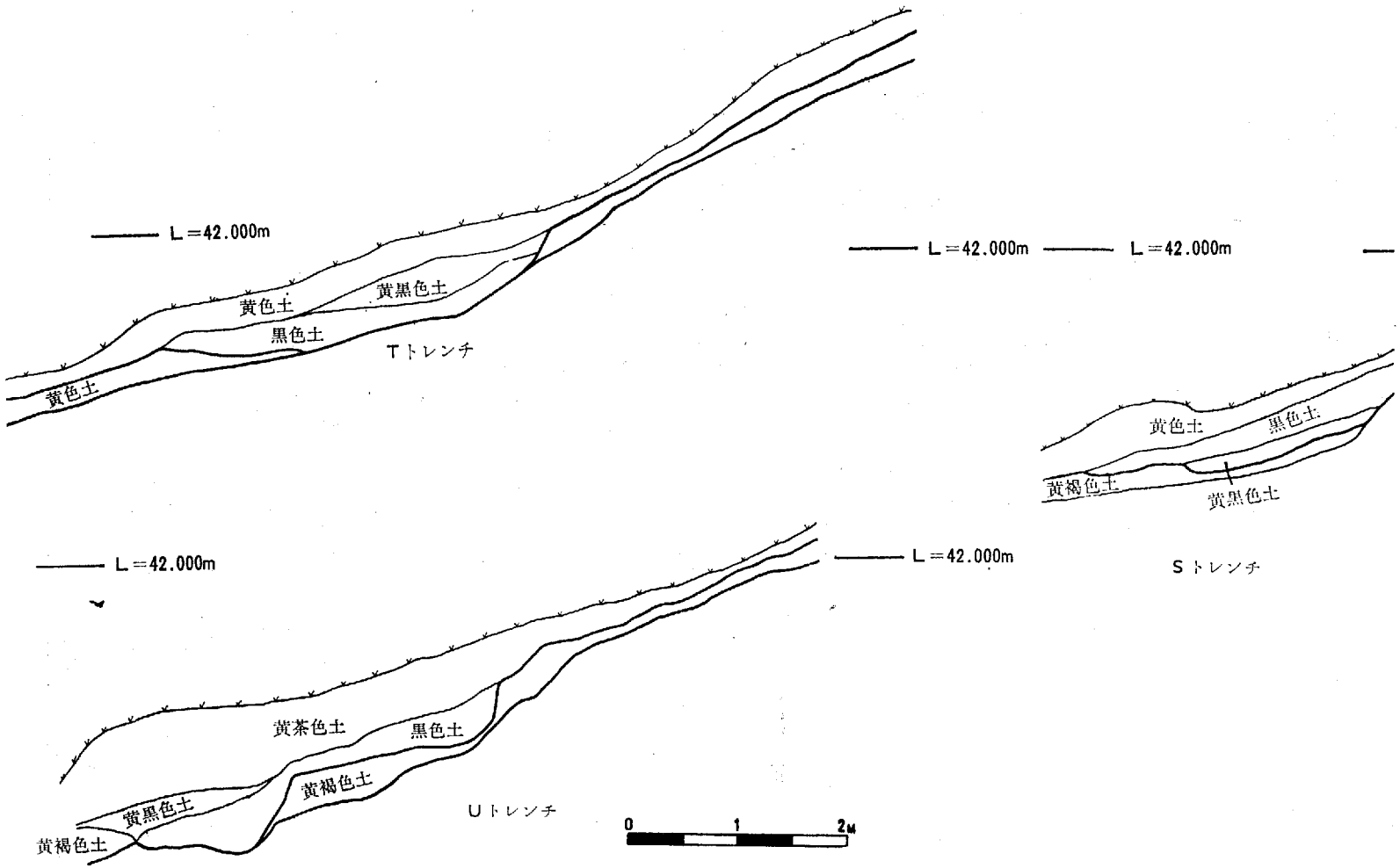
特殊長頸壺　(3)

第２群土器溜出土した。口縁部から頸部にかけて欠損しており，現存する器高は８㎝，最大胴部径は20㎝を測る。胴部には断面が三角形の貼りつけ突帯が４本あり，４区画に区切られている。このうち，中央にある２区画にはヘラ描きによる鋸歯文の文様帯がみられる。なお器面はヘラによる調整がなされている。弥生時代後期のものである。　（松　本）

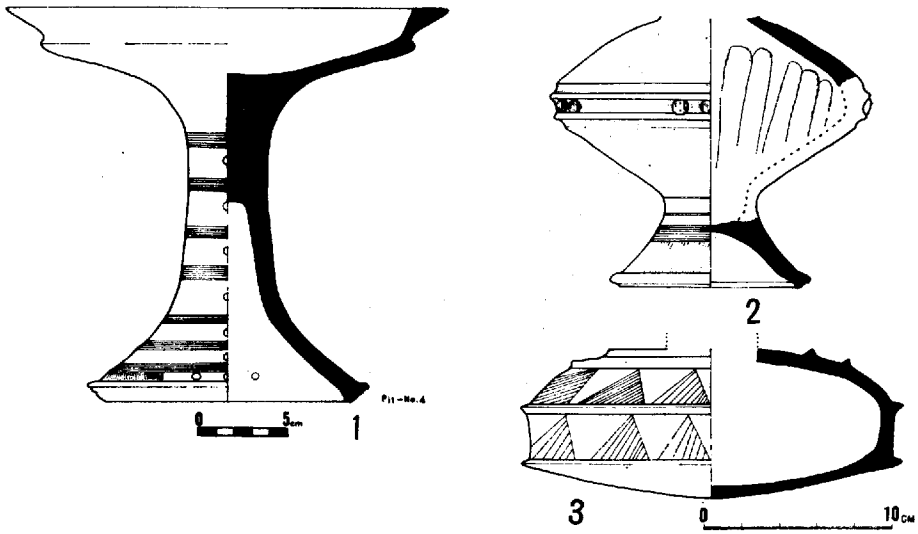
5　第１地点出土の土師器（第26図，第１表）

第１地点は弥生時代と古墳時代の集落が複合する遺跡であるが，遺構に伴わない土師器が若干出土している。主なものとして，壺，甕，小形丸底土器，高杯（脚部）が出土している。

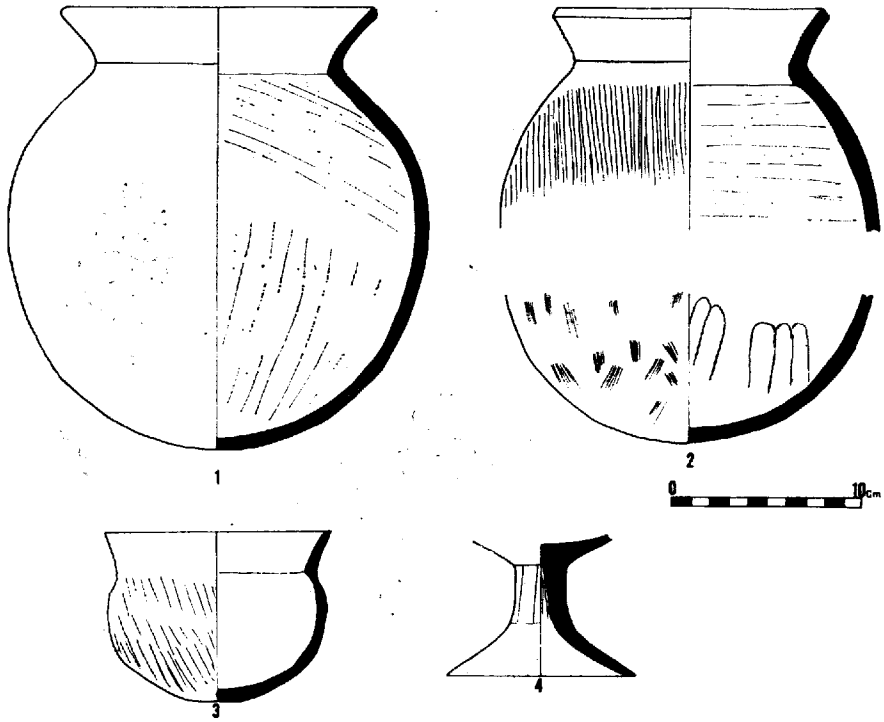
（松　本）



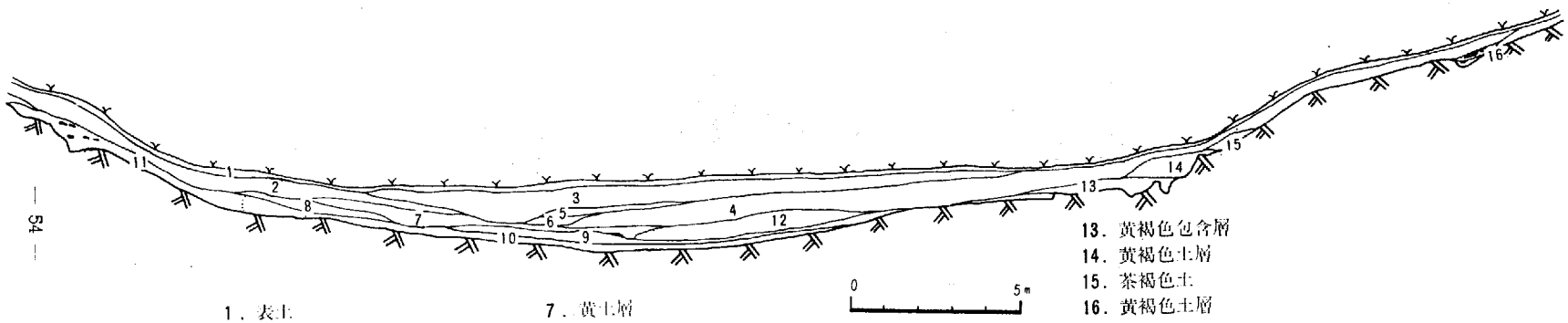
第24図　第１地点Ｓ，Ｔ，Ｕトレンチ断面図



第25図　第 1 地点出土の弥生式土器



第26図　第 1 地点出土の土師器



1．表土
2．黄色土尽
3．黄色砂質土(池の堀り上げ土)
4．黄色粘土
5．黄灰色粘質土
6．黄灰色土
7．黄土層
8．茶黄色土層
9．黄褐色包含層
10．黒色有機質土
11．黄褐色包含層
12．黄灰褐色土層
13．黄褐色包含層
14．黄褐色土層
15．茶褐色土
16．黄褐色土層

第27図　第 1 地点東西トレンチ断面図

第1表　第1地点出土土師器一覧表　　（単位　cm）

図版番号	種類	形態	器高	口縁径	胴径	胎土
第23図1	土師器	甕形土器	23.6	16.4	22.2	良
〃 2	〃	甕形土器	(23.0)	14.0	20.0	〃
〃 3	〃	小形丸底土器	9.0	12.0	11.5	悪い
〃 4	〃	高杯	不明	不明	不明	普通

図版番号	焼成	色調	出土地区	備考
第23図1	良	茶褐色	第1包含層	内外面ともヘラで調整している。（4世紀代のもの）
〃 2	〃	茶黒色	包含層	外面スス附着，（5世紀代のもの）
〃 3	不良	赤褐色	〃	外面スス附着，（5世紀末～6世紀前葉）
〃 4	普通	〃	F－3区土器溜り	（5世紀末～6世紀初頭）

（　）推定測値

6　土　器　溜

住居址群の存在する位置より，最も谷頭の傾斜地に多量の土器の推積が検出された。一見，土器保管倉庫を考えさせる量の土器群であるが，建物を推定しうる柱穴その他，遺構は検出されていない。土器の間の流入土の中に，焼土が若干混入している部分があった。土器は比較的完形に復元されるものがみられる。器台（第28・29図）をとりあげてみると，施文模様は若干異なる部分があるが，同じ器形を呈し，同時期のものと推定される。口縁部径は24cmから30cm，底部径24cmから28cmを測る。高さは24cmから28cmである。胴部中央に長方形の孔か，あるいは，円孔をもち，上下に数条の凹線を施す。　（新　東）

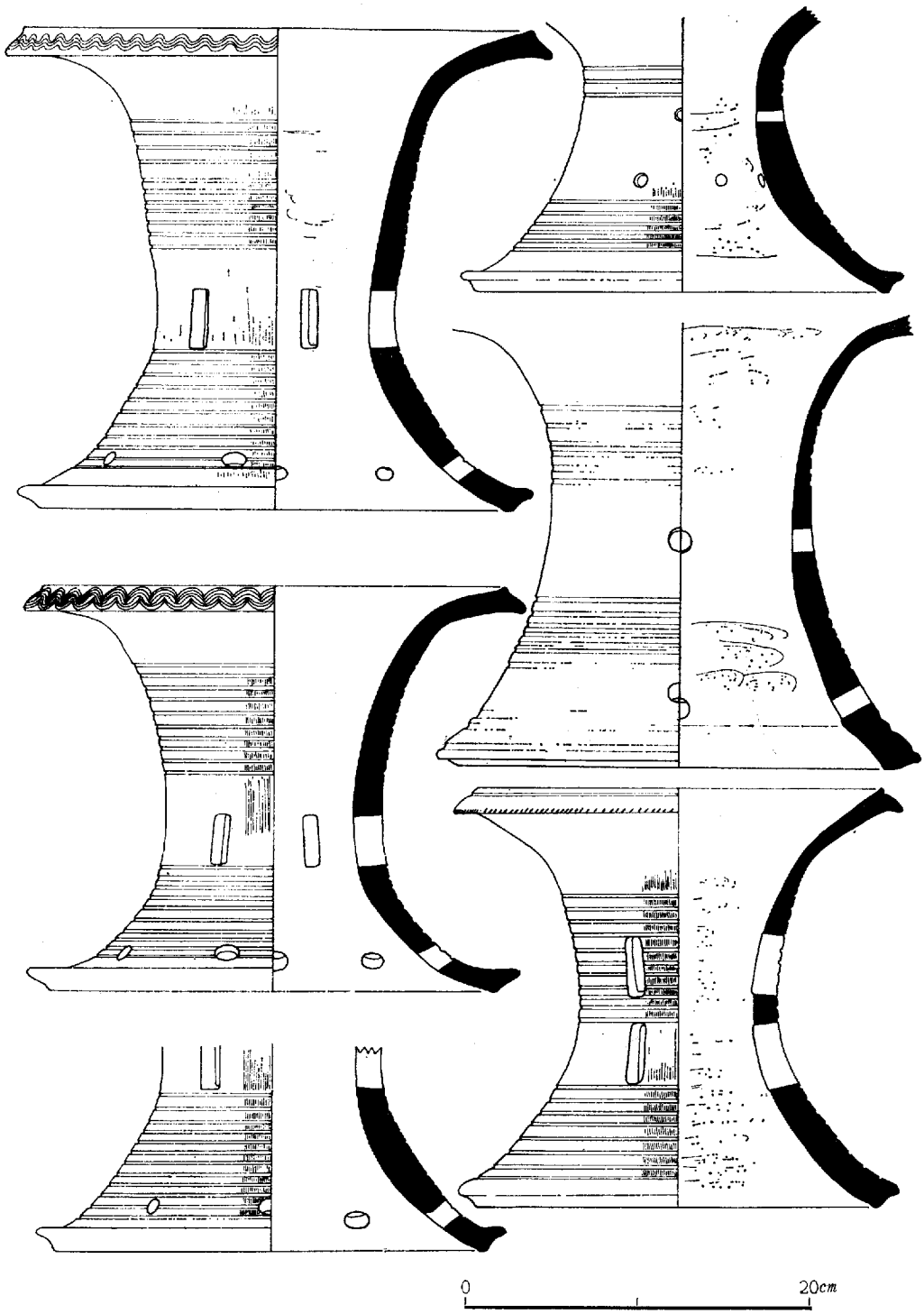
7　ま　と　め

住居址について

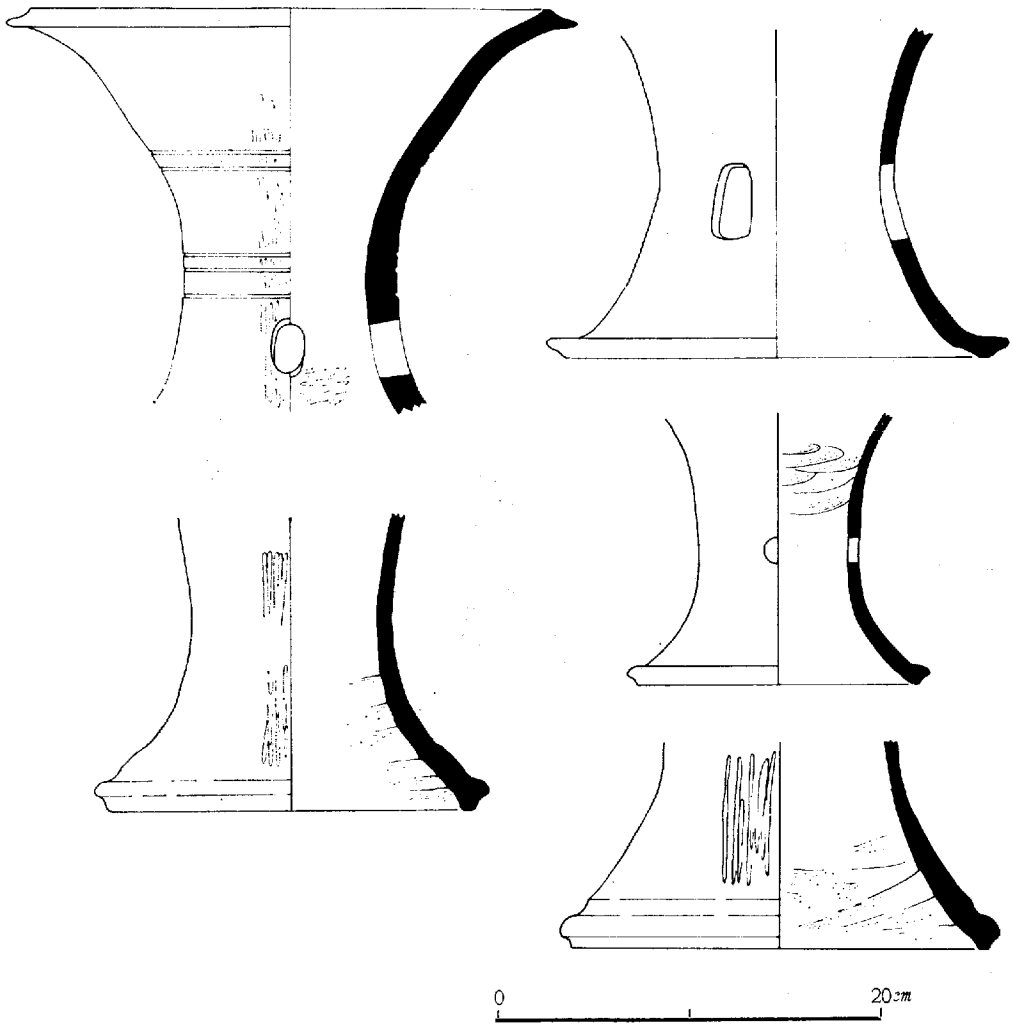
従来住居址の立地は，緩丘陵頂部または緩傾斜地が通常とみられている。しかし，この地点の立地は，面積1,000㎡弱の谷底を利用して，住居址群を形成していた。この住居址群は，東南部を一部用池によって消滅している。現存した住居址群の範囲で住居構成を考えてみよう。まず，住居木溜址の築かれた時期は2期に分けられる。弥生後期の住居址7（もしくは8）ケ所（建直しは考えず)。古墳期（五世紀後半）のものが6（もしくは7）ケ所所在する計算になる。その他に，弥生中期末と考えられる土器の出土する周溝（10号）が一ケ所残存していたことから，この谷底での生活の上限は，弥生中期末からということになる。2時期（弥生後期と古墳期）以外の遺構及び遺物は，弥生中期末の10号を除いて他には出土していない。よって弥生後期と古墳期の住居址群についてまとめてみることにする。まず弥生後期の住居址であるが，溜池によって破損された部分を除いて考えると，この単位集落を取り囲む傾斜中腹に築かれた外周施設内には，7（もしくは8）ケ所の住居址が存在している

。うち主格級の三基が谷底中心部に築かれ（1・11・19号），他のものはそれを取り巻くように外側傾斜地に位置している。3号，17号は，周溝のみが存在し，全体の規模は明らかでないが，長方形に検出されることから倉庫状の建物とも考えられる。また，11号と8号の間には，小屋的規模の小竪穴が存在し，全体の住居址の配置をみると，一単位集落の住居址構成がみられ得る。つぎに住居址の構造上の問題に入ると，主格級の1・11・19号はいずれも住居址の外周に雨落用の溝をめぐらしている。従来は，住居址の外側の附帯遺構の検出は少ない。たとえば登呂遺跡のように湿地に立地する平地住居の場合の様に，住居址の壁を作る土を取るために掘り下げた跡が溝になって検出された場合，また，住居址の外に検出された柱穴を住居址の上屋構造建築と結びつける場合などがみられる。この遺跡で発見された住居址外周の溝は，明らかにそれぞれの住居址に附設され，立地的にも必要欠くべからざるものと考えられる。それでは，他の周辺傾斜地の住居址はその施設はどうかと考えると，地理的にも，これらの住居址と同様傾斜地建築のため，傾斜地流水の住居内流入を防ぎ，再落水の流入をも防ぐ設備が存在しなければならない。ただ傾斜度が高い所に構築されたため，後の浸蝕によって削平されたことが住居址内部の残存状態からうかがう事ができる。住居址上屋構造を考える資料として注目すべきものと考えられる。

次に古墳期の住居址であるが，6基の住居址が検出されている。2号・6号・7号・14号には図示した須恵器を伴っている。また，2号・5号・6号・7号は土師器を出土し，特に6・7号は多量の出土をみた。住居址はいづれも方形を呈し，炉跡付近と考えられる焼土塊は壁に近づいているが，まだカマドの出現はみない。また各住居址は，比較的に辺と辺が平行する状態に規律的に並び，団地的に配置されている点が注目される。　（新　東）



第28図　土器溜出土弥生式器台



第29図　土器溜出土弥生式器台

第3章　第　2　地　点

1　立　　地

第１地点の上手，丘陵鞍部の便木山古墳群より南側方向に延びた丘陵の先端に位置し，第３地点を見下すところにあたる。現在，丘陵部は，果樹園が営なまれ，丘陵と丘陵にはさまれた谷底は水田が営まれている。第２地点遺跡は，この丘陵頂上の先端部に発見されたが，丘陵上の周辺は，果樹園や畑地の開墾のため，破壊され，かろうじて残存したものである。谷底の第１地点，眼下の第３地点とも，同時期，あるいは関連する集落の範囲内のものと考えられるが，ここでは調査工程上区別して記載する。この第２地点は，幅員22mの住宅団地幹線道路のため，一部削平される計画だったので調査を行ったが，下記の遺構が存在したため，道路設計を変更し保存する事になった。　（新　東）

2　住　居　址

第２地点において住居址は，一部重複して，３基存在する。また，いずれの住居址も後世における開墾の破壊をうけ完全な形はみられない。

1 号 住 居 址（第30図）

北西から南西方向の２辺の壁，および周溝を残し，大形の隅円方形を呈したプランをもつ。住居址の床面までの深さは，約0,5mを測る。周溝は，幅0,25m，深さ0.11m程で，南西壁は２列検出され，改築が考えられる。柱痕跡は多数みられるが，深さ，位置からこの住居址に伴う主柱は，４本と考えられる。柱穴１は，径0.6m，深さ床面より0.9m，という大形のものも存在する。柱２は，径0.5m，深さ0.5m，柱３は，径0.45m，深さ0.8mを測り，柱４は，その位置すると考えられる処が，ピットによって破壊をうけ欠損している。柱１と柱２，柱１と柱３，いずれも柱間は，約3.1mを測る。出土遺物は，弥生後期の土器と推定される細片がみられた。　（新　東）

2・3号住居址

２号住居址は，１号住居址の南部分で，１号住居址を切断して造られた住居址である。一部の周溝と，２本の柱穴を検出し，他の部分は後世の破壊をうけている。変形の隅円方形で，径は約４m弱と推定される。柱間は２mである。この１号・２号住居址の西方には，無数の柱穴がみられる。住居址の改築がひんぱんにおこなわれたと考えられるが，まとまるものは存在しない。柱穴群の中に，巾0.1mほどの周溝が存在し，住居址の削平された跡を残している。これを，３号住居址と呼称する。

（新　東）

3　土　　壙（第３１図）

この地点では，３個の竪穴ピットが検出された。この土壙は，長径1.9mと，短径1.5mで，２m弱の深さを測る。床面には，４本の柱穴があり，壁の部分は袋状になっている。これらの柱穴は，第３

地点の土壙の柱圧痕とはちがって，柱穴を掘ってある。柱の底は外側に向けて掘られ，袋状の壁をささえるかのように柱が建っていたものと考えられる。第３地点でも多数の土壙が検出されたが，この土壙は，内部に柱穴をもち，最も貯蔵的用途の土壙と考えられる。この土壙の他に小形の方形の土壙が２個検出された。いずれも，住居址と後世の開墾のため，破壊をうけ，痕跡のみを残す。

出　土　遺　物（第32図）

床面直上の砂質流入土内には遺物はほとんどなく，その上の流入層内に多量の土器が出土する。

壺　形　土　器（１～３）

口縁部径は，約0.15mを測り，端に３条から４条の凹線をもつものと無いものにわかれる。底部（10～12）は，平底で７cm～10cmのものがある。

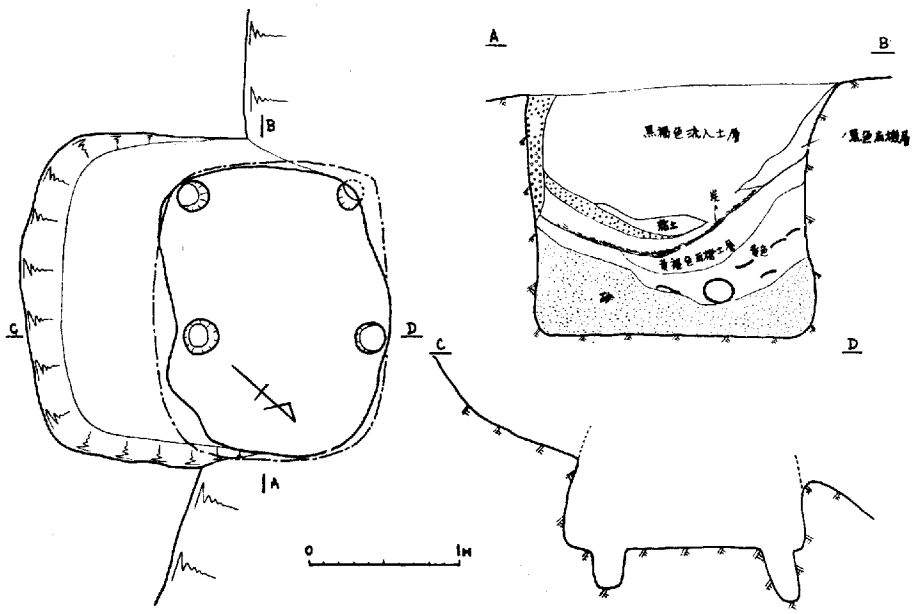
高杯形土器（４～７）杯部底から口縁にかけて段をもって立ち上り，立ち上り部分は厚く，口縁端部はわずかに外側に発達する。ヘラ調整がみられる。脚部には，６条程の沈線が，円孔と交互に施されるもの(7)がみられるが，脚底部径34cm，脚部高34cmを測る特大の高杯(6)が出土している。

器　台　形　土　器（８～９）

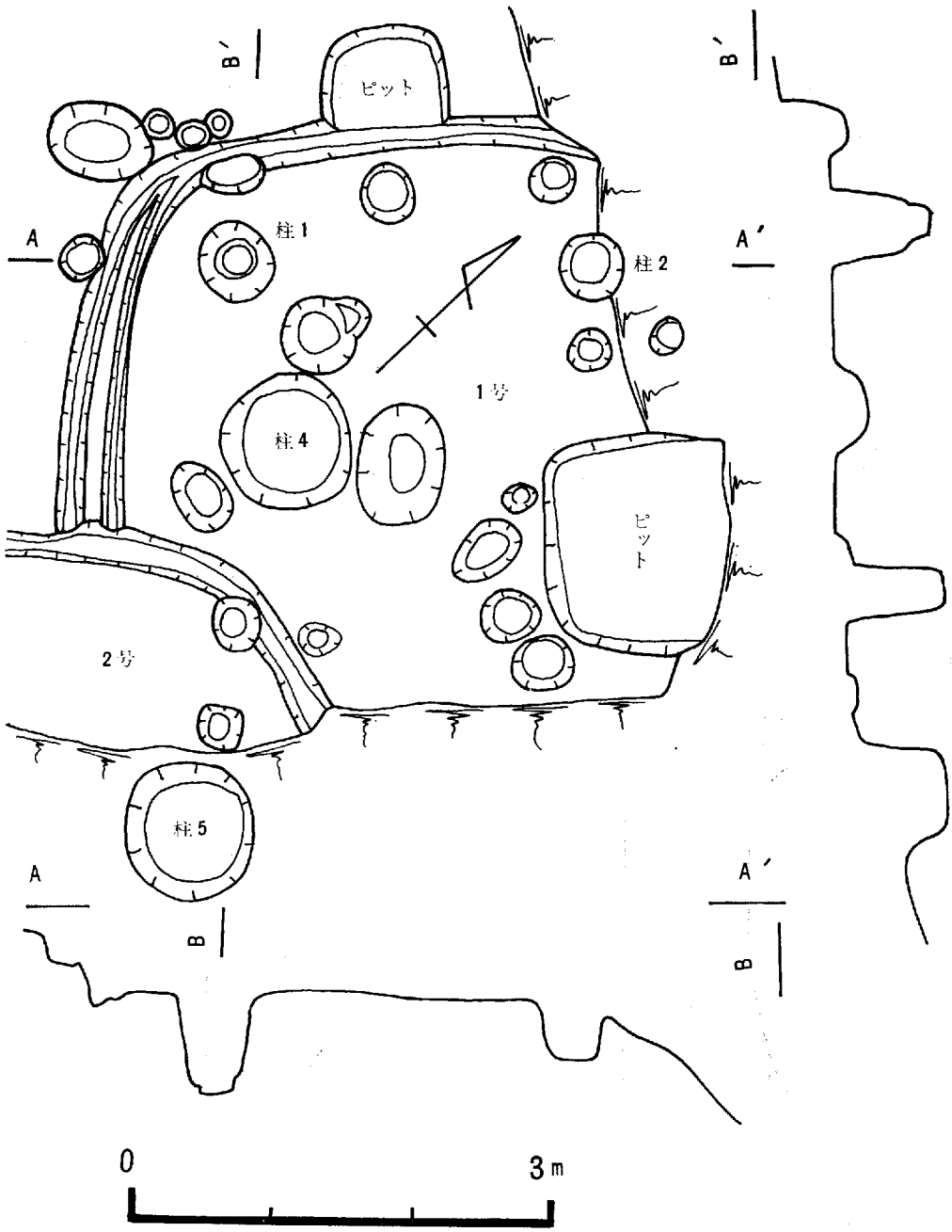
いずれも脚部のみで，８は底部径20cm，厚さ２cmで穿孔はない。脚底部直上に６条の凹線を施す。９は，脚底部径21cmで，脚底部より少し上ったところに10条程の凹線を施し，その凹線上に三角形位置に円孔をもつ。　（新　東）

4　４本柱の特殊な建物（第33図）

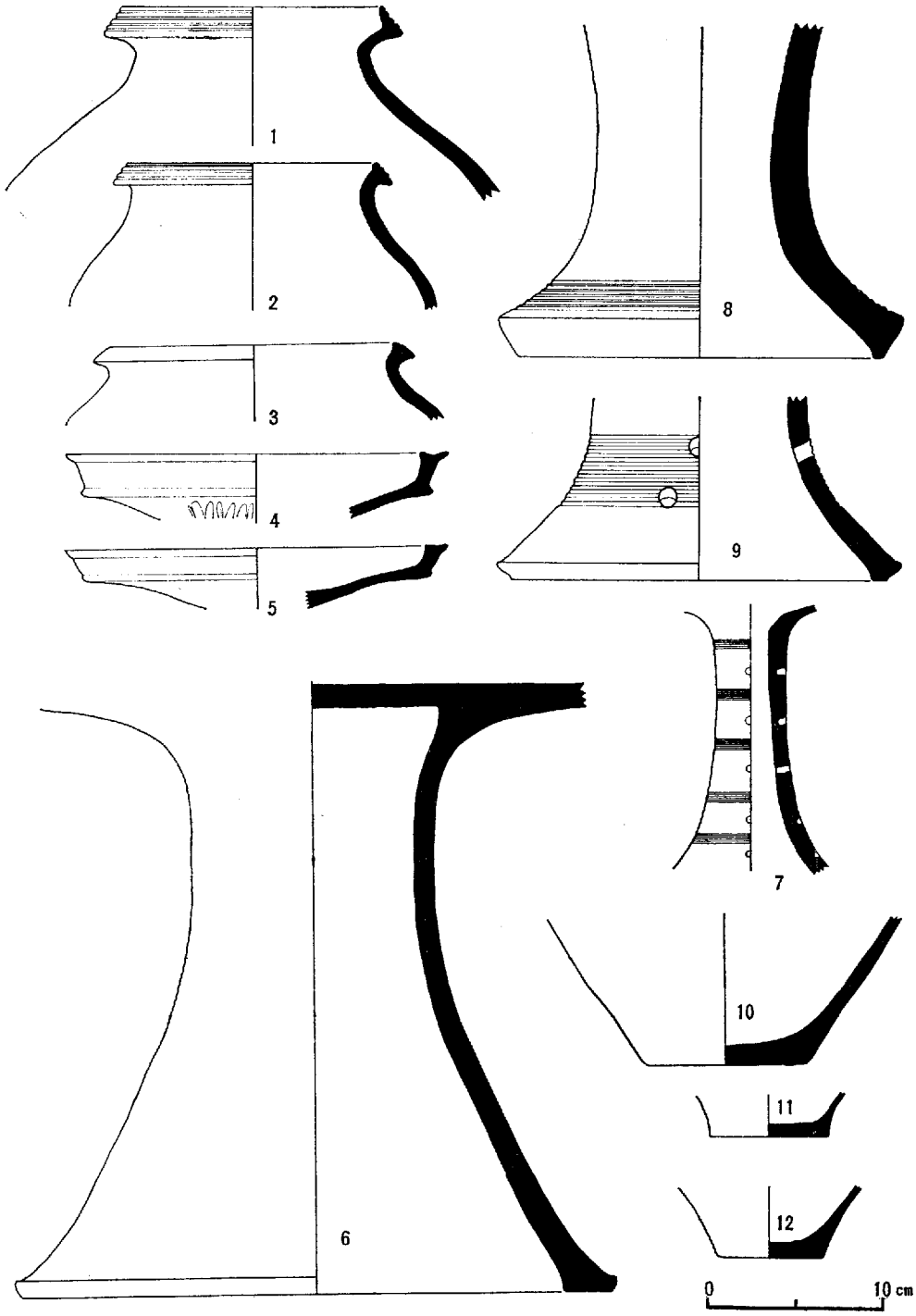
住居址と重複して，南北方向に3.5m，東西方向に3.6mのほぼ正方形の平面に４本の柱穴が検出さ



第31図　土　　壙　　1



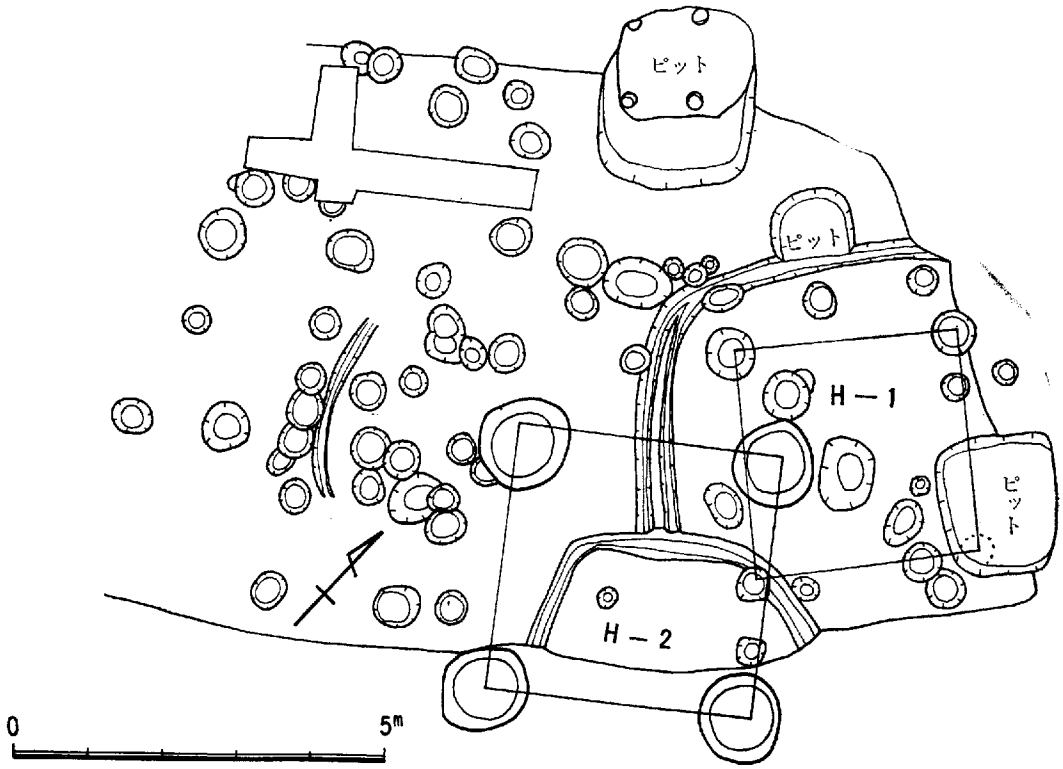
第30図　1　号　住　居　址



第32図　土　壙1　内　出　土　遺　物

れた。柱の掘り方の径が105㎝で，深さが120㎝である。２柱ほどは，径約50㎝の柱木の圧痕跡が残っていた。径50㎝から60㎝の大形の柱でできた特殊な建物であろう。付近から第５地点で出土した格子状叩き目のついた平瓦が一片だけ出土している。

（新　東）



第33図　第　2　地　点　遺　構　配　置　図

5　ま　と　め

第１地点の谷を形成している丘陵頂部に第２地点遺跡として同時期の住居址群が存在することは，集落立地の点から非常に注目されることである。発見された住居址は３軒分で，また非常に残りは悪いが，住居址の存在は確かめられた。この第２地点には，弥生中期以前の土器はなく，弥生後期終末の土器も出土していない。第１地点と，第３地点の一部，そして第４地点の一部とは同時期に築かれた住居址と考えられるる立地の点からみると，第１地点，第３地点とは相対するもので，この時期の人口の増加，集落の拡大を考えさせるものである。

大柱穴をもつ四本柱の建物は，これからの同種の遺構の発見を待たねば速断はできないが，歴史時代の望楼跡と考えることもできる。　（新　東）

第4章　第　3　地　点

1　立　　地

縄文寺池と門前池の間に位置しており，背後には小丘陵が南に向けて延びている。この丘陵の南西斜面の裾に展開する遺跡である。この遺跡は，標高23m～約28mの傾斜面にみとめられ，遺跡は門前池にそれぞれ小さな谷の部分をのぞいて一面にみられる。現状は谷水田が南側の谷に開けている所である。当遺跡は，かつてＹ２地点と称した所であり，幹線道路敷下にみとめられる部分のみを第３地点と称する。すなわちＹ２地点のごく一部を調査した。　　（枝　川）

2　住　居　址

1 号 住 居 址（第34図）

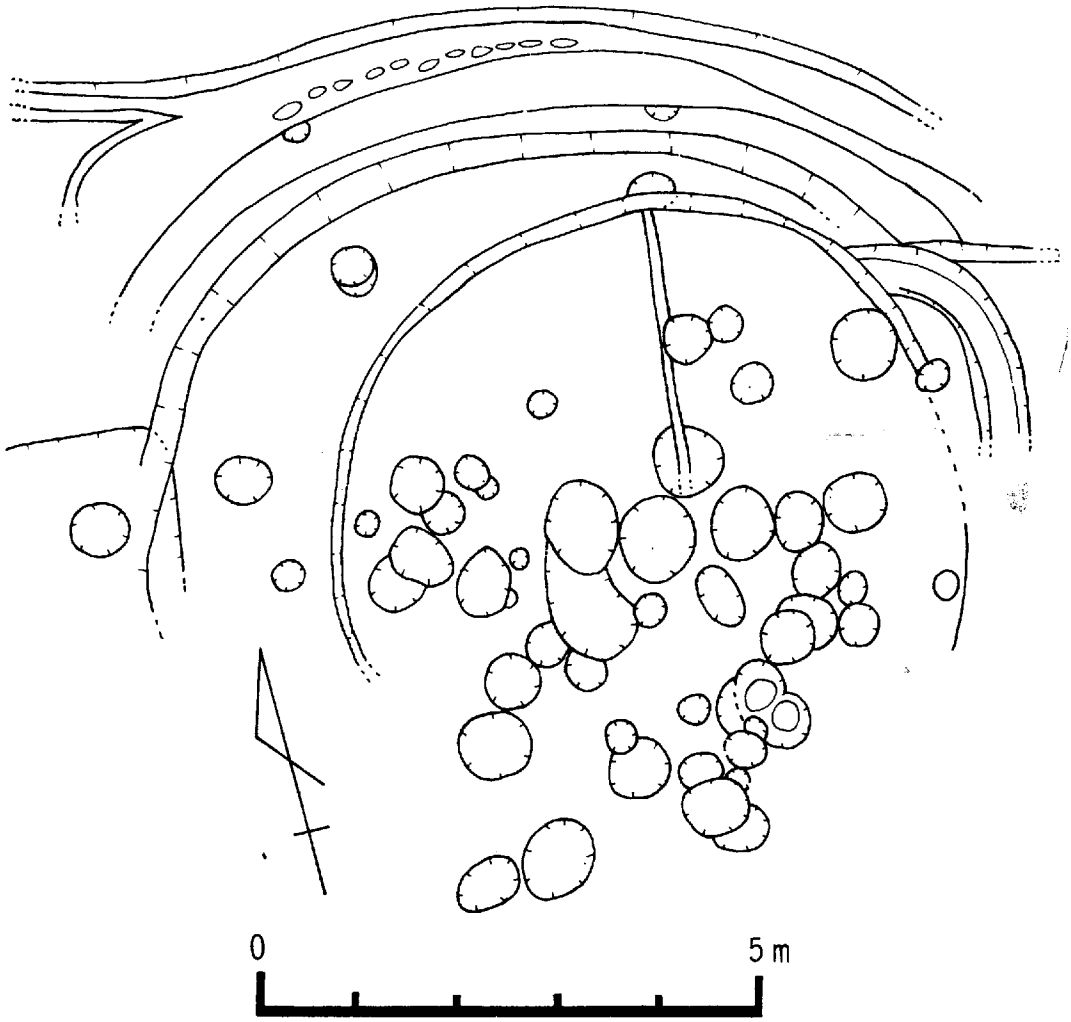
最も傾斜の激しい位置に立地し，住居址の半分は削平されている。住居址の径は，約９mの円形と推定される。柱穴は，周溝の内面に，2.5m～３m 間で７本程度配置されるものとおもわれる。最初期と推定される周溝と間区切とも推測される溝と共に無数の柱穴が切り合っている。中央付近には灰土を流入したピットがみられる。

出　土　遺　物（第35・36・37図）

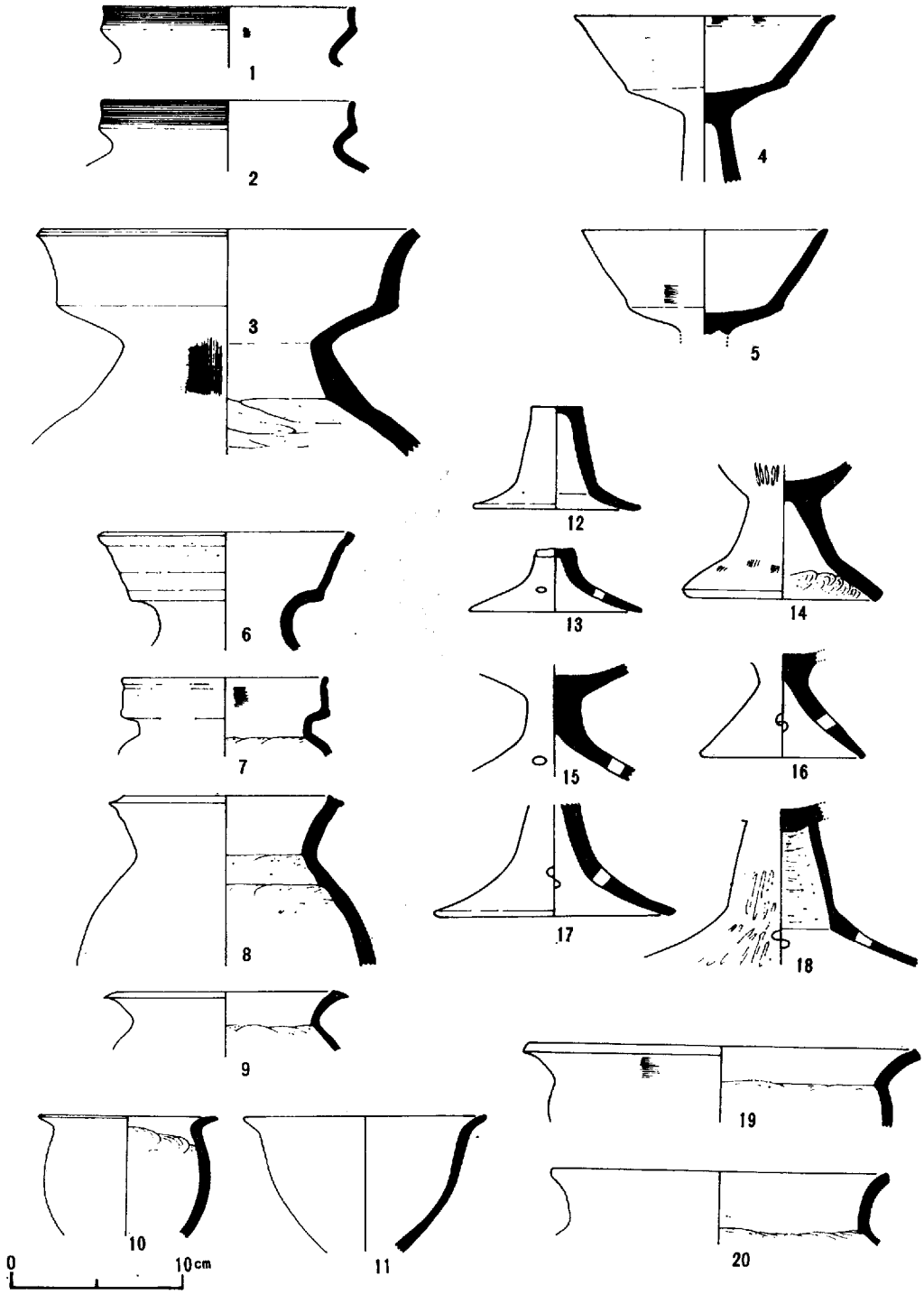
１号住居址に伴う土器は，第36図の器台(35)と浅鉢(36)である。器台は口縁径13cm，高さ16cmを測り，この時期にみられる器台としては最小のものである。胴部中央に楕円形の円孔をもち，凹線が施されている。黄赤褐色の色調を呈する。浅鉢は，口縁径19cm，高さ７cmで黒灰色の色調を呈し，ヘラによる整形がみられる。他の遺物はいずれもこの１号住居址の流入土上層から出土している。いずれも弥生終末期の様相を呈している器形である。(37)の高杯は，口縁端部の非常な発達がみられ，連続の鋸歯文を施し，色調は黄灰色を呈する(38)の器台は，杯部が球形に近く，胴部が細く長い異形のものである。　　（新　東）

3 号 住 居 址（第38図）

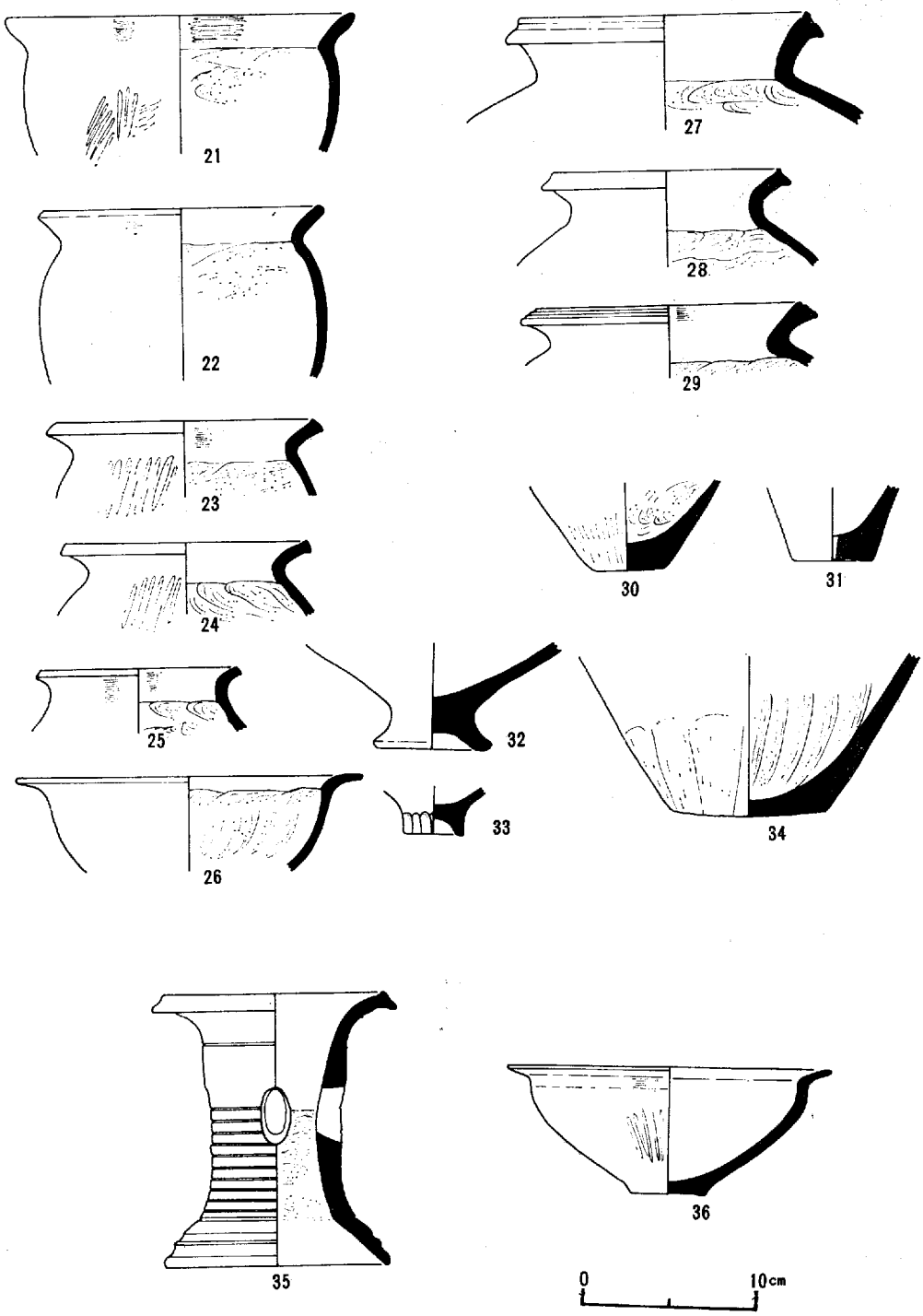
１号住居址と，２号住居址の中間に位置し，一部１号住居址を埋め建て造成して築造されている。土師器を出土する住居址である。方形の平面をもち径は，約4.5mと推定される。柱穴は１本（径25m×深さ20cm）検出されたが，他方は１号住居址との重複と現代の用水路の撹乱をうけて検出できなかった。幅約10cm～15cmの周溝をそなえている。火災にあたった住居址らしく炭化木が放射状に近く散乱している。　　（新　東）



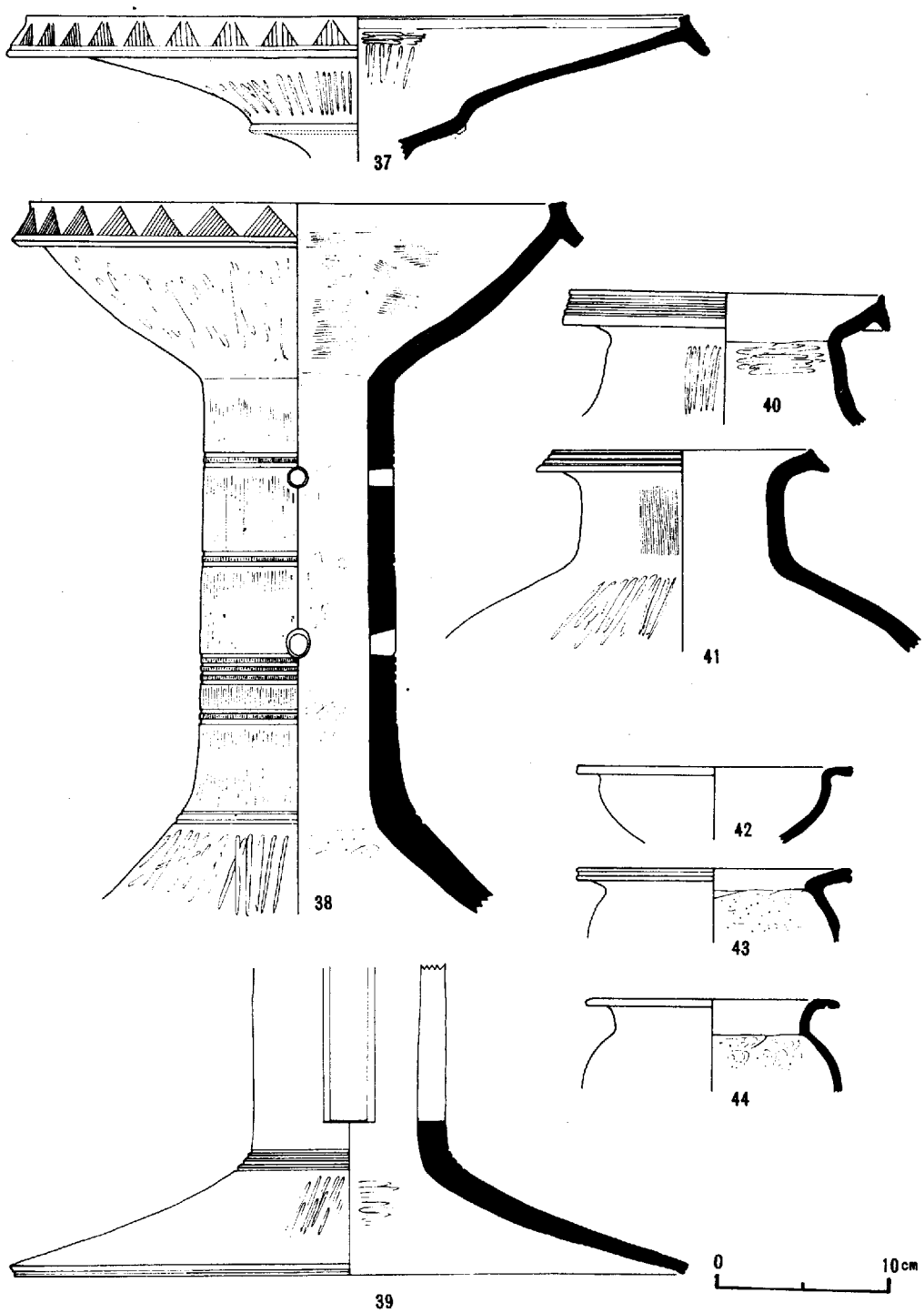
第34図　1　号　住　居　址



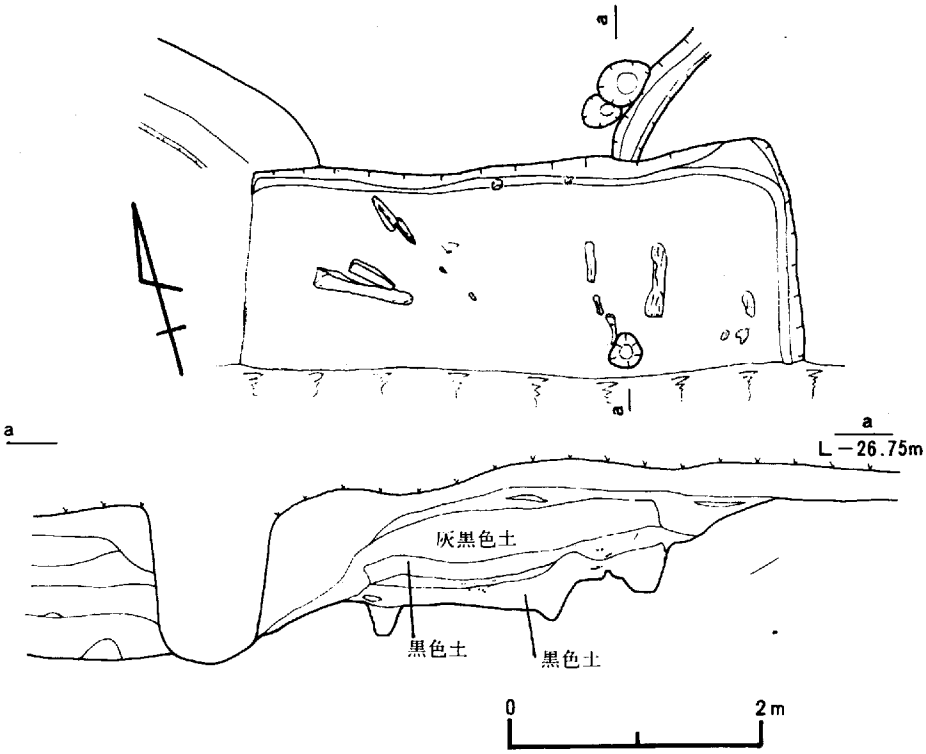
第35図　1 号 住 居 址 出 土 遺 物　Ⅰ



第36図　1 号 住 居 址 出 土 遺 物　Ⅱ



第37図　1 号 住 居 址 出 土 遺 物　Ⅲ



第38図　3　号　住　居　址

2号，4号，5号，6ａ号，6ｂ号住居址（第39図）

この住居址は第３地点の一番東側にある住居址である。平面形は小判形もしくは円形をなすと考えられるが，南側部分が用水路で破壊されていたため正確な大きさは不明であるが，直径７ｍ前後の住居址と推測される。

現存する壁高は床面より60cmあり，幅10～15cm，深さ８～10cmの周溝が残っていた。周溝上面には火災のため炭化材がみとめられるが，その保存状態は極めて悪い。

２号住居址の床面下には周溝が４本検出された。切り合い関係から４号が５号より古く，６ａ号は６ｂ号よりも古いことが確認された。６ｂ号と４号の切り合い関係は４号が６ｂ号を切っていることから６ｂ号が古い。この結果，６ａ号→６ｂ号→４号→５号→２号という築造順位の推移が確認された。住居址内には多数の柱穴が検出されたが，７～８世紀代のもの，４世紀代のもの，弥生時代のものが入り混り，また住居址が全て１/２程欠損しているため，何本柱で構築されていたのか推定できず，炉の位置も確認できなかった。

遺物は全て２号住居址の流入土内にて採集され，床面に附着している土器はなかった。

出土遺物（第40図，41図）

石鏃，壺，高杯，甕，鉢形土器，手捏土器が出土した。

高杯（第40図(1)～(13)）

住居址流入土層内より出土した高杯は６時期に分類できる（1），（2）は弥生時代中期末のものであり，（3），（4)は弥生時代後期前葉であり，（3），（4)は弥生時代後期前葉であり，（5），（6)は後期中葉であり，（7)は後期後葉であり，（8)～(12)は酒津併行期のものであり，(13)は古式土師器に入るものである。

壺（第40図(14)～(16)）

住居址内より３点出土している。弥生時代後期前葉のもの(14)，後期後葉のもの(15)，古式土師器に属するもの(16)の３時期に分けることができる。

甕形土器（第40図(17)～(24)）第41図(31)～(34)）

甕形土器は３時期に大別できる。弥生時後期前葉のもの（17～19），酒津併行期のもの（20～24），玉泊６層期（31～34）に分類が可能であった。

鉢形土器（第40図(25)～(27)，第41図(28)，(29)）

形態的には口縁部が「く」の字状を呈するものと，直立するものに大別される。(25)～(27)，(29)は酒津併行期に属し，(28)は他の鉢形土器に比べて若干年代が降って，古式土師器に編年されると推定される。

手捏土器（第41図(30)）

舟形を呈した手捏土器である。焼成，胎土からみて酒津併行期所産のものと考えられる。色調は茶黒色を呈する。

この重複する住居址の築造する時期は今まで述べてきたように流入土層内の土器からみれば，弥生時代中期末～古墳時代の初期にまで編年される土器が出土しているため，明確な築造時代を決定することは困難である。最終期である２号住居址の流入土下層から酒津併行期の土器を多く出土したことから，２号住居址の築造時期は，酒津併行期と考えられる。（松　本）

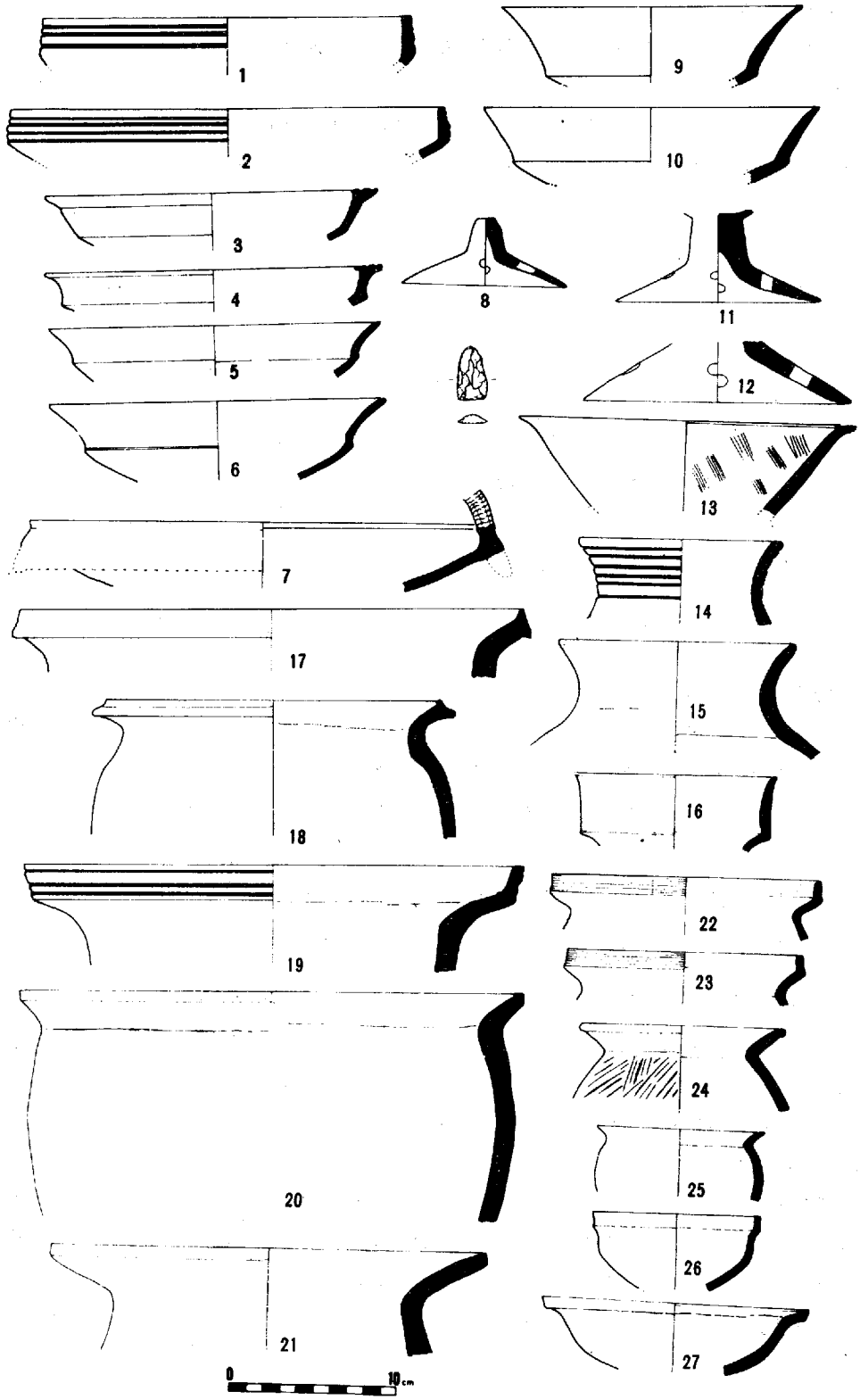
７号住居址（第42図）

この住居址は調査地域外にほとんどが存在しており，全体の１/４だけの検出である。１，２号住居址よりやや南西の斜面下方に位置しており，１/４での推測であるが，大型の竪穴住居址と思われる。周溝を２本検出したが，２つの住居址が重複しているように思える。

出土遺物（第43図）

この住居址の遺物については，床面上層の流入土内よりの出土である。高杯については，短脚のものと，長脚のものの二通りで，円形のすかしのあるもの(3)と，ないもの（１・２）がある。杯部は口縁端が上方におりまげてあるものと，わん状になるものとがある。短脚のものについては，内，外ともヘラの横などがみられる。長脚のものは，刷毛目が施されている。小壺(4)については，口縁部の作りがうすく，やや短い口縁でひらきぎみである。外面はヘラ調整が施してあり，平底である。蓋(5)は，つまみの上部はふくらみの上部はふくらみをもっており，内側はくぼんでいる。両方にひもとおしの穴がある。外面の仕上はよく，全体うすい刷毛目が施されている。（枝　川）

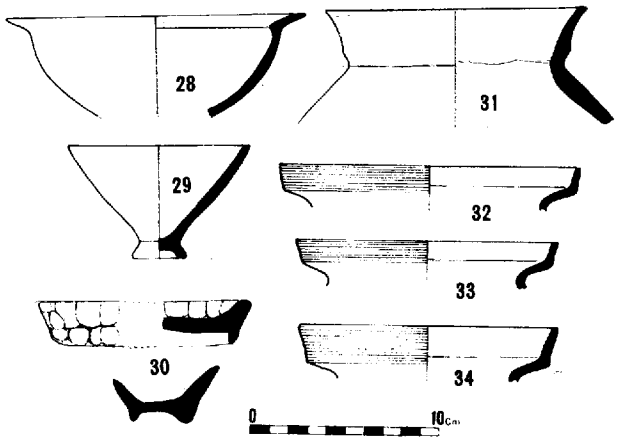
第39図　2号，4号，5号6a号，6b号住居址



第40図　2 号 住 居 址 内 出 土 遺 物

8 号 住 居 址

この住居址は，1号住居址の下よりの斜面で検出した。発掘前のボーリング調査により南側の一部分は掘り取られていた。わずか傾斜面の上手で掘りこみを検出しただけである。下方では削平されており検出はできなかった。出土遺物はなく，流入土内にわずかの土器片が含まれていた。これらの遺物からみると古墳時代の住居址と思われる。（枝　川）



第41図　2号住居址内出土遺物地

9号住居址（第44図）

第3地点のほぼ中央部に位置する。平面形は4.70×5.00*m*（？）の方形である。現存する壁高は床面より40*cm*あり，幅10～15*cm*，深さ7～10*cm*の周溝をめぐらしているが南側では確認できなかった。床面西側には直径50*cm*の焼土帯がみられこの附近に炉があったと考えられる。

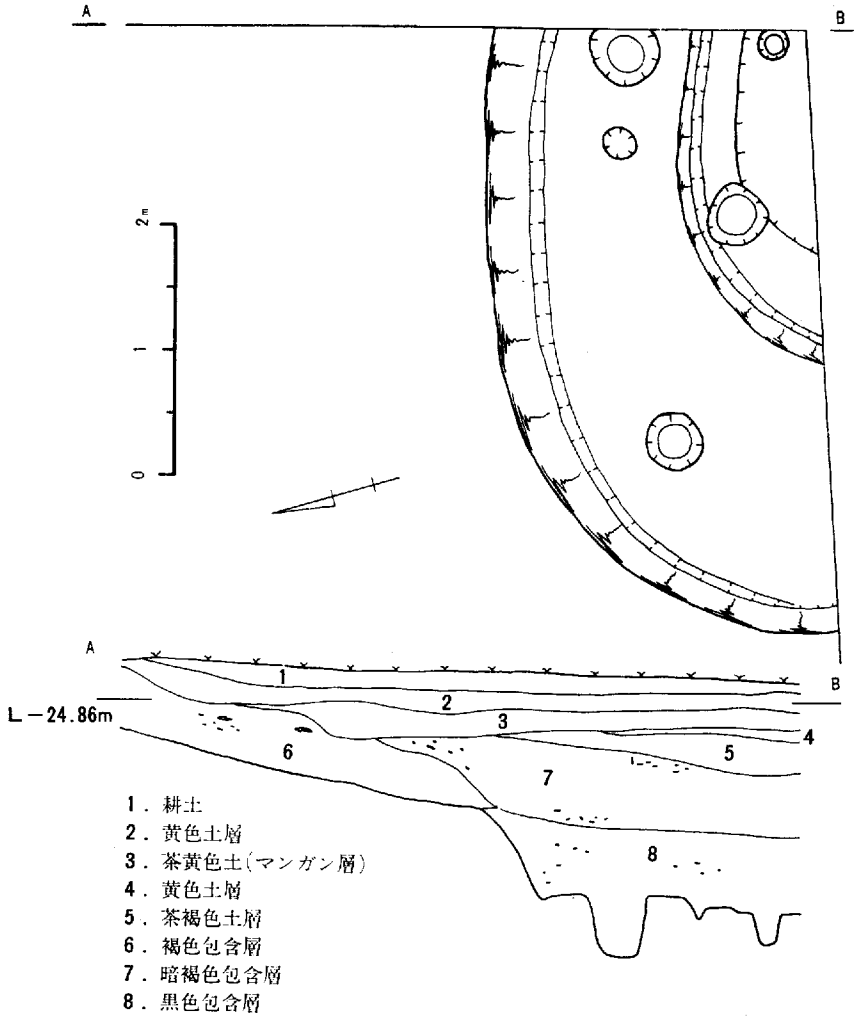
住居址内には22個の柱穴が検出されたが，大部分の柱穴は浅かった。柱穴の大きさ，深さを検討した結果，周溝にかなり近いところにある4本の柱穴がやや不自然ではあるが伴うものと思われる。柱間は3.00×3.20*m*である。

出土遺物（第45図）

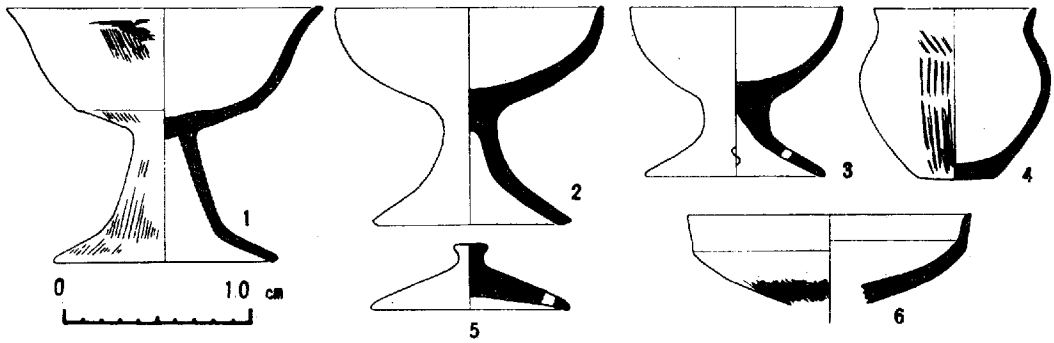
遺物は床面に附着しているものがなかったが，上部流入土内のもの（第45図(1)～(4)，(10)～(15)と下部流入土内のもの（第45図(7)～(9)）と周溝内より出土したもの（第45図(5)～(6)）にわけられる。主な器種は甕が大部分であり，他に坩形土器がある。なお，この住居址は下部流入土，周溝内の出土遺物からみて弥生時代後期前葉に築造されたものであろう。（松　本）

10・11号住居址

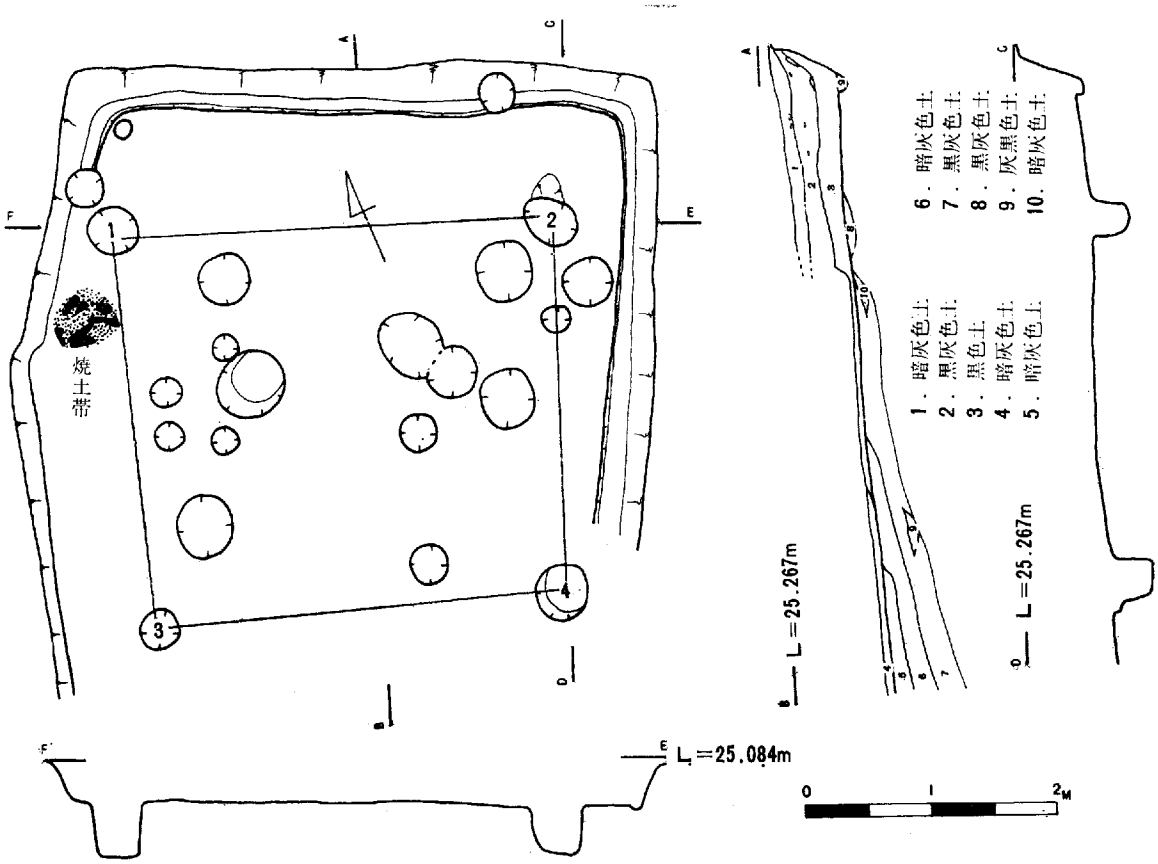
調査地域の中ほどで検出した。上面には，建物Ⅵが位置している。10号と11号は重複しており，10号を11号が切りこんでいる。どちらの住居址も斜面の上手で溝と，住居址にともなう柱穴を確認したのみであり，ほとんどが削平されている。住居址の時期は，出土の土器片から推察すると，弥生時代後期に属する。（枝　川）


A
B
2m
1
0
A
B
L－24.86m
1
2
3
4
5
6
7
8
1．耕土
2．黄色土層
3．茶黄色土(マンガン層)
4．黄色土層
5．茶褐色土層
6．褐色包含層
7．暗褐色包含層
8．黒色包含層

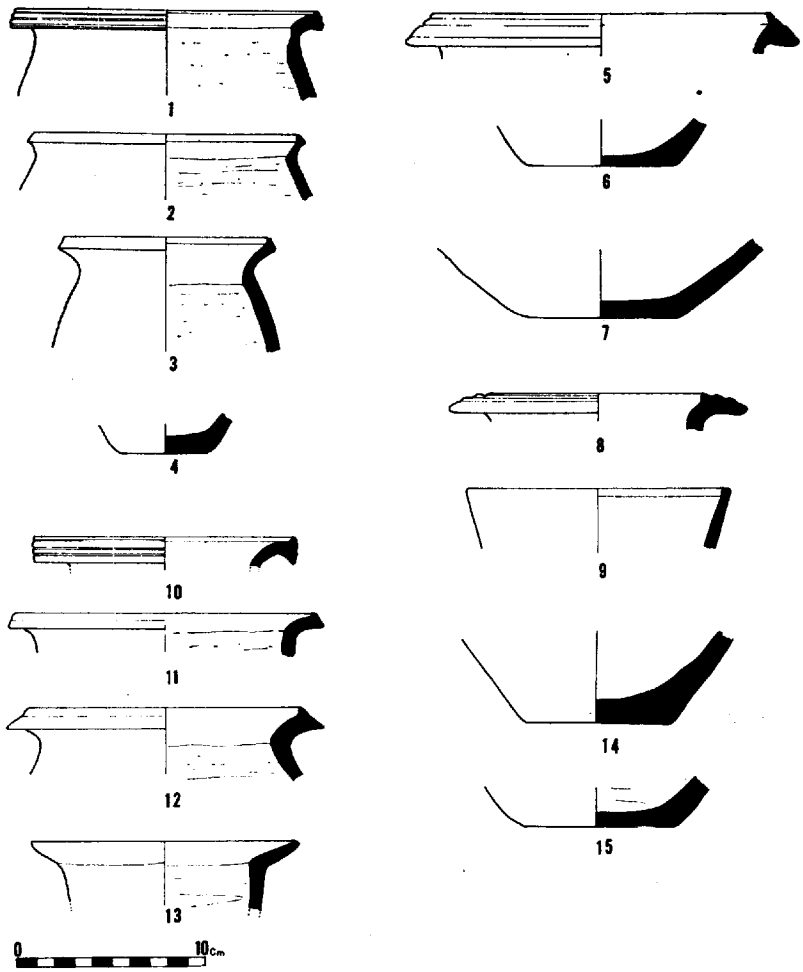
第42図　7　号　住　居　址



第43図　7　号　住　居　址　出　土　遺　物



第44図　9　号　住　居　址



第45図　9 号 住 居 址 出 土 遺 物

12 号 住 居 址

この住居址は13号住居址の上層で検出された。周溝のみコの字形に検出された。1辺約5 *m*の方形プランを呈する住居址である。出土遺物（第46図）（高杯，器台，甕形土器，手埴土器，すり石）はこの住居址と共伴せず，すべて流入土上層より出土したものである。高杯，甕形土器にも玉泊6層期～走出期のものが混在しており，この住居址の築造年代は不明である。　　（松　本）

13号住居址（第47図）

最終段階における住居址の大きさは，8 *m*×8.5*m*のほぼ円形を呈する大形の住居址である。この期の主柱は，8本と予測され，おそらく，中央に4本の柱穴をもち，外側に8本の柱穴で構築するものと考えられるが，無数の柱穴の切り合いがみられ明らかでない。柱穴は，35*cm*×40*cm*の楕円形を呈し，20*cm*～30*cm*の柱痕跡を残すものもある。中央付近には，変形の楕円ピットが存在し，灰土を流入している。柱穴間には，周溝状の溝が数条にも検出されるが，内部構造上の痕跡か，改築によるものか明らかでない。

出土遺物（第48図）

いずれも完形に復元され，住居址床面上に位置していた弥生後期の土器である。(1)から(3)は台付甕および鉢で，(1)は口縁径17㎝，高さ20㎝を測る。口縁端部には３条の沈線を施す。(2)も(1)と器形，用途は同じと考えられる。(2)は脚部に沈線で模様を施す。いずれも色調は灰褐色を呈する。(3)は器形上最も簡素な作りであるが，外面は刷毛で，ていねいな仕上げを行っている。高坏(5)は，口縁径28㎝，高さ21㎝。口縁端部は外側にフラットに拡張し，沈線が施される。脚部には９条から10条の沈線が施され，その間に，円孔がみられる。色調は赤褐色を呈し，シャープでていねいな作りである。

（新　東）

14号住居址（第49図）

この住居址は第３地点の１番西側で検出された。平面形は3.40×3.80ｍ（？）の隅円方形住居址である。柱間２×２ｍの４本柱である。現存する壁高は北側（山側）で床面より１ｍ，東側で床面より60㎝あり，内側に幅７～10㎝，深さ５～10㎝の周溝が南側を除いてめぐっていることが確認された。床面中央にはピットがあり，その周囲には焼土帯がみられ，炉がピットの周辺にあったと思われる。

出土遺物（50図）

床面より高杯（第50図(1)・(2)甕（第50図(3)～(5)，(7)，(9)～(10)），長頸壺（第50図(8)，(11)，(12)），器台，石鏃（第50図(6)）が出土している。高杯，甕，長頸壺の土器形態からみてこの住居址は弥生時代後期前葉に築造されたものである。

（松　本）

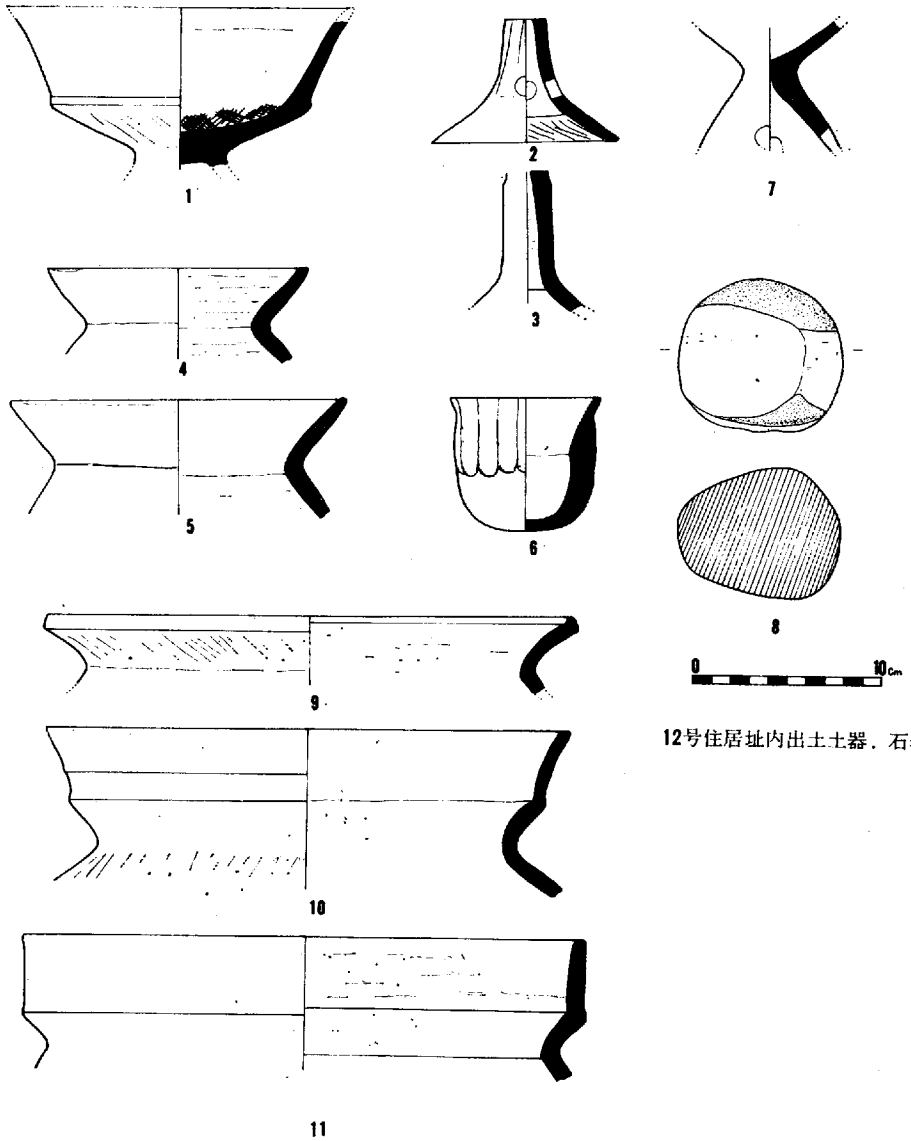
15号住居址（第51図）

ほとんど削平されており残存状態はよくない。わずかの溝と，四本柱の柱穴を検出した。出土遺物もすくなく，ただ甕が一個，床面の中央で出土した。

出土遺物（第52図）

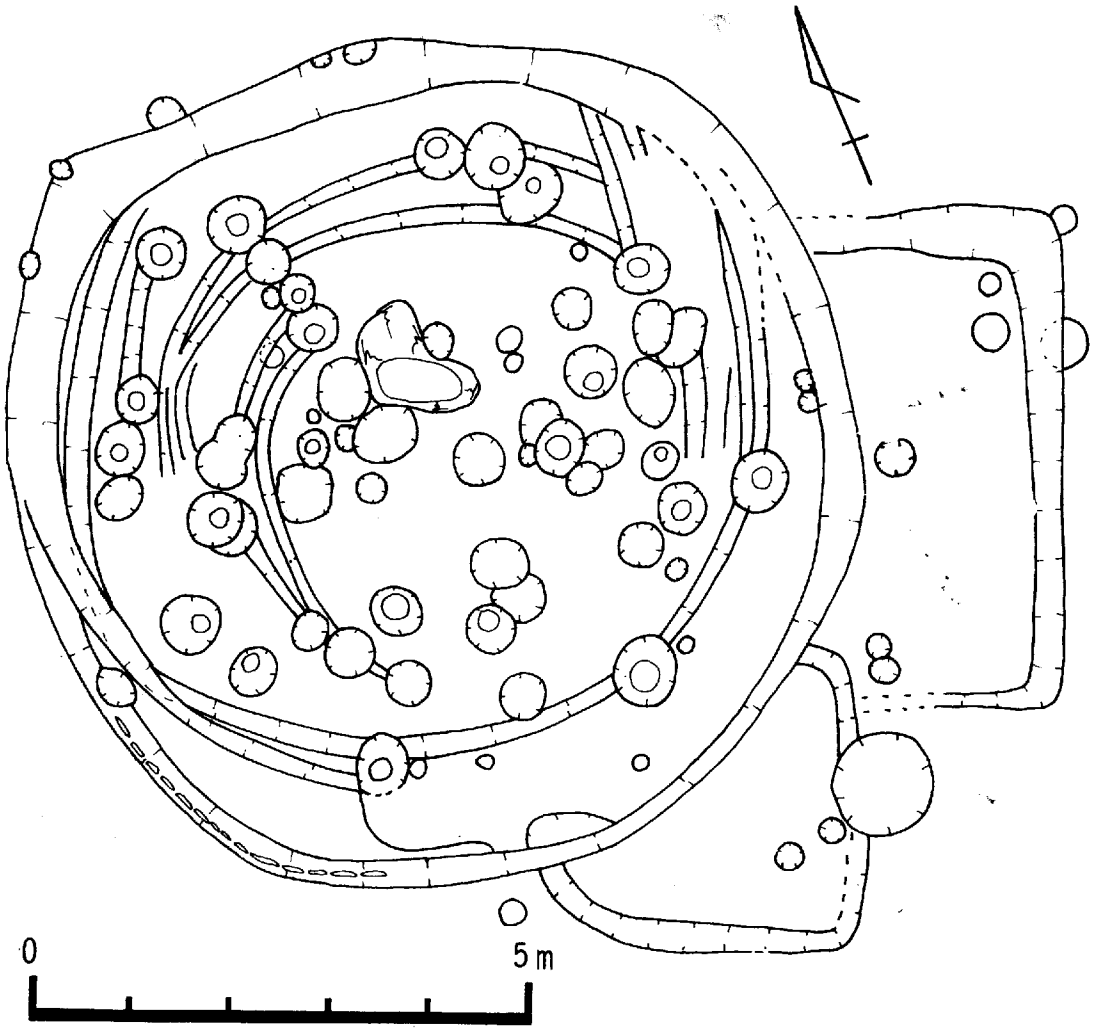
土師器の甕で，口径が33㎝ある。色調は全体暗褐色で一部分に黒色のはんてんがある。口縁端はゆるくななめ上方に外反しており，細い刷毛目が縦に使用されている。下半分はななめの刷毛目が施されている。内面にも細い刷毛目が使用されている。焼成はあまりよくなく，胎土中にはこまかな砂粒を多く含んでいる。

（枝　川）

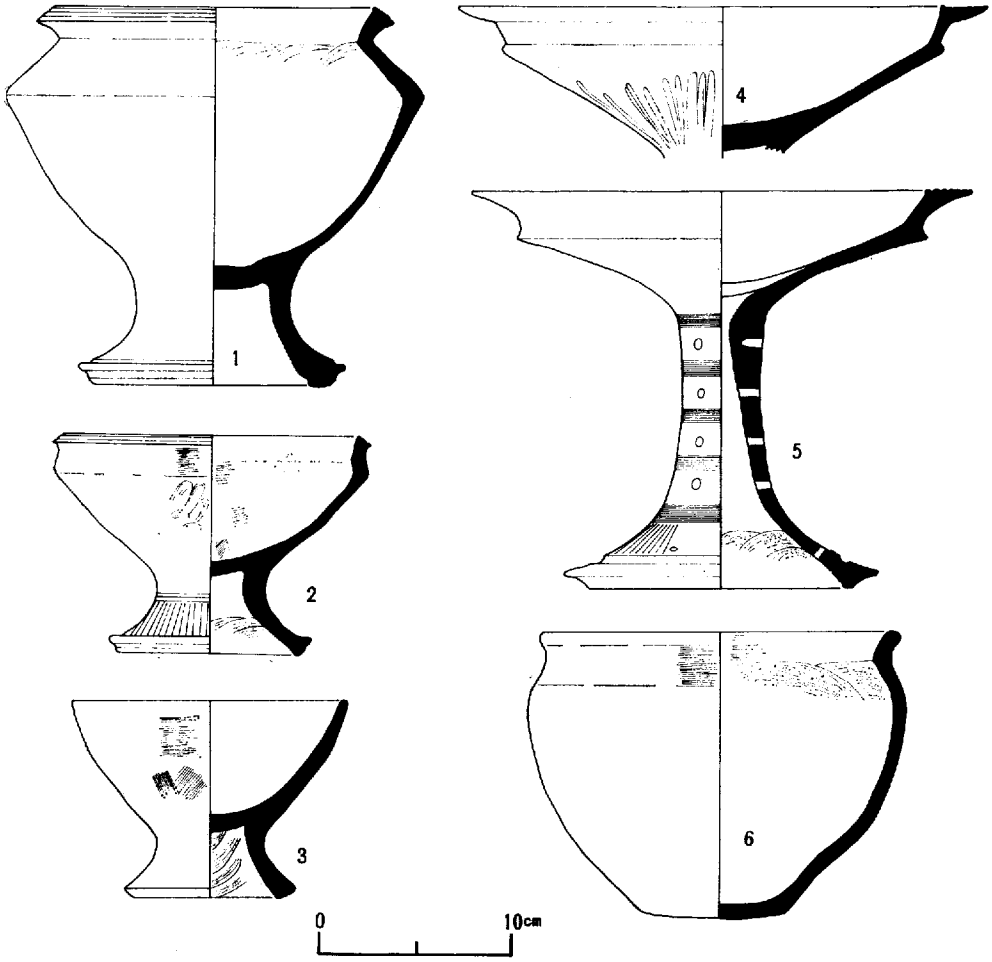


12号住居址内出土土器，石器

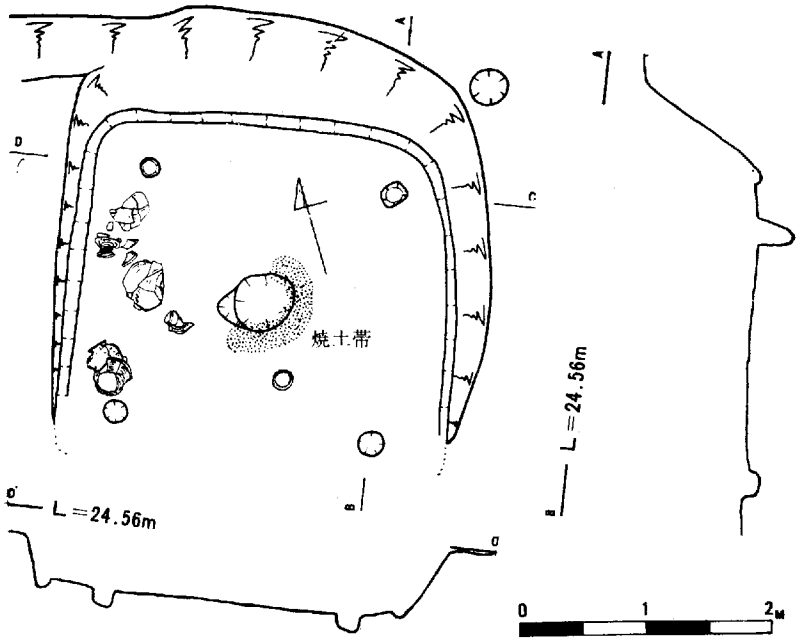
第46図　12 号 住 居 址 出 土 遺 物



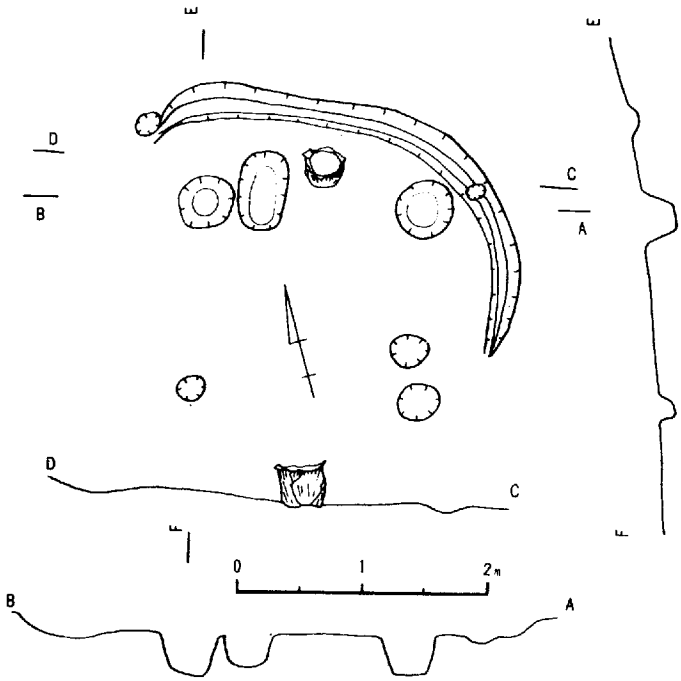
第47図　13　号　住　居　址



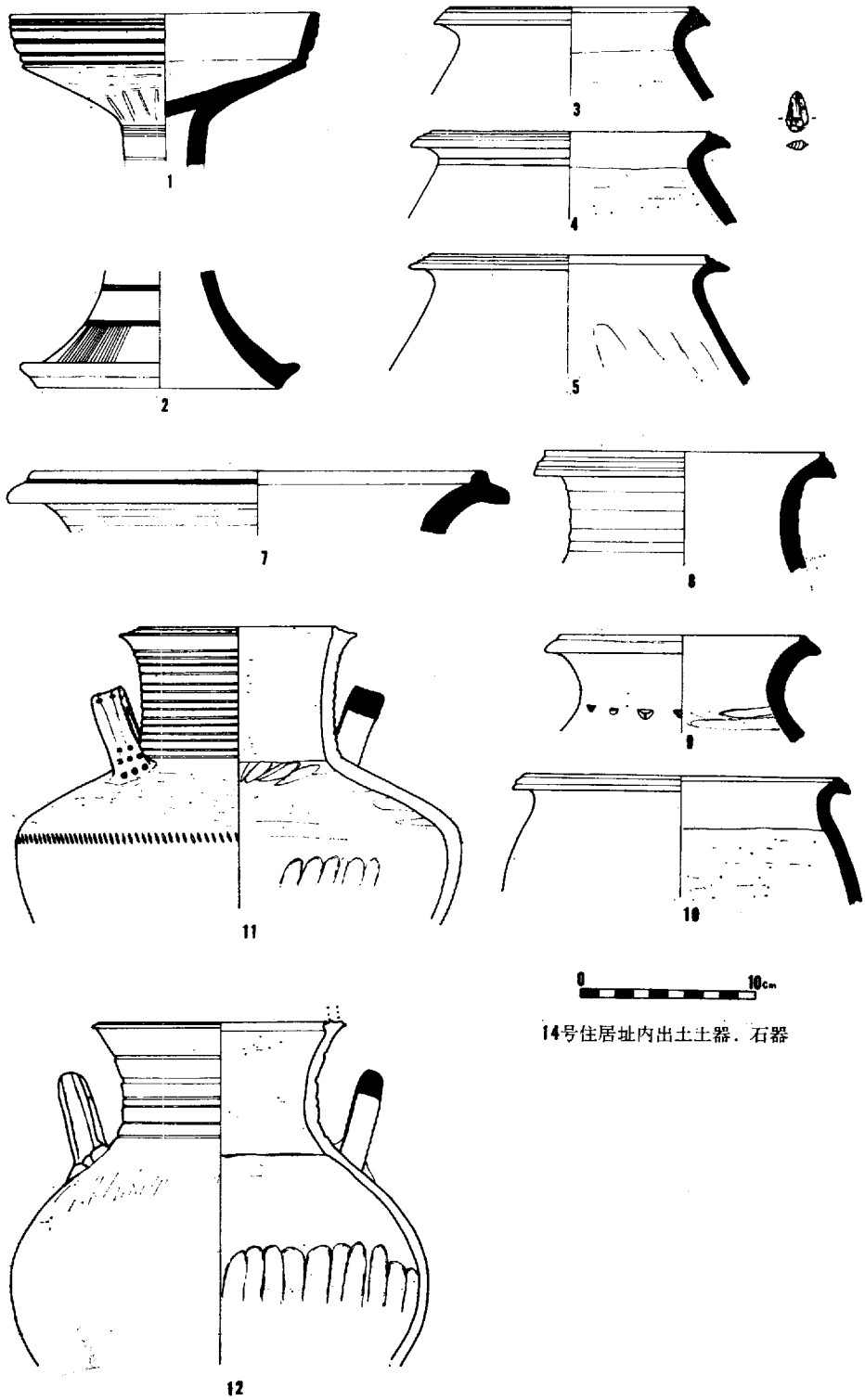
第48図　13 号 住 居 址 出 土 遺 物



第49図　14　号　住　居　址

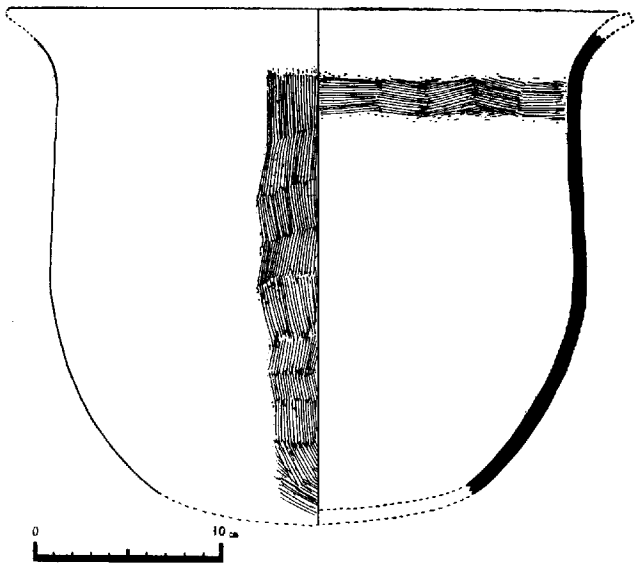


第51図　15　号　住　居　址



14号住居址内出土土器，石器

第50図　14 号 住 居 址 出 土 遺 物



第52図　15号住居址出土遺物

18号住居址（第53図）

この住居址は建物Ⅱの西側で検出された。平面形は6.00×6.00*m*の正方形である。（なお，東壁にある大きなピットは第3地点発掘開始にあたって，遺構の範囲確認のためにあけたボーリング抗である。）住居址の壁高は床面より20*cm*あり，幅10～15*cm*，深さ10～13*cm*の周溝がめぐり，その中に径5～6*cm*の杭が30～50*cm*の間隔で検出された。このことは本住居址の構造を知るうえで貴重なものである。なお，住居址の北壁中央部には100×100*cm*，深さ5*cm*の浅い正方形ピットが検出され，底には甕（第54図(3)）が1個が置れていた。このピットは検出の段階で炉かと思われたが，灰，炭，焼土などは検出されず，床面中央部のくぼみにて若干の炭を検出した。おそらく，この近くが炉であったと思われる。なお，この住居址内では18個の柱穴が検出されたが，4本柱（柱間190×220*cm*）であったと推定される。

出土遺物（第54図）

遺物は住居址内の床面に附着したもの（第54図(1)～(5)と流入土層中のもの第54図(6)～(13)に大別される。器種は甕，高杯，手捏土器の3種類がある。甕（第54図(3)）は口縁部から頸部にかけて「く」の字状を呈し，胴部の最大径がほぼ中央部にくる丸底になる土器である。内面には輪積み作りの痕跡がみとめられる。出土している土器からみて玉泊6層期に築造された住居址である。（松　本）

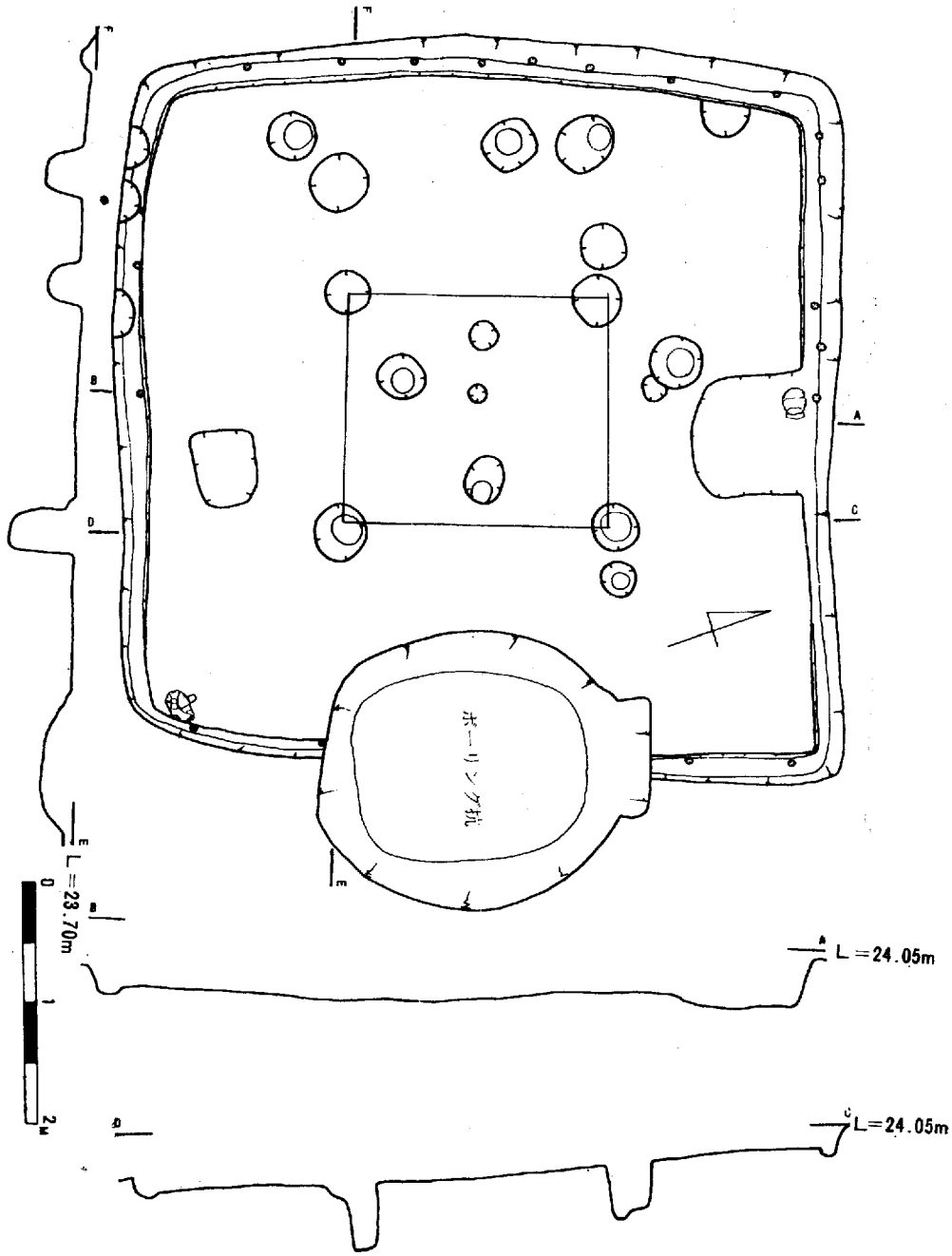
20号住居址（第74図）

第3地点のほぼ中央にて検出された住居址である。1辺が約2*m*しか検出されず，コーナーが直角に近いことから方形の住居址と推定される。出土遺物は全くないため，築造年代は不明である。

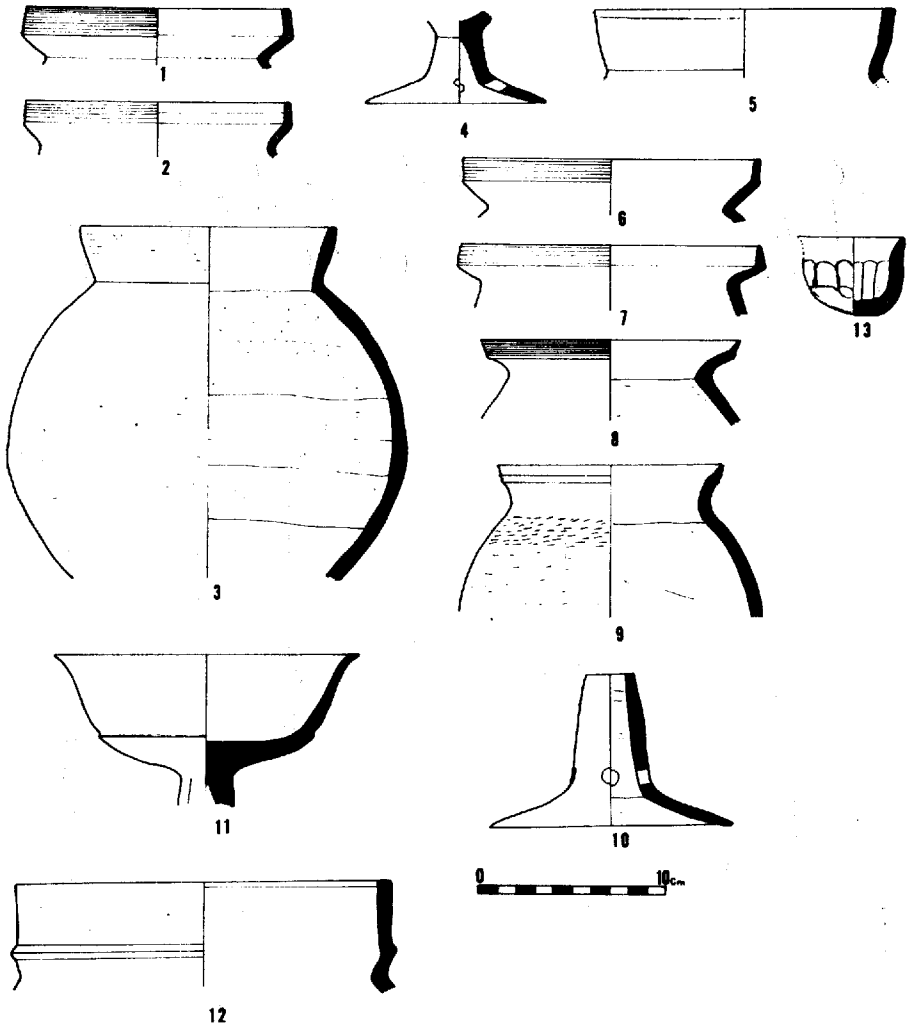
（松　本）

21号住居址（第74図）

22号住居址に切られた住居址である。周溝のみ検出されたが，コーナーから推定して方形プランを呈すると思われる。なお，出土遺物がないため，築造時期は不明である。　（松　本）



第53図　18　号　住　居　址



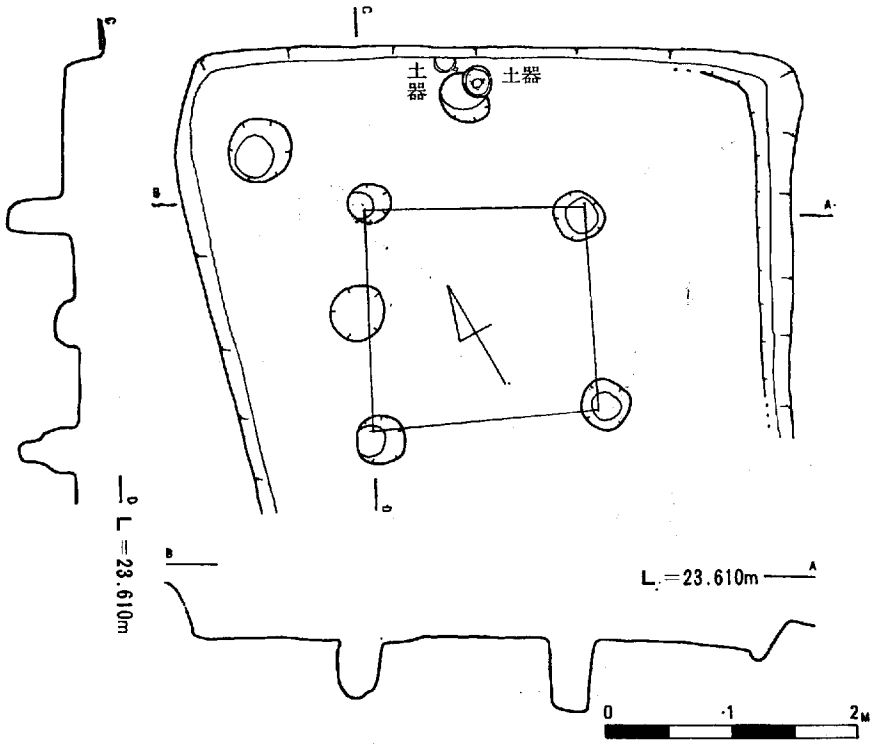
第54図　18 号 住 居 址 出 土 遺 物

22号住居址（第55図）

この住居址は第３地点のほぼ中央部の南端に位置し，建物Ⅳの北東にある。平面形は4.70×4.50？）*m*の方形である。現存する壁高は床面より約35*cm*あり，幅10～15*cm*，深さ６～８*cm*の周溝が東側に１部分残っていた。床面には７個の柱穴が検出されたが，４本柱（柱間170×180*cm*）の住居址と推定される。なお，この住居址床面には焼土，炭化物などが検出されなかったため炉の位置は不明である。

出土遺物（第56図）

須恵器，甕（第56図(1)），杯脚部（第56図(2)），甕（第56図(3)），鉢形土器（第56図(4)～(6)）が出土した。高杯は上部流入土層より出土したが，時期的に本住居址よりも古い年代のものである。(1)，(3)～(6)はほぼ住居址床面より出土したが，甕，甕の器形からこの住居址は５世紀末～６世紀前葉に築造されたものと推定される。（松　本）



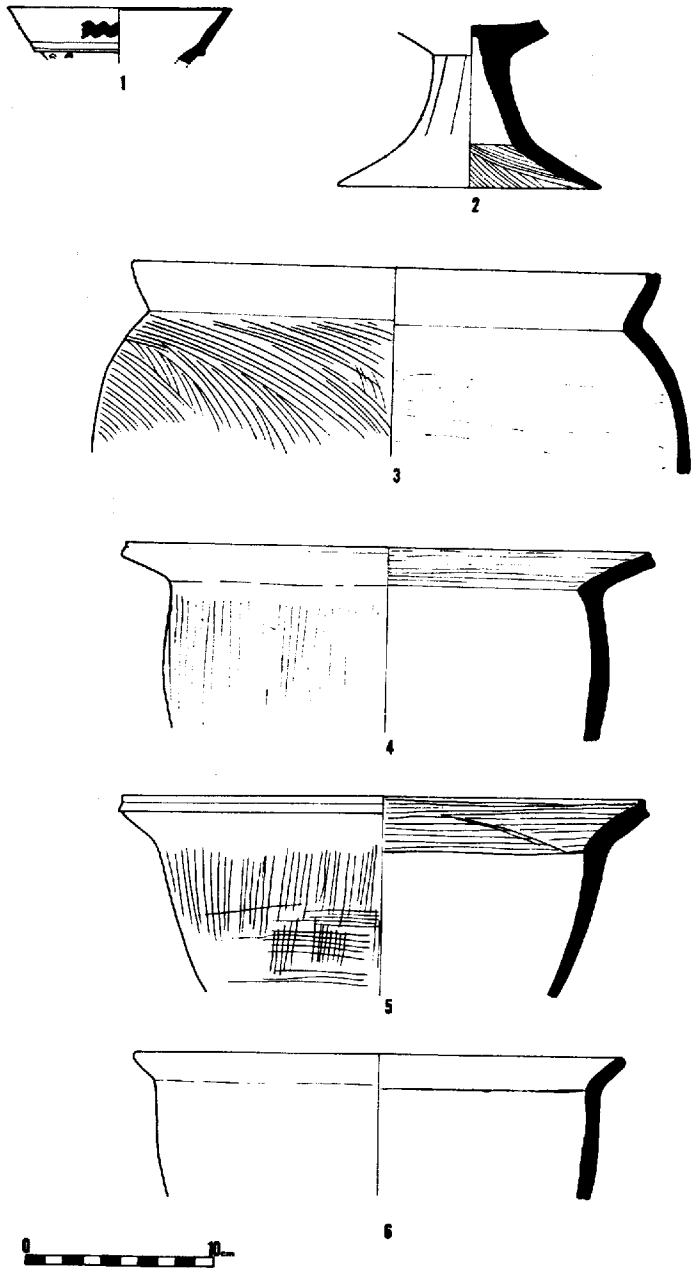
第55図　22　号　住　居　址

23号住居址（第57図）

この住居址は，第３地点では多くの遺構を検出した場所より西で向側の丘陵で谷におちこむ裾に位置している。ほとんど現在の用水路によって 2/3 は削られている。検出したプランからみると，南北方向で長径が３*m*ぐらいの小型の竪穴住居址である。溝はなく，現状で60*cm*ぐらい山裾面を切こんでいる。床面には火災にあったかのごとく，多くの焼土，炭と，ともに多量の土器が出土した。柱穴は１つしか検出できなかった。

出土遺物（第58図）

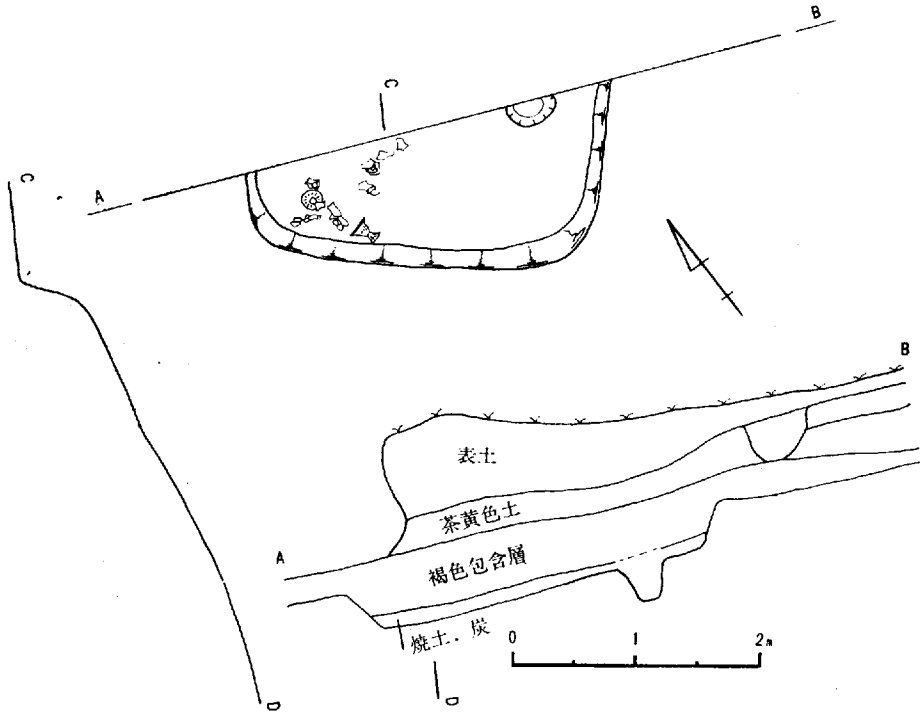
すべて土師器である。器種は，高杯，甕，壺，小壺である。その中でも高杯，甕が比較的に多く壺はすくない。高杯については，口縁端部がわん曲しているものがほとんどで丸くおさめられている。ただ１点，(6)は口唇部が厚くわん曲して端部に細い横なでがみられるものがある。杯部は平担なものと，わん曲しているものの，二通りあり，杯部の深さが深いものがほとんどである。そして杯部と脚部の接合部分に稜線がみられるものがほとんどである。脚部は長脚である。裾が広がり，脚部下半で窮曲して杯部に接合の際にへこんでいる。内面はヘラ削りを施しており，そのため稜線が明瞭に残る。色調は明るいものと暗いものがある。甕については口縁の径が10*cm*から20*cm*ぐらいまである。（9・10・11・12・14）。口縁部はいづれも外反しており，端部は窪むもの（10・11）と，細く丸くおさめられるもの(12)と角ばるもの(9)や口縁がわん曲し端が内側に張り出しているもの(14)に別けられる。胴部にはすべてに刷毛目が交錯状に施されている。内面は口縁部は刷毛目を施している。ま



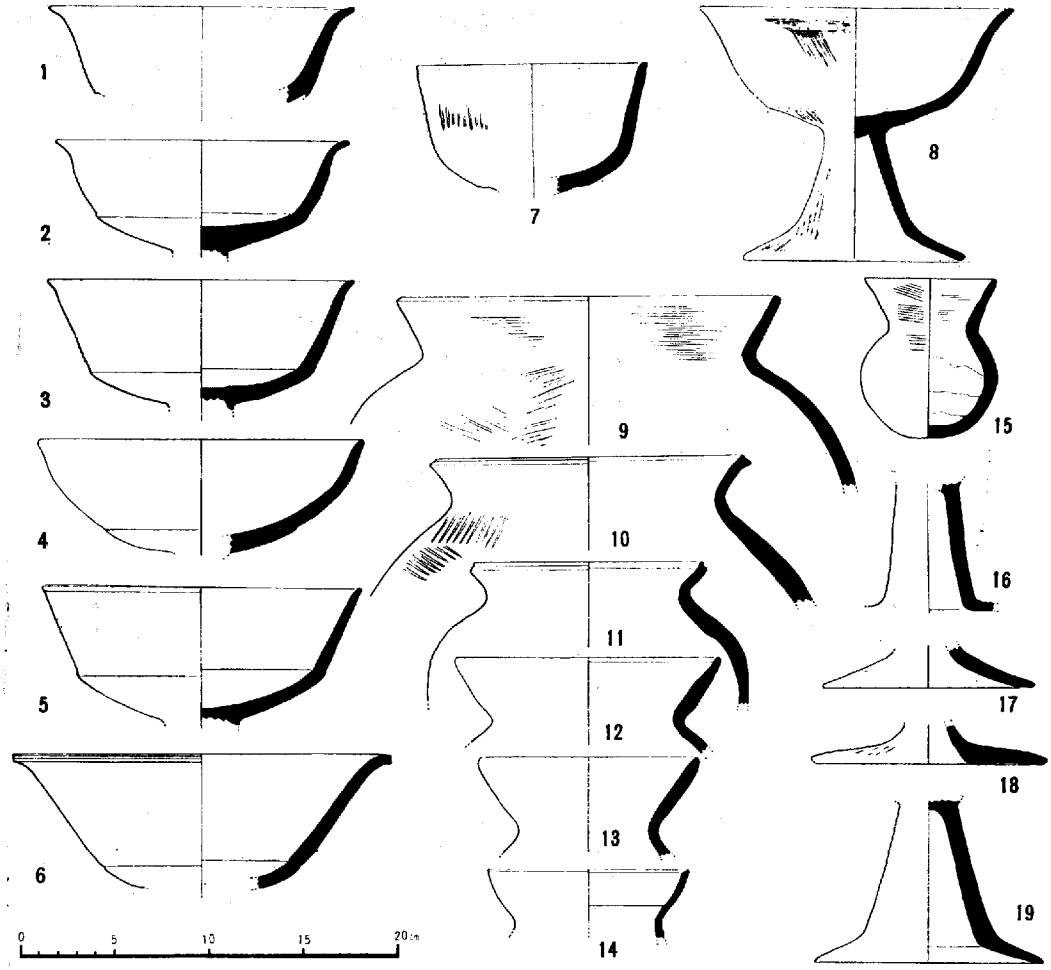
第56図　22 号 住 居 址 出 土 遺 物

た，指でなでており，粒土のつぎたしが明瞭にみえるものがある。胎土はやや荒めのもの（9・10・11）と，こまかい砂粒によるもの（12・14）の二通りである。壺は２点である。口縁部は上方にひらき，端部は丸くおさめられている。内側と外面とも横なでがしてあるもの(13)と，１つは小壺で，明るい橙色をしている。刷毛目が口縁から胴部にかけて施してある。内面は荒く横なでをしている。

（枝　川）



第57図　23　号　住　居　址



第58図　23 号 住 居 址 出 土 遺 物

3　土　　壙

土壙 1・2・3（第59図）

2号，3号住居址の下で検出した。3個の土壙が一ケ所に集中して切合っている。土壙1は，南北で，幅1.8m，深さは残存している深いところで，約1mある。底は平らたく，やや袋状を呈している。土壙2は，土壙1が切っており，平面プランは隅円方形をしている。幅は，南北で1.5m，東西で1.2m，深さは80cmある。土壙3は，浅く底だけが残っていた。遺物は，土壙1の底に弥生後期の小形の器台が出土した。　（枝　川）

土壙 4（第60図）

調査地点の中央部分で検出した。幅，1.4m，深さは中央で65cmでほぼ円形を呈している。底には浅い溝状のものがまわっている。流入土内には弥生後期の土器片が含まれていた。

土壙5（第61図）

土壙4に近く，12号，13号住居址が近い位置にある。東西の幅1.2m，深さ，中央の深いところでは90cmで，ほぼ円形である。内底に南北方向で中央部分に溝状のおちこみがある。

（枝　川）

土壙6（第62図）

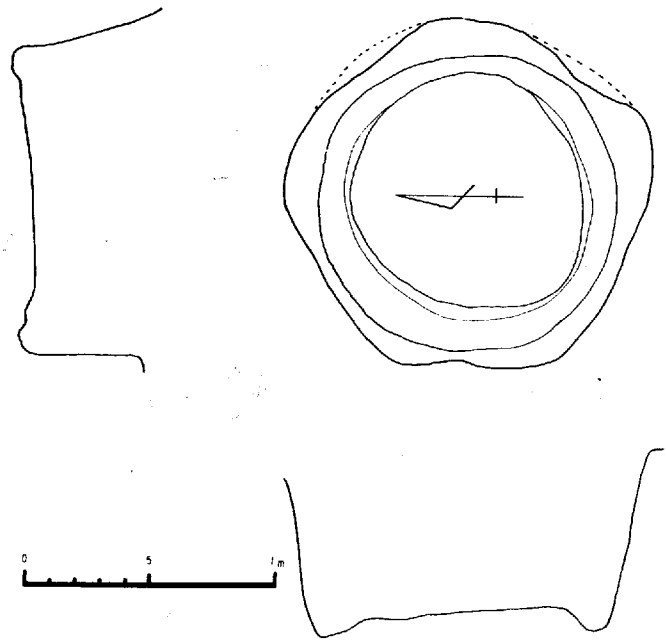
この調査区の住居址群の間々に検出される一連の土壙の一つである。長径3.1m，短径1.2m深さ1.2mの方形土壙である。床面には，柱圧痕とおもえる窪みが3ヶ所検出され，中央には溝状の窪みもみられる。流入土には，地山ブロックの推積がめだち，遺構の検出も困難であった。最下流入土も地山ブロックの推積である。出土遺物は弥生式土器らしき細片が極少でる。遺構の用途は明確ではないが，その規模からまず貯蔵穴状のものと推定される。一次的な使用の後，清掃され破棄された様相である。

（新　東）

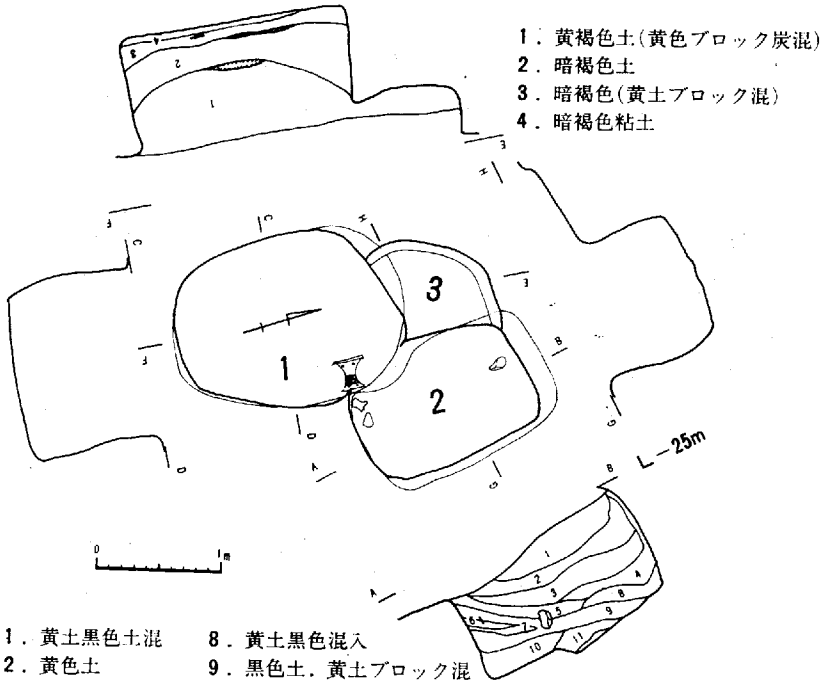
土壙7・8・9（第63図）

1ヶ所に3個の土壙が重複して切合っている。上面に建物の柱穴が位置していることなどで7・8・9とも全掘はしなく，半分だけにとどめて保存につとめた。上面でのプランは，はっきり検出した。切り合いは，土壙7が，土壙8を，土壙8が，土壙9の順序で切こんでいる。3個とも底は平たく袋状になっている。土壙8だけ浅い周溝を確認した。遺物は流入土の中に弥生後期の土器片が含まれていた。

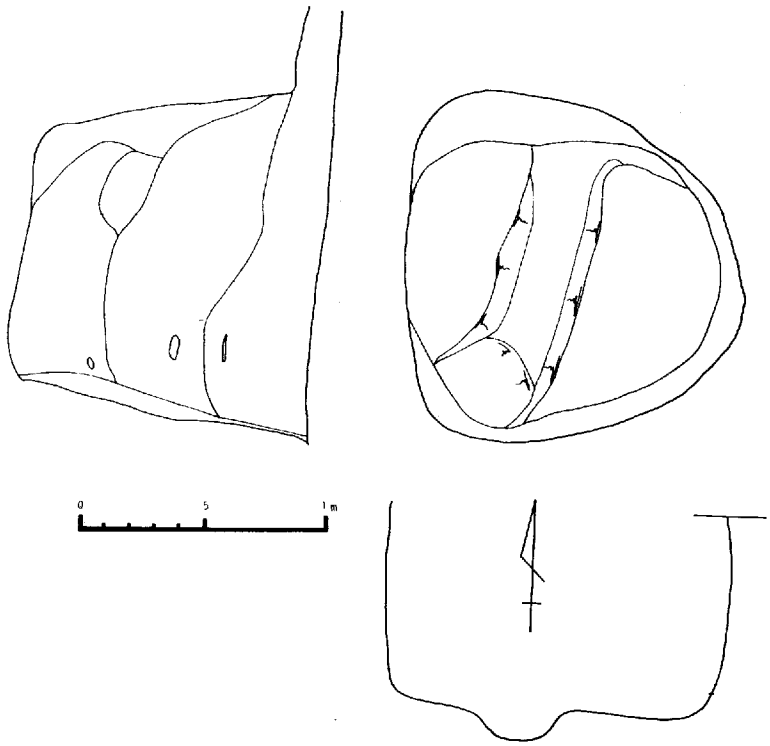
（枝　川）



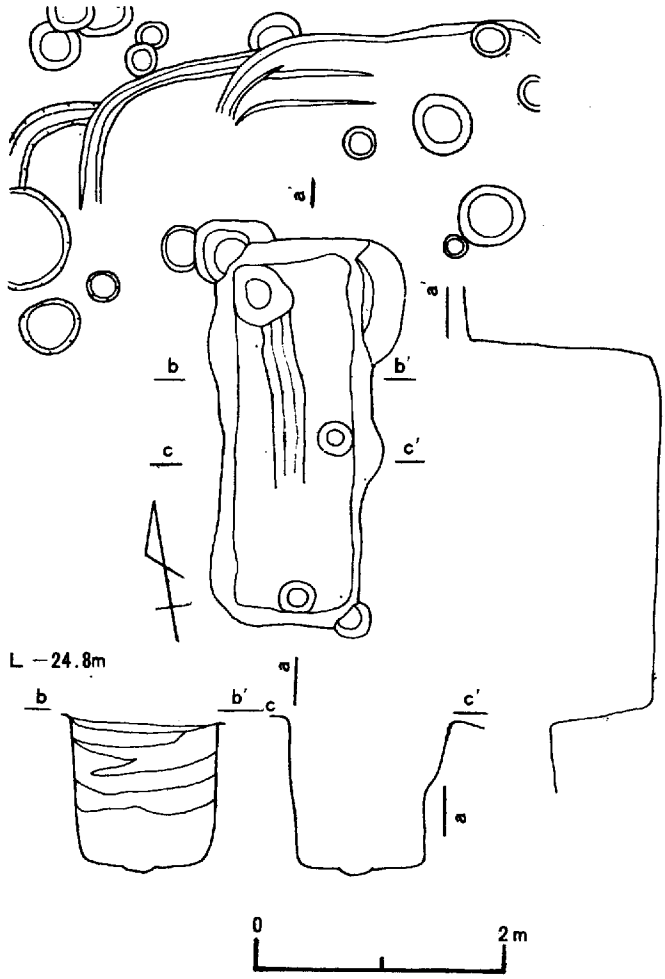
第60図　土　　壙　4



第59図　土　　壙　1，　2，　3



第61図　土　　壙　5



第62図　土　　墳　6

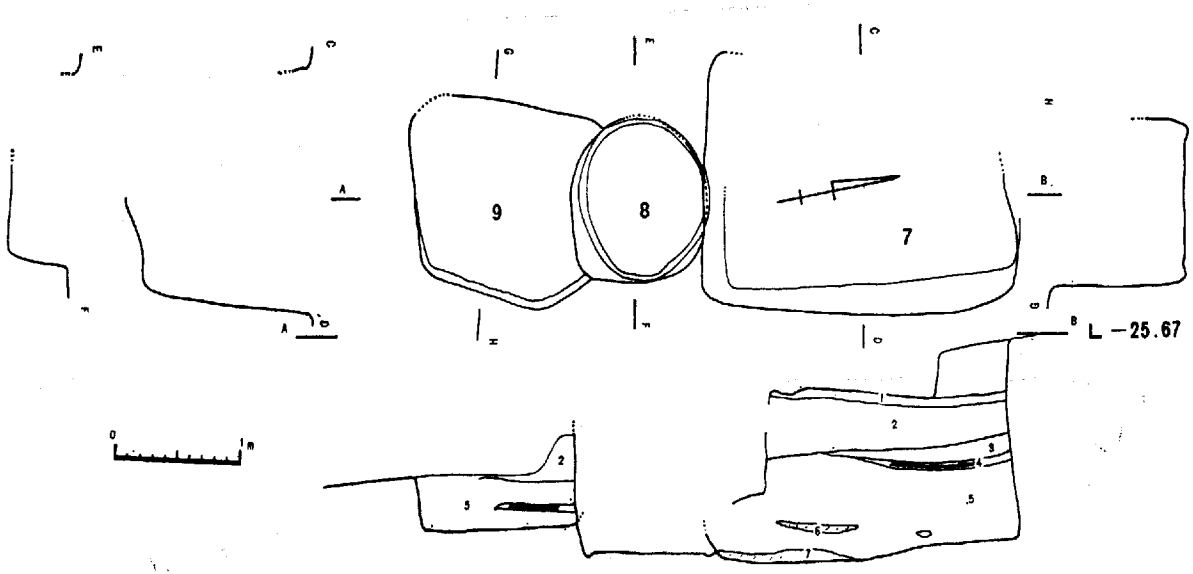
4　柵列〔Ⅰ〕，〔Ⅱ〕，〔Ⅲ〕について（第74図）

第３地点は平野と丘陵の接点にあたる地域一帯に広がる複合遺跡であるが，丘陵端部はカッティングによる整形がなされていたことがトレンチ調査によって確認されている。

このカッティングされた部分に東西に一列に並ぶ柱穴群が確認されたことから，この柱穴群を柵列と考えた。

柵列〔Ⅰ〕，〔Ⅱ〕は建物〔Ⅰ〕の北側にみられる。〔Ⅰ〕の柱穴掘り方は30～50㎝，深さ約30㎝を測る。東西に並んでいるが，柱間は一定ではなく1ｍ～4.5ｍの間隔で９個確認されている。〔Ⅱ〕の柱穴掘り方は30～60㎝，深さ30～50㎝を測る。〔Ⅰ〕と同様にこの柵列は東西に延びているが，柱間も一定ではなく，１ｍ～3.5ｍの間隔で８個確認されているに過ぎない。なお，柵列〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕は一部柱穴が重複するが，柱穴の切り合い関係から柵列〔Ⅱ〕がⅠより古いと云える。

柵列〔Ⅲ〕の柱穴掘り方は30～40㎝，深さ30～50㎝を測る。柱間は１～３ｍの間隔でほぼ東西にのび



1．黄土
2．茶色粗砂
3．黄色地山土
4．暗褐色土、炭
5．茶褐色土、黄色ブロック混
6．茶色土ブロック
7．黄茶色土

第63図　土　　壙　7，8，9

ている。

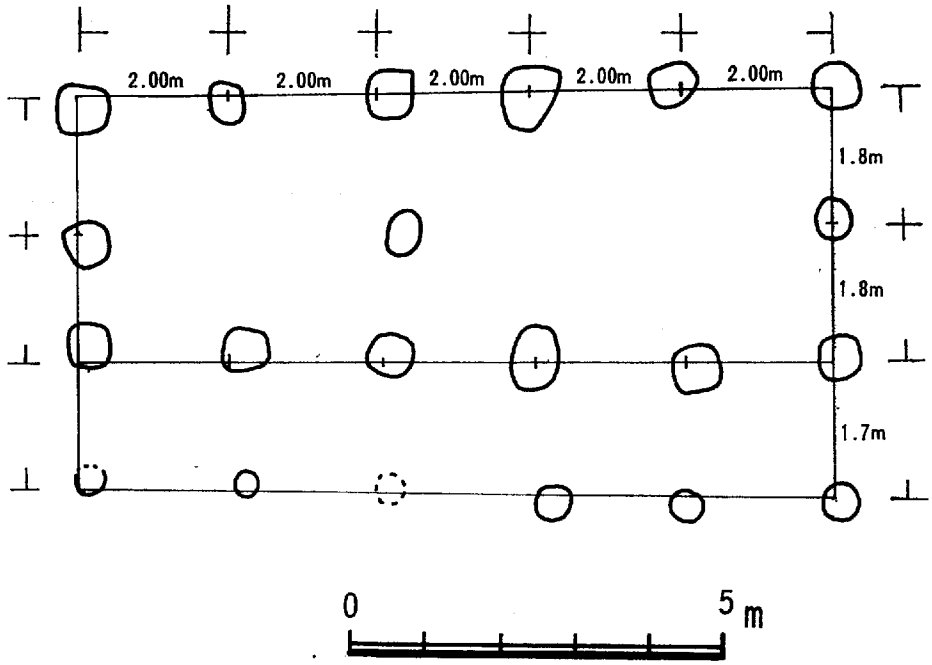
柵列と考えられるこれらの柱穴内には弥生時代後期前葉の土器片がはいっていることから，恐らく柵列は弥生時代後期につくられたものと推定される。そして，この地域の北側の丘陵端部の整形も柵列との関係から弥生時代後期前葉に行なわれたことと推察されるのである。

（松　本）

5　建物〔Ⅰ〕（第64図）

第３地点の一番北側に位置する掘立柱の建物である。この建物は２×５間で南面に庇をもつものである。柱穴掘り方は40～70㎝のほぼ方形を呈する。１間が梁は２ｍ，桁は1.8ｍを測る。また，庇の柱穴掘り方は30～50㎝でほぼ円形を呈する。庇をもつ建物はこの一棟だけである。恐らく８世紀代に建てられたものと考えられる。

（松　本）



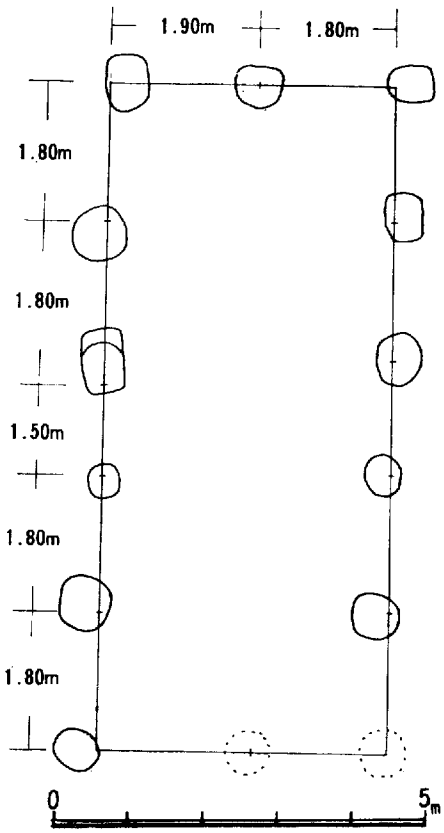
第64図　建　物〔Ⅰ〕平　面　図

建物〔Ⅱ〕（第65図）

建物Ⅰにほぼ直交する格好で建物Ⅱは位置する。南北方向に延びる２×５間の掘立柱建物です。柱穴掘り方は方形を呈し，その大きさは40～80㎝，深さ40～60㎝を測る。１間の梁は1.8ｍを規格としているが，中央の１間のみ1.5ｍを測る。桁は約1.8ｍで梁とほぼ同じ規格である。

柱穴の埋土内には遺物は含まれていない。恐らく建物Ⅰと同じく８世紀代のものであろう。

（松　本）



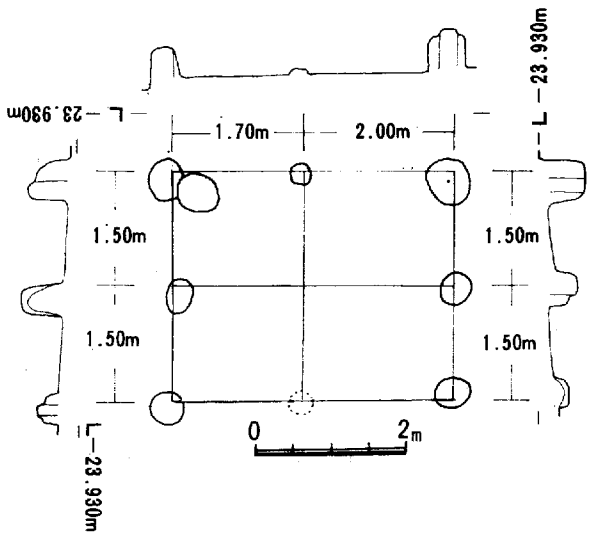
第65図　建物〔Ⅱ〕平面図

建物Ⅲ（第66図）

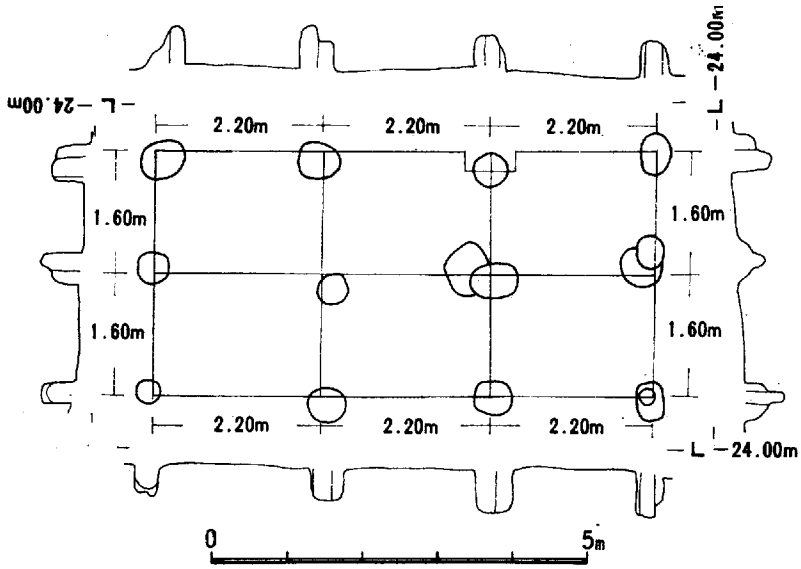
建物Ⅱの東に位置し，建物Ⅳと重複する２×２間の，掘立柱建物である。柱穴掘り方は円形を呈し，その大きさは30～60㎝，深さ20～50㎝を測る。１間の梁は一定でないが，桁は150㎝の間を測る建物である。柱穴埋土内には遺物が含まれていない。

建物Ⅳ（第67図）

建物Ⅱの東に位置し，建物Ⅲと重複する２×４間の建物である。柱穴掘り方は円形と方形の２種があり，その大きさは30～50㎝，深さ40～60㎝を測る。１間が梁は2.2㎡，桁は1.6㎡を測る。なお，建物Ⅳと Ⅲは重複しているが，柱穴の切り合い関係からみて建物Ⅳが時期的に新しいようである。なお，柱穴埋土内には遺物がみられないが，恐らく，建物Ⅰ・Ⅱと同時期のものと考えられる。　　（松　本）



第66図　建　物〔Ⅲ〕平　面，断　面　図



第67図 建 物 〔Ⅳ〕 平 面，断 面 図

建物Ⅴ（第68図）

第３地点の一番南側に位置する建物である。排土の関係で南の桁行は確認できなかったが，２間×６間の建物と想定される。

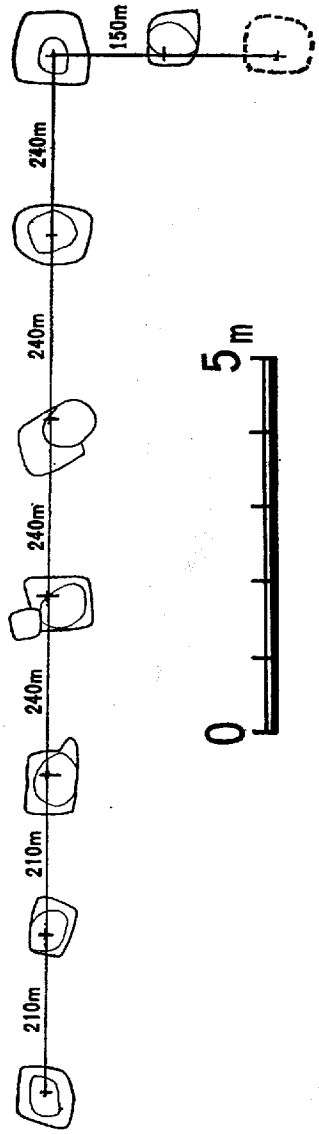
柱穴の掘り方は方形を呈しており，70～100㎝ある。柱穴の間隔は梁行が東から４間は240㎝づつであり，残りの２間は210㎝の間隔である。桁行は150㎝の間隔である。平面で観察した後，保存のためということで埋め戻したため，柱穴の断面は正確に観察できなかったが，全て抜きこられているようであった。年代を推察する決め手はないが，柱穴の規模などから，建物Ⅰ・Ⅱ・Ⅳと同時期のものと考えられる。（松　本）

建物〔Ⅵ〕（第69図）

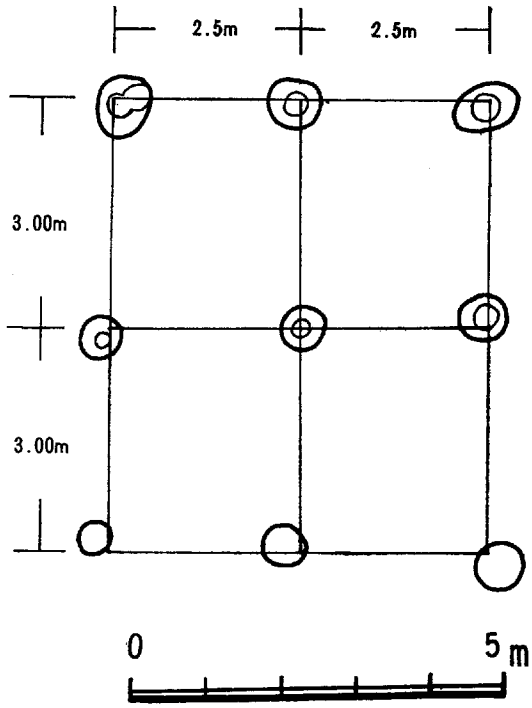
この建物は他の建物と少し離れた位置で検出された２×２間の掘立柱建物です。柱穴掘り方は円形を呈し，大きさは40～60㎝，深さ 30～60㎝を測る。１間の梁は３ｍ，桁は2.5ｍを測る。なお，柱穴埋土内には遺物は含まれていない。おそらく，柱穴の規模からみて，建物Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴと同時期の可能性がある。（松　本）

６　不明柱穴群（第70図）

第３地点の一番西で大形の柱穴が４個検出された。掘り方は方形を呈し，60～70㎝の大きさであった。柱穴の間隔は 180㎝あり，断面での観察結果，全て抜き取られていることが判明した。この柱穴群は当初柱穴の掘り方が大きいことから，掘立柱の一部と推定されたが，これに伴なう柱穴が検出されなかったために，柵列の想定も可能である。いずれにせよ，大形の柱穴が一列に並んで検出されたことは，ここに何んらかの構造物があったことである。（松　本）



第68図　建物Ⅴ平面図



第69図　建物〔Ⅵ〕平面図

7　第３地点出土の土師器（第71図，第２表）

第２地点より出土した土師器（遺構に伴わないもの）には高杯，坩形土器，埦形土器，手捏土器，甑，灯明皿，高台付坏，盤などがあげられる。年代的にみると，４世紀代の高杯から８世紀代の盤，そして平安期の遺物など年代に幅があり，本遺跡の複合状態をよく示しているといえる。

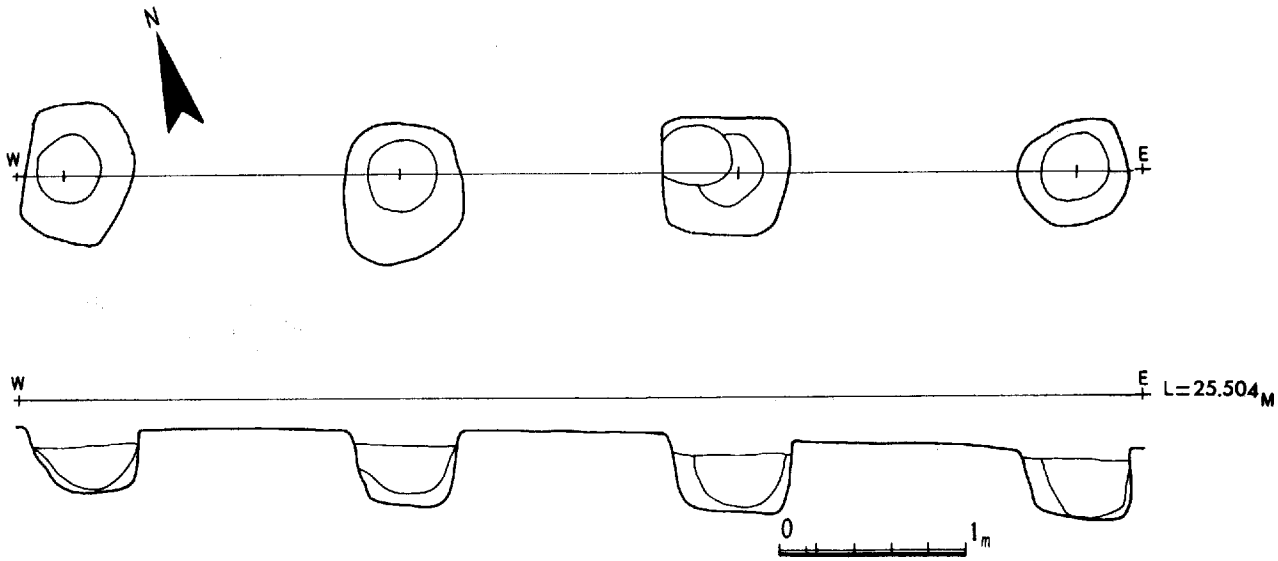
（松　本）

8　ま　と　め

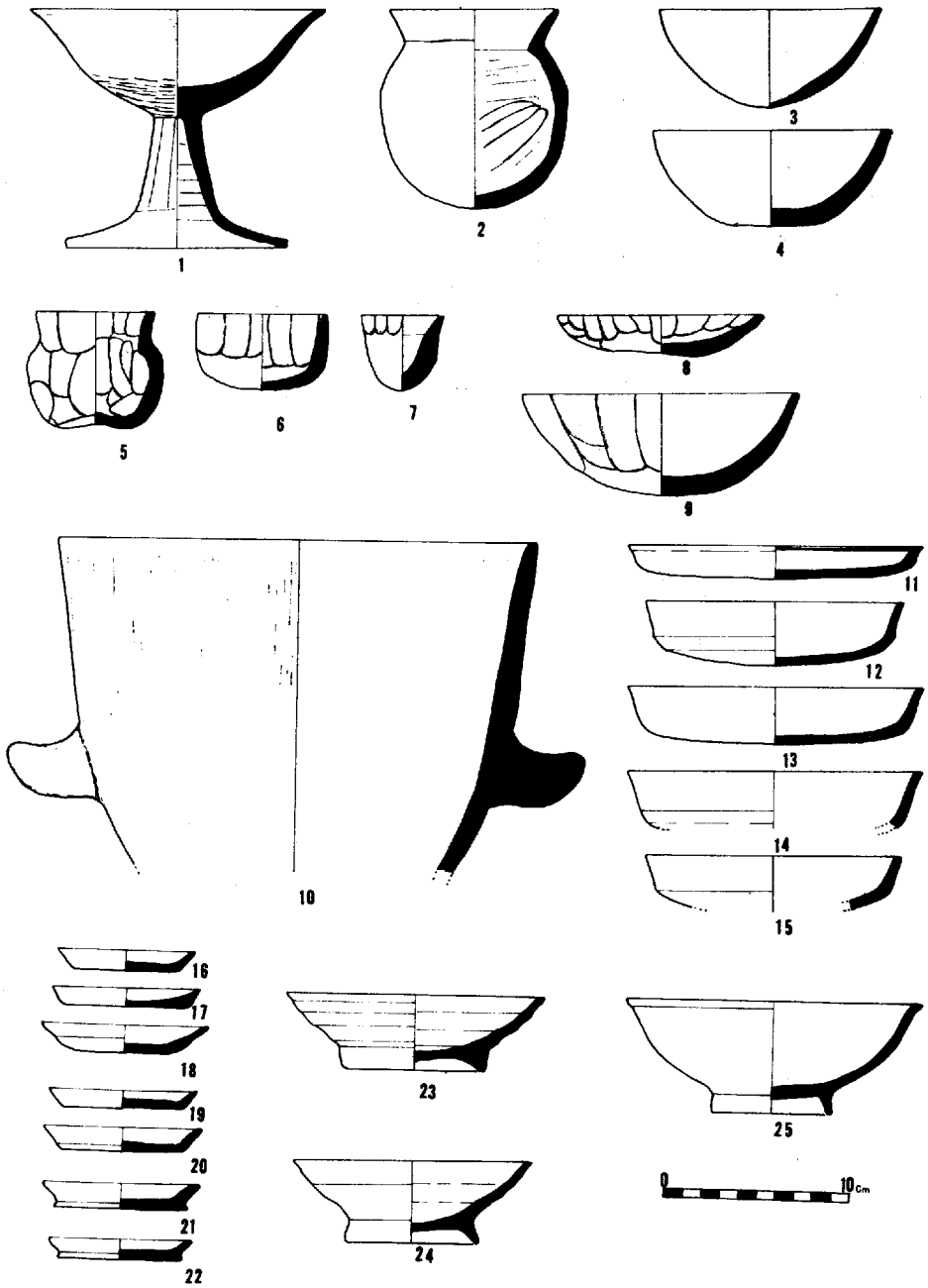
第３地点は，１次調査の中でも他の地点にくらべてみて遺構の密度が高く思わぬ時間を要した。また，建物群などを確認したことは，世論の注目を集め，造成工事が中断する結果にまでいたった。遺構については，弥生時代後期の住居址10軒，古墳時代の住居址12軒，弥生後期の土壙13，柵列，歴史時代の建物６棟と，他に窯の残りと思われる焼土帯等を検出した。

地形をみると北側に丘陵を配し，その丘陵が南西に傾斜する裾に位置しており，生活の場としては

条件のよい所といえる。住居址の配置，また検出の状態などから考えてみると，弥生時代の後期の時点で，丘陵の端部をカッテングして柵をめぐらし，集落を営んでいたと考えられる。この時期は集落の形成場所に明らかに変化がみられ，丘陵端部の接点や第１地点のように北東に開向する立地条件のきわめて悪い谷などにも集落は拡大されているのである。このような事実はたんなる集落の拡大だけではなく，政治的要因をも含んだ集落の拡大といえるのではないだろうか。歴史時代については，奈良時代の建物を６棟確認したのであるが，おそらくこれ以外の周辺の未調査地域にも広がるものと思われる。出土遺物からみてもこの建物に伴なうものと思われる土器が，弥生時代，古墳時代と同様に多く出土している。これら６棟の建物址は，東西方向に延びるものと，南北方向に延びる建物址とに別けられる。この地点について大きくは，弥生時代の後期，古墳時代，奈良，平安の歴史時代の四時期にまたがる複合遺跡といえる。　（枝　川）



第70図　不　明　柱　穴　群　（平面，断面図）

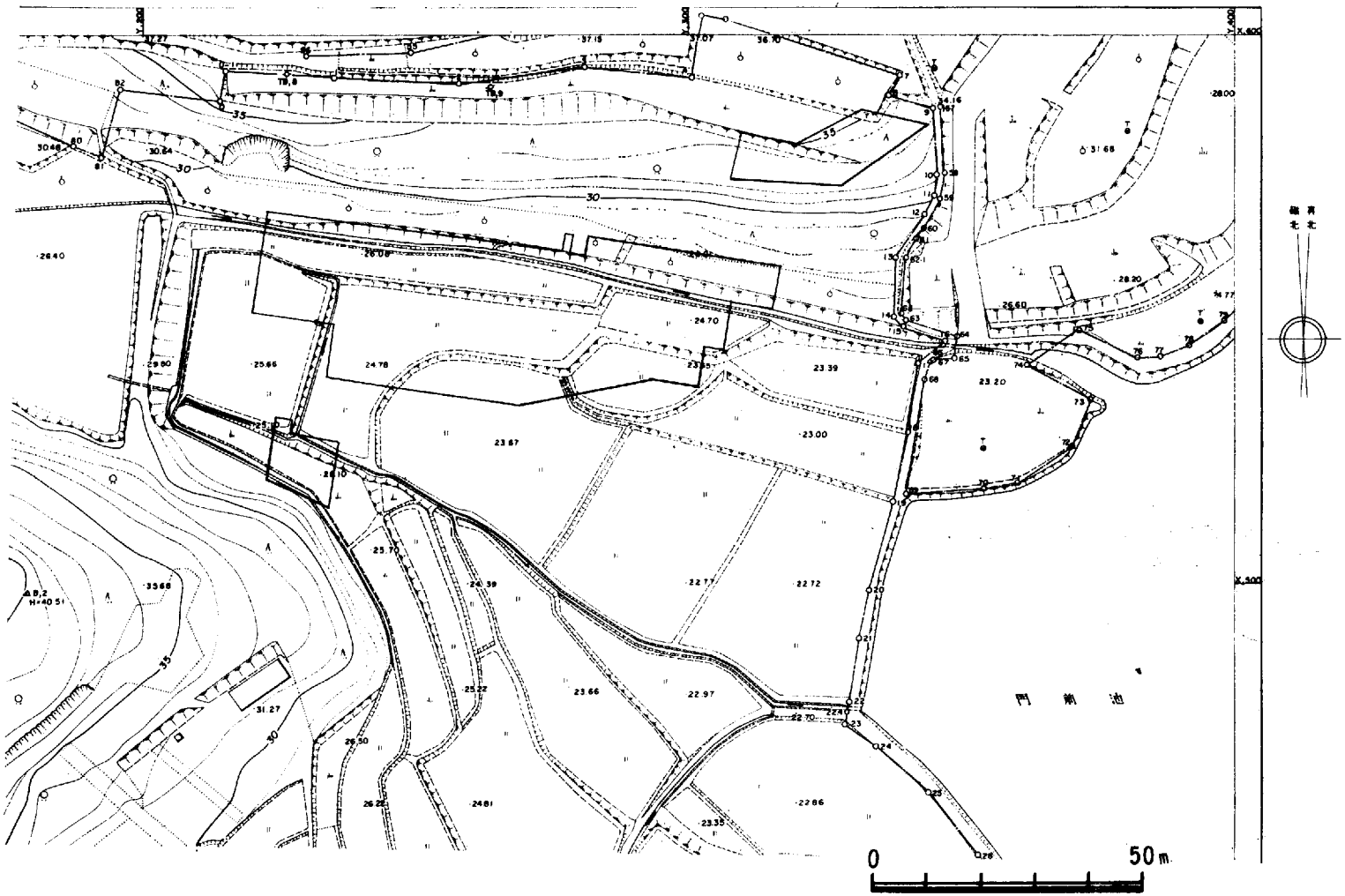


第71図 第 3 地 点 出 土 土 師 器

第2表　第3地点包含層出土土師器一覧表

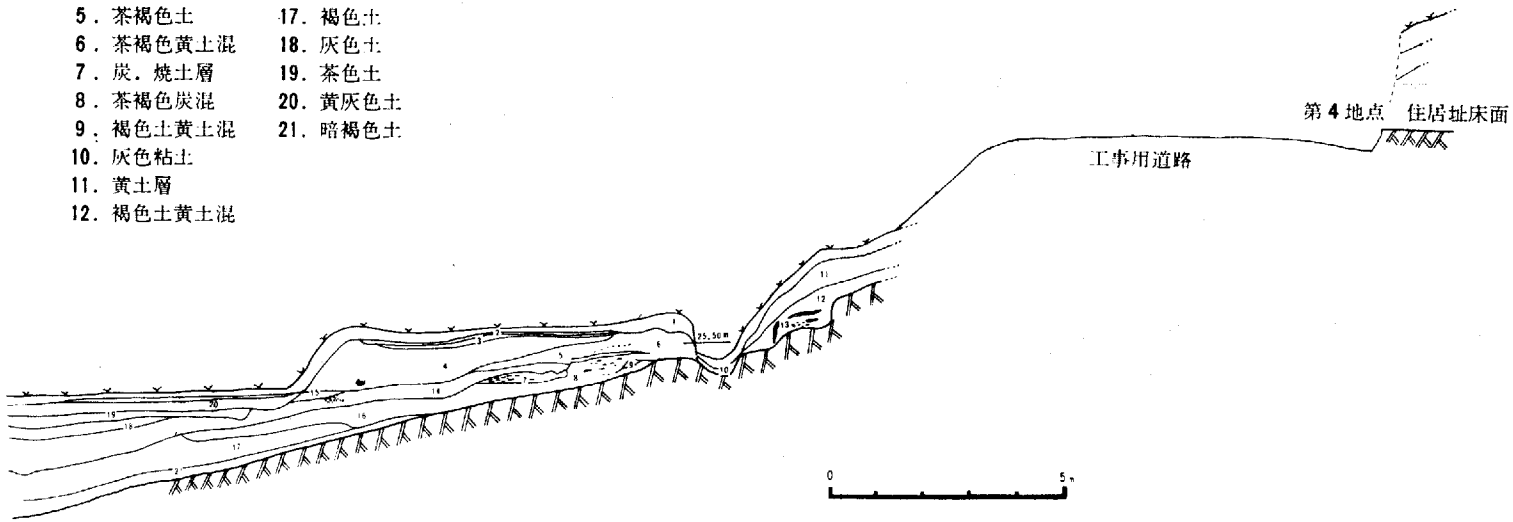
（単位　cm）

図版番号	種類	形態	器高	口縁径	胴幅	胎土	焼成	色調	出土地区	備考
第71図　1	土師器	高杯	12.8	16.0	—	良	良	茶褐色	包含層	杯部は刷毛目調整・（4世紀代）
〃　2	〃	小形丸底土器	10.6	9.1	10.2	悪い	悪い	灰褐色	D — 4 区	（4世紀代）
〃　3	〃	椀形土器	5.3	12.0	—	良	良	茶褐色	〃	古墳時代後期のもの（6世紀代）
〃　4	〃	〃	5.1	13.0	—	〃	〃	黄灰色	〃	〃　（〃）
〃　5	〃	手捏土器	6.0	6.4	7.4	普通	普通	茶黒色	D — 6 区	〃　（〃）
〃　6	〃	〃	4.0	7.0	7.2	〃	〃	灰黄色	B — 13 区	〃　（〃）
〃　7	〃	〃	4.0	4.5	3.7	〃	〃	黄褐色	包含層	〃　（〃）
〃　8	〃	〃	2.0	10.1	—	〃	〃	灰褐色	D — 5 区	〃　（〃）
〃　9	〃	〃	5.4	15.0	—	〃	〃	灰黄色	〃	底に木葉痕跡あり　（〃）
〃　10	〃	甑	不明	26.0	—	普通	良	赤褐色	D — 4 区	（6世紀代）
〃　11	〃	盤	1.8	16.0	—	良	良	〃	C，D—8，9区	表，裏とも丹塗り　（7世紀末～8世紀前葉）
〃　12	〃	〃	3.4	14.0	—	〃	〃	〃	D — 1，2区	表，裏とも丹塗り　（8世紀代）
〃　13	〃	〃	3.0	16.0	—	〃	〃	〃	〃	〃　（〃）
〃　14	〃	〃	不明	11	—	〃	〃	〃	〃	〃　（〃）
〃　15	〃	〃	〃	14.0	—	〃	〃	〃	〃	〃　（〃）
〃　16	〃	灯明皿	2.1	7.4	—	普通	普通	黄褐色	C — 18 区	糸切り（？）　平安時代（9世紀代）
〃　17	〃	〃	2.0	8.0	—	〃	〃	〃	〃	ヘラ切り
〃　18	〃	〃	1.5	9.0	—	〃	〃	赤褐色	〃	〃　〃　（〃）
〃　19	〃	〃	2.0	8.0	—	〃	〃	灰色	〃	〃　〃　（〃）
〃　20	〃	〃	1.3	8.6	—	〃	〃	黄褐色	〃	糸切り　〃　（〃）
〃　21	〃	〃	1.4	8.5	—	〃	〃	〃	〃	〃　〃　（〃）
〃　22	〃	〃	1.1	7.0	—	〃	〃	赤褐色	〃	ヘラ切り　〃　（〃）
〃　23	〃	高台付杯	4.0	14.0	—	良	良	〃	C，D — 4 区	7世紀代
〃　24	〃	〃	4.4	13.7	—	〃	〃	黄灰色	D — 4 区	平安期（10世紀代）
〃　25	〃	〃	6.0	16.0	—	〃	〃	灰黒色	建物跡延長トレンチ	平安期

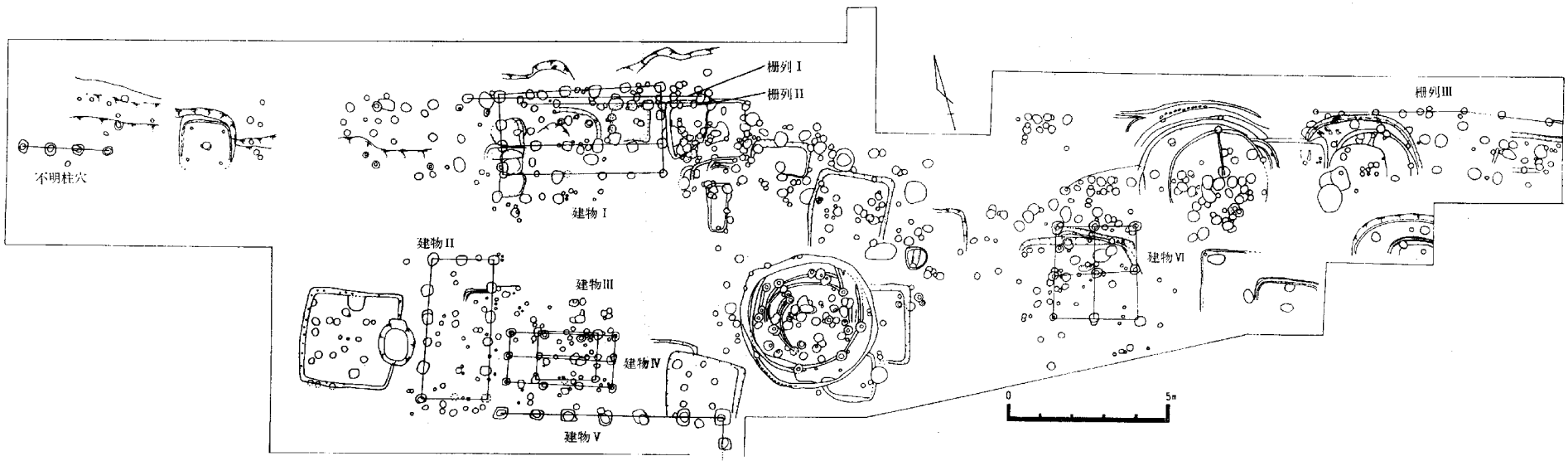


第72図　第　3　地　点　地　形　図

1．表土
2．床土
3．鉄分層
4．黄茶色土
5．茶褐色土
6．茶褐色黄土混
7．炭．焼土層
8．茶褐色炭混
9．褐色土黄土混
10．灰色粘土
11．黄土層
12．褐色土黄土混
13．炭．焼土
14．褐色土混(包含層)
15．茶褐色土
16．茶褐色土．黄土ブロック
17．褐色土
18．灰色土
19．茶色土
20．黄灰色土
21．暗褐色土



第73図　第　3　地　点　横　断　図



第74図　第　3　地　点　遺　構　配　置　図

第5章　第　4　地　　点

1　立　　地

門前池の北方向から北西方向に位置する丘陵傾斜地から，門前池と縄文寺池の間の水田地帯に弥生時代の遺物と古墳時代（土師，須恵）の遺物が確認された。縄文寺溜池によって営まれる水田地帯より上方のこの傾斜地は，古くから開墾が行なわれている。丘陵の傾斜地を大きく削平し，段状の畑および水田が営まれている。丁度この段状の水田面に工事用仮設道路の計画が打ち出されたため，段状壁面の清掃を行なった結果，後記する住居址群の断面が検出された。標高30*m*～32*m*に位置する住居址群遺跡を第4地点と呼称する。開墾によって削平されたこの壁面には，若干の重なりをもったものも含めて，11軒の住居址が検出された。そのうち1号住居址～8号住居址までは，断面のみの精査を行い保存されることになった。9号から～12号住居址は，団地幹線道路敷のためやむなく記録保存となった。なお，これら3軒の住居址の後方にもあらたな住居址の痕跡が認められ計6軒の住居址の存在が明らかとなった。　（新　東）

2　住　　居　　址

1～8号住居址

1～8号住居址は，仮設道路建設の際に発見された住居址である。これらの住居址は，造成地外になるため，断面での確認にとどめた。その中で遺物が出土したものについては列記した。

5号住居址出土遺物（第75・76図）

仮設道路建設の際に発見された住居址の一つである。この住居址を含め，1号住居址から，8号住居址まで保存することになったが，住居断面発見の折りと断面清掃の時，図のような多量の遺物が出土したのでその実測図を付記する。壺形土器及び高杯形土器は細片で他の土層との混入も考えられるが，第72図，（7・8）の器台形土器は，5号住居址に伴って発見されている．7は，口縁径27*cm*，脚底径25*cm*，器高39.2*cm*を測り，2段に長方形の透しがみられる。長方形透しの間に縦列に5つ並びの円形の透しがある。胴部には発達した凹線文が施されている。また口縁部は外反し端部には凹線文が施されている。色調は茶褐色を呈する。8は，口縁径23*cm*，脚底径22*cm*，器高30*cm*を測る。胴部の直中に大形の長方形透しがある。発達した凹線文の施文がみられ，特に口縁端部はシャープに外側に発達している。色調は黄褐色を呈する。　（新　東）

9号住居址（第77図）

丘陵が谷に傾斜する肩部に立地している。住居址の半分はすでに道路で削り取られており，残りの部分もほとんど削られた状態である。上面では，12号住居址があり，切合った形での検出である。プランは残存している溝，柱穴などからみて径4*m*ぐらいの不整形な隅円方形の竪穴住居址である。この住居址の柱は，検出した柱穴の配置からみると四本柱である。中央部分ではこの住居に伴うもので，幅60*cm*，深さ50*cm*のピットがある。このピットの南側では，焼土，炭の推積が多く，炉跡と想定

できる。他に北よりの周溝ぎわに上面平たな河原石が１個，床面に附着していた。

出土遺物（第78図）

出土遺物は，すくなくわずかに柱穴のそばの床面に附着して壺の一部分が出土した。他に，サヌカイト片が出土した。その内６片は石鏃である。それにガラスの勾玉の半分が出土している。(1)は弥生式土器で，壺の口縁部分が13㎝ある。色は赤褐色を呈している。口縁部は上方および下方にはり出し，外面に横線文がほどこしてあり４本の棒状貼付文が縦方向に配している。勾玉(2)は，半分はかけており，ガラスで水色をしている。石鏃（３・４・５・６・７・８）は，サヌカイトの石鏃である。

二等辺三角形状のものが四点と尖基状のもの２点の計６点である。

住居址の時期は，出土した土器からみると，弥生時代中期後半と想定される。　　（枝　川）

10号住居址（第79図）

丘陵傾斜中腹に検出されたこの住居址は，竪穴掘り形50㎝から60㎝という最も顕著な状態で現れた。後世の開墾のため，東南部分は半分を削平している。同住居址内で改築の折，縮少されている。最初の住居址は，一辺5.4ｍで，方形に近い隅円方形を呈し，４本柱の住居址と考えられる。この住居址の北西の周溝を重複して，一辺4.5ｍの隅円方形の住居址が検出された。周溝の幅は4.5ｍから50㎝と広く，深さは，20㎝を測る。主柱は４本柱と考えられるが，そのうち２本が検出され，他は開墾のため欠損している。柱穴は径50㎝，深さ60㎝と径30㎝，深さ40㎝。この住居址の丁度中央部に，土壙が存在する。住居址の内部施設と考えられないこともないが，単独の土壙として扱うほうが妥当であろう。炉跡，中央施設は，丁度この土壙で欠損しているものと考えられる。

出土遺物（第80図）

住居址床面から周溝にかけて，完形の壺，高杯土器などその住居址に伴う出土遺物がみられる。

壺形土器（１～３）いずれも頸部に発達した凹線を施し，１，２は口縁端部に４条から６条の凹線を施し，その上に三本の棒な粘土を貼付している。２は，口縁下部に２㎝交互に穿孔がみられる。その内側には粘土紐の貼付がある。いわゆる飾られた土器であろう。口縁部径は，26㎝と19㎝。３は唯一の完形品で，口径17㎝，胴径27㎝，底部径９㎝，高さ39㎝を測る。頸部には凹線文を施しているが，口縁端には凹線文はない。色調はいずれも黄褐色で，ヘラによる整形が顕著である。

甕形土器（４～６）口縁径20㎝から12㎝のものがある。口縁端部に凹線文の施文がみられるものと無いものとがある。口縁部は外反し，そして折り曲げ内向し，その内側には，接着部分が明瞭に確認される。壺，甕共いずれも精緻で器壁は薄い。

高杯形土器（７～９）脚部に三角透しを施文しているものと，沈線を施しているものとがある。７は完形品で，口径21㎝，脚底部径11㎝，高さ19㎝を測る。杯部口縁は直角に近く立ち上り，上下に凹線を施す。杯部と脚部は同時に作られ，杯底部は粘土板を貼り付けている。脚部には三角透し文が連続するが，内側まで孔はなさない。脚底端は外へ張り出し，三角透しと共にこの時期の特徴である。８は７とほとんど同形式のものであるが，脚部が低く，杯部が大きいもので，隣に位置する13号住居址出土の大高杯と同形式のものである。色調は黄褐色を呈し，器壁は薄い。　　（新　東）

11号住居址流入土内出土遺物（第81図）

12号住居址は，10号住居址の隣り東南方向にあたり，周溝を残すのみである。そのくぼ地には多量の弥生式土器を推積していた。同時期の一括した土器と考えられ，各種の形器がみられ，非常に貴重な資料である。

壺形土器（1～5）

口縁径が，14cmから8cmのものがみられる。頸部には発達した凹線文があるものと無いもの，またヘラ状施文具による列点文を施すものもみられる。口縁部は外反し，いったん折り曲げ内向する。その背部に凹線を施し，数条あるものから一条みられるものもある。器壁は薄い。

甕形土器（6・7・17～19）

大形のものと小形のもの色々出土している。口縁端部に凹線文が施され，器壁は薄く非常にシャープである。18は異形で，口縁部は直口し，その外側に凹線文を施文している。上向端部にも3条の凹線施文がみられ，穿孔がある。底部は平底でわずかに上る。

高杯形土器（9～13・14～16）

脚の長い高杯と，脚部が短く杯部が大きい2種がみられる。9は脚部に3個並列の円孔の施文がみられ，脚底端部は外へ張り出している。杯部底は貼り付けである。これに伴うと考えられる杯部は，口縁部が立ち上り，わずかに外側への発達のきざしがみえる。13のように外側に沈線を施し，椀状のものもみられる。短脚のものは，14に代表され，台付鉢とでも称すべき大形のものである。口径51cm脚底径17cm，器高25cmを測る。杯部高18cmに対し，脚部高は7cmである。杯部口縁立ち上りは若干内向する。脚部に三角透しのあるもの，円孔の穿きのあるものなどがみられる。色調は全体に黄灰色で，各部の作りが精緻でシャープである。時期は弥生中期終末に比定している。　（新　東）

12号住居址（第77図）

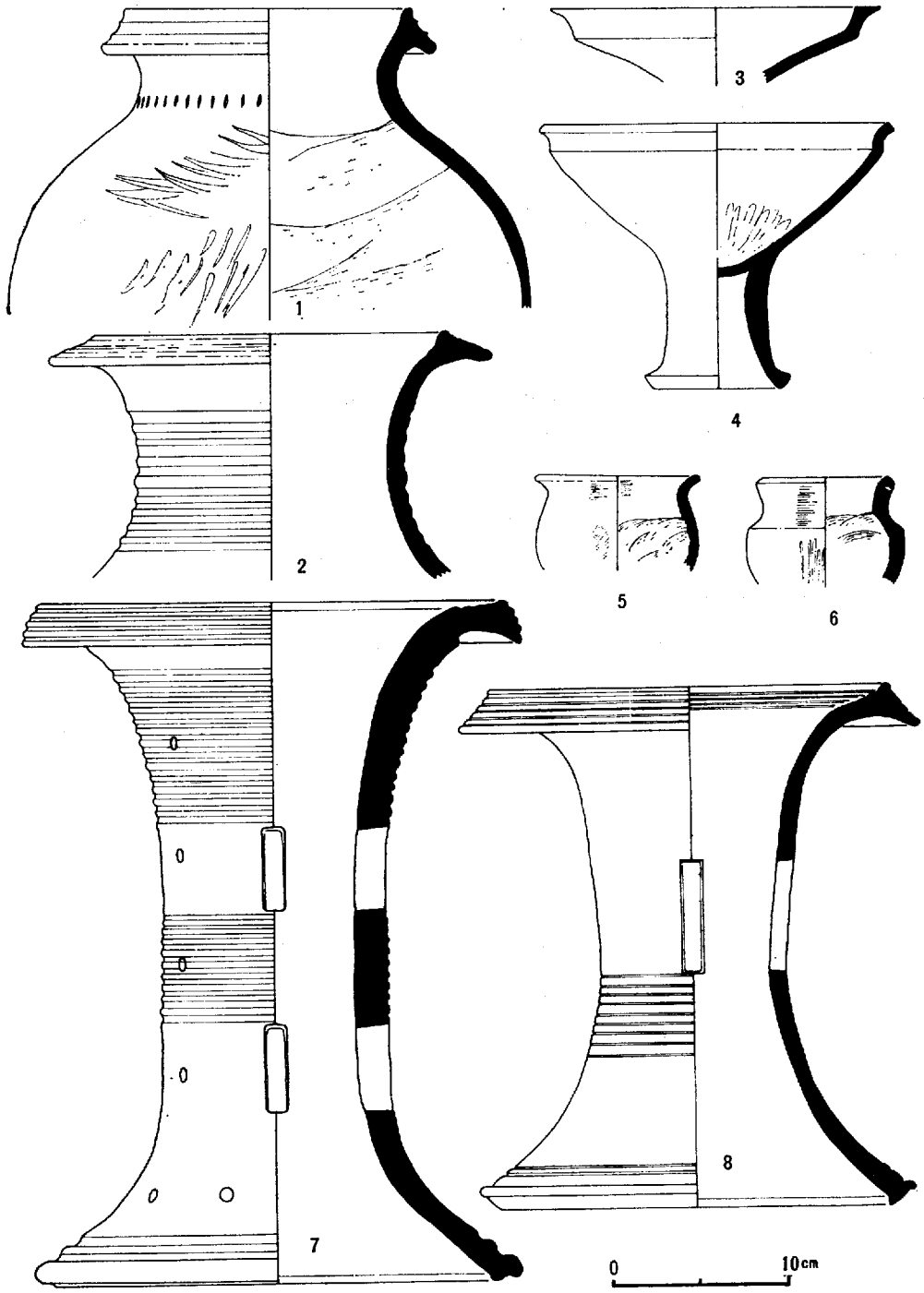
9号住居址の上面に約1/2が重複した状態で検出した。わずかに残っている溝，柱穴などからみると，長径3.5mの方形プランの住居址である。床面の状態は良好ではなくほとんど削られている。柱は四本柱の配置で確認できる。中央には，幅50cm，深さ40cmのピットがある。出土遺物は，わずか1片溝の中から，コップ状の形で取手がつく土器が出土した。　（枝　川）

3　土　　壙　（第79図）

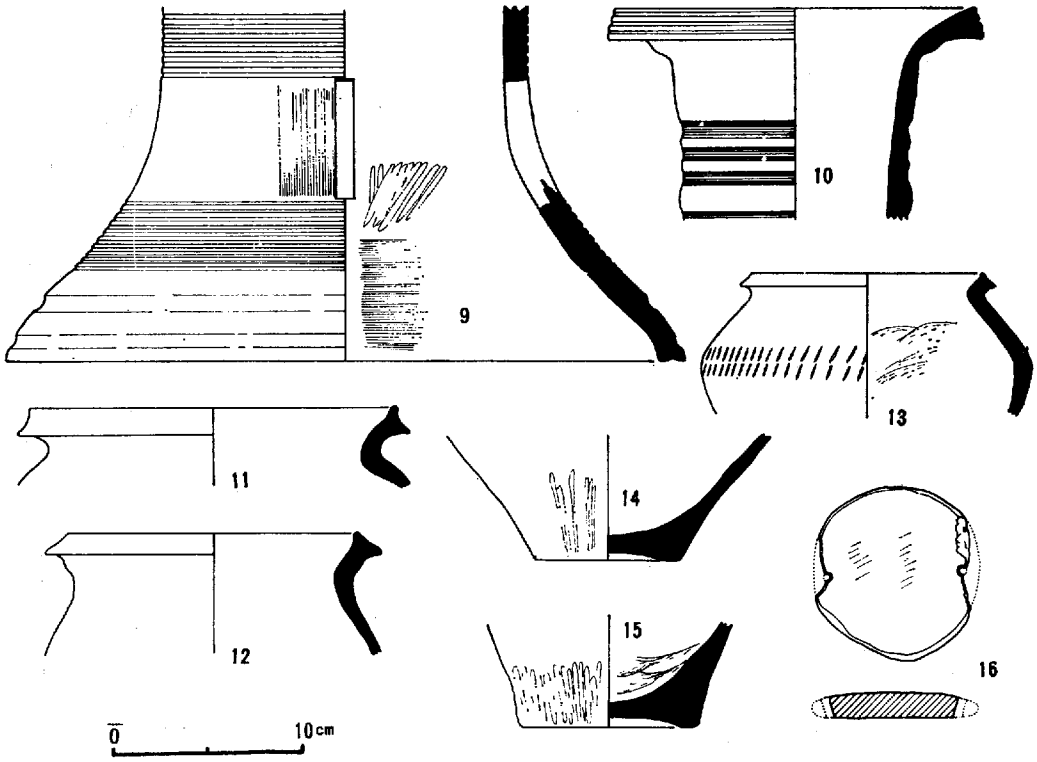
10号住居址の中央に検出された。長径1.9m，短径1.2m，深さ1.2m。土壙は袋状を呈している。中からは弥生式土器の細片が若干出土している。　（新　東）

4　溝　（第82図）

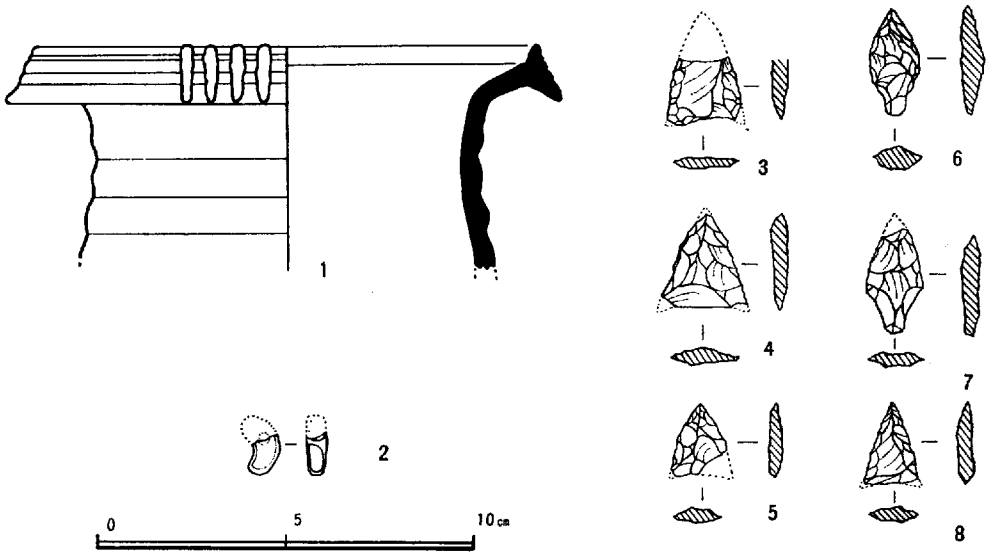
第4地点の丘陵の南端に位置しており，北から，南西方向に走っている。幅は約4.5m，深さは2mでV字の大溝である。遺物は，第5地点から出土した白鳳時代の平瓦の破片や，灯明皿などが出土した。　（枝　川）



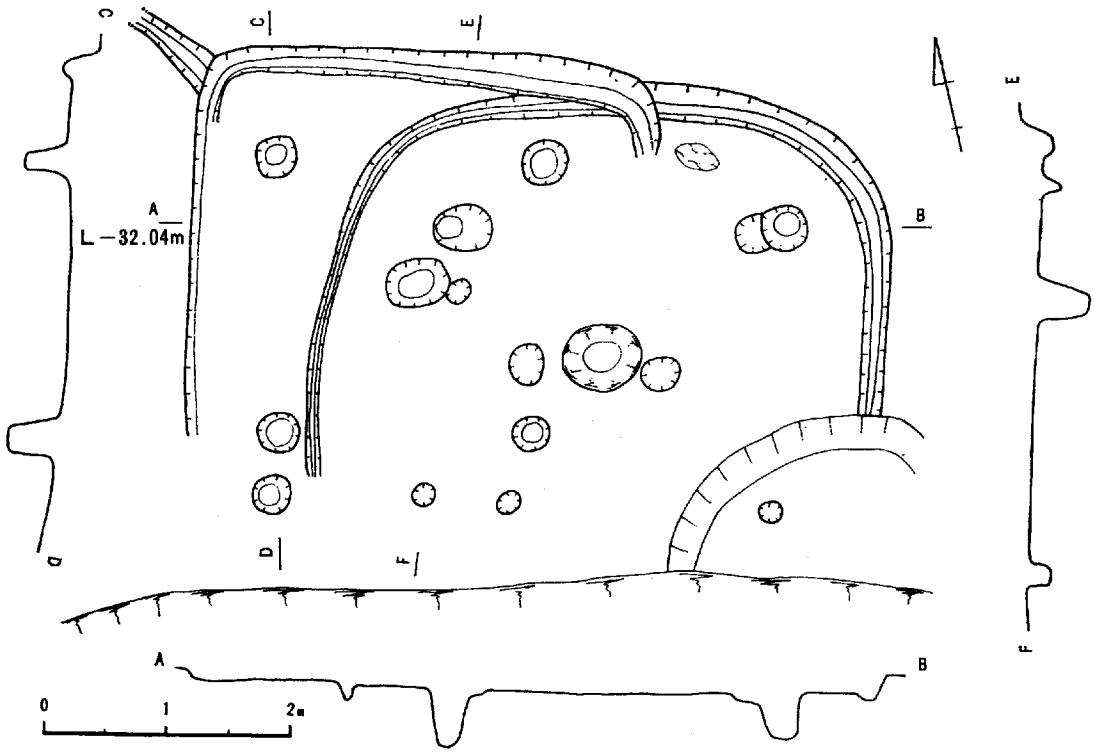
第75図　5 号 住 居 址 出 土 遺 物



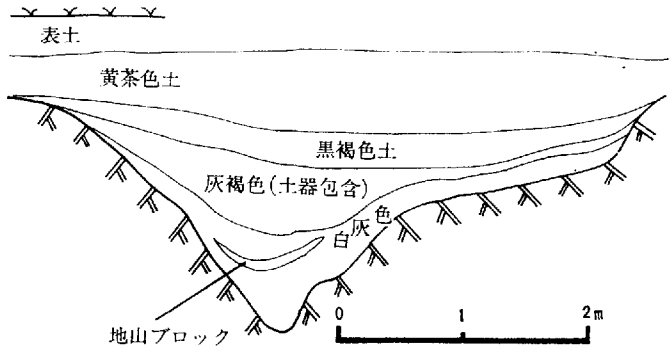
第76図　5 号 住 居 址 出 土 遺 物



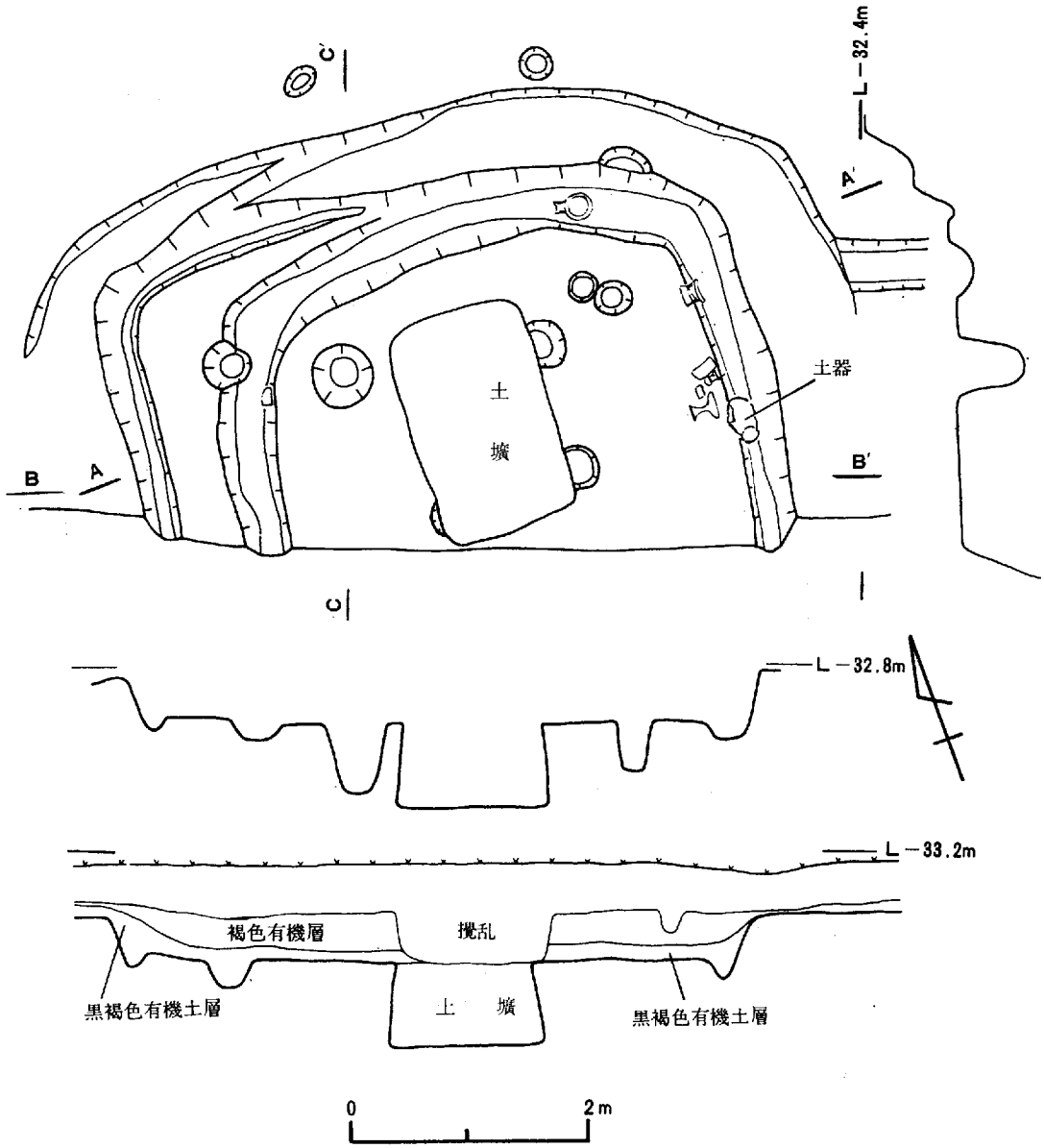
第78図　9 号 住 居 址 出 土 遺 物



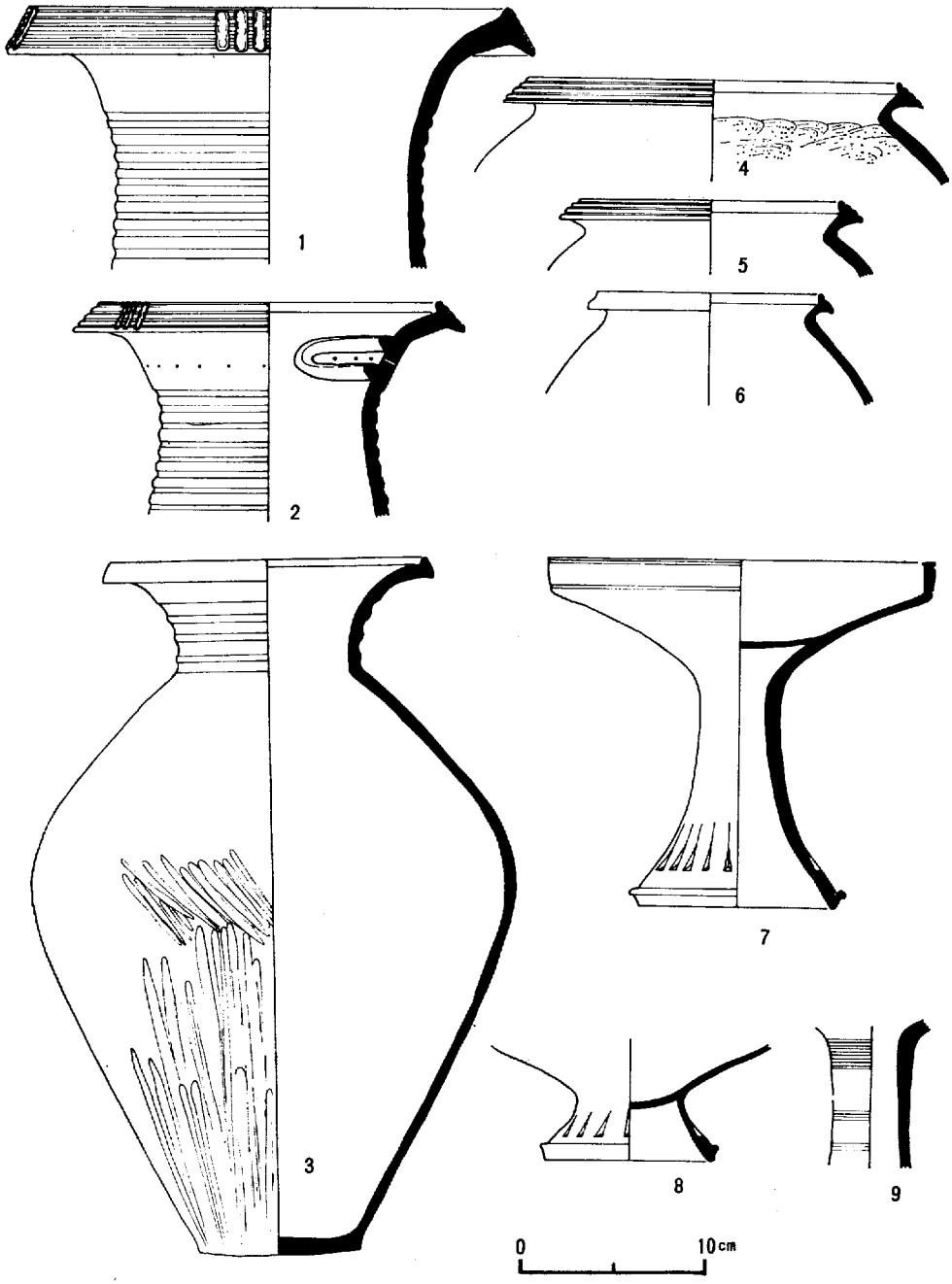
第77図　9　号　住　居　址



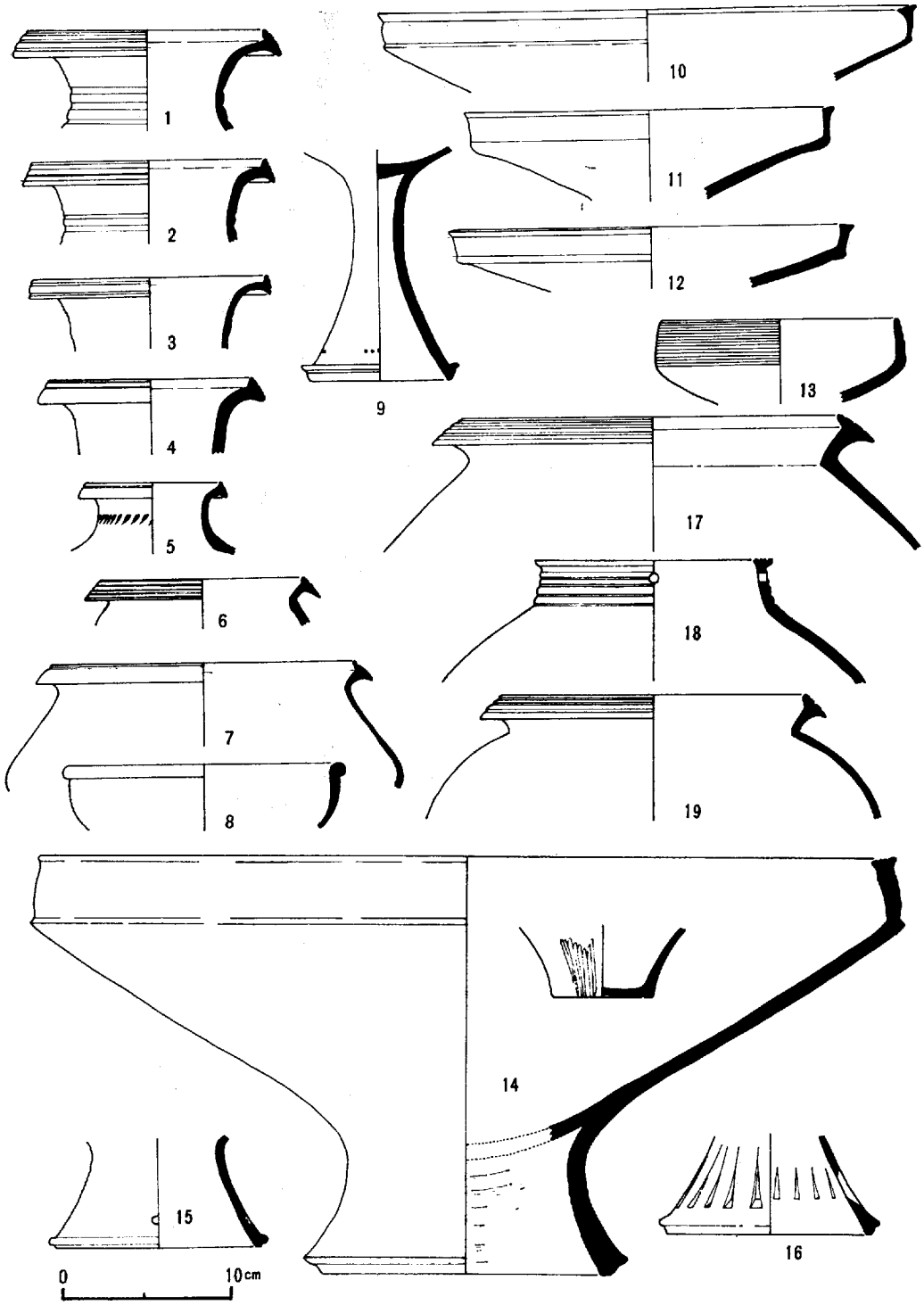
第82図　溝　断　面　図



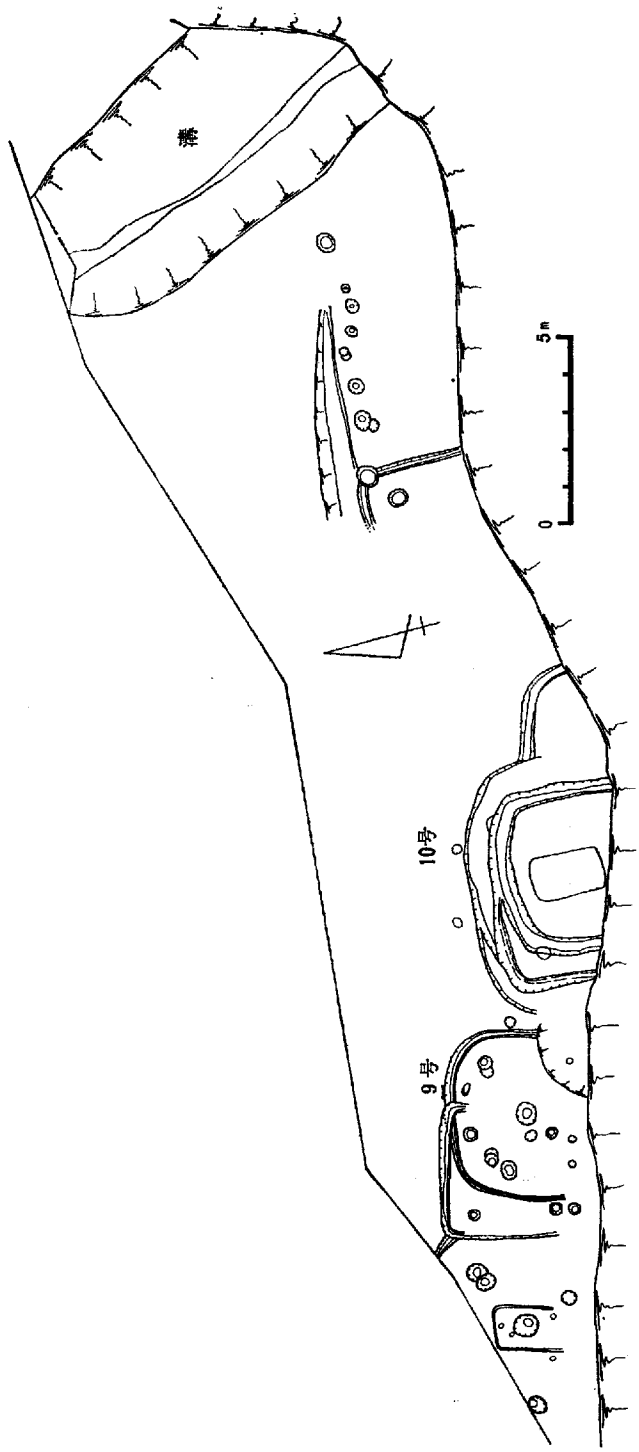
第79図　10　号　住　居　址　及　び　土　壙



第80図　10　号　住　居　址　出　土　遺　物



第81図　11 号 住 居 址 流 入 土 内 出 土 遺 物



第83図 第 4 地 点 遺 構 配 置 図

第6章　第　5　地　　点

1　立地および調査方法（第84，85，86図）

第５地点は山陽町大字熊崎に所在し，山陽団地内を横断する幹線道路の東側入口附近に位置する。ここは団地造成地内における３大池の１つである門前池の東側にあり，この附近は丘陵と水無川と砂川の合流によって形成された沖積平野との接点になる所である。熊崎地区の丘陵は龍王山(312.6*m*)から派生する標高30～45*m*の低丘陵であり，緩斜面には果樹栽培が盛んに行なわれている土地でもある。

かつて，本遺跡の北側丘陵上にユンボーを入れ，苗木を植えるため深く掘り下げた時に多量の土器と遺構が検出されており，この幹線道路敷下にも当然集落址が予想されることから発掘調査が計画された。そして，本格的な発掘調査前に幹線道路敷を中心に５ケ所のボーリング地点を設定し，予備調査を実施した。その結果，大まかではあるが幹線道路敷以外には包含層及び遺構は認められないことが判明した。とりわけ幹線道路の東側部分は砂川による沖積地であることから，Ａ～Ｑの13区で埋積状況を確認調査するにとどめた。

第85図の如く，第５地点は地形に沿って４*m*グリッドを設定し，遺構の存在が予想される地域は全域調査したのである。　　（松　本）

2　住　　居　　址

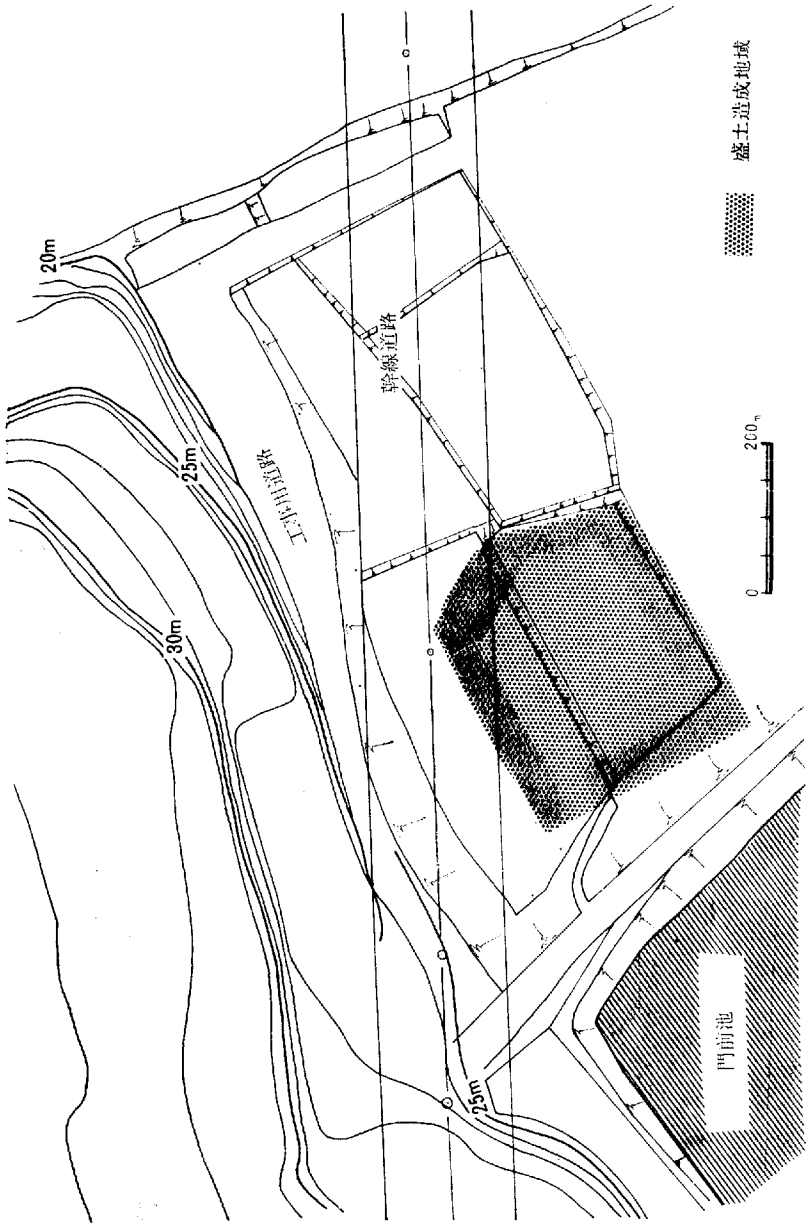
１号住居址（第87図）

Ｂ―４，５区，Ｃ―４，５区に位置する。白鳳時代と推定される瓦溜りを持つ造成面より下に（後記断面図）黒褐色流入土を持つ住居址である。出土遺物からみて，古墳時代のもので，須恵器の杯，土師器の甑，坩，椀を出土している。傾斜地に位置しているため，一辺のみを残している。住居址の床面の長径が５*m*で隅円方形と考えられる。焼土が住居址のほぼ中央に存在し，床面に多量の木炭片が散っていて火事にでもあっている模様である。　　（新　東）

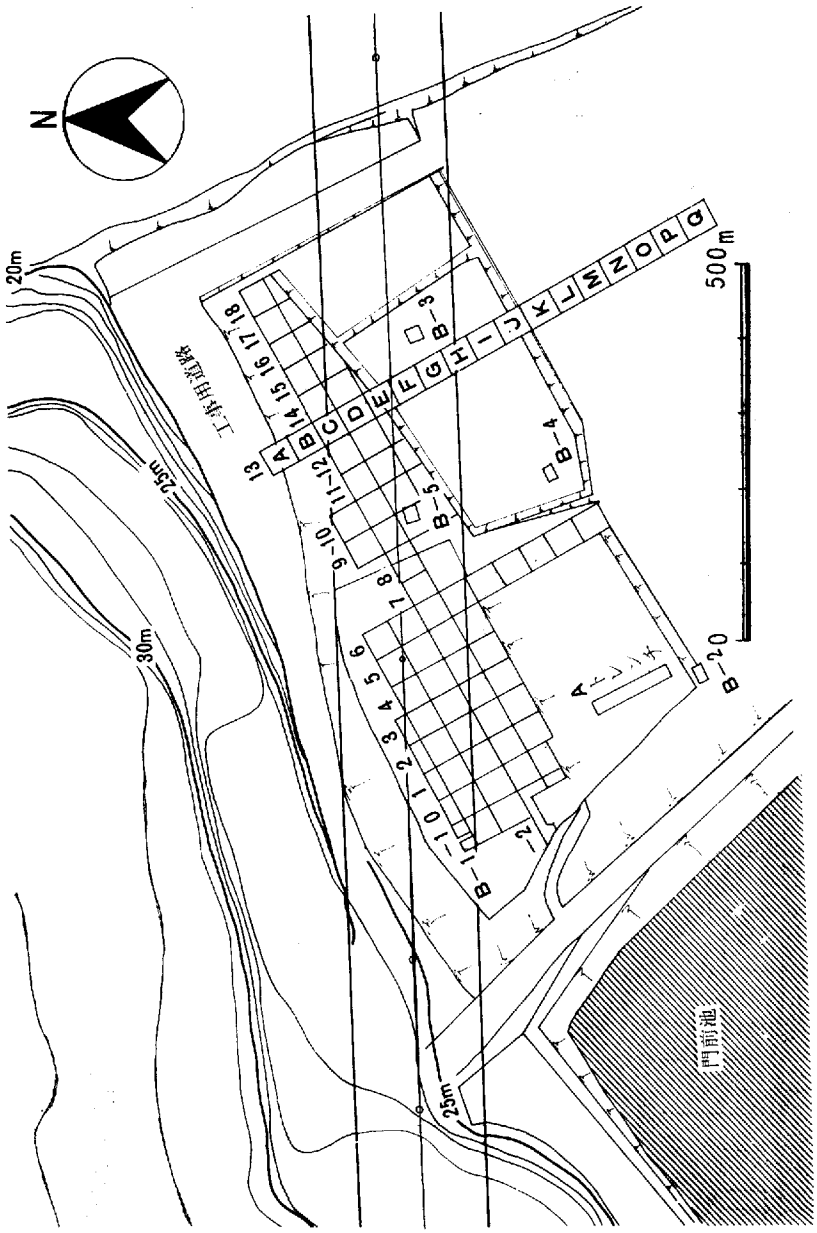
3　瓦溜について

瓦溜と思われる所は３ケ所認められた。出土範囲はＢ―１，２，３区，Ｃ―１，２区であり，特に瓦が多量に出土した地点はＣ―１区である。この瓦溜りを形成している３ケ所は中世もしくは近世における造成やブドウ畑の掘り返しを免れたところである。Ｂ―２区，３区の瓦溜りはブドウ畑の掘り返しから免れた低い窪みであり，ほぼ完形の軒丸瓦，平瓦がまとまって出土した。Ｂ―１区，Ｃ―１区の瓦溜は小石敷遺構の下約30*cm*から平瓦を中心に多くの瓦が人工的に敷きつめられたような状態で出土した。また，６世紀前葉～８世紀代の須恵器が含まれていた。

（松　本）



第84図 第 5 地 点 造 成 範 囲

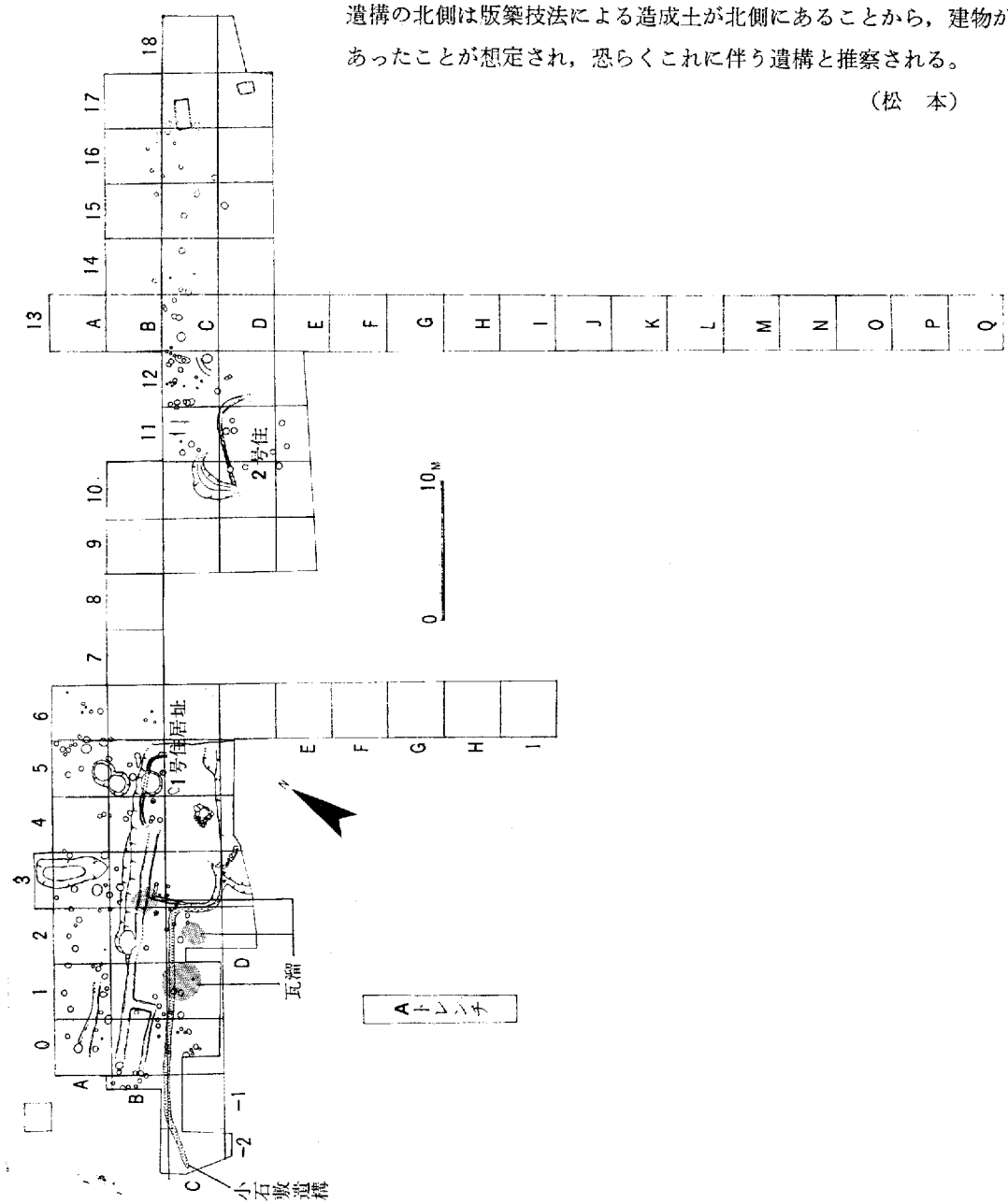


第85図　第５地点地形およびグリッド設定図

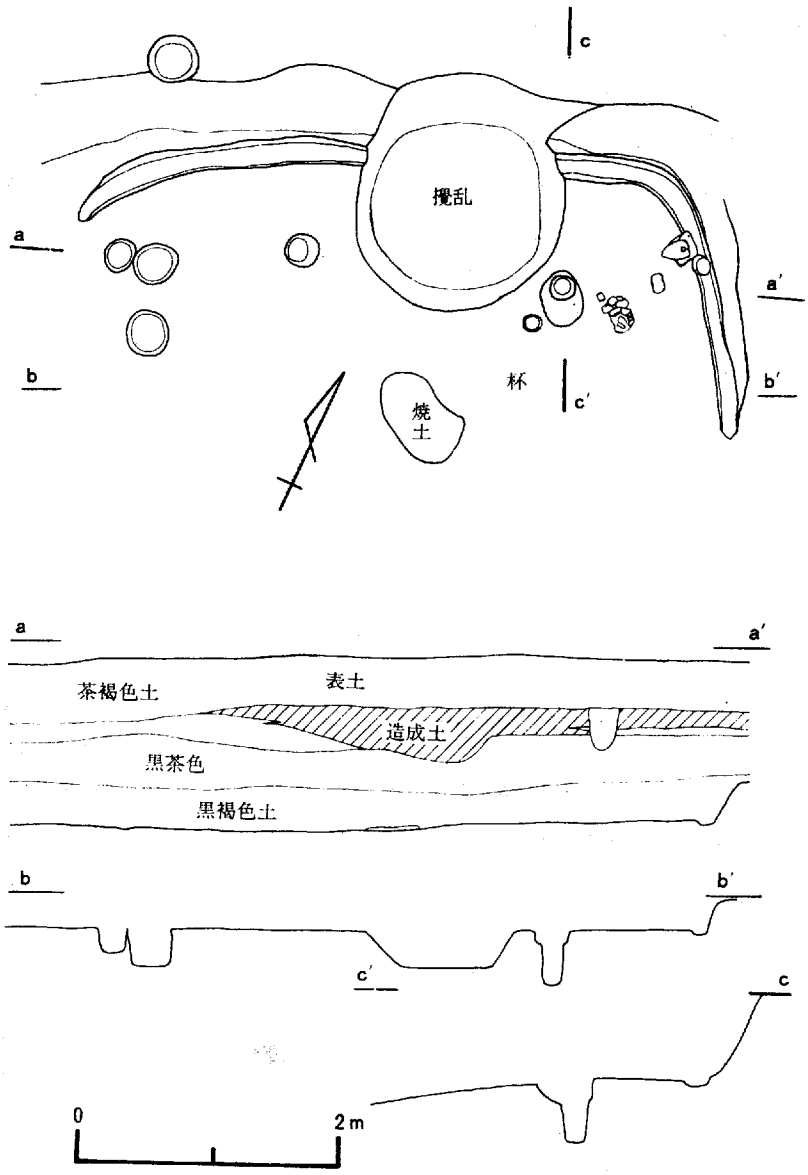
4　小石敷遺構（第86図）

Cの—1，0，1，2，3，4区にかけて，幅50cm，厚さ約10cmの小石敷が検出された。この小石敷はCの—1区からゆるやかに南に角度をふって，11mまっすぐ延び（3区まで），さらに90°南にふって3mまっすぐ延び，再び90°近く角度をふって東に曲り，急傾斜面で切れている。この小石敷遺構の北側は版築技法による造成土が北側にあることから，建物があったことが想定され，恐らくこれに伴う遺構と推察される。

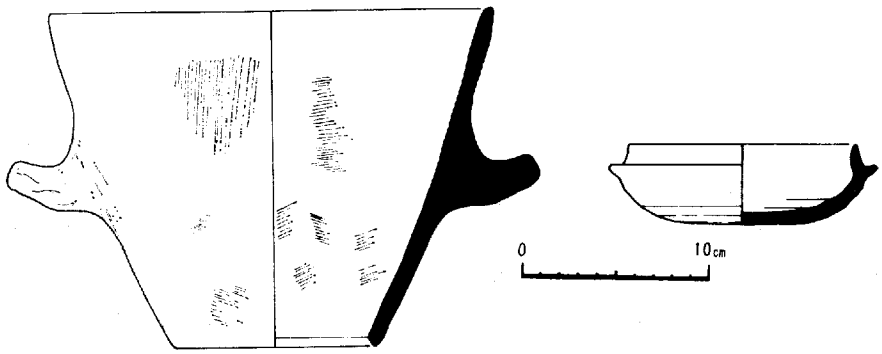
（松　本）



第86図　第　5　地　点　遺　構　配　置　図



第87図　1　号　住　居　址



第88図　1　号　住　居　址　出　土　遺　物

5　Aトレンチについて　（第89図）

このトレンチは1区のF～I（2×11m）にかけて設定したものである。設定理由はこの附近に遺構が存在するのか，あるいは整地面（造成土）が認められるのかを確認することであった。しかし，暗渠を2ケ所切断したため，出水が激しく，壁の崩壊の危険があることから地山層を確認することができなかったが，最下層の黒色粘質土より下層はボーリング調査の結果から，恐らく砂層と青灰色のシルト層が続くものと推定される。このトレンチ調査の結果，表土層から70cmまでは水田の様相を示しており，黒色土層下では平らな面を形成している。この黒色土層でのみ瓦が出土した。我々が確認した最下層の黒色粘質土は南にむけて傾斜しているため，傾斜の激しい南側に対して何層にもわけて北と同じレベルまで造成していることが確認された。この造成土（茶褐色土）からは細片となった弥生式土器（中期後葉）が多量に包含されていた。恐らくこの第5地点の北側にある弥生時代の遺構を破壊した土砂でこの周辺を造成したものと思われる。このことから，この周辺に茶褐色土による造成面があることを確認した。　（松　本）

6　A，B，C，D—2区南北セクションについて　（第90図）

この南北セクションでは7層を観察することができた。第4層から第7層までが造成盛土となっており，瓦は全てこの第3層内で出土した。断面中央部にみられる小石敷は第3層を切り込み，第3層中途に敷設されていた。瓦はこの小石敷遺構の約20cm下の整地面から出土する事実からみて小石敷遺構は，瓦と同時期の遺構とは考えられない。断定はできないが恐らく近世のものと推察される。

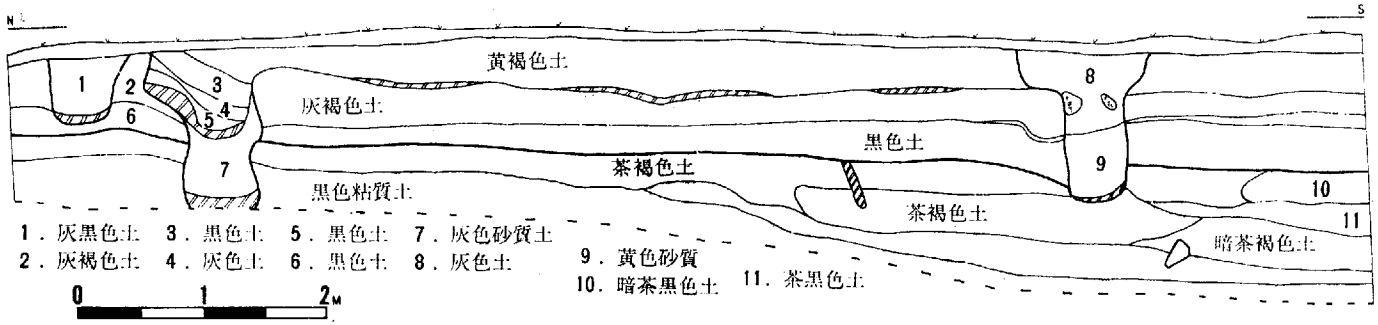
（松　本）

7　B，C—2南北セクション（第91図）

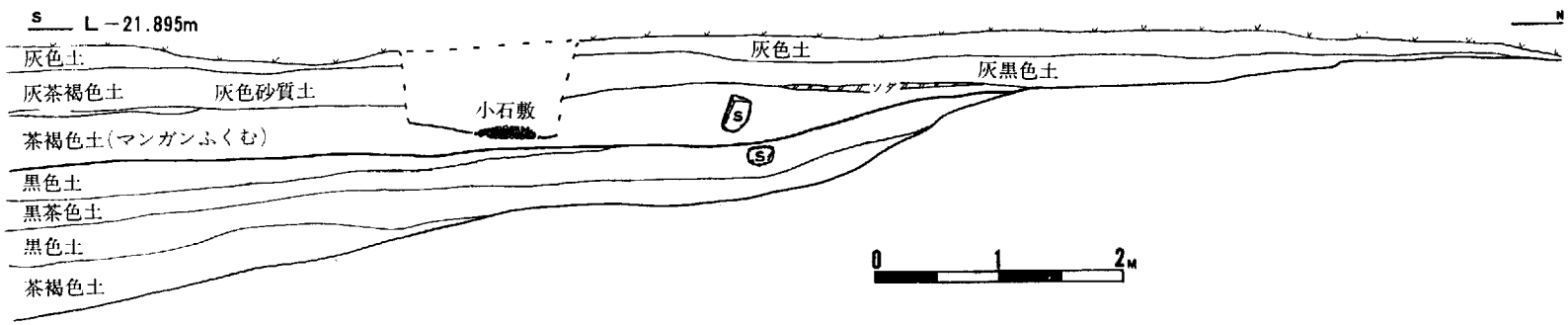
第5地点の西に位置し，瓦溜りを形成している地点である。この瓦溜りは暗茶褐色土層内に包含されており，造成土上面において検出された。また，最下層より地山土を掘り込んだ深さ20cm，幅80cmの溝状遺構が検出された。この溝の断面には3層の黄色バンド層が認められた。そして，この溝が東西にまっすぐ延びていることも確認されたが，遺物を包含していないことから時期，性格等については不明である。　（松　本）

8　C—0，1，2，3，4，5区東西セクション　（第92図）

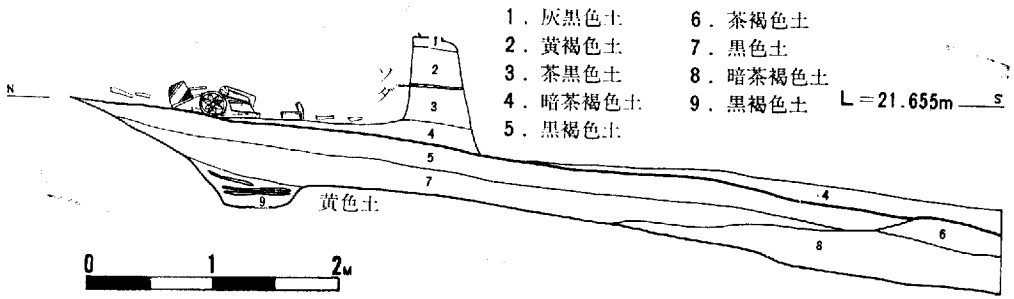
幹線道路に対してグリッドが地形上やや東にふれているが，その西側グリッドのほぼ中央部にある東西断面がこの図である。C—5区より東は近世における撹乱が著るしいため省略した。ここの土層は大きく8層に分けることができる。上から第1層は灰黒色土，第2層は灰色土，第3層は有機植物層（ソダ敷），第4層は茶褐色土，第5層は暗茶色土，第6層は黒褐色土，第7層は黒色土，第8層は暗茶褐色土に分けることができた。このうち，第1層～第3層までは撹乱層である。（部分的に第3層を掘り込み，地山土で造成している個所もみられる。）第4層，5層は推積層であり，また瓦を



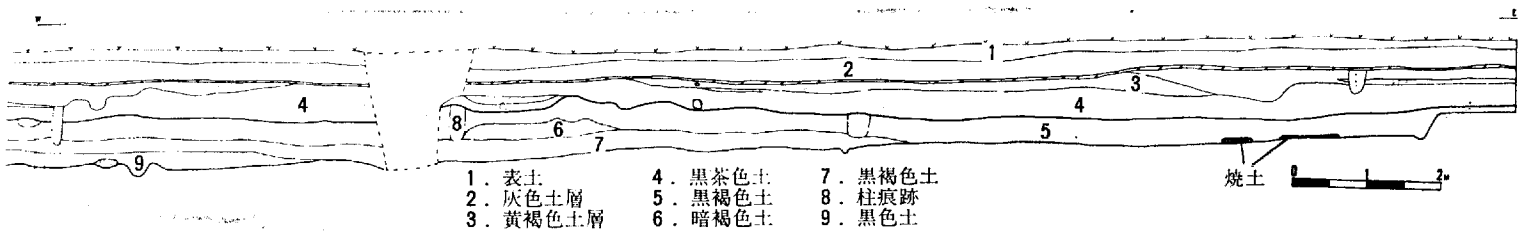
第89図　A　ト　レ　ン　チ　断　面　図



第90図　A，B，C，D－2区南北セクション



第91図　B－C 2 区南北セクション



第92図　C－0，1，2，3，4，5 区東西セクション

出土する層でもある。第６層，７層，８層は土器細片（弥生，土師器）を含む層である。特に第６層上面は標高20.65mの平らな安定した造成土面を形成している。そして今まで出土した瓦の全てはこの第６層上面より出土していることから，この造成土層は瓦とほぼ同時期に造成されたものと推察される。なお，C—５区では６層下に６世紀代の住居址が検出されている。　　（松　本）

9　瓦について

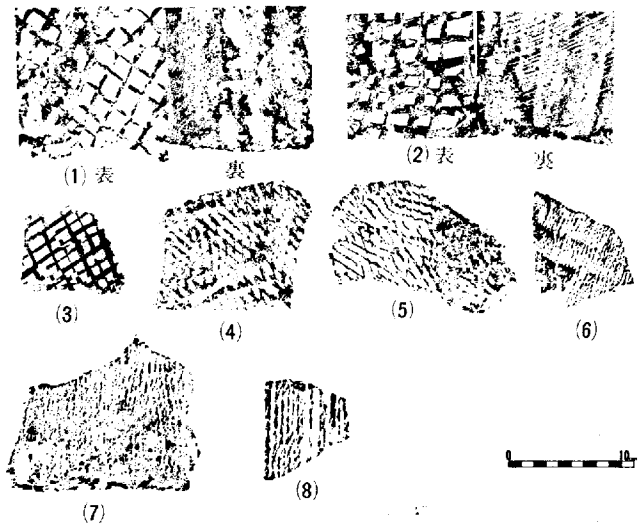
第５地点の発掘調査で出土した瓦はリンゴ箱で約９箱あった。種類は軒丸瓦，平瓦，丸瓦のみで，その大部分が瓦溜より出土した。

（a）　**軒丸瓦**（第93図）

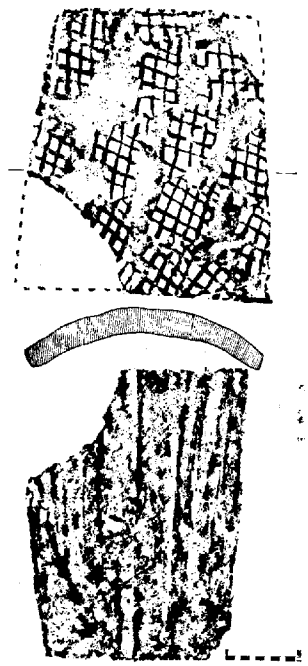
第５地点で軒丸瓦は７個体出土したが，その大部分は破片である。種類は全て同一形式のものばかりである。軒丸瓦の直径は16.5cm，長さ38cm（完形軒丸瓦による。盗難のため実測不能）の八葉素弁蓮花文である。外区は素縁であり，中房は直径約4.5cmで凹んでおり，１＋４の蓮子を配している。花弁はやや肉厚で，幅広く，短形であり，中央に稜線がある。界弁は花弁とほぼ同じ高さにまでもり上がっている。焼成は須恵質である。

（b）　**平瓦，丸瓦**（第94図）

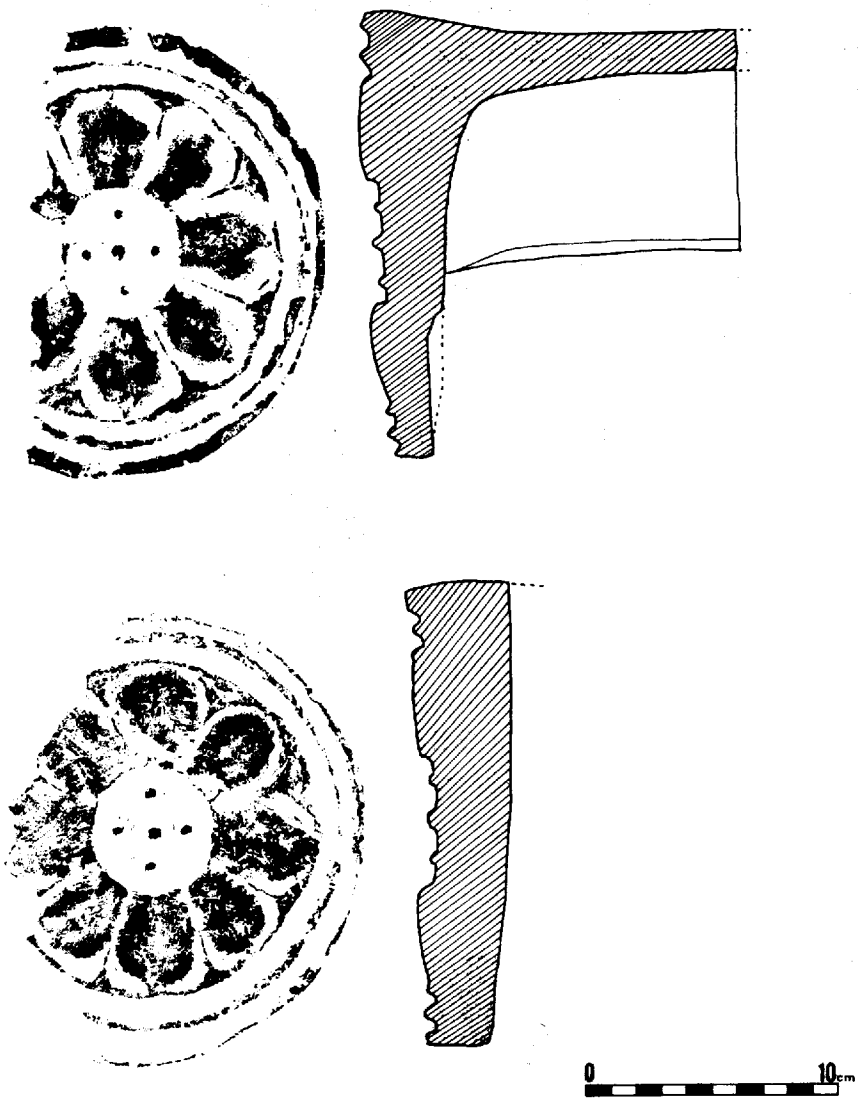
平瓦の表面には格子（小格子，大格子），縄目，菱形の３つの叩目文様に大別されるが，そのうち格子文様が最も多く出土している。裏面を観察すると桶巻作り技法により製作されていることが認められた。丸瓦は裏面に布目をもつ瓦である。　　（松　本）



第94図　平　　瓦，丸　　瓦



第94図　平　　瓦

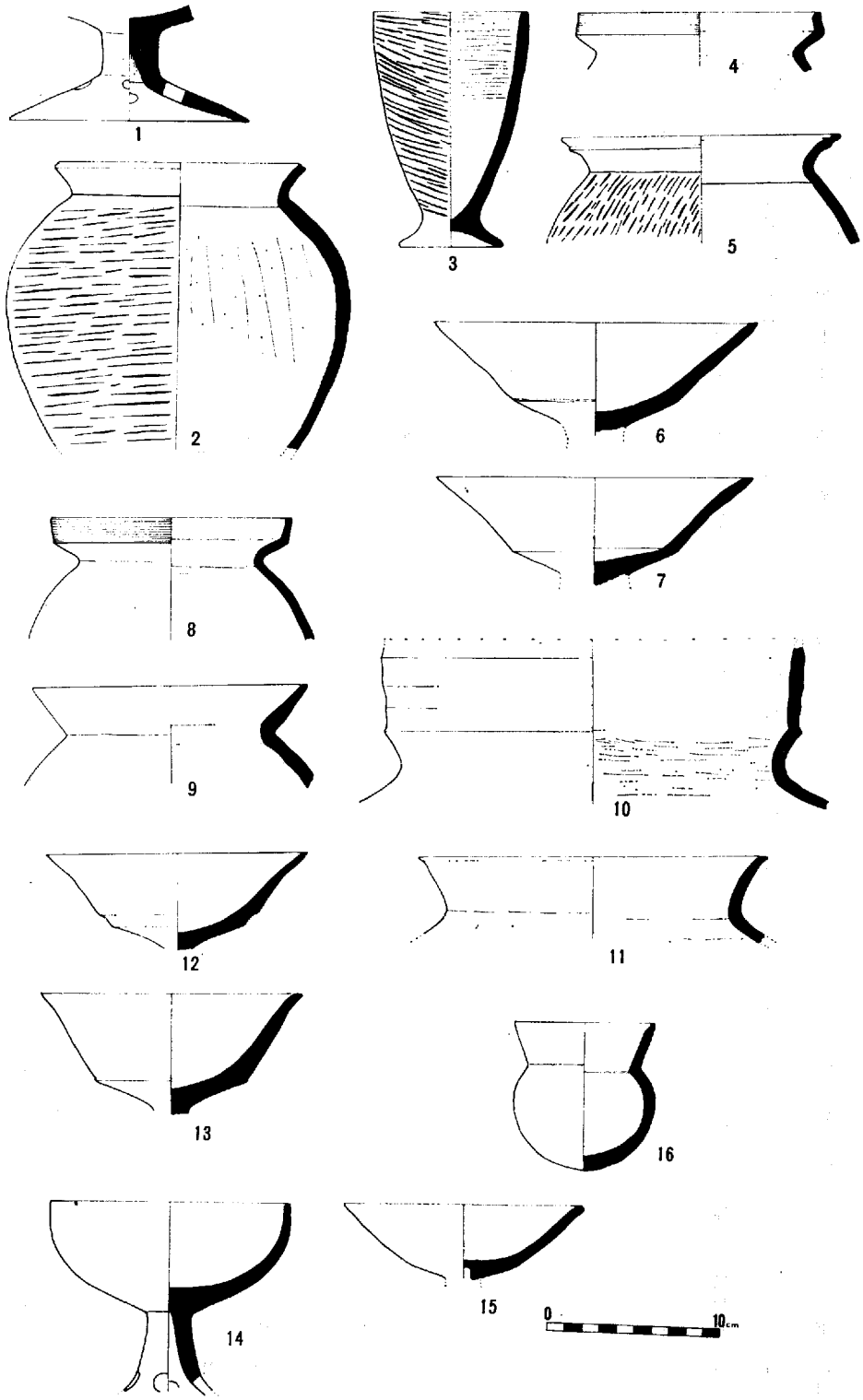


第93図　軒　　丸　　瓦

10　第５地点出土の土師器について（第95図，第(3)表）

第５地点より出土した土師器は高杯，甕形土器，壺形土器，坩，台付鉢形土器などである。これらの土器は遺構に伴なって出土したものではなく，すべて推積層，包含層，造成土層内より出土したものである。推積層内では出土遺物の逆転現像がみられ，層位的な細分ができなかったし，造成土内でも弥生式土器，土師器が共存して出土したため，ここでは土器を形態的に分類したうえで記載した。時期的には酒津併行期から古式須恵器を共伴する時代に至るまであり，かなり年代幅がみとめられる。

（松　本）



第95図 第 5 地 点 出 土 土 師 器

第3表　第5地点出土土師器一覧表　（単位　cm）

図版番号	形態	器高	口縁径	胴幅	胎土	焼成	色調	出土地区	備考
第95図1	高杯	不明	不明	—	良	良	灰褐色	C-O区，黒色土層	（酒津併行期）
〃 2	甕	〃	14.0	20.0	普通	普通	茶黒色	F—13区，包含層	外面たたき目，スス附着（酒津併行期）
〃 3	台付鉢形土器	13.6	9.0	8.9	〃	〃	赤褐色	C—14区，包含層	外面たたき目　（〃）
〃 4	甕形土器	不明	14.0	不明	〃	〃	灰褐色	C-O区，黒褐色土	造成土層（酒津併行期より年代的に若干降る）
〃 5	〃	〃	16.0	〃	〃	〃	黄褐色土	出土層位不明	（〃）
〃 6	高杯	〃	19.0	—	〃	〃	灰色	C—16区，包含層	（玉泊6層期）
〃 7	〃	〃	18.5	—	〃	〃	灰白色	〃	外面，刷毛目を消している（〃）
〃 8	甕形土器	〃	14.0	不明	〃	〃	黄褐色	H—13区 有機推積4層	（〃）
〃 9	〃	〃	16.0	〃	〃	〃	〃	H—13区 黒色有機最下層	（〃）
〃 10	壺形土器	〃	24.0	〃	〃	〃	黄茶色土	Aトレンチ 黒色土層	（〃）
〃 11	〃	〃	20.0	〃	〃	〃	灰黄色土	〃	（〃）
〃 12	高杯	〃	15.0	—	〃	わるい	茶褐色	H—13区 黒色有機最下層	（走出期）
〃 13	〃	〃	15.2	—	〃	ふつう	茶黒色	包含層（出土地点不明）	（〃）
〃 14	〃	〃	14.0	—	良	良	赤褐色	Aトレンチ	（5世紀末～6世紀初頭）
〃 15	〃	〃	13.8	—	ふつう	不良	〃	Aトレンチ 黄黒色ブロック土層	（〃）
〃 16	坩	8.5	8.0	8.2	〃	ふつう	灰黒色	Aトレンチ	（5世紀代）

11 ま　と　め

第５地点は山陽団地を縦断する幹線道路敷下に埋蔵されている遺跡である。この地域一帯は発掘調査前から丘陵および斜面に遺構が存在すること。「門前池」という地名が残されていること，第５地点の北側丘陵の地形が正方形に整形されていることから寺院に関連をもつ遺構が検出されるのではないかという予想がなされた。

発掘調査の結果，遺構としては小石敷遺構，住居址，溝，そして，まとまらない無数の柱穴が検出された。小石敷遺構は前述したように版築技法を用いた造成土に伴なう石敷であることから，建物の周囲をまわる雨落溝のようなものと推察されるのである。

住居址は２軒確認できた。D—10，11，12区にかけて検出された２号住居址は上部の削平が著るしく，周溝のみしか検出されなかった。柱穴内より弥生時代後期の土器片が出土したことから，弥生時代後期の住居址と思われる。また１号住居址はB—４，５区，C—５区にかけて検出された住居址で，一部野つぼのため破壊されているが，ほぼ１辺が５*m*の隅円方形住居址であった。住居址の保存状態はあまり良くないため断定はできないが，床面のほぼ中央部にみられる焼土帯は炉跡であったと考えられる。共伴する遺物（須恵器，甑など）から６世紀中葉に築造された住居址と推察される。第１地点で検出された２号，６号，７号，14号住居址はいづれも５世紀末葉に築造されたと考えられる住居址であり，カマドをまだ構築していない段階であったが，この第５地点の２号住居址でもカマドをまだ構築していなかったようである。

岡山県内において，最近古墳時代の住居址がかなり調査されているが，現在のところ久米郡久米町の領家遺跡では６世紀中葉に築造された住居址にカマドが構築されていることが確認され，英田郡美作町の上相遺跡でも６世紀後葉の住居址２軒でカマドを確認していることから，岡山県では[1]６世紀中葉の頃から少しずつカマドが構築され始め，６世紀後葉になってカマド[2]の普遍化がみられるようである。

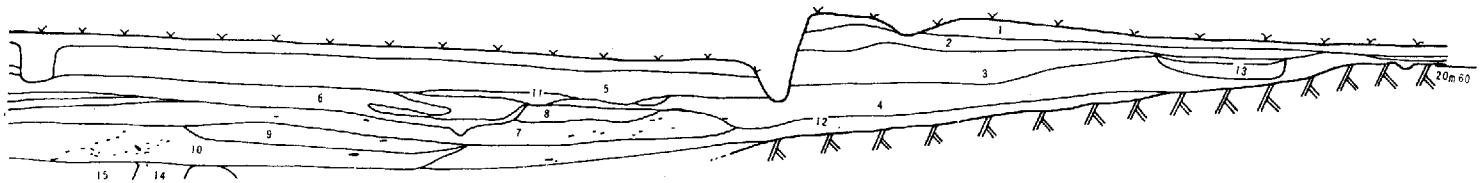
一方，第５地点出土の瓦には数多くの問題点が含まれているようである。出土した軒丸瓦は八葉素弁蓮花文１種だけであり，軒平瓦の出土がなかった。このためセット関係は不明である。また，瓦，須恵器以外に仏具関係の遺物も出土していない。遺構も検出されなかったが，北から南に傾斜する地山に黒色土，黒褐色土，暗茶褐色土を厚く盛土して水平な基礎地形をしていることが判明した。この盛土造成内には多量の弥生時代中期の土器，土師器，須恵器が混入しており，基礎地形に使用された造成土はこの第５地点周辺の遺跡を破壊し，造成されたものと考えられる。北側は地山であることから，地山削り出しによる整形がなされていたと推察される。そして，この瓦溜りはこの水平に造成された面より検出されたのである。

このように，第５地点は一部盛土造成によって何らかの構造物が建っていたと考えられる地域なのである。なお，第５地点出土の軒丸瓦の年代については，まだ岡山県内にも類例をみない瓦であり，正確な年代の推定は困難であるが，あえて推察するならば，瓦当文の構成が飛鳥様式に類似していることから白鳳時代のものと推定してもよいのではないだろうか，いづれにしても今後さらに検討されるべき瓦である。

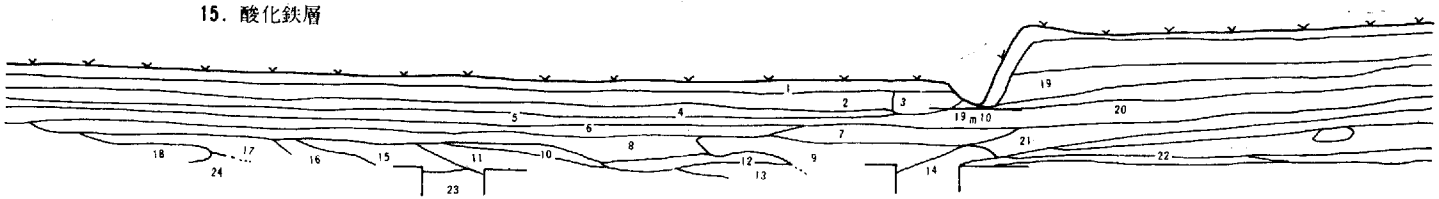
また，本遺跡では瓦に伴なう遺構が全く検出されなかったため，遺跡の性格は今後さらに検討をしなければならないが，この地域一帯が造成され本格的な地形がみられたことから，小規模な寺院址があったことも推察されるが，瓦の出土量が極めて少なく，周辺にも瓦の散布があまりみられないことから疑問な点も多く，官衙的な建物址を推察することも可能である。　（松　本）

(1) 報告書近刊の予定岡山県教委発掘調査

(2) 松本　和男，二宮　治夫　「上相遺跡」―『中国縦貫自動車道建設に伴なう発掘調査報告Ⅰ』岡山県教育委員会　1974年



1．耕作土
2．褐色粗砂
3．黄茶色土
4．茶褐色包含層
5．砂混り茶色土
6．暗褐色土
7．暗灰褐色土
8．茶褐色土
9．褐色土層
10．黒色粘土混り包含層
11．茶褐色
12．黒褐色包含層
13．新しい落ちこみ
14．砂層
15．酸化鉄層



1．耕作土
2．黄褐色土
3．灰褐色土
4．褐色土層
5．暗褐色土
6．茶褐色土
7．黄色粗砂
8．灰色砂層
9．灰色砂層
10．黄色粘土
11．暗灰色砂混り粘土
12．黒色粘土
13．灰黄色粘土
14．灰黄色粘土
15．灰白色砂層
16．暗灰色砂混り粘土
17．灰白色砂層
18．灰色微砂混り黄色粘土
19．茶褐色土層
20．茶褐色土
21．茶灰褐色土
22．暗灰色砂層

第96図 13 区 C ～ Q 区 断 面 図

第7章　ま　と　め

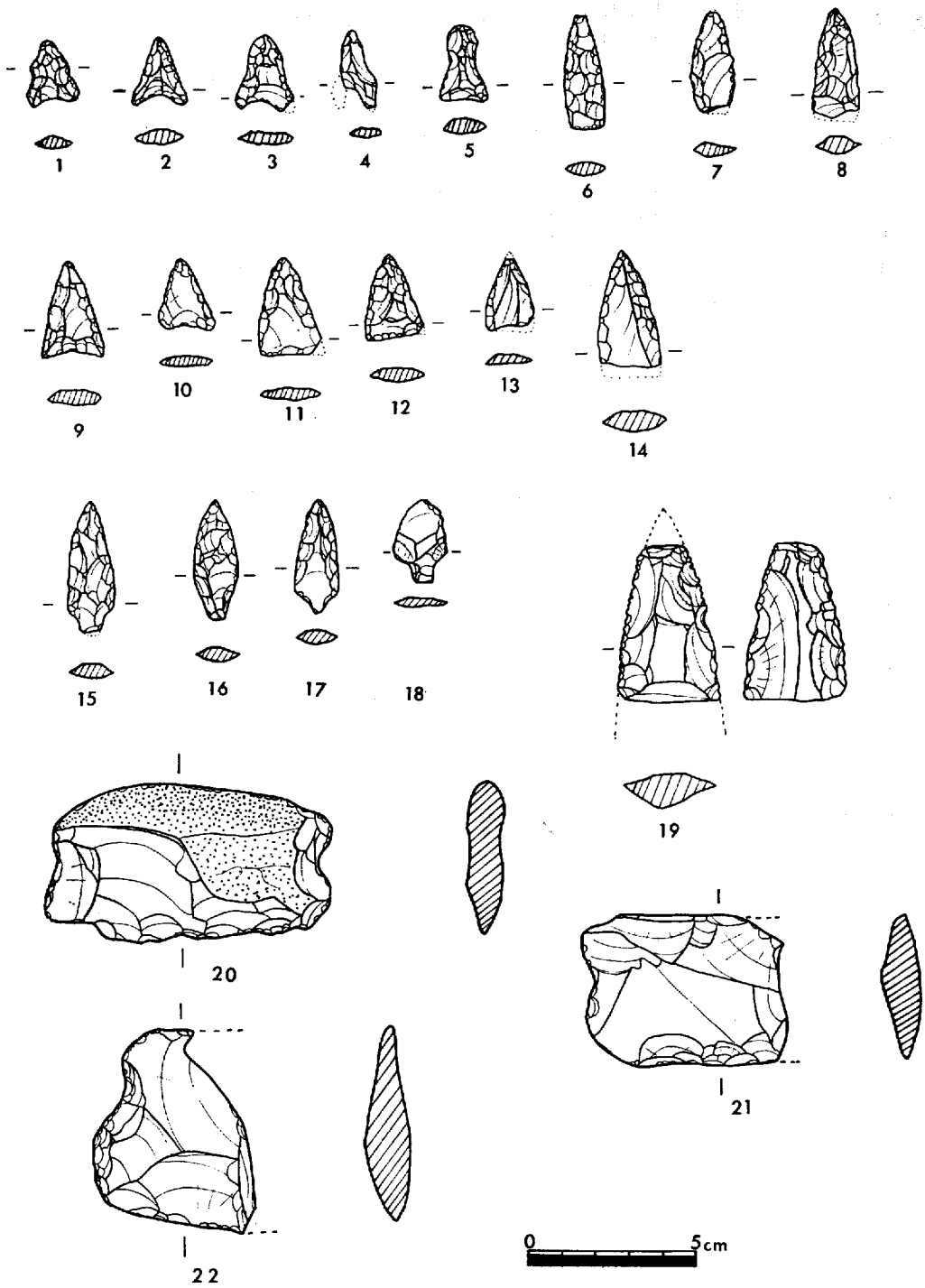
1　第1次調査出土の石器

第4表　第1次調査出土の石器計測表

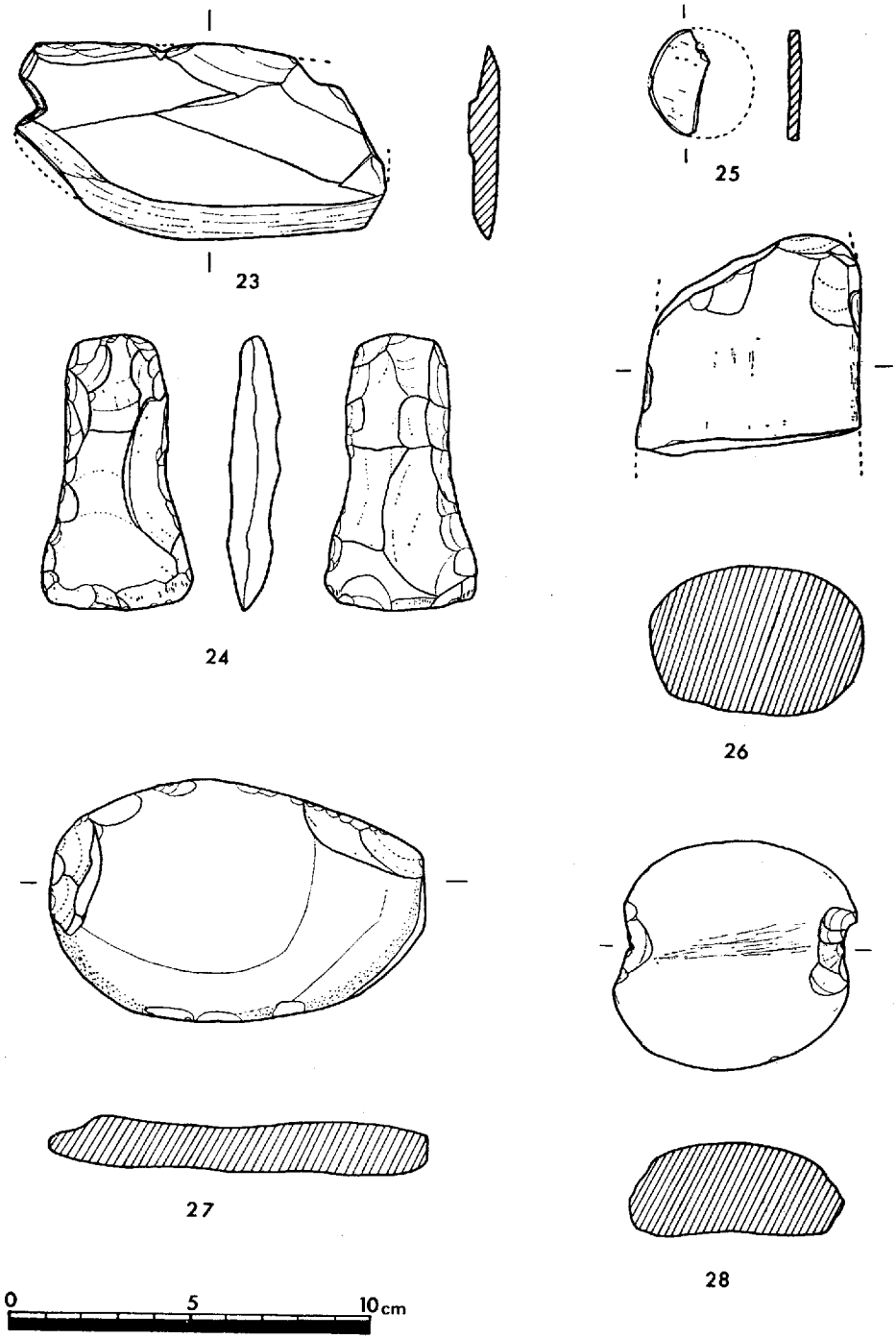
番号	名称	現存長 (mm)	最大幅 (mm)	厚み (mm)	重さ (g)	石質	出土地点	備考
1	石鏃	17	15	3	0.5	サヌカイト	第1地点	Aタイプ 打製
2	〃	20	17	5	0.6	〃	〃	〃 〃
3	〃	22	18	5	0.8	〃	〃	〃 〃
4	〃	(22)	(11)	3.5	0.5	〃	〃	〃 〃
5	〃	21.5	15	4.5	0.8	〃	〃	〃
6	〃	(34)	12	4	1.7	〃	〃	Bタイプ 〃
7	〃	(29)	13	4	0.7	〃	〃	〃 〃
8	〃	(32)	14	5	1.5	〃	〃	〃 〃
9	〃	27	17	5	1.2	〃	〃	Cタイプ 〃
10	〃	20	16	3	0.7	〃	〃	〃 〃
11	〃	29	18	3	3.1	〃	〃	〃 〃
12	〃	25	18	4	1.5	〃	〃	〃 〃
13	〃	(19)	14	3	1.3	〃	〃	〃 〃
14	〃	(34)	18	6	2	〃	〃	〃 〃
15	〃	(33)	14	4	2.5	〃	〃	Dタイプ 〃
16	〃	35	18	4	1.7	〃	〃	〃 〃
17	〃	33	13	4	1.5	〃	〃	〃 〃
18	〃	24	16	3	0.8	〃	〃	〃 〃
19	石槍	(46)	(30)	(10)	13	〃	〃	土器溜Ⅱより出土〃
20	石庖丁	85	46	11	47.5	変成岩	〃	打製
21	〃	(60)	44	12	33.5	サヌカイト	〃	〃
22	〃	(46)	(56)	14	35.5	〃	〃	〃
23	〃	(101)	54	8	59	変成岩	〃	局部磨製，抉り込みあり
24	撓形石器	75	42	14	44.5	花こう岩	〃	打製
25	有孔円盤	(29)	(15)	4	2	滑石	〃	石製模造品(古墳時代)
26	石斧	(57)	(62)	40	246	安山岩	〃	磨製
27	凹石	104	66	13	160.5	砂岩	〃	
28	石錘	60	63	24	152.5	〃	〃	両端を抉り込んでいる 2面使用
29	砥石	70	17	20	45	硬質砂岩	〃	1面使用
30	〃	32	46	27	88	〃	〃	
31	〃	(68)	33	14	75.5	〃	〃	土器溜，2面使用
32	石鏃	(14)	(14)	3	0.5	サヌカイト	第3地点	Aタイプ 打製
33	〃	24	17	5	1.3	〃	〃	Cタイプ 〃
34	〃	30	17	4	1.8	〃	〃	〃 〃
35	〃	(30)	18	5	2.5	〃	〃	〃 〃
36	〃	(25)	(17)	(6)	3	〃	〃	Dタイプ 〃
37	〃	(43)	18	6	5.3	〃	〃	〃 〃
38	〃	(46)	16	5	3.5	〃	〃	〃 〃
39	〃	45	15	5	3.7	〃	〃	〃 〃
40	〃	37	14	4	1.6	〃	〃	〃 〃
41	〃	35	14	5	1.8	〃	〃	〃 〃
42	〃	34	19	4	2.5	〃	〃	Eタイプ(磨製)
43	ヘラ形石器	(54)	17	8	9.3	変成岩	第3地点	磨製
44	石庖丁	(60)	44	10	41	緑泥片岩	〃	〃
45	〃	(39)	(40)	10	15	貢岩	〃	〃
46	〃	99	50	9	68	サヌカイト	〃	打製
47	〃	(40)	45	11	23	〃	〃	〃
48	〃	70	35	12	45.5	〃	〃	〃

番号	名　称	現在長 (mm)	最大幅 (mm)	厚み (mm)	重さ (g)	石　質	出土地点	備　考
49	〃	(73)	47	10	37.5	〃	〃	打　製
50	〃	(23)	(34)	(7)	6.8	〃	〃	〃
51	〃	(16)	(33)	(5)	4.5	〃	〃	〃
52	石　錘	(53)	50	34	149.5	花こう岩	〃	有　溝
53	〃	57	52	42	169.5	〃	〃	〃
54	〃	75	52	44	303.5	〃	〃	〃
55	たたき石	143	45	47	477	〃	〃	
56	すり切り石斧	(88)	(64)	(18)	163	〃(?)	〃	磨製，未製品？
57	砥　石	(103)	(20)	(34)	93	サヌカイト	〃	3面使用
58	〃	78	27	30	88	硬質砂岩	〃	4面使用
59	〃	152	(81)	(29)	559.5	サヌカイト	〃	1面使用，ピット－5より出土
60	円　石	100	113	37	699.5	花こう岩	〃	
61	〃	(64)	(93)	(19)	157	砂　岩	〃	
62		(85)	74	19	169	〃	〃	
63		(62)	(84)	(25)	193	花こう岩	〃	
64	たたき石	84	53	49	333.5	〃	〃	
65	すり石	119	55	18	197.5	〃	〃	全面に使用痕あり
66	〃	(95)	55	34	242	〃	〃	
67	石　鏃	(19)	(16)	5	1.0	サヌカイト	第5地点	打　製　Aタイプ
68	〃	18	15	5	0.9	〃	〃	〃　〃
69	〃	(23)	(12)	(5)	1	〃	〃	〃　〃
70	〃	(20)	(14)	(4)	0.8	〃	〃	〃　〃
71	〃	(17)	(11)	4	0.4	〃	〃	〃　〃
72	石　匙　丁	(42)	(44)	(8)	18.5	〃	〃	磨　製
73	〃	(32)	(49)	(7)	13	〃	〃	打　製
74	石　斧	(47)	(59)	(42)	189	閃緑岩	〃	磨　製
75	〃	(50)	(72)	(51)	238	ぎょうかい岩	〃	〃
76	〃	(50)	(68)	(57)	327.5	花こう岩	〃	〃
77	砥　石	(92)	(65)	(55)	619.5	硬質砂岩	〃	2面使用
78	〃	(91)	(50)	(51)	287	〃	〃	3面使用
79	〃	(62)	(35)	(40)	125.5	〃	〃	4面使用
80	磨製小石（ソロバン形）	23	27	6	7	結晶片岩	〃	
81	石　斧	145	55	52	—	緑泥片岩	岩田大池より表採	磨　製

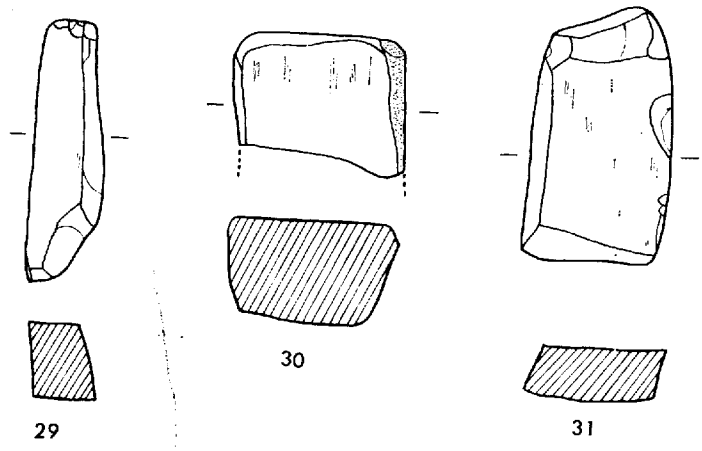
（松　本）



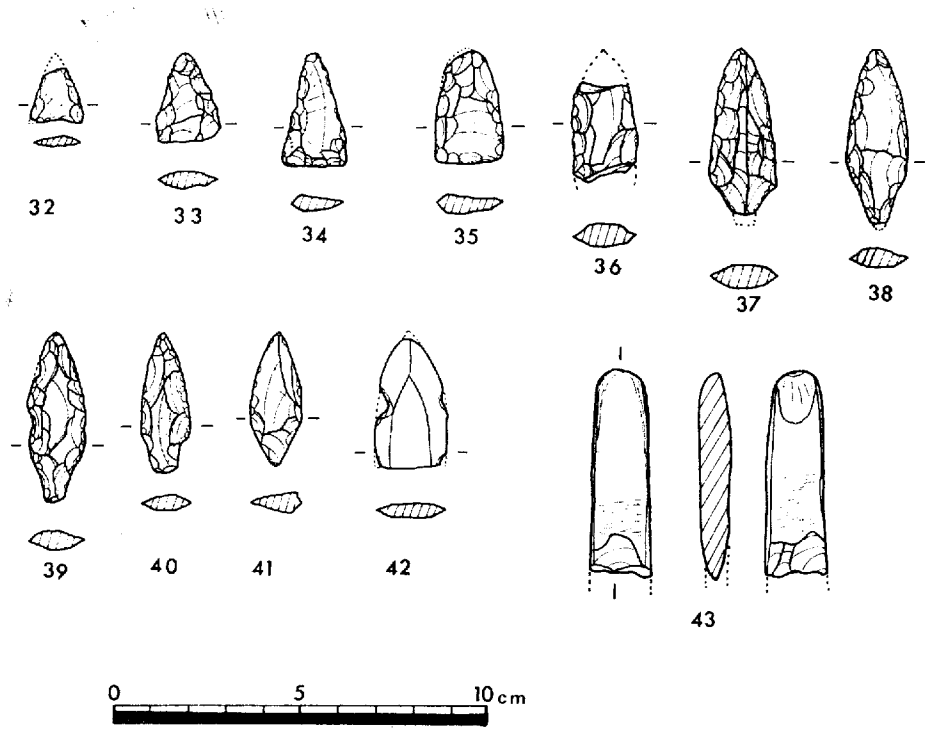
第97図 第 1 地 点 出 土 石 器



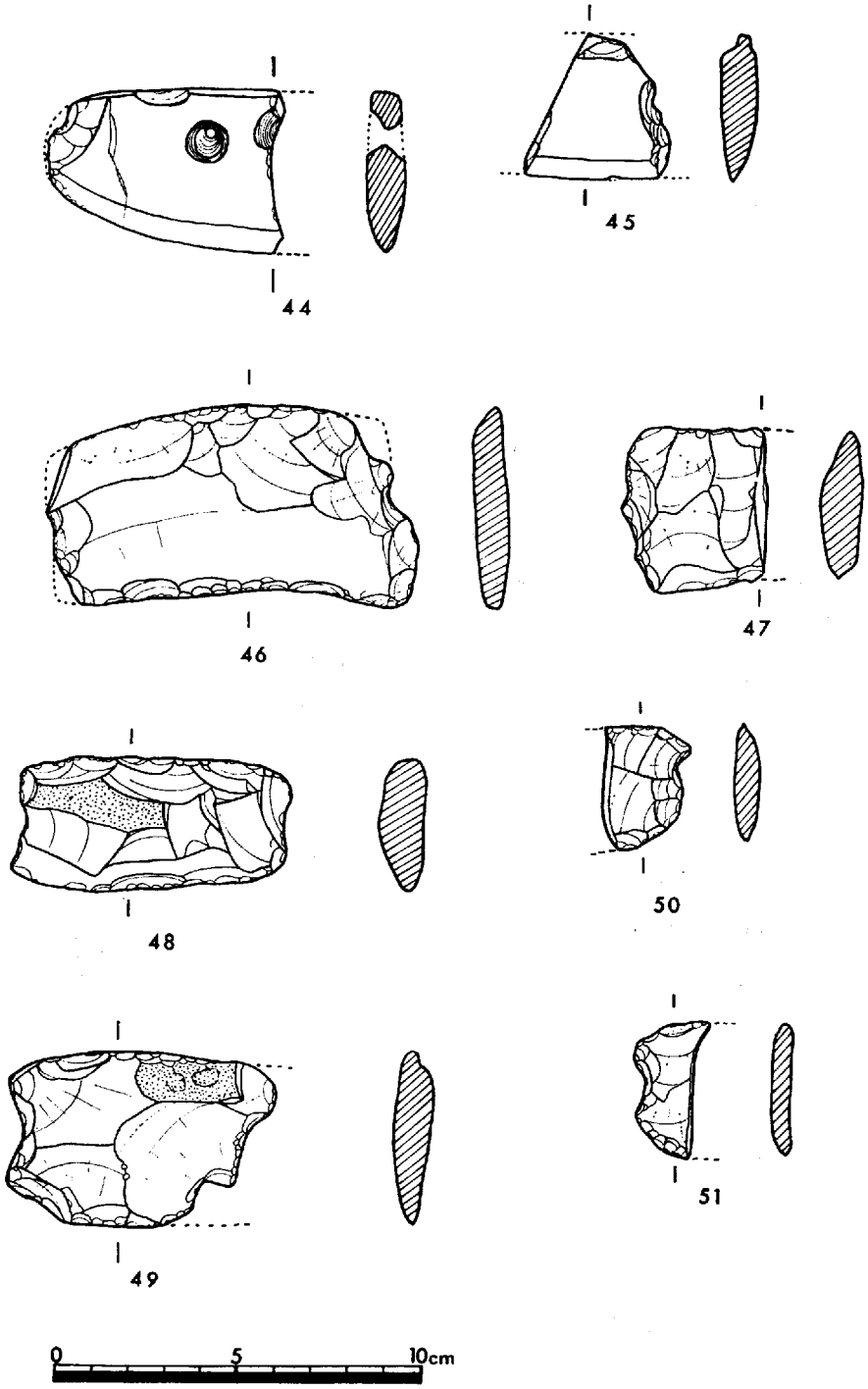
第98図 第 1 地 点 出 土 石 器



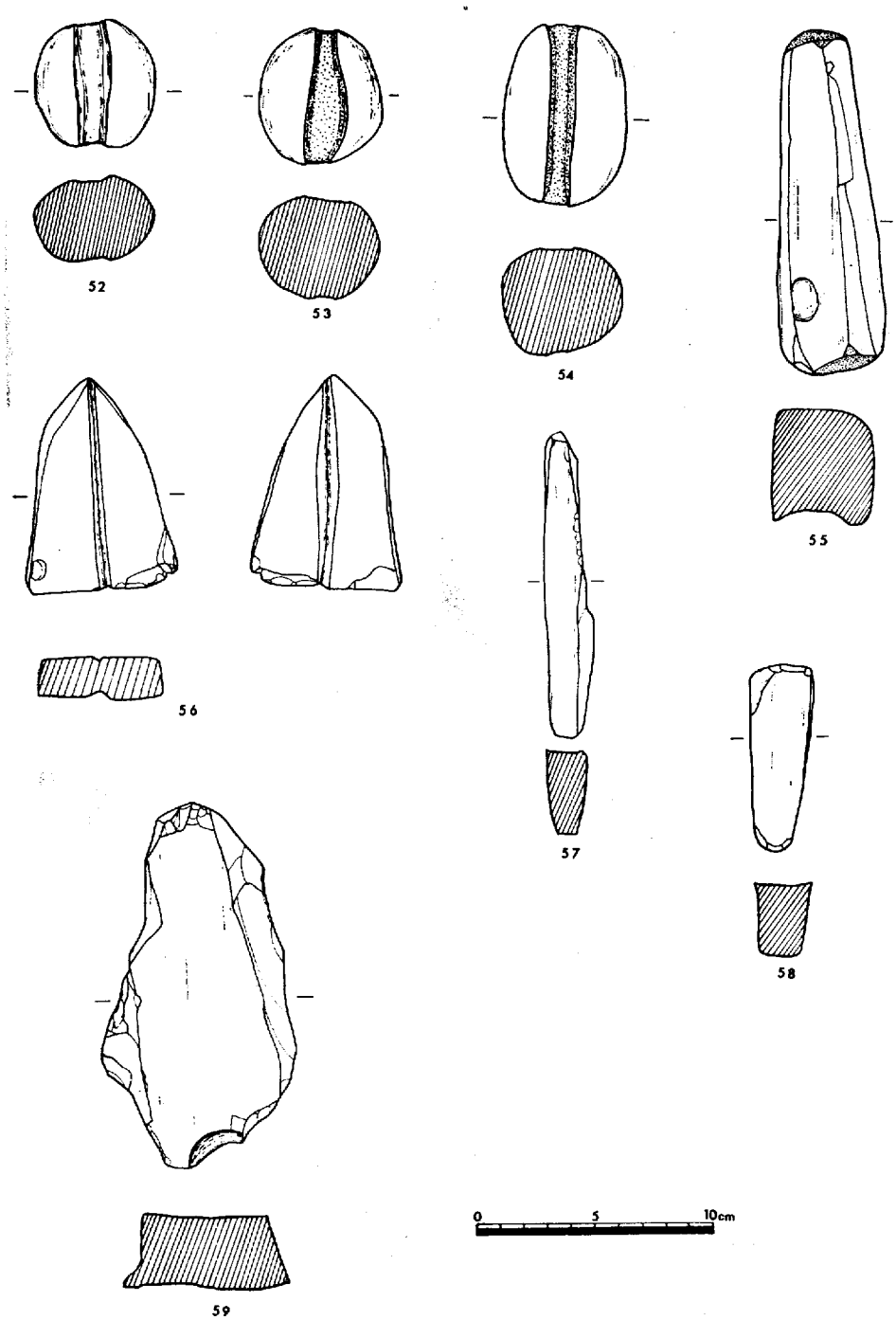
第 3 地点出土石器



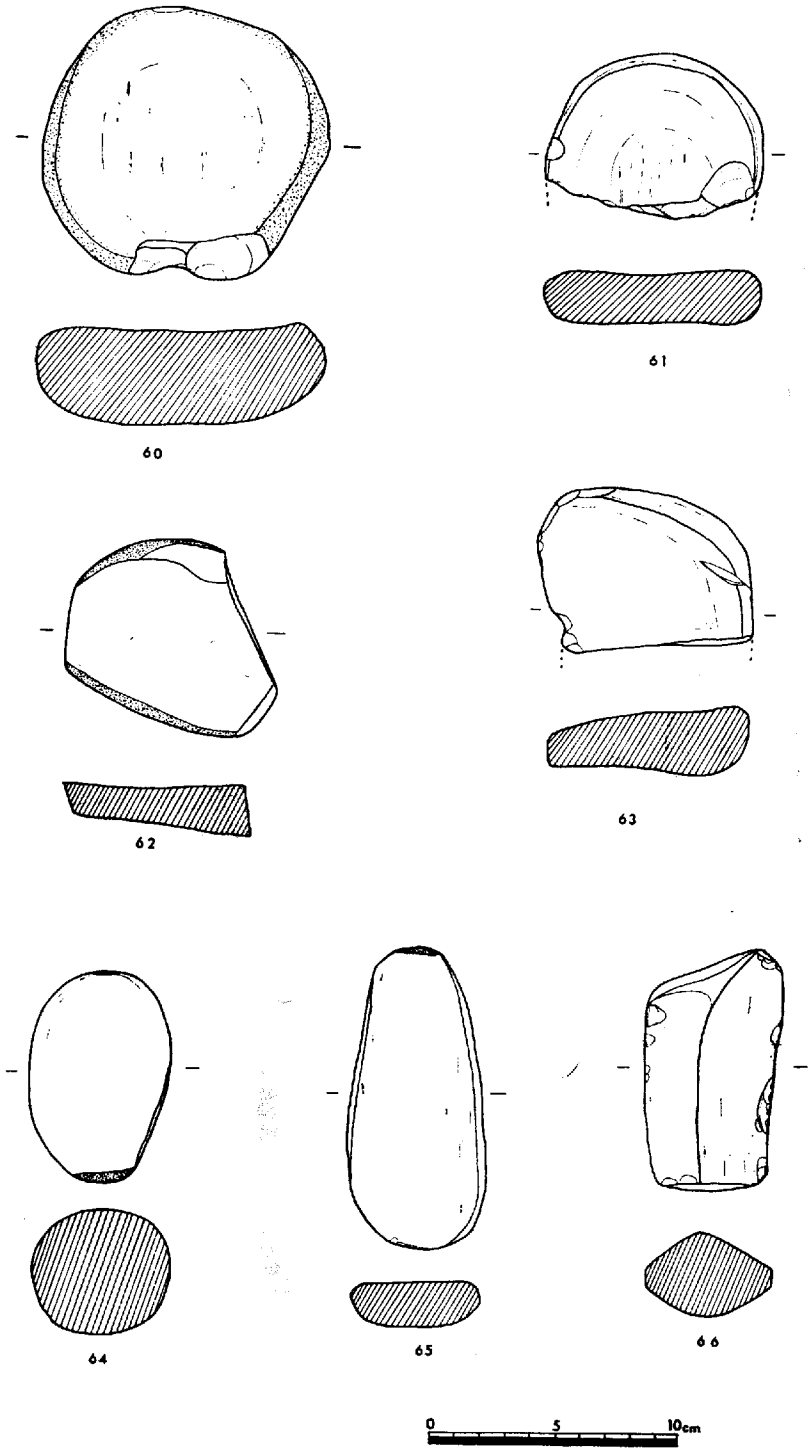
第99図　第 1 地点，第 3 地点出土石器



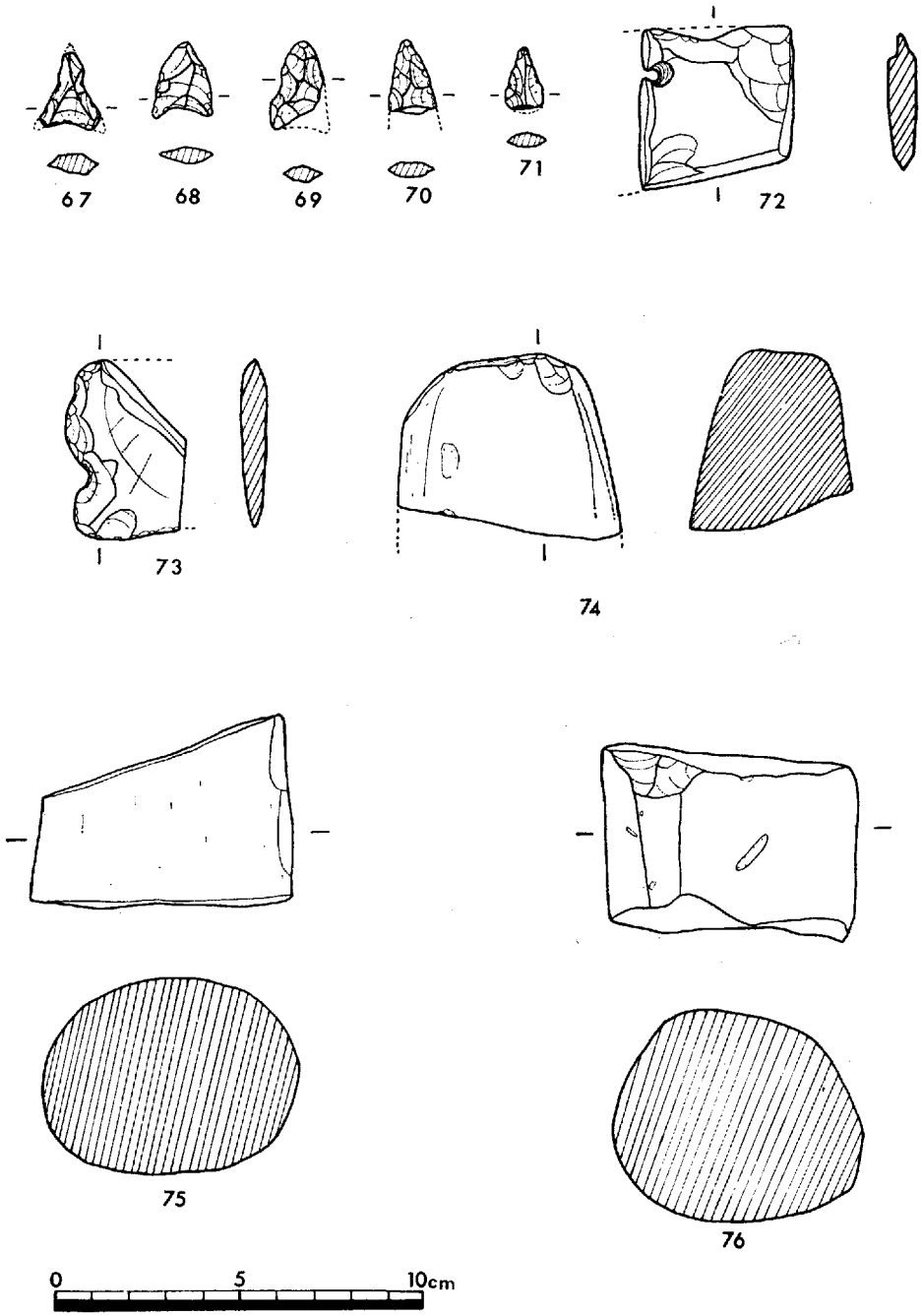
第100図　第　3　地　点　出　土　石　器



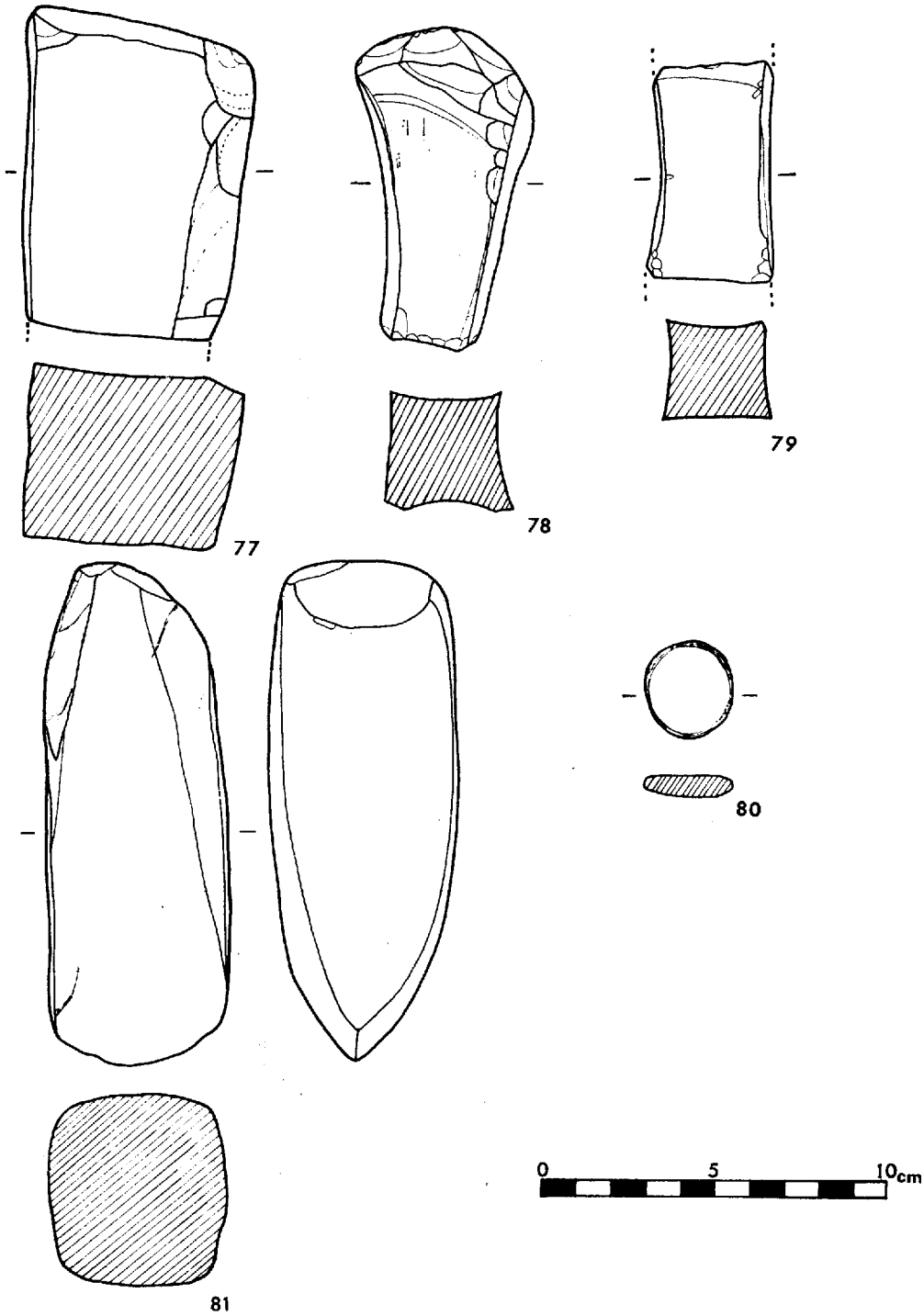
第101図 第 3 地 点 出 土 石 器



第102図　第 3 地 点 出 土 石 器



第103図　第　5　地　点　出　土　石　器



第104図　第　5　地　点　出　土　石　器

2　第１次調査出土の須恵器（105，106，107，108，109図）

ここに列記した遺物は，第１次調査での各地点から出土した須恵器を総合して図示したものである。その中でも第３地点，第５地点から出土したものがほとんどである。これらの須恵器を時期別に６分類した。Ⅰ類は１～19，Ⅱ類は20～28，Ⅲ類は29～34，Ⅳ類は35～91，Ⅴ類は92～95，Ⅵ類は95～97である。

器種別にみるとⅠ類では，杯（10・11・14～17），蓋（９・12・13），高杯（３～６），壺（７），瑞（８），器台（18・19），甕（１・２）である。杯は，10・11がやや古く他のものとは区別できる。蓋も，９は他のものよりやや古く，杯10・11と同時期と思われる。高杯は無蓋高杯（３・４）と有蓋高杯（５・６）との二種である。Ⅱ類では杯（24～27），蓋（21～23），無蓋高杯（20），小形短頸壺（28）で，Ⅲ類は，杯（29），蓋（30・31），無蓋高杯（32～34）で，Ⅳ類は，杯（61～67，70～82），皿（68・69），高杯（84～86），蓋（39～60）壺（（35～38，87），平瓶（88・89），鉢（90・91），盤（83）類で，杯は６～63と64～67と，70～81と，82の４分類できる。蓋についても，39～42と，43～60と，43～60とに大きくわけられる。

Ⅴ類は，椀（92～94）で，Ⅵ類は甕（95），擂鉢（96・97）の備前焼である。

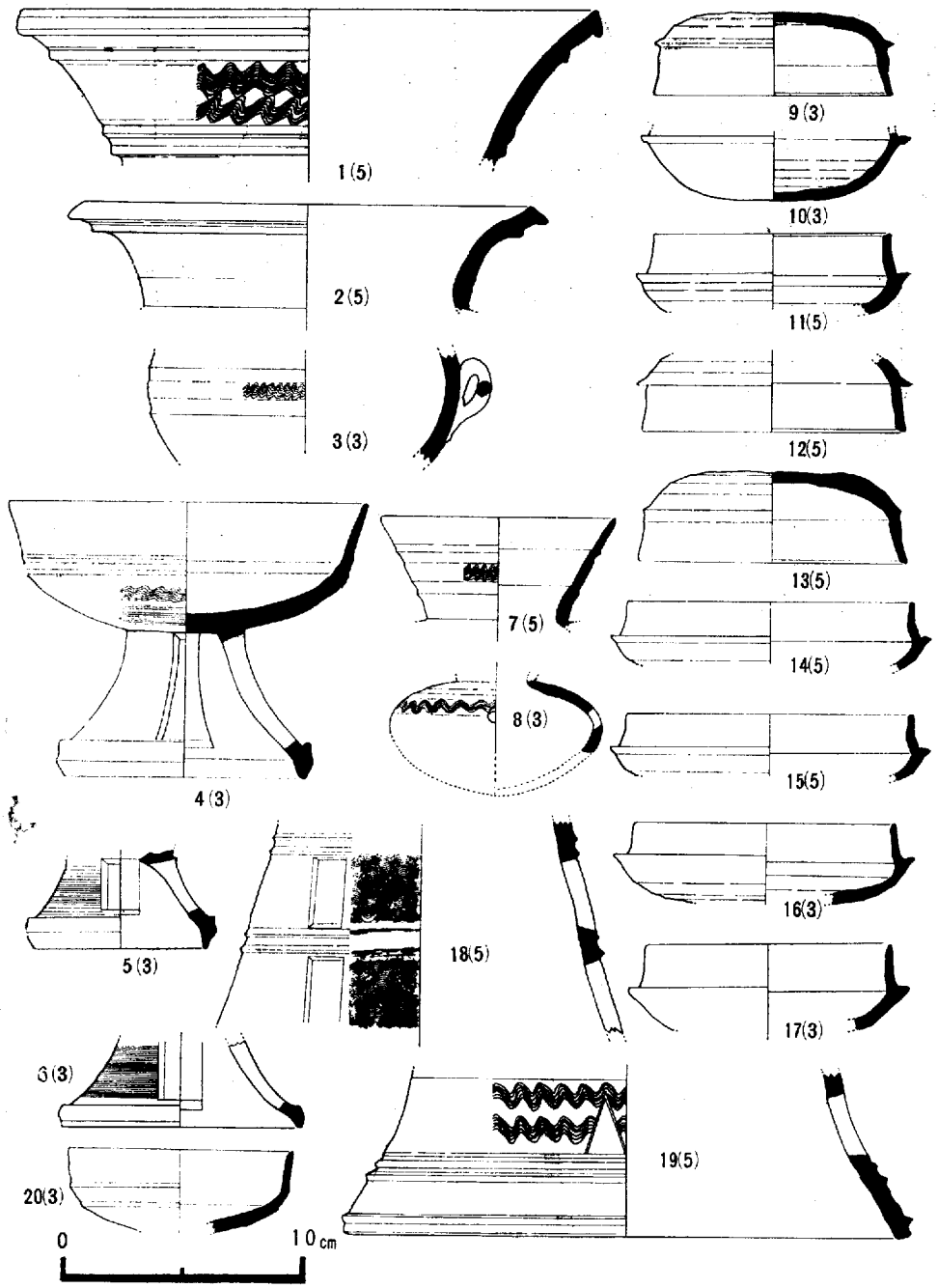
６分類の中でもⅠ類は比較的に古く５世紀代のもので，その中でも（９・10・11）はⅠ類の中でも最も古いものと思われる。Ⅱ類は６世紀後半のものがほとんどで，（20）のみ６世紀前半に属するであろう。Ⅲ類は７世紀代，Ⅳ類は８～９世紀，Ⅴ類は平安後期，Ⅵ類は鎌倉～江戸時代の時期に属すると思われる。これらの６分類のⅠ，Ⅱ類については大阪陶色古窯址ＴＫ208，ＴＫ23，Ⅲ類に属するのは，当地方の邑久古窯址の寒風１，２号，[1] 新林（宮嶋）窯址，[2] Ⅳ類のものは酒津，水江遺跡，[3] 等の遺跡から出土している遺物に類例が求められる。[4]

以上今回の調査で出土した須恵器は，Ⅰ類の古墳時代の後期初頭を上限として古墳時代後半，奈良，平安，鎌倉，江戸と長い時代にわたる。

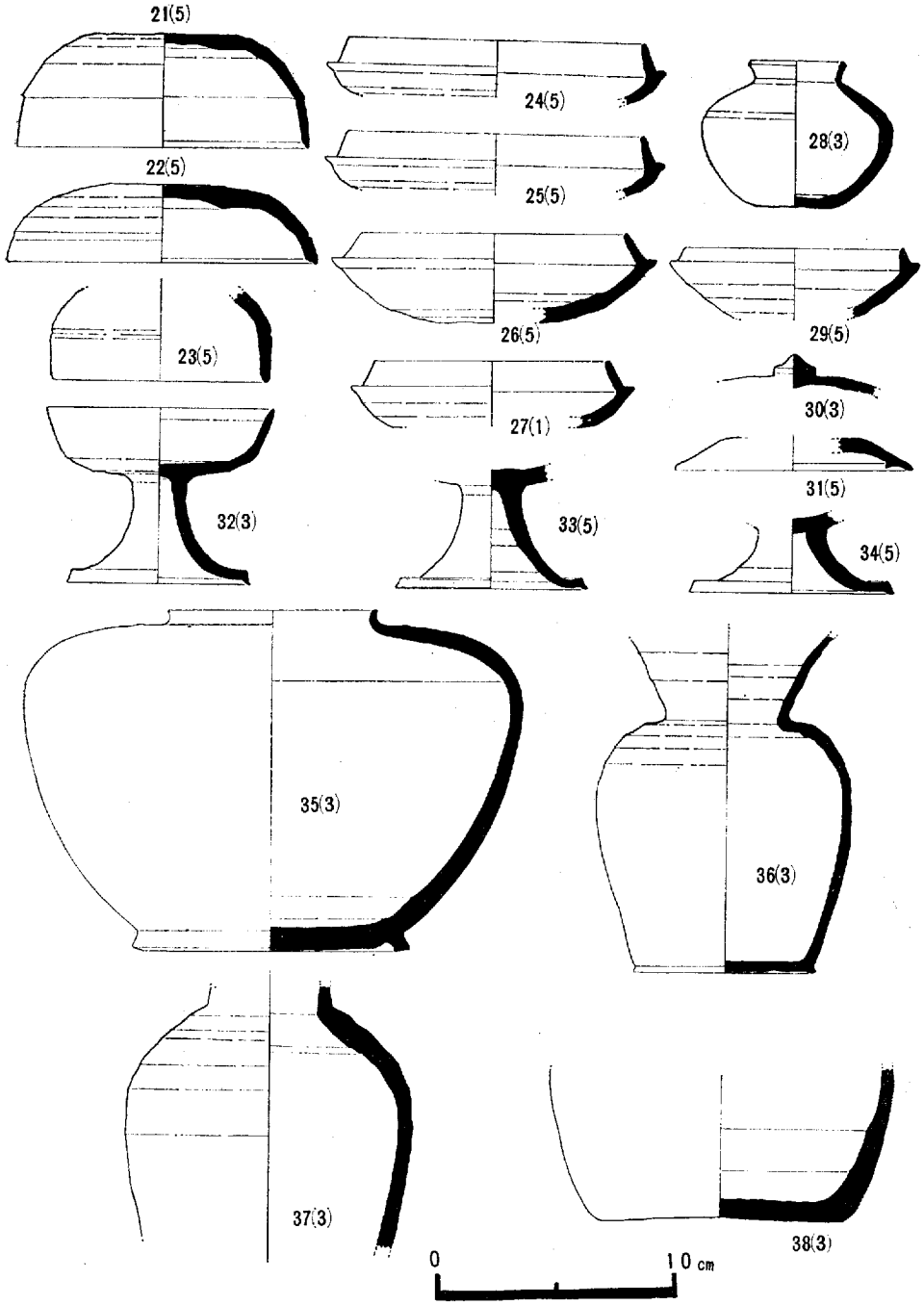
中でもⅣ類に属する奈良時代のものが他にくらべて多く出土した。またⅤ類に属するものも小破片は比較的に多く出土しているが図示できるのは少なかった。全体を通して出土した須恵器はすべて焼成堅緻で良質のものが多い。これらの遺物は第３地点の建物群，第５地点の柱穴群に関係する遺物と思われ，門前池周辺の奈良時代，平安時代を中心とした歴史時代の遺構の広がりを知るものである。

（遺物番号の（　）内は出土地点を示す）　　（枝　川）

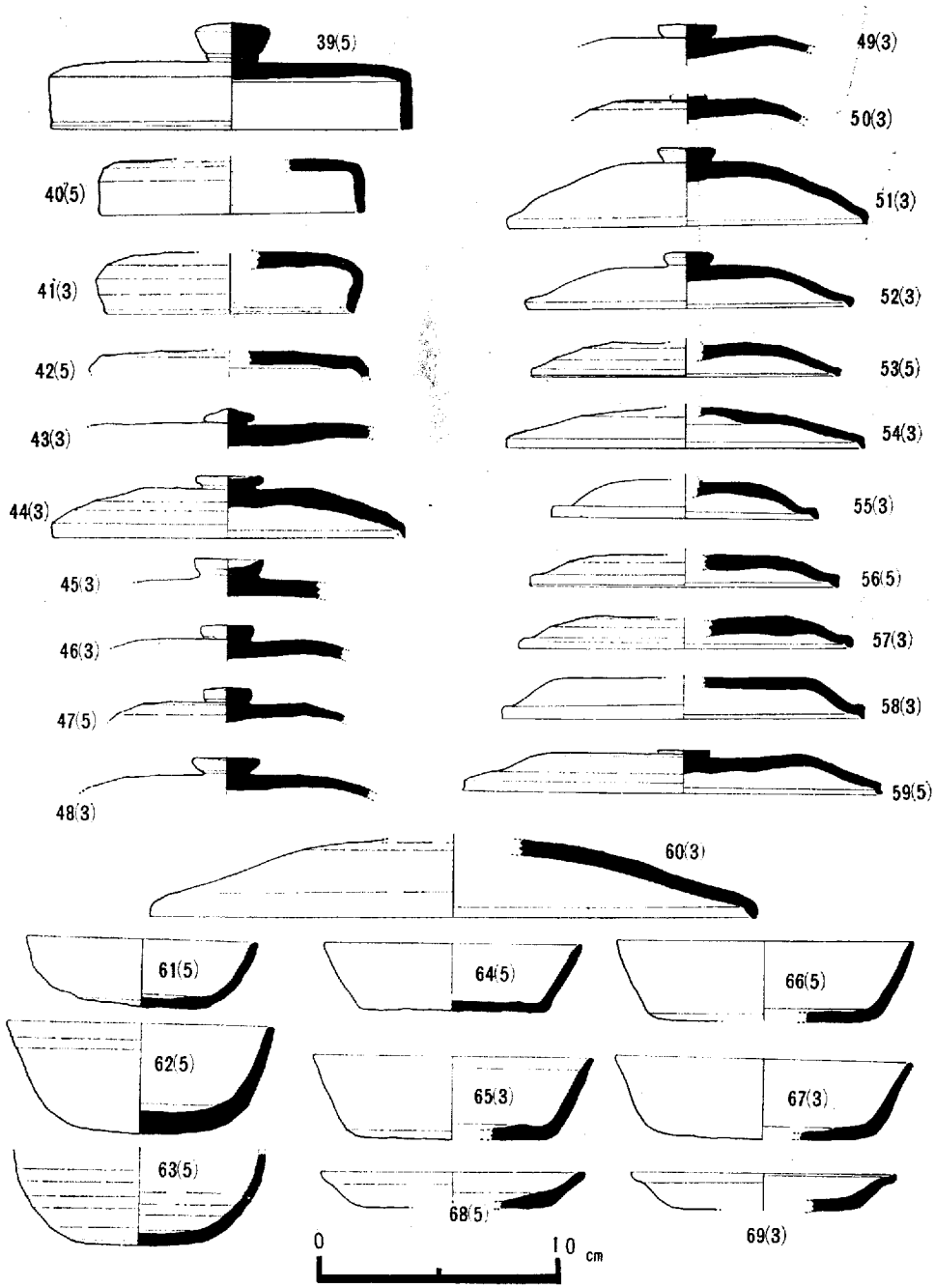
1　「陶邑古窯址Ⅰ」　平安学園考古学クラブ　1966
2　古代の日本（中国，四国）「備前の古窯」　西川　宏　角川書店
3　邑久町教育委員会，「新林（宮嶋）窯址の調査報告」　伊藤　晃　1974
4　倉敷考古館研究集報　８号，「倉敷市，酒津，水江遺跡」，間壁　葭子



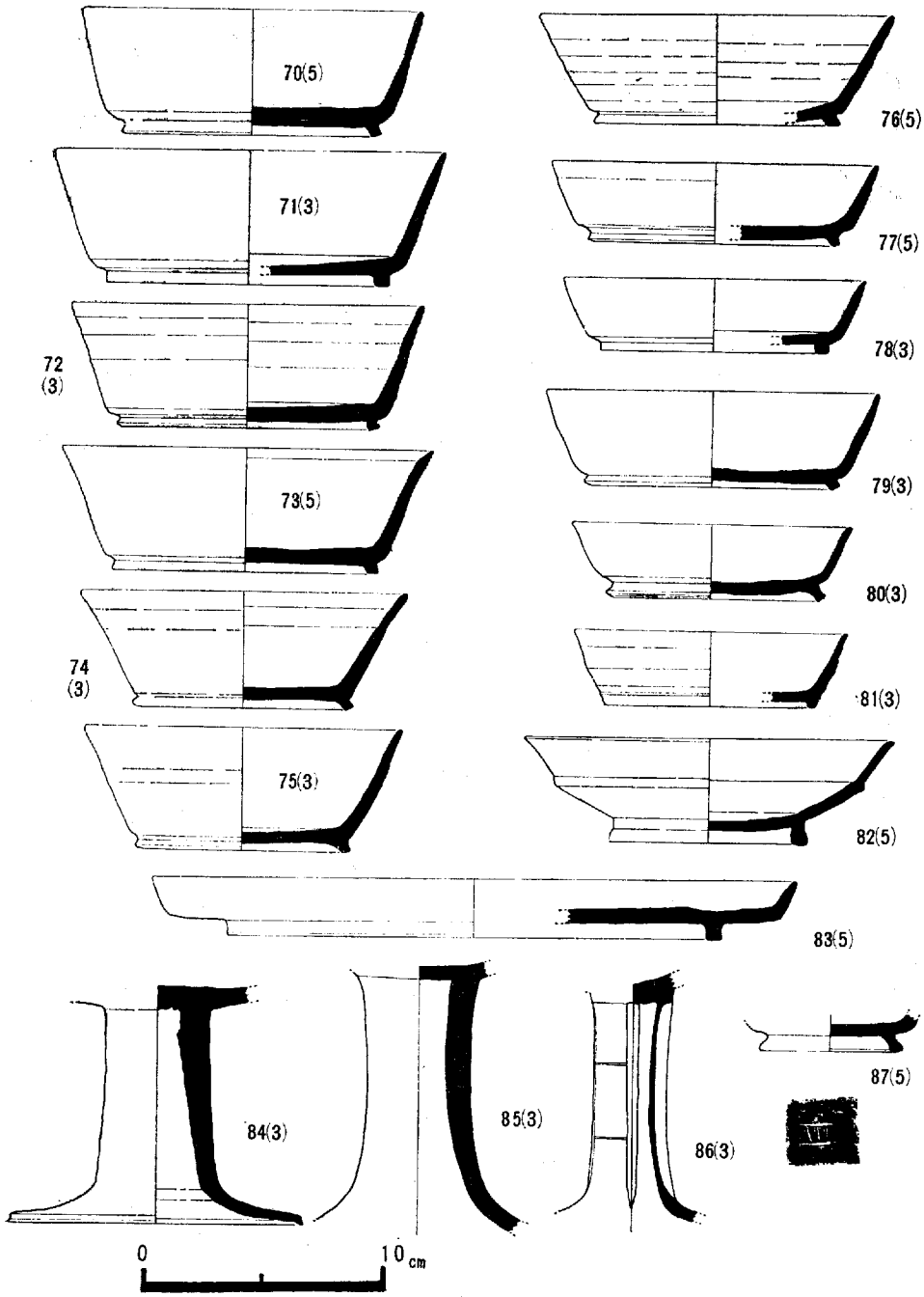
第105図　第１次調査出土の須恵器



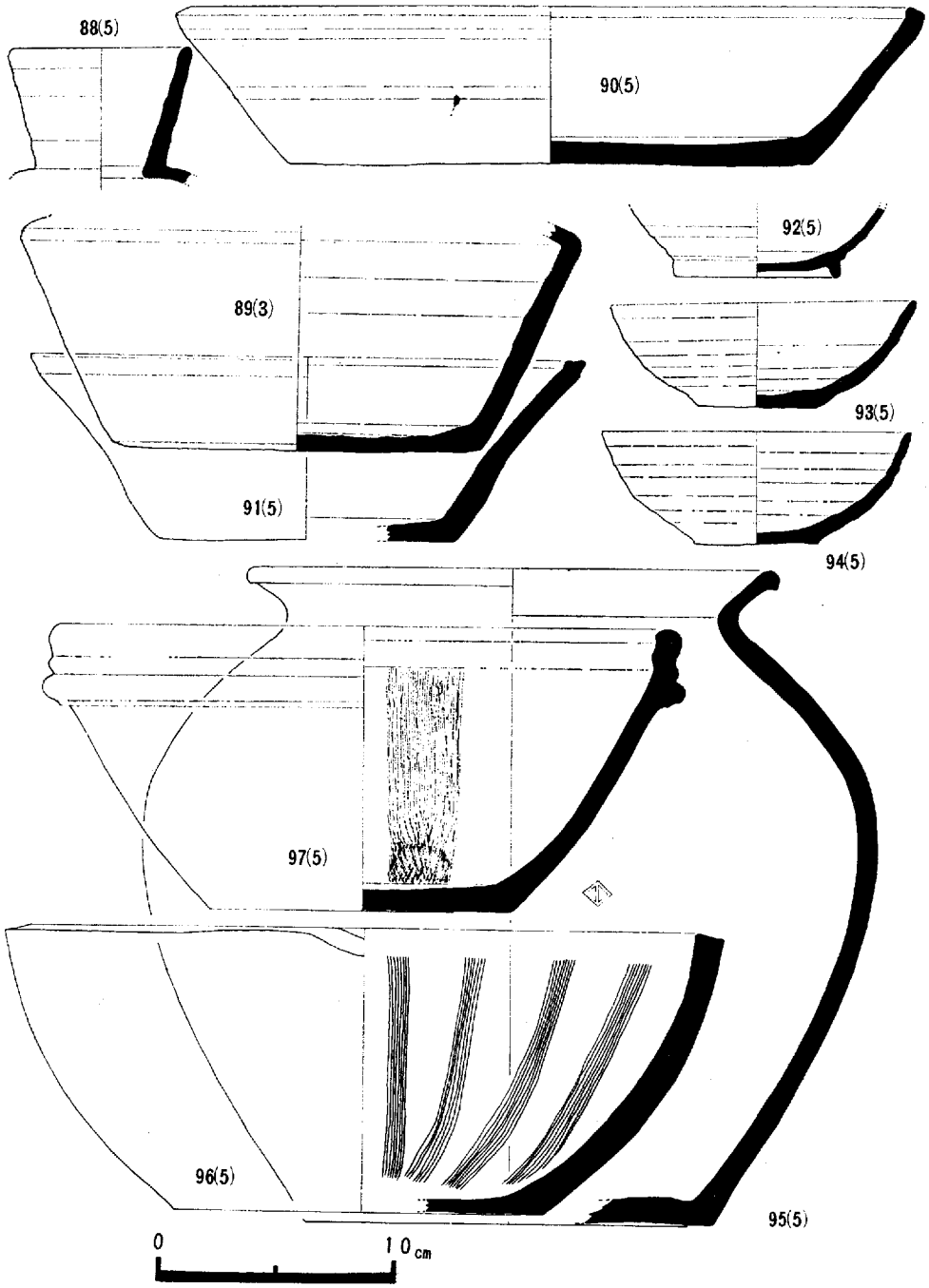
第106図　第１次調査出土の須恵器



第107図　第１次調査出土の須恵器



第108図　第１次調査出土の須恵器



第109図　第１次調査出土の須恵器

1　第 1 地点発掘前近景

2　第 1 地点遺構全体

図版２

１　第１地点２号住居址

２　第１地点６・７号住居址

第１地点６号住居址出土遺物、14号住居址出土遺物

図版４

１　第１地点８号住居址

２　第１地点11号（15・16）住居址

１　第１地点19・20号住居址

２　第１地点土器溜出土状態

図版６

１　第１地点土器溜出土状態

２　第１地点土器溜出土状態

1　第 1 地点土器溜出土状態

2　第 1 地点土器溜出土状態

図版８

１　第１地点発掘作業風景

２　第１地点発掘作業風景

１　第１地点作業風景

２　第１地点調査後の工事

図版10

1　第２地点遺構全体

2　第２地点４本柱の特殊な建物

1　第２地点土壙断面

2　第２地点土壙

図版12

1　第２地点作業

2　第２地点作業

1　第３地点発掘前全体

2　第３地点遺構全体

図版14

1　第３地点１号住居址

2　第３地点２号住居址

1　第３地点３号住居址（焼土木炭）

2　第３地点13号住居址

図版16

1　第３地点13号住居址土器出土状態

2　第３地点14号住居址

1　第３地点14号住居址遺物出土状態

2　第３地点15号住居址

図版18

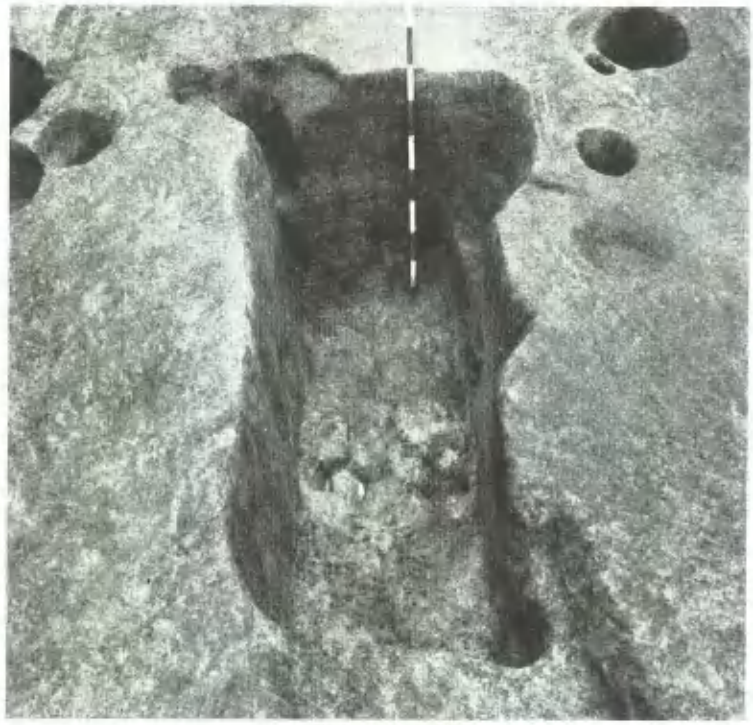
1　第３地点18号住居址

2　第３地点22号住居址

1　第３地点土壙１・２・３

2　第３地点土壙５

図版20



1　第３地点土壙６

2　第３地点土壙７・８・９

1　第３地点建物Ⅰ

2　第３地点建物Ⅱ

図版22

1　第３地点建物Ⅲ・Ⅳ

2　第３地点建物Ⅵ

1　第３地点柵列

2　第３地点発掘作業風景

図版24

1　第４地点９号住居址

2　第４地点10号住居址

1　第４地点工事用道路断面検出住居址

2　第４地点歴史時代大溝

1　第４地点作業

2　第４地点作業

1　第５地点調査前景

2　第５地点１号住居址

図版28

1　第５地点小石敷遺構瓦溜全体

2　第５地点小石敷遺構と瓦出土状態

1　第５地点瓦出土状態

2　第５地点瓦出土状態

図版30

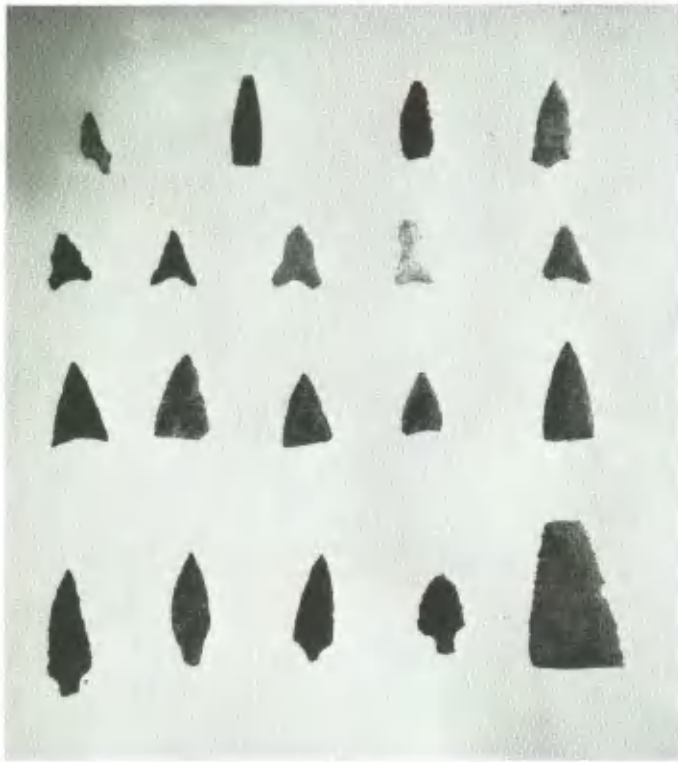
1　第５地点６区Ｃ～Ｅ区トレンチ断面

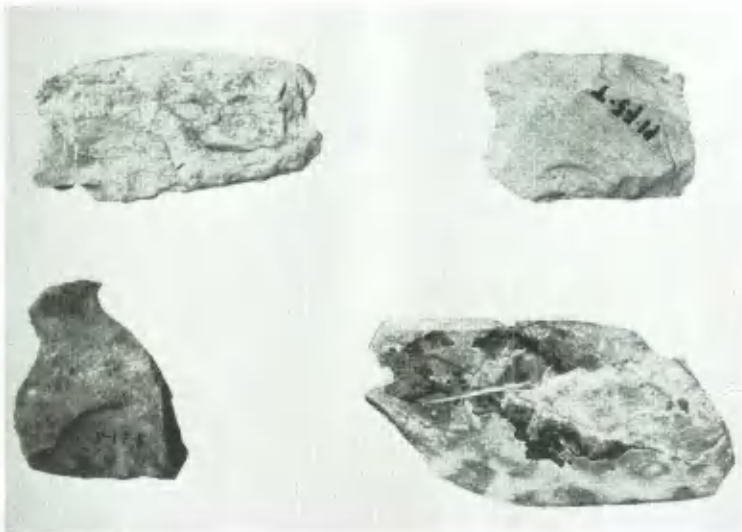
2　第５地点調査風景

1　第５地点13区Ｃ～Ｏ区トレンチ

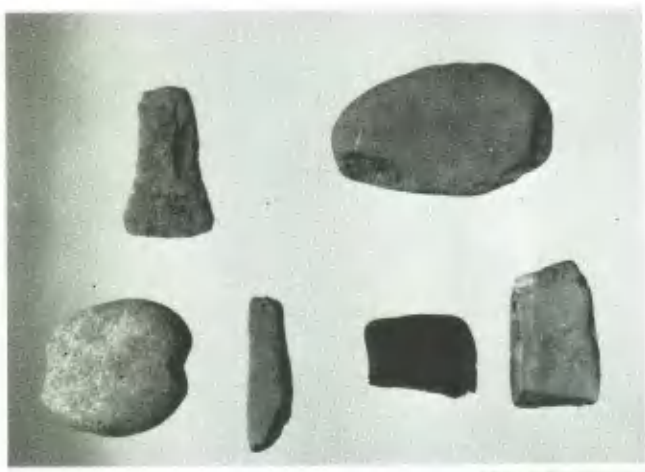
2　第５地点出在軒丸瓦

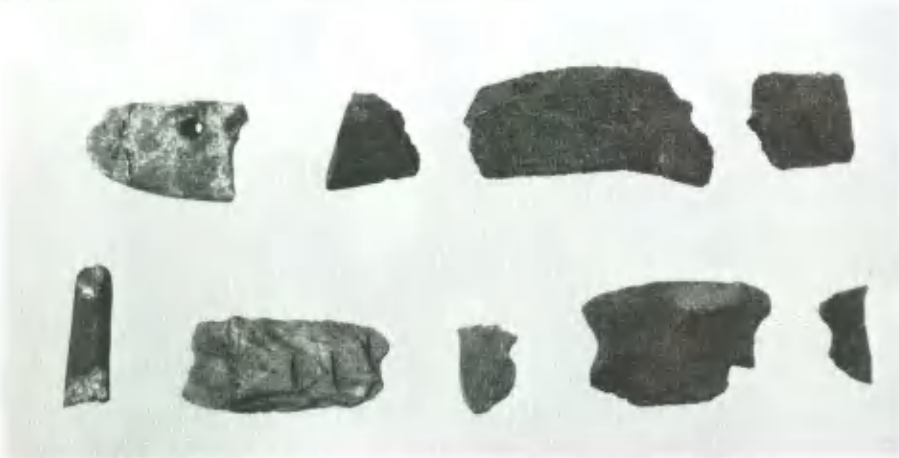
図版32





第１地点出土石器





第３地点出土石器

図版34

1　第3地点出土石器

2　第5地点出土石器

第１地点土器溜出土遺物

1　第１地点１号住居址出土遺物

2　第１地点３号住居址出土遺物

1　第３地点１号住居址出土遺物

2　第３地点13号住居址出土遺物

図版38

1　第３地点１号住居址出土遺物

2　第３地点出土須恵器

3　第３地点14号住居址出土遺物

1　第4地点10号住居址出土遺物

2　第4地点5号住居址出土遺物

Ⅳ 第 2 次 調 査

目　　次

第1章　調査区の概要…… 151
第2章　第2地点の調査…… 153
　1　便木山7号墳…… 159
　2　住　居　址…… 166
　3　土　　壙…… 200
　4　鍛　冶　炉…… 210
　5　建　　物…… 211
　6　保存区域のトレンチ調査…… 214
　7　遺　　物…… 216
第3章　第3地点の調査…… 224
第4章　第6地点の調査…… 243
第5章　第7地点の調査…… 245
第6章　まとめにかえて…… 252

図　目　次

第1図　第2次調査区地形図（製図：池畑　耕一）…… 152
第2図　第2地点グリッド配置図（作成・製図：池畑）…… 154
第3図　予備調査土器溜り出土遺物(1)（実測：福田　正継・池畑，製図：池畑）…… 155
第4図　予備調査土器溜り出土遺物(2)（実測：福田，製図：池畑）…… 156
第5図　予備調査土器溜り出土遺物(3)（実測：福田・池畑，製図：池畑）…… 157
第6図　壺　　棺（実測・製図：池畑）…… 158
第7図　第2地点遺構配置図（実測：橋本　幸男・枝川　陽・池畑，製図：池畑）…折り込み
第8図　便木山7号墳地形図（実測：枝川・池畑，製図：池畑）…… 160
第9図　便木山7号墳断面図（実測・製図：池畑）……折り込み
第10図　箱　式　石　棺（実測・製図：池畑）…… 162
第11図　便木山7号墳出土遺物(1)（実測・製図：池畑）…… 164
第12図　便木山7号墳出土遺物(2)（実測・製図：正岡）…… 165
第13図　1　号　住　居　址（実測：平川　哲二・池畑，製図：池畑）…… 166
第14図　1号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 166
第15図　2　号　住　居　址（実測・製図：池畑）…… 167
第16図　3号住居址とその周辺（実測・製図：池畑）…… 167
第17図　4　号　住　居　址（実測：下沢　公明・池畑，製図：池畑）…… 168
第18図　4号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 168

第19図　5号住居址・6号住居址（実測・製図：池畑）…… 169
第20図　5号住居址・6号住居址上部土器溜り出土遺物（実測・製図：池畑）…… 169
第21図　7号住居址（実測：橋本・池畑，製図：池畑）…… 171
第22図　7号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 171
第23図　8号住居址（実測・製図：池畑）…… 172
第24図　8号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 172
第25図　9号住居址・10号住居址（実測：橋本，製図：池畑）…… 172
第26図　9号住居址・10号住居址出土遺物(実測：森下大輔・池畑，製図：池畑)…… 173
第27図　11号住居址（実測：正岡睦夫，製図：池畑）…… 175
第28図　11号住居址出土遺物(1)（実測・製図：正岡）…… 175
第29図　11号住居址出土遺物(2)（実測・製図：正岡）…… 176
第30図　12号住居址（実測・製図：池畑）…… 178
第31図　12号住居址および上部土器溜り下層出土遺物(1)（実測：福田，製図：池畑）… 179
第32図　12号住居址上部土器溜り下層出土遺物(2)（実測：福田・池畑，製図：池畑）… 180
第33図　12号住居址上部土器溜り下層出土遺物(3)（実測：福田，製図：池畑）…… 181
第34図　12号住居址上部土器溜り下層出土遺物(4)と土器溜り上層出土の土器(1)
（実測：福田，製図：池畑）　182
第35図　12号住居址上部土器溜り上層出土遺物(2)（実測：福田・森下・池畑，
製図：池畑）… 183
第36図　12号住居址上部土器溜り下層出土の土器文様（実測・製図：正岡）…… 184
第37図　13号住居址・16号住居址（実測・製図：池畑）…… 185
第38図　13号住居址出土遺物（実測：森下，製図：池畑）…… 185
第39図　16号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 187
第40図　14号住居址（実測：橋本，製図：池畑）…… 188
第41図　14号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 188
第42図　15号住居址（実測：橋本，製図：池畑）…… 189
第43図　15号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 189
第44図　17号住居址（実測：橋本，製図：池畑）…… 189
第45図　17号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 189
第46図　18号住居址（実測・製図：池畑）…… 190
第47図　18号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 190
第48図　19号住居址・20号住居址（実測：上田　清幸，製図：池畑）…… 191
第49図　19号住居址・20号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 192
第50図　21号住居址（実測・製図：枝川）…… 193
第51図　21号住居址出土遺物（実測・製図：枝川）…… 193

第52図　22 号 住 居 址（実測：上田，製図：池畑）…… 194
第53図　22号住居址出土遺物（実測・製図：池畑）…… 194
第54図　23 号 住 居 址（実測・製図：池畑）…… 194
第55図　24 号 住 居 址（実測・製図：池畑）…… 195
第56図　24号住居址出土遺物（実測：福田，製図：池畑）…… 196
第57図　25 号 住 居 址（実測・製図：池畑）…… 197
第58図　25号住居址出土遺物（実測：福田，製図：池畑）…… 198
第59図　26号住居址・27号住居址（実測：枝川，製図：池畑）…… 199
第60図　26号住居址・27号住居址出土遺物（実測：福田，製図：池畑）…… 199
第61図　土　　壙　　1（実測・製図：池畑）…… 200
第62図　土壙1・土壙2出土遺物（実測・製図：池畑）…… 200
第63図　土　　壙　　2（実測・製図：池畑）…… 201
第64図　土壙3出土遺物（実測・製図：池畑）…… 201
第65図　土　　壙　　3（実測・製図：池畑）…… 202
第66図　土　　壙　　4（実測・製図：池畑）…… 203
第67図　土　　壙　　5（実測・製図：池畑）…… 203
第68図　土　　壙　　6（実測・製図：池畑）…… 204
第69図　土壙6出土遺物（実測：福田，製図：池畑）…… 205
第70図　土　　壙　　7（実測：上田，製図：池畑）…… 206
第71図　土　　壙　　8（実測・製図：池畑）…… 207
第72図　土壙9（実測：正岡，製図：池畑）…… 207
第73図　土　　壙　　10（実測：正岡，製図：池畑）…… 208
第74図　土壙10出土遺物（実測・製図：池畑）…… 208
第75図　土　　壙　　11（実測：上田，製図：池畑）…… 209
第76図　土　　壙　　12（実測・製図：池畑）…… 209
第77図　土壙12出土遺物（実測：池畑，製図：下沢）…… 209
第78図　鍛　　冶　　炉（実測・製図：池畑）…… 210
第79図　建物1・建物2出土遺物（実測：岡田　博，製図：池畑）…… 211
第80図　建　　物　　1（実測：枝川，製図：池畑）…… 212
第81図　建　　物　　2（実測：枝川，製図：池畑）…… 213
第82図　トレンチ平面・断面図（実測・製図：池畑）…… 215
第83図　トレンチ出土遺物（実測・製図：池畑）…… 215
第84図　土　　器（実測：森下・池畑，製図：池畑）…… 216
第85図　石　鏃・石　匙（実測・製図：池畑）…… 217
第86図　石　　砲　　丁（実測：岡田・池畑，製図：岡田）…… 219

第87図　石槍・石鎌・片刃石器・叩き石・分銅形石製品・石錘（実測・製図：池畑・岡田）… 221
第88図　石　斧・砥　石（実測：池畑・岡田・製図：池畑・正岡・岡田）…… 222
第89図　土製品・鉄　器（実測：池畑，製図：池畑・正岡）…… 223
第90図　青　　磁　（実測・製図：枝川）…… 223
第91図　第３Ａ地点出土銅鐸形土製品（実測・製図：枝川）…… 226
第92図　第３Ａ地点平面図（実測：製図，枝川）…… 226
第93図　第３Ａ地点トレンチ断面図（実測・製図：枝川）…… 227
第94図　第３Ａ地点トレンチ内出土遺物（実測：正岡，製図：枝川）…… 228
第95図　第３Ｂ地点トレンチ配置図（作成・製図：枝川）…… 232
第96図　トレンチ，１，２，３断面図（実測・製図：枝川）…… 233
第97図　トレンチ，４，５，６断面（実測・製図：枝川）…… 234
第98図　トレンチ，７，８，９断面図（実測・製図：枝川）…… 235
第99図　トレンチ１内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 236
第100図　トレンチ２内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 237
第101図　トレンチ３内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 238
第102図　トレンチ４内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 239
第103図　トレンチ５内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 240
第104図　トレンチ６内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 240
第105図　トレンチ８内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 241
第106図　トレンチ９内出土遺物（実測・製図：枝川）…… 241
第107図　トレンチ内遺構配置図（実測・製図：枝川）…… 242
第108図　第６地点トレンチ配置図（作成・製図：池畑）…… 244
第109図　第６地点遺構図（実測：橋本，製図：池畑）…… 244
第110図　第７地点トレンチ配置図（作成・製図：池畑）…… 246
第111図　８東壁トレンチ断面図および溝１平面図（実測・製図：池畑）…… 247
第112図　Ｈ北壁トレンチ断面図（実測・製図：池畑）…… 248
第113図　Ｃ北壁トレンチ断面図（実測・製図：池畑）…… 250
第114図　第７地点出土石器（実測・製図：池畑）…… 250
第115図　第７地点出土遺物（実測・製図：池畑）…… 251
第116図　河本周辺の条里制（所収：岡山県農地史）…… 259

第１表　鉄鉱石の定量分析（岡山県立工業試験場）…… 210
第２表　石 鏃 計 測 表…… 218

図　版　目　次

図版１—１　予備調査土器溜り（東より）（撮影：神原）……1
図版１—２　予備調査壺棺（北より）（撮影：神原）……1
図版２—１　北上空より第３地点,第４地点,第５地点をのぞむ(撮影：中日本航空株式会社)…2
図版２—２　第２地点遠景（南より）（撮影：池畑）……2
図版３—１　便木山７号墳（西より）（撮影：池畑）……3
図版３—２　便木山７号墳（北より）（撮影：池畑）……3
図版４—１　便木山７号墳（南より）（撮影：池畑）……4
図版４—２　埴輪出土状況（北より）（撮影：池畑）……4
図版５—１　箱式石棺（北より）（撮影：池畑）……5
図版５—２　箱式石棺（東より）（撮影：池畑）……5
図版６—１　箱式石棺（北より）（撮影：池畑）……6
図版６—２　箱式石棺（北より）（撮影：池畑）……6
図版７—１　Ｇ６Ｇ区周辺（北より）（撮影：池畑）……7
図版７—２　第４地点（東上空より）（撮影：中日本航空株式会社）……7
図版８—１　東斜面（調査後・南より）（撮影：池畑）……8
図版８—２　西斜面（調査後，南より）（撮影：池畑）……8
図版９—１　１号住居址付近（南より）（撮影：池畑）……9
図版９—２　４号住居址（東より）（撮影：池畑）……9
図版10—１　５号住居址，６号住居址（東より）（撮影：池畑）……10
図版10—２　８号住居址（東より）（撮影：池畑）……10
図版11—１　９号住居址，10号住居址（東より）（撮影：池畑）……11
図版11—２　11号住居址（北より）（撮影：池畑）……11
図版12—１　11号住居址（北より）（撮影：池畑）……12
図版12—２　11号住居址（西より）（撮影：池畑）……12
図版13—１　12号住居址上部土器溜り（東より）（撮影：池畑）……13
図版13—２　土器溜り上層（撮影：池畑）……13
図版14—１　12号住居址上部土器溜り（東より）（撮影：池畑）……14
図版14—２　12号住居址（東より）（撮影：池畑）……14
図版15—１　13号住居址，16号住居址（西より）（撮影：池畑）……15
図版15—２　14号住居址（西より）（撮影：池畑）……15
図版16—１　18号住居址（東より）（撮影：池畑）……16
図版16—２　19号住居址，20号住居址（東より）（撮影：池畑）……16
図版17—１　24号住居址（東より）（撮影：池畑）……17

図版17—2　25号住居址周辺（西より）（撮影：池畑）……17
図版18—1　25号住居址（北より）（撮影：池畑）……18
図版18—2　25号住居址（北より）（撮影：池畑）……18
図版19—1　25号住居址（東より）（撮影：池畑）……19
図版19—2　25号住居址（北より）（撮影：池畑）……19
図版20—1　土　　壙　5（西より）（撮影：池畑）……20
図版20—2　土　　壙　6（東より）（撮影：池畑）……20
図版21—1　土　　壙　10（北より）（撮影：池畑）……21
図版21—2　土　　壙　12（西より）（撮影：池畑）……21
図版22—1　鍛冶炉周辺（東より）（撮影：池畑）……22
図版22—2　鍛　　治　炉（西より）（撮影：池畑）……22
図版23—1　建　　物　1（東より）（撮影：池畑）……23
図版23—2　建　　物　2（東より）（撮影：池畑）……23
図版24—1　線刻画砥石（撮影：岡田）……24
図版24—2　船形土製品（撮影：岡田）……24
図版25—1　銅鐸形土製品（撮影：岡田）……25
図版25—2　線刻画土器（撮影：岡田）……25
図版26—1　石　　鏃（撮影：岡田）……26
図版26—2　石　斧，石　錘（撮影：岡田）……26

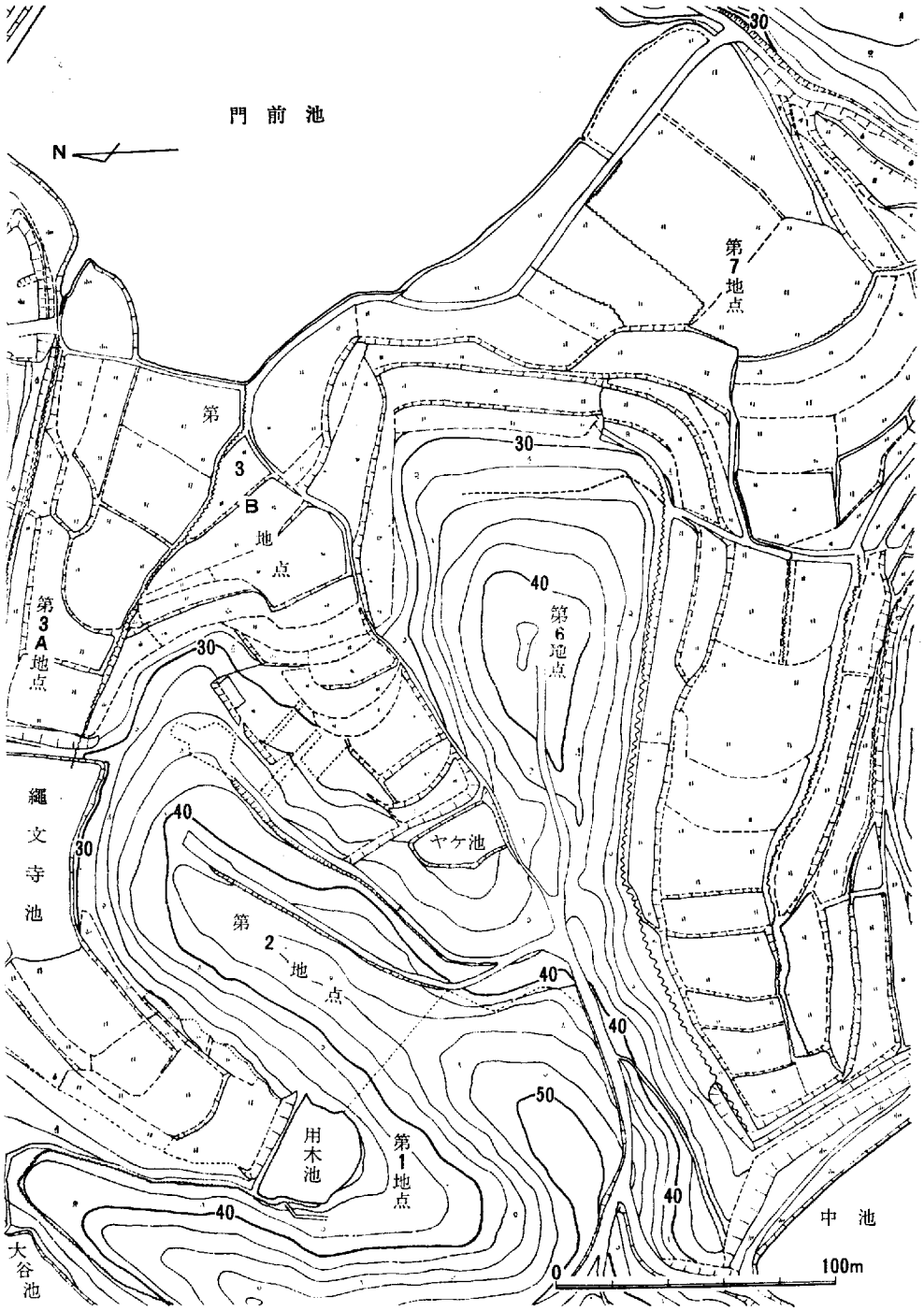
第1章　調査区の概要

第２次調査は，便木山の弥生集落の調査，第１次調査第３地点で検出された建物群の範囲確認調査，保存区域となった便木山の性格調査の３点を目標として行われた。したがって，調査は広い範囲にわたり，その大部分はトレンチ調査によった。

次に，各調査区の概略を述べたい。

第２地点は，ヤケ池周辺一帯で今回の調査の中心となった地域である。団地造成で削平されるところは全面を調査し，谷については一部トレンチ調査を行った。総面積5,100㎡におよび，古墳１基・住居址30軒近く，貯蔵穴10個をはじめ多数のピットを検出した。また，谷に接した地点では建物群の続きも確認できた。第３地点は，繩文寺池とヤケ池から門前池へ抜ける谷の開口部にあたる地域で，繩文寺池からの谷を境に北側をA区・南側をB区とした。A区は１次調査で未確認のまま終った建物の残部を確認する目的で行われた。すでに土砂が６ｍ近くも埋められており，調査面積は80㎡と少なかったが，土砂の流れ込みなどのため，調査に手間どった。しかし，建物の残部が確認でき，同時に，銅鐸形土製品の出土をみた。B区は９本のトレンチ，総面積500㎡を発掘した。このトレンチ調査では，建物群の広がり，包含層の状況確認を行った。第６地点は，保存区域となった便木山で，頂上部の平担面に６本のトレンチ，総面積７㎡を発掘した。狭い範囲だったため，平安期の須恵器を出土するピット４個を確認したのみであった。第７地点は，蓮池と中池から門前池へ抜ける谷の部分で，幅1.5ｍのトレンチを谷に直交する方向に２本（90ｍと65ｍ），谷に平行する方向で１本（152ｍ）設定した。調査の結果，山裾で柱穴を部分的に確認したが，現在の低地は少なくとも鎌倉時代頃までは深い谷であったことが予想でき，弥生時代および古墳時代の包含層も確認できなかった。

団地の造成計画によると，第２地点は削平して分譲地，第３地点・第７地点は埋めたてて分譲地，第６地点は自然公園となる。数年後には，第６地点の頂上部と第２地点の尾根に続く部分を除いて大きく変貌することになる。　（池　畑）



第1図 第 2 調査区地形図（縮尺 1/2,500）単位：m

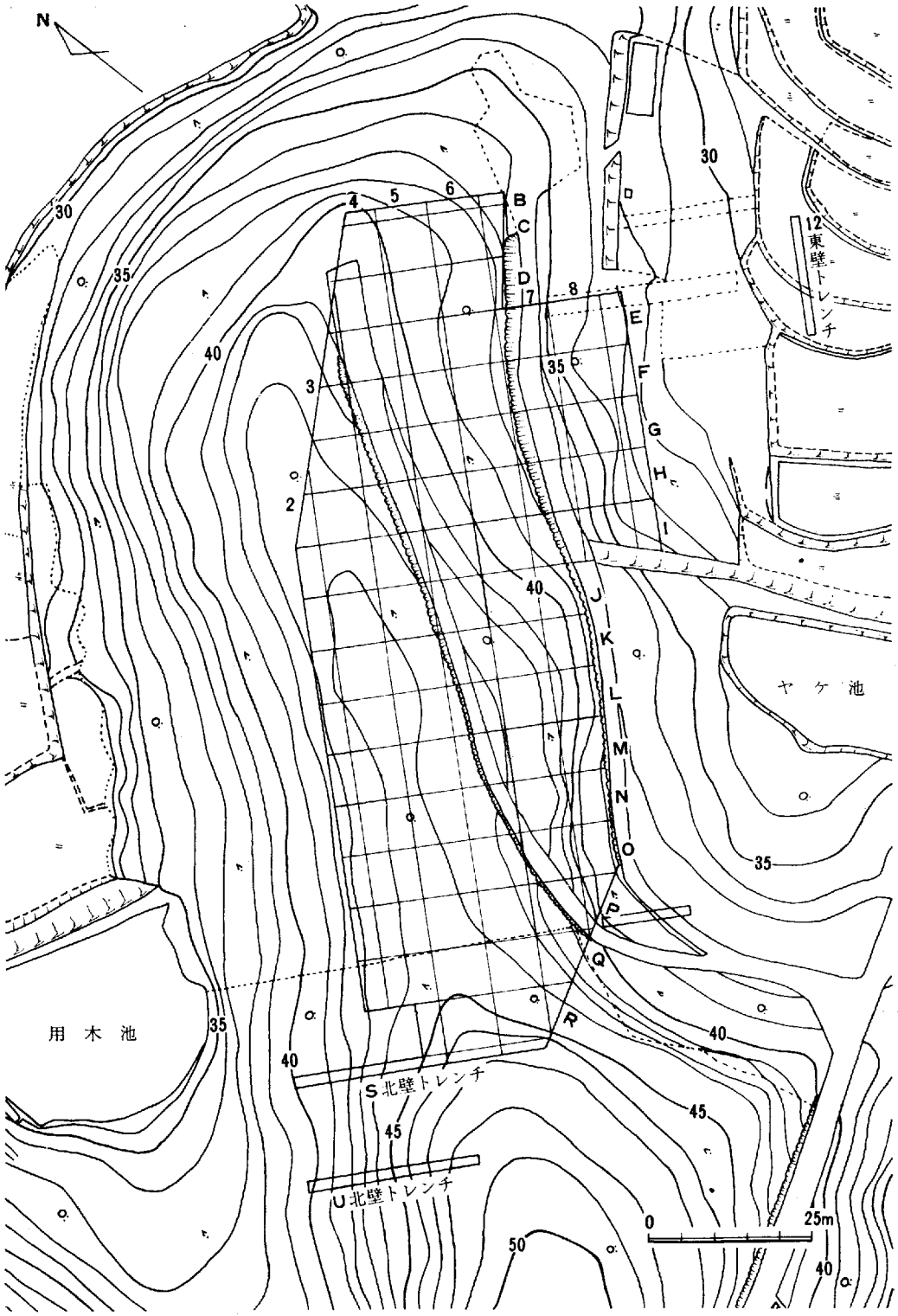
第2章　第　2　地　　点

東方向につよく張り出た4つの細長い丘陵がある。両端の丘陵は大きく，中の丘陵は小さい。この小丘陵のうち，北側が第2地点，南側が第6地点である。第2地点は，便木山古墳群が並ぶ丘陵の先端部南斜面にあたる。反対側の北斜面の基部は，用木池，縄文寺池のある谷であり，この丘陵は頂上平担部が幅10cmしかない。馬の背のように狭い尾根部は西から東へ向けてゆるやかに下降しており，尾根先端部の絶対高は40.5mである。南斜面は全体にゆるやかに下降しているが，中央部が東に突出し谷を狭くしている。現在ではこの突出部を利用して，ヤケ池の堤防が築造され，その西に面積約600m²の溜池である「ヤケ池」がつくられている。ヤケ池の東は，堤防となっているため急角度でおちている。この谷の基底部は幅40mしかなく，第6地点の丘陵へ急傾斜をなしてあがる。谷の基底部と尾根との比高は約11mを測る。団地計画前，丘陵上は桃畑となっており，各所に排水溝・肥料穴がみられる。南斜面途中には，木材持ち出し用の道がつくられ，斜面をブルドーザーで切断している。谷の部分では水田耕作が行われており，山裾には基部からの湧き水が流れている。丘陵を形成しているのは，この地方に多くみられる花崗岩で，表面はその風化土壌である。

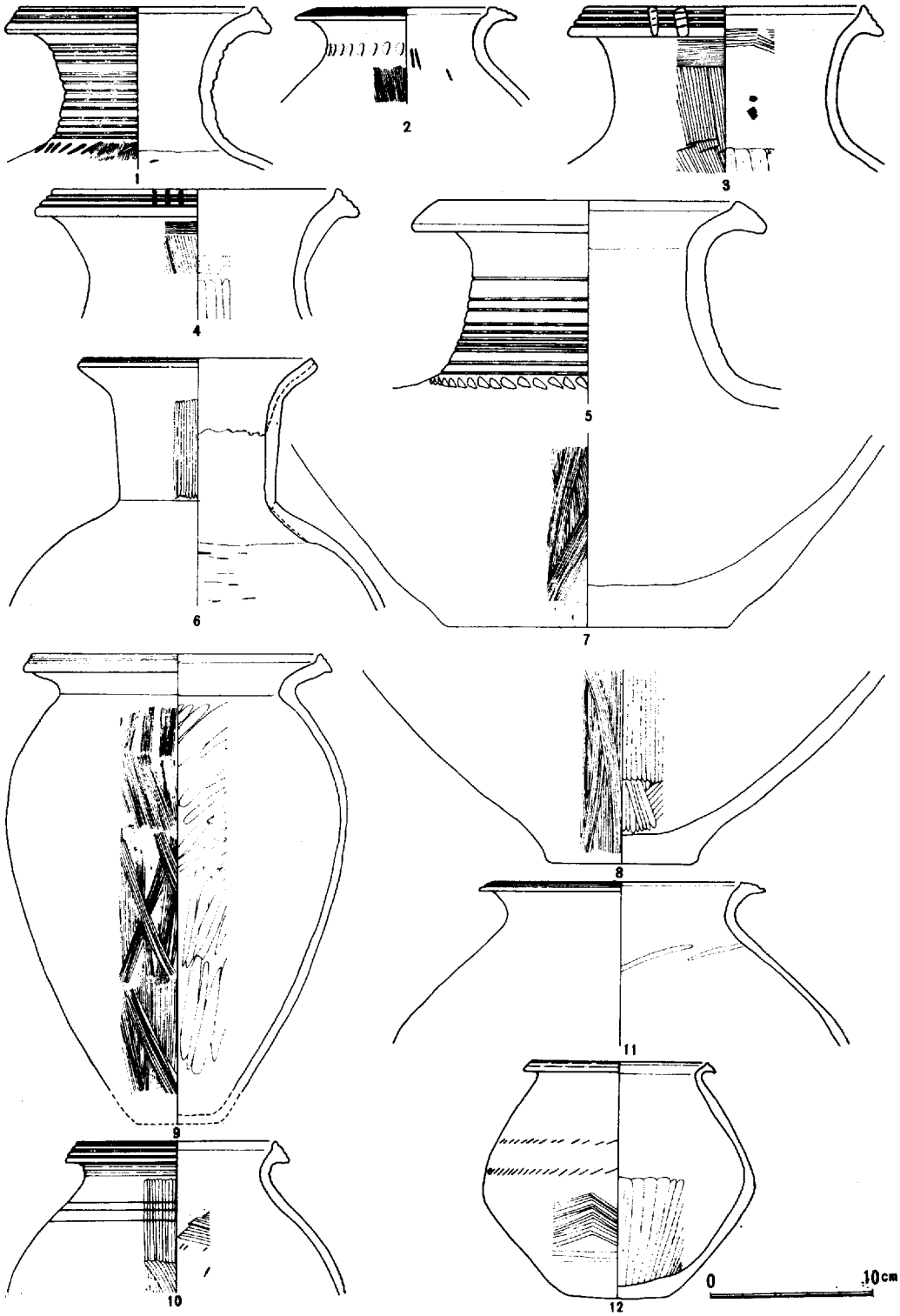
団地造成前から，この一帯は石鏃の拾える場所として地元の人達には知られており，分布調査の段階でも早く知られた地点である。また，丘陵先端には径12mの円墳が知られ，便木山7号墳と名付けられていた。地元の古老の話では，この古墳の他に，あと1基あったというが，今日その存在を確認しえない。

昭和44年，山陽団地の調査が開始された直後，神原英朗氏により，この一帯のトレンチ調査が行われた。ここでは簡単にその調査について記す。調査は今回の第2地点より広い範囲を対象として，当初，16m²グリッド，あとで36m²グリッドを設定して行われた。この調査は遺構の存否を確かめるという目的だったため，基本的には遺構や包含層を掘り下げる作業をやっていない。しかし，この調査でヤケ池の西側には厚い包含層が形成され，その一部には土器溜りもある（図版2—1）ことがわかった。これによって，ヤケ池西側はのちに保存区域に組みいれられることとなった。土器溜りは，G70区北寄りに当たり，後期初頭の土器を含んでいる。

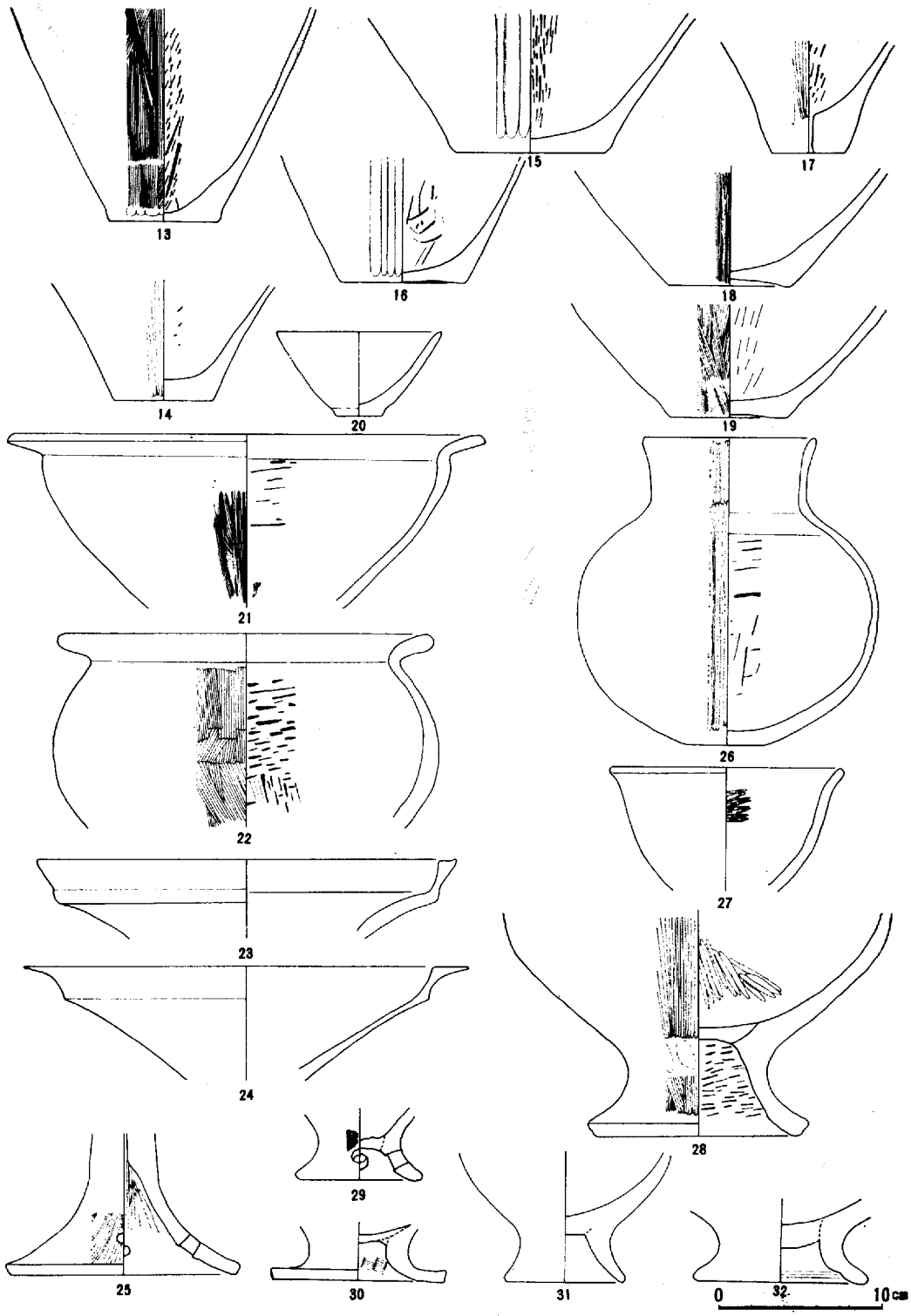
壺形土器（1・3～8）は，口唇端部が肥厚して凹線の施されるものと，直に延びるものとがある。口唇端部が肥厚するものには，頸部に凹線が施され，肩部に貝殻状圧痕文をもつものもある。外面はハケなでで，内面は頸部近くまでヘラ削りがみられる。甕形土器（2・9～19）の口唇部には凹線が施され，肩部に沈線のみられるものもある。最大径は胴部上半にあり，ゆるやかに底部へ移る。内面のヘラ削りは，頸部まで至る。17は底部中央に穿孔がある。鉢形土器（20～22・27）は，口縁が直立するものと外反するものとがある。外面はハケなでで，内面のヘラ削りは頸部まで施される。高坏形土器（23～25）の坏部は，口縁部が外反し，口唇端部は面をもつ。脚部は長脚で，同じ厚さで脚端に至る。4個の円孔をもつ。頸部の短かい壺形土器（26）も内面ヘラ削りは，頸部近くまである。台付鉢形土器（28～32）には，大形のものと小形のものとがあり，小形のものには円孔のあるものも



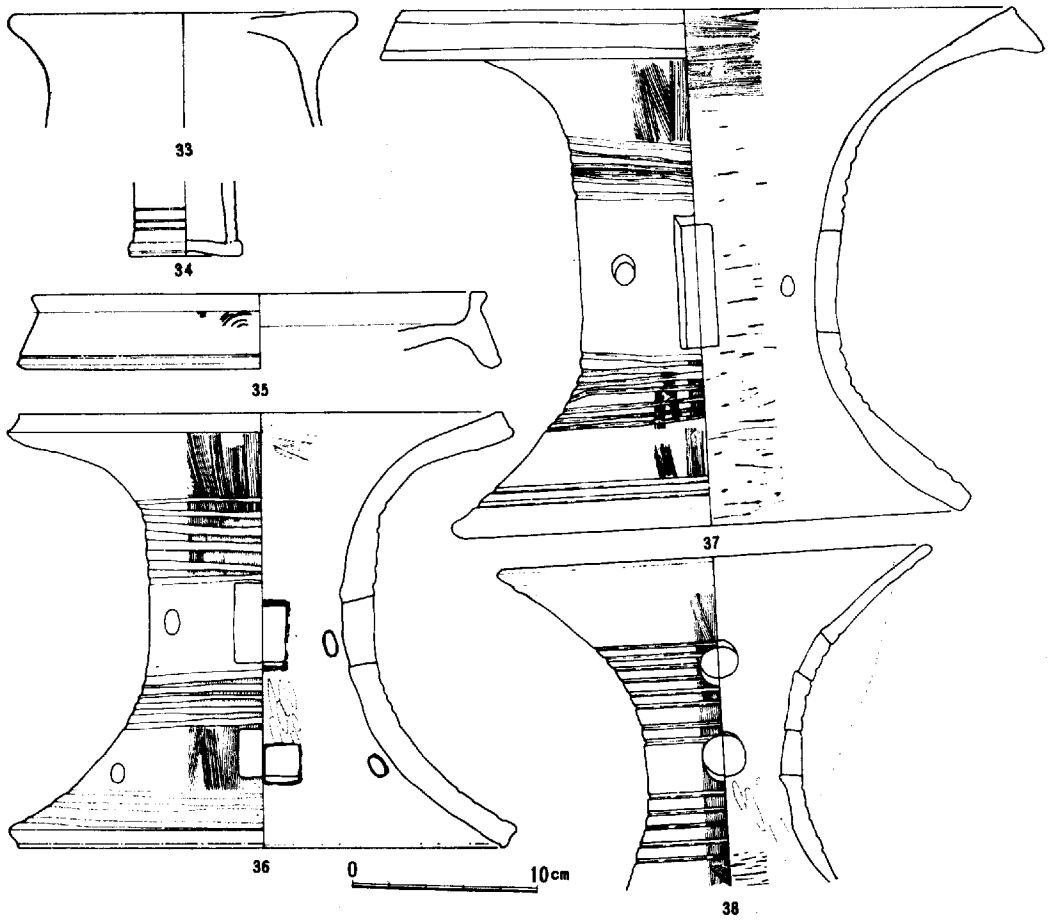
第2図 第2地点グリッド配置図 (縮尺1/1,000) 単位：m



第3図 予備調査土器溜り出土遺物 (1)



第4図　予備調査土器溜り出土遺物(2)



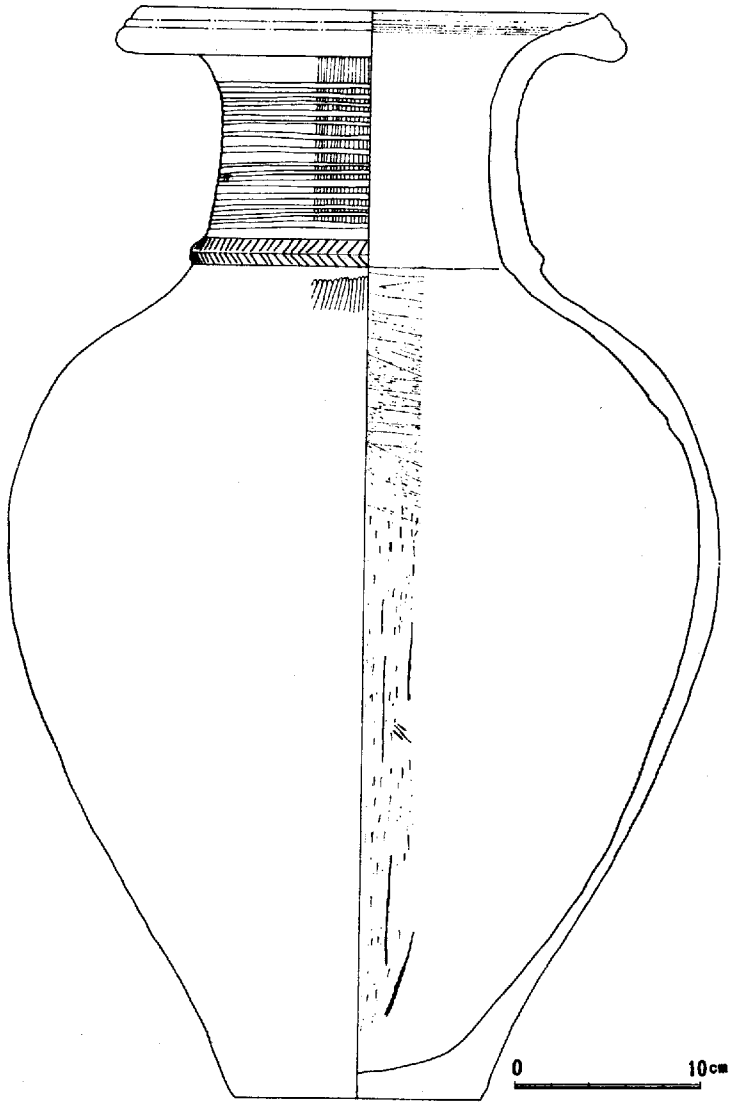
第5図　予備調査土器溜り出土遺物(3)

みられる。33は上面がヘラで丁寧に磨かれた特殊な器形をした土器である。34はジョッキ形土器の底部で，底部近くに，浅い凹線がある。器台形土器（35～38）には，口唇端部が上下に大きく張り出すもの・厚さを増しておわるもの・逆に薄くなりながらおわるものの3種がある。37は中央部に方形と円形の孔が交互に4個ずつあり，38は下半部分にも同じような孔がみられる。

以上の土器は，12を除き，後期初頭に属するものである。

また，壺棺と思われる壺が横たわった状態でみられた（図版2―2）が，この地点は第7図中，GO区に壺棺とした所である。この土器の年代は後期初頭である。

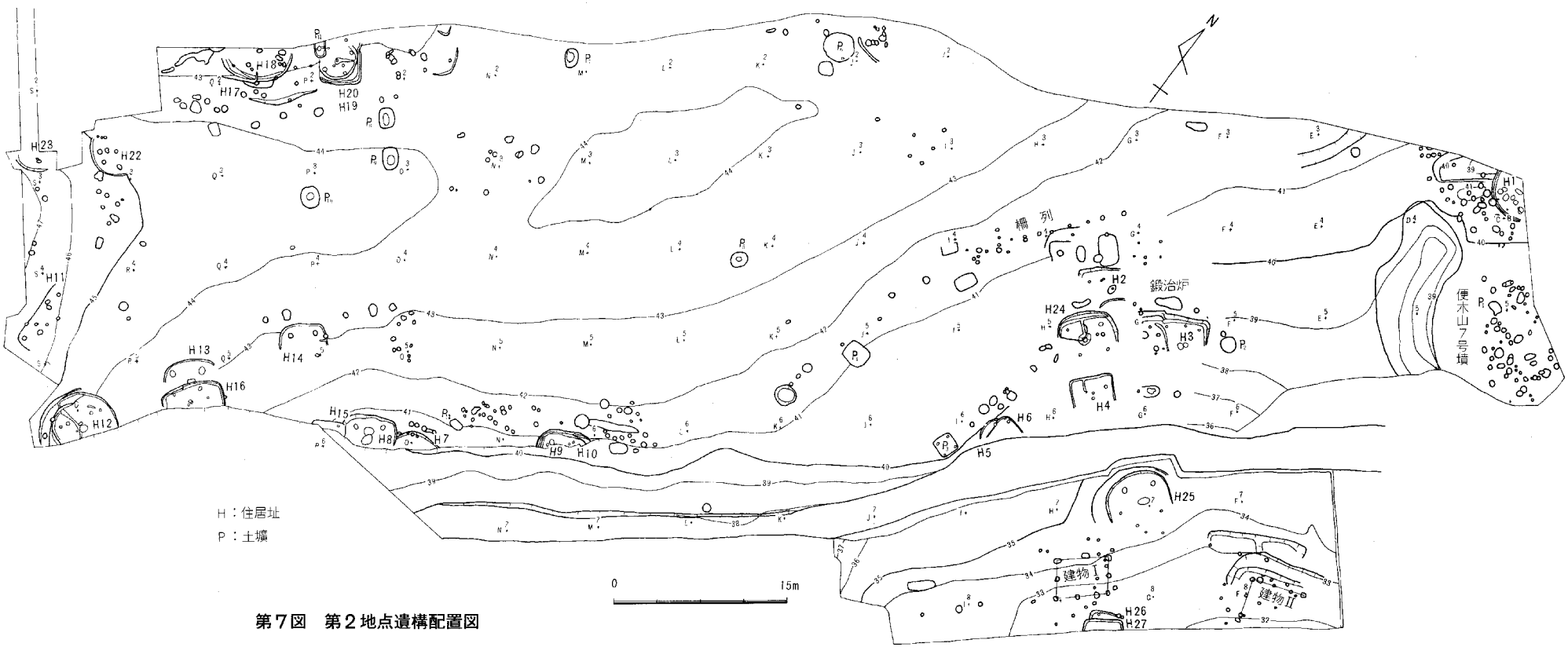
第1次調査では，道路敷の関係でその一部を調査し，4本柱の建造物などが確認されている。(1) 第2次調査では，昭和49年1月からの調査予定であったが，急拠，歩道の設置が予定されたため，その一部を昭和48年11月に調査した。本格的な発掘調査は，1月から始まり，削除部分を調査対象として行った。便木山7号墳上のベンチマークと便木山5号墳上のベンチマークを結ぶ線を基線とし，8*m*四方のグリッドを設定した。地区名は東西方向に1・2……，南北方向にA・B……とし，その交又する名をグリッド名（例えば1A）とした。なお，便木山7号墳上のベンチマークを4・5とB・Cの



第6図　壺　　棺

交わる点とした。調査は削除部分を全面調査とし，S区とU区には遺構の存否確認のため，12区には建物群の広がり確認のためにトレンチをもうけた。調査面積は5,100㎡におよび，弥生時代～古墳時代の住居址30軒近く，貯蔵穴10個，鍛冶炉1基，ピット多数，前方後円墳1基，奈良時代の建物2棟，柵列などを確認し，多量の土器・石器・土製品を出土した。

（1）この調査で出土した遺物については，石器のみを図化した。ヤケ池周辺で出土した分銅形土製品は，東潮「分銅形土製品の部究Ⅰ」『古代吉備』第7集1971年に『焼池例』として紹介している。



第7図　第2地点遺構配置図

1　便木山７号墳

便木山７号墳は，便木山の尾根伝いに並ぶ便木山古墳群の北東端，低地を眼下にのぞむ丘陵末端にある。丘陵は幅が狭く東と西へそれぞれゆるやかに下降し，本墳の前方部は尾根上に，そして，後円部は南斜面のうえに築成されている。絶対高約40*m*，低地との比高15*m*を測る。この古墳は，古く奈良，平安の頃に建物群建設のため南側を削られている。さらに，明治時代には北方眼下にある縄文寺池の築堤工事により，その東半を削り取られている。築堤工事のあとも，丘陵上の果樹園の排水路が前方部と後円部のくびれ部付近を通過している。したがって，調査前は後円部の一部をみて径20*m*，高さ2.0*m*の円墳としてとられていた。昭和44年の予備調査の際にも，あいにくトレンチが周湟と残存墳丘の間をとおったため，埴輪のあることがわかったものの，墳形の予測を変えるまでには至らなかったようである。[(1)]こうした認識の結果，前方部の周湟の一部は昭和48年11月に行われた歩道工事によって壊されてしまった。調査も円墳として開始したため調査前の測量は後円部のみ行ったようになった。なお，本墳は当初，保存される予定であったが，ヤケ池周辺の弥生遺跡を保存する条件と交換で記録処置をすることとなったものである。

（１）山陽町教育委員会『便木山遺跡発掘調査報告他』１９７１年
　　山陽団地埋蔵文化財発掘調査団『四辻土壙墓遺跡，四辻古墳群』１９７３年

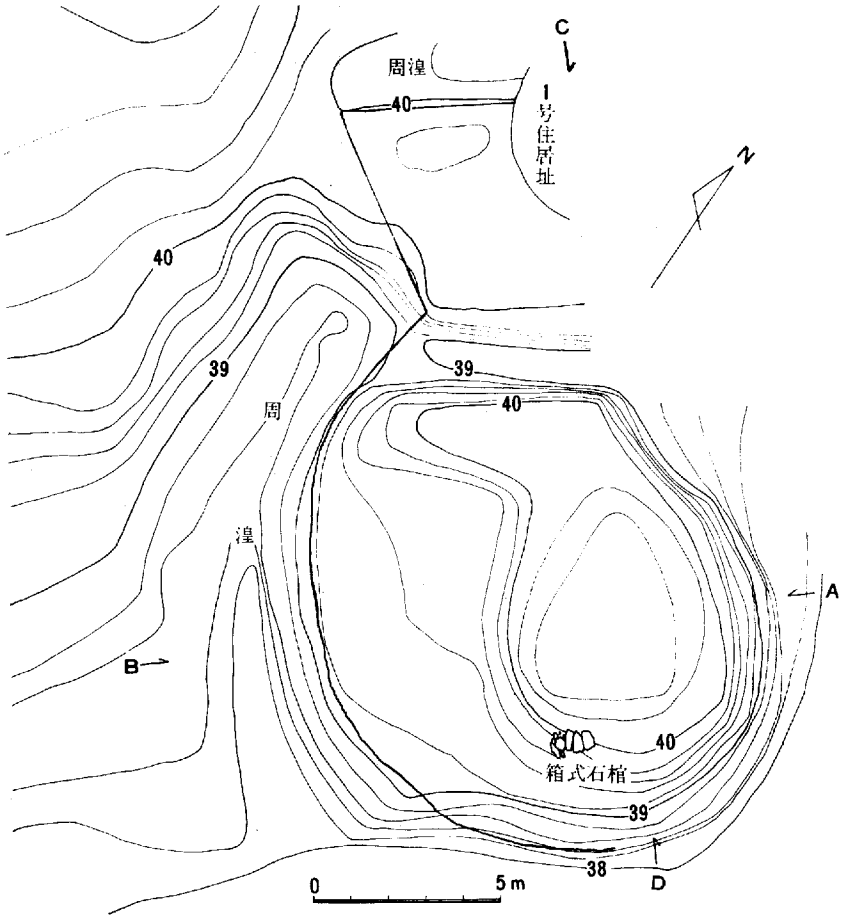
（１）　外　　形　外部施設

先に述べたように，墳丘の原形は大きく損なわれており，墳丘から外形を推定することはできなかったが，さいわいに周溝をもっていたために，それから外形が推定できた。

古墳は丘陵と直交するN28°Wに長軸をもっている。北方向に前方部が向いている。また墳丘は，後円部の一部が約1.4*m*の高さで残っているのみで，後円部の一部と前方部は地山（花崗岩風化土）上に数*cm*の耕土を残すだけである。

後円部端，前方部端が確認できないため正確な全長は不明であるが，周湟のカーブなどから考え約20.5*m*の長さである。後円部の径は15*m*を測るのに対し，前方部の長さは5.5*m*しかなく，いわゆる帆立貝形をした前方後円墳である。この周囲には地山を掘り込んだ溝を巡らせているが，溝はくびれ部で中断しており，前方部の前にある直線状の溝と後円部を巡る弧状の溝とに分かれる。溝底の高さは丘陵の傾斜角度に準じて傾むいている。したがって，弧状溝も後円部端へ向かって下降しており，直線状溝とも若干（１*m*以上）の比高を測る。前方部の前にある直線状の溝は，削平により現状ではほとんど測定不可能であるが，幅1.9*m*，深さ0.2*m*を残している。弧状溝は長さ17*m*を残し，溝の上部幅は3.5*m*を測るが，くびれ部では若干ふくらんでおわる。溝底はＵ字形になっているが，内側は一段低い二段掘りになっている。溝底部は40*cm*幅の灰色粘質土で埋まっており，その上を褐色砂質土がおおっている。これらの土層は遺物を含まないが，その上には埴輪片・須恵器片を含む黒褐色砂質土がある。さらに層序的に分けるのは困難だが，奈良時代の須恵器を含む土層がある。この土層が形成される時には，溝はほとんど埋まっており，平らになっている。

埴輪が溝の中より多量に出ているものは全然なく，すべて二次堆積であった。墳丘は弥生時代の遺

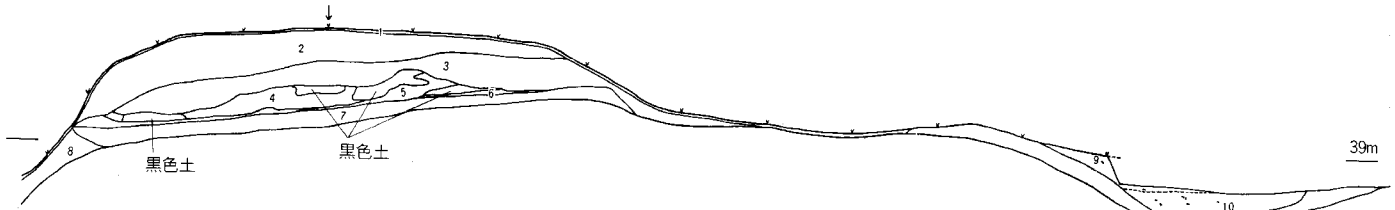


第8図 便木山7号墳地形図 （縮尺1/150） 単位：m

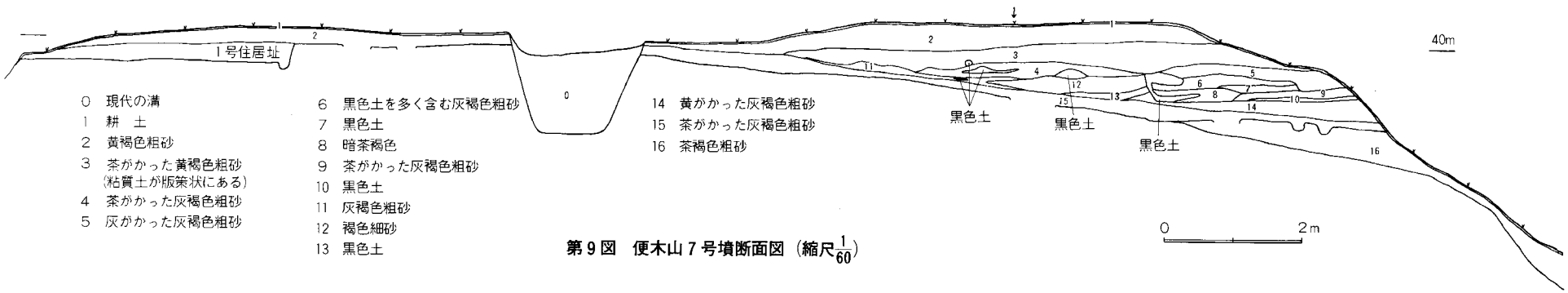
構上に営まれており，封土中には多量の弥生式土器・石器が含まれている。まず，墳丘基盤層である地山上に黒褐色の包含層の土をおき，傾斜している基盤を整地している。この上には1.4mにわたって数層の花崗岩風化土や包含層が版築状に固く叩きしめられており，墳丘をつくっている。

（2） 埴輪出土状況

埴輪の大部分は，周溝の中から出土しているが，一部は周辺の表土，時には10mも離れた道路の下G8E区周辺からも出土している。溝の中からは，前方部の前の直線状溝にも孤状溝にも同じように出土するが，弧状溝の北端であるくびれ部の周辺には特に集中して堆積している。これは数層に約20cmの厚さでぎっしりと堆積しており，時間をかけ，ゆっくりと堆積したのでなく短期間に，人為的作用で堆積したようである。したがって，ひとつの個体がある程度まとまっているということはなく，バラバラに散在している出土状況を示す。埴輪の中には，古墳に伴うと思われる横瓶・大甕・坏・壺などの細片が混在している。また，花崗岩の小礫も少量みられるが葺石にしては少量すぎて考えにくい。このような出土状況から推察すると，埴輪は古墳全体をまわっていたようである。



1　耕　土
2　黄褐色粗砂
3　茶がかった黄褐色粗砂
4　茶がかった灰褐色粗砂
5　褐色細砂
6　暗褐色細砂
7　茶がかった灰褐色粗砂
8　茶褐色粗砂
9　淡黒褐色砂質土
10　黒褐色砂質土
11　褐色土質土



0　現代の溝
1　耕　土
2　黄褐色粗砂
3　茶がかった黄褐色粗砂
(粘質土が版築状にある)
4　茶がかった灰褐色粗砂
5　灰がかった灰褐色粗砂
6　黒色土を多く含む灰褐色粗砂
7　黒色土
8　暗茶褐色
9　茶がかった灰褐色粗砂
10　黒色土
11　灰褐色粗砂
12　褐色細砂
13　黒色土
14　黄がかった灰褐色粗砂
15　茶がかった灰褐色粗砂
16　茶褐色粗砂

第9図　便木山7号墳断面図（縮尺$\frac{1}{60}$）

（3） 箱 式 石 棺

中心主体と考えられるものは，すでに墳丘の中心と考えられる場所が削平されていることや，鉄器，土器などが包含層や表土層から出土していることより過去に破壊されたものと思われる。したがって中心主体が，どういうものであったか不明である。

箱式石棺は，後円部の南寄り，残存墳丘でいえば，南斜面に検出された。墳丘をつくっている包含層を切り込んでいることより，中心主体と同時期ないしは後の時期につくられたものである。薄い表土層直下に検出されたが，過去に手のくわえられた痕跡はみられなかった。

長軸はN54°Eの方向にあって，ほぼ，墳丘長軸に直交している。天井は平担な砂岩の板石4枚で形成され，これらは平行して並んでいる。天井石のすわりを助けるため側壁には小礫を置いたものがある。

石棺内法は長さ60㎝，幅30㎝，高さ15㎝と小さく小児あるいは嬰児の墓と考えられる。南西端には上の平たい小礫があり，枕石と思われる。中央部には幅6㎝，深さ2㎝の小溝をみたが，これが当時からあったものか，あるいは後に木の根などでできたものかは明らかにし得なかった。また，床面下には厚さ4㎝のうすい粘土層を見るが，これも意識的に敷いたものか，空間があったため長い間に水分が侵透し，そのために粘土が堆積したものかはっきりしなかった。ただ粘土中には細礫がはいっており，下に細礫の敷かれた可能性がある。側壁にも天井と同じ砂岩の板石を使っており，石をたてるような使い方をしている。築造順序を述べると次のようになる。①石棺の範囲を掘りあげる。②側壁に使う石材を置き，上部を揃える。そのため掘り足らない所は部分的に掘る。③内外に土を入れ倒れるのを防ぐ。④小口の石材を外から置く。⑥天井石を置く。⑦土でおおう。掘り方は，確かめにくかったが，ある部分では，ほとんどぎりぎりに掘っており，他の場所もだいたい同様であると思われる。

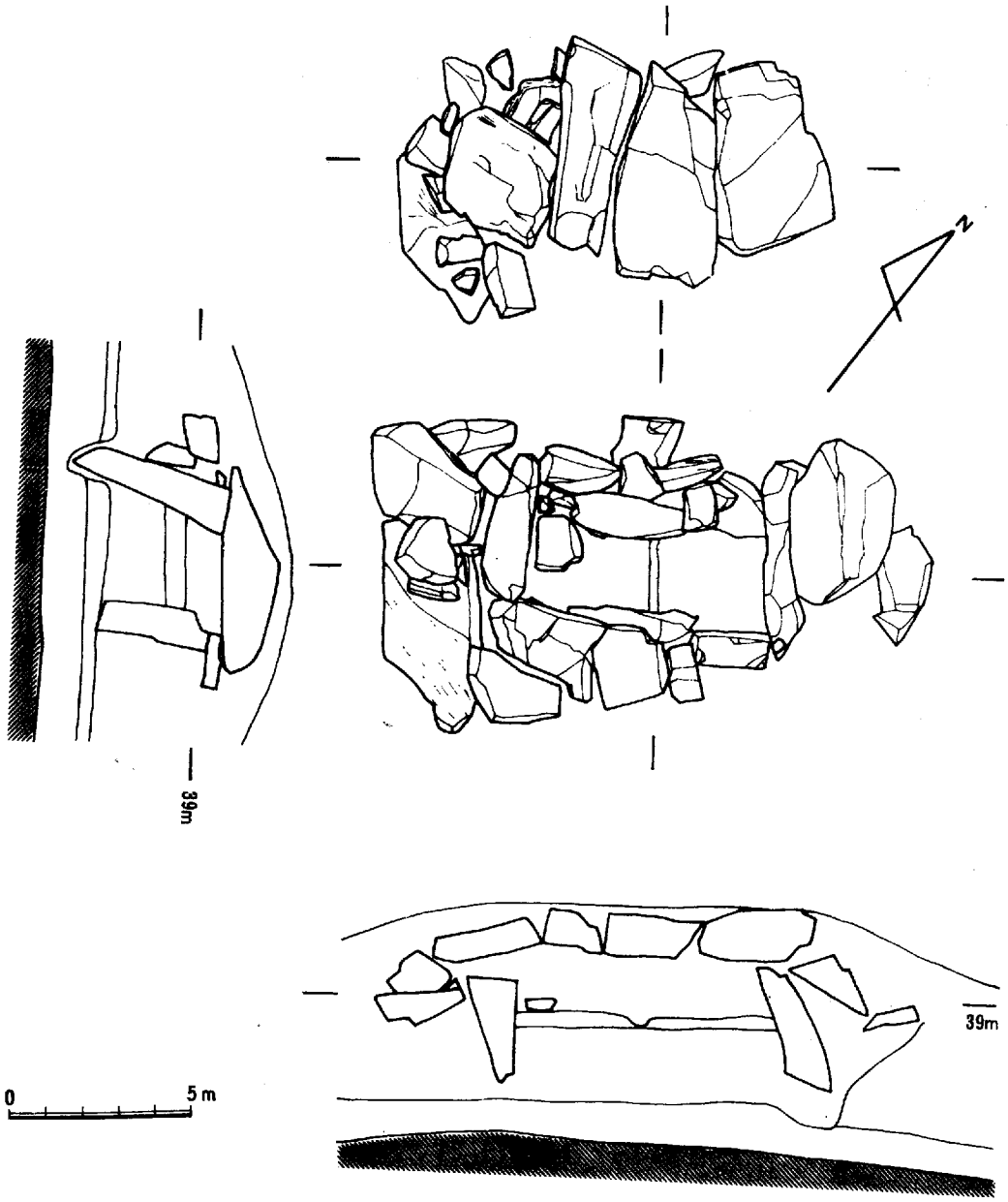
（4） 遺物（第11図・第12図・第89図7・8）

須恵器・埴輪・鉄器がある。

須恵器には，横瓶・装飾付壺・坏があり，横瓶は，外面が条痕様の叩き，内面が青海波文の叩きで仕上げられる。胴部の片側は，円板状の帖り付けにより，ふさがれる。また，口縁部はあとでつくられて，胴部との接合が行われる。装飾付壺の口縁端は，ふくらみをもっておわる。

埴輪は，すべて須恵質で，口縁部は直に立ちあがるものと，外に開く朝顔形のものとがある。たがは，4条あり，中央の各段に円形透孔がみられる。外面は，ハケなでによるが，細かいものと粗いものがある。底部近くには指押圧痕を残す。この上に，凸形の帖り付けがされる。また，口縁部には，1個体につき1ケ所ずつ×の窯印が施される。ほとんどが，しっかりした×印だが，細い線のものが1個ある。窯印から推定すると25個体が確認される。

鉄器には，やりがんな様のものと刀子様のもの（第89図）とがある。



第10図　箱　　式　　石　　棺　（縮尺１/20）

（5） ま と め

ここでもう一度，本墳について要約する。

① 長さ20.5mの帆立貝形をした前方後円墳で，周囲に埴輪をめぐらす。

② 周溝はあるが，くびれ部で中断する。

③ 主体部の他に箱式石棺をもつが，この箱式石棺は小児ないし嬰児のものである。

④ 副葬品に須恵器（横瓶，坏，子持ち壺，大甕）・鉄器をもち，6世紀中頃の古墳である。

⑤ 奈良時代には一部墳丘がこわされ，周溝がうめられている。

以上のように便木山7号墳は12基ある便木山古墳群の中でも最大の規模をほこり，さらには山陽団地造成地の中でも後期古墳では最大の規模をもつ。

また，須恵質埴輪を出土する古墳は近年増加しているが，それでも県下では次の9古墳を数えるのみである。[1]

笠岡市仙人塚古墳・総社市作山古墳・都窪郡舟山古墳・吉備郡浦尾八号墳・赤磐郡西もり山古墳・赤磐郡岩田3号墳[2]・邑久郡双塚古墳・英田郡北山1号墳[3]・英田郡北山2号墳[3]

これらのうち，岩田3号墳は距離的に接近しており，[4] また，年代的にも近く，[5] あるいは同じ窯で焼かれた可能性もある。それらは整形技法・胎土などの比較とともに窯印・さらには指紋の比較などによりはっきりしてこようが，今回は比較する機会を持てなかった。

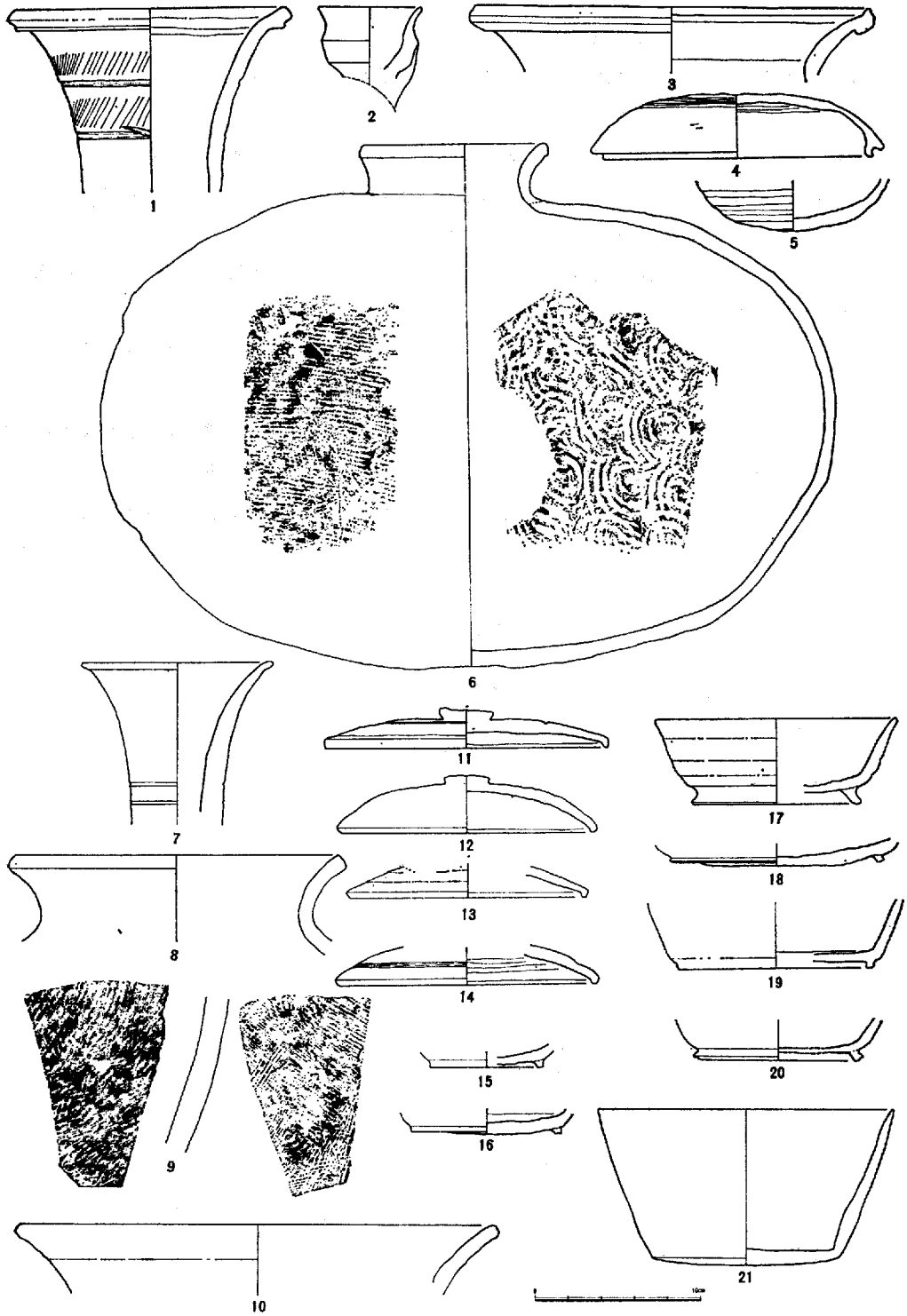
(1) 吉田恵二「埴輪生産の復原」『考古学研究』 第19巻第3号 1973年
この中で6カ所が紹介されている。

(2) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子『長福寺裏山古墳群附関戸廃寺跡』 長福寺裏山古墳群関戸廃寺址調査推進委員会 1965年

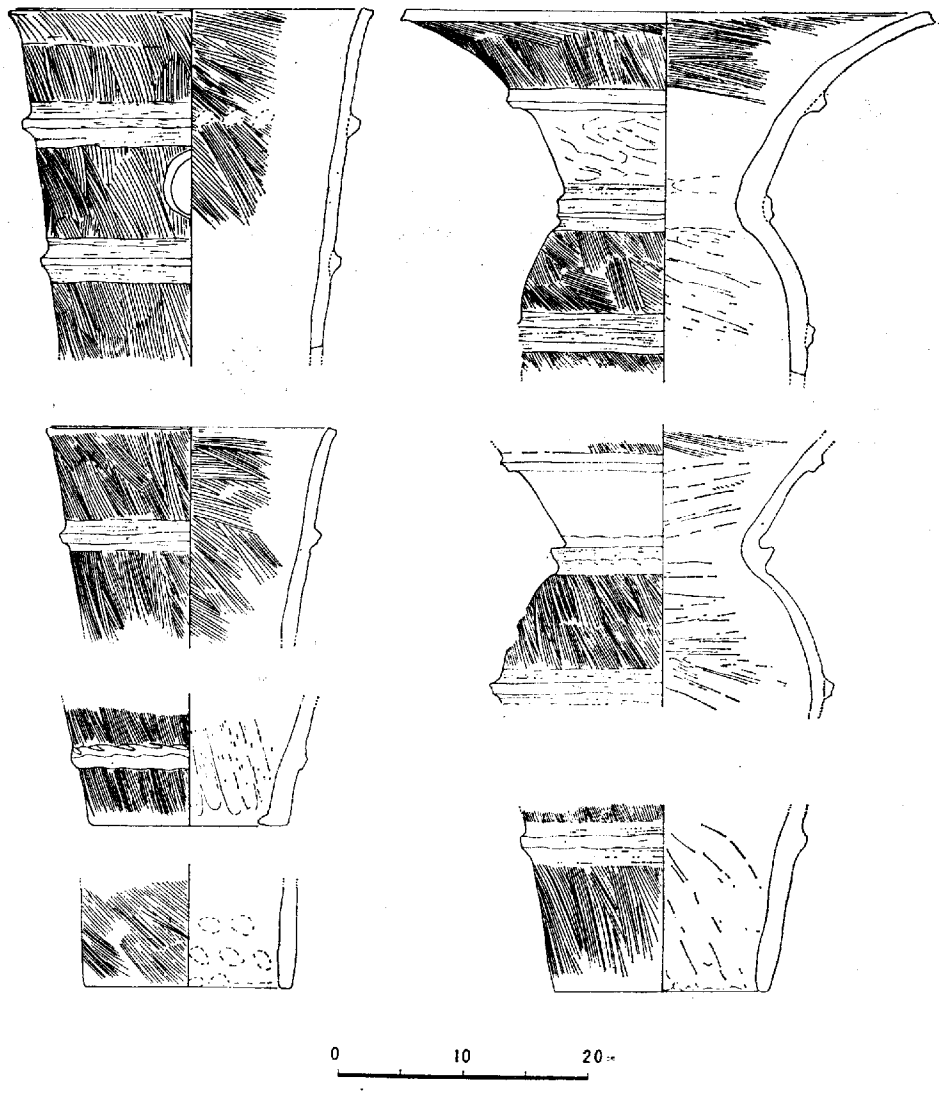
(3) 秦成秀爾・出宮徳尚・近成久美子「岡山市牟佐大塚古墳」『古代吉備』 第7集 1971年

(4) 神原英朗氏のご教示による。

(5) 二宮治夫・松本和男「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 (4) 1974年



第11図　便　木　山　7　号　墳　出　土　遺　物　(1)



第12図　便木山7号古墳出土遺物(2)

2 住　居　址

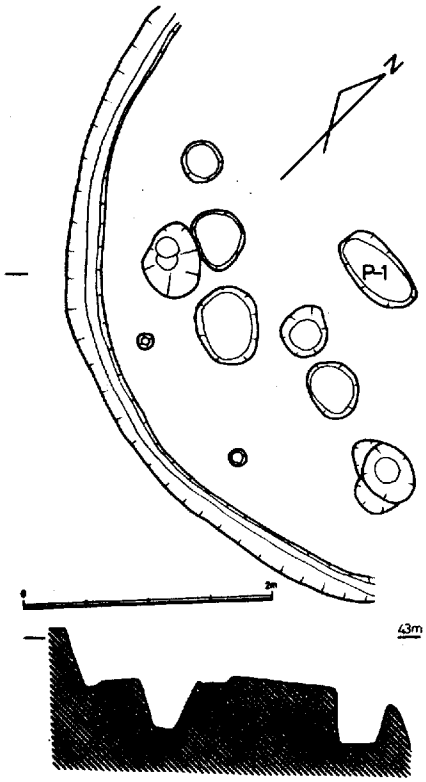
住居は27軒あり，それらは存在位置によって，大きく4群に分かれる。第1群は丘陵北端の斜面にあり，便木山[1]7号墳前方部の下部に1軒（1号）だけ残っている。第2群はG5G区・G5F区・GE区からG8E区・G8F区周辺に続く谷のまわりにつくられたもので9軒（2号～6号・24号～27号）ある。第3群はG6I区以南の東斜面に存在する10軒（7号～16号）である。第4群は第3群と対応する西斜面にある7軒（17号～23号）である。時期的には弥生時代中期～古墳時代前期があり，その多くは弥生時代のものである。

以下，個々の住居について概述したい。

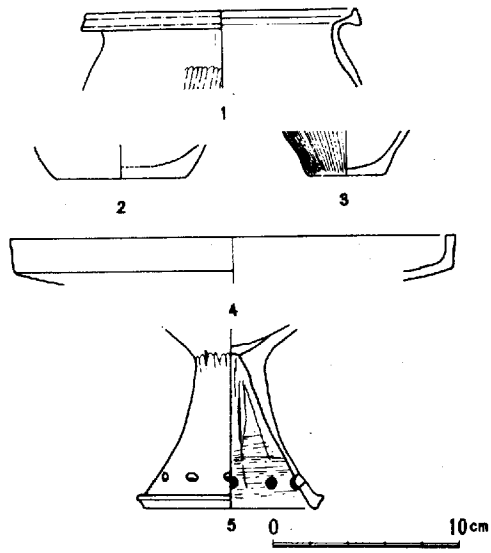
（1）27軒の他に2J区・G6F区付近・G8E区付近には壁溝の一部を残すものがあり，実際は若干増加し30軒位になる。さらに，重複するものについてもほとんどは9号住居址・10号住居址などのように分けたが，12号住居址・18号住居址については分けなかった。

1号住居址（第13図・第14図）

丘陵の北端，便木山7号墳前方部の下部に存在し，南側の約1/2が残っている。復元径2.3mの円形を呈し，深さ40cmを残す。幅15cm，深さ5cmの壁溝が巡っている。周辺には多量のピットがあり，住居内にも10本のピットがあるので，柱穴に相当するピットを断定しがたい。西端のピット中から高坏の脚部が出土している。他は埋土中に含まれるものである。



第13図　1　号　住　居　址

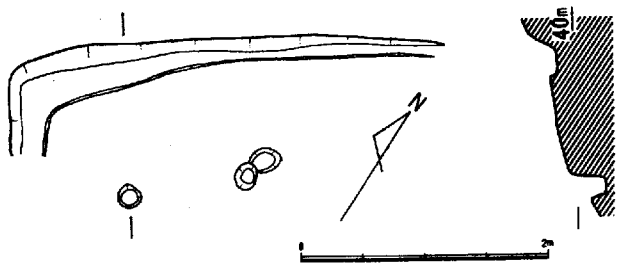


第14図　1　号　住　居　址　出　土　遺　物

甕形土器（1～3）は口唇部が上に張り出し，2条の凹線をほどこす。外面はヘラのたてなでがされ，内面のヘラけずりは胴部下半のみである。高坏形土器（4・5）は口縁部が直に立ちあがり，口唇端は肥厚しておわる。脚部には裏へ抜けない円孔がまわっている。門前池Ⅱ類にあたる。

2号住居址（第15図）

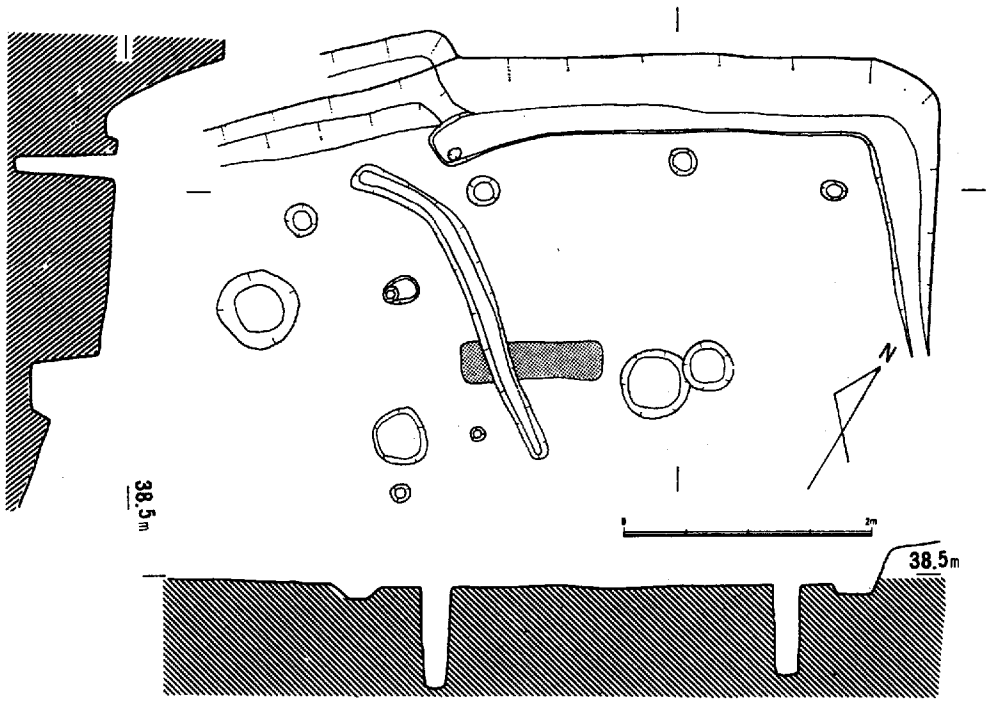
G5G区にあり，隅丸方形の一コーナーを残している。壁高7㎝を残すが規模は測れない。周囲には幅10㎝，深さ5㎝の壁溝が巡っている。柱穴は不明である。年代も明らかでない。



第15図　2　号　住　居　址

3号住居址（第16図）

G6F区にあり，これも隅丸方形の一隅を残すのみである。壁高は43㎝で，周囲には幅30㎝，深さ4㎝の壁溝が巡っている。柱穴と思われるピットは2あり，それぞれ径25㎝，深さ40㎝と，径20㎝，深さ37㎝を測る。中央と思われる位置には焼土面がある。年代は明らかでない。なお，焼土を切断している溝は住居址の一部分と思われる。

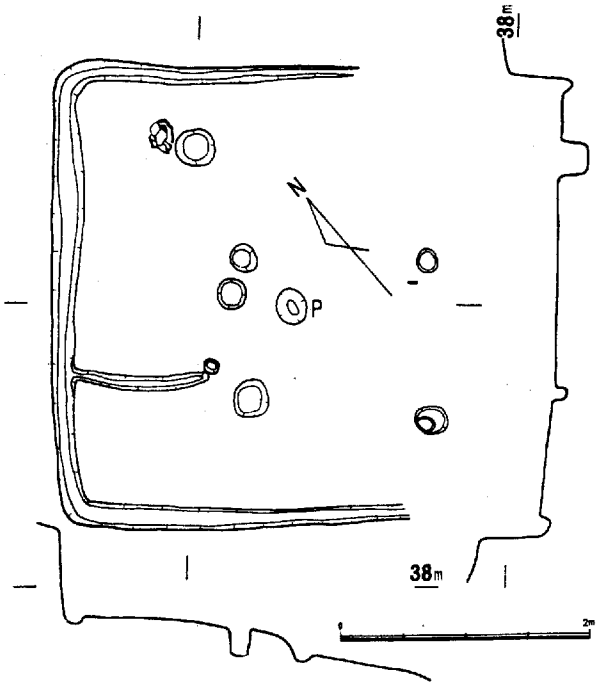


第16図　3　号　住　居　址　と　そ　の　周　辺

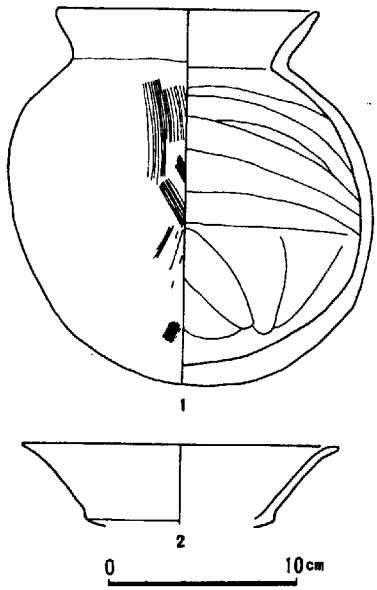
4号住居址（第17図・第18図）

G6G区にあり，弥生時代後期の包含層を掘り込んだ一辺3.7mの方形住居址である。西側では壁高34cmを測り，周囲には幅10cm，深さ4cmの壁溝が巡っている。この壁溝は中央付近で中心に向かい延びている。柱穴は4本あり，各々の柱間は次のとおりである。P_1—$P_2$1.1m，P_2—$P_3$1.5m，P_3—$P_4$1.3m，P_4—$P_1$1.5m。また，床面からの深さは$P_1$25cm，$P_2$26cm，$P_3$28m，$P_4$22cmを測る。床面上には甕がつぶれており，中央のピットP_5内には高坏の破片とともに土製丸玉が出土している。

甕形土器(1)は丸底をし，口縁部は外に開きながらおわる。外面はハケなでにより，内面はヘラけずりである。高坏形土器(2)は精製した粘土を使用しており，口縁部は外反しながら丸みをもった口唇端になる。土製丸玉（第89図）は径19cmの小形で，表面はなでられている。2mm位の細礫を含む砂質胎土で褐色を呈している。これらは古墳時代前期のものである。



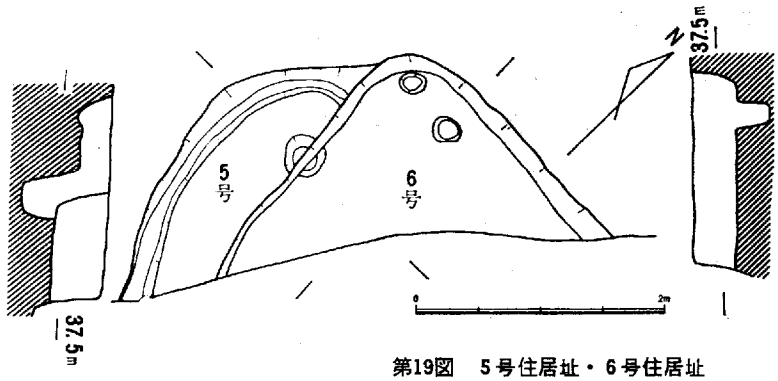
第17図　4　号　住　居　址



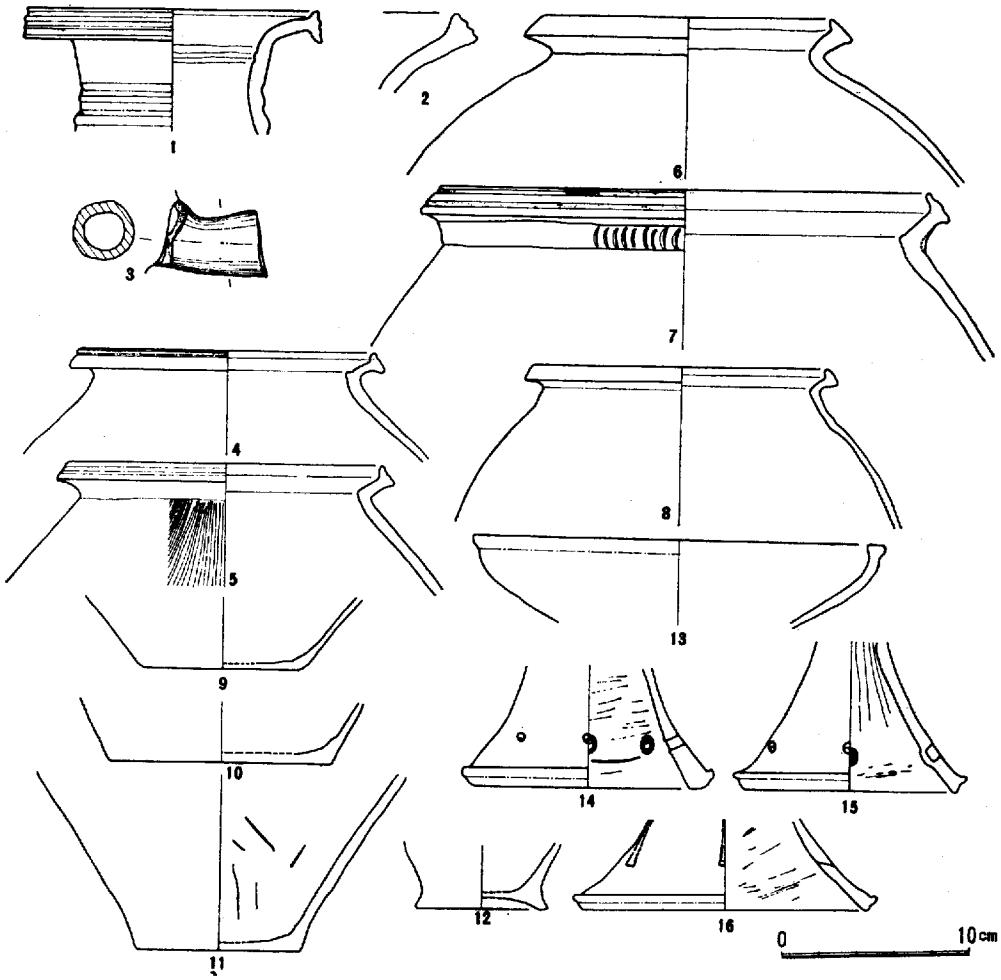
第18図　4号住居址出土遺物

5号住居址（第19図）

G6H区にあり，6号住居址より古い。6号住居址と農道のためにほとんど壊されて約1/5を残すのみであるが，一隅を残しており，平面形は隅丸方形である。壁高は25cm残しており，周囲には幅15cm，深さ3cmの壁溝が巡っている。柱穴は径35cmのもの1個が残っており，床面からの深さは40cmを測る。床面・埋土にも土器がなく，時期ははっきりしないが，6号住居址の時期から考えると弥生時代中期後半であろう。



第19図　5号住居址・6号住居址



第20図　5号住居址，6号住居址上部土器溜り出土の遺物

6号住居址（第19図・第20図）

Ｇ６Ｈ区にあるが，農道により削られて，約１/４を残すだけである。したがって，一辺の長さは不明であるが，隅丸方形をしており，壁高は45㎝を残している。柱穴は径20㎝のもの１個が残っており，床面からの深さは35㎝を測る。床面には土器がないが，埋土上には門前池Ⅰ類の土器が土器溜りをつくっている。したがって，この住居址は門前池Ⅰ類の直前ないしは併行期であろう。

土器溜りの土器は磨滅が激しく，復元など困難なものが多い。表面はほとんど茶褐色であるが，磨滅により淡茶褐色・淡黒褐色を呈するものも多い。胎土は細かい砂質で金雲母が多く混入している。表面にうすく粘土を塗ったものもみられる。（１・２）は壺形土器で，口唇部は上下に大きく張り出し，口唇端に３条の凹線をほどこす。頸部にも凹線がほどこされている。外面はヘラなで整形で，頸部内面もヘラなでである。甕形土器（４～８）の口縁部はくの字状に折れ，口唇端に凹線がほどこされる。頸部に粘土をはりつけ，ヘラで刻み目をほどこしているもの（7）もあり，頸部内面は稜をもつ。外面はヘラなでで仕あげられ，内面のヘラけずりは胴部上半部まで達していない。底部（９～12）は平底が多く，あげ底のもの(12)もある。壺形土器の注口と思われるものが一点ある（3）。高坏形土器（13～16）の坏部は口唇端が肥厚するものである。脚部は脚端が上に大きく張り出し，裏に抜ける小円孔をもったもの(14)と三角透しをもったもの（16），裏に抜けない円孔をもったもの（15）とがある。外面はヘラなで，内面はヘラけずりである。これらは門前池Ⅰ類に属する。

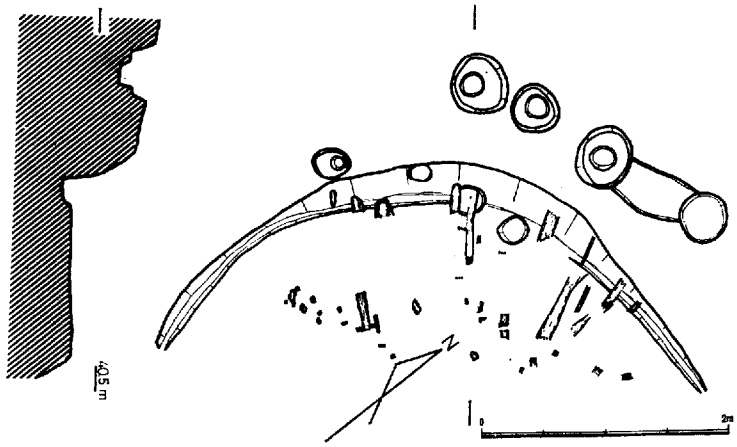
7号住居址（21図・第22図）

Ｇ6Ｏ区・Ｇ６Ｐ区・Ｇ7Ｏ区，Ｇ７Ｐ区にかけて存在するが，１/４ほどが残っている。復元径4.8ｍの円形をしている。主柱穴はないが，周囲に５個のピットがあり，それらの中には径20㎝の柱痕跡を残しているものもある。これらは整然としていないが，円をまわっていることからタル木の痕とみられる。また，この住居址は焼けており，タル木が放射状に７本倒れていた。これらの径は７㎝～14㎝を測る。しかし，これらの炭化材は床面よりだいぶういた状態にあり，あるいは７号住居址が埋没したあと，周囲のピットをもつ別の住居址があった可能性もある。床面上の遺物はなく，すべて埋土中である。

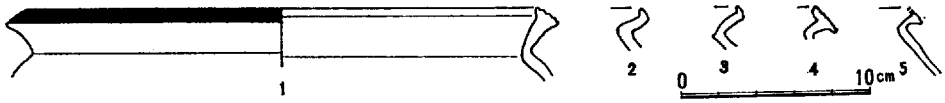
遺物は少なく，図化できたのは甕形土器の口縁５個のみであるが，これらも磨滅が激しく口唇部の凹線などはっきりしないものが多い。色は茶褐色を呈し，胎土は細砂粒である。外面・内面ともハケの横なでがされている。１は口唇端に向かい厚さを増しており，端部には４条の凹線が施された古い様相をもつものである。４は口唇部が上下に拡張されている。図化できなかったが，口縁内部に二重の竹管文を施したものもある。これらは，門前池Ⅰ類に属する。

8号住居址（第23図・第24図）

Ｇ６Ｐ区・Ｇ７Ｐ区にあり，７号住居址より新しい。西側約１/２が残っており，一辺4.5ｍの胴張りの隅丸方形をしている。壁高25㎝を残し，周囲には幅15㎝，深さ８㎝の壁溝がまわっている。柱穴は２本が検出されており，柱間は2.4ｍある。径はそれぞれ30㎝と40㎝で，床面からの深さはそれぞ



第21図　7　号　住　居　址



第22図　7　号　住　居　址　出　土　遺　物

れ30cmと40cmある。中央部には細砂を含んだ径100cm，深さ40cmのピットがある。また，中央付近には灰・炭・焼土がみられ，ここらに炉が予想される。北西隅には炭・灰などが推積しており，その下に円礫・軽石があった。床面に付着した土器はないが，多量のサヌカイト片が散らばっており，このようなサヌカイト片の散らばった住居址はここのみである。

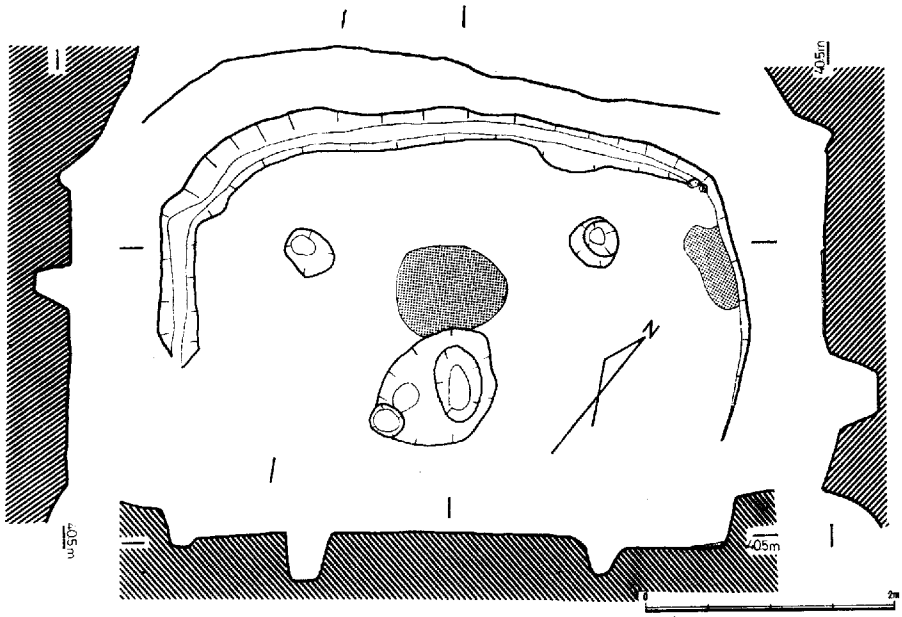
土器は，すべて埋土中からの出土で，完形のものはない。細砂質の胎土で，ほとんどに金雲母がみられる。焼成度はよく，堅致である。甕形土器（1～6）の口縁部はくの字状に曲がり，口唇端には浅い凹線の施されたもの(1)もある。外面はたて方向のヘラなでで整形され，内面のヘラけずりが頸部にまで達している。底部は平底のもの(4・6)と台をもつもの(5)とがある。平底のものは，外反しながら底部に到るものと，直に底部に到るものとがある。台の外面はヘラでなでられ，内面もヘラでなでられるもので，端は丸くおわる。高坏形土器(7)は脚端が上に張り出すもので，先端だけ形を残す浅いヘラ描き三角透しが巡っている。

門前池Ⅲ類に相当する。

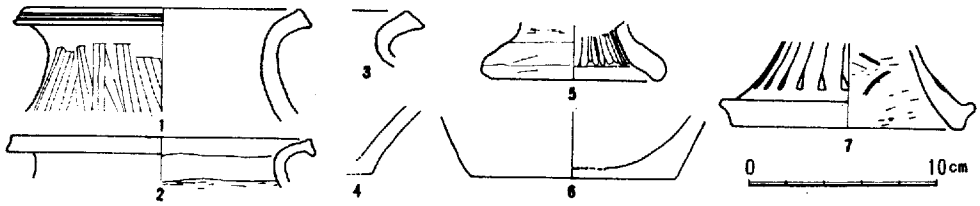
9号住居址（第25図・第26図・第85図）

10号住居址を約0.4m東へ移した住居である。約1/3が残った隅丸方形をしており，北辺で4.5mを測る。東側では壁高15cmを残し，幅15cm，深さ7cmの壁溝がまわっている。柱穴と思われるピットは北辺に平行な2本があり，柱間1.9mを測る。直径は各々25cm，深さは20cmを浅す。溝内・ピット内から土器・石鏃が出土した。

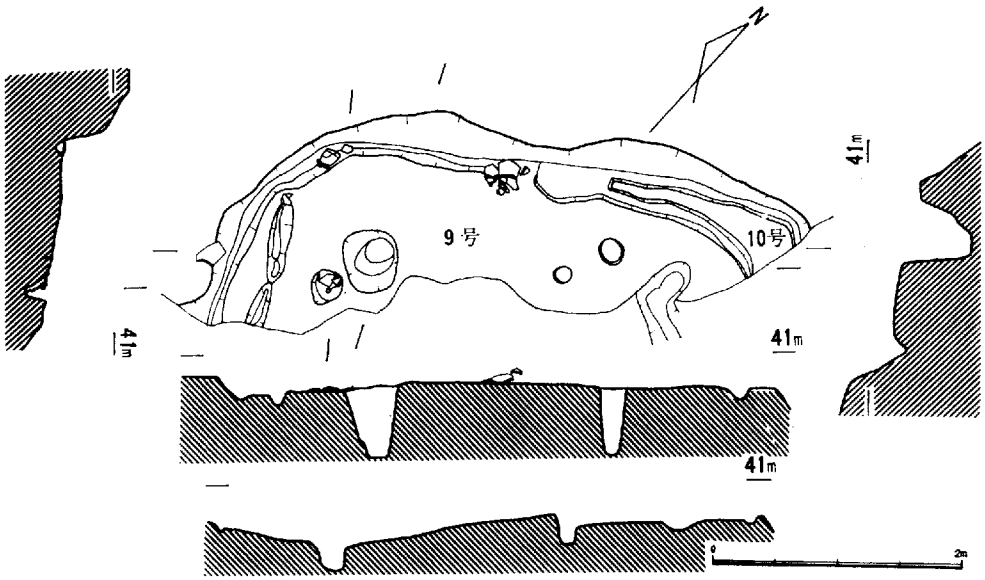
石鏃はサヌカイト製の打製石鏃で第Ⅰ類にあたる。甕形土器(1～7)の口縁部は上下に口唇部が張り出し，そこに3～4条の浅い凹線が施される。最大径は胴中央部にあり，底部はわずかに外反しな



第23図　8　号　住　居　址



第24図　8　号　住　居　址　出　土　遺　物

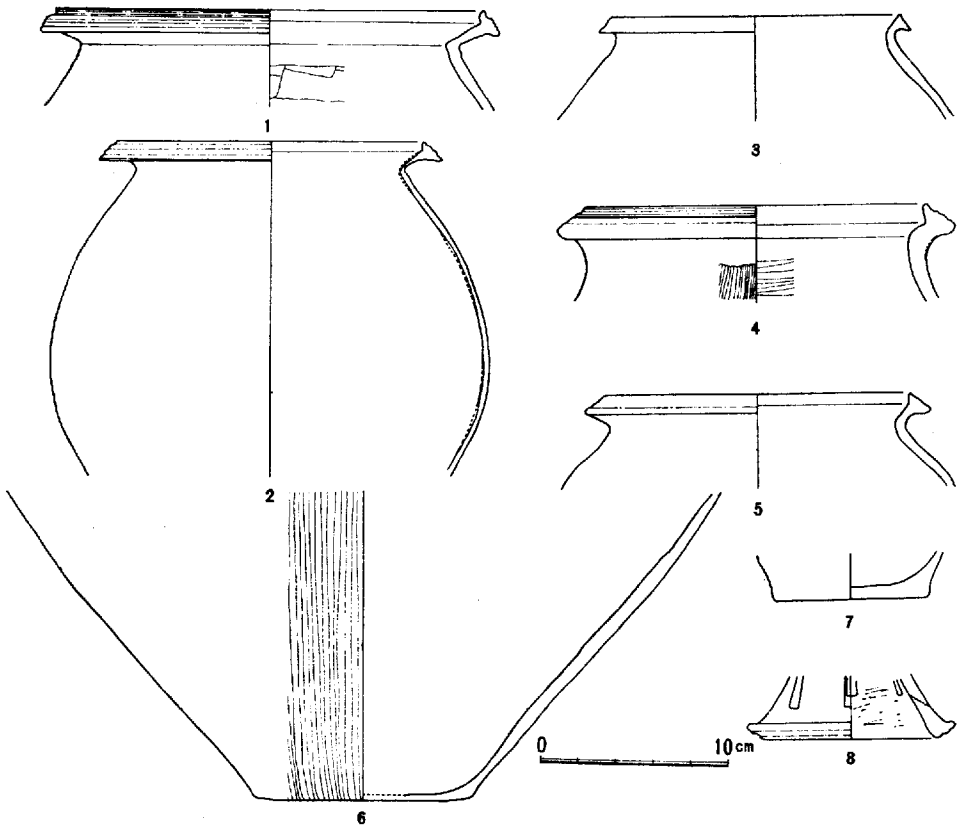


第25図　9　号　住　居　址・10　号　住　居　址

がら平らな底に移る。外面はヘラのたてなで，内面はヘラのよこなでであり，内面のヘラ削りは胴下半部のみである。高坏形土器(8)の脚部端は外に大きく張り出し，周囲には裏に貫通する三角透しがみられる。これらは門前池Ⅰ類に相当する。

10号住居址（第25図）

G７M区にある一辺4.4*m*の隅丸方形をした住居址で，６号住居址に先行する。壁高40*cm*を残し，周囲を幅15*cm*，深さ７*cm*の壁溝がまわる。柱穴と思われるピットは２本があり，柱間1.8*m*を測る。直径は各々40*cm*・20*cm*，深さは各々60*cm*・55*cm*を残す。９号住居により全んどを壊されているために，住居内に遺物はみられないが，９号住居址の時期より門前池Ⅰ類並行と思われる。



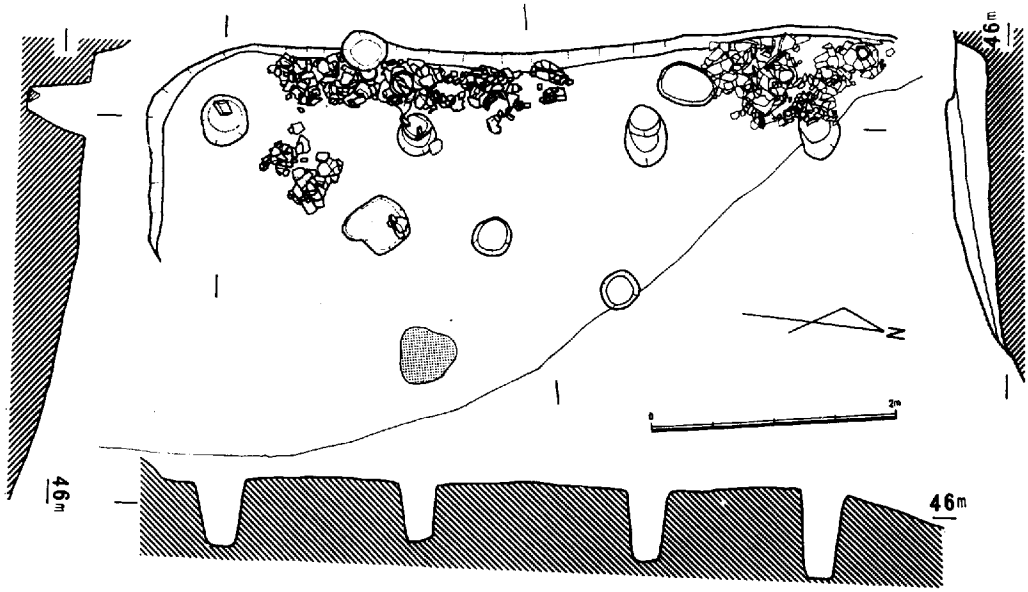
第26図　９号住居址・10号住居址出土遺物

11号住居址（第27図～第29図）

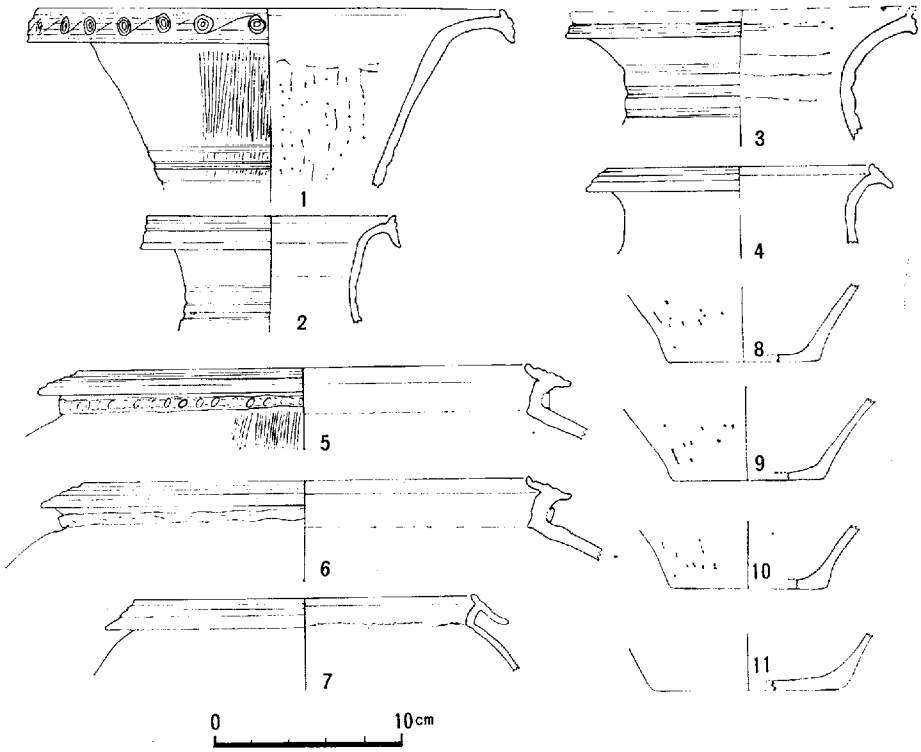
尾根の東寄りである５Ｓ区にあり，北半分を流出している。南半分でみるかぎり，一辺6.5*m*の方形ないしは隅丸方形を呈し，壁高30*cm*を残す。住居内には９本のピットを検出したが，柱穴と思われるのは南側に一例に並ぶ４本である。これらは径40*cm*，深さ50*cm*を測り，柱間は東より1.6*m*，1.9*m*，1.4*m*である。また，この４本に直文する柱穴はみられず，したがって，柱組み合わせは４本が２列に並ぶものと思われる。中央付近には焼土がみられる。南壁から中央に向け，かなりの土器が散在しており，住居廃棄直後のものと思われる。また，床面だけでなく柱穴にもみられる。土器のほとんどは復元可能なものである。

壺形土器（１～４）の口縁部は口唇部が上下に大きく張り出し，２～４条のはっきりした凹線がある。凹線の上に重復した竹管文と沈線からなる連続渦文のあるもの(1)もある。頸部にはヘラたてなでの上に凹線がほどこされている。内面のヘラ削りが頸部上半まで達するものがある。甕形土器（５～７)は口唇部が上下に大きく張り出し,そこに３～４条の凹線がある。短かい頸部に指圧の施される貼り付け凸帯のあるもの(7)もある。外面はヘラのたてなでで，内面のヘラ削りは胴部上半まで達していない。底部（８～13）は，わずかに外反しながら底に至り，薄い底をつくる。外面はたて方向のヘラなで，内面はヘラのたて方向削りによる。台付鉢形土器（14・15）も，口唇端が上下に大きく張り出し，４条の凹線をほどこす。胴部上半には，ヘラたてなでの上にヘラによるノの字文が巡っている。内面の底部付近は横方向のなでであるが，その上はたて方向のヘラなでによる。鉢部と台部の接合ははりつけにより，台部の端は外へ大きく張り出す。台部に貫通しない円孔を巡らすものもある。高坏形土器（16・17・22）には大形のものと小形のものとがある。大形高坏形土器の口縁部は少し内傾し，外面に６条の凹線がみられる。坏部外面はヘラ削り，内面は雲文状のヘラなでで仕上げる。小形高坏形土器の口縁部は直立し，外面に５条の凹線が施されるものと，上下が肥厚しただけのものとがある。内外面とも暗文状のヘラなでで仕上げられる。また，口縁部と底部は別々につくられる。坏部と脚部は円板はりつけによる。脚部にはらせん状のヘラ描き沈線が６条，２段に分けてかかれ，その下に下半部が裏に抜ける三角形透しが巡る。脚端部は丸みをもって外に張り出し，下方向にヘラの沈線が施される。坏部外面はなで，内面は横方向ヘラ削りによる。器台形土器（18～21）は，横幅に比べ高さが高い器形をもつ。口唇は器厚を増しながら上下に張り出し，口唇端に凹線を施こす。その上に重復した竹管文を２段に施し，さらには棒状浮文を間につくるものもみられる。脚部近くまで，多数凹線がかかれ，下半部のみ裏に貫通する三角透しが巡っている。脚端部は外に張り出す。内面はたて方向のヘラ削りによる。

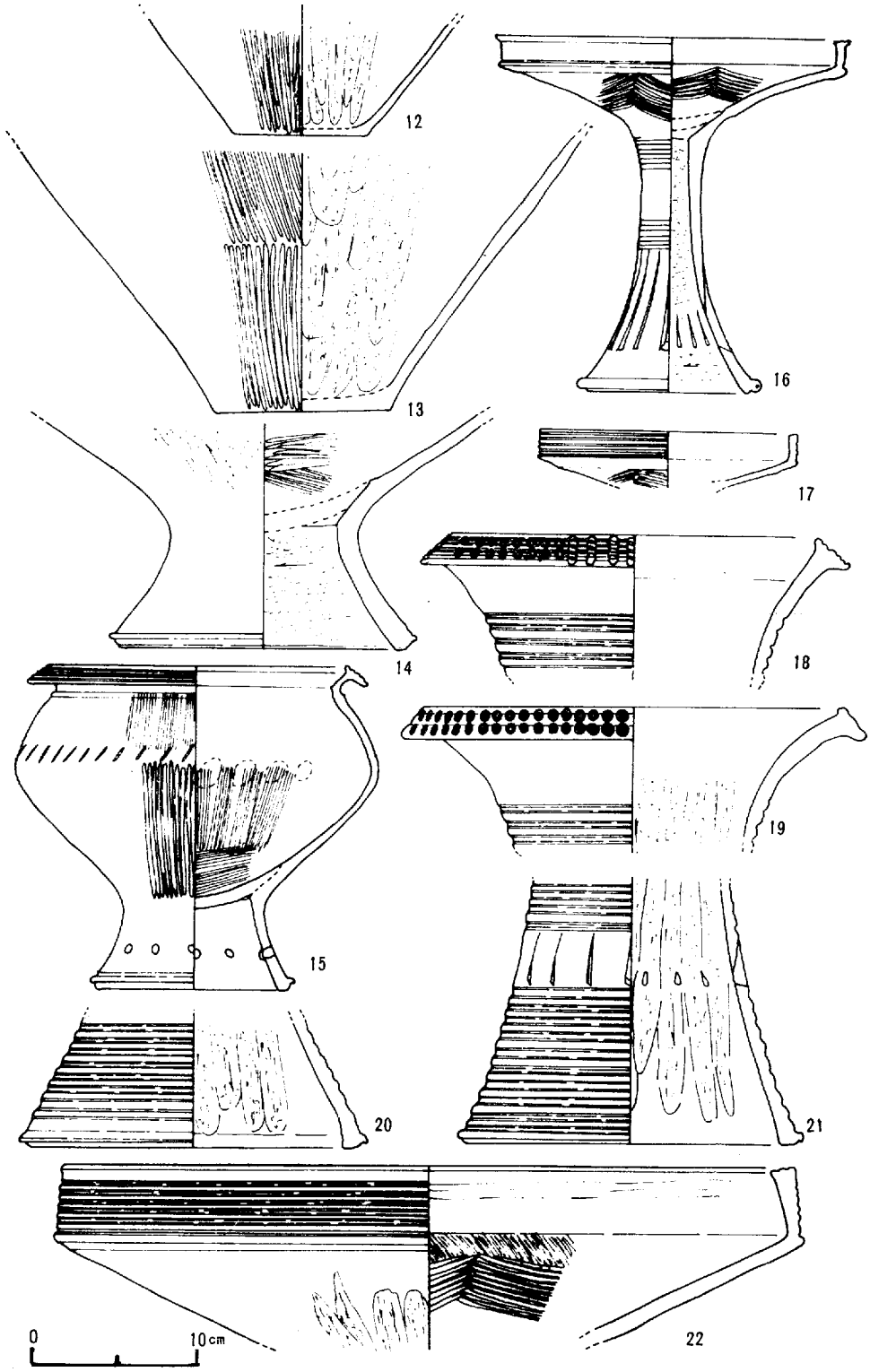
以上の土器は黄みがかった褐色を呈し，細かい砂を含む胎土を使用している。これらは門前池Ⅱ類の特徴を示している。



第27図　11　号　住　居　址



第28図　11　号　住　居　址　出　土　遺　物　(1)



第29図　11 号 住 居 址 出 土 遺 物　(2)

12号住居址（30第図～第36図）

Ｇ７Ｒ区にあり，３回の建て替えをした円形住居址で，建て替えのたびに縮小化している。しかし，この住居址の大部分は，保存区域となっているために完掘せず，詳細は不明である。したがって，ここでは予側をまじえて記することにする。

第３期の住居は，復元直径4.6*m*を測る円形住居で，幅25*cm*，深さ２*cm*の浅い壁溝が巡る。深さ45*cm*を残すが，北側では壁溝しか確認できなかった。柱穴と思われるものは，西側に２個みられ，柱間2.9*m*を測る。直径が25*cm*，深さが45*cm*ある。中央には，直径70*cm*，深さ55*cm*の穴があり，近くに焼土もみられるが，第３期に伴なうものかどうかは定かでない。

第２期の住居は，第３期の住居より広いもので復元直径6.0*m*の円形をしている。高さ65*cm*を残す。柱穴と思われるものは，第３期のピットより，北へ60*cm*ほど寄り，直径30*cm*，深さ50*cm*を測る。柱間は第３期と同じく3.1*m*ある。

第１期は，もっとも大きく直径７*m*の円形を呈する住居である。

以上の縮小化は，地山の風化土である花崗岩のばい爛土によって帖り付けを行なっている。なお，３期目の住居より新しいと思われるピット２個が南側にはみられる。

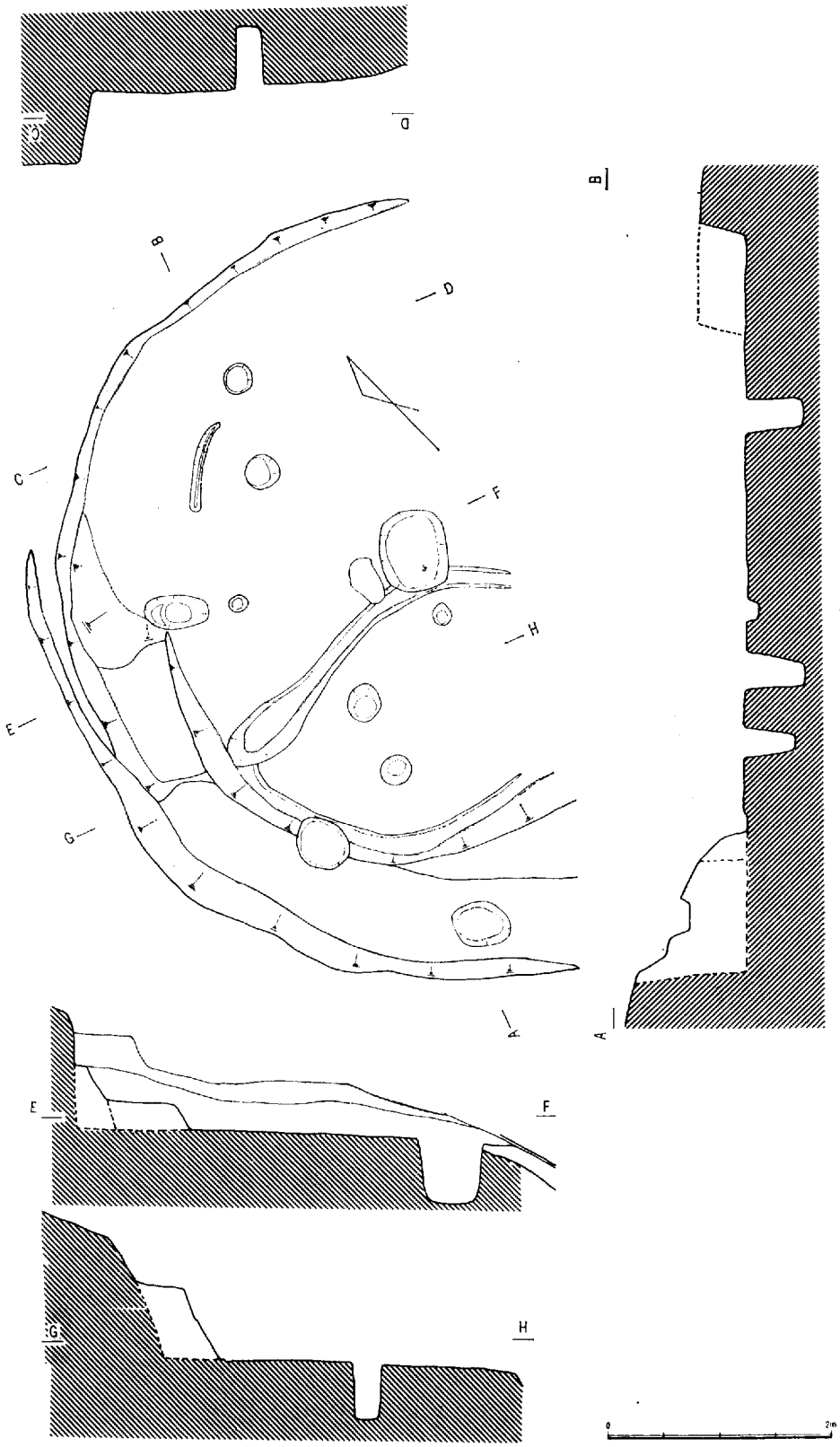
中央ピット内からは，壺形土器の口縁２点（１・２）が出土した。口唇端が拡張し，凹線の上に棒状の帖り付け突帯の施されるものである。外面はヘラのたてなでで，その上に凹線がみられる。これらは，門前池第２類の特徴を示している。

12号住居址の上部にみられる土器溜りは，大きく２時期に分けられ，後期に相当するものは，南側に集中する。つまり，西側より流れ込んだ中期末の土器群は，低い方に堆積し，その上に後期初頭の土器群が堆積している。

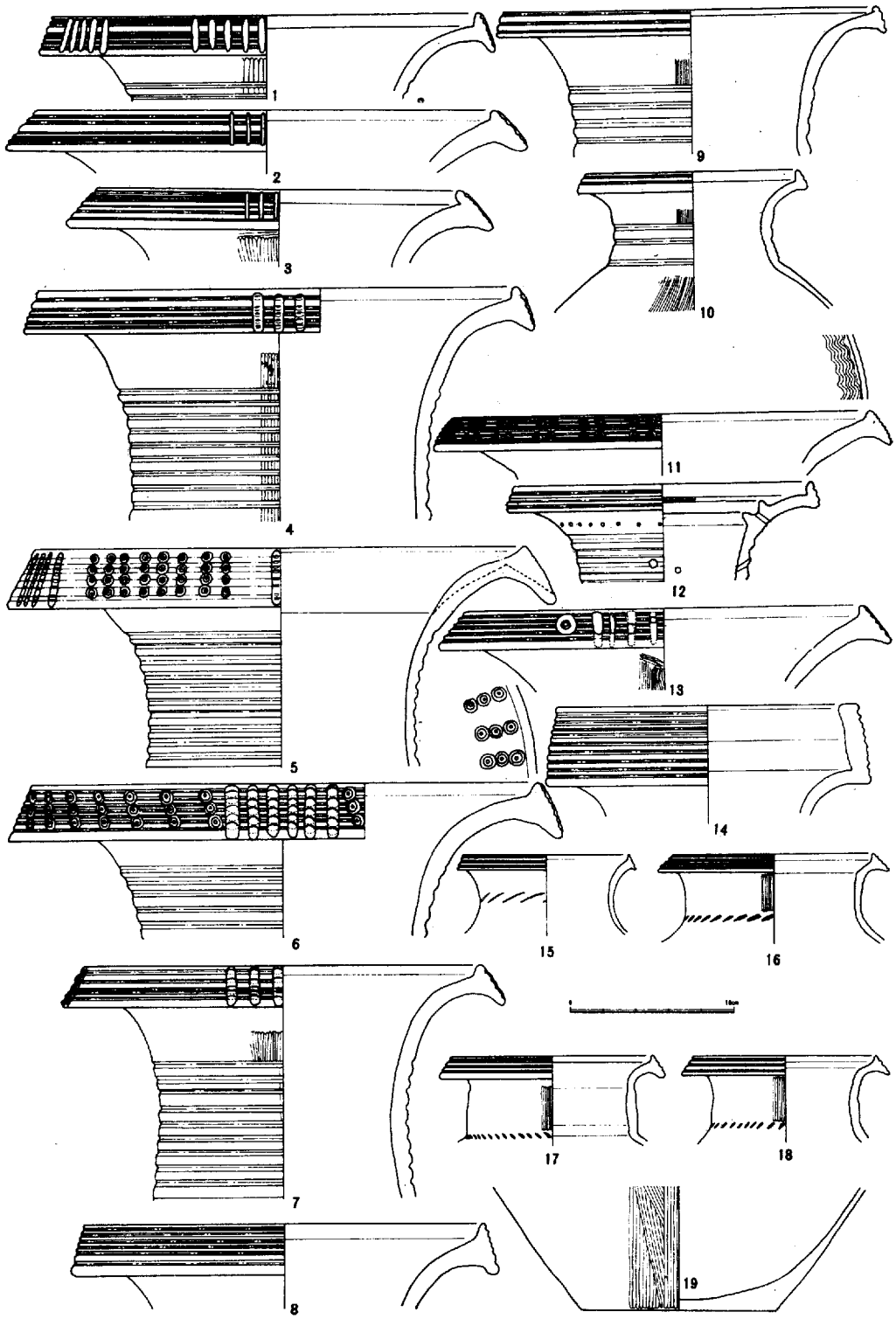
主体となるのは，下層の土器である。壺形土器（３～19）は，大きく３種類に分けられる。第１は，大形のもので頸部に凹線を巡らしており（３～13），これらの口唇部には，棒状浮文・円形浮文・重なった竹管文の施されるものも多い。また，口縁内面に竹管文の施されるもの(６)，くし描き波文の施されるもの(11)もある。12は，内面に凸帯をもち，間に波状文，貫通する円形孔をもつ。これらのいくらかは，器台形土器の口縁部かもしれない。第２は，口縁部の非常に拡張したもの(14)で，ここに９条の凹線をもつ。若干，内傾化する。第３は，小形のもので頸部に凹線を持たないかわりに，左あるいは右さがりのヘラ押圧痕が施される（15～18）。外面は，ヘラのたて方向なでで仕上げられる。口唇端線には凹線が施される。底部(19)は安定しており，外面はヘラのたて方向なでで仕上げられる。肩部にヘラ描きによる文様や絵のあるもの（第36図）もある。

甕形土器（20～28）も２種に分けられ，胴部へゆるやかに移る小形のもの（20・21）と，胴部へ大きく張り出す大形のもの（22～25）とがある。口唇部には，凹線が施され，大形のものでは，凹線の上に棒状浮文があるものもみられる。肩部には，ヘラによる押圧痕(20)・くし描き波状文(25)もみられる。外面整形は，ヘラのたて方向なでにより，内面のヘラ削りは胴部下半に留まる。底部（26～28）は，若干外傾化して底部を特徴ずけている。あげ底もみられる。

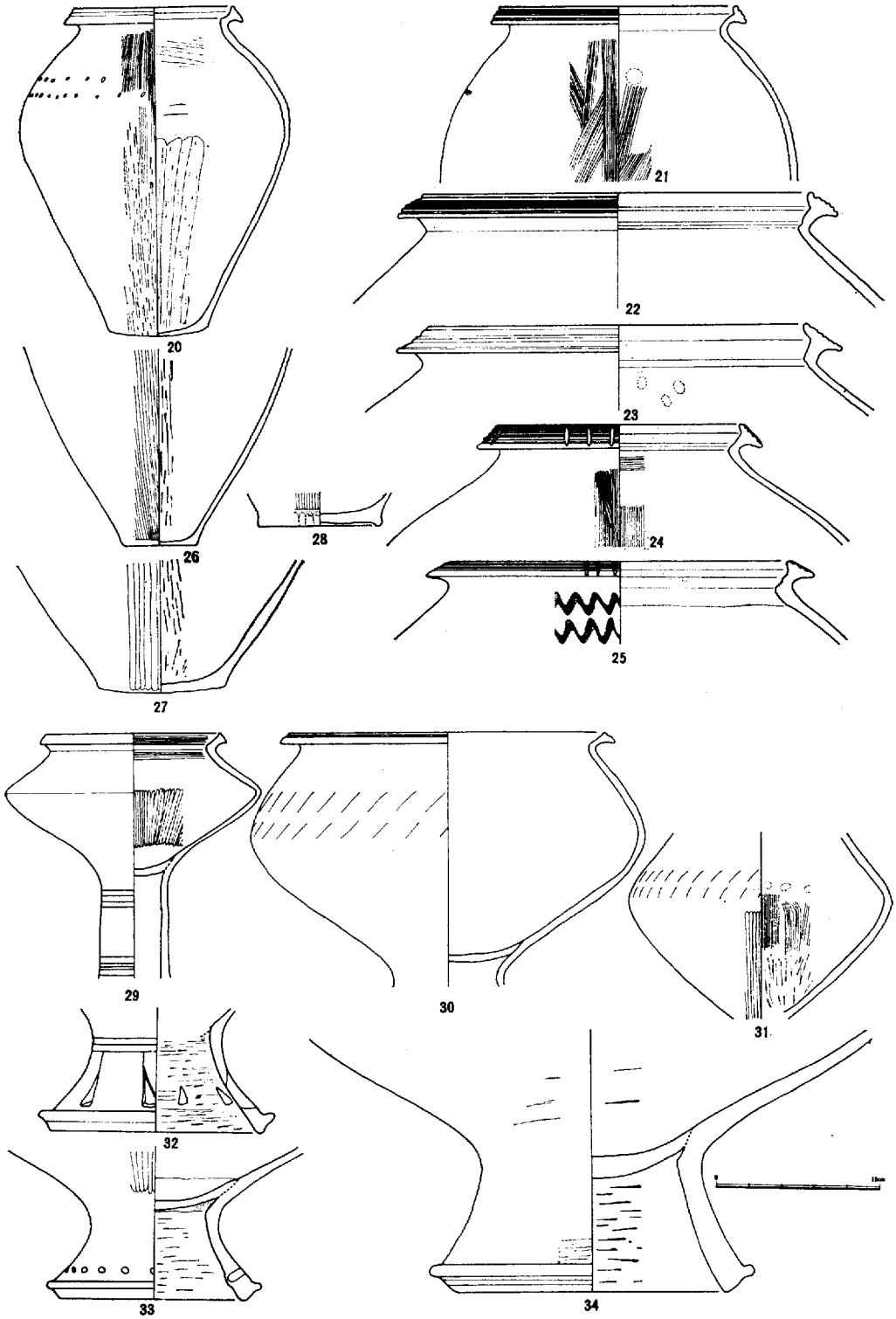
台付鉢形土器（29～34）は，最大直径を中央より若干上にもち，肩部には，ヘラによる押圧痕を巡らす。台脚端は大きく外に張り出し，裏に一部分が抜ける三角形透し，裏に抜けない小円孔，ヘラ描



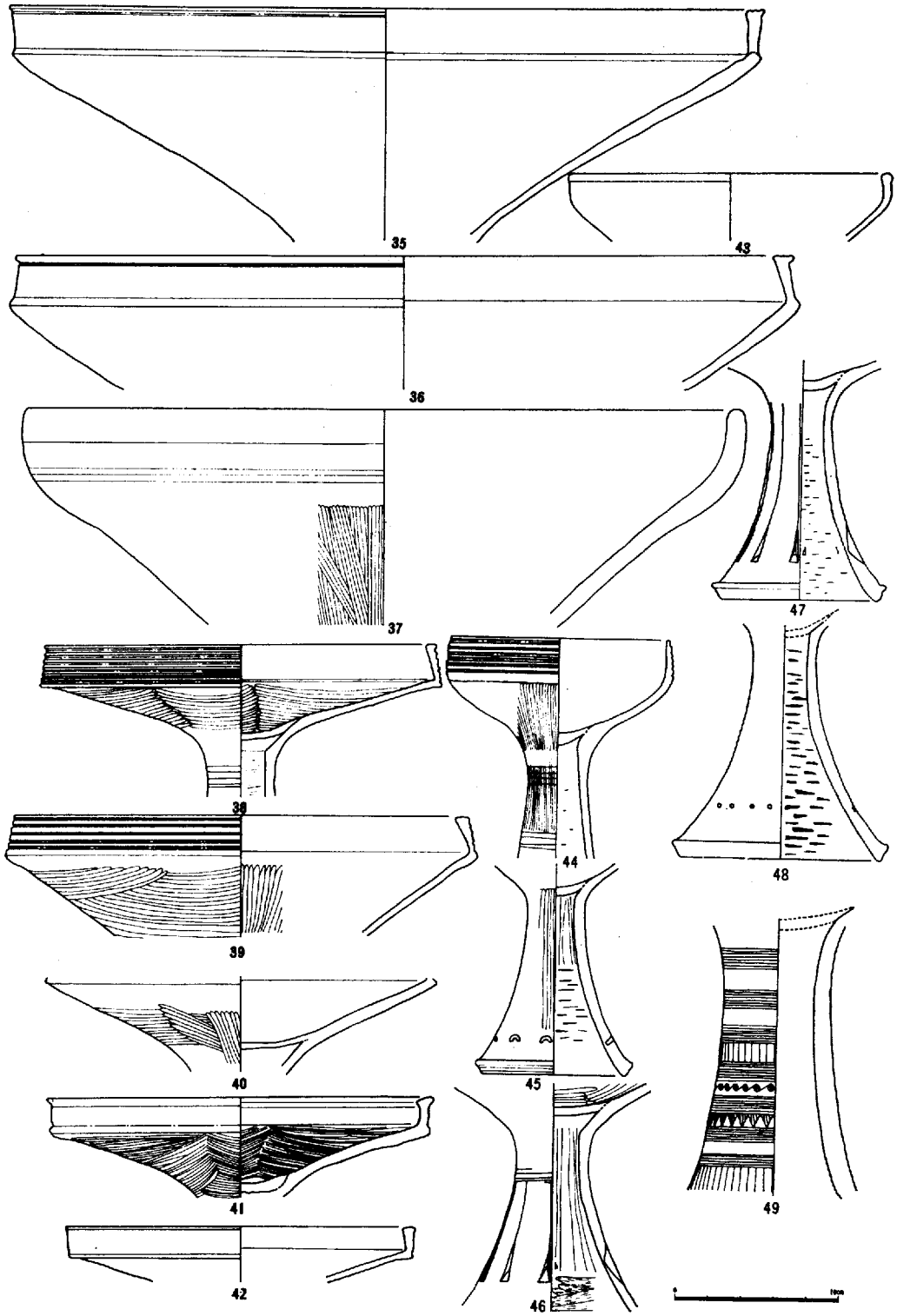
第30図　12　号　住　居　址



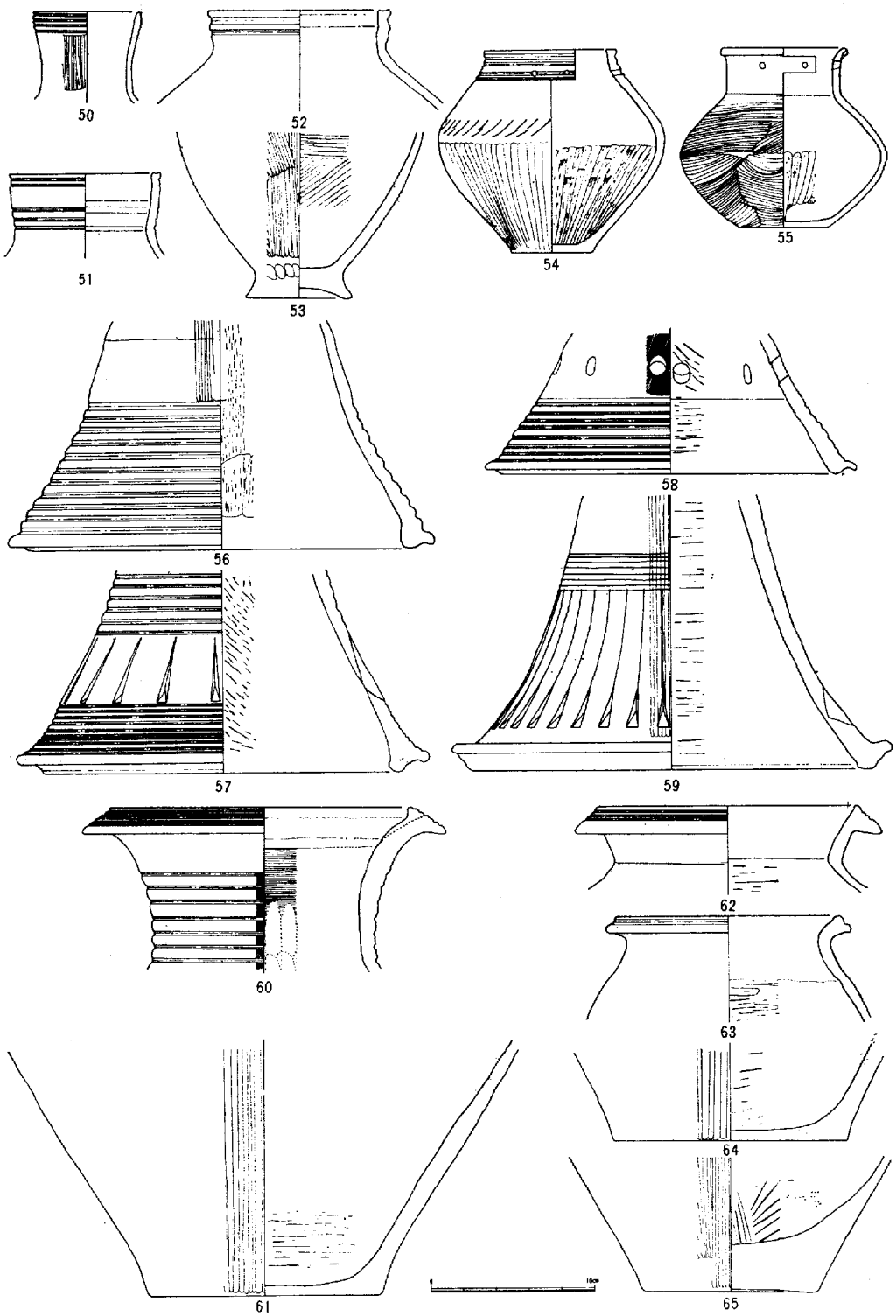
第31図　12号住居址上部土器溜り下層出土遺物　(1)



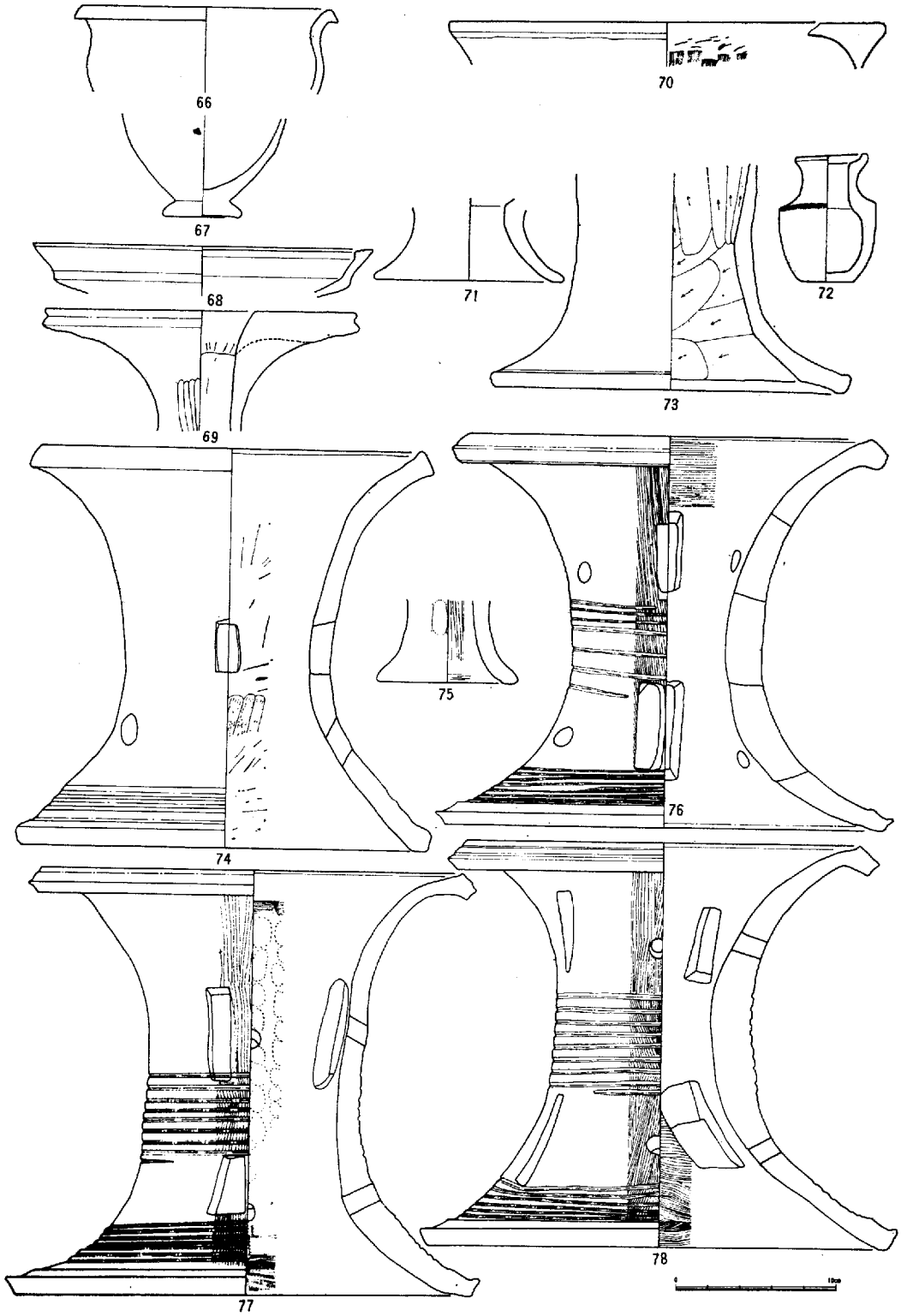
第32図　12号住居址上部土器溜り下層出土遺物　(2)



第33図　12号住居址上部土器溜り下層出土遺物　(3)



第34図　土器溜下層出土遺物 (4) (50～59) と土器溜り上層出土遺物 (1) (60～65)



第35図　12号住居址上部土器溜り上層出土遺物　(2)

き平行沈線などが施される。29のように高杯形土器と同じような台脚をもつものもある。

高杯形土器（35～49・59）には，大形のものと，小形のものとがあり，口縁部にも，まり状のものと口縁部が直立するものとがある。口縁部が直立するものには，凹線文の発達するものと，しないものがあるが，いずれも口縁部と杯底部は帖り付けている。外面・内面とも，ヘラによりていねいになでられる。杯部と脚部は円板状帖り付けにより，つながれる。脚部には，三角透し・小円孔・半竹管文・ヘラ描き沈線などをみるが，これらはいずれも裏に貫通しない。また，49のように複雑な文様を巡らすものもある。

直口壺形土器（50～52・54・55）の口縁部にも凹線をみるが，55のように口縁端を折り曲げているものもある。これも内面のヘラ削りは，胴部下半で止まる。

器台形土器（56～58）は，脚端が大きく外に張り出し，凹線が密にみられる。凹線の間には三角透し，円形孔がみられる。

以上のような特徴をもつ下層出土の土器は，門前池Ⅱ類に相当する。

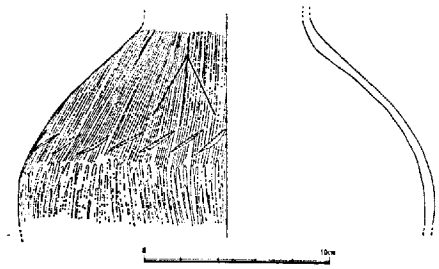
上層の土器（60～78）は，器台形土器を主として出土する。壺形土器（60・61）の口縁部は，口唇端が太くおわり，頸部には凹線が巡らされる。甕形土器（62～65）の口唇部は，下に張り出し，ここに凹線が施される。内面のヘラ削りは，頸部まで到る。

高杯形土器(68)の口縁部は外反しながら肥厚しておわる。

69・70は，上面をていねいにみがいた用途不明の土器である。72は，小形の壺形土器で肩部には細かいヘラ押圧痕がみられる。

器台形土器（73～78）は，ほぼ同じ形態をしており，口唇端部は三角形をしておわり，脚端は，上に張り出しておわる。方形透しと円形透しが交互に２段巡らされており，その間と，脚部にらせん状のヘラ描き凹線が巡らされる。73のように透しのないものもあり，75は小形のものである。

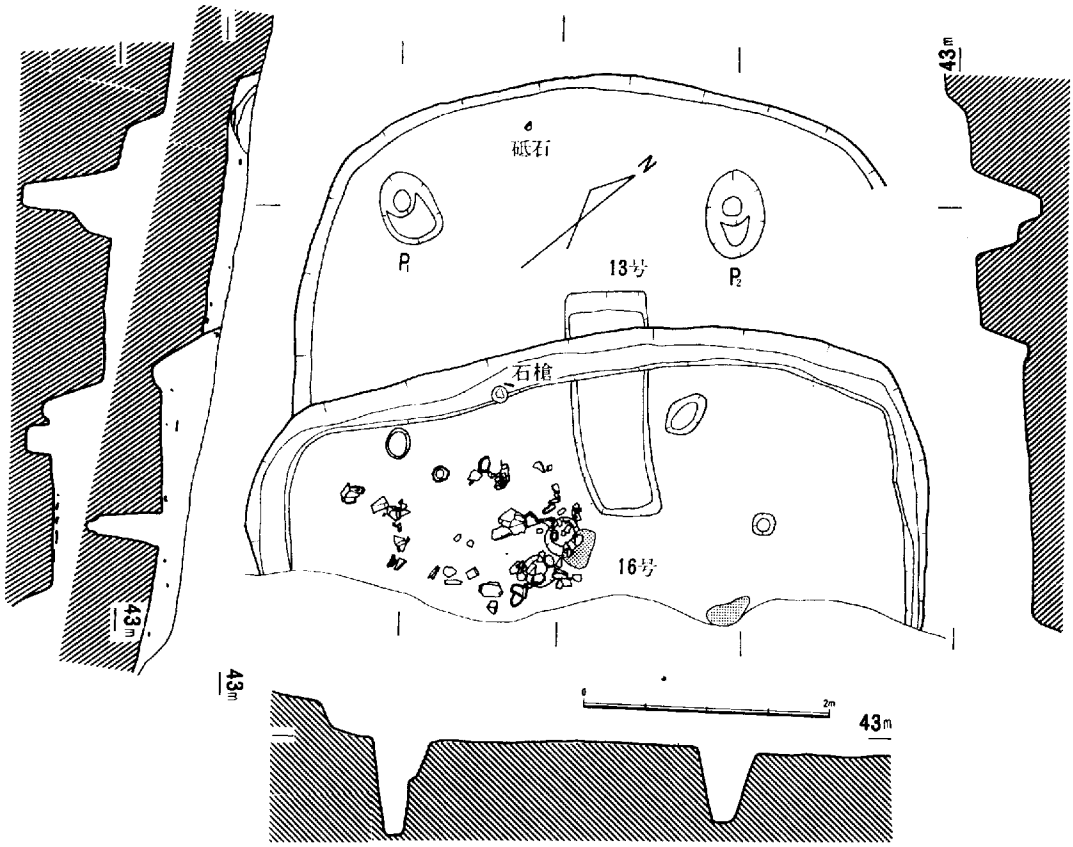
以上のように，上層出土の土器は門前池Ⅲ類の特徴を示している。



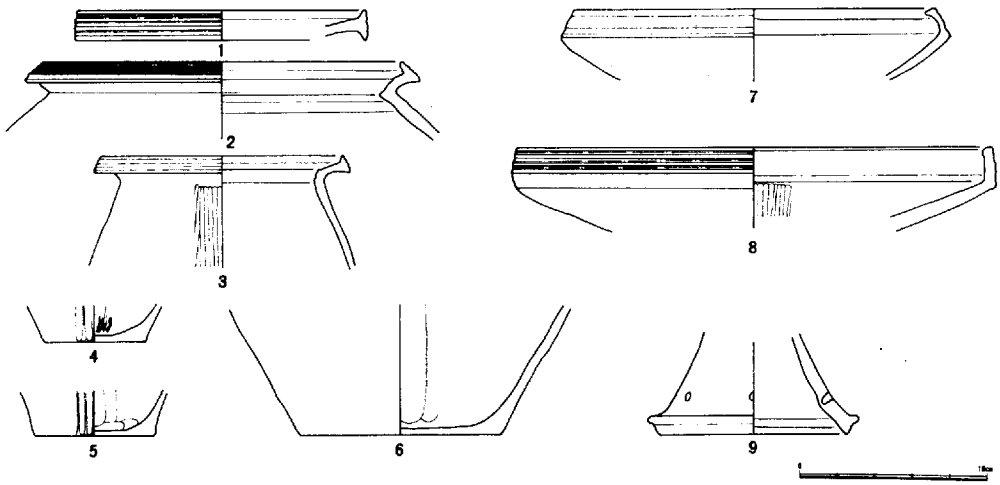
第36図　12号住居址上部土器溜り下層出土の土器文様（縮尺１/４）

13号住居址（第37図・第38図・第88図）

Ｇ６Ｑ区にある住居址で16号住居址に先行する。16号住居址と重なっているために，約１/３を残すだけであるが，一辺4.3*m*を測る胴張り隅丸方形の平面形を呈している。壁高13*cm*を残し，壁溝は



第37図　13 号 住 居 址・16 号 住 居 址



第38図　13 号 住 居 址 出 土 遺 物

ない。柱穴は西側の２個を検出しており，本来は４本柱と思われる。柱間は2.7mを測り，床面からの深さはＰ―１が80cm，Ｐ―２が60cmある。床面に付着した遺物はないが，Ｐ―１からは土器とともに石鏃２点が出土している。他は埋土中の遺物である。

土器は磨滅しているものが多い。胎土は２mm前後の細石粒を多く含むもので焼成度は普通である。壺形土器(1)は口唇部が上下に張り出し，口唇端に浅い３条の凹線をほどこす。甕形土器（２・３）は口唇部が上に張り出し，口唇端に４条の凹線をほどこす。外面はヘラのていねいななで，内面は胴部上半までヘラ削りが達しない。底部（４～６）は平底で，外面がヘラたてなで，内面はたて方向のヘラ削りである。４は外面に，５・６は内面にススが付着している。高坏形土器（７～９）は口縁部が内傾するもので，浅い凹線をほどこす。杯部の内面は放射状のヘラなでがされる。脚部には裏に貫通しない円孔があり，脚端は上に張り出す。以上の土器は門前池Ⅰ類に当たる。

石器は石鏃の他に砥石（第88図）が出土している。石鏃はサヌカイト製の打製石鏃で第Ⅰ類にあたる。砥石は砂岩製で３面を使用している。

16号住居址（第37図・第39図・第85図・第87図）

13号住居址の東側にあり，約１/３を残す。一辺5.5mの隅丸方形をしており，壁高20cmを残す。幅15cm，深さ４cmの壁溝が周囲にまわる。ピットが５個検出されたが，柱穴は断定しがたい。中央よりには焼土が２ケ所検出された。床面上には多量の土器をみるが，完形となるものはない。土器の他に，壁溝から石槍，埋土中から石匙・片刃石器が出土した。

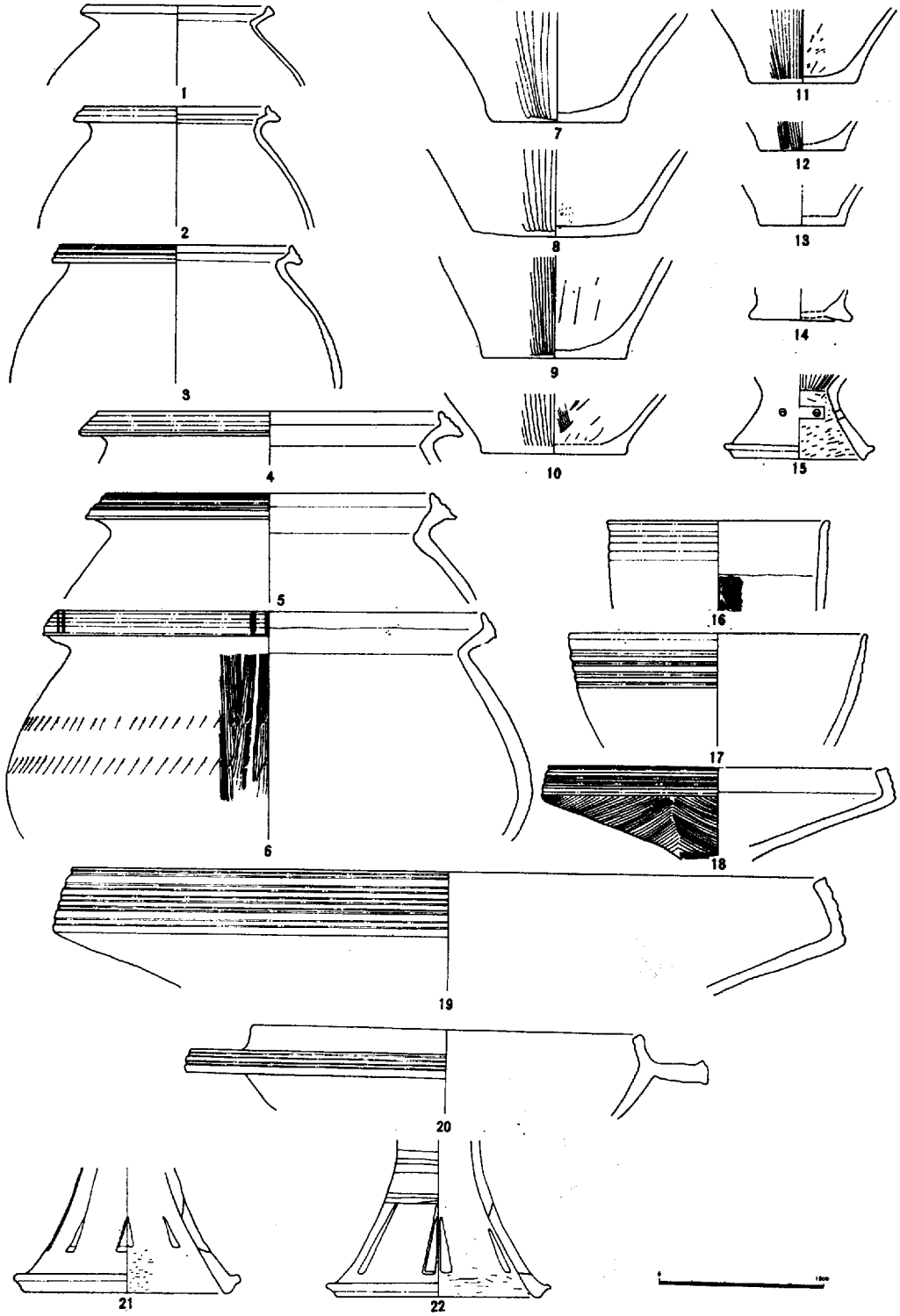
胎土は２mm前後の細かい砂粒を多く含むもので，焼成度は普通である。磨滅しているものが多く，ほとんどが黄味がかった褐色を呈している。

甕形土器（１～５・７～14）には，肩部がゆるやかに胴部へ移るものと，広がりをもって移るものがある。口唇部は，上下に張り出すが，下への拡張は少ない。口唇端部に３条ほどの凹線をほどこすものもある。底部は，平底のものと，あげ底のものとがある。底部付近で若干，外側に反っておわる。外面の整形は，ヘラのたて方向なでにより，内面のヘラ削りは胴部下半に留まる。

台付鉢形土器（６・15～17）は，鉢部が，頸部を持つものと持たないものがある。６は口唇部が内傾しておわり，端部に４条の凹線があり，その上に棒状の浮文が貼りつけられる。最大径は中央にあり，肩部には，左下がりのヘラ押圧が２段に施される。外面はハケなでによる。16の口縁部は直立し，17の口縁部は外に広がるが，ともに４条の凹線が施される。台部には，２個で１対となる小円孔が２対あり，端部は外に大きく張り出す。

高杯形土器（18～22）の杯部は，２種あり，ひとつは，口縁部が内にまげられ，ここに４～５条の凹線が施されるものであり，あとひとつは，口縁部に外へ大きく張り出す部分をもつものである。この部分の端部は若干，上下に張り出し浅い凹線をもつ。脚部は，内面へ抜ける三角透しと，ヘラ描き沈線で構成され，端部は，外へ張り出す。

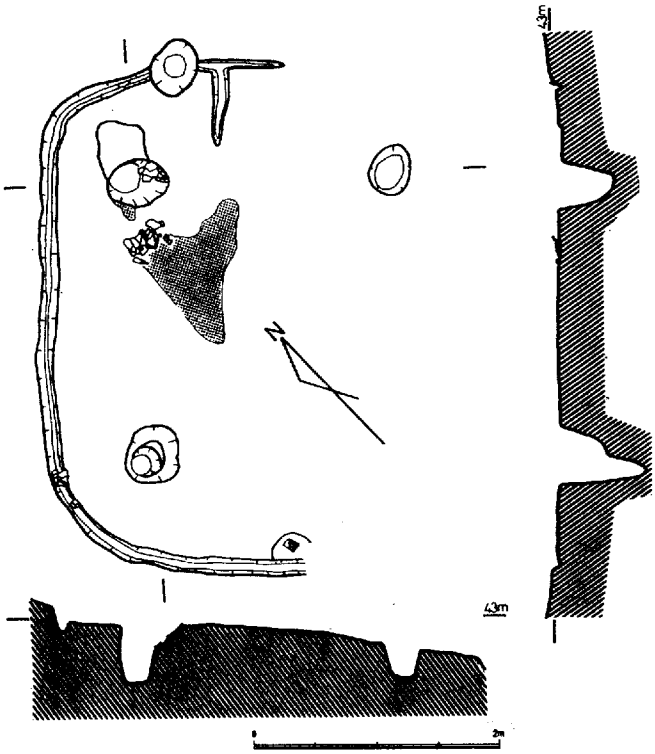
これらは，門前池Ⅰ類の特徴をもつ一群である。



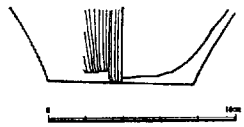
第39図　16 号 住 居 址 出 土 遺 物

14号住居址（第40図・第41図）

5Ｐ区にある隅丸方形の住居址で，西側の約１/３を残す。一辺4.1*m*，現存高15*cm*を測り，幅10*cm*，壁高10*cm*の壁溝が巡る。柱穴と思われるピットが３個あり，柱間は，2.3*m*と2.1*m*を測る。径と深さは45*cm*・70*cm*，45*cm*・45*cm*，40*cm*・40*cm*を測る。中央部には，炭・灰がある。床面・柱穴内に土器がみられ，底部の胎土・形態から門前池Ⅰ類ないしはⅡ類と思われる。



第40図　14　号　住　居　址

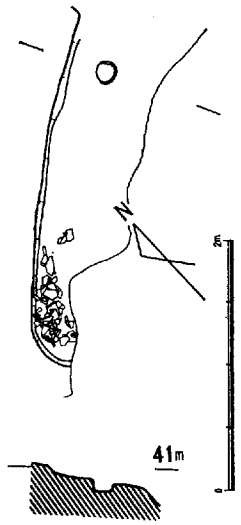


第41図　14号住居址出土遺物

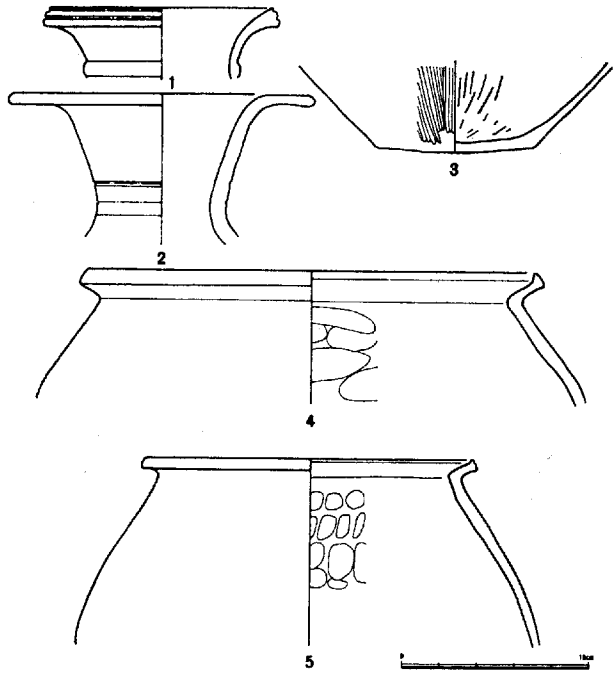
15号住居址（第42図・第43図）

14号住居址の東下方，８号住居址の南に接して存在するが，残存部は１/８ほどしかなく規模など明確でない。平面形は方形あるいは隅丸方形を呈すると思われ，壁高７*cm*を残す。隅に土器が集中している。

完形になるものはない。胎土は細かい砂粒を使っている。壺形土器（１～３）は削り出し突帯をもつ頸部から器厚を増しながら口唇部に到り，口唇端に２条の凹線をほどこすものと，頸部に３条の凹線をもち口唇部が水平になるものとがある。底部の外面はヘラたてなで，内面はたて方向のヘラ削りがされている。甕形土器（４・５）は口唇部が上に立ちあがるもので，内面は押圧整形である。これらは門前池Ⅰ類に属する。



第42図　15 号 住 居 址



第43図　15 号 住 居 址 出 土 遺 物

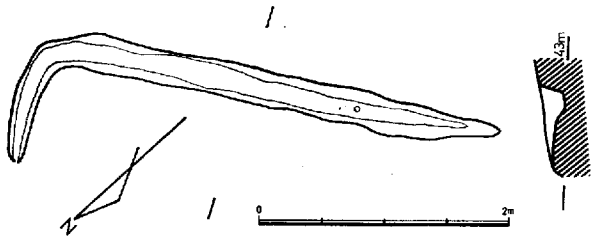
17号住居址（第44図・第45図）

Ｇ２Ｐ区にあり，東側の約１／５を残す方形住居址で，18号住居址が埋まったあとにつくられている。壁高15㎝を残し，幅30㎝，深さ７㎝の壁溝が周囲をまわっている。床面・壁溝とも全面を炭・灰・焼土塊におおわれており，ミニチュア土器の出土とあわせ，注目すべきものであろう。壁溝より２の手ずくね土器が出土している。他の２点は，これら焼土・炭などの中から出土している。

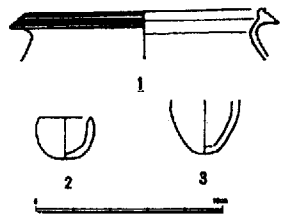
１は口唇部が上下に拡張する甕形土器の口縁部である。口唇端に３条の凹線があり，外面にはススが付着している。２・３は細かい砂質胎土で，茶褐色を呈する小形の手ずくね土器である。これは門前池Ⅰ類に属する。

18号住居址（第46図・第47図・第89図）

17号住居址に先行するもので，約１／２を残し，直径約６ｍの円形をしている。建て替えをし，若



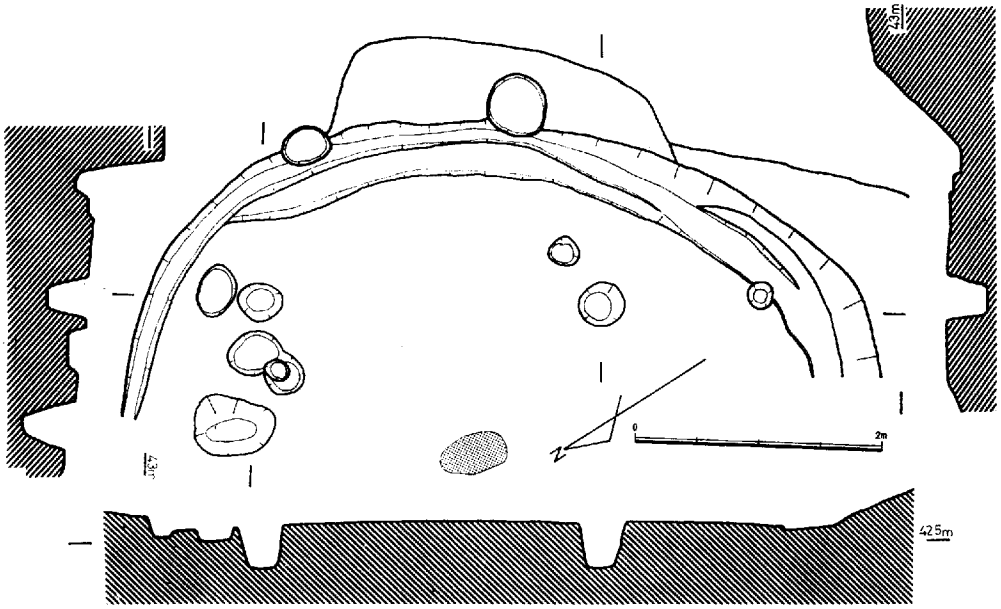
第44図　17　号　住　居　址



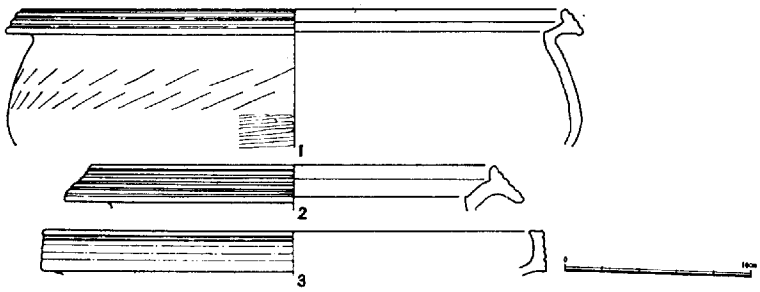
第45図　17号住居址出土遺物

干の拡張をしている。壁高55cmを残し，周囲には幅20cm，深さ15cmの壁溝を巡らす。住居内に，ピット８個を確認したが，柱穴と思われるのは２個であり，その柱間は2.7mを測る。床面からの深さは35cmであり，中央部には炉跡と思われる焼土面がある。床面に付着した遺物はなく，鉄器（第89図６）が少しういて出土した。

鉢形土器(1)は外面を横方向にヘラでなで，胴部上半にヘラで左下がりの押圧をほどこす。口唇端には３条の凹線がある。甕形土器(2)の口唇部は上下に大きく張り出し，口唇端部に５条の凹線が施される。高杯形土器(3)の口縁部は直に立ちあがり，５条の凹線を施す。図化できなかったが，深いわん状の杯部をもつものもあり，これには口縁部に10条の凹線が施され，坏底部はヘラでたて方向になでられている。鉄器は長さ8.5cmの断面が円形をしたもので，基部の径が８mmあるのに対し，先端付近では６mmとなり，次第に細くなるものである。以上の土器は門前池Ⅰ類に当たる。



第46図　18　号　住　居　址



第47図　18　号　住　居　址　出　土　遺　物

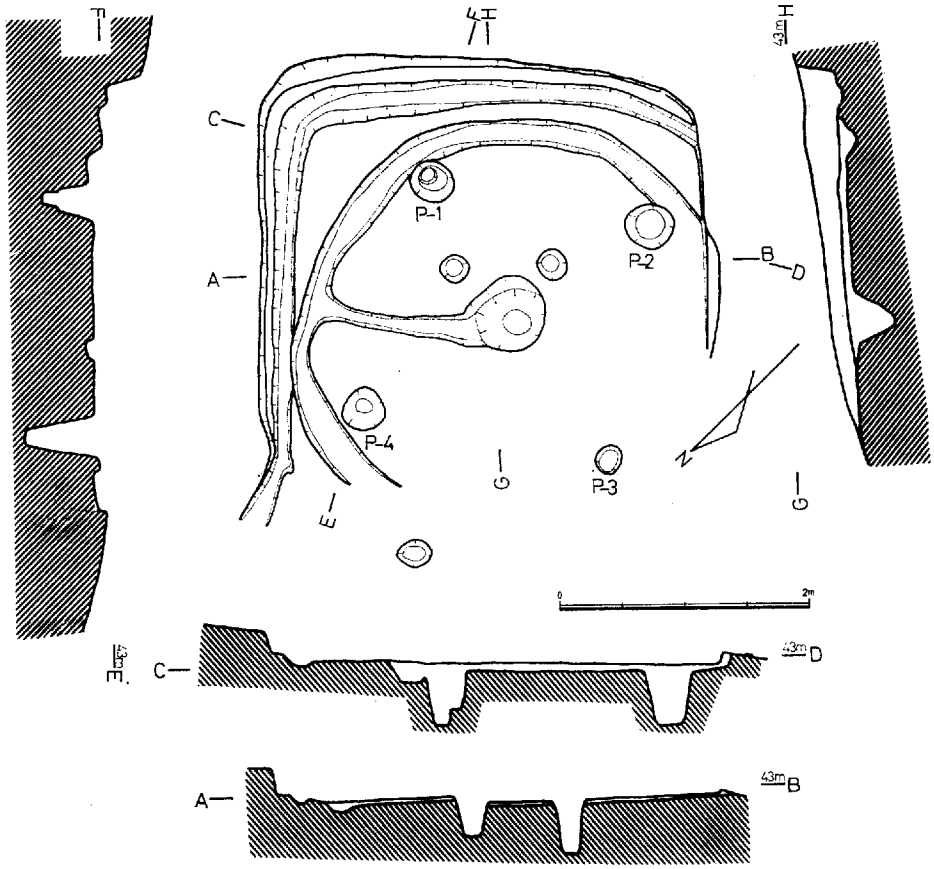
19号住居址（第48図・第49図１）

Ｇ２Ｏ区にある一辺3.5*m*の方形住居址で20号住居址を拡張している。西壁は確認できないが，ほとんど残存している。壁高20*cm*を残し，周囲には壁と約10*cm*の間を置いて幅20*cm*，深さ５*cm*の壁溝が巡っているが，南壁にはない。この壁溝は北西端で住居外に流れ出て，65*cm*延びる。この住居に伴うとみられる柱穴は明確でないが，直径25*cm*，深さ45*cm*の小ピット２個が壁と平行に並んでおり，関連のあるピットと思われる。これらの柱間は80*cm*を測る。

甕形土器(1)の口縁部は口唇端部から２*cm*ほど平坦な面をもち，外面・内面ともに横方向のヘラなでがされる。４*mm*位の石粒を含む砂質胎土である。これは門前池Ⅴ類に当たる。

20号住居址（第48図・第49図２～11）

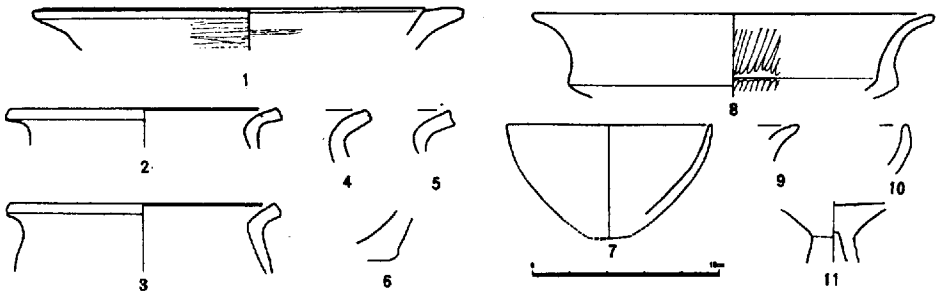
19号住居址に先行するため，上面をほとんど削除されているが，壁高が19号住居址より５*cm*深いため平面形はほとんど残っている。直径3.5*m*の円形住居であり，全面に炭・灰・焼土がぎっしりつまっている。壁も赤く焼けており，火災にあったものと思われる。19号住居址はこの上に褐色土を貼り付けて生活面にしている。周囲には幅25*cm*，深さ３*cm*の壁溝が巡り，これは西側から中央にある直径



第48図　19号住居址・20号住居址

60cm，深さ45cmの穴に延びている。柱穴は4個あり，それらの柱間は次の通りである。P_1—P_2が1.8m，P_2—P_3が1.9m，P_3—P_4が2m，P_4—P_1が2m。床面からの深さはP—1が45cm，P—2が45cm，P—3が55cm，P—4が35cmを測る。P—4は柱痕跡を残しており，その直径は11cmである。土器は埋土中に含まれる。

土器は二次的に火を受けているために，ボロボロになっているものが多い。色調は茶褐色ないしは褐色を呈し，胎土は3～4mmほどの小石粒を含むが，高杯だけは精製粘土を使用している。甕形土器（2～5）は口縁内部がわずかに段をもち，5は口唇端部に沈線がみられる。底部(6)はあらいなでのために不安定であり，外面はヘラなで，内面はヘラ削りである。鉢形土器(7)は小さな底部をもち，口縁部はまっすぐ延びながら薄くなっておわる。高杯形土器（8～11）は杯部が外反して口唇端へ到るもの（8・9）と逆に内側へ曲がりながらおわるわん形のもの(10)とがあり，杯部と脚部の帖り付けは円板状粘土による。これらは門前池V類に当たる。



第49図　19号住居址・20号住居址出土遺物

21号住居址（第50図・第51図）

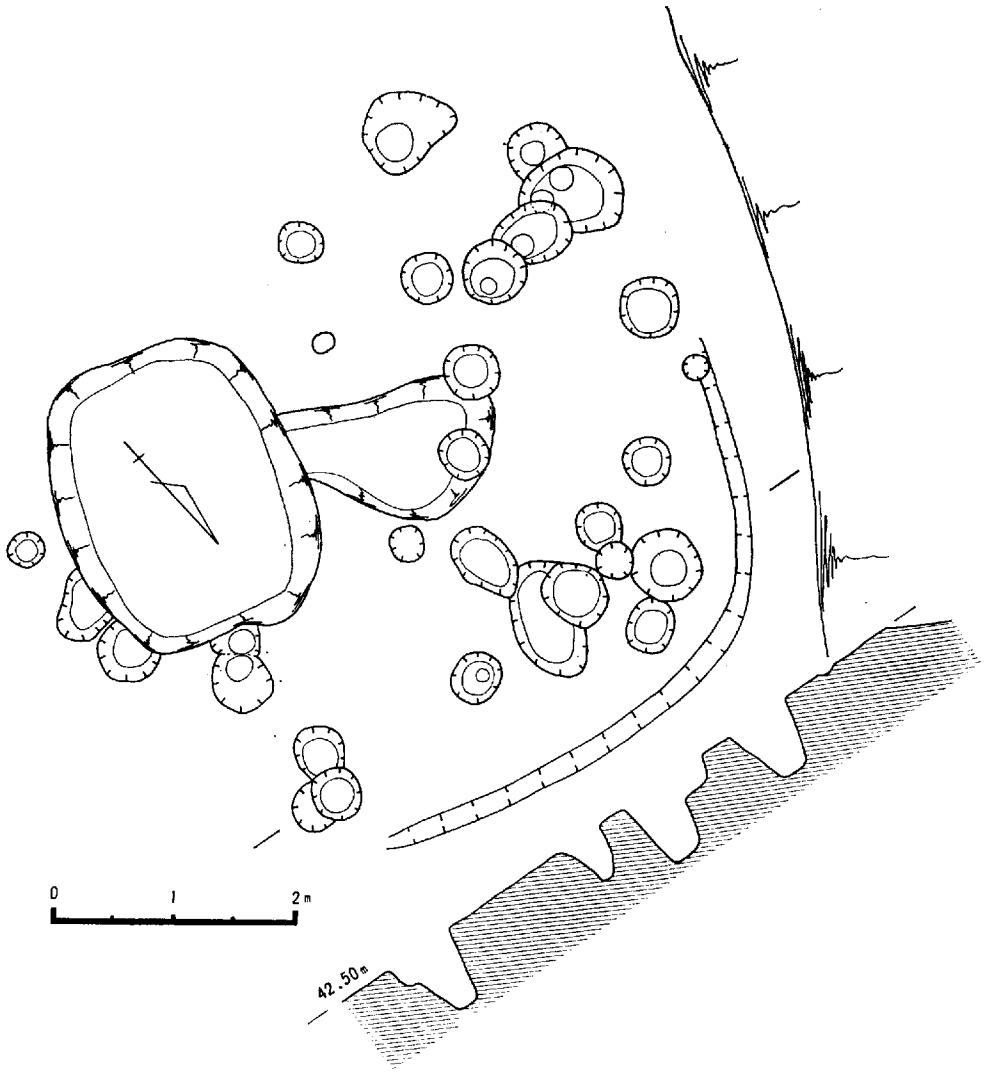
この住居址は，第2地点の丘陵のほぼ頂上部分において検出した。残存状態は悪く，わずかに周溝と柱穴を検出した。柱穴は建て替えのためか重複している。

住居址内の出土遺物は少なく，わずかに柱穴内から，土器の小破片が出土した。甕形土器の口縁（1・2）と，高杯形土器の杯部(3)と脚部(4)である。これらの土器は門前池Ⅲ類にあたる。

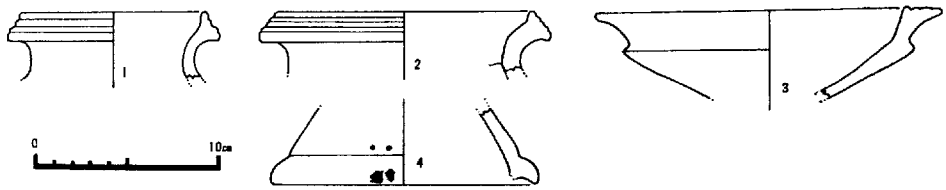
22号住居址（第52図・第53図）

G3R区にあり，約1/3を残す。直径4.2mの円形住居址であり，壁高20cmが残っている。周囲には幅25cm，深さ5cmの壁溝が巡る。住居内にはピットが多く，柱穴は断定し難い。床面に付着するものはなく，すべて埋土中よりの出土である。

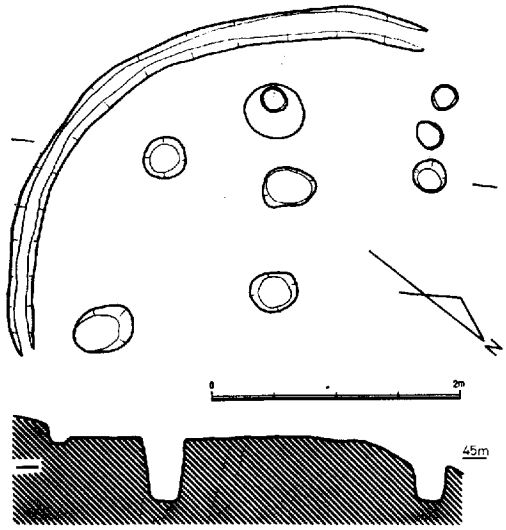
甕形土器(1)はくの字状に曲がる頸部から口唇部が上に張り出す。内面ヘラ削りが頸部内面にまでみられる。小形壺形土器(2)は口縁部・底部とも失なっている。外面は荒いなで整形で凹凸がみられる。内面ヘラ削りは胴部上半まで及ぶ。高杯形土器(3)は裏に抜ける5つの円孔をもち，外面ヘラたてなで，内面ヘラ横方向削りで仕上げている。これらは門前池Ⅳ類に当たる。



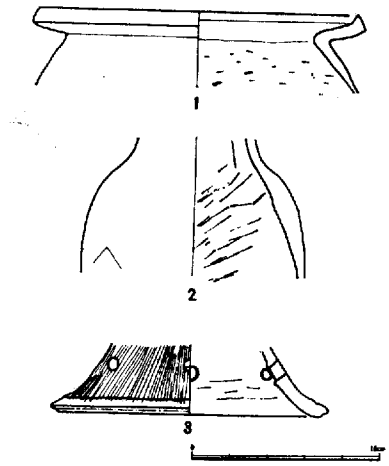
第50図　21　号　住　居　址



第51図　21　号　住　居　址　出　土　遺　物



第52図　22 号 住 居 址



第53図　22号住居址出土遺物

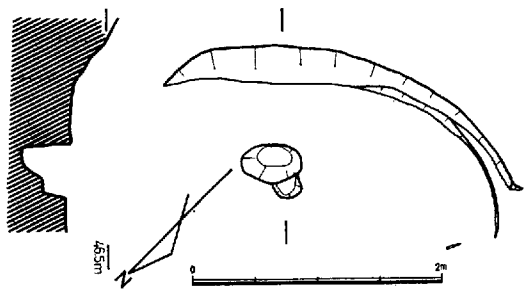
23号住居址（54図・第87図）

Ｇ３Ｓ区にある円形住居址であるが，残存状況がよくなく直径など不明である。壁高25㎝を測る。直径30㎝，深さ40㎝の柱穴と思われるピットがある。ピット内に褐色を呈する土器細片があったが図化できなかった。床面上に石槍があった。

石槍は長さ９㎝，幅2.5㎝を測り，サヌカイト製である。先端は鋭く，基部は直に近い。周辺には荒い押圧剥離がされている。

24号住居址（第55図・第56図・第85図・第86図）

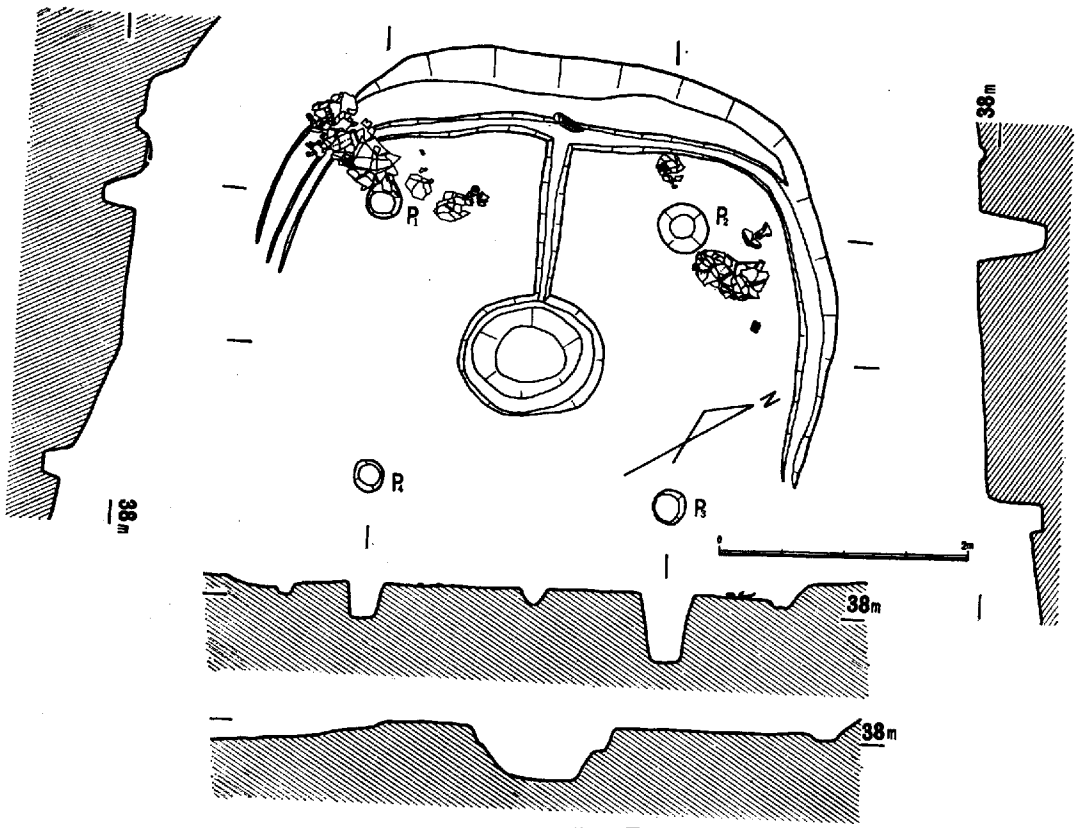
Ｇ６Ｇ区にある一辺4.5ｍを測る隅丸方形の住居址である。北側の約１／２が残っている。壁高30㎝を残し，周囲には幅10㎝，深さ５㎝の壁溝がまわっておりこの溝は北辺中央部から中心へ向かっている。４本柱で，各々の柱間は次の通りである。P_1—P_2が2.4ｍ，P_2—P_3が2.2ｍ，P_3—P_4が2.4ｍ，P_4—P_1が2.2ｍ。また各々の直径及び深さはP_1が40㎝・25㎝，P_2が40㎝・25㎝，P_2が40㎝



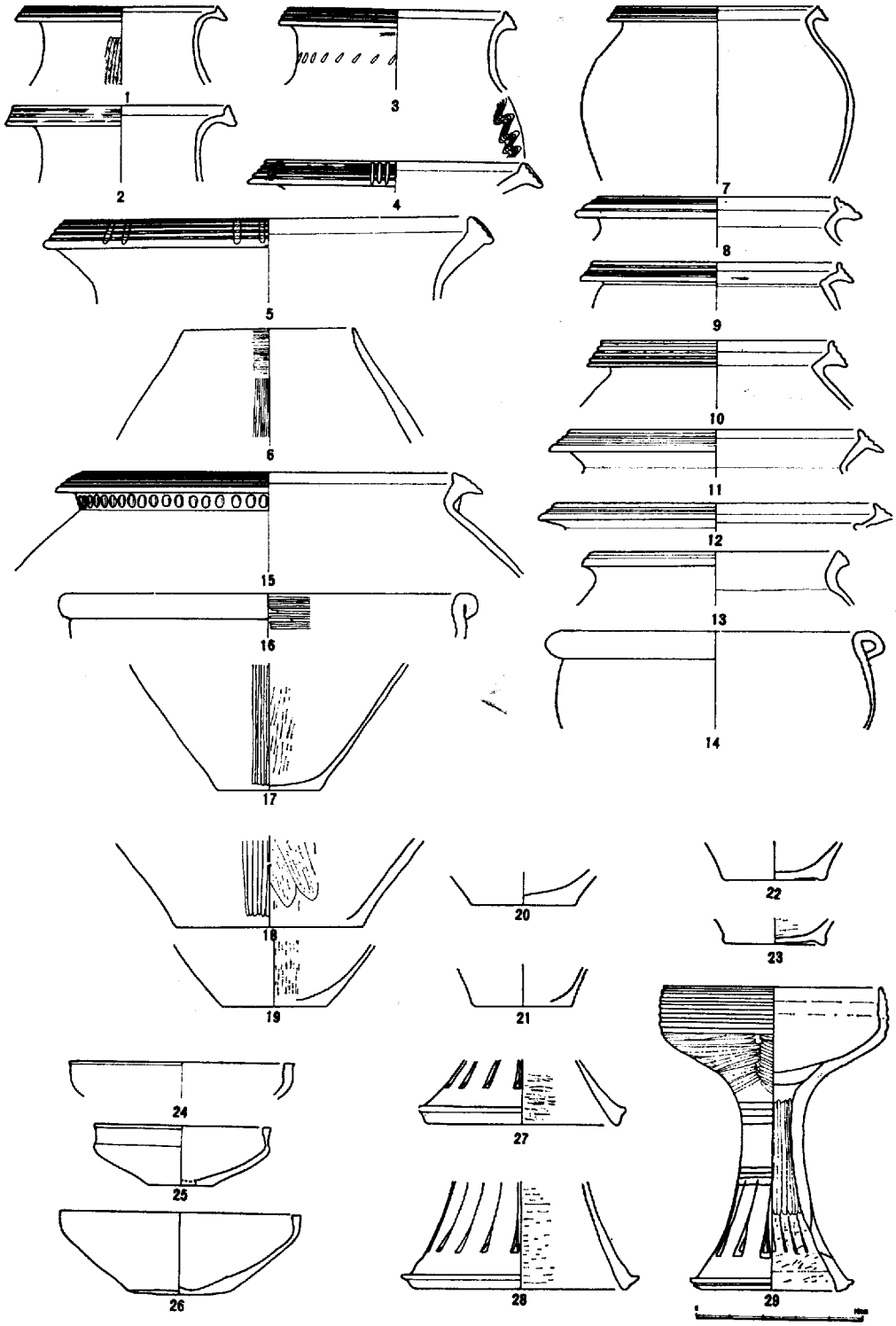
第54図　23 号 住 居 址

・50cm，P₃が30cm・45cm，P₄が25cm・20cmを測る。中央には直径85cm，深さ40cmの穴がある。北辺の壁溝内には長さ25cm，幅8cmの礫があるが，これに砥ぎ痕跡などはみられない。床面あるいは東壁周辺に土器がみられる。東壁の上からみられる土器群はP_1の中にまで流れ込んだ状況を残している。また，P_1付近の石包丁片とP_2付近の石包丁片は同一個体（86図1）である。中央ピット内には土器片があり，これらと混在して，舟形土製品が出土した。

壺形土器は口縁部が，上下に張り出し，頸部には，ヘラ押圧痕がみられる。甕形土器は，胴部が広がるもの・最大径が肩部にあるもの・口唇部が外に折れ曲がるものの3種がある。鉢形土器は，口縁部が直立し，平底をもつ。高杯形の杯部は，まり状を呈し，脚部には，ヘラ描き沈線と裏に一部抜ける三角透しが施される。これらは門前池Ⅱ式に当たる。



第55図　24　号　住　居　址



第56図　24 号 住 居 址 出 土 遺 物

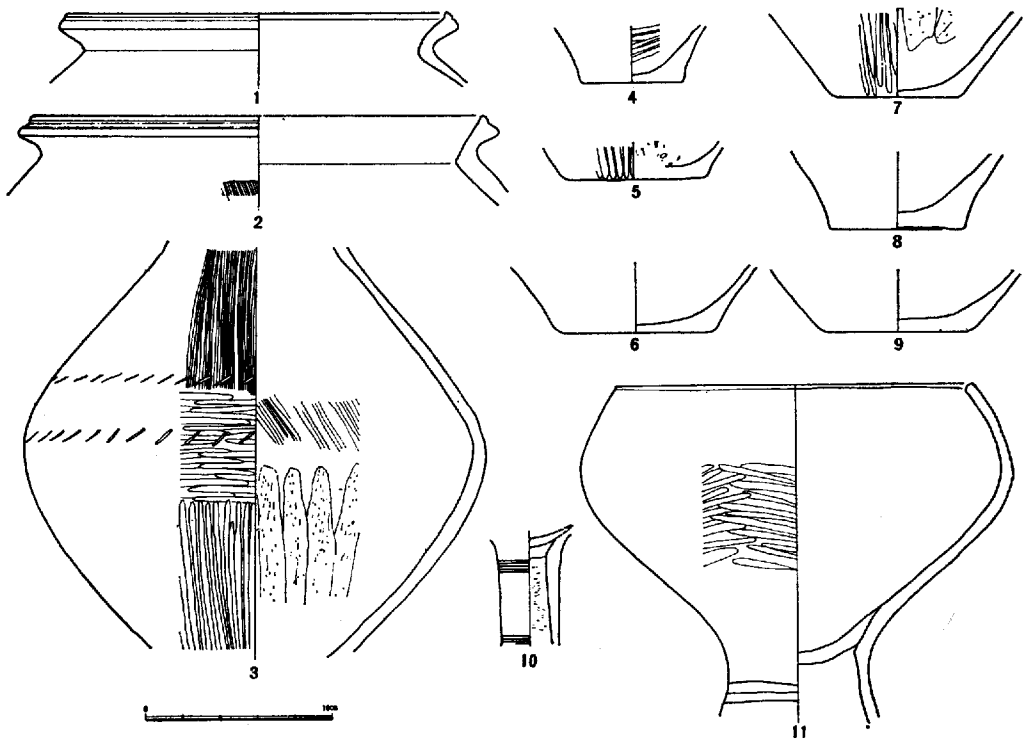
25号住居址（第57図・第58図）

Ｇ７Ｆ区・Ｇ７Ｇ区・Ｇ８Ｆ区・Ｇ８Ｇ区にある，円形をした住居址で，炭化した建築材がほぼ完全に残っている。東側が流れているものの，直径5.8*m*，壁高30*cm*を測る。この高さは，炭化材の残り具合より，当時の高さを残している。住居掘り込みの外側には，45*cm*～110*cm*離れて段があり，北側では幅25*cm*，深さ３*cm*の溝状落ち込みをなしている。西側では壁に沿って，幅15*cm*，深さ３*cm*の浅い落ち込みを確認したが，周囲をまわっている痕跡はなかった。柱穴は５本あり，各々の柱間は，

第57図　25　号　住　居　址

P_1—P_2が2.6m，P_2—P_3が2.4m，P_3—P_4が1.8m，P_4—P_5が1.9m，P_5—P1が2.6mある。また各柱穴の直径・深さはP_1が40cm・20cm，P_2が20cm・30cm，P_3が20cm・35cm，P_4が25cm・30cm，P_5が50cm・50cmある。中央には長径110cm，短径60cm，深さ50cmのだ円形をした穴がある。中央穴の北側には，上面に砥ぎ痕のある据え付けの砥石があり，北側コーナには，磨製石器の原材とみられる礫がある。

炭化材は，柱材，桁材，棰材・横木材などがある。柱材の残っているのは，P_1・P_2・P_4・P_5の4本で，直径約13cmを測る。これらは，P_1では外側に倒れている。桁材と思われるのは，P_1—P_2（短かくなっている）・P_4—・P_5・P_5—P_1間にみられ，P_4—P_5間の桁材はP_4側がくすぶったためか，炭化材の状態ではなく焼土化している。これらも径10cm～15cmを側る。棰材は，周囲に放射状にみられるが，これらは柱穴の位置で向きを変えており，桁へほぼ直角にさしかけたらしいことがわかる。この点からみると，これらは四つの方向から延びており，柱材と桁材との関係を示唆してくれる。桁材と棰材の関係は，棰材が桁材の上にあるものと，下にあるものとがあり，棰材が中央部で集中しないように意識的につくられた可能性を示している。また，棰材のうち，外を巡る段に延びるものと延びないものがある。横木材はP_2とP_5周辺にみられ，いずれも棰材の下にある。壁に沿って横方向にある材も，しがらみの可能性があるが，横木と思われる。中央ピットの西側にみられる炭化材は棟材の可能性がある。西側にみられる壁溝は，焼失時も落ち込んでいたらしく，炭化材が落ち込んでいた。以上のように，炭化材は良好の保存状況を示し，上部構造復元に好資料を与えてくれたが，今回は状況報告に留めたい。また，材質・屋根をおおった植物などについても，今後，機会をみつ



第58図 25 号 住 居 址 出 土 遺 物

けて報告したい。

遺物はほとんどみられず，高杯形土器・台杯鉢形土器の，割に大きい破片が床面にみられたのみであった。石斧・磨製石包丁の未製品も床面よりの出土である。舟形土製品は，中央からの出土で，24号住居址出土のものと同一個体である。

甕形土器（1～9）の口縁部は，口唇端部があまり上下に拡張しない。肩部には，2段に左さがりのヘラ押圧痕がみられ，内面のヘラ削りは胴部下半に留まる。高杯形土器（10・11）の脚部には，ヘラ描き沈線がみられる。これらは門前池Ⅱ類に相当する。

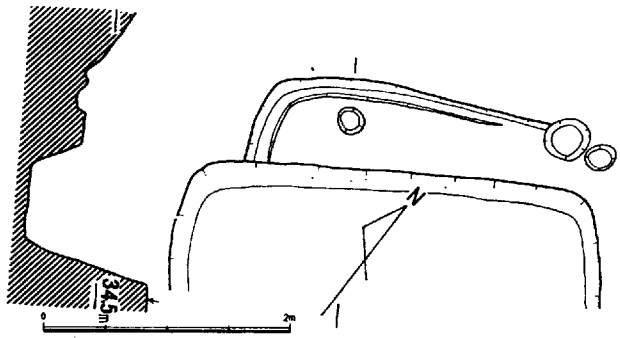
26号住居址（第59図）

G9G区にある方形の住居址であるが，一コーナーのみで規模は不明である。壁に沿って幅15㎝，深さ5㎝の壁溝が巡る。柱穴と思われるピットは北西隅にあり，直径20㎝，深さ10㎝を測る。

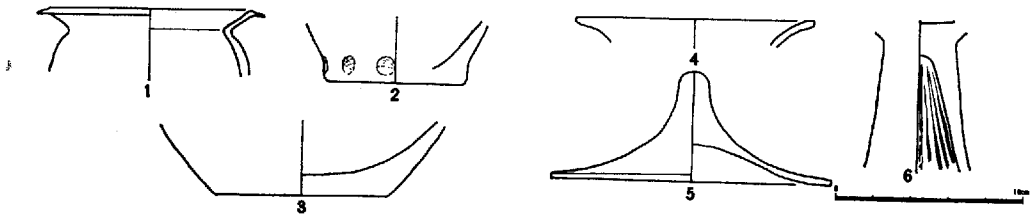
27号住居址（第59図・第60図）

26号住居址の南側にあり，一辺3.4m，現存の壁高40㎝を測る方形住居址である。

26号住居址・27号住居址出土の土器は，門前池Ⅳ類の特徴を呈す。



第59図　26号住居址・27号住居址



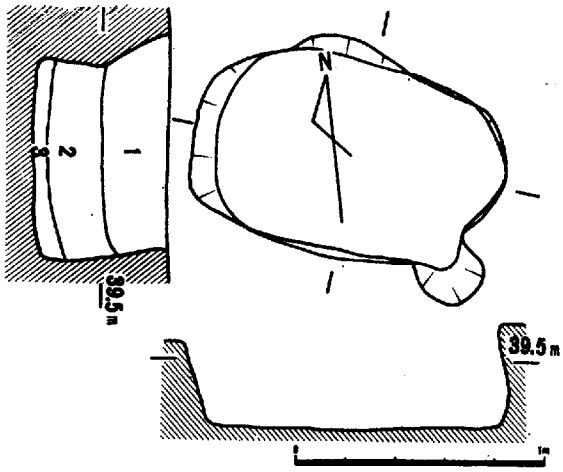
第60図　26号住居址・27号住居址出土遺物

3　土　　壙

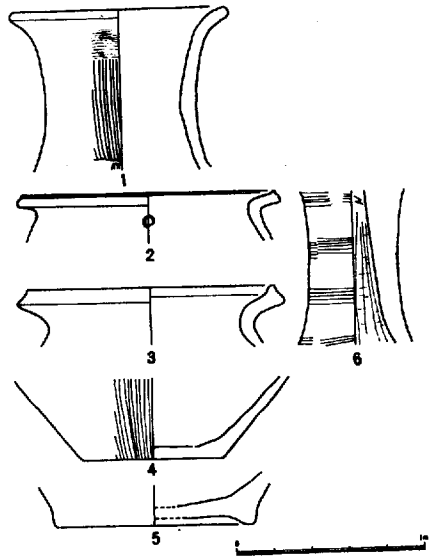
丘陵上には多数のピットが存在する。これらの多くは，柱穴と思われるものの，建物としてまとまるものはない。また，点々と楕円形ないしは方形をした土壙がみられ，これらは貯蔵穴と思われる。以下，これらの主なものについて，述べよう。

土　　壙　1（第61図・第62図1）

Ｇ５Ｃ区にある袋状を呈した土壙である。長辺125㎝，短辺75㎝，現存深55㎝を測る。埋土は，１層（暗茶褐色土），２層（黄みがかった褐色土），３層（褐色土）に分けられ，全部の層に炭・焼土を含む。１層・３層に土器片が含まれ，図化した壺形土器(1)は１層出土のものである。壺形土器は，外反しながら，丸みをもっておわる口縁部をもつもので，門前池Ⅲ類に相当する。



第61図　土　壙　1



第62図　土壙１・土壙２出土遺物

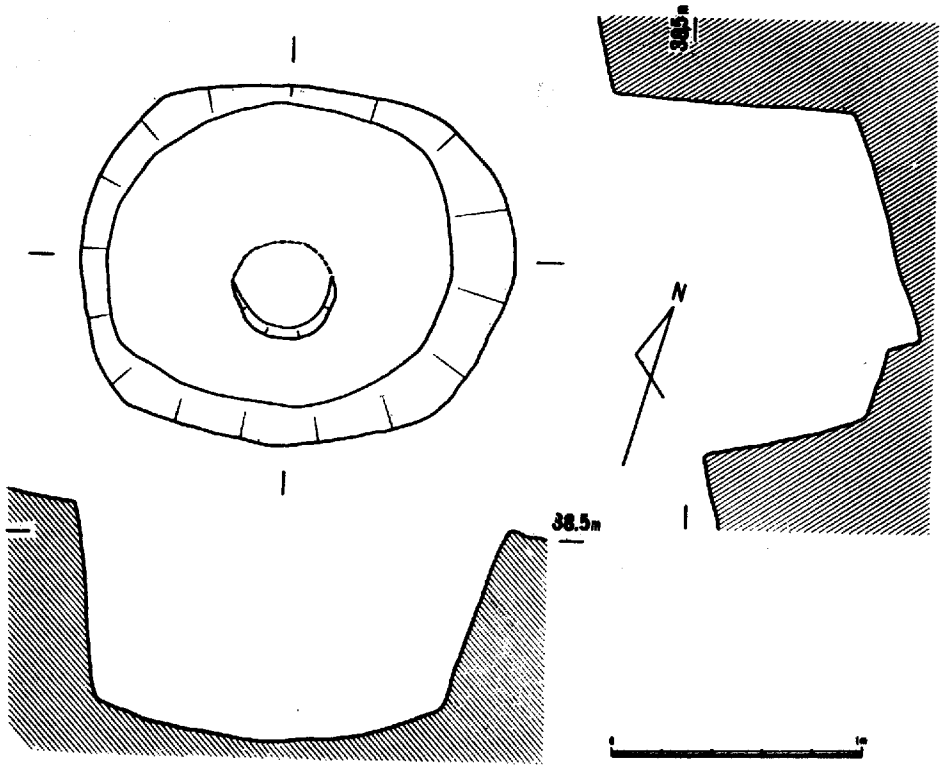
土　　壙　2（第62図２～６・第63図）

Ｇ６Ｆ区にある土壙である。長径175㎝，短径145㎝，現存深90㎝を測る。楕円形の土壙で，現在の容積は約1.4㎥ある。中央には，径40㎝，深さ10㎝の円形をした小さい穴がある。埋土には，土器を含んだ黒褐色の土がはいっている。

甕形土器（２・３）は，口唇端が上に張り出しておわるもので，頸部に小孔をもつものもある。底部（４・５）には，平底のものと，あげ底のものとがある。高坏形土器(6)の筒部には，４段にくし描き沈線が施される。これらは門前池Ⅲ類に相当する。

土　　壙　3（第64図・第65図）

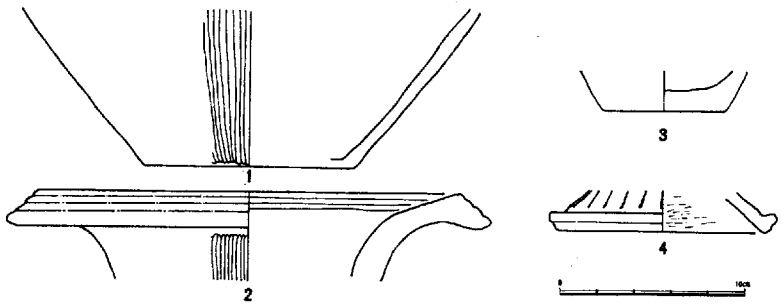
Ｇ７Ｉ区にある隅丸方形の土壙である。一辺1.6ｍの正方形を呈し，深さ60㎝を残す。現存容積は



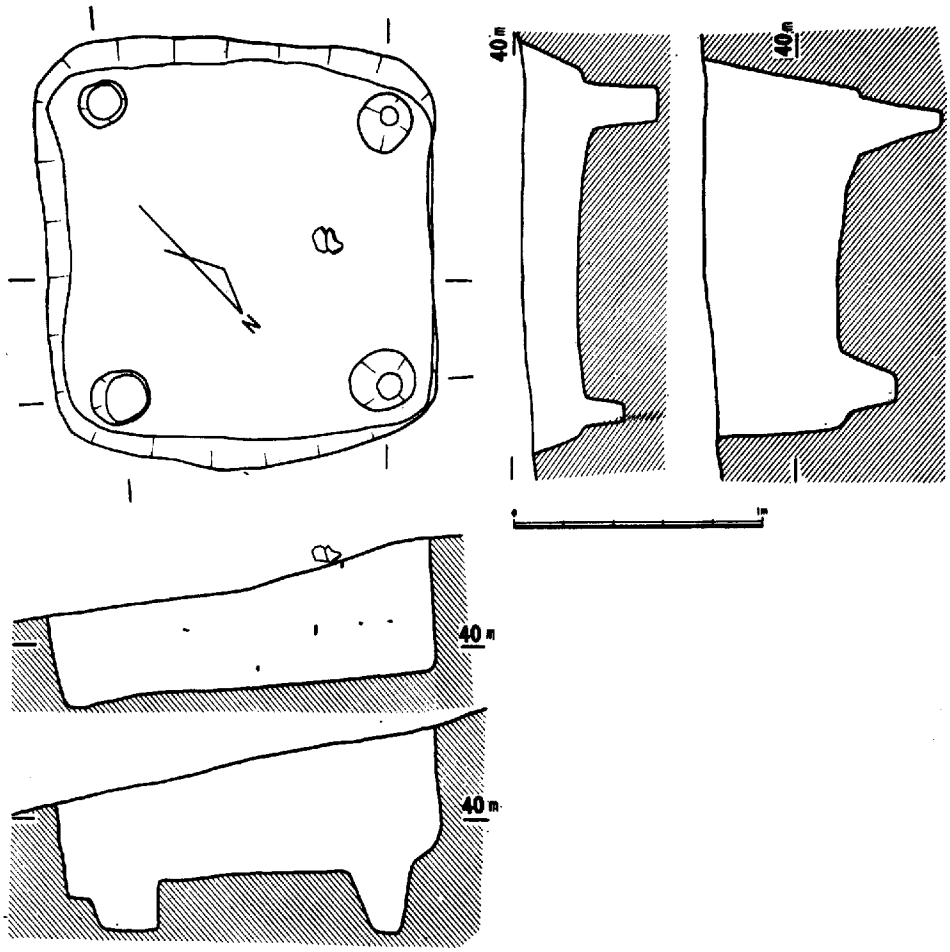
第63図　土　　壙　2

約1.5㎥ある。四隅に柱穴と思われる，直径20㎝前後の円形ピットがあり，これらは深さ20～30㎝を残す。埋土中に少量の土器片が含まれる。埋土は分層できない。

底部（1・3）は，安定した平底をしており，外面は，縦方向のヘラなでが施される。器台形土器（2）は，口縁部が出土しており，口唇端部はヘラで整形される。高杯形土器（4）は，脚端部が外に張り出し，脚部にはくし描き沈線が巡らされる。



第64図　土　壙　3　出　土　遺　物



第65図　土　　壙　3

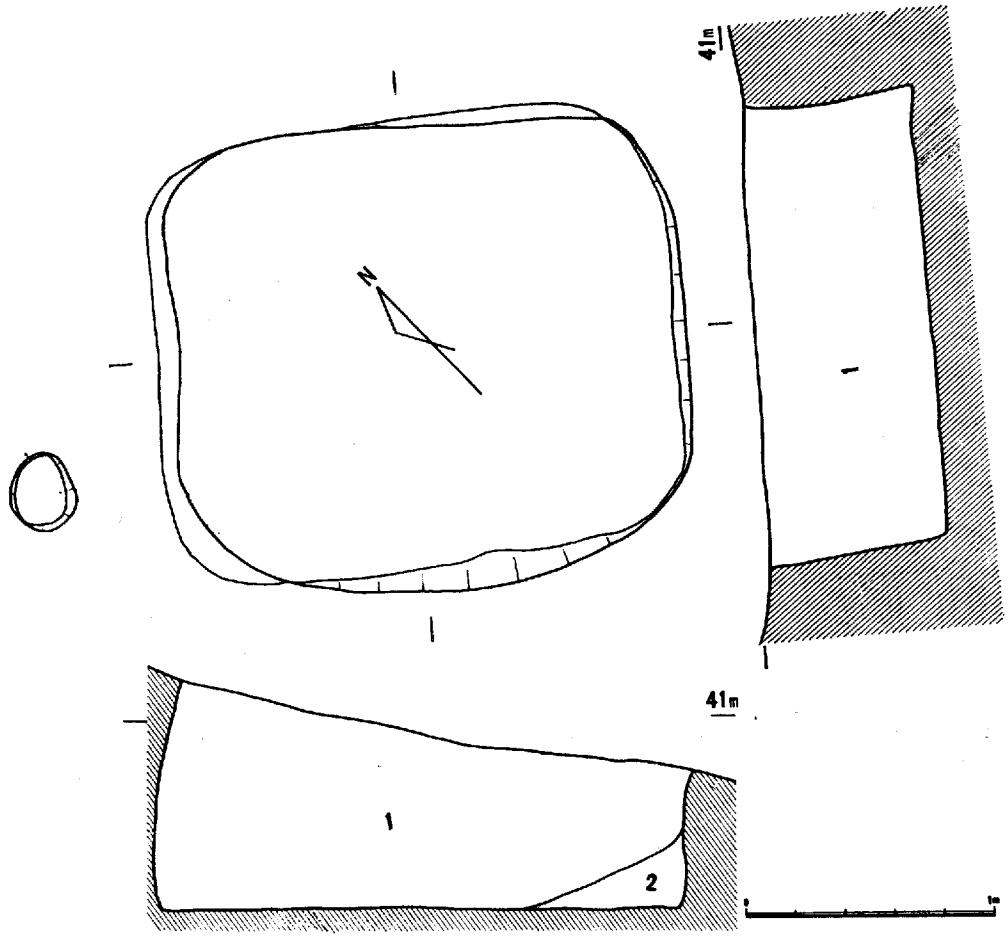
土　　壙　4（66図）

G５H区にある隅丸方形の土壙である。長辺2.1m，短辺1.9m，現存深0.9mを測り，現存容積は約3.6m³ある。やや袋状を呈する。内部には，なんら工夫はみられないが，西側に径30cmの円形ピットがある。

土　　壙　5（第67図）

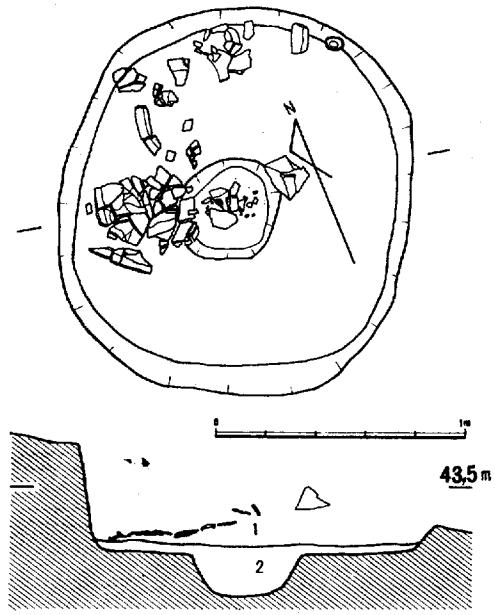
G５K区にある，丸みをおびた隅丸方形の土壙である。一辺1.4m，現存の深さ45cmを測る。中央部に直径40cmの円形ピットがある。埋土は２層に分かれ，２層は粘質土である。床面上に，土器があり，まざって砂岩礫もみられる。

土器には大形鉢形土器，台付鉢形土器・蓋（フタ）形土器がある。大形鉢形土器は，外面がハケで整形されている。蓋形土器は棒状のつまみがついている。



第66図　土　　壙　4

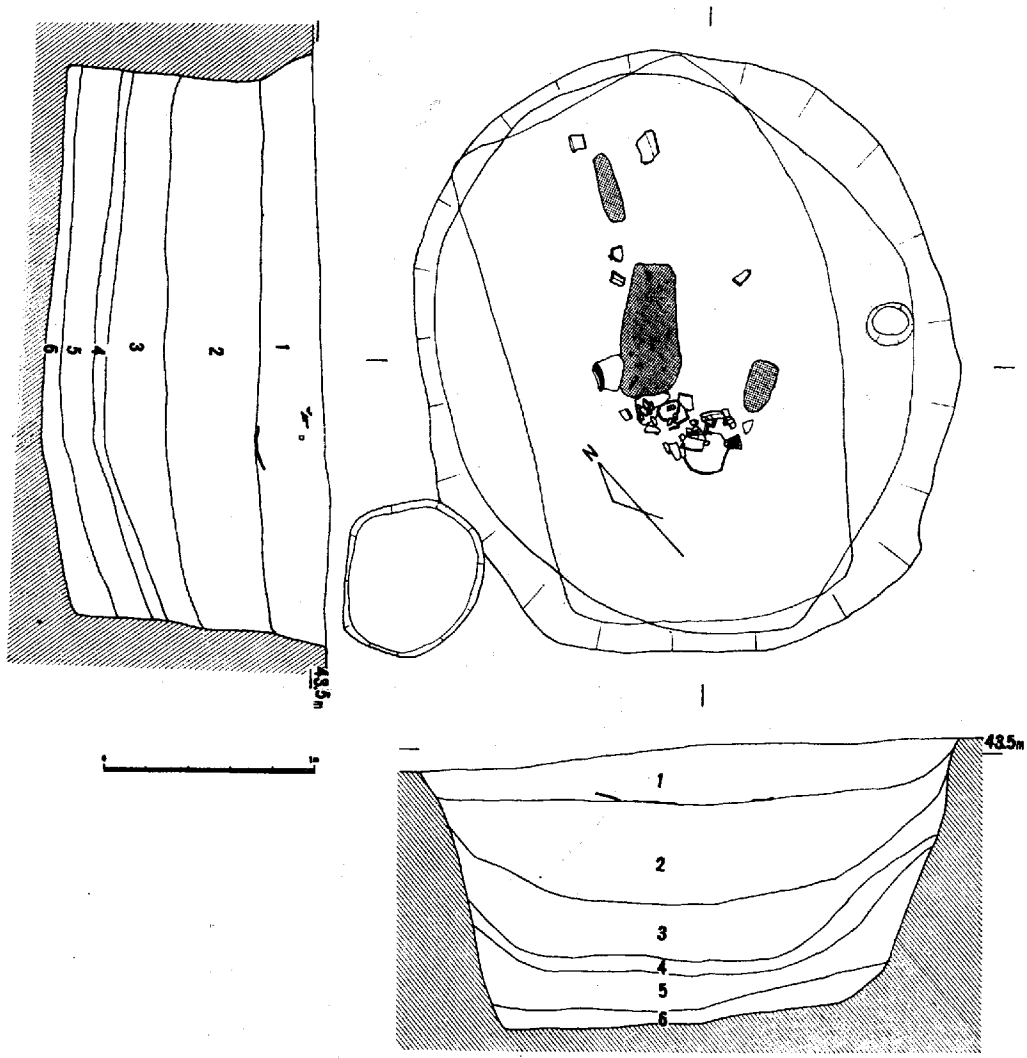
第67図　土　　壙　5



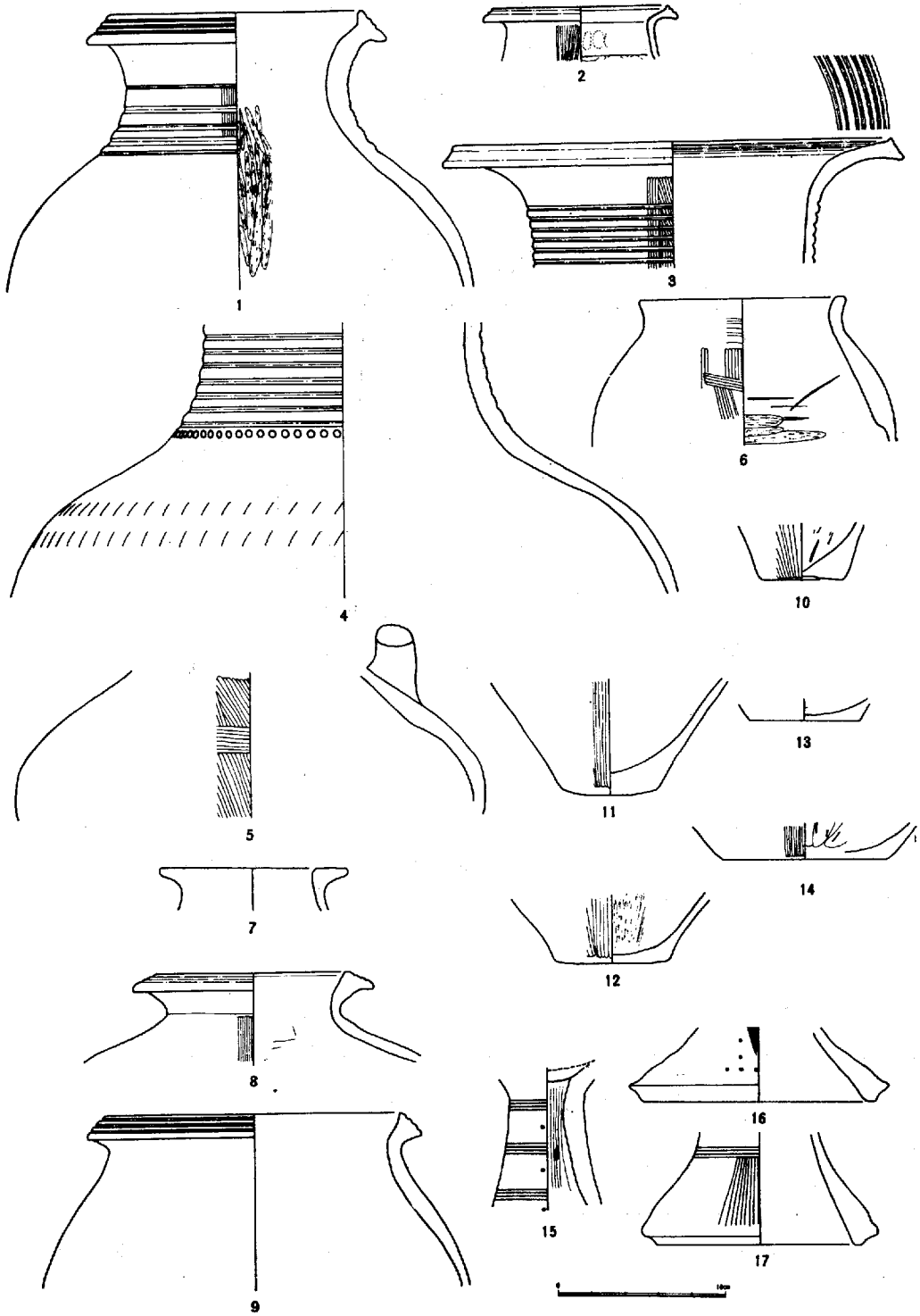
土　　壙　6（第68図・第69図）

２Ｊ区にある，上面が楕円形，底が長方形を呈する土壙である。上部では長径2.7*m*，短径2.5*m*を測り，底では長辺2.4*m*，短辺1.5*m*を測る。深さは1.35*m*と，この種の穴ではもっとも深い。土層は，６層が認められ，下層においてはほとんどに花崗岩風化土が含まれる。下層にも，少量の土器細片はみられるが，多くの土器は１層床面より出土している。１層の床面には，土器の他に焼土もみられ，円形を呈するのは１層だけである。東辺中央部には，径20*cm*の円形ピットが深い位置にみられる。

遺物は土器のみである。壺形土器の頸部は，凹線がめぐらされ，ハの字に広がる。竹管文もみられ，口唇内面に凹線のほどこされるものもある。内面ヘラ削りは，頸部までである。高杯形土器の筒部の沈線は，くし描きとなる。



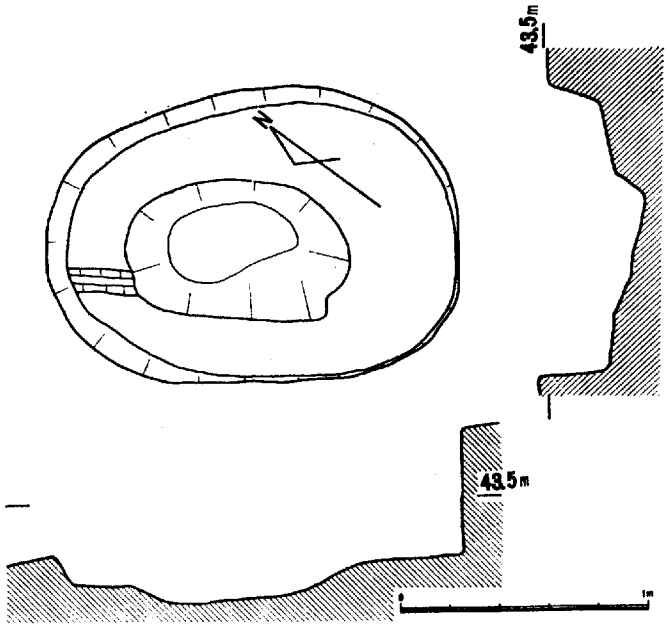
第68図　土　　壙　6



第69図 土 壙 6 出 土 遺 物

土　　壙　7（第70図）

G２M区にある楕円形の土壙である。長径1.65m，短径1.15m，現在の深さ0.5mを測り，現在の容積は0.9m³ある。中央に長径90cm，短径60cm，深さ15cmの深い楕円形をした穴がある。また北側には，壁から中央穴へ向かって，幅10cmの浅い溝状遺構がみられる。



第70図　土　　壙　7

土　　壙　8（第71図）

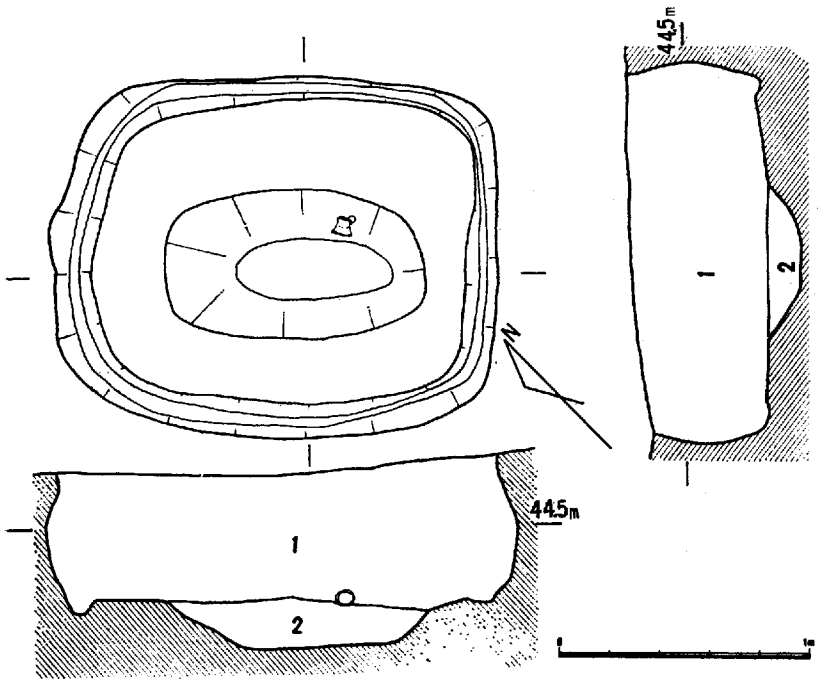
G３N区にある隅丸方形の土壙である。長辺1.75m，短辺1.45m，現存の深さ0.5mを測り，袋状を呈し壁構が壁に沿って巡っている。中央部には，長径105cm，短径60cm，深さ13cmを測る，だ円形をした穴がある。この穴の中には，炭など含む青灰色粘質土が埋まっており，上部の埋土である褐色細砂と境を示す。

土　　壙　9（第72図）

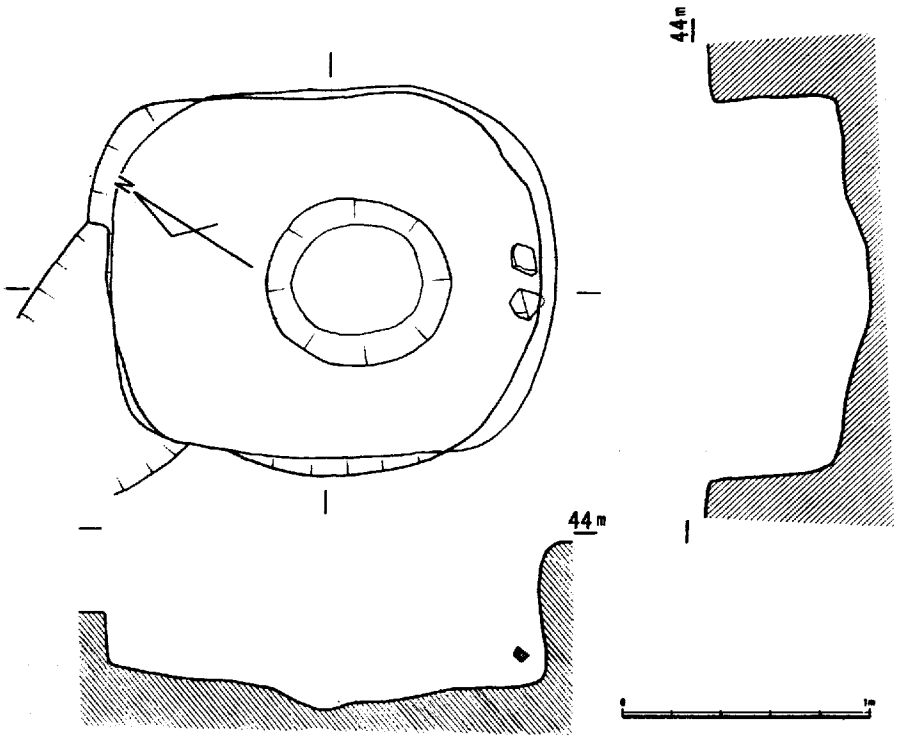
G３N区にある隅丸方形の土壙である。長辺1.75m，短辺1.5m，現在の深さ0.55mを測り，袋状を呈する。中央に径70cm，深さ10cmの浅い円形をした穴がある。南側には人頭大の礫が２個並んでいる。

土　　壙　10（第73図・第74図）

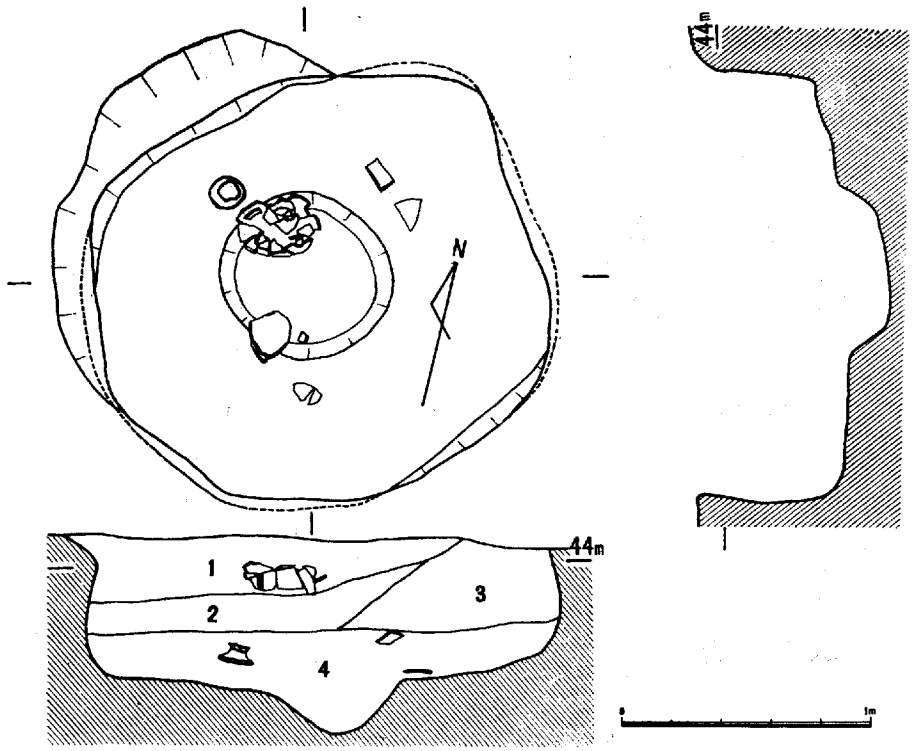
G４P区にある円形の土壙である。径1.7m，現存の深さ0.6mを測り，袋状を呈する。袋部の最大径は1.9mある。中央には，径70cm，深さ20cmを測る円形の穴がある。埋土は，４層に分かれ，４層が淡灰色土，３層が地山風化土，２層が炭化物を含む灰色土，１層が黄褐色土である。１～３層は，４層が埋まったあと，推積している。



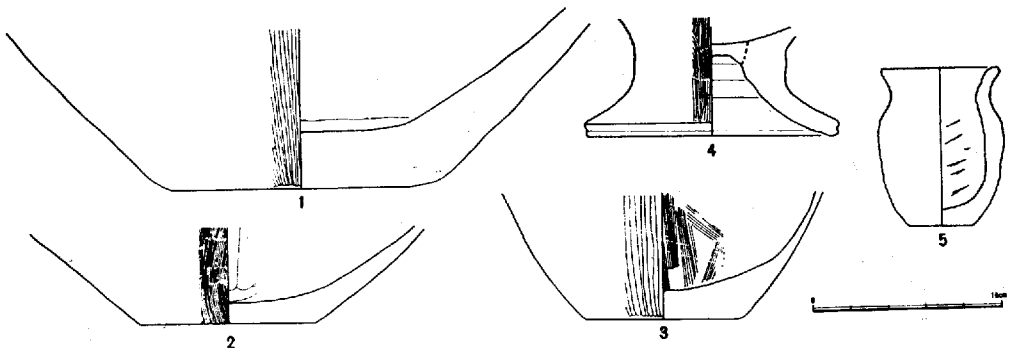
第71図　土　　墳　8



第72図　土　　墳　9



第73図 土　　壙　10

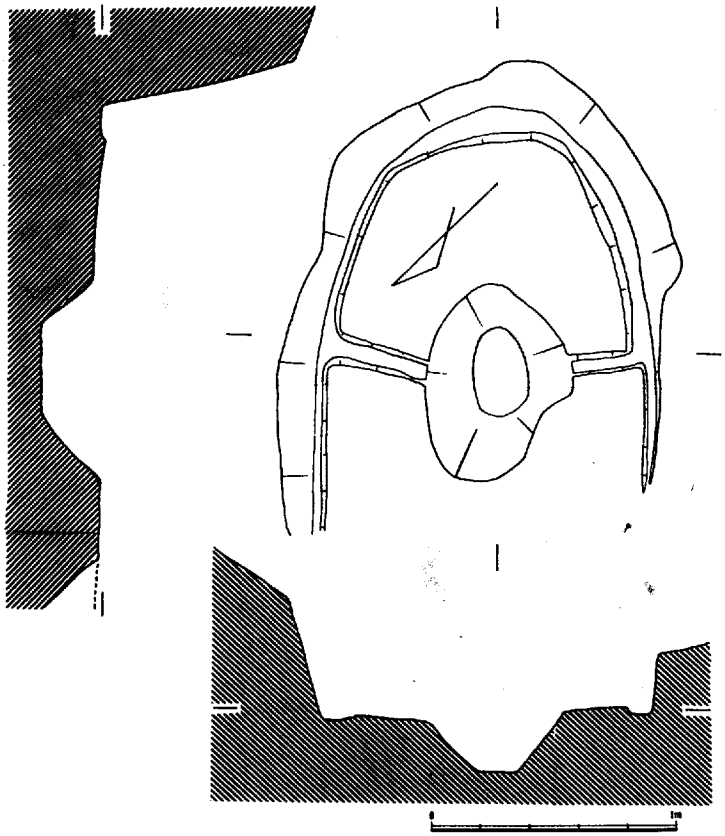


第74図 土 壙 10 出 土 遺 物

土器は，浮いた状態で出土している。底部（1～4）には，平底のものと，台のつくものとがある。小形の甕形土器（5）は完形品である。

土　　壙 11（第75図）

G２O区にある，楕円形をした土壙で，20号住居址より先行する。北側が斜面のために，消失している。長径2.6*m*，短径1.55*m*，現存の深さ0.8*m*を測る。中央には，長径80*cm*，短径60*cm*，深さ25*cm*の楕円形をした穴がある。壁に沿って，幅15*cm*，深さ２*cm*の溝状遺構が巡っており，東と西から中央の穴に続いている。

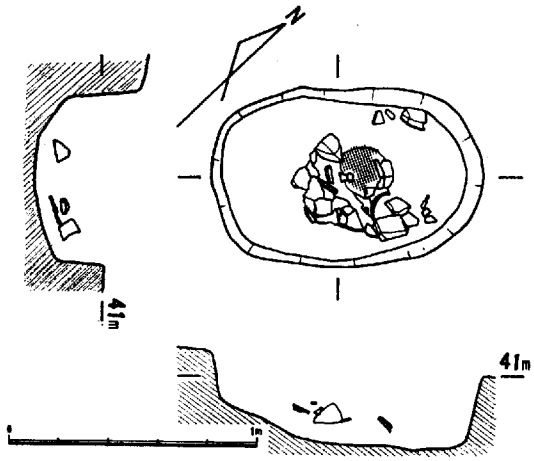


第75図　土　　壙　11

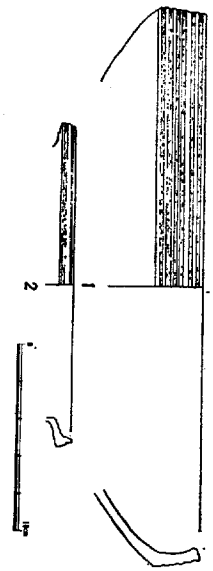
土　　壙　12（第76図・第77図）

Ｇ６Ｎ区にある楕円形の土壙である。長径1.1*m*，短径0.7*m*，現存の深さ0.45*m*を測り，底面は東に向かってゆるやかに下降している。底面に近く土器が散らばり，その上に人頭大の礫および焼土などがおおっている。

甕形土器・高杯形土器が出土している。



第76図　土　　壙　12



第77図　土壙12出土遺物

4 鍛　治　炉 （第78図）

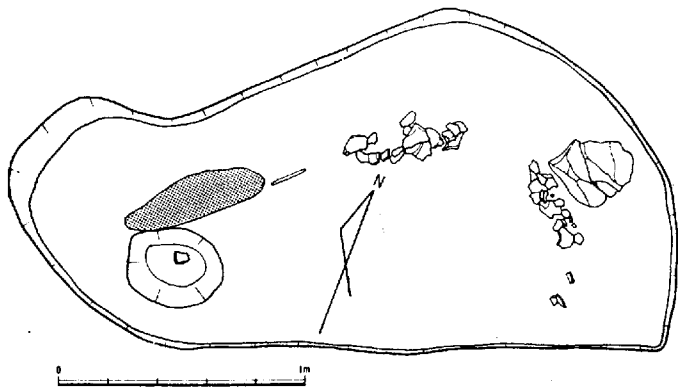
G５F区に，楕円形をした深さ５㎝の浅いピットがある。長径270㎝，短径130㎝を測り，内部には多量の鉄鉱石と３個の囲まっている礫（砂岩）を含んでいる。また，中央部には，幅20㎝，長さ60㎝の広さに焼土面がみられ，その横に棒状の鉄製品が出土した。鉄製品の他に若干の磨滅した弥生式土器が出土した。

鉄鉱石は俗に沼鉄と称される褐鉄鉱石で，個体により鉄含有率に差異がみられる。これらのうち，多く含まれているとみられるもの及び，少量含まれているとみられるものの２個について岡山県立工業試験場で，定性分析及び，定量分析をした。定量分析の結果は表１の通りである。鉄製品は長さ15㎝，直径１㎝の細い棒状のものである。

以上のことから，このピットは鍛治炉の可能性が考えられる。年代については出土土器からは，弥生時代中期末と思われるが，細片であり，断定しがたい。

表１　鉄鉱石の定量分析　　（佐藤による）

	lg loss	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	CaO	MgO	As_2O_3	tiO_2	Na_2O	K_2O
試料１	18.10	3.22	0.65	77.00	none	0.56	0.10	0.01	0.12	0.20
試料２	7.97	50.60	4.76	28.89	2.53	1.21	0.20	0.03	0.12	2.35



第78図　鍛　治　炉

5 建　　物

歴史時代の遺構として２棟の建物と，その背後に連なる杭列とがある。建物はＧ８Ｇ区・Ｇ８Ｆ区・Ｇ８Ｅ区に２棟が接近して存在する。杭列は遺物をほとんど含まず，時期の認定が不明確だが，規則的に並ぶこと，時たま須恵器を含むことから考え，建物群の時期に並行するものと思われる。この杭列はＧ３Ｆ層から，ヤケ池堤防に向かって延びており，杭の直径15㎝～25㎝を測る。

建　　物　１（第80図）

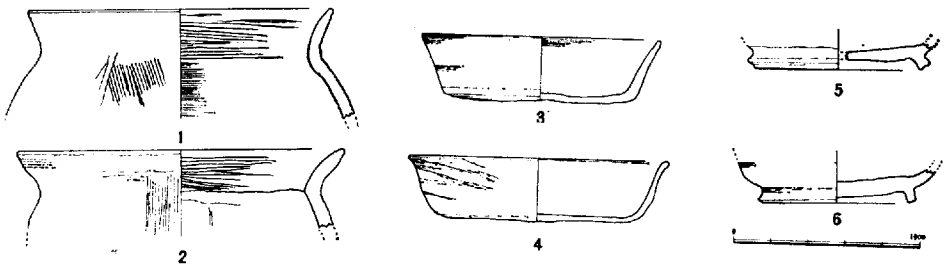
Ｇ８Ｇ区にある２間×２間の建物で，Ｎ50°Ｅに，棟方向をもつ。立ち腐れの状況を残しており，直径約25㎝の柱痕跡を残す。柱間は次の通りである。P_1—P_2，1.5ｍ，P_2—P_3，1.5ｍ，P_3—P_4 2.65ｍ，P_4～P_5，1.85ｍ，P_5—P_6，1.9ｍ，P_6—P_7，1.5ｍ，P_7—P_8，2.1ｍ，P_8—P_1，2.1ｍ。柱の並びは整然としておらず，桁行の北側が4.2ｍ（約14尺），南側が4.5ｍ（約15尺）ある。梁行は，東側が３ｍ（約10尺），西側が3.4ｍ（約11尺）ある。柱穴の掘方は直径約45㎝の円形，あるいは方形で，深さ40㎝～70㎝を残す。

柱穴内には，少量の土師器片・須恵器片があり，これらは建物２の土器と類似する。したがって，この建物１も８世紀中頃と思われる。

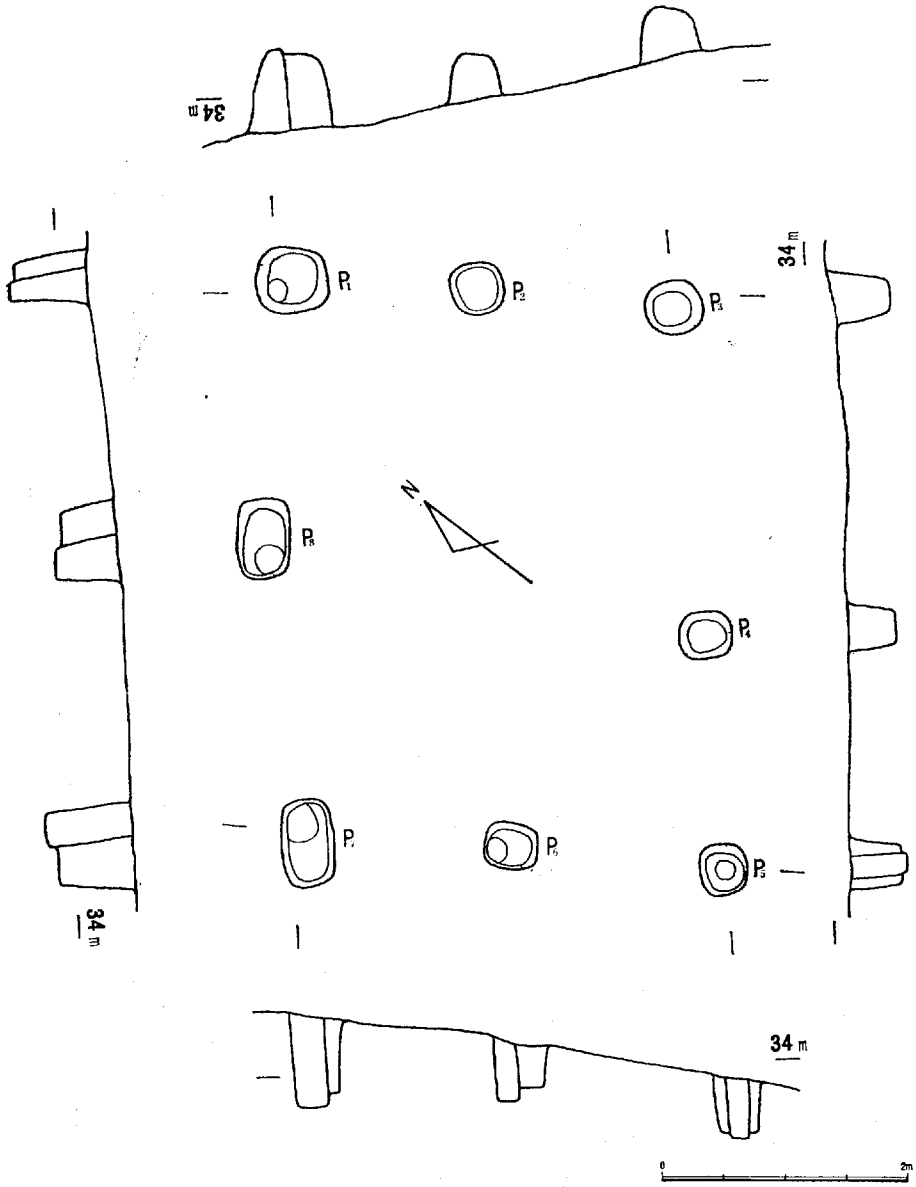
建　　物　２（第79図・第81図）

建物１の西側にある梁行２間×桁行３間の建物で，Ｎ70°Ｅに棟方向をもつ。周囲に幅50㎝，深さ10㎝の雨落溝が巡る。建物の南側は，流出しているが，北側では柱穴が重復しており，建て替えが行われている。雨落溝の巡る建物の柱穴は，P_2，P_5，P_6，P_7，P_3，P_9で構成され，柱間は次の通りである。P_2—P_5，２ｍ，P_5—P_6，1.55ｍ，P_6—P_7—P_8，1.5ｍ，P_8—P_9，1.75ｍ。つまり，梁行が5.5ｍ（約18尺），桁行が3.25ｍ(約11尺）ある。柱穴の掘方は，径約35㎝の円形で，深さ20㎝を残す。雨落溝と柱穴とは1.2ｍ離れている。

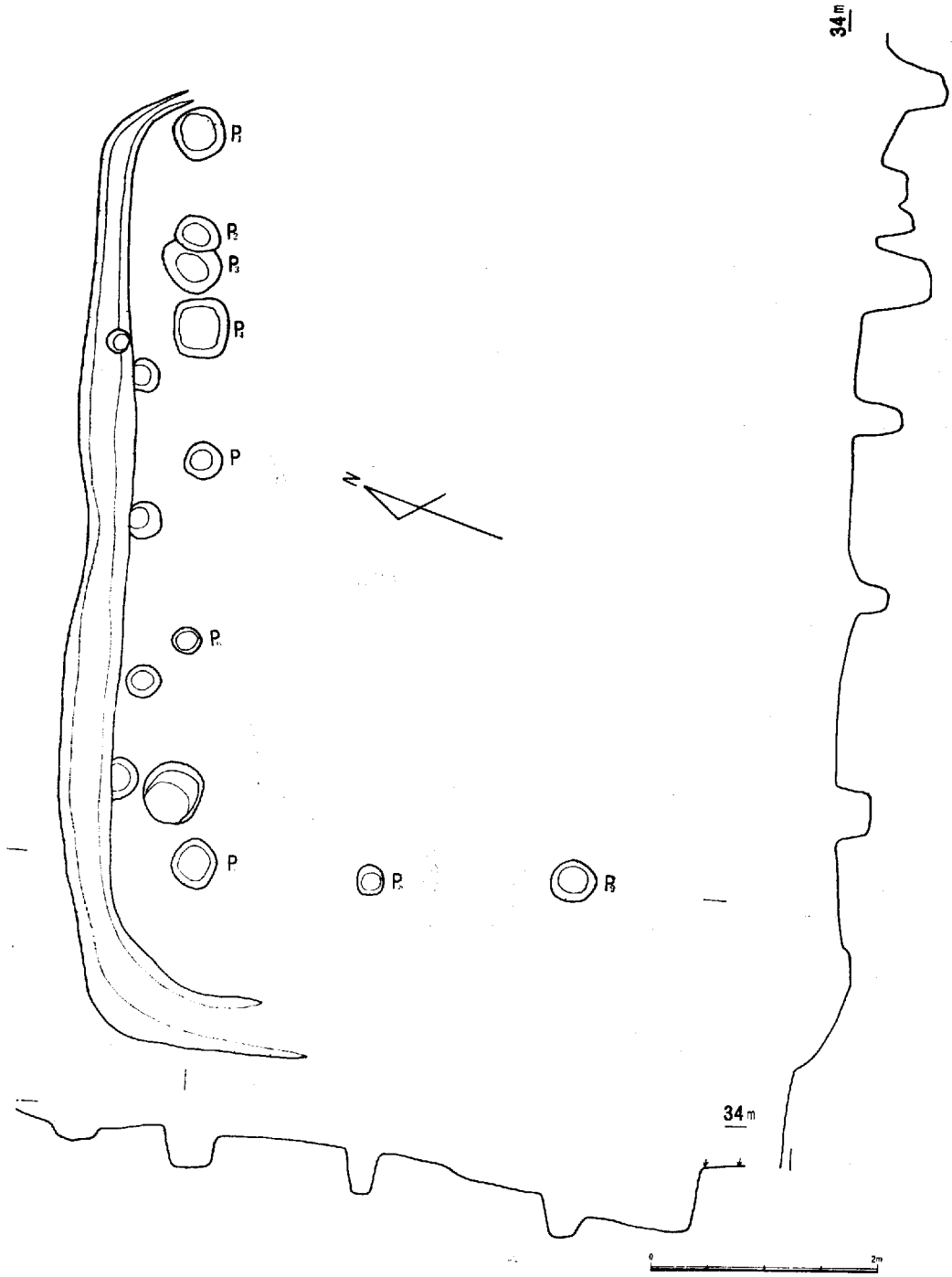
雨落溝内に，少量の土器片がみられる。甕形土器（１・２）は，外反しておわる口縁部をもち，外面は荒いたて方向のハケなでで仕上げられる。坏身には，丹塗り土師器(4)と須恵器（３・５・６）があり５・６は付高台のものである。これらは，８世紀中頃のものと思われる。



第79図　建　物　２　出　土　遺　物



第80図　建　　物　1



第81図　建　　物　2

6　保存区域のトレンチ調査

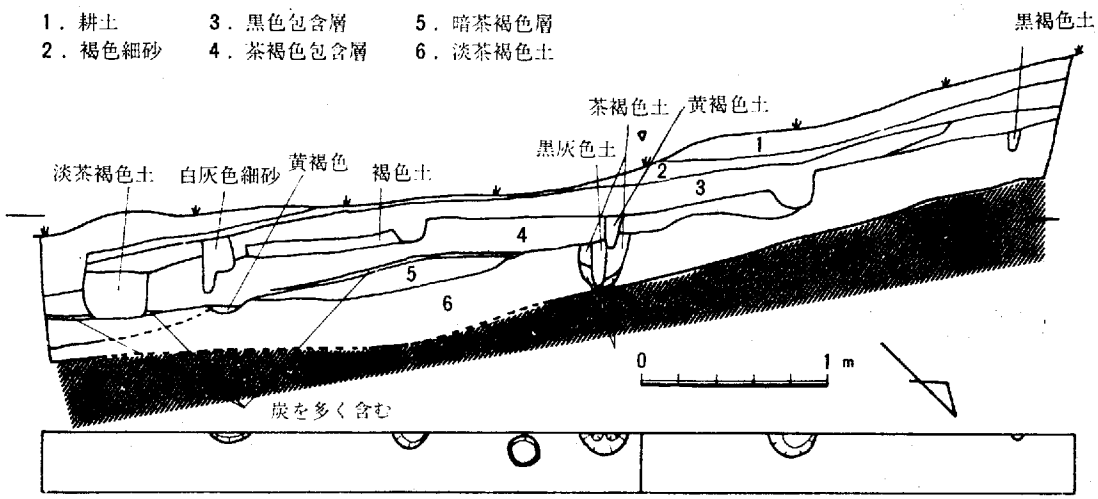
ヤケ池周辺に厚い包含層の存在することは，昭和44年に行われた予備調査でわかっていたが，その後，保存の問題が生じてきたため，再度，第２地点の調査と並行してトレンチ調査を行った（第２図）。

トレンチ調査は，予備調査土器溜りの南にあたる，７Ｐ区および８Ｐ区の南側に，幅約80㎝のトレンチを掘り，その断面を観察した（第62図）。トレンチは原則として，地山を確認するところまで掘り下げたが，東側では，掘り下げが不可能となったために，東端の坪掘りで地山を確認し，推定した。

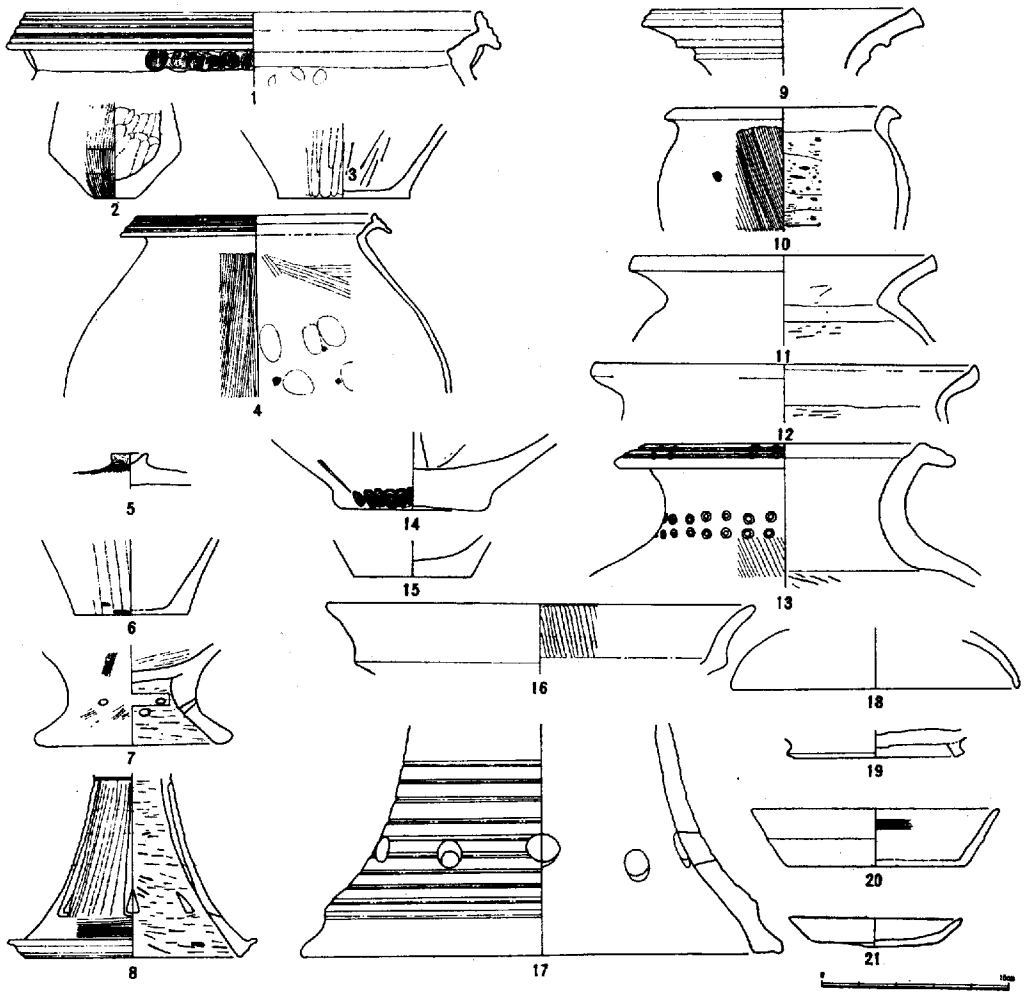
地山は，東に向けて，かなりの角度で下降している。Ⅳ層は，マンガン粒を多く含む淡茶褐色土であるが，無遺物層である。Ⅴ層（茶褐色土）は東側にのみ確認され，頸部に張り付け突帯をもつ甕形土器(1)，小形の甕形土器(2)，内面がたて方向のヘラ削りである底部(3)などを含む。Ⅳ層（褐茶褐色土）には土器がみられ，包含層をつくっている。口唇部が上下に大きく拡張し，ここに凹線が施される甕形土器(4)がⅣ層から出土している。この下には，径50～60㎝のピットが２個あり，ピット４内の土器，あるいはⅣ層・Ⅴ層内の土器から考えると，Ⅳ層下部は弥生時代中期末の生活面らしい。Ⅲ層は土器を多量に含む黒色を呈する包含層である。この層を分層することは，むずかしいが，下半分には中期末と思われる土器（５～８）があり，上半分には須恵器（18～20）・灯明皿(21)もみられる。土器のほとんどは弥生時代後期に属する(10～17)が，中期中葉のもの(9)も含まれている。予備調査で確認された土器溜りはこの層の中間あるいは下部に相当するのではなかろうか。この層は，焼土・炭を多く含み，非常に固い。この下には径20㎝～60㎝のピットが断面に３個，トレンチ１個，確認され，これが，土器溜りの時期からみて，弥生時代後期の生活面と思われる。Ⅱ層は褐色細砂で，Ⅰ層は耕土である。

以上断面でみる限り，この周辺は，ヤケ池の方向に開く谷頭に位置し，厚い包含層を形成している。また，トレンチ内におけるピットの存在あるいは，山陽団地内の他地点の様相などから考えると，周辺には，少なくとも２時期にわたる住居などの遺構が残されているものと思われる。

その後，調査の結果をもって，住宅課と折衝を重ねた結果，ヤケ池北端の提防までは，保存されることになった。



第82図　トレンチ平面・断面図　（縮尺1/100）



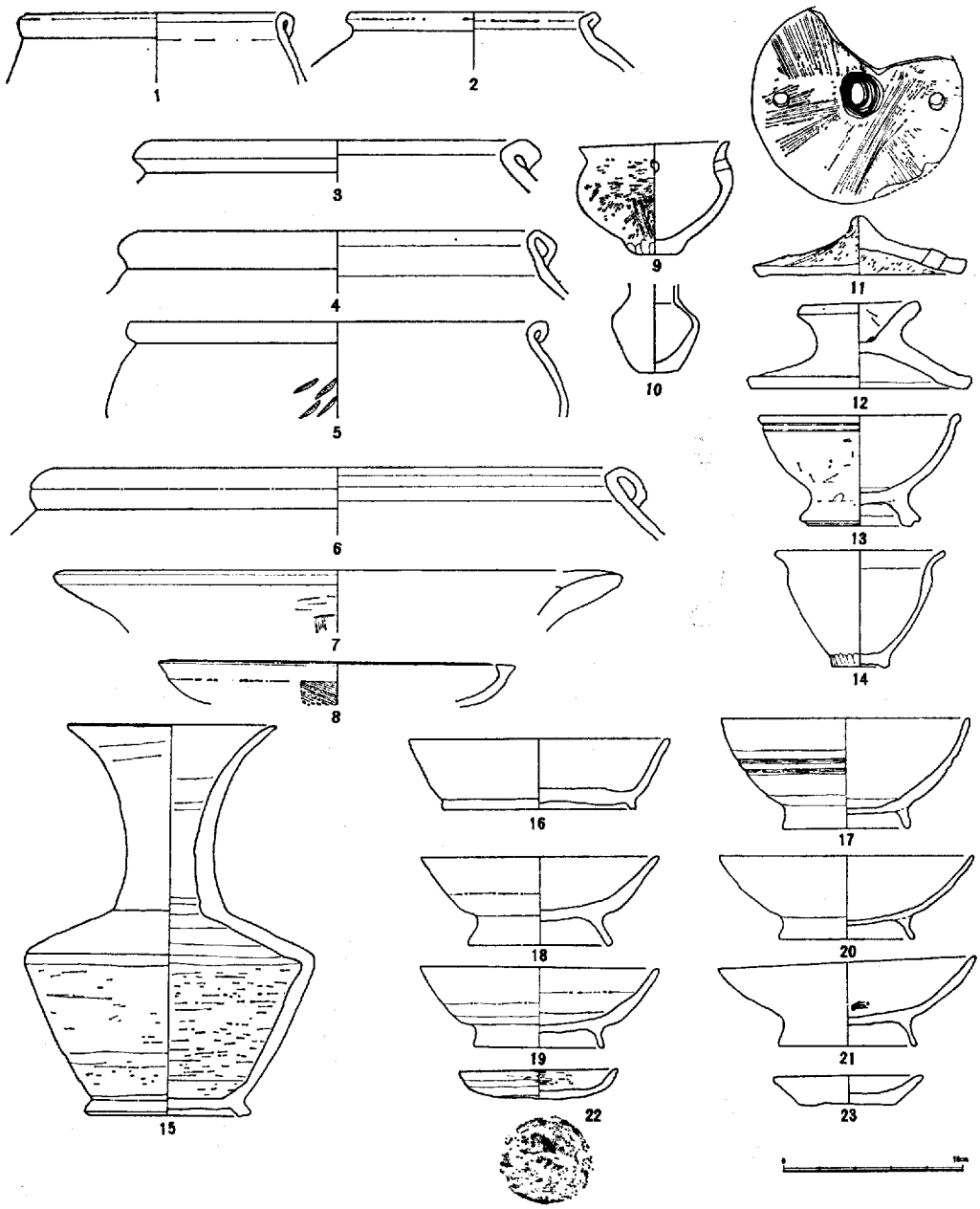
第83図　トレンチ出土遺物

7 遺　　物

遺構に伴わない多量の遺物があるが，ここではそれらのうち，特殊な遺物について説明したい。

（1） 土　　器（第84図）

包含層より多量の土器が出土している。弥生式土器は，折り曲げ口縁をもつ土器（1～6），上面が磨かれた土器(7)，I類に先行すると思われる土器(8)，完形に近い土器（9～14）を紹介した。須恵



第84図　土　　器　（縮尺1/4）

器（15・16）・土師器（17～23）の多くは，Ｇ８区周辺より出土している。（18・19）および（20・21）は，それぞれ，２個体が１組になって出土している。

（２）石　　器

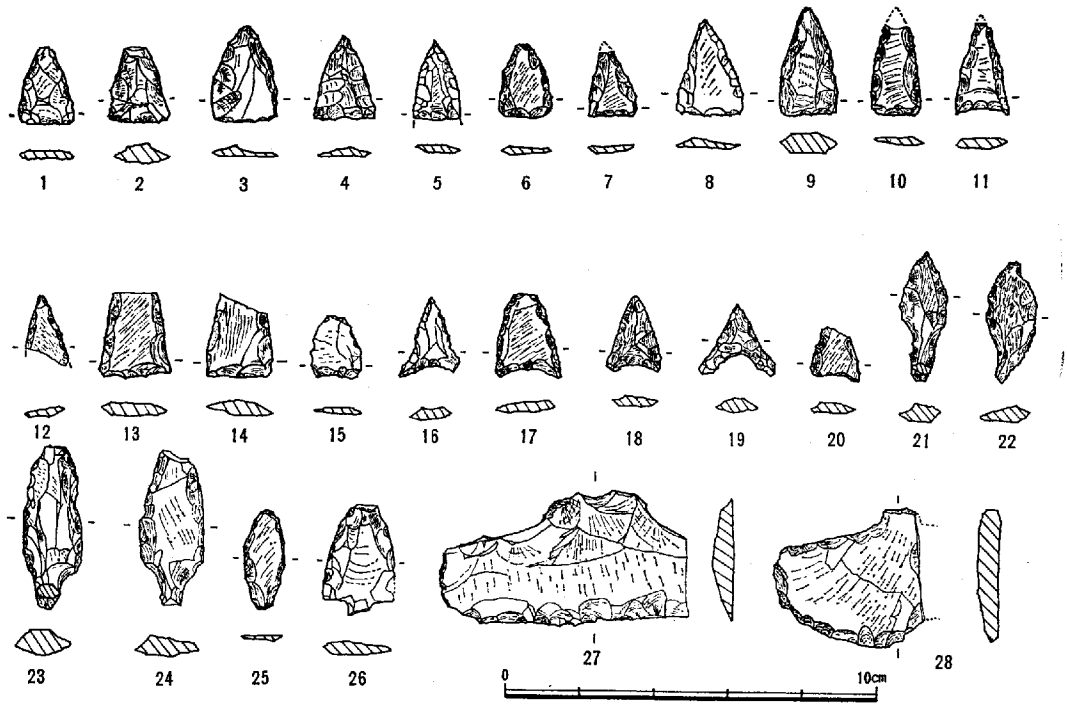
多量の石器・剥片が出土した。それらの多くはサヌカイト製である。遺構に伴うものは少なく，ほとんどが包含層あるいは表土からの出土である。打製石器として石鏃・石匙・石庖丁・石鎌・片刃石器があり，磨製石器として石庖丁・叩き石・分銅形石製品・石斧・砥石がある。

①　石　　鏃（第85図）

44本のサヌカイトを原材とする打製石鏃が出土しており，遺構に伴なうものは８本だけである。佐原真氏の分類にしたがうと平基式（Ⅰ類）・凹基式（Ⅱ類）・凸基無茎式（Ⅲ類）・凹基有茎式（Ⅳ類）の４類に分けられるが，それらの割合はⅠ類52%，Ⅱ類24%Ⅲ類２２%Ⅳ類２%となる。それらの長さ・幅・重量は表２に示した。

②　石　　匙（第85図）

16号住居址の埋土中にあったもので横形である。表面のみ２次加工がされ，裏面は刃部に簡単な剥離がみられるのみで，主要剥離面をほとんど残している。つまみの打撃も片方からのみほどこされている。



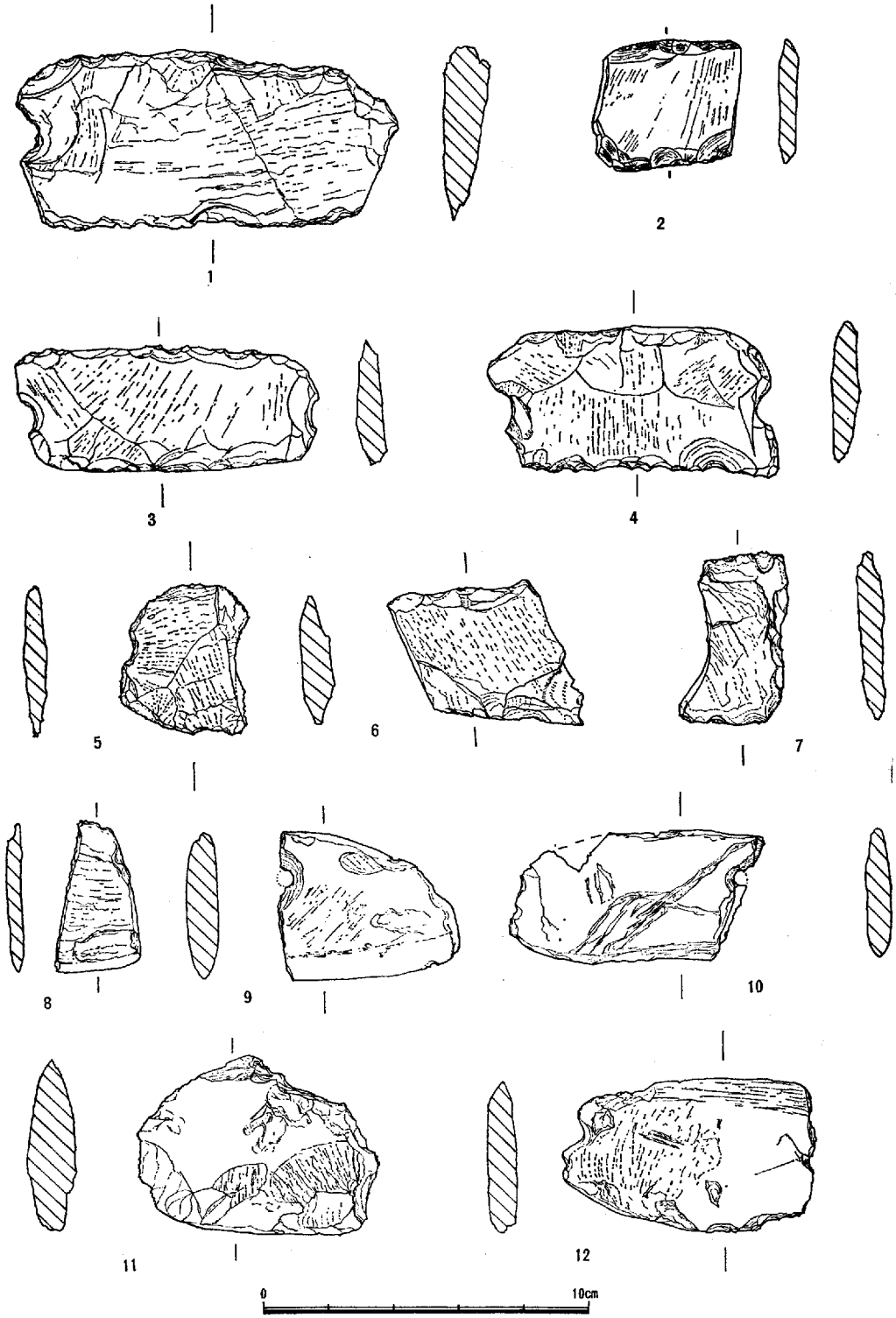
第85図　石　鏃　・　石　匙　（縮尺1/2）

表2　石鏃計測表

番号	図番	出土地点	類	長さmm	最大巾mm	重さg	備考	番号	図番	出土地点	類	長さmm	最大巾mm	重さg	備考
1	1	9号住居址柱穴	Ⅰ	20	15	1.2		25		不明	Ⅰ	30	17	1.3	
2	2	土壙6	〃	20+α	16	1.5	欠	26		6G表土	Ⅱ	17	14	0.6	
3	3	7F表土	〃	25	17	1.7		27	16	25号住居址	〃	21	17	0.7	
4	4	〃	〃	22	16	1.1		23	17	5H表土	〃	23	17	1.4	
5	5	〃	〃	21	12	0.8		29	18	6G表土	〃	20	14	0.7	
6	6	不明	〃	20	14	0.8		30	19	12号住居址	〃	19	20	0.7	
7	7	6F表土	〃	17+α	13	0.9	欠	31	20	6H表土	〃	14+α	13	0.6	欠
8	8	不明	〃	26	18	1.4		32		6F－P－4	〃	20	19	1.1	
9	9	6H包含層	〃	29	16	2.4		33		6F表土	〃	27	16	1.5	
10	10	6H表土	〃	24+α	13	1.1	欠	34		6G表土	〃	26	19	1.3	
11	11	25号住居址	〃	23+α	14	1.0	欠	35		6H包含	〃	23	18	1.7	
12	12	25号住居址	〃	19+α		0.5	欠	36		不明	〃	36	21	3.3	
13	13	6N－P－4	〃	22+α	19	2.3	欠	37	21	6F包含	Ⅲ	3.4	1.3	1.9	
14	14	24号住居址	〃	22+α	18	1.8	欠	38	22	7P包含	〃	32	13	1.6	
15	15	不明	〃	24	16	2,3		39	23	不明	〃	4.4+α	16	4.4	
16		6F包含	〃	37	16	2.4		40	24	5号住居址表土	〃	4.2+α	18	4.4	
17		5F表土	〃	31	18	2.5		41	25	7E表土	〃	2.6	11	0.9	
18		道路敷	〃	23	14	1.2		42		7F表土	〃	43+α	18	4.3	
19		6G－P－4	〃	32	18	1.6		43		8M表土	〃	27	12	1.5	
20		6F表土	〃	32+α	19	3.0	欠	44		6G包含	〃	49	11	2.7	
21		便木山7号墳丘	〃	23+α	12	1.6	欠	45		便木7号墳丘	〃	43	14	3.1	
22		不明	〃	35	14	1.5		46		6H表土	〃	46	18	2.4	
23		〃	〃	26	16	1.1		47	26	6G包含	Ⅳ	29+α	20	2.5	
24		〃	〃	24	18	1.4									

③　石　庖　丁（第86図）

打製で両短辺にひもかけのくり込みをもつもの（Ⅰ類），磨製で2孔をうがかれたもの（Ⅱ類），磨製で両短辺にひもかけのくり込みをもつもの（Ⅲ類）の3種がある。Ⅰ類は岡山県南部には一般的にみられるもので山陽団地造成地でも他の類より圧倒的に多い。途中から割れているものが多い。また，刃部には使用により丸くなる位磨滅したものが多く，これは片方の辺のみにみられる。くり込みの打撃がはっきりしないものでも使用によりすりへっている。Ⅱ類は4点出土しており，11は未製品である。刃は直となる。石質は他の磨製石器と同じく種々様々である。磨製石包丁は岡山県南部では中期に姿を消すが，ここでは25号住居址(11)にみられるように中期末まで作られている。Ⅲ類は特殊な形をしたもので，形態をⅠ類から，製作法をⅡ類からとっている。刃部の丸い形をしており，宮崎県に多くみられるこの種の磨製石庖丁とは形が異なる。これらのうち，遺構に伴うのは11のみである。(2)



第86図　石　　庖　　丁　（縮尺1/2）

④ 石　　槍（第87図）

16号住居址(2)・18号住居址(3)・23号住居址(1)から一点ずつ出土している。すべてサヌカイト製で剝離は整然としていない。

⑤ 石　　鎌（第87図4）

G 6区より出土したもので，弓なりに曲がっている。先端部を欠く。

⑥ 片 刃 石 器（第87図）

大剝離面を残した剝片の一辺に細かい打撃を加え，刃としたもので使用痕はほとんどみられない。基部にはバルブを残している。(6)が16号住居址，(5)が25号住居址より出土した。

⑦ 叩　き　石（第87図）

土壙10より出土し，6面をもつ柱状のものである。面はていねいに砥いでる。上面には使用痕がみられる。

⑧ 分銅形石製品（第87図）

石錘に似た形態をしているが，打ち欠き部分がいちじるしく磨滅しており，網のおもりとしては考えにくい。表面も磨滅が激しい。はたおりのおもりあるいは民俗例でみられるような繩をあむ時のおもりみたいなものかもしれない。

⑨ 石　　錘（第87図）

河原石の両端を打ち欠いたものである。

⑩ 石　　斧（第88図）

すべて磨製石斧で，小型蛤刃石斧（1・6），柱状蛤刃石斧(2)，太型蛤刃石斧（3・4・7），扁平片刃石斧(5)がある。（1・2）は完形品である。（1）が12号住居址土器溜り下層，（3）が12号住居址土器溜り上層，（6・7）が25号住居址より出土である。

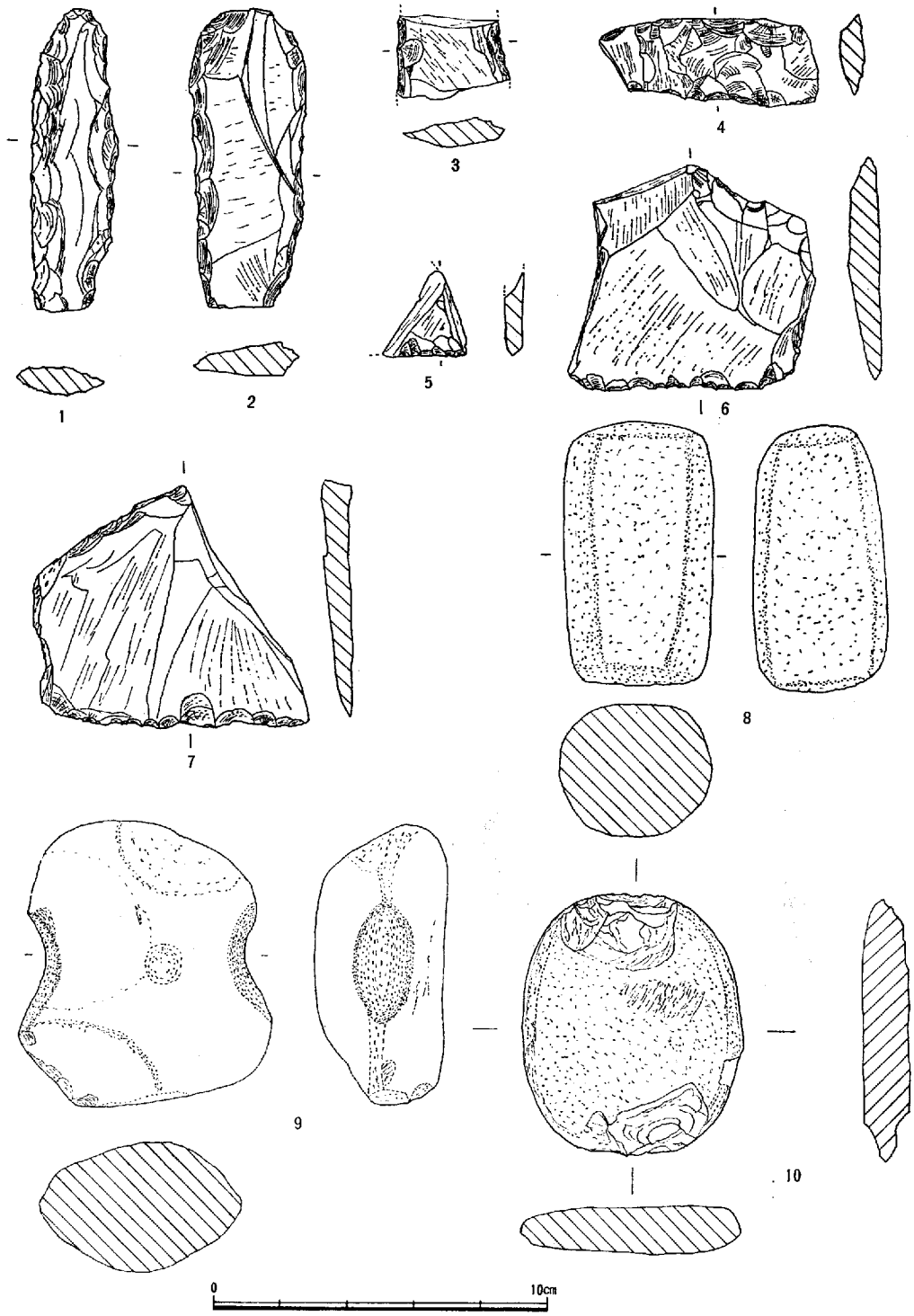
⑪ 砥　　石（第88図）

大小7点の砥石がある。使用によりだいぶ磨りへっているが，特に小型のものはそれがいちじるしい。(9)が土壙2，(12)が13号住居址，(13)が31—P—4から出土している。(14)は両面を使った砥石であるが，その側面にするどい刃物で細い線刻画が彫られている。使用のため全ぼうは不明だが，4本足の動物に矢のささったような絵である。これは大阪府爪生堂遺跡の鹿の絵に類似している。

(3) 土　製　品（第89図）

① 舟 形 土 製 品

へさきのほうが25号住居址，とものほうが24号住居址より出土しているが，色調・焼成度・胎土・大きさなどの比較からして，同一個体と思われる。細かい砂粒胎土で，黄みがかった褐色を呈する。外面・内面ともヘラで削られている。へさきへ近ずくにつれ，狭くなり，とものの端はヘラで切られ直におわる。とものの近くに剝離した部分があり，なんらかの付属物があったものと思われる。川舟の形態をしている。



第87図　石槍・石鎌・片刃石器・叩き石・分銅形石製品・石錘

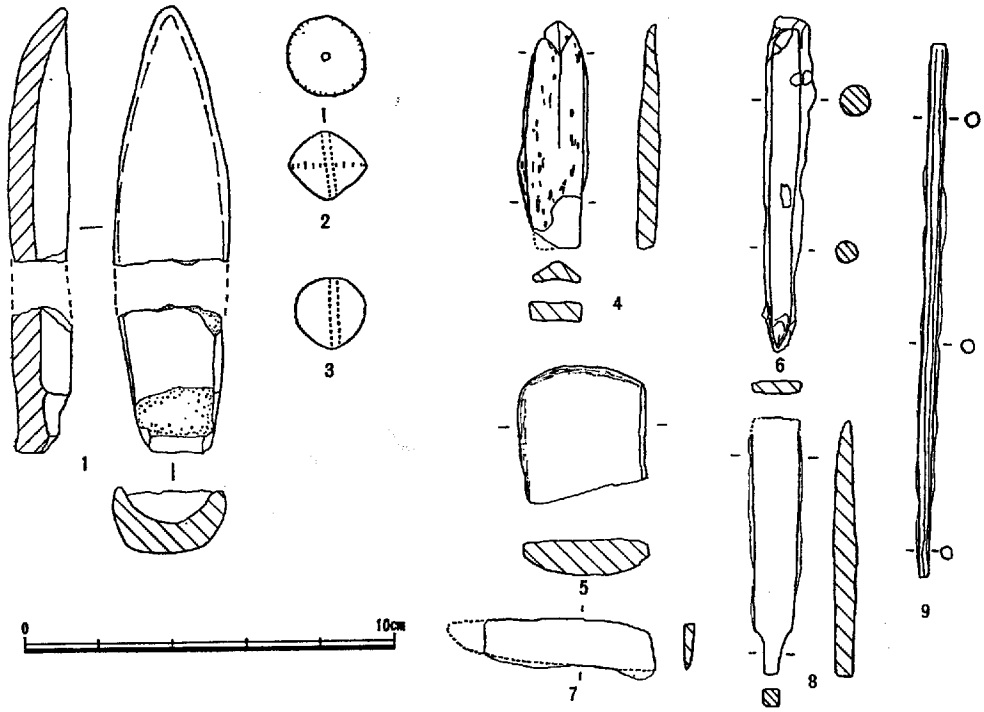
第88図　石　斧　・　砥　石

② 丸　　玉

2が6M—P—2，3が4号住居址より出土している。2は算盤玉様をし，ヘラ押圧痕が最大径の部分にみられる。

(4) 鉄　　器（第89図）

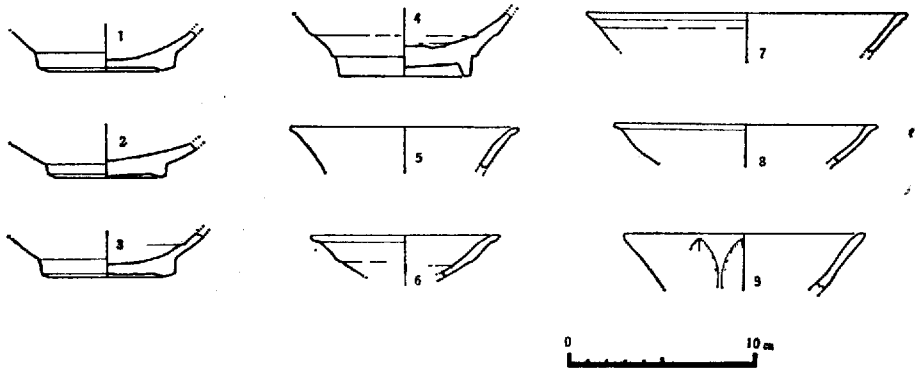
土壙10より鉈（4），6号住居址土器溜りより不明鉄器（5），18号住居址より棒状の鉄器（6），便木山7号墳より刀子（7）と鏃（8），鍛治炉より棒状鉄器（9）が出土している。



第89図　土　製　品・鉄　器

(5) 青　　磁（第90図）

G8F区周辺より出土しており，12世紀頃のものと思われる。　　（池　畑）



第90図　青　　磁

第3章　第3地点の調査

1　第3A地点

この地点は，1次調査で調査がおこなわれた所である。団地内の幹線道路敷のため，すでに，多量の埋土がなされ，また，湧水も多く調査には，余分な時間を要した。今回の調査は，以前の1次調査で，奈良時代の建物で柱穴を7個確認し，南へ延びることを確認していたので，それより南に延びる部分を8m×10m幅で調査したのである。

遺構およびトレンチについて（第91・92図）

1次調査の柱穴列を再確認して，これに関連する部分の検出をしたが，建物に関係したものは検出できず別の建物の柱穴を4個確認したのみである。トレンチによる土層観察をするために地山面まで掘り下げてみると，建物の柱穴の出る面の暗褐色粗砂の包含層は，ゆるく傾斜して，谷で削られた状態になっている。丁度，向側の丘陵との中間部分に位置しており，谷になる部分である。つまり，未調査部分に延びると思われる柱穴列は，削平されて存在しない。

出土遺物（第94図）

この調査区での出土遺物は，第1次調査で出土したものと同じく，弥生式土器片，須恵器及び土師器片などが出土した。ここに図示した遺物については，トレンチ内の最下層の黒色粘土層から出土したものを列記した。ほとんど弥生式土器である。これらの出土遺物に混って，銅鐸形土製品が1点出土した。

（1・4・5）は壺形土器の口縁で，（17～19）は，壺形土器の底部である。ほとんど口縁部には，明瞭な凹線がみられる。(1)については，頸部の長い壺形土器で口縁部に顕著な凹線をめぐらし，その上に竹管文を施している。また，同文様は内面上部にもみられる。(16)は小形の壺形土器である。（9・10・12～15）は，甕形土器で刷毛目，ヘラ磨きが施してあるのが明瞭にみられる。（2・3・21・24～27）は，高杯形土器で(24)については，鋸歯文が二段に施してある脚部である。（11・20・22・23）は鉢類，（6～8）は，器台形土器の口縁，(28)は脚部である。時期別にみると，（1・2）は中でも古く，弥生中期後半のもので，他の壺形土器，甕形土器，器台形土器は，ほとんど後期前半から後半にかけてのものである。甕形土器(15)，高杯形土器（25～27）は，他のものよりも新しく，古墳時代中頃のものと思われる。

銅鐸形土製品（第91図）

この土製品は，建物Vの位置に設定したトレンチの最下層で，地山面に接する黒色粘土層の中から弥生式土器の土器片に混って出土したのである。出土した場所は，門前池の北方に位置する小丘陵の西側の裾部で，現在は谷水田となっている所である。この出土地点より上の斜面では，1次調査で弥生中期末～後期後半および，古墳時代の住居址，弥生時代のピット，奈良時代，平安時代の建物群を検出した。

この銅鐸形土製品は全面黒色を呈しており，焼成は比較的よく，胎土も出土する土器と同質のもの

で，5㎜大の礫も混っている。内面は，ヘラ削りして，ナデが施してある。また，上部は欠損しているが，鈕がついていたあとが明瞭にわかる。現在の高さは，4.9㎝（推定総高，6㎝），身高4.3㎝身，上面（舞）2×1.9㎝，身，下部3.4×2.3㎝，鈕高約5㎜で，上面に二個の舌釣の孔がみられる。また，両側に鰭の双耳と思われるものが上，下二段にある。一方は欠損している。文様は両面に不整形な鋸歯文状の沈線が四条施されている。

銅鐸形土製品は，現在まで全国で9例が報告されている。地域別では，神奈川1，三重1，愛知4，奈良2，岡山1である。[1] [2] [3] [4] [5] 藤原宮の出土例の他は，ほとんどが破片で完形品はない。今回の出土のものは，鈕を欠いている他は，ほとんどが形をととのえている。文様でみると無文の他は袈裟襷文である。ここに報告するものは，不整形な鋸歯文状で，流水文の流れをもつもののように思われる。

（枝　川）

（1）　甘粕健「横浜市稲荷前古墳をめぐる諸問題」考古学研究16巻2号
（2）　真田幸成「鈴鹿市上箕田出土の銅鐸形土製品について」考古学雑誌55巻1号
（3）　吉田富夫「銅鐸形土製品集成」名古屋考古学会会報第3号
（4）　猪熊兼勝「飛鳥・藤原最近出土の遺物」考古学雑誌58巻1号
（5）　杉原荘介編『世界考古学大系』日本Ⅱ

2　第3B地点（第95図）

この調査区は第2地点の丘陵と第6地点の丘陵の間にあり，両丘陵裾部に位置している。現在は谷水田として使用されているところである。この地点については，1次調査，また，門前池の土層断面などでの観察によって広く遺構が広がっている地域として察知されていた。今回の調査の目的は，包含層，遺構面の広がりを確認するための調査である。調査後は埋めもどして保存される地域である。そこで，グリッドと地形に合わせて，幅1.5ｍのトレンチを9本設定した。調査対象地域が広範囲のため，トレンチの全掘はできなかったが，8ｍ間隔で地山面まで掘り下げて，土層断面を観察した。

トレンチ，1（第96図）

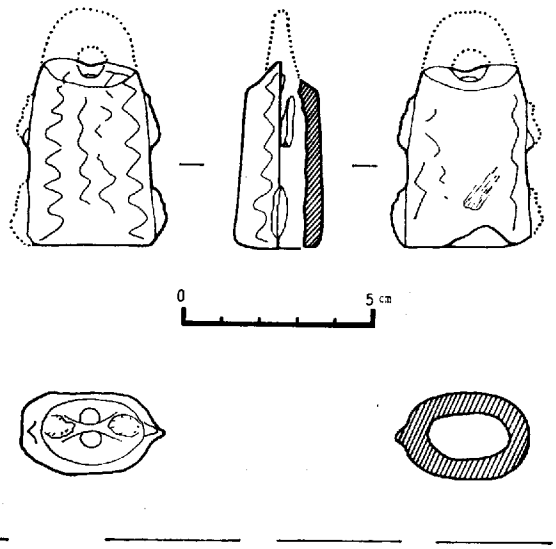
E′—21～G′—21を掘り下げた。このトレンチは，第1次調査で遺構を確認した所の下方の地域で，遺構面の広がりの予想された所である。トレンチ内のG′～21では，柱穴を確認したG′—21 F′—21にかけては，表土下約80㎝で褐色包含層に至る。

出土遺物（第99図）

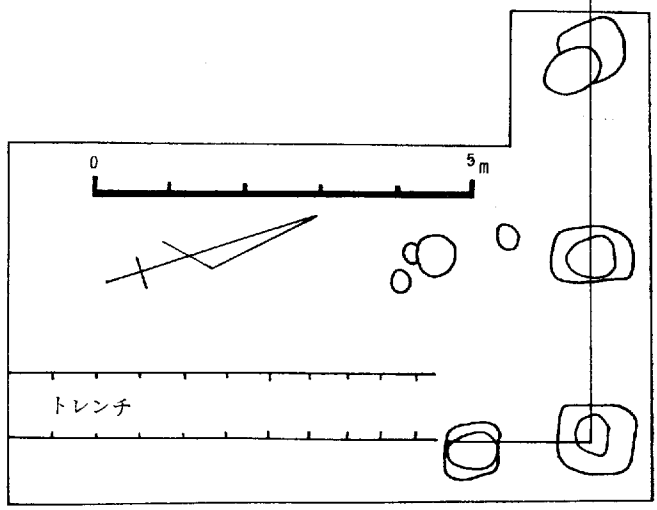
包含層での遺物は次のとおりである。上層では，須恵器の杯（8～11）や，短頸の壺形土器(12)，また，土鍋(13)などが出土する。土鍋は内，外面ともあらい刷毛目が施されている。下層では，弥生中期後半～後期後半の土器片で壺形土器の口縁（1・2），壺形土器の序部（4・5），高杯形土器(3)，鉢形土器(6)と，手づくねの小壺などが出土した。この包含層は，ゆるく傾斜し，Z—21～E′—21にかけては，深く谷になると思われる。

トレンチ，2（第96図）

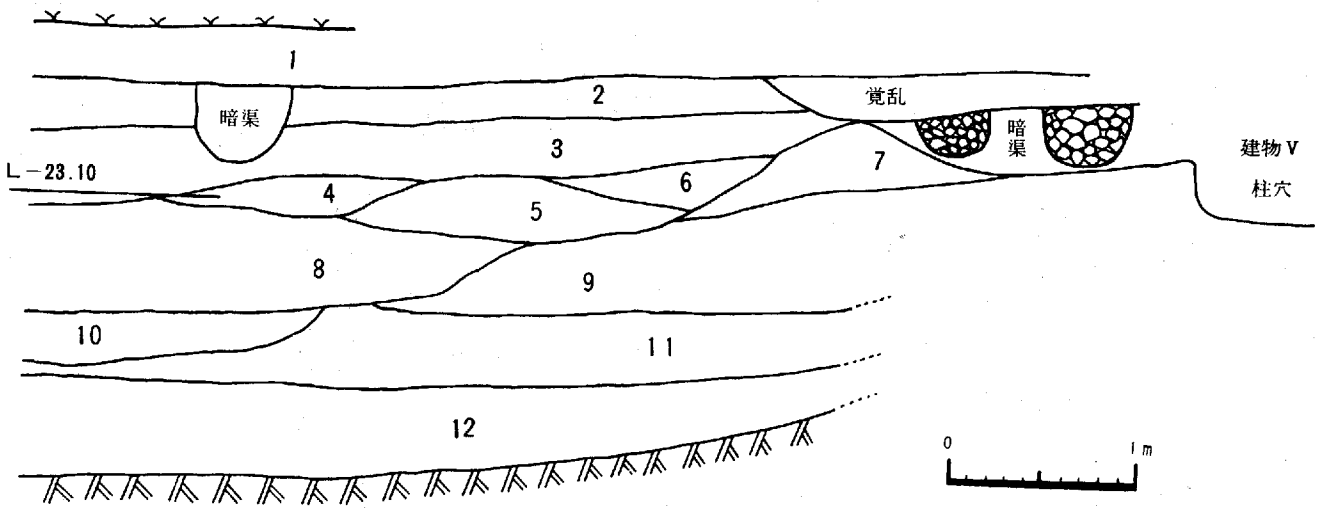
トレンチ2は，トレンチ1を南に延長した。S—21～Y—21にかけてである。V—21～Y—21にかけては，表土下約60㎝～70㎝で，暗褐色包含層になる。池に近い土層は暗青褐色になる。つまり，第6地点の丘陵が，門前池の方向に傾斜する裾の部分にあたる。



第91図　第３Ａ地点出土銅鐸形土製品

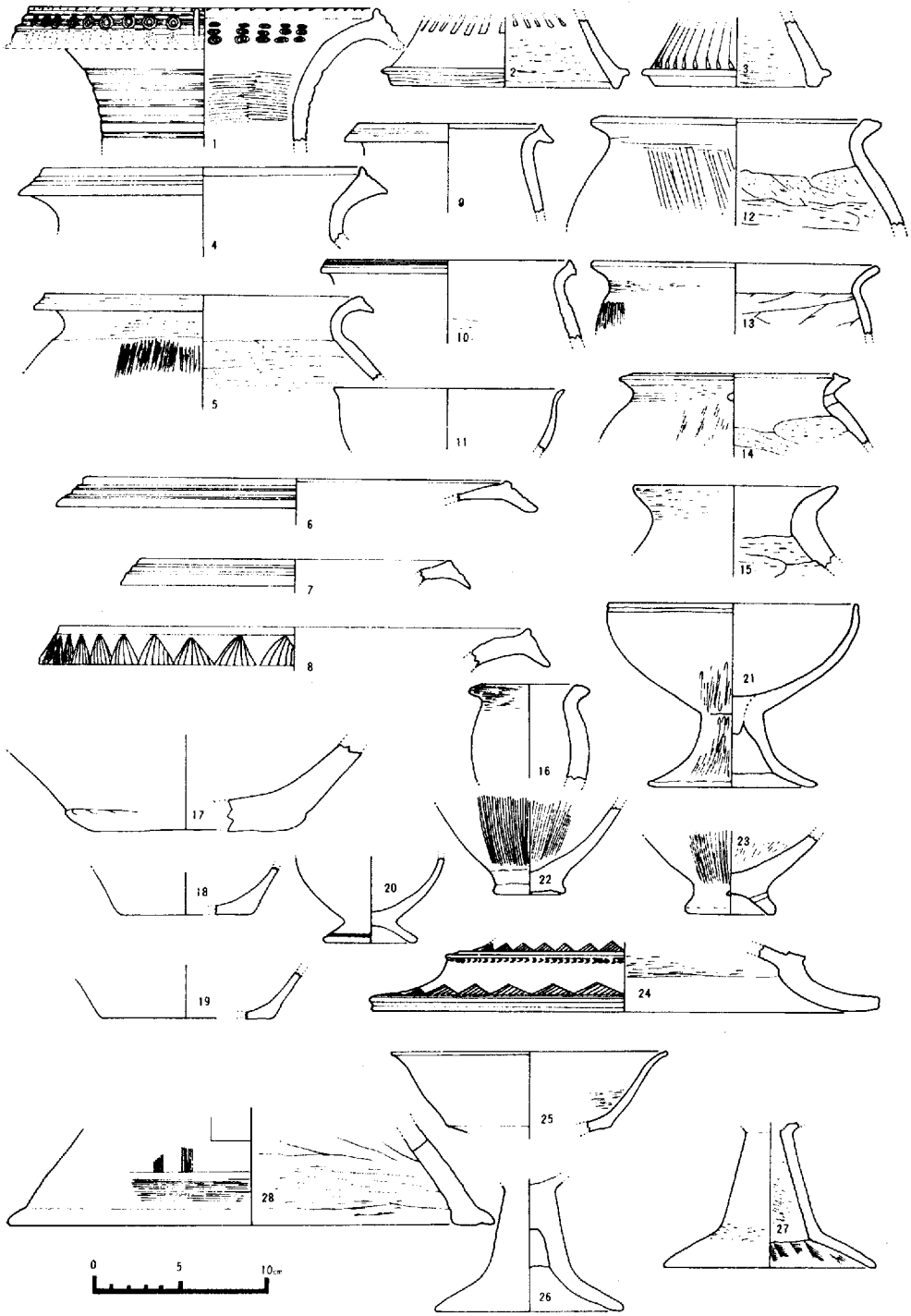


第92図　第　3　A　地　点　平　面　図



1．耕土(灰色砂混り粘土)
2．黄灰色砂混り粘土
3．青灰色粘土混り粗砂
4．青灰色砂層
5．茶灰色粘土混り砂
6．砂層
7．茶灰色粗砂
8．暗青灰色粘土混り砂(包含層)
9．暗褐色粗砂(包含層)
10．灰色粘土混り粗砂
11．暗青色粘土混り粗砂(包含層)
12．黒色粘土混り粗砂

第93図　第 3 A 地 点 ・ ト レ ン チ 断 面



第94図　第３Ａ地点トレンチ内出土遺物

出土遺物（第100図）

褐色土層の下部では弥生中期末の高杯形土器（１～３）をはじめ，弥生後期の前半から後半にかけての壺形土器（４～８），甕形土器(9)，高杯形土器(16)などがみられ，上部では古墳期初頭の壺形土器（10～15），また，手づくねの土器（22・23）が出土する。この暗褐色土層の直上に位置する灰色層では，須恵器の蓋（24・25），杯（26・27・28）が出土する。糸切底の椀(29)もみられる。T—21では，耕作土の直下で地山になる。

トレンチ３（第96図）

第２地点側の丘陵と第６地点側の丘陵の間の谷が門前池方向に走っている。その谷の中間部分のトレンチである。このトレンチの包含層は谷のため深く，４層～５層に分かれている。

出土遺物，（第101図）

出土する遺物は，弥生後期，後半の壺形土器(1)と，古墳期の高杯形土器（２・３）と，手づくねのコップ状のもの(4)，須恵器では，甕形土器の口縁（５・６），杯の無高台のもの（７～９）と高台を有するもの（10・11），椀(13～16)，長頸壺の頸部(29)がみられる。(12)は，灰釉の皿である。土師器では，皿（17・18），椀（19・20）がある。また，土師質の甕形土器(21)，甑の把手(22)，ふいごの破片(23)，土錘(24)，他に，丸瓦（27・28）と，曲物（52・26）などが出土した。T—25では，第６層の灰色砂層から打ちこまれたと思われる５本の杭列を確認した。曲物は，この杭列附近の黒褐色有機質粘土層から出土した。

トレンチ，４（第97図）

このトレンチは，グリッドの方向に関係なく，第２地点の丘陵と第６地点の丘陵の地形にあわせて設定した。このトレンチでは，谷間の遺構の広がりや土層の状態がよく確認できる。

両丘陵とも端部には包含層が形成されている。トレンチの中央部において，溝状の遺構が検出された。この溝の中からは，多量の遺物が出土した。

出土遺物（第102図）

出土遺物には弥生時代後期前半の高杯形土器(1)と，壺形土器の口縁（２・３），また，後期後半の高杯（４・５），壺形土器の底部（６・７），甕形土器(8)やこれらのものと同時期のハンマー状の石器(12)，土玉(11)，砥石(10)などがみられる。

これらの遺物は，水田整地の時，第２地点側の丘陵をカットしたときに持ちこまれたものと思われる。須恵器では鉢の口縁と思われるもの(13)，瓶の頸部(14)と思われるもの，杯の蓋（15～19），杯の身（20・22・23），高台を有するもの（24・25),椀状のもの（21・26），皿(27)がある。

土師器では，椀(28)と杯(29)がみられる。（30～34）は，内，外面とも刷毛目を施した土鍋で，表面は黒く煤が附着している。(35)は，三脚付土器の脚部片で，(39)は，備前焼の擂鉢である。他に，緑釉(36)が１片と，青白磁片（37・38）が出土した。また，溝の埋土中からは，多量の桃の種が出土した。遺構については，両丘陵の裾部分に多くの柱穴を検出した。

トレンチ，５（第97図）

トレンチ５はトレンチ９の南で直線上にあり，トレンチ３とは直交する。ほぼ，南北方向のトレンチで，X—22～X｜25までを言う。

土層観察からみると，トレンチ２の包含層は，ゆるく北側に向けて傾斜している。この包含層の５層上部では，トレンチ９の方向から延びている歴史時代の遺物を含んだ包含層がみられる。X—23では，表土下２m20cmで地山面に達する。

出土遺物（第103図）

出土する遺物は，弥生の土器片を少量含むがほとんど，歴史時代のものである。須恵器の蓋（１・２），杯（３・４），糸切序の椀(5)，甕の口縁(6)，序部(7)，硯の破片(8)と大形の鍋(9)などが出土した。X—22の下部では，杭を１本検出した。

トレンチ６（第97図）

トレンチ６は，トレンチ４と同じく，グリッドには関係なく地形にあわせて設定した。

丘陵端部では，耕作土下で地山に達し，第３地点方向に傾斜している。土層中に含まれている遺物は少ない。トレンチの中央部で直径50cm大の柱穴を検出した。

出土遺物（第104図）

出土する遺物は，弥生後期後半から古墳期に属するもので，高杯形土器（２・３），鉢形土器（４・５）甕形土器(6)や古墳時代の後半期の甑(1)，須恵器で甕の口縁(7)と椀(8)などである。

トレンチ７（第98図）

このトレンチは，第７地点と第３A地点との中間に位置する。しかし，トレンチを丘陵に並行して設定したため水田整地による削平が行われていて遺構は検出されなかった。耕作土の下には茶灰色粗砂層が30cmあり，地山面に達する。出土遺物は小さな土器片が少量出したにすぎない。

トレンチ８（第98図）

X—17～Y—17にかけて設定した東西方向のトレンチである。X—17の西端では，耕土下70cmで地山面になる。地山の直上には，わずかに包含層がみられる。この部分は，トレンチ７と同じく水田整地のため，包含層は削られている。しかし，地山面には柱穴と住居址の溝と思われるものを一部確認した。X—17～Y—17にかけて包含層は，ゆるく傾斜して，門前池よりでは，表土下２m20cmで地山面に達する。

出土遺物（第105図）

出土する遺物は，弥生後期前半の壺形土器の口縁(1)，序部(2)，後期後半の壺形土器(3)，須恵器の蓋(4)，高台を有する杯（５・６・７・８）と椀(9)，壺の口縁(13)である。

土師器では，皿（10・11），高杯の脚(12)他に，瓦器質の鍋(15)と三脚具器の脚片(14)などの出土がみられた。

トレンチ，９（第98図）

ほぼ南北方向で，トレンチ５の北に位置し，同トレンチの延長である。トレンチ３とは直交する。X—28からX—25方向に地山及び包含層は，ゆるく傾斜している。X—26～X—27にかけて住居址を２棟検出した。

出土遺物，（第106図）

出土する遺物は，古墳時代の中頃と思われるもので，高杯形土器（３～５），６面が使用されている砥石(6)などが１号住居址の床面から出土した。２号住居址は，王泊６層期頃と思われる壺形土器

(2)が床面に密着していた。

他に，包含層上面の遺物としては，須恵器の蓋のつまみ(12)，高台を有する杯（7・8・9），無高台のもの(10)と糸切底の椀(11)などがみられ，須恵質埴輪片(13)や瓦器質の鍋(14)がある。また，弥生後期後半の鉢形土器(1)も出土した。遺構では，直径1mの浅いピット，柱穴などを検出した。

ま　と　め

それぞれのトレンチを通してみると，トレンチ7を除いて他は，すべて明瞭な，褐色，暗褐色，ないし，黒色の包含層がみられる。また，遺構については，住居址，柱穴，杭などを検出した。つまり，トレンチ6，9側がトレンチ2・5・7・8より，地形が高く，そのため包含層もゆるやかに門前池方向に傾斜している。

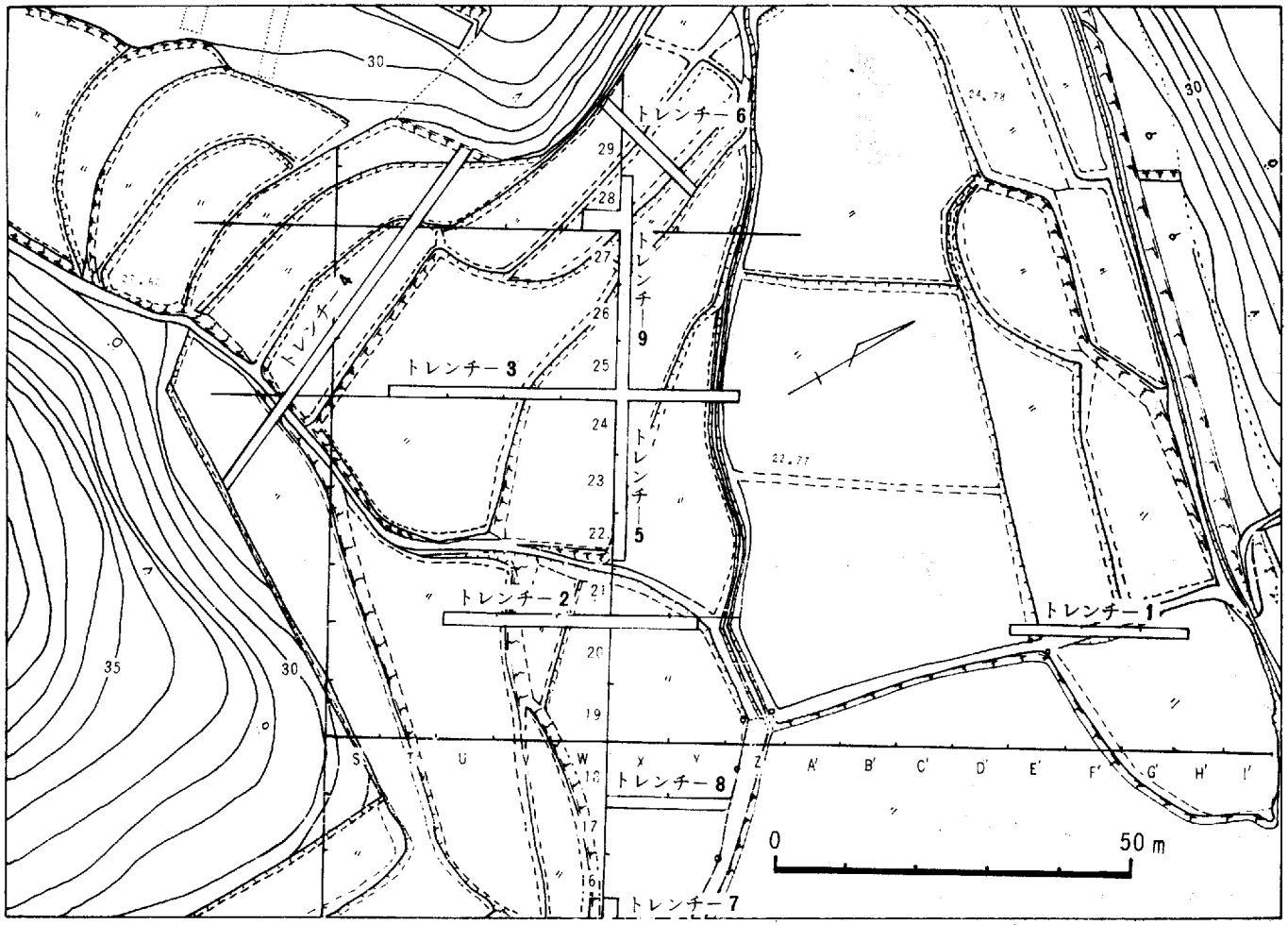
トレンチ2，トレンチ8，の第6地点側の丘陵裾の包含層は，北側では谷に向けて傾斜している。その上層では，トレンチ9の上層の奈良，平安期の褐色包含層が，トレンチ5にかけて延びている。第2地点の丘陵と第6地点の丘陵との間に谷が東に向けて走っている。第2地点の丘陵と第3地点側の丘陵の間に谷が走り，その2つの谷が合流して，門前池方向に向けて，走っている。この谷以外の丘陵の裾には，遺構がほとんど広がっているものと思える。

時期については，幅がせまいトレンチ内のため，把握しがたいが出土する遺物などからみて，柱穴は弥生後期から古墳時代にかけての住居址関係のものか，または，奈良時代，平安時代の建物になるものと考えられる。トレンチ3の杭は，層位や出土遺物などからみて，平安時代のものである。弥生式土器は，中期後半の雄町，5～6類に類似するものから後期前半また，同後半の雄町[(1)]，7～10類に類似するものが比較的多い。須恵器については，5～6世紀代[(2)]のものは少なく，ほとんどが奈良時代，平安時代の杯，椀類で各トレンチから比較的多く出土する。土師器については，古墳時代のものから奈良時代，平安時代のものまで含まれている。平安時代から鎌倉時代にかけての瓦質の土鍋や近世の備前焼類も出土している。緑釉も少破片であるが6片出土した。

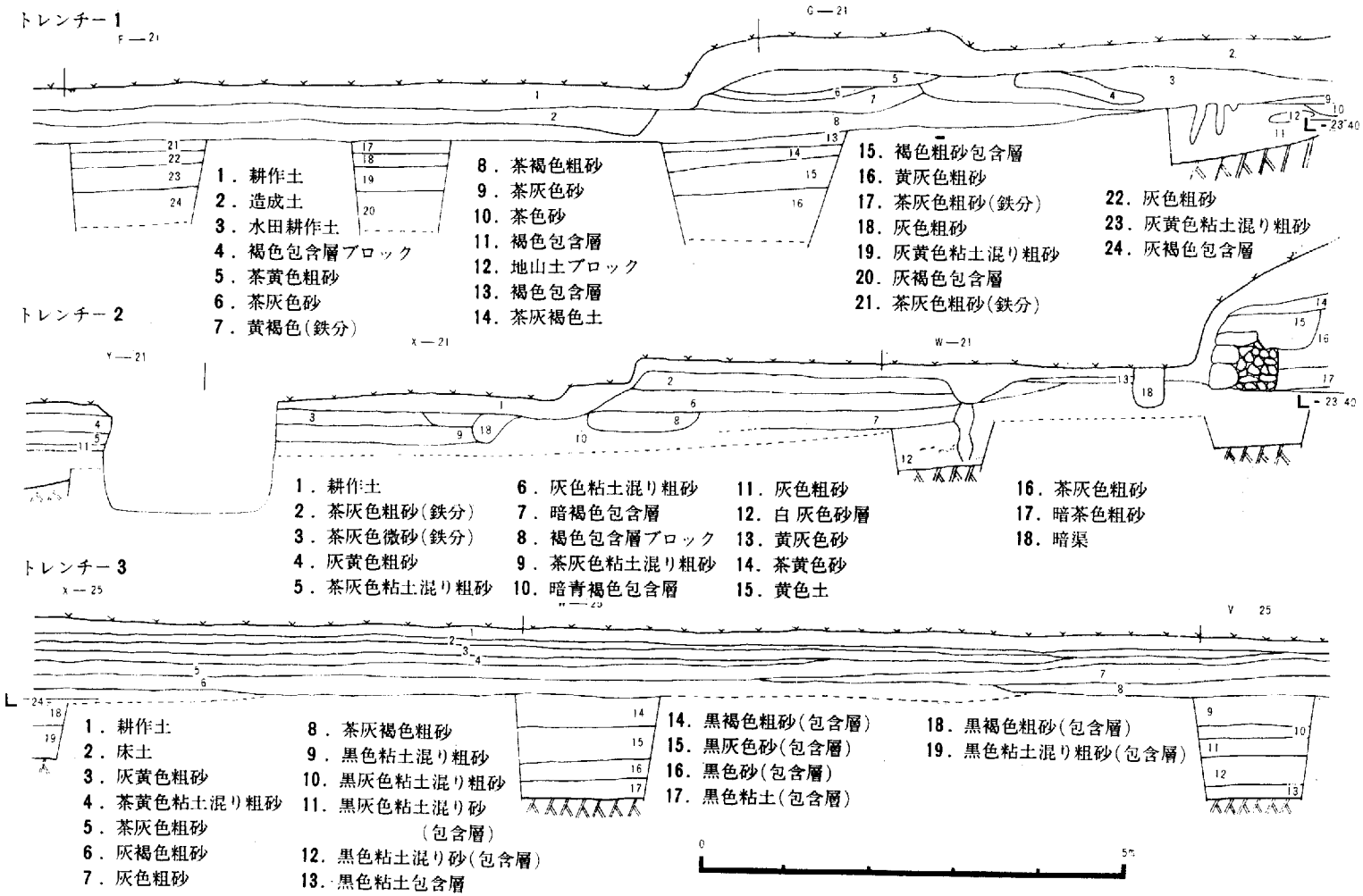
以上を通してみると，第3A地点については，調査期間が少なく，また，湧水が多く，調査に困難を要した。しかし，こうした悪条件にかかわらず，不充分ではあるが包含層および遺構面の広がりについて一応の確認はできた。

(1)，(2)　正岡睦夫　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　岡山県教育委員会「雄町遺跡―遺物(弥生式土器，土師器)

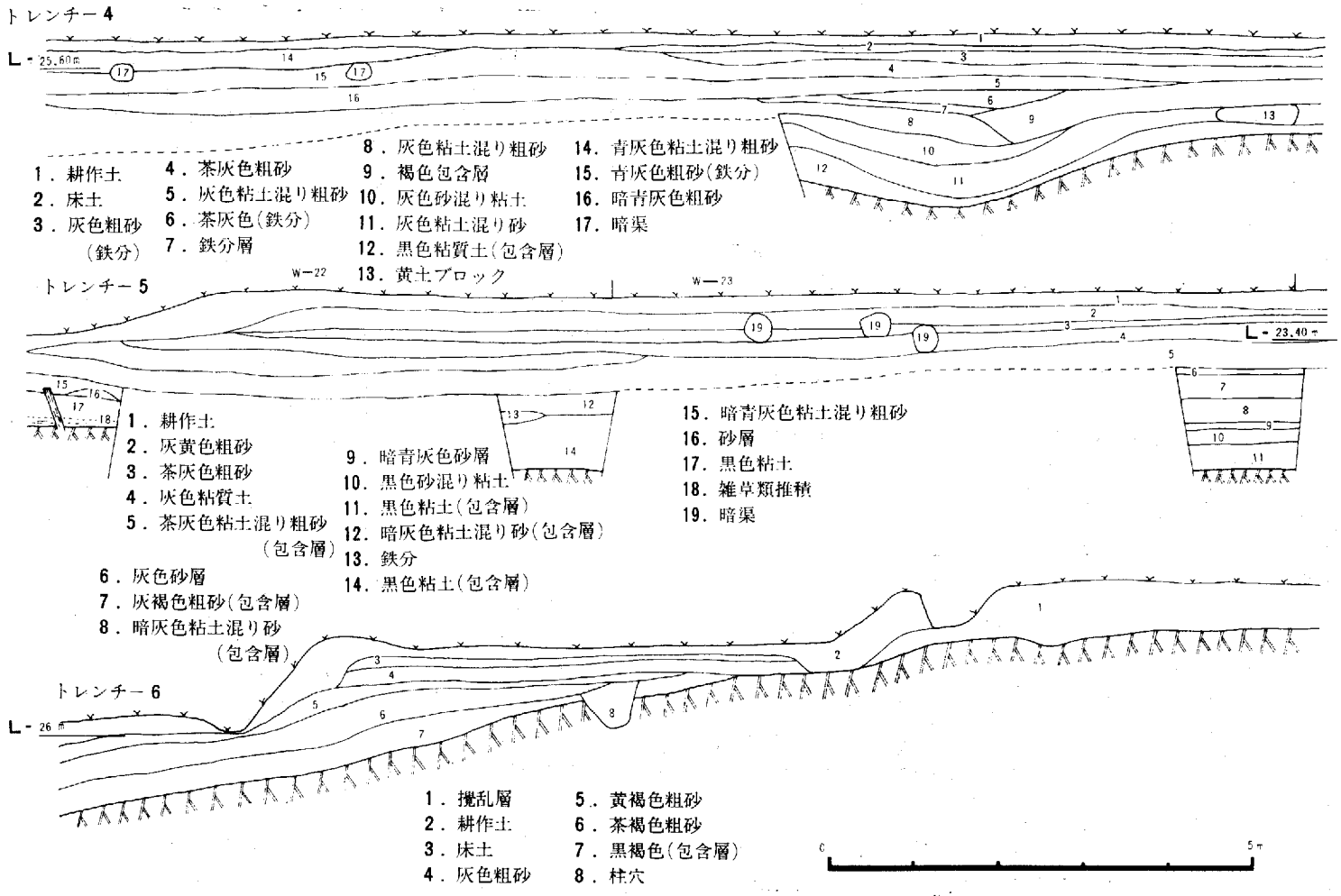
（枝　川）



第95図　第 3 B 地点トレンチ配置図

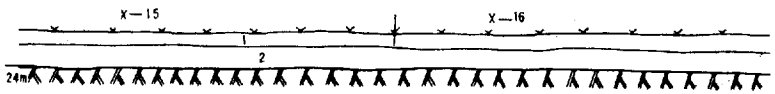


第96図　トレンチ1，2，3断面図



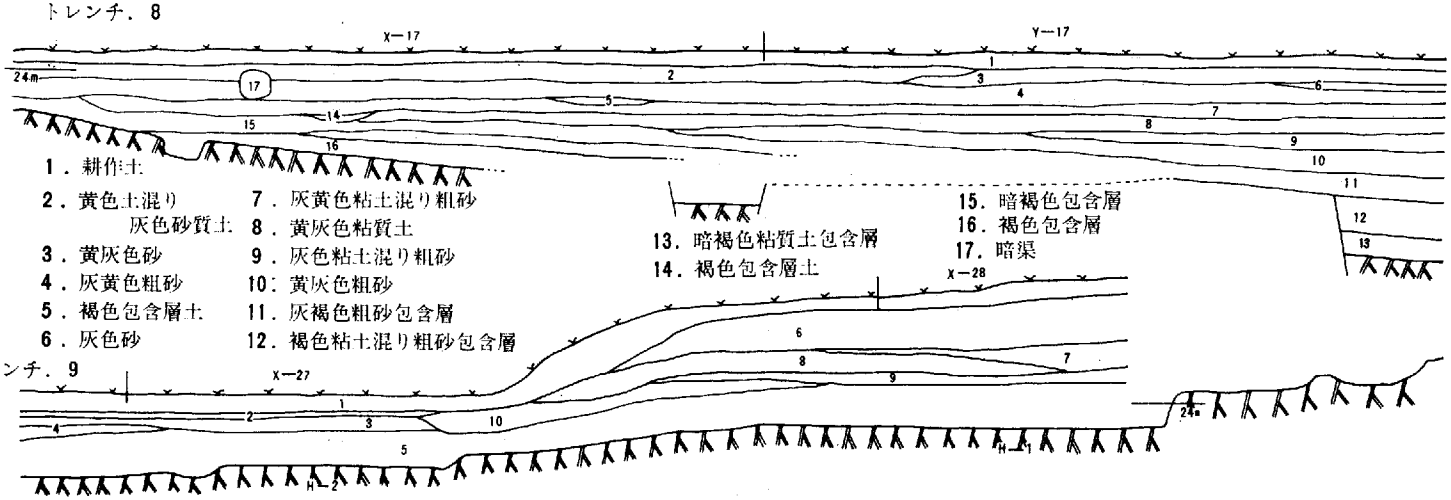
第97図　トレンチ4，5，6断面図

トレンチ．7



1．耕作土
2．黄灰色粗砂

トレンチ．8



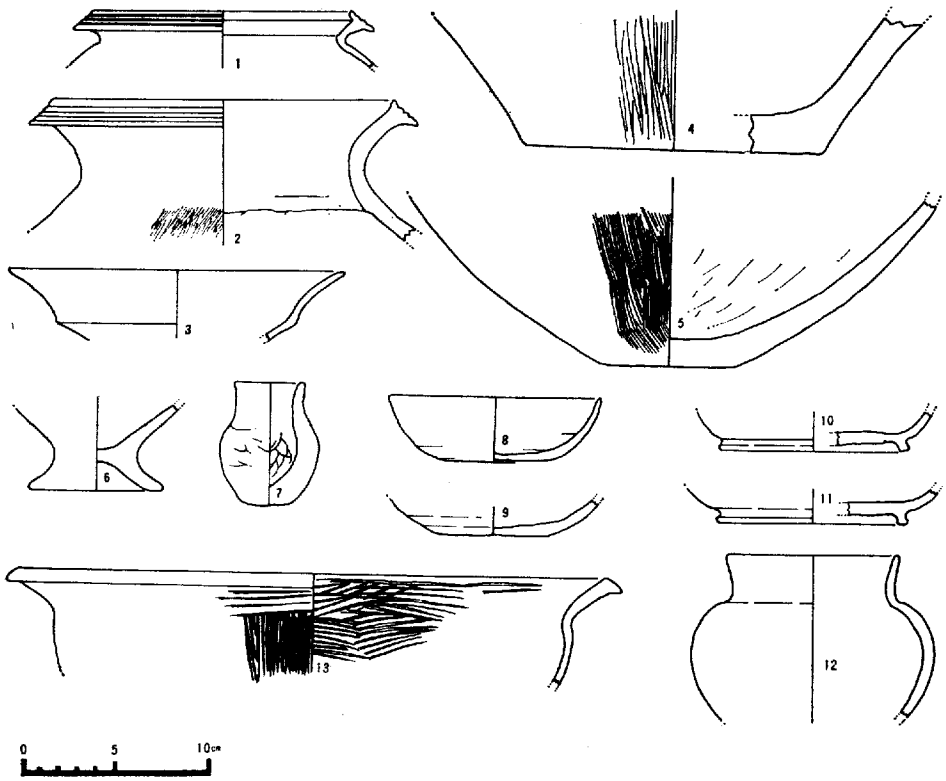
1．耕作土
2．黄色土混り灰色砂質土
3．黄灰色砂
4．灰黄色粗砂
5．褐色包含層土
6．灰色砂
7．灰黄色粘土混り粗砂
8．黄灰色粘質土
9．灰色粘土混り粗砂
10．黄灰色粗砂
11．灰褐色粗砂包含層
12．褐色粘土混り粗砂包含層
13．暗褐色粘質土包含層
14．褐色包含層土
15．暗褐色包含層
16．褐色包含層
17．暗渠

トレンチ．9

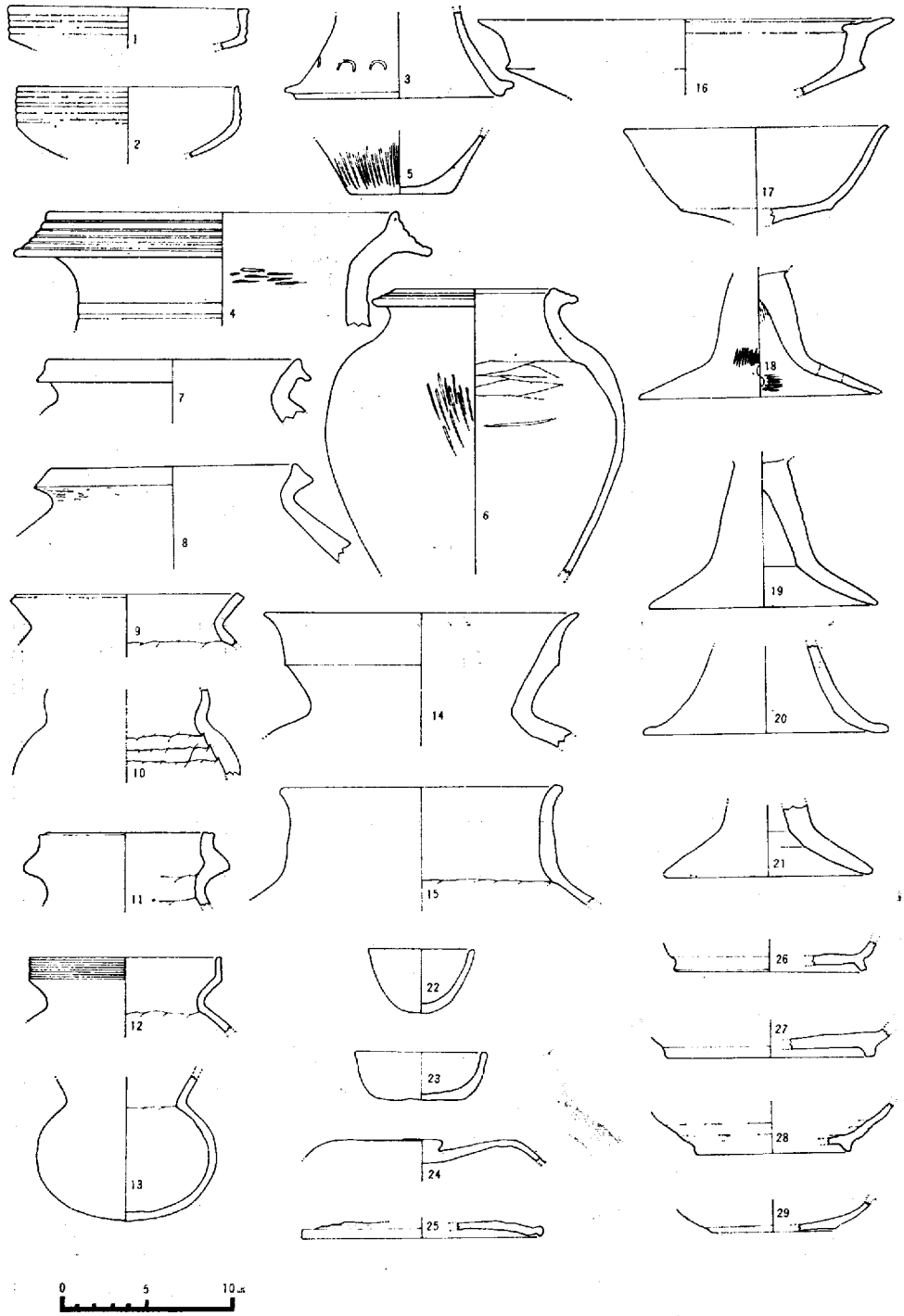
1．耕作土
2．床土
3．淡灰黄色粗砂
4．灰黄色粗砂
5．暗褐色包含層
6．茶黄色粗砂
7．灰色粗砂
8．灰黄色粗砂
9．茶灰色粗砂
10．灰黄色粗砂

0　5m

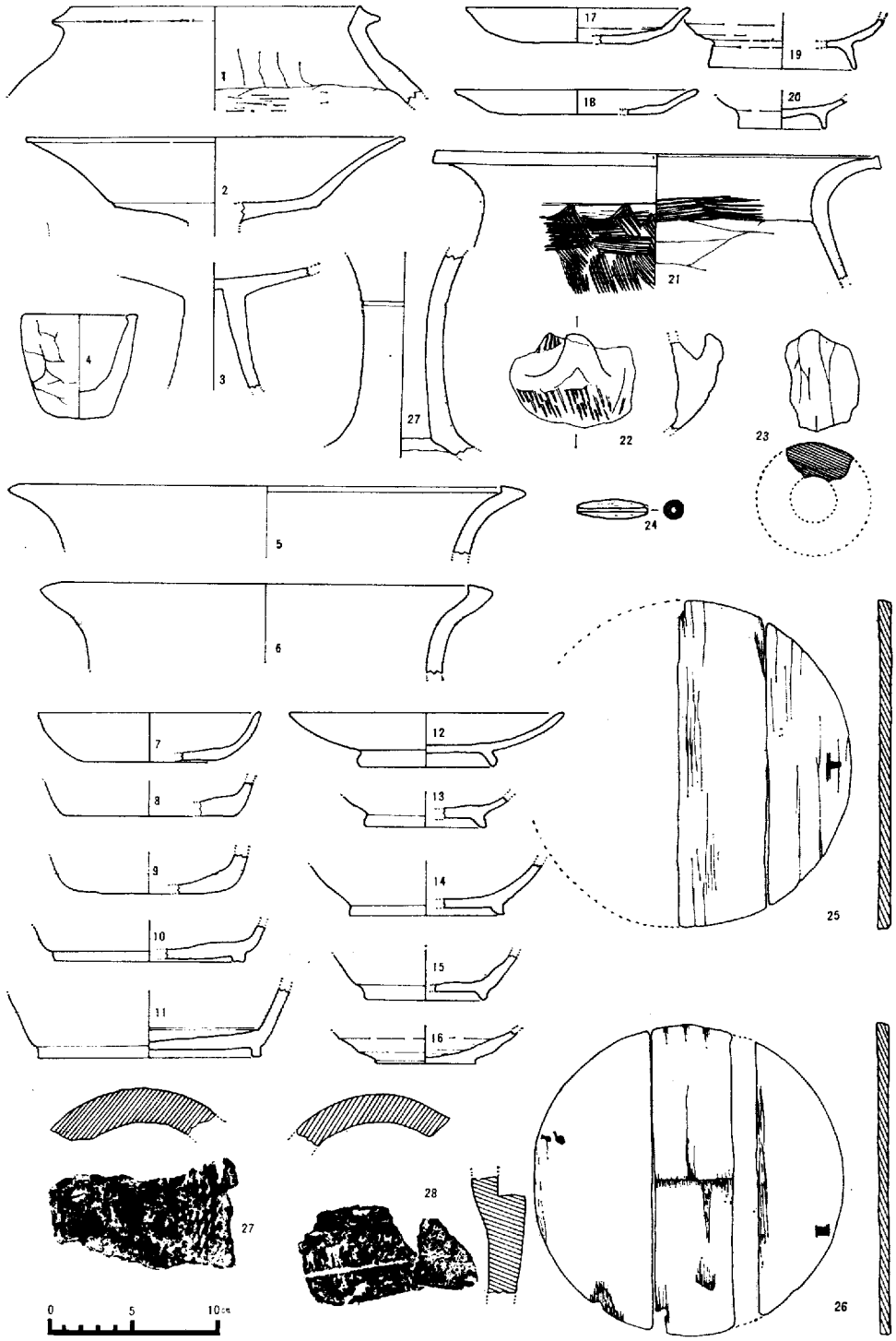
第98図　トレンチ7，8，9断面図



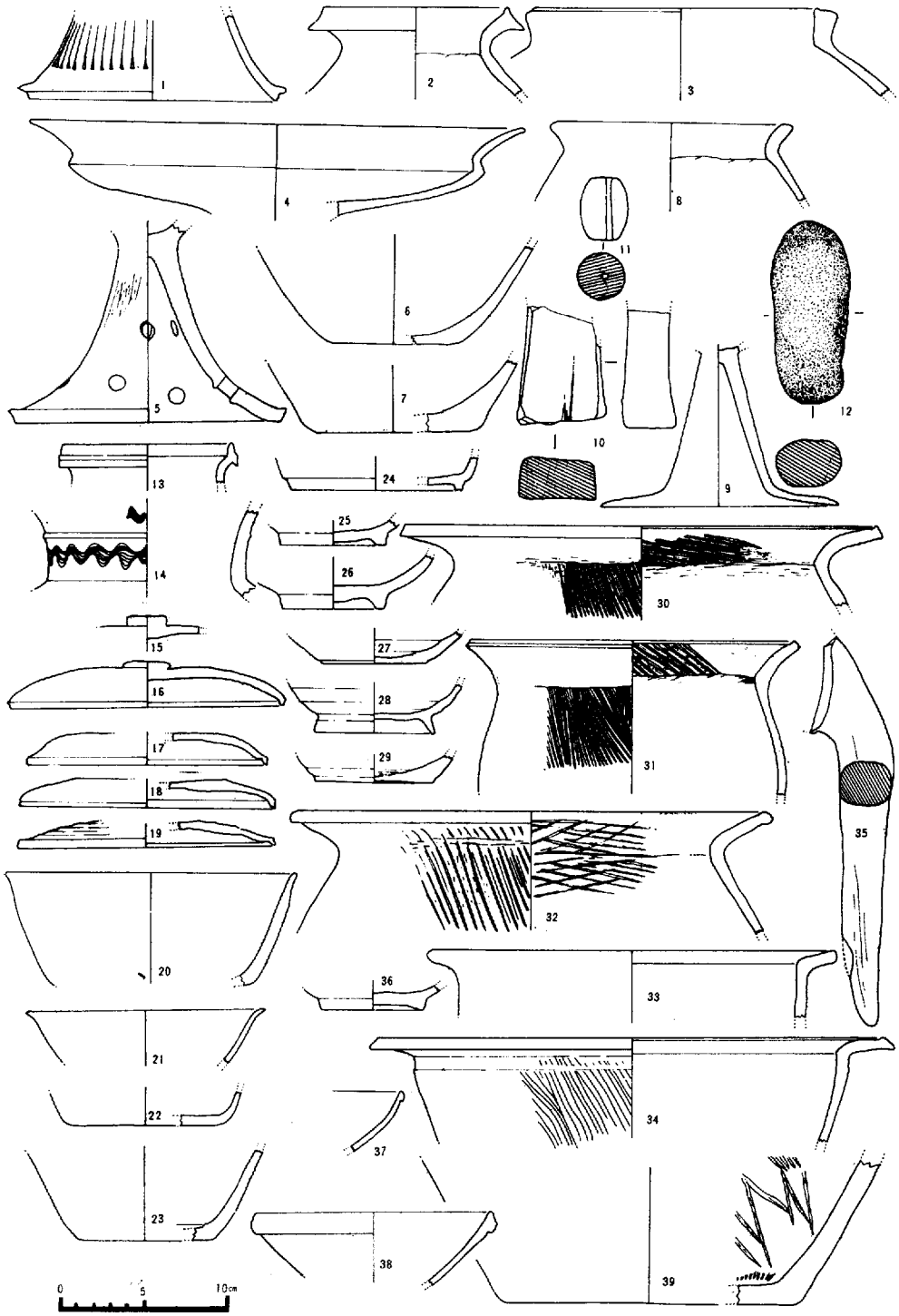
第99図　トレンチ1内出土遺物



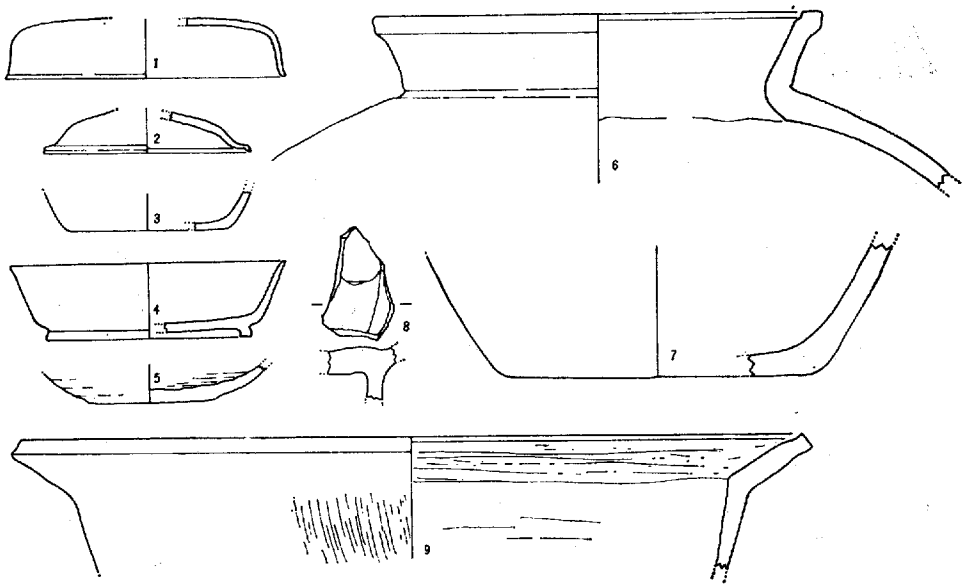
第100図　トレンチ2内出土遺物



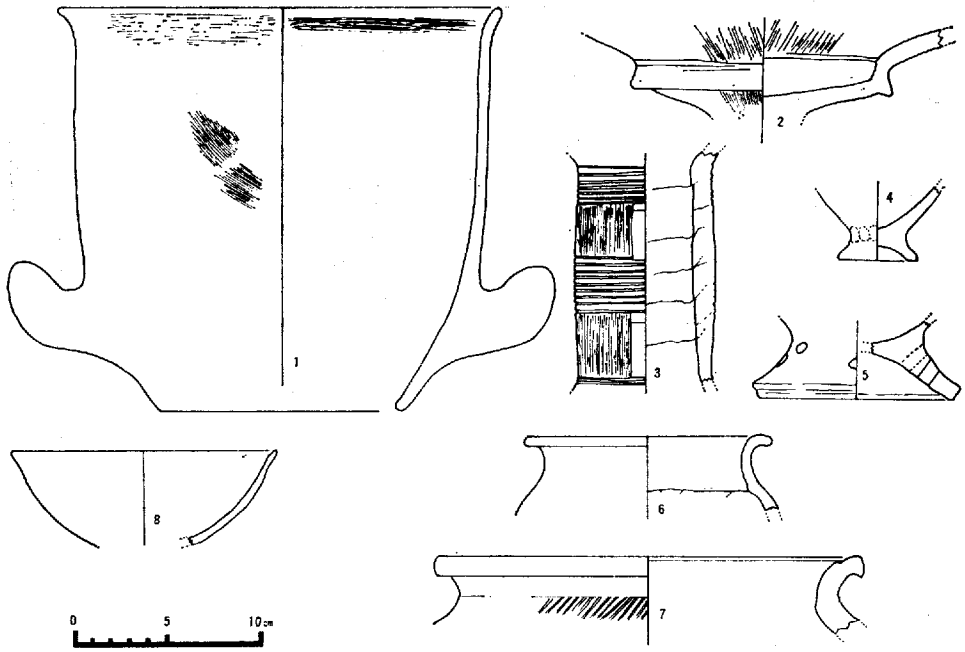
第101図　トレンチ3内出土遺物



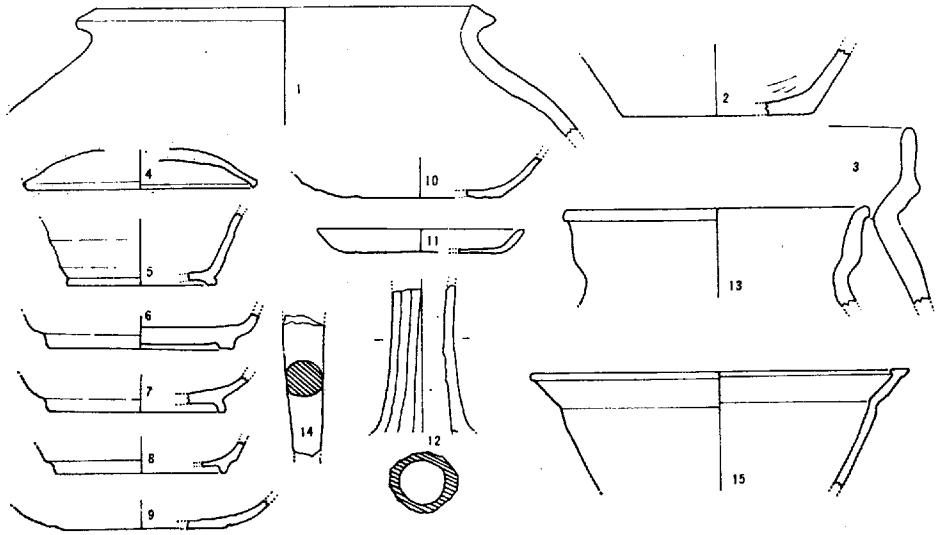
第102図　トレンチ4内出土遺物



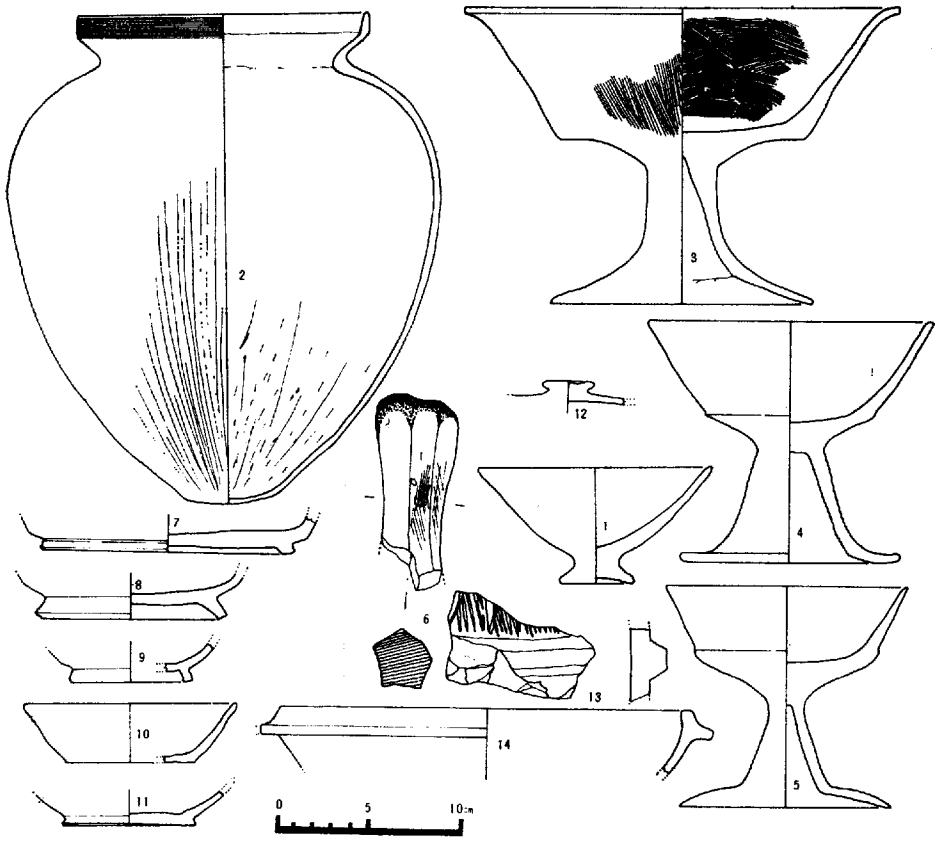
第103図　トレンチ5内出土遺物



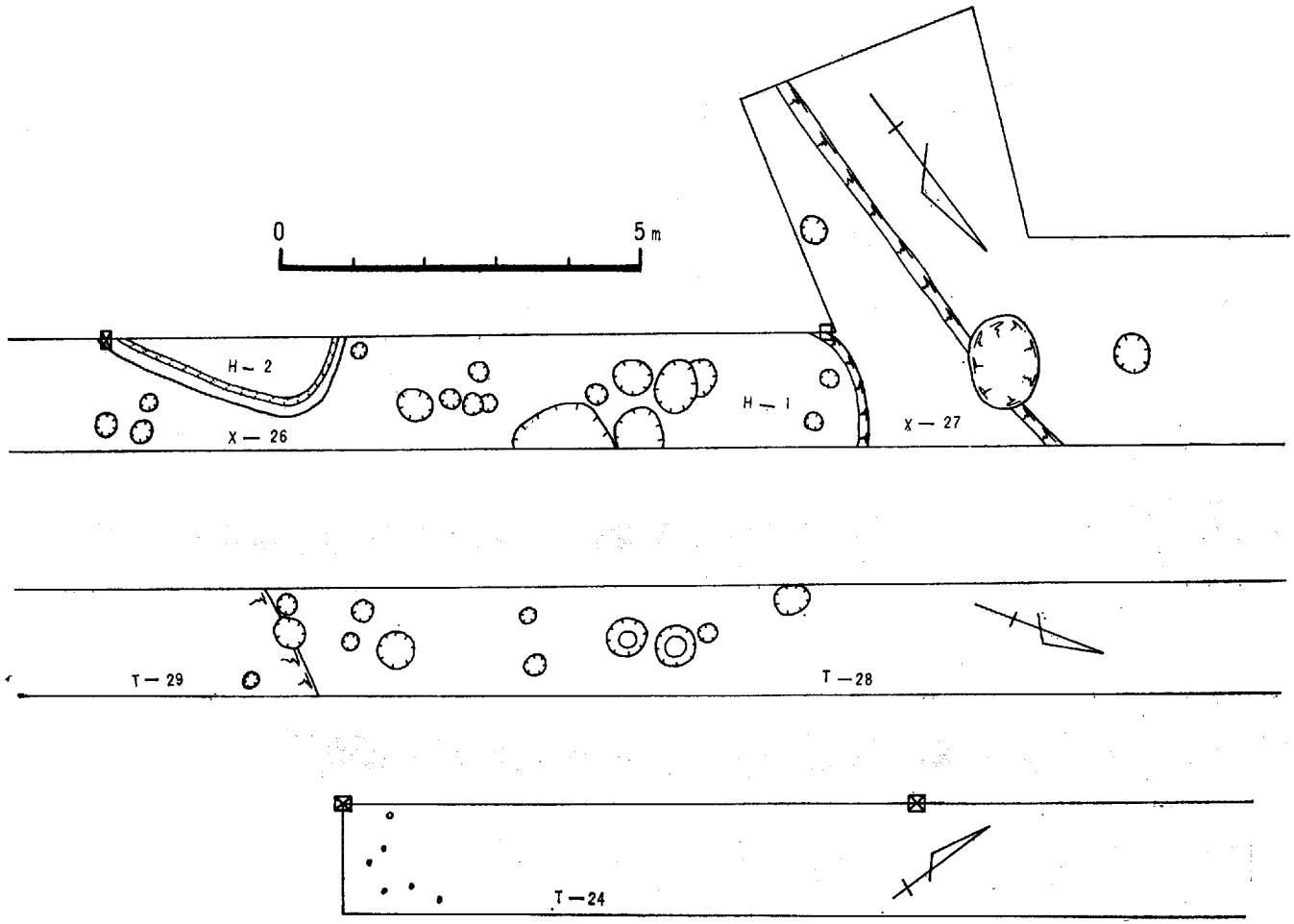
第104図　トレンチ6内出土遺物



第105図　トレンチ8内出土遺物



第106図　トレンチ9内出土遺物



第107図　ト　レ　ン　チ　内　遺　構　図

第4章　第6地点の調査

第6地点は，東へ舌状に延びる丘陵である。丘陵頂部の絶対高は42.23 *m*あり，下の田との比高は16*m*～19*m*を測る。丘陵頂部は平担な面が広がっており，下の田へゆるやかに下降している。以前は山林であり，宅地造成計画後，木の持ち出しのため西側より山頂へのぼる林道がつくられている。この丘陵の北斜面には，須恵器片が散布しており，眼下に並ぶ建物群と同時期の遺構が予想されていた。

ここは造成計画途中から保存区域となった所であるが，ここに存在する遺構の性格をさぐるため，48年8月に2日間トレンチ調査を行った。

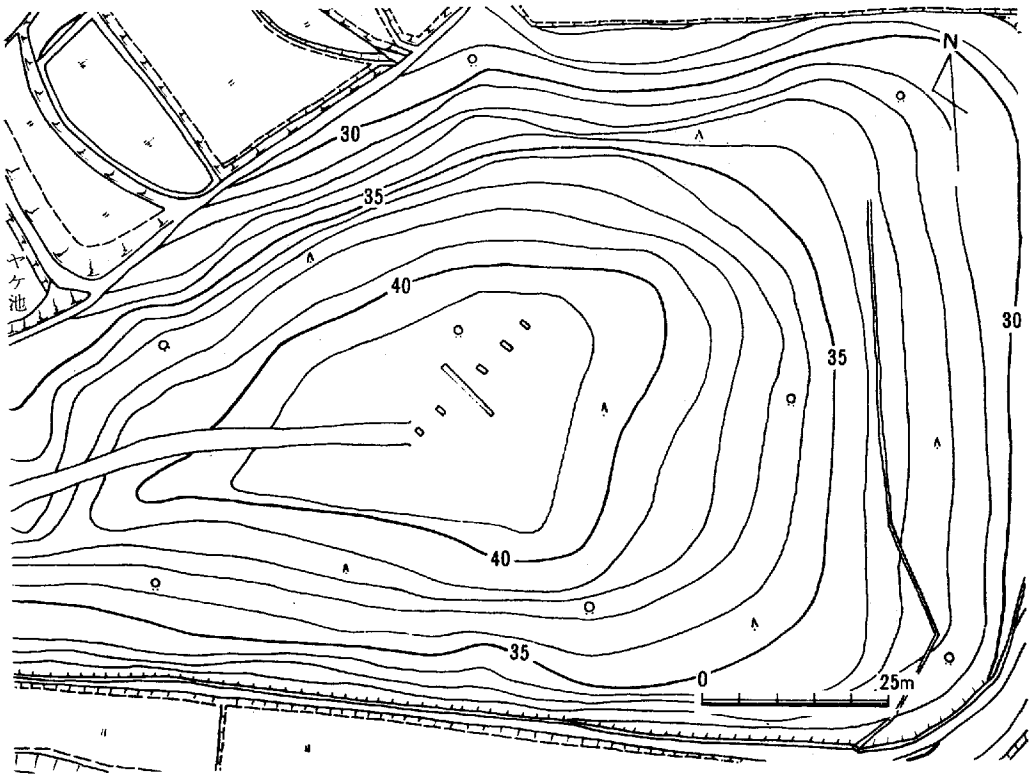
トレンチは，もっとも平担な丘陵頂部へ南北方向に1.5*m*×0.7*m*の細長いトレンチを約4*m*ごとに6本設定し，西の方から第1トレンチ・第2トレンチ……第6トレンチとした。第3トレンチは，これを南北方面に8*m*延ばし9.5*m*×0.7*m*とした。

結果，うすい耕土（淡黒褐色細砂）の下には褐色細砂があり，地表面下10*cm*～30*cm*で地山である花崗岩風化土となる。比高差がほとんどない平担地であるが，第3トレンチでは中央から両端へゆるやかに下降している。また，各トレンチ間でも第3トレンチあたりを中心として両側へゆるやかに下降する。

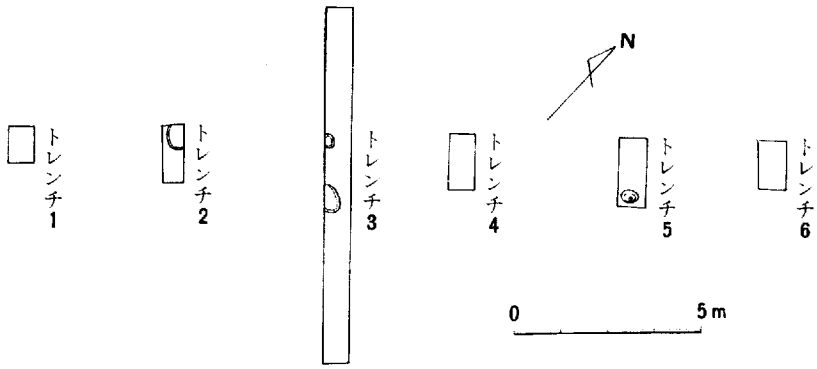
遺構としては，地山に掘り込まれたピット4が検出された。これらの内訳は第2トレンチに径75*cm*，深さ16*cm*のものが1，第3トレンチに径80×60*cm*，深さ18*cm*のもの1と径35*cm*，深さ12*cm*のもの1の計2，第5トレンチに径50*cm*，深さ14*cm*のもの1であり，すべて褐色細砂がはいっている。

遺物はほとんどなく第2トレンチのピットに条線叩き文のある須恵器片1と第5のピットに条線叩き文のある須恵器片2・土師器片1が出土したのみである。内面はなで整形であり，これから平安時代のものと思われる。

以上のように，第5地点の調査は短期間であったために，狭い範囲のトレンチ調査しかできず，調査目的であった全体の性格を知ることはできなかったが，少なくとも須恵器を伴なうピットのあったことによって眼下の谷にある建物と同時期の遺構が残っているものと思われた。また，第2地点などにみられるような状況が，この丘陵でもみられるなら，遺構は斜面に残っている可能性が強く，その点では南斜面が有力であると判断しえた。　（池　畑）



第108図　第６地点トレンチ配置図（縮尺１/1,000）　単位：m



第109図　第　6　地　点　遺　構　図　（縮尺１/2,00）

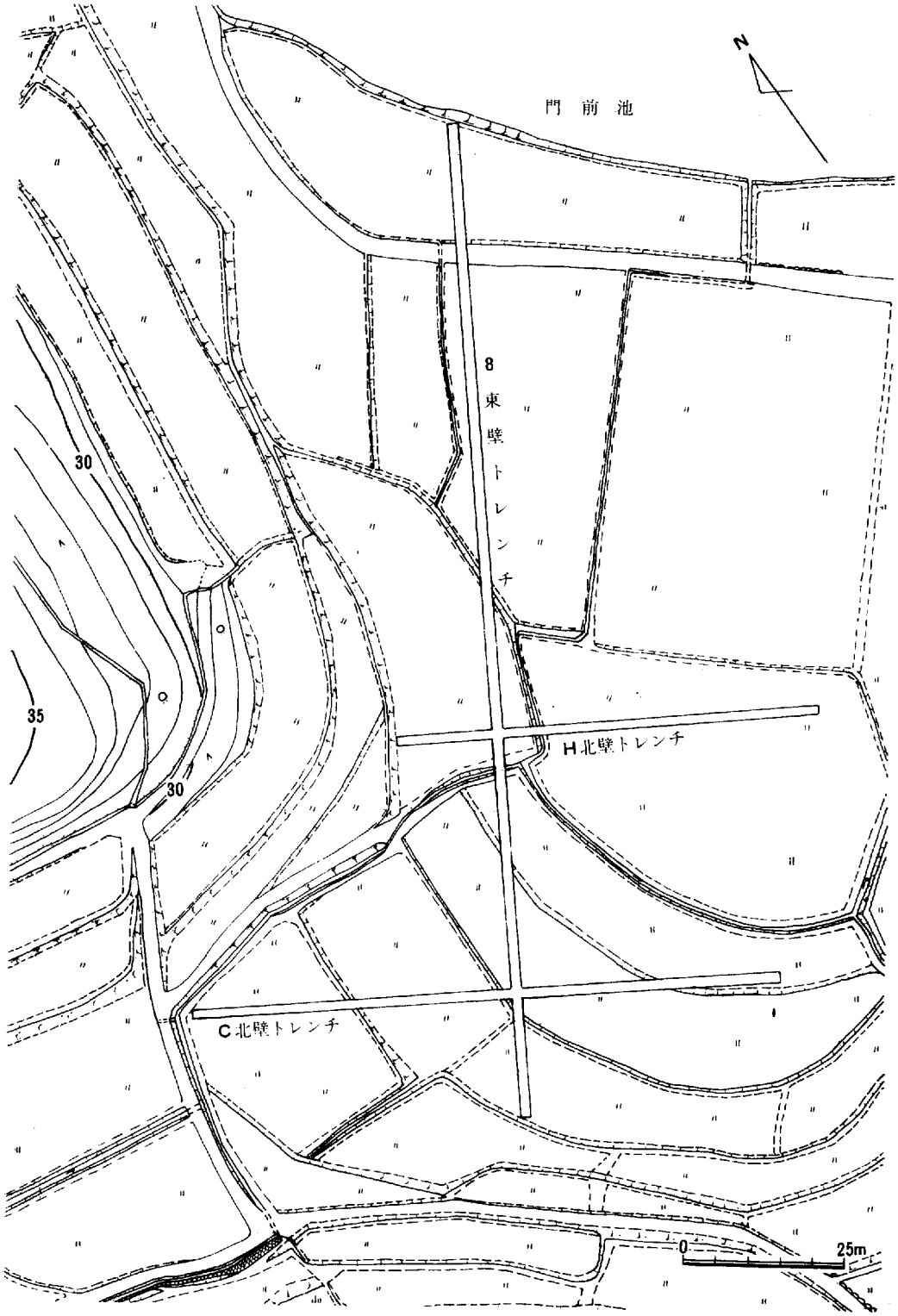
第5章　第7地点の調査

山陽団地造成地の北東端にある門前池は2つの谷が北側に開く位置に存在する。この2つの谷のうち東側の谷が第7地点で，この谷は東西を宮山および便木山に狭まれた幅約300*m*の谷である。この谷は160*m*奥で2つの狭谷になっており，その間にある丘陵が用木山である。現在，第7地点のほとんどは段をなしているものの，明治時代の地上げ作業により整えられた割合広い田となっている。山に向かった所は狭い畑である。谷の奥には南から愛宕山墳墓群，用木山遺跡，用木山古墳群，三蔵畑遺跡，中池遺跡，便木山古墳群が存在し，谷の南側には宮山古墳群が，北側の丘陵には建物遺構が存在する。また，門前池の褐水期にはその断面に包含層がのぞいている。

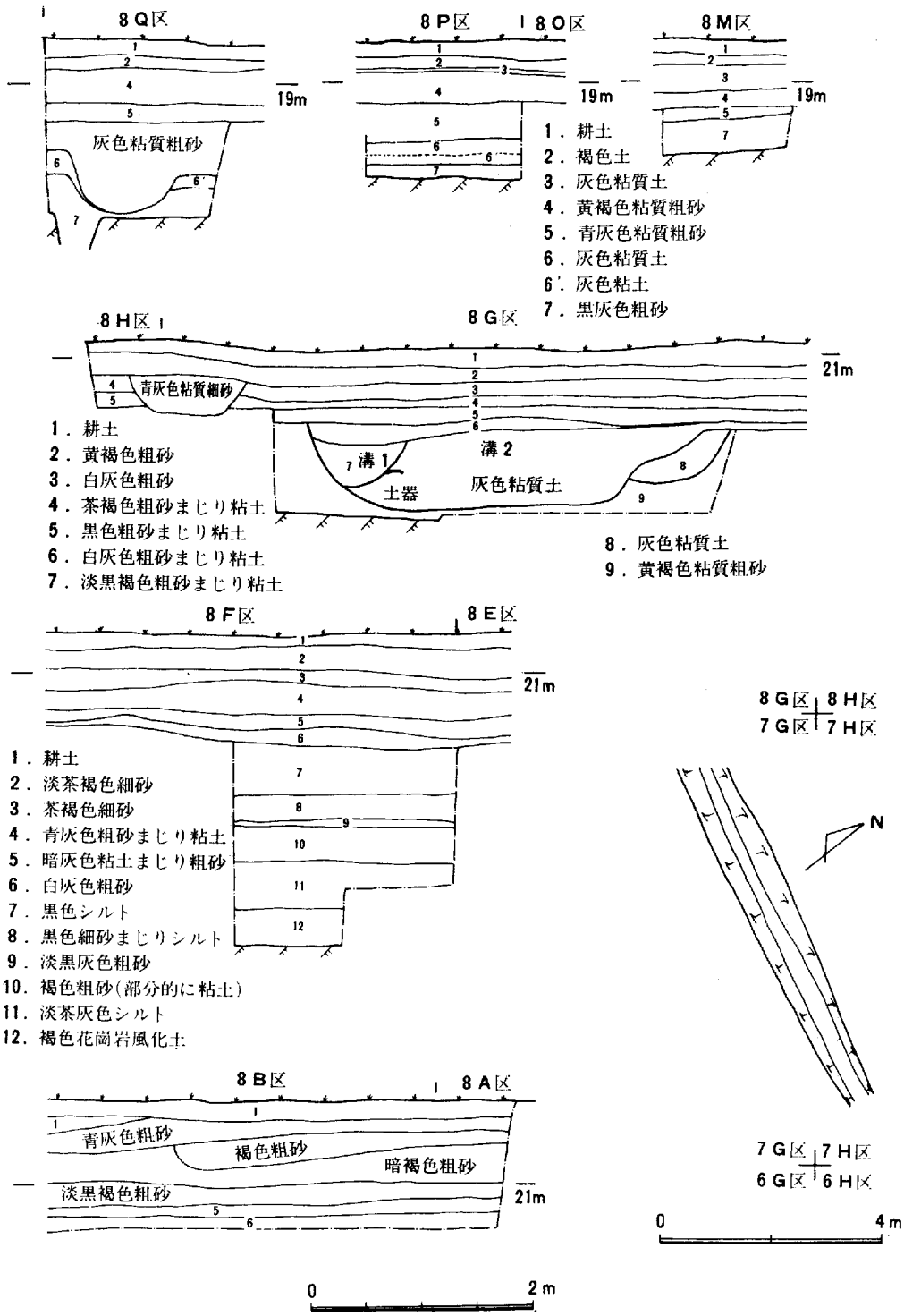
第7地点の調査は，現地表面の標高が23*m*～26*m*と低いにもかかわらず，こうした環境に囲まれているため遺構の広がりおよび包含層の広がりを調べるために行われた。調査は幅1.5*m*のトレンチを南北方向に1本（総長152*m*），東西方向に2本（総長155*m*）もうけて行った。区は8*m*ごとに，東から1，2，3・・・，南からA，B，C・・・と名づけ，区名はその交点である1A，2A・・・というようにした。したがって，トレンチ名は南北方向が8トレンチ，東西方向がCトレンチおよびHトレンチとなった。最初人力で掘っていたが，明治時代の地上げ工事などにより撹乱土層が厚いこと・部分的掘りさげによっても全域ともほぼ同じ様相を示すこと・さらに粘り気の強い粘土であることと湧水のため人力では難行することがわかったため，Cトレンチおよび8トレンチ東側については深さ約1*m*をユンボで掘りその後，実測図を作成した。さらに部分的には深さ約2*m*～2.5*m*まで人力で掘りさげた。Hトレンチおよび8トレンチ西側についてはすべて人力で掘り下げた。なお，Mトレンチ・Rトレンチについても調査の予定だったが時間の都合でできなかった。

8トレンチ（第111図，第115図1～18）は，中池からの谷と直交し，第6地点の山裾を横切り，門前池に到るA区からT区まで調査した。したがって，G区までは谷の様相を呈し，H区以北では丘陵端部の様相を示す。地山はT区では標高18.6*m*を示すが，G区では標高20.3*m*とこの9*m*の間で2*m*も上昇している。また，A区になると南へ向かい上昇する。F区10層には古墳時代初頭の土師器（6・7）が，F区8層には須恵器(10)が伴出する。B区5層には鎌倉時代の遺物（14・15）が伴う。E区耕土には備前焼もある(18)。G区には9層を掘り込んだ3本の溝がある。溝1(1)・溝2（2・3）の土器から考え古墳時代初頭のものと思われる。Q区にも溝状の落ち込みが2本みられ，新しいほうの灰色粘質粗砂のはいった落ち込みからは弥生式土器（8・9）が出土した。H区からI区にかけては高くなっており，H区には柱穴もみられるが，I区にはほとんどみられない。

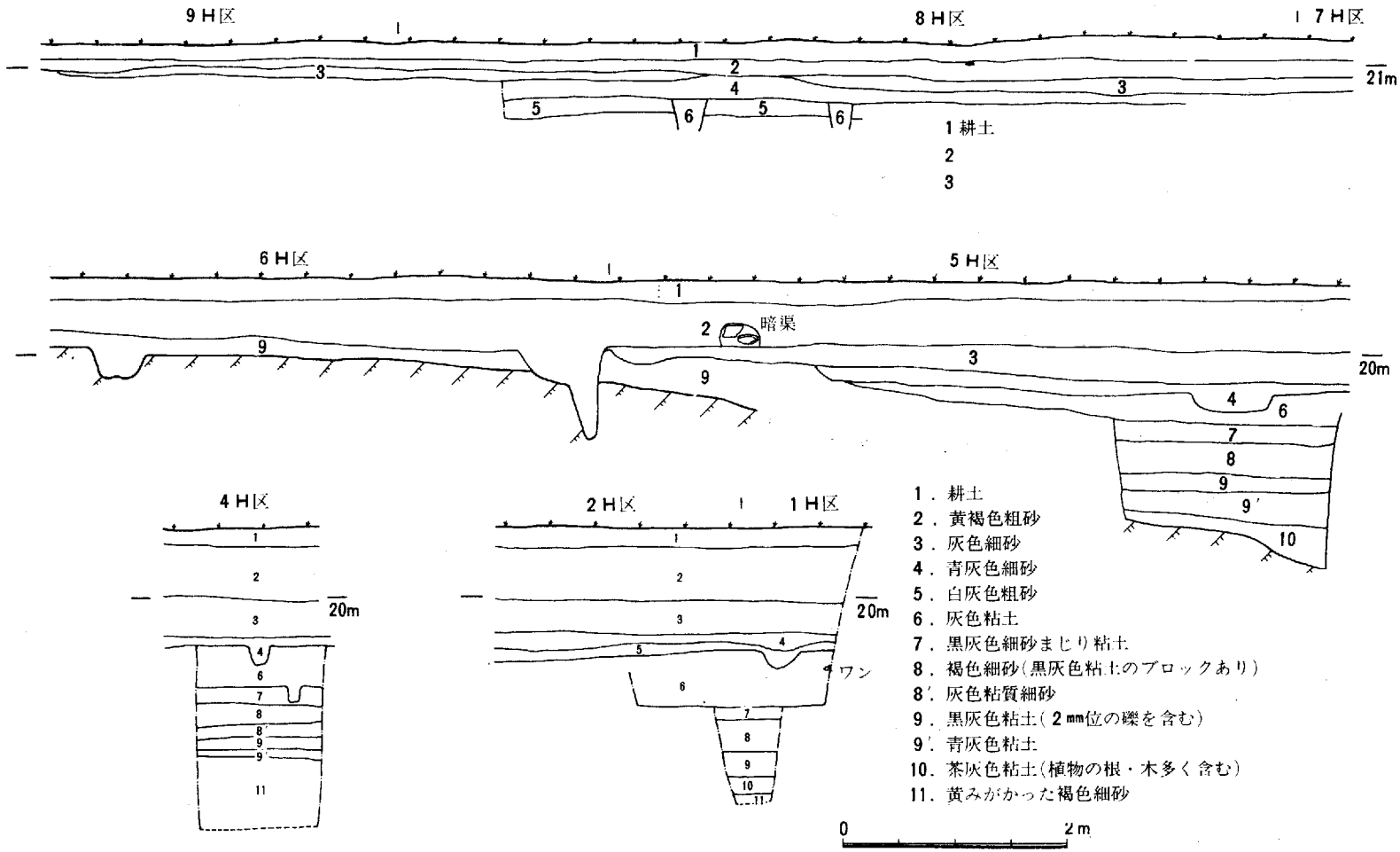
Hトレンチ（第112図，第115図19～38）は1区～9区について調査を行った。このトレンチは谷に直交しており，5区以東の低地部と6区以西の丘陵末端部とにわかれる。すなわち5区から6区にかけて地山の傾斜がみられ，その比高は1*m*を測る。そして4区ではさらに下降し，地山の確認はできなかった。5区～6区にかけての9層は2㎜前後の礫を含んだ包含層となっており，弥生時代中期～古墳時代初頭までの遺物を含む（19～28）。4区の9'層には弥生後期の土器(29)を伴う。4区7層からは30の須恵器（奈良時代）が出土し，1区6層からは31のはりつけ高台をもった須恵質土器（鎌倉



第110図　第7地点トレンチ配置図（縮尺1/1,000）単位：*m*



第111図　8東壁トレンチ断面図および溝1平面図



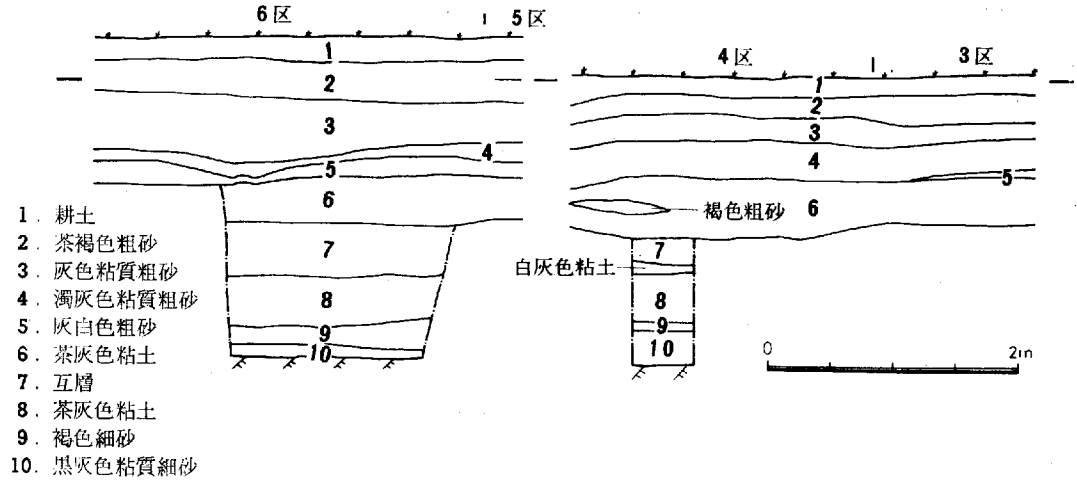
第112図　H　北　壁　ト　レ　ン　チ　断　面　図

時代）が出土している。4層より上は花崗岩の風化土を多く含み明治時代の盛り土と思われる。7区から8区にかけては5層を掘り込んだ径20cm前後のピットが検出された。これは5層出土の土器・瓦など（32～38）から考え奈良時代のものと思われる。

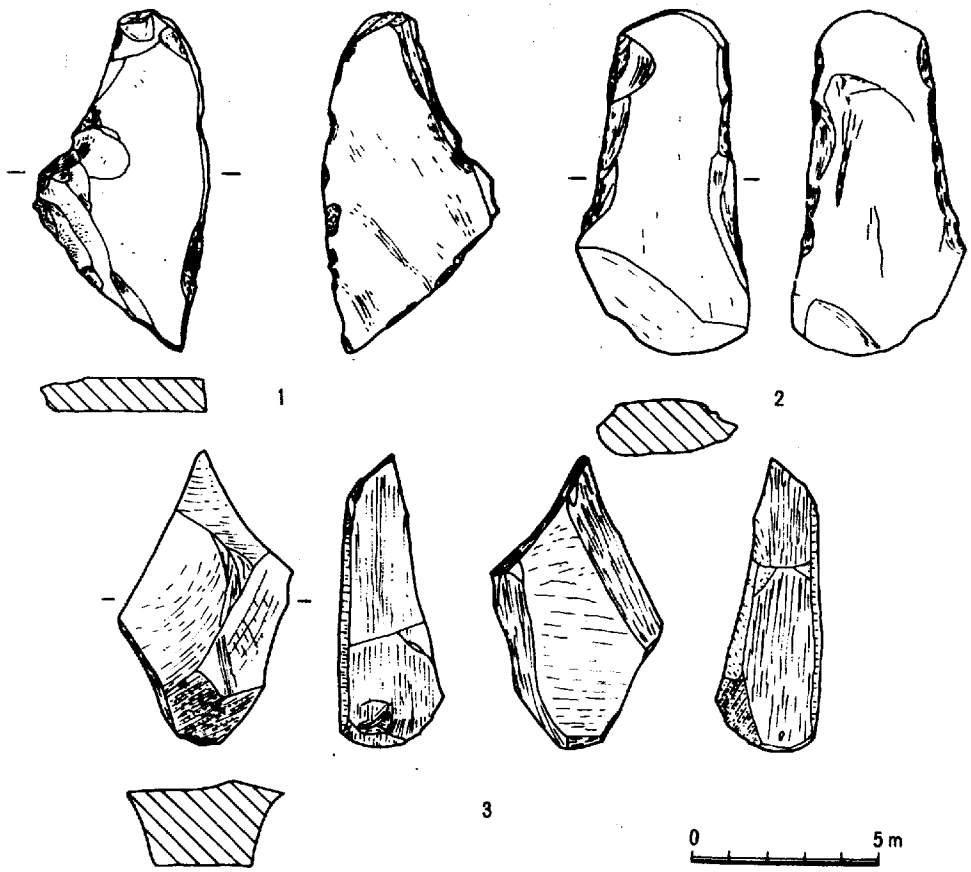
Cトレンチ（第113図，第115図39）は，3区～14区について調査を行った。このトレンチは中池からの小谷に平行しているため，層序はほぼ安定していた。4区と6区を地表面下約2.5mまで掘りさげ，地層の観察をした。その結果，6区では約2.5m下（標準高約18.8m）でボーリング棒がささらないほど固くなり花崗岩の風化した砂質の地山であろうと思われたが，4区ではまだ地山が深く確認できなかった。6区の層序は上から耕土，黒褐色及び黄褐色粗砂（2層），灰色粘質をおびた粗砂（3層），濁灰色粘質をおびた粗砂（4層），灰白色粗砂（5層），茶灰色粘土（かわくと黒色化，6層），白っぽい褐色粗砂と白灰色粘土の互層（上から砂・粘土・砂・粘土・砂・粘土・砂，7層），茶灰色粘土（8層），褐色細砂（9層），黒灰色粘質砂（10層），地山となる。6層と8層には木の根が多量に含まれており，ある時期の表土付近と思われ，4層以上は花崗岩の風化土で形成されており，これが明治時代の盛土と思われる。4区でも厚さのちがいはあるが，ほぼ同じ層序を示している。層序からいけば4区の地山の深さも6区とだいたい同じであろう。39は13区出土のものである。

以上のように，第2調査区は現地形が示すように谷の様相を呈している。遺構としては8G区と8Q区にみられた山裾をめぐる弥生時代～古墳時代初頭の溝と8H区にみられた奈良時代の柱穴だけである。また門前池の褐水期にみられる包含層は8東壁トレンチにはみられず，ここまでのびていないことがわかった。

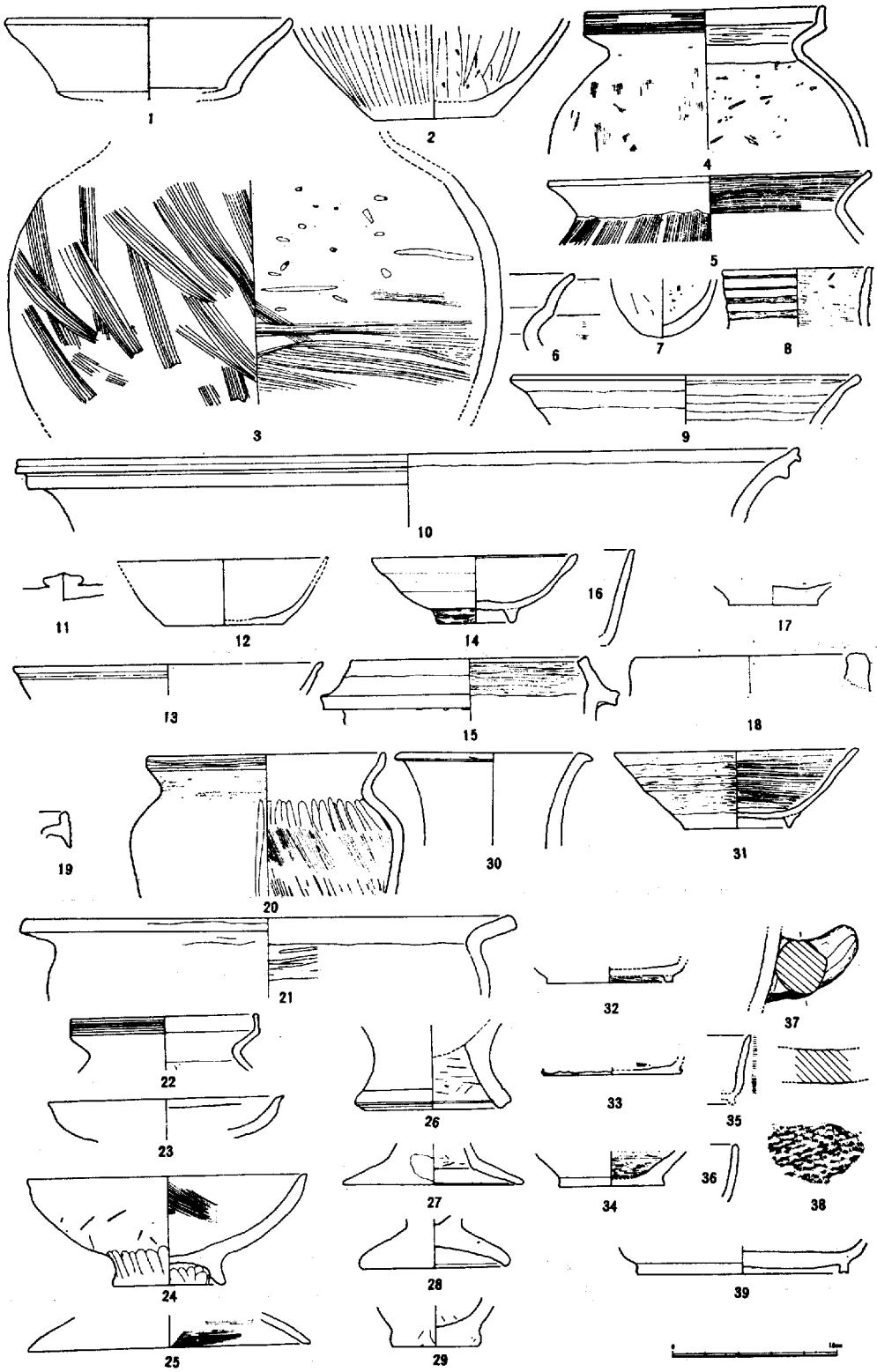
（池　畑）



第113図　C 北 壁 ト レ ン チ 断 面 図



第114図　第　7　地　点　出　土　石　器



第115図 第 7 地 点 出 土 遺 物

第6章　まとめにかえて

1年余りの調査で，我々は多くの知見を得た。今，ここでその全てを述べる余裕もないので，弥生時代の生活条件・貯蔵穴の問題・石庖丁の分布・弥生式土器の編年・歴史時代の建物群という5点について，若干のまとめを行いたい。この他にも，住居の垂直分布の問題，弥生時代の住居構造の問題，舟形および銅鐸形土製品などが示す弥生時代における祭紀の問題，さらには壺形土器・砥石にみられる線刻画の問題など多くの問題点が残されているが，すべて今後の研究に待ちたい。

弥生時代の生活条件

調査中，不思議に感じたことのひとつは，今日，最も平担な尾根上に住居址がみられず，貯蔵穴とまとまりのない用途不明の穴だけが点在することであった。そして，住居址はすべて，東側および西側の傾斜面に存在するのである。遺構の少ない平担な尾根上の利用については，祭・作業場などに使う「中央広場」，あるいは，「畑」などが考えられる。しかし，「中央広場」案にしては細長く尾根全体にわたっているし，「畑」案にしたところで最も生活に良好な所を畑にし，それらの中に貯蔵穴をつくるなど矛盾点が多い。したがって，当時の地形はもう少し高い尾根で，そこにあった住居址等の遺構は，長い間の自然的流失，あいいは人工的な削平により，残っていないと想定するのが妥当である。つまり，当時は，現在平担な所がもう少し高い斜面で，そこにも住居があったと考えるのである。このことは次のような点で証明できる。①東側の谷につくられた包含層は厚さ1*m*～2*m*もあり，丘陵上の土砂・遺物を集積している。②北端にある遺構群は保存状態が比較的良好で，これは古墳の墳丘下にあったためであり，墳丘をはずれると貯蔵穴だけで，これは貯蔵穴自体の深度にかかわると考えられ，下半部のみ残っているものと思われる。④斜面の住居の保存状況をみると，最も尾根に近く存在している14号住居址の壁高が最も低く，残存状況の悪いことを示している。⑤土壙6の北側にある住居は壁溝のみ残しており，当時は少なくともあと20*cm*ほど高いことが予想される。⑥12号住居址の壁高からして他の住居も上部がかなり流失している。

以上のような事実から考えられる当時の生活面は用木山遺跡ほどではないにしても，生活しにくい傾斜面にあったようである，こうした悪条件の地形の場所へ居住地を移したのは，やはりそこに生活・生産などに何らかの好条件があったからで，その条件のひとつには，水の確保があげられよう。あとひとつは生産の場，すなわち水田の周辺地域ということであろう。生活の必須条件となる水の確保は，人間の歴史の中で最も重要視される条件であるが，ここでも少し掘れば現在でもすぐ水が確保できる高水位の地である。また，この水の確保しやすい谷部は水田として利用できる場所でもある。稲作の導入時点では低湿地に居住した人々が，弥生時代中期ごろには比較的高位にも定住したことは広く指摘されるところである。こうした居住地の移転あるいは拡大についてはその理由があるにちがいないが，やはり洪水の危険性の高い低湿地より山端のしかも谷水の調節ができやすいという水田の優位性が，大きな理由であったと考えられる。しかしながら，こうした谷水田の稲栽培[1]だけでは，門前池遺跡に住む人の食生活を満たす収穫は期待できず，依然として下市周辺の低湿地も生産の場であったろう。当時は稲栽培を主として，多量の石鏃が示すような狩猟，あるいは土錘・石錘さらには舟形

土製品の出土が物語っている魚撈，その他，木の実・根菜植物の採集などによる食料源の補完は当然予測される。

（1） 水は年中，確保できるが，これらは簡単な溝あるいはせきにより調節ができる。

貯蔵穴の問題

次に住居の周辺に点在する方形あるいは円形のプランをもつ貯蔵穴について一考しておきたい。

貯蔵穴と思われるピットは11個あるが，これらの構造は多種多様で，四本の柱穴をもつもの，周辺に壁溝をもつもの，中央に楕円形あるいは円形の落ち込みをもつもの，袋状を呈するものなどがある。こうしたピットについて，従来から貯蔵穴と考えられる反面，土壙墓と考えることもあったが，今回，土壙墓説を否定し貯蔵穴と考えたのは次のような根拠による。①この丘陵は住居を中心とした生活の場であり，墓地の関係遺構がみられない。②柱や壁溝が存在し，袋状の構造をもつものもある。③ピットの所在位置は点々としており，まとまっていない。これらは墳墓遺跡である四辻土壙墓群・愛宕山遺跡の存在状況と異なる。④埋没に時間のかかっているものがある。したがって，貯蔵穴と考える[1]以外にない[2]。では，どういう構造と性格をもっていたかについて考えてみたい[3]。これらは残存形態・旧地形復元などからして，次のようなことが考えられる。深さは1*m*前後あり，中には「はしご」などを用いない限り使用不能なほど深いと考えられるものもあった。穴の中は乾燥状態にしておく必要があり，中央に掘られた楕円形・円形の落ち込みは周囲の水分を中心に集め，乾燥化を図るものであろう。そして，この落ち込みの上には板が渡され平担だったであろう。今日，周囲には何らの構造もみられないが，当時は穴のまわりに溝などをこしらえていたかもしれない。土壙3には穴の底に4本の柱穴があり，土壙6にも1本の柱穴がみられ，これらから上部に屋根のつくられたことが容易に予想できる。他の穴にこうした柱穴はみられないが，壁溝などの存在を考えれば，上部には屋根がつくられたことであろう。多分，これらの支柱は穴の面積をふやすため中央部でなく周囲にあったであろうが，今日では前に述べたように上部が残存していないために確認できない。

次に，この穴にどのようなものを貯蔵したのか考えてみたい。当時，こうした住居以外の穴に貯蔵されるものとして大きく分けると，道具類と食物の二種類が考えられ，食物については穀類・堅果類・芋類などが予想される。これらを前にあげた特徴とあわせ考えると，乾燥を必要とし，たびたび出し入れされず，不用となった際，ひと息に埋められるということより穀類の可能性が強い。ここで，ひとつの穴の許容量を考えてみよう。穴のほとんどは上面を削られ元の体積を残していないのであるが，ある程度残している土壙6について計算し，それから他の穴についても類推してみよう。その場合に，条件として床・壁には板材が使われるであろうことと，稲を考えた時，石庖丁などの出土からして貯蔵には束として収めたであろうことを考慮したい[4]。まず容量は約5㎥となるが，上面が30*cm*位削平[5]されていることを考えると6.2㎥となる。しかし，床・壁の板材さらには束であることを考えると，もみの量は，約2㎥－5.6石位であろう。かって杉原荘介は登呂の水田から当時の食生活を復元したがそれでいくと6人分となる。つまり，これは各戸にひとつずつ付設したもので，貯蔵穴の年代がほぼ後期初頭[6]に属することと，調査した範囲ではその時期の住居が2戸しかないことは興味ある現象である。

稲の保存については，静岡・登呂遺跡[7]，岡山・押入西遺跡[8]などでみられるような高床倉庫が一般的

だとされているが，実際には地下貯蔵穴の使用も多かったであろう。現に，弥生時代後期においても岡山・津島遺跡，鹿児島・花熟里遺跡などでは地下貯蔵穴の中にもみがら及び焼米が確認されている。[9] こうした地下貯蔵穴における貯蔵[10]は高床倉庫と比較して，湿気・ねずみの害[11]などの点で劣るが，深く掘ることにより，貯蔵量をふやせるといった利点もあり，建築技術の発達が遅れていた地域では山の上に住んでいるといった立地的な面からも，案外普遍的だったかもしれない。こうした穴には稲だけでなく，ある時は道具の貯蔵も行われていたらしいことが，土壙10などにみられた土器・鉄器の出土からうかがえる。

岡山県において，このような地下貯蔵穴は津山市天神原遺跡・同市第２中学校予定地遺跡・作東町高本遺跡[14]など県北を中心として，後期にみられるが，当山陽団地内[12]の弥生遺跡にも桜山遺跡[13]でみられる。[15]

今後，こうした集落における貯蔵穴の性格も明確になるであろうが，貯蔵穴中の土壌分析・花粉分析などを試みる作業が要請されるであろう。

(1) 山陽団地埋蔵文化財発掘調査団『四辻土壙遺跡，四辻古墳群』　1973年
(2) 神原英朗「愛宕山遺跡の調査」文化財だより　号　1974年
(3) 土壙１のように層をなすものもある。
(4) 当遺跡第１地点及び雄町遺跡・押入西遺跡の住居では壁に板材をめぐらしたものがみられる。こうしたことから湿気をきらう貯蔵穴にも板材の使用が考えられる。
正岡・中力・葛原・伊藤・泉本・高橋「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』１　1972年
橋本・柳瀬・井上「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』３　1974年
(5) 近藤義郎・岡本明郎「日本の水稲農耕技術」『古代史講座』第３巻　1962年
(6) 杉原荘介「登呂遺跡水田址の復原」『考古学』第２号　1968年
(7) 日本考古学協会編『登呂（本編）』　1954年
(8) 橋本・柳瀬・井上「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』３　1974年
(9) 北九州には前期から中期にかけて山の屋根上に貯蔵穴が多くみられ，穀類貯蔵と考えられている。下条信行氏・副島邦弘氏の他，福岡県文化課の方々のご教示を得た。
(10) 束のまま見つかっている。落ち込みとする人もいる。
石野博信「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報』１　1967年
(11) 炭化米が出土している。
河口貞徳・出口浩「第１次花熟里遺跡調査報告」『鹿児島考古』５号　1971年
(12) 河本，橋本，柳瀬，下沢「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』５　1974年
(13) 1974年から発掘調査中。河本清氏教示。
(14) 山磨，岡田「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』６　1974年
(15) 山陽町教育委員会『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』　1973年

石庖丁について

岡山県の石庖丁については，南部のサヌカイト製打製石庖丁と，北部における磨製石庖丁との２種に分かれることが古くから注目されている。特にサヌカイト製打製石庖丁は香川県と岡山県南部を中心に分布するもので，一般的な石庖丁の形態である磨製石庖丁とはその形状あるいは製作法を異にするものである。当山陽団地においては，サヌカイト製打製石庖丁と磨製石庖丁とが，その比率は別として共伴し，石庖丁だけをとらえてみると，南部の地域性と北部の地域性とが接したかのような状態を示している。そこで岡山県の石庖丁分布がどのような状態であるかを調べ，これによって山陽町の

弥生時代が石庖丁の分布状況からみた場合，どういう特色があるのか述べてみたい。これは，とりもなおさず当時の社会基盤となる農業生産に必要不可欠な道具の分布状況から，当時の文化の地域差を調べるうえで重要と考える。

打製石庖丁がなぜ狭い範囲に限定されるかという点については，その原材が特定の石材によることは周知のところである。つまり，これはサヌカイトという特定の石材にあり，それの加工性にある。したがって，打製石庖丁の広がる範囲というのは，石器の主材料がサヌカイトの産地に近い所であり，その中で，一定の加工技術が伝わった所である。岡山県内の石庖丁の分布状況については紫雲出の報告において，ある程度述べられている。今日[(1)]においても紫雲出におけると同じような状況となるが，[(2)]ここでは岡山県の状況について記すことにしたい。

大勢においては県南の打製石庖丁，県北の磨製石庖丁というふうに分かれるが，県北においても北房町・哲西町においては打製石庖丁がみられること，津山市においては打製石庖丁がほとんどなく磨製石庖丁の分布地域となることなどを考えると，その分布には単純な南と北の差とか，距離や水系の違いだけでなく，技術伝播のルートなど複雑な関係が入り交っているものと思われる。こうした中で打製石庖丁を主とし磨製石庖丁を従とする地域は，邑久郡・赤磐郡で，磨製石庖丁を主として打製石庖丁を従とする範囲は小田郡である。こうした関係は，土器型式においてもそれぞれ県南・県北の影響を残しており，土器型式と石器（形態）とが互いに関連しながら発達していることを暗示し，一つの文化圏あるいは地域集団の単位を物語っているようである。

ここで山陽団地内出土の石庖丁について記すならば，数においては打製石庖丁が圧倒的に優位にある。したがって，出土比率は県南部の様相を残しているのであって，これに北部の影響がはいったといえよう。このことは土器の特徴においてもいえる傾向があり，若干の違いはみられるにしても，当地の土器は県南の影響を強く受けている。これは位置的に県南部と近い関係にあるという点が，大きく作用しているが，一方，砂川流域という点で吉井川水系と深く結びつき，県北部の影響も一部及んだということがいえる。さらに石庖丁第３類のように磨製でありながら抉りをもつ中間形態もここではみられ，このことも接触地帯の様相であろう。こうした形態は特殊であり，岡山県では他に例をみない。遠く離れて宮崎県では方形の磨製石庖丁に抉りがあり，かなりの出土をみているが，形態からして宮崎県独自のものであろう。しかし，こうした文化伝播については他の諸要素もからみあわせて考える必要があり，ここでは以上の点にとどめたい。[(5)]

(1) サヌカイトの産地に近い所でも，佐賀県のように打製石庖丁の全くみられない地域，畿内のように少ない地域といったように分布差がみられる。
(2) 小林行雄，佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会　1964年
(3) 団地内では，便木山遺跡に一本みられる。
(4) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』郷土考古学叢書　4　1968年
(5) 形態が異なり，中間地帯に空白がみられる。
横山国継，「石庖丁出土地名表」『速見考古，４』　1973年

弥生式土器の編年について

岡山県の弥生時代中期後半の土器編年は，昭和30年代に主として瀬戸内海沿岸周辺の遺物をもとになされた。まず，鎌木義昌らによっておこなわれた玉野市前山遺跡の資料にもとづく前山東式の提起[(1)]

が先駆的な研究の一つにあげられよう。さらに，高橋護はこれらを整理して前山Ⅱ式（東式）から仁伍式への変化を提起し，ここに仁伍式の形式設定がなされた。その後，瀬戸内中部では，この編年が普遍的に使われてきたが，高橋らの報告資料は少量であった[2]ために，その性格が十分に理解されないきらいもあった。昭和40年[3]代になると，雄町遺跡・南方蓮田遺跡・川入遺跡などの大規模な発掘調査が行なわれ，多量の一括土器を出土する結果となり[4]，雄町遺跡[5]では，中期後半[6]の土器を前山東→雄町5類→雄町6類と分類し，その細分を試みている。

当山陽団地内では，中期後半の時期に相当するものが多量に出土している。門前池遺跡の調査でも，遺構の他に，包含層などから夥るしい出土量をみるが，ここでは一括資料として出土した11号住居址・12号住居址上部土器溜り，16号住居址・24号住居址・土壙6の土器を中心として，他の住居址・土壙などの土器を加え，門前池Ⅰ類・同Ⅱ類・同Ⅲ類とし，各類形について説明したい。なお，住居址で門前池Ⅳ類・同Ⅴ類としたのは，これらに続く弥生式土器である。

門前池Ⅰ類とは，従来，前山Ⅱ式と呼ばれているものと類似し，13号住居址・16号住居址などの一括資料がこれにあたる。細かい特徴については，各遺構で述べたので，ここでは概要にとどめることにしよう。

壺形土器の口縁部は，上下に拡張し，口唇端に凹線が施こされる。頸部に突帯を巡らすものも存在するが，多くは突帯が凹線に代わっている。甕形土器は口唇部が上下に張り出し，口唇端部に浅い凹線を施こす。口唇端部に向かい肥厚し，内面のヘラ削りは胴部下半部にとどまる。高杯形土器の口縁部は，折り曲げられて内傾し，凹線が施される。杯部に鍔（つば）のつくものもある。脚部には三角形透し・小円孔が施されるが，裏に貫通する部分が広い。

門前池Ⅱ類とは，従来，仁伍式と呼ばれているものに類似し，11号住居址・12号住居址上部土器溜り下層・24号住居址などの一括資料がこれにあたる。Ⅰ類と比較すれば，次のような特徴がみられる。

壺形土器・甕形土器・台付鉢形土器などでは，目立った変化はないが，甕形土器・台付鉢形土器では，口縁部が薄く，口唇端部の上下への拡張が顕著である。高杯形土器の口縁内部は，直立するようになり，口唇部の外面凹線が退化し，上端・下端が肥厚するものも出てくる。こうしたものには櫛描波状文の施されるものがある。また，坏部の口縁部立ちあがりと底部の接合面が，折りかえしではなく帖り付け手法に変化するという特徴はⅠ類との大きな違いである。脚部の三角形透しは，ほとんど裏に貫通しない。

また，ここで注目したいのは，口縁端部が折り曲げられた土器である。これは，12号住居址上部土器溜りに完形の壺形土器がみられ，24号住居址の中央穴に2片，G6G区・G6H区の包含層中にも8片の破片がみられる。こうした口縁部をもつ土器は，弥生時代前期に北九州で朝鮮の無文土器の影響として出土し，倉敷市上東遺跡[7]でも同種の破片が出土している。ところが，上東遺跡では3片[8]のうち胎土が異質のものあり，津島遺跡[9]でも小形壺形土器の口縁が折り曲げられており，あるいは，中期～後期に出土する可能性[10]が残されていた。このように，岡山県下では少ない器形も[11]，山陽団地造成地内では便木山遺跡などで出土している。ここで時期を決定するには，やや資料が少なく，尚早のそしりをまぬがれないが，24号住居址に伴う事実・12号住居址上部土器溜り下層に出土するという層位関

係・津島遺跡例で仁伍式の層に共存するという事実・内面ヘラ削りが胴部下半でおわり，「ノ」の字のヘラ描沈線を肩部に巡らす手法などから考え，門前池Ⅱ類[11]に伴うらしい予測がたつであろう。

門前池Ⅲ類とは，従来，白江Ⅰ式・雄町7類などと呼ばれているものに類似し，後期初頭の土器である。予備調査土器溜り・12号住居址[12]上部土器溜り[4]上層・土壙6などの一括資料がこれにあたる。Ⅱ類と比較すると，次のような特徴がみられる。

胎土は，Ⅰ類・Ⅱ類に比べて粗くなる。壺形土器の口唇部拡張は退化し，下へはほとんど拡張しない。器壁が厚くなり，頸部から肩部へはゆるやかに移動し，肩部にヘラないし貝の押圧が施される。内面のヘラ削りが頸部付近にまで達する。甕形土器も壺形土器と同様の変化をする。高杯形土器の杯部は，外反するようになり，脚部の三角透し，小円孔は退化し浅くなる。脚端部の外への張り出しはなくなる。器台形土器は，器厚を増し，口縁端部および脚端部の張り出しがなくなる。凹線は退化し，三角透しのかわりに，方形および円形透しが盛行する。なお，この時期に伴なう上面の丁寧にみがかれた土器（第5図33・第35図70・第84図7）は，岡山・宮の前遺跡，兵庫・千代田遺跡，兵庫・播磨八幡遺跡，大阪・勝部遺跡などで出土しており，勝部遺跡では回転台[13]と考えられている[14]ものであるが，播磨八幡遺跡[15]では鉢形土器[16]とされているものである。したがって，上下が逆になる可能性をもつ土器である。

以上を住居址・土壙について整理すれば，以下のようになる。

弥生中期後半	Ⅰ　類	H—5・H—6・H—7・H—9・H—10・H—13・H—15・H—16・H—17・H—18・土壙12
	Ⅱ　類	H—1・H—11・H—12・H—12上部土器溜り下層・H—14・H—23・H—24・H—25
弥生後期前半	Ⅲ　類	予備調査土器溜り・H—8・H—12上部土器溜り上層・H—21・土壙1・土壙2・土壙3・土壙5・土壙6・土壙10
	Ⅳ　類	H—22・H—26・H—27
弥生後期後半	Ⅴ　類	H—19・H—20
古墳前期	土　師　器	H—4

(1) 鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生式遺跡」『吉備考古』第80号　1950年
(2) 高橋護「郷内村小学校裏貝塚出土の弥生式土器の編年的位置について」『遺跡』23号　1955年
(3) 鎌木義昌
(4) 正岡・中力・葛原・伊藤・泉本・高橋「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』1
岡山県教育委員会　1972年
(5) 出宮徳尚・伊藤晃『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会　1971年
(6) 正岡・枝川・大谷「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会　1974年
(7) 『板付周辺遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告），第31集　福岡市教育委員会，　1975年
(8) 後藤直「南朝鮮の無文土器」『考古学研究』第19巻第3号　1973年
(9) 伊藤・柳瀬・池畑・藤田「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2
岡山県教育委員会　1974年

(10) 註9の報告書による才の町地区の溝A出土の土器をさす。
(11) 正岡睦夫氏の教示による。
(12) 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号　1966年
(13) 中国縦貫道に伴う発掘調査中に出土。報告書近刊予定。
(14) 森下大輔氏の教示による。
(15) 『播磨八幡遺跡』（兵庫県文化財調査報告書第9冊）兵庫県教育委員会・兵庫県道路公社　1974年
(16) 豊中市教育委員会『勝部遺跡』　1972年

建物群について

第1次調査で発見された建物群の範囲および性格をより確実にする目的に沿い，第2次調査では，広い範囲にトレンチ調査を実施した。

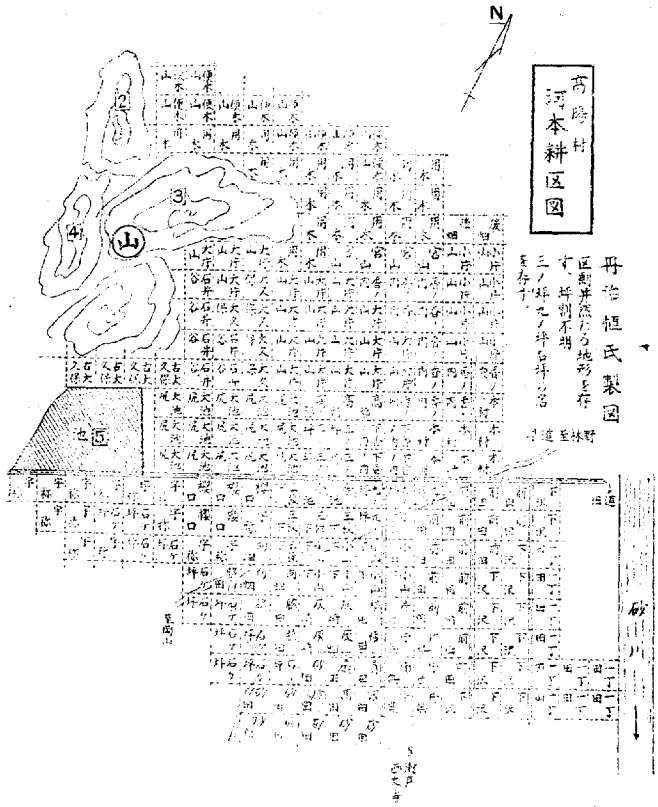
まず，範囲についていえば，第2地点・第3地点さらには，第7地点の調査によって，およそ誤りのない線で確認できたといえる。建物群のある立地条件は，東側にある門前池あたりの低地を前面とした場合，背後には便木山7号墳を擁する丘陵と二つの狭い谷がある。したがって，東へ拡張しようとすれば，大規模な埋立工事を必要とし，逆に背後へ拡張しようとすれば削平工事をしなければならなかったであろう。こうした自然の制約によって，建物は広大な面として広がらず，むしろ，ある程度の幅をもちながら線的な広がりをもったと考える。この北端は，第3地点で確認されたように，建物Ⅵあたりであり，南端はヤケ池の前方，つまり第2地点の建物が検出されたあたりであろう。さらに，第6地点の丘陵裾では，第3B地点9トレンチで確認された個所まで続いている。それ以上，広がっているのかどうかは確認できていないが，第7地点8トレンチで確認された柱穴が，この建物群の一部であるのかどうかが問題となる。ここでは，その柱穴は時期的に他のそれと同時並存するにもかかわらず，径が小さい点を指摘するにとどめたい。さらに，この第7地点の南，用木山6号墳の前方にある三蔵畑遺跡は平安～鎌倉期の土師器を焼いた生産の場であるが，ここまでの広がりはないといえよう。また，東方は深い谷になっており，第3地点のトレンチ調査によると，標高26m以上の部分に位置している。西側つまり後背部では，尾根上に柵がめぐつている。これは北端に位置する建物付近から，建物群をとり囲むように丘陵へあがりヤケ池まで続く。以上述べたような範囲に建物が所在するとすれば，その面積は約1万5千m^2となる。

次に，これら建物群の性格について推測してみたい。建物群の存在した同じころ，約2km南にあたる馬屋から穂崎にかけての地には備前国分寺・国分尼寺が建立されている。また，旧山陽道の駅家も馬屋にあったと考えられている。さらに，約3km東方向に所在する瀬戸町坂折遺跡[1]には，緑釉・青磁などを出土する建物,群が存在する。こうした歴史環境の中に，当建物群は存在するわけであるが,今一度，この建物群の特徴を整理してみよう。第1に約1万5千m^2という広大な面積に10棟以上を数える建物が存在すること，第2に柵をめぐらし防禦的な意味をもっていること，第3に高い位置に望楼的な四本柱をもつ建物の存在すること。第4に瓦・硯・緑釉・土人形などの遺物をもつこと，第5に背後の丘陵削平というような大土木工事を行なっていること，第6に多数の古墳で構成された東高月古墳群の存在する事実などから，古墳時代にはのちに赤坂郡となる地域の中心部にあたること，第7に奈良時代前期に始まり,鎌倉時代まで続くこと,第8に白鳳期の瓦を出土する所が近くにあること,[2]

以上の諸点から考えて，これらは一般庶民のものでない遺構であることは明白で，豪族の館址にしては，第1・第4・第7などの理由によって，可能性がうすい。とすれば，官衙と推考する以外ないであろう。当時の官衙には，郡衙・駅家・軍団・城柵などがあり，これらのうち城柵は，その立地からしてまず可能性はない。軍団の可能性は，日本書紀によると6世紀の朝鮮遠征軍に，倭・紀・筑紫などとともに，吉備の国造も領民をひきいて加わったという記事があり，柵列の存在・望楼の存在などから考えられるが，軍団に関係する建物の実態ははっきりしておらず，広大な面積など不必要な要件も多い。国衙の可能性も，現岡山市国府市場へ移動する以前が，この地で考えられないでもないが，建物群の継続期間が奈良時代前期から平安・鎌倉時代まで続いていることからすると否定的である。(3)

あと残るは駅家・郡衙であるが，まず駅家から考えてみよう。『延喜式』に「高月駅今三村」とあるのは，『備陽国志』で「延喜式高月駅は馬屋にありし也」と解釈しているが，このことは地名からも，地形からもうなずけることであるから，もし，当地に駅家を求めるとしたら，少なくとも馬屋に存在する延喜年間（10世紀初頭）以前を考えなければならないし，このことは，やはり建物群の継続年間から考えにくいことである。

ついでに，当時の山陽道を考えてみると，高月駅より東の駅家は「可真駅」であり，現在の熊山町可真に当たると思われる。この途中には山越えという難所があり，いずれのコースにしても山を越えなければならない。したがって，このコースについては，種々考えられてきたが駅間の距離・山越えの難易度・(4)途中通過する郷などを考えると，町苅田へ出るコースのほうが可能性が高い。さらに，当地付近について『赤磐郡誌』等では，熊崎から和田のほうへ出る峠越えコースを考えているが，これは最近まで続いた四辻越えを根拠としている。しかし，このコースだと門前池の後方を通り，国分寺の横あるいは後へ出ることになり不都合である。さらに，時代が不詳であるとはいえ，『岡山県農地史』にあるような条里のあと（第116図）(5)が河本周辺に残っており，ここの旧道はほぼ国分寺前の条里線と平行し，国分寺の前を通過し，馬屋へ直線的に延びることなどから，当時の道は砂川の西岸沿



第116図　河本周辺の条里制（岡山県農地史より）

いに熊崎から下市へ到り，旧道に沿って河本→立川→馬屋といったコースをたどったのではないかと思われる。そして，四辻越えの始まったのは，国分寺焼失後ではなかろうか。

さて，最後に残った郡衙の可能性について考えてみよう。『倭名抄』によると，当時，この地は備前国赤坂郡高月郷に属している。赤坂郡は周匝・宅美・軽部・鳥取・葛木・高月の6郷からなり，北を美作国久米郡，東を和気郡・磐梨郡，南を上道郡，西を御野郡・津高郡に接している。現在では，山陽町・赤坂町にあたる地域である。赤坂郡の郡衙の位置について従来，鳥取郷に比定する考え方があり，それは鳥取古墳群の存在と地形から考えられていた。しかし，鳥取古墳群に対しては，便木山7号墳を含む便木山古墳群の存在があり，さらには，白鳳期瓦の出土もあり，考古学的には十分に対応しうる。さらに，高月の語源については，異説もあるが，「高つ城」から生じた可能性もあり，そうした防禦的意味をもった建物は，現に，第2地点で確認されている。現在，岡山県における郡衙については久米郡衙と勝間田郡衙が考古学的な裏付けをもっているが，もし，郡衙とすればこれらの建物群が面として広がるのに対して[6]，線として広がる[7]門前池遺跡の場合は変型的とされるのである。

門前池遺跡における建物群の性格については，十分に確認されぬまま永久に埋没されようとしているが，われわれは，この遺構が郡衙としての可能性を多くもつものの，郡衙以外の可能性もすてがたいことを記してまとめにかえたい。

最後に，「まとめにかえて」を書くにあたっては，多くの方々から御教示いただいた。特に，対策委員の先生方，高橋護氏，葛原克人氏，正岡睦夫氏には細かい点まで指導していただいたことを記して，心から感謝申し上げたい。

（池畑・枝川）

(1) 宅地造成に先立って発掘調査が行なわれた。報告書は未刊である。

(2) 第5地点に瓦溜りがみられる。

(3) 巌津政右衛門は地名事典で「河本」について述べているが，その中で，地名に香内・高福など「コウ」の名があることと，建物群の存在から，古い時期の国府の可能性もあるとしている。
巌津政右衛門『岡山地名事典』日本文教出版社　1974年

(4) 赤磐教育会『改修赤磐郡誌』　1940年
西山村史編纂委員会『西山村史全』　1954年

(5) 永山瓜三郎『岡山県農地史』　1952年

(6) 橋本・山磨・岡田・井上「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　1974年

(7) 井上弘「古代の官衙！一部保存の勝間田遺跡」『文化財だより』第19号　1974年

1．予備調査土器溜り（東より）

2　予備調査壺棺（北より）

図版２

１　北上空より第３地点・第４地点・第５地点をのぞむ

２　第２地点遠景（南より）

１　便木山７号墳（南より）

２　便木山７号墳（北より）

図版４

１　便木山７号墳（南より）

２　埴輪出土状況（北より）

１　箱式石棺（北より）

２　箱式石棺（東より）

図版６

１　箱式石棺（北より）

２　箱式石棺（北より）

１　Ｇ６Ｇ区周辺（北より）

２　第４地点（東上空より）

図版８

１　東斜面（調査後・南より）

２　西斜面（調査後・南より）

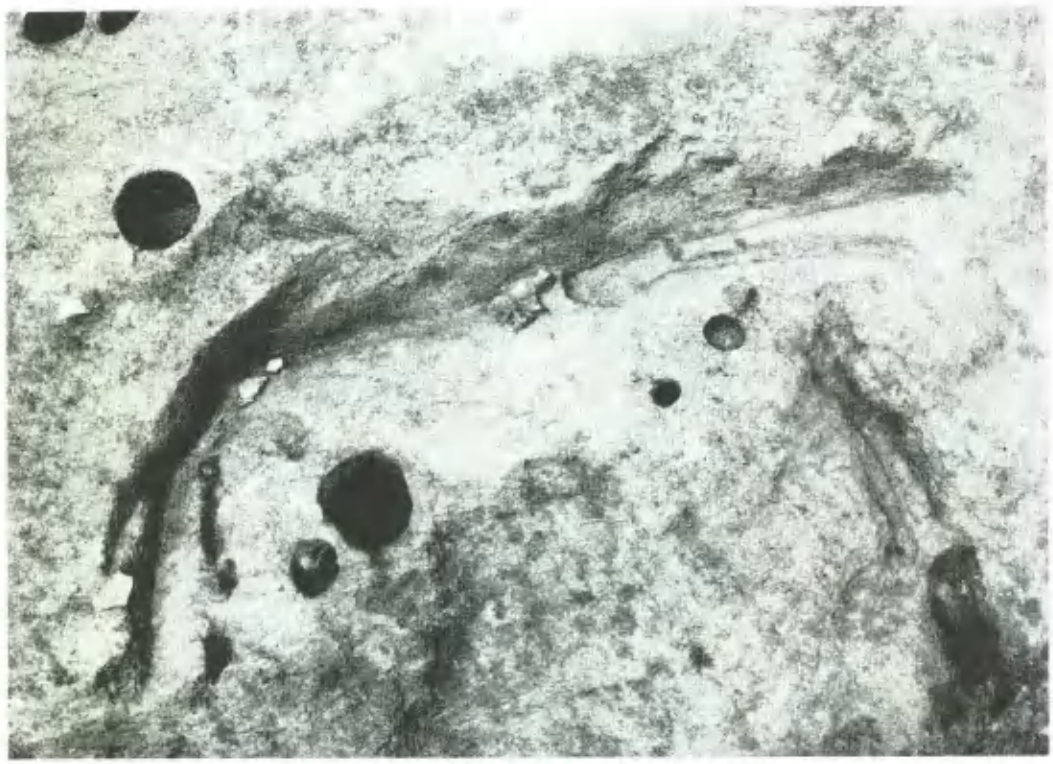
１　１号住居址付近（南より）

２　４号住居址（東より）

図版10

1　5号住居址・6号住居址（東より）

2　8号住居址（東より）



1　9号住居址・10号住居址（東より）

2　11号住居址（北より）

図版12

1　11号住居址（北より）

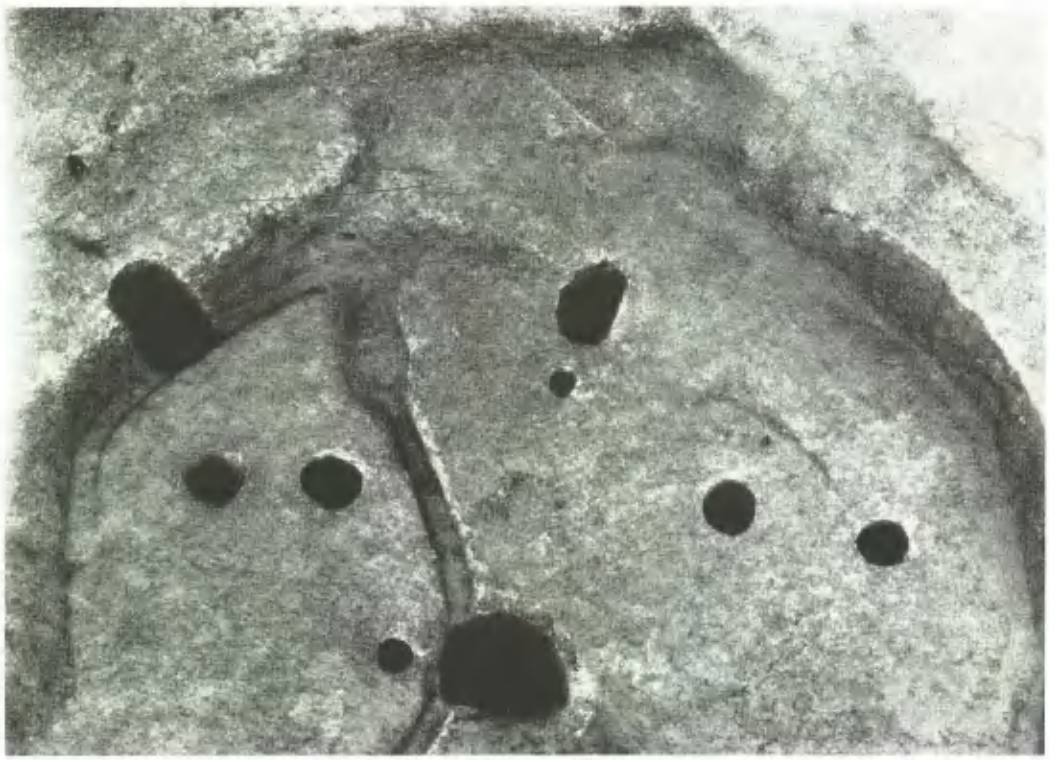
2　11号住居址（西より）

1　12号住居址上部土器溜り（東より）

2　土器溜り上層

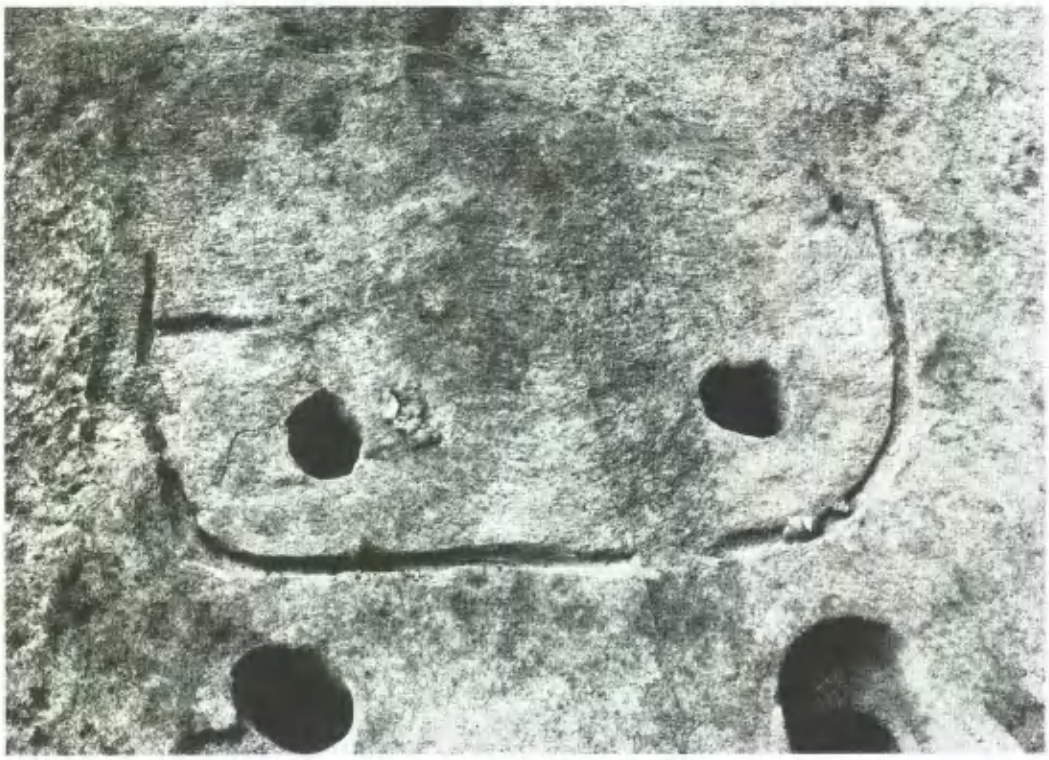
図版14

1　12号住居址上部土器溜り（東より）



2　12号住居址（東より）

1　13号住居址・16号住居址（西より）



2　14号住居址（西より）

図版16

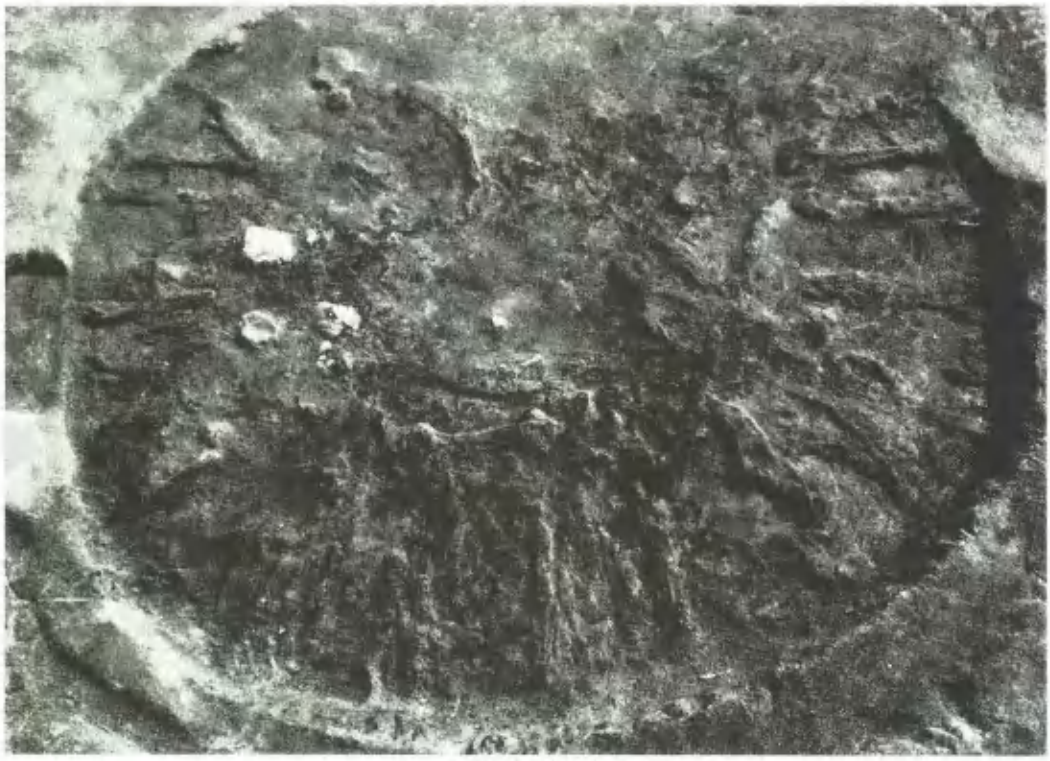
1　18号住居址（東より）

2　19号住居址・20号住居址（東より）

1　24号住居址（東より）

2　25号住居址周辺（西より）

図版18



1　25号住居址（北より）

2　25号住居址（北より）

1　25号住居址（東より）

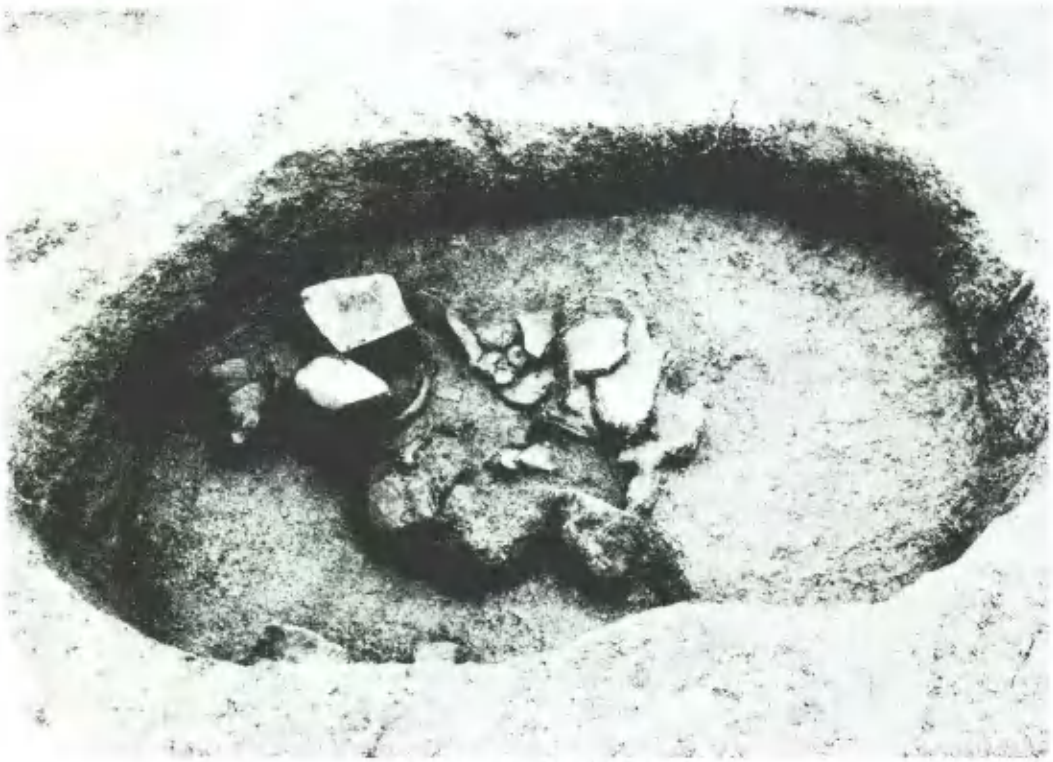
2　25号住居址（北より）

図版20

1　土　壙　5（西より）

2　土　壙　6（東より）

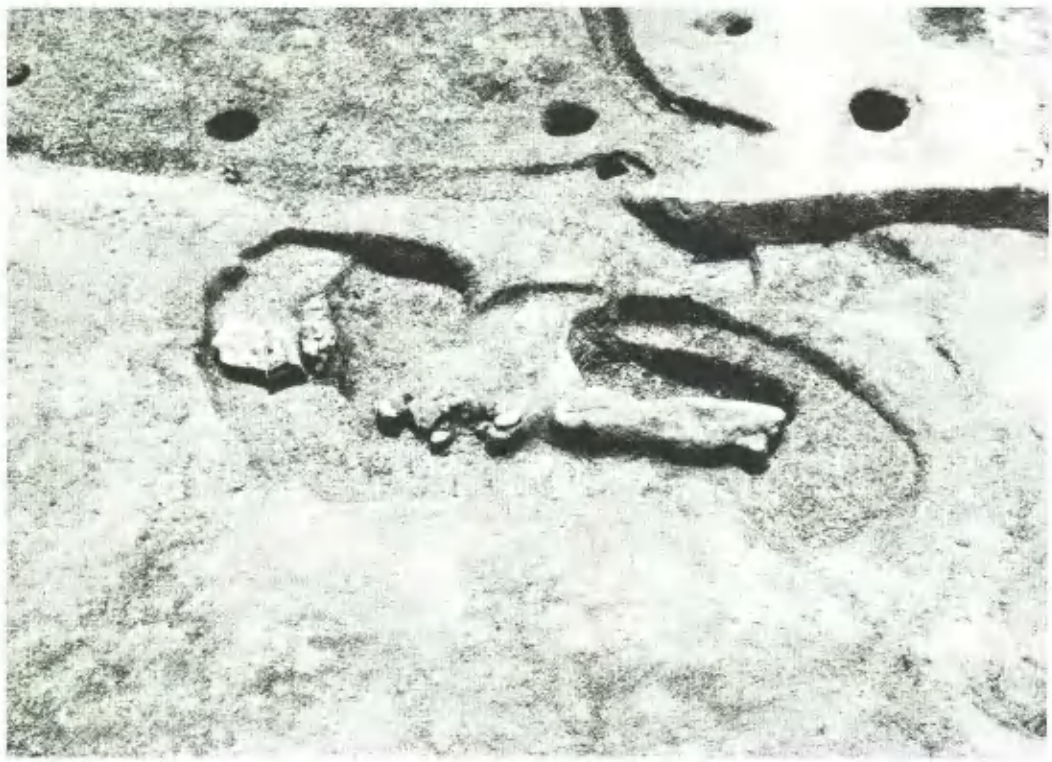
1　土　壙　10（北より）



2　土　壙　12（西より）

図版22

1　鍛冶炉周辺（東より）

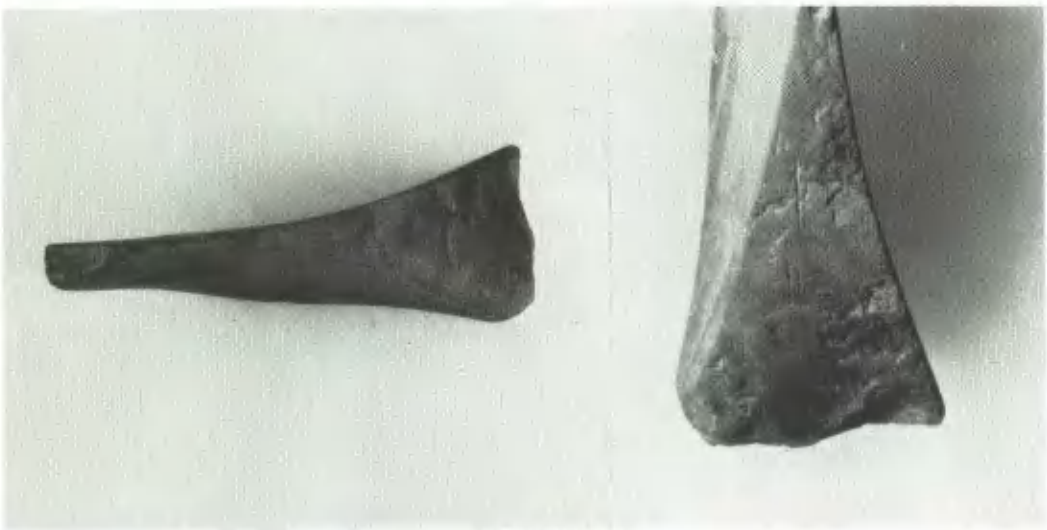


2　鍛　治　炉（西より）

1　建　物　1（東より）

2　建　物　2（東より）

図版24



1　線刻画砥石

2　船形土製品

1　銅鐸形土製品

2　線刻画土器

図版26

1　石　鏃

2　石　斧　石　錘

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (9)

門 前 池 遺 跡

(山陽住宅団地造成に伴う発掘調査)

昭和50年3月10日 印 刷

昭和50年3月31日 発 行

発 行 岡山県教育委員会

印 刷 岡山県出納局用度課